人間臨終図巻

下巻

山田風太郎

人間臨終図巻

下巻

山田風太郎

人間臨終図巻

下巻

山田風太郎

徳間書店

ISBN4-19-123423-4 C0093 ¥2400E(0) 定価=2400円

人間臨終図巻

下巻

山田風太郎

徳間書店

人間臨終図巻〈下巻〉／山田風太郎

人間の死は、『臨終図巻』のページを順々に閉じて、
永遠に封印してゆくのに似ている!

あなたはどんな死を望ましいと思うのか。荘厳、悲壮、凄惨、哀切、無意味、有意味、
あらゆる死のタイプがここにある。これは人間の死に方の一大交響楽だ!

65歳——121歳で死んだ人々

徳間書店 定価/2400円

山田風太郎

徳間書店

■六十五歳から六十九歳で死んだ人々
バッハ 岩波茂雄 ディズニー 泉
鏡花 折口信夫 エノケン 蕪村
福沢諭吉 キュリー夫人 田中絹代
田岡一雄 伊達政宗 千姫 他

■七十代で死んだ人々
アンデルセン 吉川英治 近松門左
衛門 新渡戸稲造 孔子 ジョン・
ウエイン 良寛 高村光太郎 徳川
家康 スターリン 鑑真 ベル 豊
太閤夫人 周恩来 横溝正史 他

■八十代で死んだ人々
釈迦 永井荷風 則天武后 ヒッチ
コック ゴヤ 羽仁五郎 孟子 古
今亭志ん生・五代目 毛沢東 カー
ネギー 正力松太郎 ニュートン
一休 アガサ・クリスティ 吉田茂
チャプリン 他

■九十代で死んだ人々
横山大観 シュヴァイツァー 渋沢
栄一 チャーチル 大谷竹次郎 ピ
カソ バーナード・ショウ 牧野富
太郎 御木本幸吉 熊谷守一 梅原
竜三郎 諸橋轍次 他

■百代で死んだ人々
野上弥生子 物集高量 天海僧正
平櫛田中 大西良慶 泉重千代

〈六十五歳から百二十一歳まで〉取り上げた人々四五〇名

上巻《十五歳から六十四歳で死んだ人々》
定価 二四〇〇円

人間臨終図巻

下巻

山田風太郎

徳間書店

一たび生を受け
滅せぬもののあるべきか

――幸若舞「敦盛」――

人間臨終図巻　下巻

人間臨終図巻　下巻——目次

▼六十五歳——百二十一歳で死んだ人々▲

六十五歳で死んだ人々

ルイス・フロイス　一
バッハ　二
ドラクロワ　三
マルクス　四
ツルゲーネフ　五
市川団十郎・九代目　七
原　敬　八
津田梅子　八
田中義一　九
杉山　元　一〇
岩波茂雄　一一
木村荘八　一二
広沢虎造　一三
ディズニー　一三
ウールリッチ　一五
菊田一夫　一五
花田清輝　一六
吉田健一　一七
フォン・ブラウン　一七

六十六歳で死んだ人々

和気清麻呂　一九
松平信綱　一九
ルソー　二〇
十返舎一九　二一
ベルリオーズ　二一
木村荘平　二二
桂　太郎　二三
プッチーニ　二四
泉　鏡花　二五
松岡洋右　二六
折口信夫　二七
尾崎士郎　二九
池田勇人　三一
エノケン　三二
エラリー・クイーン　その1　三四

六十七歳で死んだ人々

レオナルド・ダ・ヴィンチ　三五
松永弾正　三六
徳川吉宗　三七
蕪　村　三七
アダム・スミス　三八
ワシントン　三九
川路聖謨　三九
デュマ　四〇
福沢諭吉　四一
セザンヌ　四三
キュリー夫人　四三
岡本綺堂　四四
河上　肇　四六
寺内寿一　四七
永野修身　四八
安井曾太郎　四九
橋本欣五郎　四九
河野一郎　五〇
壺井　栄　五一
平林たい子　五二
花森安治　五三
イングリッド・バーグマン　五三
インディラ・ガンジー　五四

六十八歳で死んだ人々

大伴家持　五五
北条政子　五六
新井白石　五六
シュリーマン　五七
伊藤博文　五八
ゴーリキー　五九
山室軍平　六一
桐生悠々　六二
米内光政　六三
東郷茂徳　六四
中村吉右衛門・初代　六五
田中絹代　六六
新田次郎　六九
田岡一雄　七〇
池田弥三郎　七一

六十九歳で死んだ人々

千　利休　七二
セルヴァンテス　七三
伊達政宗　七四
千　姫　七四
田沼意次　七五
平山行蔵　七五
間宮林蔵　七六
二宮尊徳　七七
梁川星巌　七八
内村鑑三　七八
小山勝清　八〇
中山義秀　八一
円谷英二　八一
スカルノ　八二
オナシス　八三

七十歳で死んだ人々

ピタゴラス　八四
ソクラテス　八五
マルコ・ポーロ　八六
兼好法師　八六
コペルニクス　八七
ライプニッツ　八七
シーボルト　八八
アンデルセン　八八
ワーグナー　八九
水野広徳　九〇
真山青果　九一
広田弘毅　九二
宇野浩二　九三
吉川英治　九四
高群逸枝　九七
大宅壮一　九八
サトウハチロー　一〇〇
戸村一作　一〇〇
大平正芳　一〇一
オーソン・ウエルズ　一〇二

七十一歳で死んだ人々

近松門左衛門　一〇三
デフォー　一〇四
本居宣長　一〇四
司馬江漢　一〇五
松平定信　一〇六
ドーミエ　一〇七
古河市兵衛　一〇七
児島惟謙　一〇八
コナン・ドイル　一〇九

新渡戸稲造　一一〇
島崎藤村　一一一
野口　遵　一一一
市村羽左衛門・十五世　一一二
斎藤茂吉　一一三
大川周明　一一五
チャンドラー　一一五
花柳章太郎　一一六
江戸川乱歩　一一七
佐藤千夜子　一一九
劉　少奇　一一九
柳家金語楼　一二〇
ハワード・ヒューズ　一二一
平野　謙　一二二
山岡荘八　一二三
近藤日出造　一二四
笠置シヅ子　一二四

七十二歳で死んだ人々

孔　子　一二六
阿倍仲麻呂　一二六
西　行　一二七
沢　庵　一二八
三井高利　一二八
水戸光圀　一二八
ショーペンハウエル　一二九
榎本武揚　一三〇
田中正造　一三一
後藤新平　一三二
徳田秋声　一三三
添田唖蟬坊　一三四
ユトリロ　一三四
柳　宗悦　一三六
佐藤春夫　一三六
佐佐木茂索　一三八
内田吐夢　一三九
リンドバーグ　一四〇
山本嘉次郎　一四一
棟方志功　一四二
舟橋聖一　一四三
ジャン・ギャバン　一四四
ジョン・ウエイン　一四五
松本幸四郎・八世　一四六
田村泰次郎　一四七

七十三歳で死んだ人々

山上憶良　一四八
カザノヴァ　一四九
伊能忠敬　一五〇
良　寛　一五〇
グリム・弟　一五一
斎藤弥九郎　一五二
ダーウィン　一五三
清水次郎長　一五四
パストゥール　一五五
橋本雅邦　一五五
河本大作　一五六
高村光太郎　一五七
室生犀星　一六〇
川端康成　一六一
岩田専太郎　一六三
朝永振一郎　一六三
水原　茂　一六四
佐分利信　一六四

児玉誉士夫　一六五
三原　脩　一六七

七十四歳で死んだ人々

白　楽天　一六七
毛利元就　一六八
徳川家康　一六八
大岡越前守　一六九
ヘンデル　一七〇
サド侯爵　一七一
蜀山人　一七二
鶴屋南北　一七二
ハリス　一七三
ヨハン・シュトラウス・子　一七四
谷　干城　一七五
大山　巌　一七六
ガウディ　一七七
南方熊楠　一七七
川上貞奴　一七八
スターリン　一七九
小林古径　一八一
久保田万太郎　一八二
東海林太郎　一八三
佐藤栄作　一八四
古賀政男　一八五
水谷八重子　一八六
湯川秀樹　一八七

七十五歳で死んだ人々

アルキメデス　一八八
鑑　真　一八八
柳生宗矩　一八九
護持院隆光　一八九
上田秋成　一八九
塙保己一　一九〇
新門辰五郎　一九一
リスト　一九一
エンゲルス　一九二
マーク・トゥエイン　一九三
ベル　一九三
モラエス　一九四
西田幾多郎　一九五
佐藤紅緑　一九六
会津八一　一九七
堤康次郎　一九八
三木露風　一九九
薩摩次郎八　一九九
サルトル　二〇〇

七十六歳で死んだ人々

豊太閤夫人　二〇一
勝　海舟　二〇二
徳川慶喜　二〇三
坪内逍遙　二〇四
坂田三吉　二〇四
アインシュタイン　二〇五
北大路魯山人　二〇五
子母沢寛　二〇六
獅子文六　二〇七
大仏次郎　二〇八
上原専禄　二一〇
ブレジネフ　二一一
長谷川一夫　二一二

七十七歳で死んだ人々
ハイドン　二一四
鳥居耀蔵　二一五
河竹黙阿弥　二一六
ロダン　二一六
犬養　毅　二一七
出口王仁三郎　二一八
シェーンベルク　二一九
五島慶太　二二〇
広津和郎　二二二
徳川夢声　二二二
フルシチョフ　二二四
吉屋信子　二二五
稲垣足穂　二二六
中野重治　二二七
嵐寛寿郎　二二九
志村　喬　二三一
エラリー・クイーン　その2　二三二

七十八歳で死んだ人々
ガリレオ　二三二
スウィフト　二三三
グリム・兄　二三四
イプセン　二三四
ルノワール　二三五
イーストマン　二三七
嘉納治五郎　二三七
ロマン・ロラン　二三八
村岡伊平次　二三九
小泉信三　二三九
熊沢天皇　二四一
西条八十　二四二
ジョン・フォード　二四三
周　恩来　二四四
藤原義江　二四五
田村秋子　二四八

七十九歳で死んだ人々
法　然　二四九
藤原定家　二五〇
本阿弥光悦　二五〇
大久保彦左衛門　二五一
銭屋五兵衛　二五一
北里柴三郎　二五二
河口慧海　二五三
ガンジー　二五四
幣原喜重郎　二五四
長谷川伸　二五五
谷崎潤一郎　二五六
山田耕筰　二五九
桂文楽・八代目　二六〇
林　武　二六一
今　東光　二六二
山手樹一郎　二六三
マウントバッテン　二六三
沢田美喜　二六四
横溝正史　二六五
武見太郎　二六六

八十歳で死んだ人々
釈　迦　二六八
プラトン　二六九
世阿弥　二六九
尾形乾山　二七〇

カント　二七一
井上　馨　二七四
アナトール・フランス　二七五
H・G・ウエルズ　二七六
幸田露伴　二七七
トーマス・マン　二七八
真崎甚三郎　二七九
永井荷風　二八一
小沢治三郎　二八二
ド・ゴール　二八三
浜田広介　二八四
片岡千恵蔵　二八六
ワイズミュラー　二八七
美濃部亮吉　二八七
石川達三　二八八
入江相政　二九〇

八十一歳で死んだ人々

則天武后　二九二
ペスタロッチ　二九三
滝沢馬琴　二九三
大前田の栄五郎　二九四
大槻文彦　二九四
山本権兵衛　二九五
ムンク　二九六
鈴木貫太郎　二九六
土井晩翠　二九七
野村胡堂　二九八
ニミッツ　二九八
東郷青児　二九九
ヒッチコック　三〇〇
中村翫右衛門　三〇一
小林秀雄　三〇二
璽光尊　三〇三
円地文子　三〇四
木村義雄　三〇五

八十二歳で死んだ人々

ゴヤ　三〇六
トルストイ　三〇八
板垣退助　三〇九
高橋是清　三一〇
ベルクソン　三一一
ジイド　三一二
三田村鳶魚　三一二
武林無想庵　三一三
藤田嗣治　三一四
今村　均　三一五
内田百閒　三一六
羽仁五郎　三一八
中村草田男　三一九
中野好夫　三二〇

八十三歳で死んだ人々

孟　子　三二二
ゲーテ　三二二
ユゴー　三二三
ビスマルク　三二四
ド　ガ　三二四
安田善次郎　三二五
フロイト　三二六
正宗白鳥　三二七
スプルーアンス　三三〇
古今亭志ん生・五代目　三三一
毛　沢東　三三二

伊藤大輔　三三三

八十四歳で死んだ人々

貝原益軒　三三五
ヴォルテール　三三五
フランクリン　三三七
杉田玄白　三三七
カーネギー　三三八
大隈重信　三三八
山県有朋　三三九
エジソン　三四一
ハウプトマン　三四二
フォード・一世　三四二
本多光太郎　三四三
小林一三　三四四
石原　忍　三四五
マッカーサー　三四六
正力松太郎　三四八
尾崎一雄　三四八

八十五歳で死んだ人々

ニュートン　三四九
三宅雪嶺　三五一
白瀬　矗　三五一
長岡半太郎　三五二
マチス　三五三
高浜虚子　三五四
ヘルマン・ヘッセ　三五五
平塚らいてう　三五五
安岡正篤　三五六

八十六歳で死んだ人々

桜井忠温　三五七
井上成美　三五九
アガサ・クリスティ　三六〇
衣笠貞之助　三六二
川口松太郎　三六二
石坂洋次郎　三六三

八十七歳で死んだ人々

鳥羽僧正　三六五
一　休　三六五
北条早雲　三六六
モース　三六六
東郷平八郎　三六六
葦原将軍　三六八
ヘディン　三六九
柳田国男　三六九
坂本繁二郎　三七〇
山本有三　三七一
石橋正二郎　三七一
加藤唐九郎　三七二

八十八歳で死んだ人々

ヴェルディ　三七三
富岡鉄斎　三七四
宮武外骨　三七四
宇垣一成　三七六
志賀直哉　三七六
蒋　介石　三七九
チャプリン　三八〇
市川房枝　三八〇

八十九歳で死んだ人々

親鸞 三八一
ミケランジェロ 三八二
葛飾北斎 三八四
レセップス 三八五
頭山満 三八六
吉田茂 三八八
金田一京助 三八九
石橋湛山 三九〇
堀口大学 三九〇

九十歳で死んだ人々

ナイチンゲール 三九一
横山大観 三九二
シュヴァイツァー 三九三
山川菊栄 三九四
滝井孝作 三九四

九十一歳で死んだ人々

渋沢栄一 三九六
西園寺公望 三九七
チャーチル 三九八
サマセット・モーム 三九九
武者小路実篤 四〇一
白井喬二 四〇二

九十二歳で死んだ人々

ファーブル 四〇三
シベリウス 四〇五
ライト 四〇六
大谷竹次郎 四〇六
ピカソ 四〇八
リーチ 四〇八
大内兵衛 四〇九

九十三歳で死んだ人々（欠）

九十四歳で死んだ人々

バーナード・ショウ 四一〇
徳富蘇峰 四一〇
長谷川如是閑 四一三
荒畑寒村 四一四

九十五歳で死んだ人々

尾崎咢堂 四一六
牧野富太郎 四一七
アギナルド 四一八
ルビンシュタイン 四一八
里見弴 四一九

九十六歳で死んだ人々

ヘボン 四二〇
御木本幸吉 四二一
鈴木大拙 四二三
松永安左衛門 四二三

九十七歳で死んだ人

熊谷守一 四二五

九十八歳で死んだ人

梅原竜三郎 四二六

九十九歳で死んだ人

諸橋轍次 四二九

百代で死んだ人々

野上弥生子　四三〇
物集高量　四三一
天海僧正　四三二
平櫛田中　四三三
大西良慶　四三四
泉重千代　四三四

付・人名索引

装丁　矢島高光

人間臨終図巻　下巻

本書の死亡年齢について

日本では古来〝数え式〟をもってし、西洋では満年齢をもってするが、とりあげた人物中、生歿年月日が不明ないし不正確なものがあり、かつ日本人で明治人の場合、明治五年に陰暦から陽暦に切り換わったこともあり、また外国でも、時代や国によって暦法が違うなどのことがあるので、本書では統一上、一律に西暦歿年次から西暦生年次を引いたものを死亡年齢とした。したがって、表記の年齢は、数え式より一歳少なく、満年齢式より一歳多くなる場合がある。

六十五歳で死んだ人々

どんな臨終でも、生きながらそれは、多少ともすでに神曲地獄篇の相を帯びている。

――山田風太郎――

ルイス・フロイス（一五三二―一五九七）

一五三二年ポルトガルに生まれたルイス・フロイスは、いわゆる伴天連（バテレン）として一五六三年（永禄六年）三十一歳のとき日本にやって来て布教につとめ、その間まざまざと自分の眼で見た戦国時代から織田、豊臣に移る『日本史』を書き残した。おかげで、

「この尾張の王は三十七歳、長身痩軀で髯は少ない。声ははなはだ高く、武技を好み、粗野である。傲慢で名誉を重んじ、決断を秘し、戦術に巧みでほとんど規律に服しない。部下の進言に従うことは稀である。

彼は諸人から異常な畏敬を受け、日本の王侯をことごとく軽蔑している。

彼は理解力と明晰な判断力を持ち、神仏その他の偶像を軽視し、異教一切の占いを信じない。宇宙に造物主などなく、霊魂不滅などいうこともなく、死後は無であることを明らかに説いた。人との話はまわりくどいことを嫌った」

などいう、同時代人から見た近代的な信長像をわれわれは得ることになる。

しかし、苦難にみちた三十五年の伝道も空しく、彼の最後の十年間は秀吉の禁教令のもと、烈しい弾圧の中にあり、慶長二年七月八日、朝鮮役のさなか、長崎で彼は病死した。

彼は死ぬ一年ほど前から、片足が腫（は）れて激しく痛み、ついで手がしびれ舌がもつれた、と一五九七年度の『耶蘇会士日本年報』にある。死の前年に長崎で、いわゆる二十六聖人の殉教を見、彼の心は暗澹たるものであったと思われる。

しかも、彼が心血をそそいで、和紙に墨で書いた厖大（ぼうだい）な『日本史』は、イエズス会の幹部から黙殺され、空しくマカオのイエズス会の倉庫に放りこまれたままになり、彼は

悲嘆のうちに死んだ。それも二百余年後焼失してしまった。（ただ倖いに別に謄写したものがあった。これも全世界の図書館に散らばっていたものを、日本人の切支丹学者松田毅一が苦心して蒐集し、その全貌がはじめて明らかになったのは一九八〇年になってからのことであった）

バッハ（一六八五――一七五〇）

最初の妻との間に七人の子供をもうけ、二度目の妻との間に十三人の子供をもうけたヨハン・セバスティアン・バッハは、晩年ライプチィヒ聖トーマス教会の楽長となったが、まもなく視力が衰えはじめ、ついには完全に盲目になった。

「（一七五〇年の）あの七月の暑さが完全に彼を疲れさせ、苦痛と衰弱のために死の床からふたたび彼を起きあがれないようにしました。あの最後の日の、あの最後の時間の、どんな細かいことも私は目のあたりに思い出すことが出来ます」

と、二度目の妻マグダレーナは『夫バッハの回想』にいう。

「神は御慈悲にも少しの間、苦痛を和らげて下さいました。彼は自分が眠れるからといって、私を休ませてくれました。そのとき彼はやさしい手で私の顔を撫でながら、どんなにお前が疲れているか僕にはわかる。僕のために、いってお休み、といいました」

マグダレーナに代って婿のクリストフが看病していると、眠っていたバッハが突然起き上って、「クリストフ、紙を持っておいで。いま頭の中に音楽が鳴っている。それを早く書きとっておくれ」といった。クリストフが口述の通り鵞ペンでそれを書きとると、バッハはやっと聞きとれるような小さな声で「それがこの世で僕の作る最後の音楽だ」といって、また眠りこんだ。

夜明けに起きて来たマグダレーナが、その楽譜を見て感動の涙をながしていると、「マグダレーナ、来ておくれ」というバッハの声を聞いた。

「私は彼と二人きりでした。彼は私のほうを眺めました。私が見えたのです！　苦痛と衰弱から落ちくぼんで収縮していた瞳孔が、もういちど開いて、苦痛の中にも光っていたのです！」

「そうするうちにも終焉の近づいたことがわかりました。『僕に音楽を少し聞かせておくれ。もうその時だからお別れに死の歌を歌っておくれ』と、彼はベッドをとりまいてひざまずいている私たちにいいました」

マグダレーナや家族は「聴け、すべての者は死すべきなりと声するを」という讃美歌を四部合唱で歌った。

「私たちが歌っている間に、セバスティアンの顔が大変平和になって来ました。一七五〇年七月二十八日、火曜日の夜十時十五分に逝きました」

――実はこのマグダレーナの『回想』はマグダレーナによって書かれたものではなく、二十世紀になってアメリカの女流作家エッサー・メイネルによって書かれた創作だが、それを知らずして読んだ小林秀雄が、本の中からバッハの音楽が鳴って来るような奇蹟に近い名著、と感動したという書物なので、あえて引用した。創作とはいえ、あながちまるきり虚構ではあるまい。

バッハの死因は卒中であった。同年に生まれたヘンデルからも無視され、比較的狭い周囲で、楽長としての名声を得ていたが、作曲家としては黙殺されていたバッハが大音楽家として認められるまでには、死後一世紀を要した。

ドラクロワ（一七九八――一八六三）

画技においてはレンブラント、ルーベンスに匹敵するといわれながら、ドラクロワはその絵の好奇的異常性のゆえか、またゴーティエに「妖術で相手を魅惑しようとするときのドラクロワほど不思議な力を示す人間はない。彼がもの柔らかに、猫なで声で人にとり入ろうとするさまは、優しさと怖ろしさを非常に巧妙に描き得た彼の虎の絵そっくりである」と評されたような、一見いかにも表裏ありげな人柄のゆえか、七回アカデミーのサロンに出品して三流画家のごとく七回落選した。

彼がこの屈辱にたえて、二十二年を費し、やっと八回目に当選して会員となることができたのは、五十九歳になってからであった。

ドラクロワは若いころから病みがちで、しばしば発熱して寝込んだが、描くことだけはたゆまずめげず、生涯に九一四〇点の作品を残した。

彼が自分を悩ませた発熱が結核によるものであることを知ったのは、四十九歳のときであったが、ジョルジュ・サンドに「子供のない人間は、退屈で死ぬか、働くかです」と手紙に書いたように、病弱と孤独の中に、以後もひたすら憑かれたように描きつづけた。彼は生涯独身であった。

一八六三年の冬、流感にかかり、シャンロゼーの別荘にいったが、七月中旬病状が悪化して馬車に寝たままパリに帰り、八月十三日午後七時に死んだ。家政婦のジェニーは

知人に手紙でいう。「先生は三カ月この方御大病でした。いつものようにお風邪がもとで、ただささえお弱い肺をいためつけたのでした。精神の方は御臨終まで静かで穏やかで、言葉はおかけにならないでただ感謝にみちた御様子で、私の手を強く握りしめながら、子供のように最後の息をおひきとりになりました」

マルクス（一八一八――一八八三）

晩年カール・マルクスも夫人イエニーも、長年の苦労がいっせいにふき出したかのように病みがちになった。

一八八一年秋、ロンドンの自宅で肋膜炎がやや快方に向ったマルクスが、病床の妻の部屋にいったときの光景を、娘のエレノアールは書いている。

「彼がお母さんの部屋にゆけるほど元気になった朝のことを、私は決して忘れないでしょう。二人はまだ若いときのようにいっしょにいました。彼女は愛する女、彼は愛する若者で、いまいっしょに暮しはじめたように見え、お互いに、人生に別れを告げようとしている病気に悩む老いた夫と、死に瀕している老いた妻とは見えなかったのです」

その年の十二月二日、イエニーは永遠の眠りについた。肝臓ガンであった。彼女は、夫がドイツから追われてロンドンに亡命中、怖ろしい窮乏の中に、幼い子供三人を失いながら、ひとことも夫に不平をのべることなく、夫の著作と革命運動に協力しつづけて来た妻であった。

イエニーが死んだ日、マルクスはその葬式にも出られない状態にあったが、親友のフリードリッヒ・エンゲルスはマルクスの悲嘆ぶりを見て、「これでモールも死んだ」と、つぶやいた。モール（黒人）とは、壮年のころから顔も髪も黒く頑丈な身体の持主であったマルクスにつけられたあだ名である。しかし、いまはその髪も真っ白に変っていた。

しかしマルクスは病床から立ち直り、『資本論』第二巻の著述に最後の力をふりしぼった。

一八八二年十月、彼は医者のすすめでイギリス海峡にあるワイト島に療養にいったが、冬のワイト島は雨と霧の日が多く、彼はかえって風邪をひいた。そこへ、一八八三年一月十一日、彼の長女ですでに結婚している、母と同名のイエニーが三十九歳で肺結核のためパリ近郊のアルジャントゥイユで死んだという知らせが来た。これは彼にとって最後の打撃であった。

彼はすぐにロンドンの自宅に帰ったが、やがて喉頭炎を併発して食物ものどを通らなくなり、二月にはいると腸に

潰瘍が出来、薬もまったく効かなくなった。根源の病巣は重い肺結核にあった。

友人のエンゲルスは毎日見舞いに来たが、三月十四日午後二時半に訪れて見ると、忠実な老家政婦レンヒェンが、マルクスが喀血し気を失った、最期のときが近づいているようだから早く見てくれ、といった。エンゲルスは二階に駈け上った。

「彼は眠っていたが、もう眼をさまさなかった。脈搏と呼吸はつづいていた。二分後に彼は安らかに苦しむことなく永遠の眠りについた」

と、エンゲルスは書き、友人への手紙に、

「人類は頭一つだけ低くなったのだ。しかも人類が現在持っている最も大切な頭一つ分」

と、書いた。

『資本論』第二巻は未完のまま終った。しかしエンゲルスはまたいう。

「彼の名は幾世紀にもわたって生きつづけるだろう。そして彼の仕事もまた然り。――」

マルクスの死は、しかし後年から見るとふしぎなほど世間には知られなかった。三月十七日の葬式には、わずか二十人の人々が連なっただけだった。

日本では、やっと自由民権運動が盛んになった明治十六年である。同じ年に二十世紀の代表的経済学者ケインズとシュンペーターが誕生した。

ツルゲーネフ（一八一八――一八八三）

マルクスの死後五カ月余を経て、ツルゲーネフが死ぬ。

ツルゲーネフは『猟人日記』を書いた三十代のころから白髪が目立ちはじめ、『その前夜』を書いた四十代のはじめごろからみずから老人と称し、白髪のゆえにもう恋愛はあきらめなければならないと嘆き、『処女地』の構想をねりはじめた五十五歳のときには、次のような手紙を友人に書いた。

「情熱の冷えが日ごと深く私の心にはいりこみ、ますます強く心を包みます。私は自分の中の一切の無関心に自分でびっくりしています。……この世で起っている一切が、私には何とうとましく、虚しく、ものうく、無目的なものに見えることでしょう」

しかし彼は、実際には富と名声につつまれて、ロシアのスパスコエ（そこが大地主である彼の領地であった）、ドイツのバーデン・バーデン、フランスのパリなど住所を変えながら、トルストイやメリメやフローベールなどと交際した

り、歌姫にして人妻たるマダム・ヴィアルドーと不可思議なる愛の交流をしたりして後半生を送った。
　死の前々年の一八八一年八月、ツルゲーネフがヤスナヤ・ポリヤナのトルストイを訪問したとき、死の恐怖が話題になった。ツルゲーネフは、人間が死を怖れるのは自然のことだ、といい、トルストイは、本当に生きている人間は死を怖れないものだ、といった。ツルゲーネフは客一同を見まわして、死ぬのが怖い人は手をあげなさい、といい、自分がまず手をあげた。
「どうやら私ひとりのようだ」
と、彼がつぶやいたとき、トルストイが苦しそうな顔をして手をあげた。……
　ツルゲーネフはまた詩の中で書いた。
「(死に臨んで) 何を思うだろうか?
おそらく私は、何も思うまいと努めるにちがいない。
ゆくてにたちこめる怖ろしい暗闇に眼をふさぎたいばかりに、
何かつまらないことを、しいて思い浮かべるにちがいない」
　ともあれツルゲーネフは、六十二歳になった一八八〇年ごろから背中の痛みを訴えはじめ、一八八二年のはじめには、それまで階段を上るときだけ痛んだものが、ふつうの歩行にも、また背中だけでなく胸まで、たえがたいほど痛むようになった。彼は神経痛だと思い、医師は狭心症だと診断したが、実はすでに脊椎ガンが彼にとりついていたのであった。
　一八八二年の五月、彼はそれまで住んでいたパリから近郊ブジヴァールの優雅な別荘に移り、牛乳を一日に十二杯飲む牛乳療法や熱罨法を試みたり、あまりに痛みの烈しいときはモルヒネ注射をしたりした。
　十月また彼はパリに帰ったが、二十五年前に出来て、小さなままでとどまっていた腹部の腫物が急に大きくなりはじめ、一八八三年一月に切開除去の手術を受けた。手術後、経過は良好に見えたが、ふたたび呼吸がとまるほどの痛みが彼を襲い出した。その部分だけでなく、背中全体が激痛にひしめいた。彼は愛人のマダム・ヴィアルドーに毒を求め、あるときには二階から地面へ投げ落してくれと要求した。
　それでも、死の数カ月前に彼はいっている。
「人生は、それにしてもいいものだ」
「はかなさが、私をぞっとさせる。それにしても、まだ生きたい」

　やがて夏が来て、彼は痛みのために毛布をひき裂こうとし、一昼夜に何度もモルヒネを注射してもらい、ウトウトと眠り、醒めると、ロシア語、ドイツ語、英語でわけのわからないことをさけびたてた。彼はもう「何かつまらないこと」さえ思い浮かべる余裕はなかったに相違ない。
　ロシア暦で八月二十二日、太陽暦で九月三日午後二時、彼の業苦は止んだ。
　このやさしい眼を持ったメランコリックな大作家には、何百万年かの後、ウジ虫のような人類がすべて死に絶えたあと、蒼空に白くそそり立つユングフラウとフィンステラールホルンが、静謐になった地上を見下ろして、「これでせいせいした」と話し合う散文詩『対話』がある。

市川団十郎・九代目 (一八三八——一九〇三)

「団十郎」という名を歌舞伎役者の王様として、昭和以後にも印象させたのは、この明治の九代目団十郎である。
　長谷川如是閑の兄で、芸能に詳しかった朝日新聞記者山本笑月はいう。「いかなる大柄の俳優も、団十郎の前に出ては小さく見える。技芸の力と貫禄の重みである。音声は独特の名調子、晩年少しも衰えない」
　彼の晩年の年収は、米一石十円足らずの時代に二万五千円あったという。
　彼は三万円を投じて茅ヶ崎に一万坪の土地を求め、孤松庵という別荘を作った。邸内に請願巡査二家族を養っているほどであった。
　晩年悠々として、後の六代目菊五郎たち後輩に芸談を語ったり、釣、茶などの趣味に明け暮れる貴族的生活を送ったが、右の山本笑月は、明治三十五年夏、ここにインタビューに訪れた。
「舞台とはかけ離れて白髪まじりの少し残った禿頭、眼は評判だけにいささか大きい、受口で頬のこけたところ、品格はあるが、日本一の名優とはお釈迦様でも気がつくまい。
　私が釣のお話を伺いに出ましたというと、当時同優は持病の喘息の烈しい時で、挨拶よりも咳きいる方が先で、気の毒なほど苦しそうであった」
　団十郎はしかし、翌明治三十六年九月八日、尿毒症を発し、ついで急性肺炎を併発し、同十三日、この孤松庵でこの世を去った。
　二十日、青山斎場で神式の葬儀が行われたときは、葬式の先頭が虎ノ門を過ぎても、後尾はまだ築地の市川邸を出きらぬほどであった。

原敬（一八五六——一九二一）

白頭の宰相原敬は、よく夫婦喧嘩をしたが、大正十年十一月四日も、晩餐を共にしながら浅子夫人と口喧嘩をした。原のほうが負けて、あやまって家を出た。政友会の近畿大会に出席するためであった。このとき夫人は、なぜとも知らず不吉な予感をおぼえたという。

その足で原は、午後七時二十六分、見送りの人々とともに東京駅乗車口に近づいたとき、群衆の中から絣の着物を着た少年が何かさけびながら疾風のように飛び出して来て、その胸を匕首でつき刺した。原は一言も発せず、数分後に絶命した。

凶報に駈けつけた浅子夫人は、涙一滴も見せず、「原はコソバユがりですから」といって、手当のために上半身裸同様にされていた遺骸のシャツ、チョッキ等を自分一人の手でもと通りに着せてやった。浅子夫人は元芸者で、原が五十二歳のとき後妻として入籍した女性であったが、原をくすぐったことでもあるのだろうか。

犯人は中岡艮一という満十八歳の大塚駅転轍手で、公判で、「尼港（ニコライエフスク）で七百人の同胞が虐殺されたのに、あくまで無責任で通そうとした原に、日本人として憤りを禁じ得なかったからだ」と述べた。

原はその二月にすでに遺書を書き、自分が死んだら叙爵は一切拝辞、葬儀は故郷盛岡で、墓石にはただ「原敬墓」、葬礼は夕刻、などと指定してあった。

中岡は無期懲役となったがその後減刑され、十三年後の昭和九年に出獄した。

津田梅子（一八六四——一九二九）

明治四年、七歳で岩倉大使らの欧米巡覧の一行に加えられて渡米し、留学生としてアメリカに学んだ津田梅子が、明治十五年、十八歳で帰国したときは、日本語はまったくカタコトの状態になっていた。

その後、華族女学校や女子高等師範などの教授を経て、明治三十三年、女子英学塾（のちの津田英学塾・津田塾大）を創立した。

梅子がひどい疲労や渇きなど身体の不調をおぼえたのは大正六年の春ごろ、五十三歳のときであった。診断の結果、糖尿病と判明した。

大正六年、梅子の英文の日記。（抄）

「一九一七年、六月一日。

……もう今日でまる三週間になるが、退院の見通しもない。いつ終るというあてもない長い長いこれからの病気という牢獄の暮らし。……

あるいは今までやってきたことはすべてこれで終りになるかも知れない。一つの活動する生命の終り」

「六月十三日。

自分自身のことにクヨクヨすることはない。永遠の事象の中で、私や私のしたことなどとるに足らぬものだということを知らねばならない。新しい芽のためには、一粒の種子は砕けなければならない。私が死んでも、塾が育てた人々は次々と種子を蒔いてくれるだろう。（中略）

……私の生命は他人のためのものであって、自分のためのものではない。なぜこんな不運に見舞われるのか。なぜもっと長く生きられないのか。

しかし、私よりもっと価値のある、数限りない生命が、若い盛りに死んでゆくことにも理由がない。

そして、この孤独と寂寥の意を人は問い得ない」

以後療養につとめたがとみには回復せず、彼女は英学塾長の職を辞し、引退静養の生活にはいったが、大正八年、今度は脳溢血の発作を起して半身が不自由になった。

それから十年、昭和四年八月十六日、鎌倉の別荘にあった梅子は、日記に、

「Storm last night」

と、ただ一行書いた。「昨夜、嵐」

その嵐が過ぎて鎌倉の海に月齢十日の月がのぼった八時ごろ、胸苦しそうなので看護婦がさすると、

「喘息だからじき直ります。そっとしておいて下さい」

と、いった。

それから一時間ばかりたった九時二十五分、彼女はまた脳溢血の発作を起して息をひきとった。

田中義一（一八六四——一九二九）

会社がつぶれる場合、真の責任者はそのときの社長ではなく、数代前にあることが多い。

太平洋戦争のはるか以前にも、日本をその運命におとしこんだ重大責任者は数々あるが、田中義一はその最も有力な一人である。

国内における治安維持法の改悪などの反動政治、大陸における抗日運動の激発などを招来し、昭和前期にとりかえしのつかない失敗を重ねた田中義一は、しかしそのあけっ

ぴろげな性格から、「おらが大将」という異名で呼ばれ、一般大衆からはそれなりの人気があった。

しかし昭和三年六月、河本大作による「満州某重大事件」——張作霖爆殺——の処理のあいまいさを天皇に叱責され、田中内閣は昭和四年七月、総辞職のやむなきに至った。

それから二カ月後の九月二十九日の明け方五時ごろ、麹町の妾宅で、突如狭心症で急死した。その場所は新聞には伏せられて、青山の本宅ということにされたが、事情を知る者の間では腹上死ではないかとささやかれた。

田中を叱責したとき、まだ二十八歳であった天皇は「お前は嘘ばかりついている。お前の顔は二度と見たくない」とまでいったといわれ、あとで田中が死んだのはそのショックのためだときかされて、天皇もまたショックを受け、以後政治的な事柄について口を出すことに遠慮するようになったといわれる。

杉山元（一八八〇——一九四五）

杉山元は、昭和十二年日中事変勃発当時、陸軍大臣であり、昭和十六年太平洋戦争開戦当時、参謀総長であり、昭和十八年には元帥となった。

「明治陸軍建設以来、元帥府に附せられた陸軍大将十七名、この中で杉山元ぐらい無能無力な元帥はなかったのではあるまいか。かれは将軍でなくて能吏である。三軍叱咤の戦将、帷幄籌謀の謀将ではなく、机上整理の官僚である。ただその時の陸軍の事情によって元帥となった幸運児である」（松下芳男『日本近代軍人伝』）

かつて天皇に叱られて、あとでペロリと舌を出したという話もある杉山元は、敗戦当時、本土決戦のための第一総軍司令官の地位にあった。

本土決戦の場合、戦場付近の住民はどうなるのか、この問題に関して「杉山元帥以下の判断は、日本人ならば、大和魂があるならば、決して皇軍の邪魔になるような行動をとることはないであろう、皇土死守の犠牲となって喜んで死ぬだろう、難民となりパニックを起すようなことはないであろうという軍人的解釈の精神論に終始して、これを頼みに本土決戦の基礎が打立てられたのであった」（昭和二十年九月十七日「読売報知」より）

昭和二十年九月十一日、東条大将が米軍に逮捕されると、彼ももうだめだと観念したのであろう。十二日、市ヶ谷の総軍司令部に出勤すると、部下の田中忠勝大佐に自決の意

志を伝えた。

田中大佐が、拳銃に弾五発を詰めて渡すと、杉山はそれを持って司令官室にはいっていったが、すぐにワイシャツ姿で出て来て、「おい弾が出ないぞ」といった。田中が見ると、安全装置をかけたままであった。そこで田中は、いま杉山がいじったために弾に故障が生じている可能性もあると考え、第一発目の弾を抜き、安全装置をはずして手渡した。最高級の軍人でありながら、杉山は拳銃の使い方も知らなかったのである。

やがて司令官室から相ついで銃声が聞え、田中がはいってみると、杉山はテーブルに向いたソファの上で血まみれになっていた。しかし四発撃ったのにみな心臓部をはずれていたとみえて、彼はまだ生きていて、「おい、死ねないぞ、しくじったかな」と、いった。

田中は軍医部長を呼んで毒薬をもらった。それを口中に流しこまれて、杉山ははじめて絶命した。午後五時五十五分であった。

世田谷区北沢の自邸にあった妻の啓子は、電話でこの報を受け、夫の死を確認したあと、六時十分ごろ黒紋付にモンペをはいて仏間にはいり、短刀で心臓部をただ一刺しして自決した。台所で栗をむいていた女中たちが、しばらくこのことに気づかなかったほどであった。夫より妻のほうがみごとな最期をとげたのである。

岩波茂雄（一八八一——一九四六）

岩波は昭和十年ごろから血圧の高いことを心配していた。十九年には、ときどき舌がもつれたり、方角をまちがえたりするようになった。

敗戦直後の二十年九月、知人の葬儀で弔詞を読もうとしたが左腕が上がらず、右手だけで弔詞の紙の一端を持って左腕にかけて読むという事件があった。それでも岩波は懸命に仕事をした。

十一月から、岩波の別荘熱海の惜櫟荘には尾崎咢堂が滞在していた。

二十一年四月二十日に、尾崎の娘が三人のアメリカ人を連れて来た。岩波は彼らと昼食を共にし雑談したあと、午後三時ごろアメリカ人の一人が記念写真をとった直後、両手で頭をかかえて横倒しに倒れた。家人はあわてて広間のソファに寝させた。

東京からかかりつけの医者の武見太郎が急行した。岩波は武見や社員の小林勇の顔を見て何か訴えるようなまなざ

しをしたが、もう口をきけなかった。動かない右手を、動く左手でこすったり、またかけられたどてらをはいだりした。診察の結果は脳底出血であった。

翌日、それまで六カ月も滞在していた尾崎咢堂は、「えらいことになりました」といって、惜櫟荘を去った。彼は「憲政の神様」として戦後一躍人気者になり、ここへ彼を訪う客も多く、怖ろしい食糧不足のころで、岩波は物心とも労することが多かった。そのために、岩波のこんどの発病は尾崎のせいだという声も出た。

岩波の病状は次第に悪化し、肺炎の症状を起した。ペニシリンを入手するために東京に人が走り、また近くに酸素吸入器がないために、小林勇は熱海中を探しまわって、ある熔接工場から手にいれた。

四月二十五日、岩波は眉間に深いたてじわを作り、眼はかたくとじ、ひらいた口からは金歯がのぞいていた。唇はかわき、髪も髯ものびて、日ごろの岩波とはまったくちがう顔がそこにあった。発病以来苦しみつづけている夫を見て、夫人のヨシはたえきれず、「これ以上苦しめることはどうだろうか」と、つぶやいた。

夜八時ごろから岩波の息は次第に静かになり、おだやかな顔になり、十時四十分、息をひきとった。

木村荘八（一八九三——一九五八）

「牛肉店帳場」「パンの会」などの洋画、『霧笛』『濹東綺譚』などの挿絵、『東京の風俗』『東京繁昌記』などの随筆で、ゆくところ可ならざるはない才気を見せた木村荘八は、太平洋戦争後、ほとんど家を出ず、また夜だけ起きていて旺盛な活動をつづけた。彼のそばにいるのは四人目の妻で、彼女は三人目の妻の連れ子であった。

しかし、昭和三十三年秋から荘八は手のしびれをおぼえ、ついに絵筆をとることが出来なくなった。彼は天井から紐を吊るし、それにつかまって起居した。彼は軽い脳溢血か神経痛だと思っていたが、病状ようやく重く、東大病院に入院した。入院三日後に昏睡状態におちいり、二週間後の十一月十八日の夕刻に息をひきとった。彼の病気は肺ガンで、すでに脳にも転移していた。

荘八の作品や資料は、杉並区和田堀の家とともに、若い妻に売り払われて四散した。そして妻の消息もやがて不明となった。

広沢虎造（一八九九——一九六四）

「浪花節で虎造ファンであることは、当今の野球でいえば巨人ファンみたいなもので、浪花節通ならば、虎造ファンと自称するのは、ちょっと気恥かしいところがないでもない」

と、昭和五十六年、『浪花節と私』で俳優小沢昭一はいう。

「そう簡単に虎造をベタホメには出来ないぞ……などと思いながらレコードを聴き出したら、その新鮮さに私は驚嘆してしまった。なんとも新しかったからである」

昭和前期「清水次郎長伝」で一世を風靡し、「馬鹿は死ななきゃなおらない」というせりふを節つきで津々浦々まで流行らせた広沢虎造は、昭和三十四年、六十歳のとき脳溢血の発作を起した。

その後、大阪の大劇で、東西の浪曲の大家勢ぞろいで彼の引退興行が行われた。浪曲師の広沢瓢右衛門は客席で虎造の口上を聞いたが、何をいっているのかさっぱりわからず、胸が痛んで外に出た。あとで、友情出演していた吉田奈良丸に、「虎造さんは、芸はもう駄目でしょうが、命の方はまだいけますか」と訊くと、奈良丸はいった。「命もあかんなあ。虎造は泣虫やな、よく泣くぜえ」

その瓢右衛門は、また虎造についていう。

「この人となると実にややこしい。二号とか三号とかいう人が、四、五人あって、子供が十何人もいるというから、遺言するったって大変だ。利害の問題も手伝うし、また愛の濃淡もある。全部の愛人に同じセリフというわけにもゆかない。遺言だって石松の代参もあれば小松村の七五郎もある。一度ずつ違った文句で言わねばならん、彼もこれには困ったらしい。死ぬのもなかなか楽じゃない」

脳溢血後、彼はついに回復せず、妾の間をへめぐり歩いては追い出され、そのうちゆき倒れになったこともあるという。こういうややこしい状態で、昭和三十九年十二月二十九日に死んだ。

ディズニー（一九〇一——一九六六）

一九二八年、漫画映画史上最大のスター「ミッキー・マウス」を誕生させたのは、彼が二十七歳のときであった。以後「白雪姫」「バンビ」「ファンタジア」「ダンボ」「シンデレラ」等のアニメーション映画で彼は全世界の子供たち

の心をとらえた。
未来作家のレイ・ブラッドベリはいう。「ウォルト・ディズニーの影響力は、今後数世紀にわたって、及ぶであろう」と。
第二次大戦後テレビ時代の到来とともに、巨費を要するアニメ制作は困難となったが、彼はカリフォルニアに「ディズニーランド」を作り出しこれも成功した。
ついで彼は二つ目の「ディズニーランド」といえる「ディズニー・ワールド」をフロリダ州に作るべく、猛烈に活動していたが、一九六五年秋ごろから急速に身体の衰えが見られるようになった。
「ウォルトは赤インゲン豆のチリソース煮、ハンバーガー、じゃがいも、パイなどが好物だったから、体重が八四キロに達してしまい、ついに減食を強いられた。が、禁煙すべきであるという警告は、それを誰が言おうと頑として聞き入れなかった。煙草はウォルトの生活の大事な一部になっており、落ち着きのない彼の手にどうしても必要なものだった。彼はもう手でつまんでいられないほど短くなるまで煙草を吸い、それでもまだ吸い続けていることさえあった」（ボブ・トマス『ウォルト・ディズニー』）
十一月二日、ハリウッドの聖ヨセフ病院に入院してレントゲン検査の結果、左肺にくるみ大の影が認められ、肺ガンにかかっていることが判明し、七日左肺切除の手術を受けた。
すでに左肺の摘出手術を受けたジョン・ウエインは電報を打ってよこした。
「仲間入り、ヨウコソ」
手術後のある日、ディズニーはしみじみといった。
「いつもみんなに警告されていながら、まさか自分の身にふりかかってくるなんて、考えてもみなかったよ」
しかし、衰弱は急速にすすみ、十二月十四日には共同経営者の兄のロイに、ディズニー・ワールドのことについて語ったりしたが、翌十五日午前九時三十五分、心不全を起して死亡した。
自分のアイデアによる「夢」の実現には、これっぽちの手抜きも許さない完全主義者でありながら、一方無駄な時間、無益な慣習は一切拒否した彼の遺志で、葬式は彼の身内だけで、カリフォルニアのフォレストローン・メモリアルパークで内輪に簡素に行われた。

ウールリッチ（一九〇三——一九六八）

『黒衣の花嫁』（一九四〇）、『幻の女』（一九四二）などのサスペンスにみちた傑作で、戦後の日本にも紹介され、日本の推理小説ファンを随喜させたコーネル・ウールリッチ、別名ウイリアム・アイリッシュは、若いころ一度結婚したが、数週間で妻に逃げられ、以後母親とともに暮し、五十四歳のとき、母を失ってからは、陰鬱で孤独な晩年を送った。
糖尿病とアルコール中毒と、足に出来た悪性の壊疽のために車椅子に乗り（足を切断していたともいわれる）、たまに紙袋にいれた安ワイン持参でパーティに姿を見せることもあったが、その席でも部屋の隅にポツンと坐っていることが多かった。
神を信ぜず、愛を信ぜず、おしまいには自分自身をも信じられなくなっていたようであった。だれかが彼に話しかけ、彼の古い作品を称讃などすると、彼はふきげんそうに、「本気でいっているのじゃないだろう」と、つぶやくだけだった。
そして、一九六八年九月十五日に死んだが、彼の死を告げる新聞記事はほとんどなく、葬儀には少数の知人が参列しただけであった。
エラリー・クイーンは書いている。「彼は〝黒衣の〟ウールリッチであり、〝幻の〟アイリッシュだった」

菊田一夫（一九〇八——一九七三）

「鐘の鳴る丘」「君の名は」「がめつい奴」などのラジオドラマや芝居で全日本を風靡する一方、東宝の演劇担当重役として東宝系の演劇に君臨した菊田は、そんな地位にあり、超人的な多忙の中に生活しながらきわめて少食で、食物には無関心で、いっとき栄養失調で倒れたことさえあった。
それなのに彼は糖尿病にかかった。糖尿病の持病があるにもかかわらず、そのくせ彼は、自分の手がける芝居の女優を、次から次へ妻にしたり恋人にしたりする華やかな女性遍歴の一生を持った。
だれかを愛すると、いま君をおいて愛する女はこの世に一人もいないと真剣にいい、しばらくすると次の女性に、また同じせりふを真剣にささやくのであった。「忘却とは忘れ去ることなり。忘れ得ずして忘却をちかうこころの哀しさよ」という彼の名文句？は、こういう体験から生ま

れたのかも知れぬ。
昭和四十八年一月二日、菊田は芸術座で彼の最後の作品となった「女橋」を観ていて、三幕目に気分の不快を訴えて芝白金の白金マンションに帰り、五日、慶応病院に入院した。彼の糖尿病はついに腎臓と心臓に障害をきたしたのである。
そして、療養中、四月二日午後零時四十分、突然脳溢血を起して意識不明におちいった。
菊田はかつて「おれは死ぬとき、女のバカヤローとなって死ぬんだ」といっていた。彼が悩まし、彼が悩まされた歴代の「伴侶」たちはみな病院の廊下につめかけていたが、臨終の部屋にはいることを許された女優は、そういう因縁のなかった宮城まり子ただ一人であった。まり子は記す。
「……そこには、いつもの先生ではない、サンソ吸入のクダを鼻から入れ、コンスイ状態の先生がいられました。
のども、胸をあけひろげられているのに少しもうごかず、ただお医者様が心音を、看護婦さんが脈をとって、いられるだけでした。しばらくして看護婦さんが手をはなし、そしてまたお医者様が手をはなし、聴診器をポケットにしまい『お気の毒です』とおっしゃいました。はじかれたように、お嬢さんが先生を抱くように『パパァ、パパァ』と泣き出され、奥様が『さんざん苦労ばっかりして』と、すがりついて泣き出されました。
別の看護婦さんが、入って来て、無ぞうさに足もとをめくり、足の血管に入れていたテンテキの針を抜かれました。少しむき出しになった先生の足は、子供のようでありました。先生の足もとに立っていた私は、そのあまり小さな足が悲しくて、こらえていた涙が、どうしようもなくなりました」
彼が息をひきとったのは四月四日午後九時で、外は冷たい菜たね梅雨がふりしきっている夜であった。
菊田の遺骸は、白金マンションではなく、十五年前に別れた三人目の妻だが、その時点では正妻であった能勢妙子（「鐘の鳴る丘」の声優）の住む南青山の元本宅に運ばれた。
例の「忘却」の詩は、東京西郊上川霊園にある彼の墓地に刻まれている。なるほど墓碑銘としてもふさわしい。

花田清輝（一九〇九——一九七四）

「安部公房の紹介した赤塚という医者が追い返されたっていうんだよ。結局高血圧で二〇〇から下らなかった。最後

には、直接の死因は小脳出血なんだけど、腸からも出血しちゃったっていうし、解剖所見ではもう動脈硬化でもって、全身の血管がボロボロになっていたということなんだね。それにぼくが去年（昭和四十八年）会った時にスゴク太った感じがしたので、どこか悪くないんですかと聞いたら、『ウチの女房はしょっ中、病院へ行くようだけど、オレは医者なんかにはかからねえんだ』と言ったんですがね。『まあ、少し位、悪くても我慢しちゃうんだ』ってね。去年の十二月ですね。そのころから血圧で頭が痛いと訴えていた。自覚症状は当然あったんだろうけど、治療はしないのですね。ずうっと野菜は食べないし、生活規制してなかったんですよ。肉とスパゲッティのグラタンが大好きで、グラタンなら三度だっていいというくらい。これじゃコレステロールがうんとある。動脈硬化になるはず。レタスなんか兎と女の食うもんだといってね。脂っこいものが好きでね」（小川徹『花田清輝の生涯』より、詩人関根弘の話）
花田は昭和四十九年九月二十三日に死んだ。

吉田健一（一九一二——一九七七）

吉田健一は昭和五十二年、留学中の長男と長女を訪ねるのがおもな目的で、約一カ月ヨーロッパに旅行したが、ロンドンで冷夏のため風邪をひき、軽い肺炎症状を起した。
七月三日に帰国したが、その直後からひどい疲労を訴え、聖路加病院に入院した。
やがて退院したが、八月三日午後六時ごろ、夕食を告げる夫人に、ベッドから、「あ、そうかい」と答えたが、そのあとに死んだ。死因は肺炎による心臓衰弱と記録された。
父茂の死後ちょうど十年目であった。

フォン・ブラウン（一九一二——一九七七）

第二次大戦中、はじめて長距離ミサイルV2号を開発したドイツのロケット工学者ウェルナー・フォン・ブラウンは、ドイツ敗北時、ソ連軍の手におちることをきらって、すすんでアメリカ軍の捕虜となった。彼はまだ三十三歳であった。
以後アメリカのアポロ計画の指導者となり、一九六九年七月、人類がはじめて月世界に着陸したアポロ十一号を生み出した。
しかし、その後アメリカはしばらく宇宙計画への情熱を失い、ブラウンは航空産業の一民間会社フェアチャイルド

社の副社長という地位で余生をすごすことを余儀なくされた。

一九七三年初夏、彼はパイロットとしての定期検査で左腎臓に病変を発見され、九月に患部の剔出手術を受けた。医師は明言しなかったが、それはガンであった。

手術後の経過は良好で、彼は前と同様に働いたが、二年後の一九七五年夏、排便時に出血があるのに気づき、診察の結果、大腸にガンが発生していることが判明した。ガンはやがて肝臓にも転移した。

ワシントン郊外アレグザンドリアの病院に見舞いに来た友人に彼はいった。

「子供のときの夢を、生きているうちに実現させることの出来た人間が世界に何人いるだろう。私はもし明日この世を去っても、最高の生き甲斐のあった人生だと満足できるよ」

死が迫って来るにつれて、彼はうわごとをもらすようになった。それは宇宙の星座のかなたを翔んでいる夢であった。目ざめているとき、彼は娘のアイリスにいった。

「宇宙への飛行は、生命の起原を探るためだ。宇宙は生命の故郷だ。生命の起原を知れば、ガンの治療も可能となる」

一九七七年六月十六日、彼は「私はいま銀河系を脱出しようとしている。十万光年……十億光年……」とつぶやき、

「ノバ（新星）」

といって、息をひきとった。

六十六歳で死んだ人々

いかなる人間も臨終前に臨終の心象を知ることが出来ない。いかなる人間も臨終後に臨終の心象を語ることが出来ない。なんという絶対的な聖域。

——山田風太郎——

和気清麻呂（七三三——七九九）

女帝称徳天皇を籠絡し、みずから天皇となろうとした弓削道鏡の野望を、清麻呂が宇佐八幡の神託をかりて打ち破ったのは、神護景雲三年、彼が三十六歳のときであった。そのため彼と、同心の姉広虫は女帝の怒りをかい、罪せられて流罪となった。

が、翌年女帝の死により道鏡は失脚し、和気姉弟は配所から召し返された。

彼らは意外にもそれほど優遇されなかったが、とにかく清麻呂は平安京の造営にもあずかった。

延暦十八年一月、姉の広虫が六十九歳でこの世を去ったのにつづいて、二月、三歳年下の清麻呂も相ついで歿した。

死後かえって彼らは再評価され、特に明治以来は日本の代表的忠臣として、十円紙幣の肖像になった。

道鏡は失脚後二年を経て、下野国で寂しく死んだことは事実だが、その病名、死の状態、さらに年齢さえも明らかでない。

松平信綱（一五九六——一六六二）

世に知慧伊豆と呼ばれ、三代将軍家光の老中としてよく補佐した信綱は、慶安四年家光が死んだとき、重臣堀田正盛、阿部重次らが殉死したのに殉死せず、「伊豆まめは豆腐にしてはよけれども役に立たぬはきらずなりけり」（きらずはオカラの意）などという落首を詠まれたり、「弱臣院殿……殉死斟酌大居士」などという異名をつけられたが、平然として、そのあとに起ったいわゆる慶安の変などを、波も立たせずに処理した。

そして十年後の寛文二年三月十六日、尿閉症で死んだ。尿道か膀胱に腫瘍か結石でも生じたのであろう。しかし持病の再発であったというから、おそらく後者であったのではないか。

その直前、将軍からもらった書状を焼かせ、その灰を袋にいれてわが遺体の首にかけよ、と命じ、かつまた諸係りの家臣を呼んで所管帳簿を出させ、みなハンコを押してから死んだ、というのはいかにも名官僚の知慧伊豆らしいが、尿閉症を起していたとあっては、やはり惨澹たるものであったろう。

遺骸は新座の平林寺に葬られた。

ルソー（一七一二——一七七八）

『民約論』や『エミイル』などの著作によって、思想的にフランス革命を招来した哲学者でありながら、一方貴族の夫人の情人となり、生まれた子どもはすべて養育院に放りこんで放浪生活をつづけたジャン゠ジャック・ルソーは癲癇の持病があり、人から無視されれば怒るくせに、関心をもたれるとまたがまん出来なくなるという性癖があり、かつ猜疑心が強く、最後の十年は半狂人であった。しかしそのような精神状態でありながら、彼は『懺悔録』や『孤独な散歩者の夢想』を書いた。

最後の年の五月、ド・ジラルダン侯爵の世話で、パリから約三十キロのエルムノンヴィルにある侯爵の別荘に暮すことになったが、妻のテレーズがジラルダン侯の馬丁と姦通しているという妄想に苦しんだ。

五月末、生涯の最大の論敵ヴォルテールの死を聞いて、「私の存在は彼に結びつけられていた。彼は死んだ。私が彼のあとを追うのも遠くはないだろう」とつぶやいた。

七月二日、日課の朝の散歩をして八時帰邸し、朝食をとったあと、突然気分が悪くなった。テレーズはいう。

「彼は、足の裏がチクチクして気持が悪い、背骨に氷水が流れるような気がする。胸が苦しい、頭が痛い、と次々に訴えました。この発作中彼は椅子からころげ落ちました。すぐに抱き起しましたが、彼はもう死んでいました」

午前十一時、近所の医者が来て、脳溢血の診断を下した。

最後の著作『孤独な散歩者の夢想』の原稿は、未完のまま机の上に残されていた。

七月四日真夜中ちかく、彼の遺骸は湖水の中のポプラ島に船で運ばれ、農民たちが照らす松明の光の中で埋葬された。

彼の死因は右のごとく脳溢血であったが、自殺したという風評が執拗にたてられ、いったんパリのパンテオンに移された棺をふたたび開いて検証するという事件が起った。そしてまた一八一四年、ルソーの屍骸はヴォルテールの屍骸とともに何者かによってパンテオンから盗み出され、そのゆくえはいまに至るまでわからない。

十返舎一九（一七六五——一八三一）

『東海道中膝栗毛』の一九は、晩年神田通油町に住んでいたが、文政十二年三月二十一日の大火で類焼し、長谷川町に借宅したころから衰えはじめた。

馬琴は書く。「この頃より手足偏枯の病にてついに起たず、天保二年辛卯の秋七月二十九日歿す」（ただし、正しくは八月七日）

辞世にいう。

「此世をばどりやおいとまに線香とともについには灰左様なら」

死後、焼場で棺桶を焼いたら、彼のいたずらで花火が飛び出したという伝説が生じた。しかし一九自身はのんき者だが、まじめ人間で、旅中でも黙々として終始メモばかりとっているような人柄であった。もっとも大酒呑みで、晩年手足が不自由となったのも酒毒のためであったという。

ベルリオーズ（一八〇三——一八六九）

「幻想交響曲」「ファウストの劫罰」など、フランスのロマン派音楽の代表として知られる作曲家ベルリオーズは、しかしその作品の多くがあまりに大作過ぎて演奏会がひらきにくく、またひらかれても失敗することが多く、生前は必ずしも恵まれていなかった。

彼はほとんど一生経済的に苦しみ、また二人の妻との葛藤や死別、それに先天的な神経性胃痛にも悩まされた。

六十歳以後は作曲も評論もやめ、パリのアパルトマンで、みずから「いつでも死神にどうぞ御随意にといえるような」と自嘲したような状態で孤独に暮し、ただ最初の妻が残して船員になっている息子ルイへの愛情のみで生きていた。

しかるに彼が六十三歳のとき、このルイも三十三歳という若さで、遠いハヴァナで熱病のために死んで、彼に致命的な打撃を与えた。

その年の暮、傷心をまぎらわせるためにロシアに演奏旅

行をしたが、寒気のために体調はいよいよ悪くなり、帰国後、一八六八年静養の目的で南仏に赴いたが、モンテカルロの海岸でころんでから病床に臥すことが多くなった。
　そして翌一八六九年三月八日、十二時三十分、パリのアパルトマンで生涯を終った。
　死後一年目の翌年三月八日、オペラ座で彼の記念音楽会がひらかれて、彼ははじめて決定的な大成功をおさめ、ベルリオーズの評価はこのとき定まった。

木村荘平（一八四〇――一九〇六）

　明治時代、東京に牛鍋店「いろは」四十八店をすべて妾に経営させ――というのは伝説だが、二十数店をそれぞれ妾にやらせたのは事実で、みずから「いろは大王」と称した木村荘平は、明治三十九年四月、激しい歯痛のため帝大病院に入院し顎ガンと診断され、手術数日後、四月二十七日午後一時半死亡した。
　彼は牛鍋店チェーンのみならず、日本ではじめて赤煉瓦の煙突に煉瓦の竈、レールをしいてそこに棺を滑りこませて焼くという、その宣伝文句によれば「壮大なる規模と近代的設備」を誇る火葬場を作ったが、あまり料金が高かったので利用者がなく、彼自身がその第一号（第二号という説もあるが）になった。
　荘平には、認知しただけでも三十人の子供があり、死んだ年にも妾たちの中から二人子供が生まれたほどであった。
　その子供たちにとって、彼は強烈な印象を残す父であった。
　その一人荘太は書く。「……ある晩、私も魘われるような悪夢のなかで、父の姿を見て脅かされたことがあった。あの片顎を切りとられた恐ろしい繃帯姿で、父は私の前に姿を現わして、ものもいわずに、両手で私の右手をとって、ぐんぐん引っ張って行こうとしたのだ。恐怖に私は身がすくんで、踏ん張る足に力を入れて、引っ張られまいとした。それでも父の引く力が強くって、私はもがきながらに父のいるなんだか暗いほうへ引き寄せられて行った」（『魔の宴』）
　またその弟荘八も書く。「……僕はオヤジが死んでから何日目かに、これは夢で、本郷紅梅町の世俗幽霊坂を歩いているというと――これはその幽霊坂をいつも学校の往復に通ったので、この場合特別の牽強付会ではないのですが――坂の曲り角にフロックコートを着たオヤジが立っています。その瞬間懐しい感じがしました。然るにオヤジは、

物も云わずに僕を拉して何処かへ行こうとします。僕亦無言でこれに反抗して、夢中でうんうん力んだと見えます。大変うなされたと云うのでわきにねていた祖母にゆり起されたことがありました。この夢で見たフロックコートのオヤジのバケものは、その後久しく眼底から消えませんでした」（『続現代風俗帖』）
　荘平はまったく死を予期しておらず、かつまた入院後は口をきけない状態にあったため、自分の死後のチェーン店のやり方について何の遺言も残さなかったので、数年にして「いろは」は崩壊した。

桂太郎（一八四七――一九一三）

　日露戦争が終結して東京に焼打ち騒動のあったとき、首相桂太郎の愛妾お鯉のもとへ、「お前のような妖婦を妾にしているから、桂はロシアに屈したのだ」という意味の弾劾状が殺到した。お鯉がそれを首相官邸に持っていって見せると、桂は笑いながらあごで卓上をさした。そこには彼女宛のものに数十倍する手紙が、封も切らずに山積みされてあったという。
　この逸話や、ニコポンという流行語――ニコニコして相手の肩をポンとたたいて懐柔する――を作ったように、桂は陸軍大将ながら、軍人としてより政治家としての資質にたけていた。
　彼もそのことを承知していて、大正二年みずから新政党を組織すべく乗り出したが、その年四月上旬から腹痛その他異常をおぼえて病床についた。彼は胃ガンに冒されていることを知らなかった。
　六月十六日に嫡男与一が腸ガンで死んだが、彼自身が最後の対面もかなわぬ状態にあった。もともと十八貫あった体重は、三カ月の間に十四貫になるという衰弱ぶりであった。そして十月十日の深夜に死んだ。
　桂は死ぬ半年前まで、いわゆる「大正政変」の倒閣運動と世論の非難の嵐にさらされていたが、死ぬと同時に新聞はすべて手のひらを返したように「薨去」という文字を使って悼み、彼を国葬にしないことをなじる論も出、愛妾お鯉が黒髪を切ったというので美談のヒロインに仕立てあげた。
　しかし、それもいっときであった。桂は日露戦争を勝利のうちに乗り切った宰相というのに、英雄の印象をまったく残さないで国民の記憶から消え去った。彼の全仕事に対する評価は、お鯉という溶剤で溶けてしまったらしい。

プッチーニ（一八五八——一九二四）

「マノン・レスコー」「マダム・バタフライ」「トスカ」などのオペラの作曲で知られるジャコモ・プッチーニは、一九二四年春、のどに痛みを感じた。しかし彼はひどい喫煙家で、以前から慢性気管支炎にはなれっこになっていたので、あまり気にしなかった。彼はそれより、オペラ「トゥーランドット」を書くのに夢中であった。

九月ごろ、指揮者トスカニーニは彼を訪問し、プッチーニの痩せ方と嗄れ声の甚だしいのに驚いた。

十月に彼はまたのどに新しい疼痛をおぼえ、医師の診断を受け、喉頭ガンにかかっていることが判明した。ただし医師はそのことをプッチーニの息子にだけ知らせ、手術を受けるためにブリュッセルの病院に入院することをすすめた。

十一月、ブリュッセルの病院に着いたとき、彼は医者にいった。「あなたはどれくらいの時間を私にくれますか。二十日はどうしても欲しいのです。オペラを完成しなくちゃなりませんので」

病院でラジウム照射が十二日間つづけられたあと、十一月二十四日、手術が行われた。三時間半の手術後プッチーニが外へ運び出されたとき、ラジウムを入れた長い針が七本頸から飛び出し、銀のカニューレを通して彼は呼吸していた。

プッチーニは紙に鉛筆で書いた。

「こいつは侮辱だ！」

しかし、彼はまた書いた。

「後どれくらい生きられますか？　十二日は必要なのですが」

一見手術は成功したように見えた。十一月二十七日には息子にいった。「フォスカ、私は救われたよ！」

しかしその翌日、プッチーニはまた倒れた。腫瘍が崩壊したのである。彼はベッドの中でころげまわりながら、安楽椅子に坐らせてくれといったり、またベッドに寝させてくれ、などいった。絶望にうちひしがれたように頭をふったり、うめき声をたてたり、手をさしのべたり、膝をたたいたりした。

しかし翌日になると彼は平静になり、死ぬ前、黙って手を息子と娘のほうにさし出し、十一月二十九日正午過ぎに息をひきとった。

一九二六年四月、プッチーニの最後のオペラ「トゥーランドット」が、ミラノのスカラ座でトスカニーニの指揮で初公演されたとき、観客の男女は何の打合せもしなかったのに、すべて黒い服に身をつつんで集まった。

泉　鏡花（一八七三——一九三九）

昭和十三年、鏡花は一作も発表せず、十一月ごろから身体の不調を訴えるようになった。翌十四年、「中央公論」七月号に『縷紅新草』を発表したが、一枚書いては休み一枚書いては休むという、文字通り鏤骨の執筆ぶりであった。

以下は村松定孝『泉鏡花』による。

『縷紅新草』を病苦を押さえ、すず夫人の心配を退けて執筆したのち八月病勢がつのった。

執筆中、すでに『右胸部が凝る』と、ときどき訴えていた由であるが、当時は主治医三角博士の診断では変化を認めず、病床についたのは七月下旬であった。

その頃は専ら腰部の疼痛に苦しみ、八月中旬に至り三角博士は稲田竜吉博士と共に病因——癌性肺腫瘍を確認した。しかし博士等は夫人には、そのことをひそかに告げたが、鏡花の異常な神経過敏を憂慮し、その真相を伝えることを禁じた。

それで鏡花は自己の病名を知らず、数年前から肋間神経痛には、しばしばなやまされたことがあったので最後まで神経痛と気管支炎を病むものとばかり思って大事を予想しなかったらしい。

しかし、永眠する九月七日前の十日間は、終始呼吸の困難と胸部の容易ならざる痛苦を訴えてやまなかったので、夫人は夜間瞬時も睡眠することなく看護に当った。

心臓の著しい衰弱を見たのは六日の夜であった。遂に葡萄糖の注入と酸素吸入の治療をこころみることを里見弴氏が本人にすすめた。本人はそうした治療は臨終の患者にかぎり施されるものと信じ、なかなか、同意の様子がなかった。このへんが鏡花らしい考えで、病気を癒すことよりも、臨終患者のやることをすると死神にとりつかれでもすると思ったのであったろうか。それで、里見氏は、その治療が臨終患者にかぎらぬものだとしきりに説得、ようやく承知して、これを実現したところ『ああ、こりゃあ、よい心持だ。これで欲を云えば、酸素が冷却されて海風の涼しさでやってきたら、更に乙だが……』などよろこんで枕頭の人々に語った。

永眠の日（九月七日）は朝のうちは気分は爽快だったらしく、三角博士は強心剤の注射を行い、鏡花は麦飯と味噌

汁で朝食を摂り、なお鶏卵を喰べたいなど訴えたが、これは昼食のたのしみにと夫人が云いふくめた。
　午前十一時の診断の際、博士は指端に軽度のチアノーゼを認めたので、事態の切迫を思い、夫人にそのことを耳うちした。夫人はいそぎ里見家（鏡花の住居の道ひとつへだてた向い側の有島邸）に急を告げ、里見家より電話で知友数氏にこれを伝えた。
　その報で、笹川臨風、柳田国男、久保田万太郎、小村雪岱の四氏が来訪、臨時に病室とした四畳半の茶の間の病床の裾に諸氏が座を占め、里見氏も来たのをみて、鏡花は周囲を見わたし、『大分皆さんが御出での模様だが病気がそれほど良くないのかな。それならば、ここにいては不都合だろう。寝床を変えてくれ』と告げた。このとき、すでに彼は臨終を覚悟したのであったろうが、臨終に際して、その病床の位置を指図するあたりは、やはり明治人らしい几帳面さが感じられる。
　そのとき里見氏は『病床を動かして大丈夫かしら』と博士にたずねた。博士は『十分注意して床のまま移せばさしつかえないでしょう』と答えたので、夫人が病床を四畳半から、隣室の八畳の間に移すと、ほとんど同時に激変の模様があり、博士は即座に注射を四本したが、このときはもう心臓の活動はなかった。かくて昭和十四年九月七日午後二時四十五分、鏡花は白玉楼中の人となったのである」
　鏡花はふだんから自宅の庭に来る雀を愛し、一尺四方の屋根をかけた雀用のあずまやを作ってやり、そこに米を盛った皿や杉箸に糸を結んだ小さなブランコまで用意し、必ず来るなじみが十二、三羽いる、といっていた。
「御臨終の間際、騒々しいほどの啼声には気づかなかったが、何に驚いたのか、一時にぱっと飛び立つ羽音と、間髪を入れず、明、大、昭、の三代にわたっての名匠の息が絶えた」（里見弴『飽かず見詰めて』）
　死ぬ前に鏡花はすず夫人に「ありがとう」といった。彼女は『婦系図』のお蔦のモデルであったといわれる。
　枕頭の手帳に鉛筆で「露草や赤のまんまもなつかしき」と書かれたのが絶筆となった。

松岡洋右（一八八〇――一九四六）

　松岡の外交は、マージャンで、相手三人（米独ソ）の手を全然見ず、自分の手ばかり見て勝負しているようなものであった。彼はヤクマンを志してヤクマンを打ちこんだ。
　昭和二十一年五月三日、極東国際軍事法廷がひらかれた

とき、A級戦犯となった松岡は、丸刈りの坊主頭、詰襟の国民服で出廷したが、顔は青くむくみ、ひたいに一すじみみずのように血管がもりあがり、ひげはのびて、むしろむごたらしい姿であった。彼は竹杖を膝の間に立て、頭をあげる力もないようであった。
　松岡は、若いころ病んだ肺結核が、戦中の過労によって再発し、憔悴し、身辺から痰壺を離せない状態にあったのだ。それでも罪状の認否には、
「I plead.....not guilty.....on all.....and every account」（余は全訴因に対し、無罪を主張する）と、聞きとれないほどの、しぼり出すような声でのべた。
　固い椅子の上に長時間坐っていることすら耐え得ないかのごとく、彼は背をのばし、また前にかがみこみ、ときには隣りの重光葵に頽れるようにもたれかかった。日米開戦前、東条や近衛を前に「英雄　頭をめぐらせばすなわち神仙」など長広舌をふるって煙にまいた面だましいはさらになかった。
　五月十日、松岡はついに米陸軍病院に移され、さらに六月十五日、東大病院に移ることを許された。そのとき輸送車の中で抱きかかえている井上医師は「まるで枯木を抱いている」ような気がしたといっている。それでも二十四日、縁戚にあたる佐藤栄作と妻寛子が見舞うと、「日本はどうなるだろうか」と、つぶやいた。
　六月二十七日午前二時四十分、彼は遺言も口に出来ない状態で息をひきとった。

折口信夫（一八八七――一九五三）

「あれほど旅行の好きだった先生も、晩年にはその喜びが浅くなってしまったことをときどき歎かれることがあった」
　と、晩年書生として折口家に住んだ弟子岡野弘彦は『晩年の折口信夫』に書いている。
「亡くなられる年の早春のことである。その頃しきりに出かけた、一日か半日の小旅行に発つために、大森駅で電車を待っていた。朝の陽ざしが、ホームにも、鉄色に赤茶けた石垣にも、淡々とさしていた。先生は独りごとのように、
『旅に出る朝の心躍りすら、もう感じなくなってしまった。昔はこんなではなかったのに』
　とつぶやかれた。そのときの顔の深い翳りは忘れられない」
　晩年の数年、折口は神経痛に悩んだり、高血圧で失神し

たり、胃の膨満感を訴えたりしたが、しかし多忙な学究生活を送っていた。

昭和二十八年七月四日から、彼は岡野を連れて箱根の山荘に滞在した。岡野は記す。

「箱根へ来てからの先生の体と心の急速な衰えは、異様というよりほかなかった。毎夜の指圧のとき、指先に触れる肌の乾きや、筋肉のこわばりの具合で、一日一日の肉体の衰えの様子はありありと感じられている」

そして、八月十五日。

「いつもより遅く仙石原の村へ買物に下って帰ってくると、もう薄暗くなっているのに、先生の部屋には灯もともっていない。不思議に思って、そっと入ってゆくと、家のまわりの萱原を渡って来た風が、網戸をとおして涼しく吹き込んでくる畳の上に、先生はひっそりと白い浴衣を着て仰臥していられて、その枕もとに、ここ二、三日のこうした歌を書き散らした和紙が、異様な白さで、ゆらゆらと風に舞い立っているのであった」

こうした歌とは、このころ折口が作った、

「いまははた老いかがまりて　誰よりもかれよりも　低きしはぶきをする」

「かくひとり老いかがまりて　ひとのみな憎む日はやく到りけるかも」

などの歌をさす。

「つねづねあれほど潔癖で、芝居の舞台で箒（ほうき）を使うのを見ても、すぐに口を覆ってしまわれるほどの埃の立つことの嫌いな先生であった。それが今は、畳にごろりと身を横たえて、頭の上にゆらゆらと白紙の舞い立つのを、身から出た自分の魂を見つめるようにじいっと見ていられる。ことばをかけていいものかどうか思いまどいながら、私はしばらく部屋の外に立ちつくしていた。背筋の冷え冷えとするような、異様な光景だった」

岡野をはじめ、来訪する知人たちはこもごも、帰京して医者にかかることを勧めたが、折口は、「若し死ぬのなら、ここでこのまま死んでゆくのがいちばん幸福なのだ」といってきかなかった。

二十三日午後、寝椅子で横になっていた折口は急に岡野を呼び、「いま、二人客が来た」といい、眼をすえて、「それ君の前に荷物を置いて、二人坐っているじゃないの」といった。幻覚であった。

岡野は先輩の伊馬春部を箱根に呼び、折口の承諾を得ないまま帰京の準備をはじめた。それを知った折口は立腹したが、しかしついに諦めた。

二十八日昼過ぎ、手をはげしく痙攣（けいれん）するようにふるわせ、眼を白くつりあげ、口をぱくぱくさせて岡野を驚かせたが、すぐに、「はっはっ……ジキルとハイドでおどろかしてやったんや」と、笑い出した。この時点ではまだこんな馬鹿馬鹿しいいたずらをやって見せる余裕があった。

二十九日、帰京したが、その車の中で折口は何度も錯乱状態におちいった。

渋谷の近山病院で診察を受けた結果、胃ガンという診断が岡野に知らされた。一応大井の出石（いずるし）町の自宅で静養させたのち、三十一日、改めて慶応病院に入院した。

入院後、女が身体にふれることを極度に嫌う折口は、看護婦が遠慮会釈なくテキパキと世話をしてくれるのに恐怖し、そのためかどうか、九月一日、二日と、執拗なしゃっくりに苦しみはじめた。そして、九月三日。

「午前三時、付添婦の動く気配に、はっとしてとび起きると、先生の様子がただごとでない。手や足の先が冷えて、爪が血色を失って青ずんでいる。『あっ、あっ』というふうに部屋にひびいていたしゃっくりが止まって、呼吸がせわしくなってくる。すぐ医師を起して、強心剤を注射してもらい、手足の脇に湯タンポを入れた」

しかし、午前中、折口の呼吸や脈は次第に微弱になっていった。

午後一時ごろ、内科主任教授の石田博士が、十人ほどの医師を従えてやって来て、ただちに主治医に強心剤の静脈注射を命じた。

「脈の弱いためか非常に入りにくい。それが施されているうちに、先生の瞳がすうっと上まぶたのほうに吊りあがって静止し、咽喉が低い音をたてた。私ははっとして時計を見た。一時十一分であった」

と、岡野弘彦は記す。

ちなみに折口信夫の財産は、箱根の小山荘と書物を除けば、昭和二十八年九月死亡当時、三十万円であった。清貧というべきであろう。

尾崎士郎（おざきしろう）（一八九八――一九六四）

『人生劇場』で知られる尾崎士郎は、昭和三十五年秋のころから食欲不振などの変調を自覚し、酒も欲しないようになっていたが、いままでの習慣通り、かつ「仮（かり）にも文壇酒徒番付の横綱という称号に対しては自ら面目をけがすようなことがあってはなるまい」と「意志と勇気をふるい立たせることによって飲みつづけた」（『中央公論』昭和三十七年

一月号『私の癌の記録』)

しかし、翌三十六年六月。「今までおさえにおさえていたものが、とうとう最後的な限界をやぶって肉体の上にのしかかってきた」状態になり、ついに二十四日、慈恵会医大附属病院に入院し、七月十五日、手術を受けた。

「その腫物を、私はついに見る機会はなかったが、それが横行結腸の閉塞部にあった癌だということをハッキリほかの医員の口から聞いたのは、それから四五日経ってからである」と、彼は書いている。

かくてガンを切除し、約六十日の入院生活を経て退院した。

しかし、二年後の三十八年半ば、ガンは直腸に再発した。

「病人の父は、あらがいの姿勢をもう示さなかった。ある日背広を着て出かけたのが最後の外出になり、またある日何日ぶりかで入浴したのが最後の入浴になり、そしてまた、ある日からまったく仰臥のまま病室から出なくなった」と、娘の一枝は記す。

「癌の再発と診断された時、母はもう父を二度と入院させたがらなかった。白い壁に囲まれ息づまる病院の日課の中で父の生を終わらせることは、母にはとても耐えられないと言った」

ある日、下着を取り替えさせるために、一枝は父のむき出しの下半身を見せられることになった。そして、頭の芯をがくっとたたかれたような衝撃を受けた。

「見るに忍びないというのは、こういうことを指すのだろうか。私は、皮ばかりが——それも皮とはとても思えない、紙の繊維のようによれよれの、茶色のものが——辛うじて形骸をとどめている骨にまつわりついているさまを見たとき、どうしても顔が上げられなかった」

昭和三十九年二月十八日、朝から雪がふりつづいていた。息子の俵士は早稲田高等学院の入試に出かけた。その夕方から士郎の息づかいが苦しそうになって来た。そして、かかりの医者が来て、あと六時間くらいしかもつまいといった。

士郎は、雪を見たいからといって、庭向きの障子をあけさせ、聞きとれない声で妻にひっきりなしに何かしゃべりつづけ、一枝に何か歌を歌ってくれといった。一枝は父の好きな「青葉繁れる」を歌いはじめ、歌いつづけた。

「父が意識を失う直前、廊下の方で急にドタドタと足音がし、水野さん(水野成夫)がぬうっと首を出した。そして、外套もとらず立ったまま、

『おい、尾崎、俵士君はな、早稲田の学院受かったぞ。今、

聞いて来たぞ』

今日あった入試の結果がまだわかるはずはない。それは親友の水野さんが父にくださった最後の友情のことばだったのだ。(中略)父は、かすかに目を開き、確かにうなずいたのであった。そして、今度はほんとうに、静かに目を閉じたまま、もう二度とその目を開かなかった」(尾崎一枝『父 尾崎士郎』)

息をひきとったのは、二月十九日の朝であった。そのとき息子は、父の愛用したラッパを、死にゆく父のために、遠くから懸命に吹きつづけていた。

池田勇人 (一八九九——一九六五)

昭和三十五年、国立がんセンターの設立が企図されたとき、準備委員の一人、日本癌学会会長田崎勇三は、時の首相池田に電話をかけて、「あなたのやった政治の中で、たとえ何も残らなくても、がんセンターを作ったことだけは後世に残りますよ」と、いった。

この一言は池田に決定的影響を与え、早速九億五千万円の予算をつけた。

昭和三十八年九月の自民党総裁選で三選を果したあと、池田はカンテンを食いながら、「これはのどをつるりと滑って気持がいいよ」といった。彼の喉頭にはすでにガンが巣食いはじめていたものと思われる。

その翌年ごろからのどのカスレが甚だしくなり、三十九年九月九日、自分が作ったがんセンターで診察を受けた結果、ガンの疑いありとして入院し、放射線治療を受けることになった。

このとき蔵相田中角栄が「私も以前のどの手術をしてこんな悪声になってしまったんだが、同じ医者の手術を受けた赤坂小梅のほうはあんなウグイスのような声になった例もあるからねえ」と冗談まじりに励ますと、池田は、「トレードマークのこの声がウグイスのようになってしまうと困るなあ」と、真顔でつぶやいた。

十月十日から東京オリンピックがはじまり、池田はがんセンターから出て来て開会式には出席したが、オリンピック開催中に、医者から、あと少なくとも、三、四カ月は声を出してはいけないといわれ、退陣を決意した。

そのころ池田はがんセンターの病室の窓から、高速道路をへだてた新橋の高級料亭街の夜景を見ながら、「あの道一つで向うは極楽、こちらは地獄だなあ」と、いった。

オリンピックが閉幕した翌日十月二十五日、彼は退陣声

明を出した。
「入院以来一カ月経過しましたが、医師はなおしばらくの療養を求めております。私は首相としての重責にかんがみ、このさい首相と党総裁を辞任することを決意いたしました」
池田の病状は「前ガン状態」であるといわれ、この言葉がしばらく流行したほどであったが、この言葉を発明したがんセンターの院長久留勝は「天下をあざむく作戦だ」と沈痛につぶやいた。
十二月に一応退院したが、翌年に至っても経過思わしからず、七月二十九日、東大病院に入院したが、ガンはすでに、のど、食道、肺にまで転移していた。
八月四日、手術室にはいる前に、池田はメモに書いて見せた。
「神仏と名医にすべてをまかせる。日本の国のために務めを果す」
総理大臣をやった人間は、こんな場合にもこんなことをいわなければならない。
しかし彼は、手術後、老人性術後肺炎を起した。
八月十一日、彼は秘書の伊藤昌哉の掌に何か書いた。カの字はわかったが、次に点々を打ち、次に二の字を書いて下の棒をはねあげたように感じたものの、結局伊藤にはわからず、あとで池田の娘の紀子に話すと、「それは、カエルと書こうとしたのじゃないかしら」と、いった。池田はその朝から、だだッ子のように「家に帰る」とばかりいって、医者を困らせていたのだ。伊藤は暗然とした。
強い睡眠薬を注射されて昏睡状態の三日間が過ぎて、八月十三日朝、容態が急変した。午後零時二十五分、彼は絶命した。
このあと、はじめて池田がガンであったことが発表された。伊藤はあのとき池田が書いたのは、最後まで池田が知らされなかったガンという文字ではなかったか、と思い当った。

エノケン（一九〇四——一九七〇）

小さな身体と大きな眼玉、軽快な動きと哀愁をおびた歌で日本の喜劇王といわれた榎本健一は、昭和二十七年、エノケン劇団解散の羽目におちいり、座員の退職金を作るために地方巡業に出た。
ところが広島で右足に激痛をおぼえ、立っていられないほどになったが、やっとうしろから支えてもらって舞台を

すませた。しかし、次の岩国ではそれも不可能になり、座員に抱かれたまま彼は満員の客におわびし、半失神状態で帰京して、慶応病院に入院した。
病名は特発脱疽で、膝から下を切断しなければならないと宣告されたエノケンは、そのあとガスと首吊りと、二度自殺を計ったが妻に発見されていずれも未遂に終った。
彼の脱疽は、以前舞台で孫悟空を演じたとき、天井から落ちて来る如意棒が足に当ったことが原因だったという。
エノケンの必死の嘆願で、一応切断は右足のつま先だけですますことになり、手術後彼はゴムで足型を作り、それに足をのせて再起した。
ところが、十年後の昭和三十七年、名鉄ホールに出演中ふたたび脱疽が再発し、九月、東大清水外科でついに大腿部から右足切断の手術を受ける運命におちいった。彼はまた首吊り自殺を計ったが、これも未遂に終った。
しかし彼は、以後義足をつけてみごとにカムバックした。
昭和三十九年十一月、そのエノケンが病気と税金に苦しみ、その双方をやっと克服したというので、政治家たちによって「エノケンを励ます会」がひらかれた。役者エノケンは出席して感謝した。その政治家たちは脱税の代表的集団のようなものだから、これはエノケンのいかなる喜劇も及ばぬグロテスクな催しであった。
昭和四十四年十二月の末近いある日、エノケンは夜中に突然起き上ってトンボを切って見せ、「まだおれは大丈夫だな」といったが、十二月二十九日、妻のよしゑがお正月のお飾りを買って帰宅すると、エノケンはぐったりと寝ていた。熱もあった。それから全身に黄疸症状が現われて来た。よしゑは入院をすすめたが、彼は「暮や正月には、病院も医者はいないよ」とか何とかいって、入院を承知しなかった。
しかし元旦の午後一時ごろ、彼はまた横になり、そのようすがただごとでないので、よしゑはカメラを買いたいからいっしょに見てくれといって無理に誘い出し、やっと病院に連れていった。
診察さえ終ったら彼は帰宅するつもりであったが、そのまま入院を命じられた。病名は重い肝硬変であった。
三日に、突然、「ドラが鳴るんだよ。船が来たよ、ほら、ほら！」と眼をむいてさけび出した。よしゑが驚いて、「お父さん、船なんか一人で乗っちゃだめですよ」というと、「うるせえや、早く乗れ」と、いった。
五日、苦しいかと訊いても、大丈夫？と尋ねても黙っているので、よしゑが、「病院を出たら温泉にでもゆきま

しょうか」というと、「ありがとう」といった。これがエノケンの最後の言葉となった。彼は肺炎を併発していた。七日午後二時五十分、ほとんど苦しまず、痰がちょっとからまった感じで彼は息をひきとった。

エラリー・クイーン　その1
（一九〇五――一九七一）

マンフレッド・B・リーのほうである。

一九二八年、映画会社のニューヨーク事務所に勤務していた二十三歳のマンフレッド・B・リーは、同じくニューヨークの広告会社のコピーライターをしていた同年の従兄弟（いとこ）、フレデリック・ダネイと共同で推理小説『ローマ帽の秘密』を出版した。

すなわち、アメリカ推理小説の王者エラリー・クイーンの誕生である。

そのクイーンの半身たるマンフレッド・B・リーは、晩年コネティカット州の田舎ロクスバリーの禁猟区とした六十三エーカー（約七万七千坪）の土地を持つ宏大な邸宅に、元ハリウッド女優の妻と八人の子供と住むという生活をしていたが、一九七一年四月二日金曜日、二度目の心臓発作を起し、ウォーターベリ病院へ運ばれる途中死亡した。

もう一人の半身ダネイは、なおつづけてエラリー・クイーンものを書くと宣言したが、事実上それ以後新作は発表されなくなった。また、二人の合作はどういう風に行われたのかという質問には、それは死んだ別の半身の遺言で禁じられているからといって、ついに明らかにされなかった。

六十七歳で死んだ人々

死んで不倖（ふしあわ）せになった人を、ひとりでも見たことがあるかね？

――モンテーニュ――

レオナルド・ダ・ヴィンチ
（一四五二――一五一九）

四十六歳にして「最後の晩餐」を、五十三歳にして「モナ・リザ」を描いたレオナルド・ダ・ヴィンチは、一五一七年、フランス王フランソワ一世に招かれて、王の居城の一つ、フランス領アンボワーズ郊外のクルー城に来た。王に命じられて、別に城を設計するためであった。

そのとき来訪したルイジ・ダラゴーナ卿の秘書は書いている。

「一五一七年十月十日、卿とお供のわれわれ一行は、アンボワーズのある町はずれに、いまもっともすぐれた画家、フィレンツェ人レオナルド・ダ・ヴィンチを訪問した。彼は灰色の髭をはやし、七十歳を越えている」

実際は、レオナルドはこのときまだ六十五歳であった。それどころか、彼が六十歳のころ描いたと見られる有名な自画像は、白髪白髯に覆われて、すでに、七、八十歳の老翁に見える。（もっともこの肖像画は彼が彼の父を描いたものだという説もある）

「一種の麻痺が右手を害しているので、彼に実際もうよい作品は期待できない。しかし、よく仕事の出来るミラノ人の弟子を持っている。レオナルドは、彼独特のあの豊潤さをもって絵を描くことは出来ないが、まだデッサンをして人々を教えることはできる」

この右手の麻痺は脳卒中の発作によるものであった。

ただし、レオナルドは左利きであったから、右の記述は早合点である。

二年後の一五一九年四月二十三日、彼は「王室画家であり、アンボワーズ近郊クルーに住むレオナルド・ダ・ヴィンチは、死の確かなこと、その日の不確かなことにかんが

み、次のごとき遺言状を記す」という文章にはじまる遺言状を書いた。

自分が画家である以上に科学者であると自負していた彼は、神も霊魂も信じていなかったが、「私の魂を、わが主と、光栄ある聖処女マリア、そして聖ミカエル、すべて至福なる天国の聖人聖女にゆだねる」と記したあとで、葬式の次第、埋葬地、遺産の分配、貧者への施しなど周到精密に指示した遺言状であった。

その遺産の大部分は二人の弟子に与えられた。女性美の象徴ともいうべき「モナ・リザ」を描いたレオナルドは生涯妻帯せず、その愛の対象は、たとえ精神的なものであったにせよ、同性であったといわれる。

十日後の五月二日に、彼はこの世を去った。

日本では北条早雲の歿した年。

同時代に、自分自身について彼ほど沢山の記述を残した人間はいないのに、彼の死の状況はわからない。人は自分の死について記述できないのである。墓さえ不明である。

松永弾正（一五一〇――一五七七）

かつて信長が家康に、同座している松永弾正久秀をこういって紹介し、弾正を赤面させたことがある。

「この男は、常人には出来ぬ三つのことをなしとげた。一つには主家三好家を滅ぼしてその御台を犯した。二つには将軍足利義輝どのを弑した。三つには奈良大仏殿を焼き落した。実に人間離れしたおやじでござるよ」

弾正はふだん、帷帳の中で侍女数人とたわむれながら、その帷帳から首を出して家来に用を指図したといわれる。

バテレンからも「その性酷烈奸悪にして強欲なり」と評された彼は、その特性によって戦国の世にいちどは近畿の覇者となったが、やがて彼の上をゆく天来の魔将ともいうべき織田信長の登場によってこれに屈服することを余儀なくされた。が、生来の謀叛気はやまず、天正五年、ついに信長に叛旗をひるがえし、十月十日、信貴山城に滅亡の日を迎える羽目になった。

このとき彼は、中風ふせぎのために侍臣を呼んで脳天に灸をすえさせた。今にいたって何の養生、と人が首をかしげたのに対し、彼は中風は数分後に起るかも知れぬ、それで自害しそこねては末代までの恥じゃ、といい、また、かねてから信長に執心されていた秘蔵の茶釜をとり出して、「この平蜘蛛の釜とおれの首の二つは、やわか信長に見させるものかわ」といって、釜をみじんにたたきこわし、炎

の中に焼け死んだ。

徳川吉宗（一六八四――一七五一）

徳川中興の祖とされる八代将軍吉宗は、延享二年九月、満六十一で隠居し、長子家重にあとを譲っていわゆる大御所となった。

その一カ月あと、彼は名臣とうたわれた老中松平左近将監乗邑を罷免した。それは家重が暗愚で、次男の宗武が英邁であることから、乗邑が宗武を次代将軍とすべく奔走したので、長子相続制という「神祖御定法」を守ることこそ徳川家万代のためになると考えた吉宗の忌避にふれたのであった。しかしその是非については吉宗とてもおそらく確信なく、生涯において、最後の、そして最大の煩悶事であったろう。事実家重の将軍襲職は失敗であった。

その翌年彼は重病を病んで半年ばかり寝こみ、これは一応平癒したが、五年後の宝暦元年五月ふたたび病床につき、六月二十日に死去した。病名は中風で、末期には尿の具合が悪かったというから、腎臓病か尿閉症でも併発したのであろう。

蕪村（一七一六――一七八三）

晩年京都室町綾小路に住んでいた与謝蕪村は、天明三年九月、宇治へ茸狩りにいったが、それ以来健康がすぐれなくなった。それでも十月大坂へいったが、途中淀川の夜船で冷え切ったせいか烈しい腹痛を起し、大坂で一応回復したが、帰京してからまた病床に臥してしまった。

このあたりの病状は芭蕉に似ているが――病中彼は「どうもおれは、夢は枯野をかけめぐる、といった心境にははいれない」と、門人たちに笑っていった。

十二月半ばごろからはげしい下痢がつづき、もはやだれの眼にも長くはもつまいと思われた。門人がそれとなく遺言をきくと、

「いや、別にいい残すことはない。若いころの漂泊の苦労にくらべれば、いまこうして京で医者にかかり、みなに看病してもらっているのはかえって安楽なことだ。ただ離縁されて戻っている娘のくのが心がかりだが、しかしいまさらそんなことを案じても、かえって観念の妨げになろう」

と、いった。

二十四日夜、彼の病状は和らいだかに見えたが、急に弟

子の呉春を呼んで、「病中の吟がある。書いてくれ」と、いった。

しら梅に明くる夜ばかりとなりにけり

それが蕪村の最後の句であった。まったく辞世らしくないところが、純粋に「詩」に生きた蕪村らしい。

二十五日暁に死んだ。その死をきいて、上田秋成は詠んだ。

かな書の詩人西せり東風吹て

後代芭蕉とならび称せられた蕪村の句集は、しかしほとんど散佚し、明治中期以後、正岡子規たちが苦心惨憺探索して蒐集しはじめ、ほぼ完全なものが編まれたのは大正末年に至ってのことであった。蕪村は死後百四十年近くも、俳句の世界に完全な姿では存在していなかったのである。

アダム・スミス（一七二三――一七九〇）

『国富論』を書いて古典派経済学の始祖となったアダム・スミスは、日常においてときどき変てこな放心状態におちいり、それによる滑稽なエピソードを二、三残しているほかは、ほとんど波瀾のない、まじめで、おだやかで、勤勉な学者としての生涯を過した。ただ母の手一つで育てられたため、母を愛すること深く、そのためか一生結婚しなかった。

六十一歳のとき、母が九十歳で死んだ。それ以来、みるみる彼の健康も衰えた。

このころから慢性腸疾患により、彼は次第に痩せ衰え、ときに健康をとり戻したかに見えることもあったが、一七九〇年の春になると、だれの眼にも余り長くはないと見える状態になった。

七月中旬のある日曜日、見舞いに訪れた友人に、自分の眼の前で、未定稿のノート十六冊を焼いてもらい、安心したようにいっしょに晩餐の席についたが、途中あまりに疲労がいちじるしく見えたので、友人たちが先に休んでくれというと、彼は、

「みなさん、私はみなさんといっしょにいたいのですが、もうお別れしてあの世へゆかなければなりません」

と、ユーモラスにいって寝室へ去り、ふたたび起たず、次の日曜もまたず十七日に死んだ。

彼は晩年、それまで勤めた大学や役所の俸給や年金や著書の印税で豊かな収入があり、平生何の趣味もなく質素な生活をしていたので、少なからぬ遺産があると見られていたが、死後になってそれらの大部分をひそかに慈善事業に

寄付していて、遺産はきわめて僅少なものであることが判明した。

ワシントン（一七三二――一七九九）

独立戦争の総司令官としてイギリスと戦いぬき、八年間の悪戦苦闘の末ついにアメリカを独立させ、初代大統領となったジョージ・ワシントンは、三選をみずから辞したあと、故郷マウント・ヴァーノンの荘園に隠栖したが、その後も難局に際してなんどもかつぎ出され、生涯ついに隠退することが許されなかった。

最後の年、やっと一切の公職を退き、マウント・ヴァーノンに住むことが出来たが、十二月十二日、習慣としていた乗馬の散策中みぞれに逢い、風邪をひいた。十三日の夜半、突然悪寒と呼吸困難に襲われた。医者が呼ばれ、当時万能の療法のごとくに信じられていた刺絡をこころみたが、病状はますます悪化するばかりであった。

十四日午後十時ごろ、ワシントンは秘書のリアに、「葬式はていねいにたのむよ。しかし私が死んでも、三日の間は墓に入れないでくれ。いいかね？」と、何度も念をおした。

そのあと自分で自分の脈をとってみていたが、そのうちに顔色が変り、溜息ひとつつかず、しずかに絶命した。

ポーが『早過ぎる埋葬』を書く五十年近く前、同じアメリカの初代大統領は「早過ぎる埋葬」を怖れつつこの世を去ったのである。

この年フランスではナポレオンがクーデターによって新政府樹立、みずから執政となっている。日本では寛政十一年。

川路聖謨（一八〇一――一八六八）

川路聖謨は幕末切っての名官吏であった。ただ有能であったのみならず、誠実で情愛深く、ユーモアに富んでいた。

貧しい小吏の子に生まれながら、彼は数々の幕府の要職を歴任したが、中でも有名なのは、長崎と下田におけるロシアのプチャーチンとの、日露国境と開港問題についての交渉である。

この応接ぶりにロシア側は舌を巻きながら、彼の人柄に魅せられ、その肖像画を書こうとしたのを見て、川路はロシア人に「私のような醜男を日本人の顔の代表と思われては困る」と異議を申したてて笑わせた。しかしプチャー

チンに随行していたゴンチャロフは書いている。

「川路は非常に聡明であった。彼は私達に反駁する巧妙な論法をもってその知力を示すのであったが、それでもこの人を尊敬しないわけにはゆかなかった。その一語一語が、そのまなざしの一つ一つが、その身ぶりまでが、すべて常識とウイットと炯眼と練達を示していた。明知はどこへ行っても同じである」

その川路も、安政六年五十八歳のとき、将軍継嗣問題について井伊大老の忌避にふれて閑職に追いやられた。

慶応二年、六十五歳のとき、中風にかかり半身不随となった。

明治元年三月七日、官軍の江戸に迫る跫音を聞きつつ、みずから「頑民斎」と名乗ったが三月十四日、西郷と勝との間の江戸開城の約成った翌日自決した。

左手はきかないので、右手だけで作法通り腹を切り、次に拳銃でのどを撃った。日本における拳銃自殺の第一号ではあるまいか。

彼は要職を歴任したとはいうものの、べつに閣老に列したわけでもなく、かつ生涯柔軟諧謔の性格を失わなかったのに、みごとに幕府と武士道に殉じたのである。徳川武士の最後の花ともいうべき凄絶な死にかたであった。

デュマ（一八〇二——一八七〇）

『モンテ・クリスト伯』『三銃士』をはじめ、一生に二百五十七篇の小説と二十五巻の戯曲を書くという、天馬空をゆく空想力と絶倫の精力を持ち、宮殿のような大邸宅の生活や無数の愛人に湯水のごとく金を浪費した大デュマ——アレクサンドル・デュマは、晩年はたと創作力と人気を失った。

四十年にわたる執筆生活ののち、彼は肉体的には何の衰えもないのに、彼にものを書かせる力が、機械が停止したようにとまってしまったことを知った。しかも彼にあるのは借金の山だけであった。

彼はやむなく商店の広告文を書いたり、料理の本を書いたりしたが、生活に困窮して息子の小デュマ——『椿姫』の作者——に養ってもらうよりほかはなくなった。

一八七〇年の秋になると、身体の具合も悪くなり、尿の排泄が困難になり、全身にむくみが出て来た。腎臓が悪くなったのであろう。

そのころ女中が、彼の古洋服を簞笥にしまいこもうとしていて、ポケットからナポレオン金貨が一枚出て来たのを

見て、大デュマは小デュマに笑っていった。

「五十年前、おれが田舎からパリに出て来たとき持っていたのが、それくらいの金だった。おれを浪費家というやつがあるが、おれは一文も減らさなかったよ」

病状が進んだある日、彼はいった。

「金も名誉も得たころ、ユゴーが、これからは君も後世に残る作品を書け、といったが、おれはその忠告に従わなかったことが残念だ。……おれの作品は美味過ぎて、すぐに排泄されて忘れられたのだ」

「そんなことはありませんよ。『三銃士』や『モンテ・クリスト伯』をだれが忘れられるものですか」

と、小デュマはいった。大デュマは疑わしそうにいった。

「お前はほんとうにあんなものが面白いと思っているのかね」

「そうですとも、あれはもう古典ですよ」

「おれはそうは思わないが、しかしお前がそういうなら、おれも読んでおけばよかった」

小デュマは唖然とした。大デュマは笑いながらいった。

「読むか、書くか。おれは両方やるひまがなかったから、書くほうにまわって、読むのは読者にまかせたんだ」

「わかりました。しかしいまは充分読む時間がありますよ」

と、小デュマはいって、すぐに両腕に父の小説を山ほど運んで来た。

大デュマは『モンテ・クリスト伯』を読みはじめたが、やがていった。

「なるほど面白い。たしかに傑作だ。……しかし、結末を見とどけるまでおれは生きておれそうにないよ」

一生いたずら好きであった大デュマの最後のいたずらであった。

彼はそのまま眠りこみ、二度と眼をさますことはなかった。眠ったまま卒中発作を起し、時あたかも普仏戦争中で、遠くプロシヤ軍の大砲の聞える中で、十二月五日に死んだ。

（ガイ・エンドア『パリの王様』河盛好蔵訳より要約）

福沢諭吉（一八三四——一九〇一）

身長百七十三センチ、体重六十七・五キロという、当時としては並以上に立派な体格を持っていた福沢諭吉は、晩年になっても毎日六キロを歩くのを常とした。万歩運動の開祖である。股引きに尻端折り、鳥打帽に竹の杖をつき、わらじをはいたこの散歩に、毎朝慶応の学生たちが群をな

してお供をした。

それほど健康に留意した福沢であったが、六十四歳の明治三十一年九月二十一日、軽い脳溢血を起し、年末に至って、一応回復したが、その後もの忘れがひどくなった。

三十四年一月二十五日朝、知人の木村芥舟が訪問した。木村はかつて摂津守と称し、幕末咸臨丸の提督として、勝安房、福沢らをひきいてアメリカへ渡った人である。訪れた木村と福沢は「瘠我慢の説」を話題にした。それはこの一月一日から三日にわたって「時事新報」に福沢が公表した、維新後における勝海舟と榎本武揚の進退を弾劾した文章であった。

福沢の談論動作は活潑で何の異常もなく、また「このごろは魚肉は一切やめ、粥に野菜、それに毎日つとめて牛乳二合のんでいます」など語った。

客が去ったあと、その日も彼は平常のように三田の邸内を散歩し、午後はまた広尾の別邸まで徒歩で往復した。しかし夜八時ごろ便所にはいったところ脳溢血が再発し、左下肢が麻痺し、言語の渋滞を来たした。

そして、九日後の二月三日午後十時五十分に死んだ。

彼はかねがね「自分が死んだとき湯灌などするに及ばぬ。衣服もとりかえるに及ばぬ。そのまま棺に納めてもらいたい」といっていたので、その通りにした。また「死顔を人に見せることはいやだ」といっていたので、その死顔を見たのは近親の者、四、五人だけであった。

二月八日の麻布善福寺の葬儀には、会葬者一万五千人に及んだ。

屍体は、底にキビの葉をしき、内部に銅板を張ったケヤキの棺に納められて、そのまま埋葬されたが、七十六年後の昭和五十二年発掘されたとき、屍蝋化していてなお生前の面影を保っていることが判明した。しかし、「死顔を見せるな」といったくらいの諭吉だから、この発掘はさぞ不本意であったろう。

——功利主義者という評もあった福沢諭吉だが、晩年こんな言葉も残している。

「……宇宙無辺の考を以て独り自から観ずれば、日月も小なり地球も微なり。況して人間の如き、無智無力見る影もなき蛆虫同様の小動物にして、石火電光の瞬間、偶然この世に呼吸眠食し、喜怒哀楽の一夢中、忽ち消えて痕なきのみ」（『福翁百話』）

また彼は、日清戦争のとき一万円を献金したので、政府から勲章の話があるときいて、「そんなものはごめんこうむる。もし勲章をくれるなら、維新以来政府の師匠格であったという働きに対して勲章をもらいたい」と、一笑した。

そして政治家や軍人が争って勲章をもらう中に、彼は無勲のまま死んだ。

八十三年後の昭和五十九年、彼の肖像は一万円札になったが、彼が知ったら立腹するだろう。千円札の漱石に至っては、いうもおろかなりである。

最もこういうことをきらいそうな人間を、そろいもそろってよく紙幣の肖像に使ったものだが、人間死ねば生きているやつに何をされても無抵抗である。

セザンヌ（一八三九——一九〇六）

セザンヌは若いころ官立美術学校にも落第し、その後も、二十世紀の新しい絵画の誕生を告げるその独創性のために官展にも入選することは稀で、ほとんど生涯を通じて一般には認められなかった。

最後の六年間は、彼の愛する故郷、南フランスのエークス・アン・プロヴァンスにアトリエを作り、孤独の中に、ただ教会にかよい、カンヴァスに向うだけの修道僧のように素朴で単純な日々を送った。

彼は他人に拘束されることを極端にきらい、何かのはずみで親しくなった者がちょっとでもなれなれしくすると、たちまち拒否反応を起して絶交した。晩年の数年、突然彼の絵が世に認められはじめ、その値段が高騰していることを聞いても、彼は疑わしげに「なんか策略じゃないかね」といった。

彼は大きな頑健な肉体の持主であったが、晩年はひどい糖尿病に悩まされていた。

一九〇六年十月のある霧の朝、故郷のサント・ヴィクトール山を描くためにカンヴァスに向っていたセザンヌはずぶぬれになり、その日から肺炎の高熱を発して、二十二日に死んだ。彼はかねてから「私は絵を描きながら死にたいんだ。……」といっていたが、その通りになった。

キュリー夫人（一八六七——一九三四）

一九〇三年、三十六歳のとき、ラジウムの発見によって夫ピエール・キュリーとともにノーベル物理学賞を、一九一一年、四十四歳のとき、単独でラジウムの分離に成功し（夫は一九〇六年、馬車に轢かれるという事故で死んでいた）ノーベル化学賞を受けたマダム・キュリーは、死ぬ年のはじめごろから身体不調を訴えるようになった。疲労し易く、

微熱に苦しんだ。
しかし、彼女は医者にかかることをきらった。ただの医者ぎらいではなく、マダム・キュリーを尊敬する医者は一人も金を受けとらず、それが彼女を当惑させるからだった。とはいえ、たとえ町医者が彼女を診察したとしても、その病名を当時診断出来る者はほとんどなかったであろう。
五月、彼女はついに病床についたが、高熱がつづくのに、レントゲン写真をとっても、器官のすべてに異常はなく、名医たちも首をかしげるばかりだった。
病名不明のまま、清澄なサンセルモス療養所に移されたとき、彼女は娘のエーヴと看護婦の腕の中に、気を失って倒れたくらいだった。ここで血液検査の結果、白血球も赤血球も異常に減少していることが、はじめて発見された。しかし治療の方法はなかった。マダム・キュリーは、彼女が多年手がけていたラジウムの放射能のため白血病に冒されていたのである。
そして、七月三日午後、「……各章のパラグラフは、みんな同じようにしなければいけませんね。……」とか、「これはラジウムで作ったのですか？　それともメゾトリウムで作ったのですか？」とか、うわごとをいい、注射に来た医者に、弱々しく、「いやです、かまわないで下さい」とさけんだあと、昏睡におちいった。
しかし彼女はなお十六時間生きつづけ、山々を染めた薔薇色の朝の光が病室にさしこんで来た翌朝、やっと心臓が停止した。

岡本綺堂（一八七二――一九三九）

『修禅寺物語』『鳥辺山心中』『番町皿屋敷』『権三と助十』などの戯曲を残したほかに、最初にして最高の捕物帳『半七捕物帳』を書いた岡本綺堂は、生来蒲柳の質であった。一メートル六十七センチくらいの身長を持ちながら、体重は四十五キロを超えたことがないという痩軀であった。そして実際一生絶えず、胃腸病、腎臓病、心臓病、歯痛、頭痛、不眠症等に悩まされつづけた。
従って病気には神経質であったが、不時の災害に対しても慎重であった。たとえば市中のバスに乗らなかった。電車と衝突したらバスのほうが負けるからだ。エレベーターに乗らなかった。もし鎖が切れたらふせぎようがないからというのだ。横町や小路を通らなかった。遠廻りしても大道を歩く。家の軒下などを歩いていて、上から瓦が落ちてきたらどうするか、昔の武士はそれくらいに用心をしたも

のだ、と彼はいった。
病弱でありながら、彼が比較的多くの仕事をしたのは、勝負事は一切きらい、スポーツ、映画にも興味がない、犬猫を飼う趣味もない、交際も栄達も求めない、ただ書斎に籠ってコツコツと仕事をしているのが何より愉しいという彼の性格と生活のおかげであった。
その綺堂も、目黒の家で静かな死を迎える日が来た。昭和十四年三月一日のことであった。
「その日も朝から雨催いの、春には遠い底冷えのする寒さであった。庭の寒菊も霜に伏したままで、軒先の猫柳もまだ芽を吹かなかった。
近来しきりに頽老を嘆じていた綺堂は、前年の十月から慢性の気管支炎が悪化して、肺浸潤を宣告されていた。
老年の有難さには、今更肺を煩ったとて驚くこともない。ただ絶対安静を云いつけられたので、本も読めないのが情ない位のものだ。そういって笑ってはいたが、書斎の机から離れるのが淋しくて、病床の脇に置く机を求めたりした。

昼もねて聞くや師走の風の音　　綺堂

新年に入ってから漸く快方に向ったが、この冬は生憎に寒さが厳しく雪が多かった。その雪あたりで一月十八日から下痢が二、三日続き、いつもの食欲不振、不眠症に心臓の衰弱が加わり、二十三日には重態に陥った。
二月十二日には危篤状態に陥った。そして十七日甚だしい呼吸困難の発作が起った後は、全身の疲労衰弱が更に著しくなって、酸素吸入もリンゲルの注射も効果は見えなかった。後に思えば、綺堂はすでに死期の迫っていることを覚悟していたようである。まあ、出来るだけやってみるさ。何にも無理を云わず、医者任せ、看護婦任せで、何の執着もなかった。傍の者の労をねぎらって、息苦しい中から冗談をいったりした。
意識の明瞭なこと、気力の衰えぬこと、これを唯一の頼みにして、みんな奇蹟を信じていたけれども、定命のともしびの消えかかるものを防ぎ止むる術はなかった。
三月一日の夜明け前、門下代表の額田六福を枕許に招いて、ただ看護の礼と後を頼むという言葉だけで、殊更の遺言も感想ももらさなかった。こんこんと深い眠りにおちてふたたび眼を開かなかった。遠間の静かな息が長く尾を引いて消えて無くなったのは、真昼の零時二十分である。例の少し唇を曲げて含み笑いをするような白皙の顔に、死の苦渋は見られなかった。
妻の栄女がそっと起って別間に入った。嗚咽の声が長く

洩れて聞えた。

　真昼の郊外はただ静かであった。やわらかい薄日が縁側からさしこんで、床の間に飾った綺堂好みの雛祭人形に白々しく影を落していた」（岡本経一『綺堂年代記』より要約）

　なお大正六年にはじまった『半七捕物帳』は、その六十八篇目『二人女房』が昭和十一年に発表されたのを最後としている。

河上　肇（一八七九——一九四六）

　河上が共産党員なるがために投獄され、五年の刑期を満了し、五十八歳で出獄してから四年目に、日本は太平洋戦争に突入した。

　戦争が終ったとき、戦争に反対した河上も老化と飢餓のために病床にあった。

「大きなる饅頭蒸してほほばりて茶をのむ時もやがて来るらん」「死ぬる日と饅頭らくに買へる日と二ついづれか先に来るらん」「もしも天われに許さば蒸したての熱き饅頭たべて死にたし」

　敗戦の日に「あなうれしとにもかくにも生きのびて戦やめるけふの日にあふ」と歓喜の歌を詠んだ彼は、日本の敗戦を心からよろこぶ権利を持つきわめて少数の日本人の一人であった。しかしその彼も、たちまち「今ははや再び起たむ望みなしいざや静かに死を迎へなむ」と悲しみの歌を詠まなければならなかった。

　その年の秋、彼は知人への手紙に書く。

「……お目にかかった当時と違い、今ではすっかり老衰の境に追いこまれ、辛うじて最後の一線に踏み留っている処です。食糧がいよ〳〵不自由になり、四人世帯で二日目に鼠のシッポのような大根一つ、おろして小皿にやっと一杯、それが六度分の副食物ですが、それすらない日があり、自家耕作の体力も空地もなく、買出しにゆく人手もなく、法外の闇を漁る金力もなき老生如きは、餓死の外ないのですが。……」

「なんでも書ける世の中になり乍らなんにもよう書かぬ老耄さ残念ですが致し方ありません。……」

　そして翌年一月三十日、肺炎を併発した河上は、洛東の小屋で清らかな息をひっそりとひきとった。直接の死因は肺炎だが、河上は、栄養失調死というより餓死をとげたといってもいい。同じ日、右翼狂信の学者蓑田胸喜もくびれて死んだのは一奇というべきである。

寺内寿一（一八七九——一九四六）

　昭和十九年十月二十日、米軍がレイテに上陸したとき、マニラにあった南方軍総司令官寺内寿一は、レイテ戦は不利とする山下奉文の意見を斥け、強いてレイテ決戦を命じて死地に追いやり、みずからは十一月十七日仏印サイゴンに逃避した。

　越えて昭和二十年にはいると、ビルマ方面の敵も総反攻に移り、四月、日本軍は崩壊状態におちいったが、その四月十日、ダラット（サイゴン近郊の避暑地）の総司令部にあった寺内は軽い脳溢血症状を起し、以後びっこをひくようになった。

　八月十五日の敗戦の後、九月十二日シンガポールで降伏式が行われた。寺内は病気を盾に、板垣征四郎大将を代理にやったが、十一月三十日、連合軍総司令官マウントバッテンとの会見には応じ、家宝の来国俊の日本刀をさし出した。この刀は戦利品として、いまもロンドン塔に飾られている。

　昭和二十一年三月、寺内以下総司令部はシンガポールに移ることを命じられ、寺内は少数の副官とともにシンガポール北方約六十キロのレンガムのゴム園にある荒廃した元管理人宿舎に軟禁された。

　六月十一日は、とりわけて暑い日であった。暑がりやの寺内は朝から少しふきげんであったが、昼食はコンビーフを入れた塩辛いまぜ飯を三杯も食い、あとでしきりに冷たい水を飲んだ。そして、「もうこの家は飽きたよ。どこかへゆこう」と妙なことをいい出し、副官たちをぎょっとさせた。

　もともと陸軍長閥の御大寺内正毅元帥の長男に生まれ、お坊ちゃん的なわがままさを持っていた寿一だが、この絶望的な事態に、ふとまた幼児返りをしたものであろうか。

　午後は日課の昼寝をした。

　午後七時の夕食後、紅茶をのみながら寺内は、物凄い——副官たちが、咽喉神経が麻痺したのではないかと思ったほどの——烈しい咳を十何回かした。

　九時半ごろ彼は床についたが、十時半に目覚め、「もう夜が明けたのか」と訊いた。当番兵が、「これは月の出であります」と答えた。寺内はしきりに、「今夜は暑いなあ」とつぶやいた。

　——彼は少年時、高等師範の附属中学で、同窓の軟派生徒永井壮吉に鉄拳制裁を加えたことがあるが、その永井壮

吉は永井荷風となり、この昭和二十一年六月十一日、嬉々飄々として新小岩の私娼窟を散歩している。

一方、かつて大阪師団長としての「ゴーストップ事件」、陸軍大臣としての「切腹問答」等で、陸軍の横紙破りをいかんなく発揮した寺内は、最後に総司令官として敵将に軍刀をさし出し捕虜となるという大恥辱をなめなければならなかったのである。

翌十二日午前三時ごろ、当番兵が、寺内が異常状態におちいったのに気がついて、副官や軍医を呼びに走った。強心剤の注射や人工呼吸の結果、寺内はいちど眼をひらき、ハーと声を出したが、以後次第に手足が冷え、脈搏が弱まり、三時四十分に、心音がとまった。

軍医は脳溢血の診断を下した。夜半ごろまで月明だった空はいつのまにか曇って、このときゴム園に大雷雨をそそいでいた。

永野修身（一八八〇――一九四七）

太平洋戦争開戦時、海軍軍令部長として「いま開戦せねば、戦機を逸する」として開戦に踏み切らせた永野は、敗戦とともにA級戦犯となった。

海軍の主戦論者として、日本側からみれば問題のある永野だが、しかし東京裁判に証人として出廷した前アメリカ太平洋艦隊司令長官リチャードソン提督は、真珠湾攻撃に関して、

「あのような雄大な作戦を完全な秘密裡に遂行したことに対し、被告永野提督に、同じ海軍軍人として敬意を表する、と伝えて欲しい」

と、米軍憲兵隊長に伝言を託して去った。

無謀とも思われる真珠湾奇襲は、山本五十六が発想し、永野が許可したものだが、プロとしてリチャードソンは感服したのである。永野もって瞑すべし。

その東京裁判で、永野は居眠りばかりしていたが、昭和二十二年一月五日に急死した。

報を聞いて永野の家族が、指定されたアメリカの陸軍病院にゆくと、シーツにくるんだ永野元帥の遺体がベッドに置かれていて、アメリカの軍医が、死因は、肺炎、肺結核第二期、狭心症だといい、遺骸はひき渡さない、といった。そこで、裁判の結果はまだ出ていない、まだ罪人ではないと強く申しいれたところ、アメリカ側はやっと遺骸引渡しに応じた。

義弟の家に運ばれた屍体のシーツをとって、一同は眼を

見張った。元帥の身体は解剖されたあとが歴然としていた。

安井曾太郎（一八八八――一九五五）

昭和三十年十一月半ばから、洋画家安井曾太郎は、美術家連盟の年末助け合い展覧会に出品する仕事にとりかかった。それは湯河原の自宅のアトリエから庭に出て、湯河原町のほうを見た風景画で、彼は庭にゴザをしき、画架を立ててその仕事に没頭したが、そのために風邪をひいて、十二月三日にはついに床についた。

安井はもともと肺も弱く心臓も弱い蒲柳の質であった。

しかし彼はその絵はどうしても仕上げなければならないといい、七日には床を離れたが、八日にはまた床についた。そして九日に、せめて一時間でもといって画架に向い、とうとう夕方まで仕事をつづけてしまった。その筆をおいたとき、彼はもう立ちあがる元気もない状態にあった。「まだ書き足りないけれど、これ以上どうしようもない」と、彼はいった。それは「秋の山」と題する彼の最後の作品となった。

十日からまた彼は床につき、肺炎と診断された。呼吸困難で、横になっても仰向けになっても、身の置きどころもないほど苦しんだ。

そして十二月十四日午後五時二十五分、彼は息をひきとった。

橋本欣五郎（一八九〇――一九五七）

満州事変から日中事変ごろにかけ、国家改造を志す革新青年将校の指導者として、いわゆる「桜会」を結成し、「三月事件」「十月事件」などのクーデターを計画し、日中事変中は砲兵大佐として英国軍艦レディバードを砲撃したりした橋本欣五郎は、この事件によって退役した後、大政翼賛会壮年団本部長などになって活躍した。

彼自身は愛国者のつもりの、熱血の快男児であったが、やはり日本を大破滅にみちびいたいわゆる「戦犯」の一人たる烙印は、だれよりも甘んじてひたいに受けなければならない。

事実彼はA級戦犯として捕えられたが、他の戦犯のだれよりも元気がよく、同房の外交官白鳥敏夫をカンシャクを起して殴打するような「熱血」を失わなかった。そして終身禁固の刑を受けたが、昭和三十年九月、巣鴨拘置所を出所した。

彼自身はおのれの過去の行為にまったく恥じるところなく、また時勢の変化にも盲目で、翌三十一年七月の参院全国区選挙に立候補したが、もののみごとに惨敗した。

　この選挙運動中から、咳、痰、声の異常を自覚していたが、ついに肺ガンの診断を受け、十二月に入院した。翌年になると彼は、「胸の上と下から生花の剣山で刺されているようだ」と悲鳴をあげたほど苦しむようになった。

　彼が熱愛した二度目の妻は彼の入獄中乳ガンで死に、出獄直後結婚した三度目の妻は彼と四十ちかい年齢差があり、臨終前に離婚を申し出て去った。子供もない彼は天涯孤独となった。

「死も寂し生くるも寂し寂しさの果つべくもなく老いてゆくなり」

「世にのこる人の歴史はおしなべて末路かなしきものとこそ知れ」

　この「風雲児」の晩年の歌である。

　昭和三十二年六月二十九日午後零時四十分に死んだ。彼は大変なヘビイスモーカーで、死の三十分前に「富士」を一本のませてもらい、「うまいなあ」といった。

河野一郎（一八九八——一九六五）

　昭和四十年当時日ソ貿易代表社長、柴野安三郎の談によれば、河野は北海道の八紘園という農業学園にゆき、三十頭ほどのトンコ（馬の種類）を見ていたが、柴野に「おい、あれを二、三頭もらってくれ」といった。経営者の栗林元治郎に申しこむと栗林は、「代議士ってやつは、何でもただでもらうことばかり考えている。寄附はいやだよ」といった。すると河野は「皇太子にやるんだといってくれ」といって、とうとう強引に二頭を送らせる約束をとりつけた。これが河野が死ぬ四日前の話であった。（加瀬英明『河野洋平にあえて問う』）

　昭和四十年七月七日の朝十時ごろ、河野は腹部の痛みを訴えたが、近所の医者の診断では、ギックリ腰による神経痛だろうということで、上目黒の自邸で寝ていた。しかし夕方の六時半ごろ、激痛のため意識を失った。腹部大動脈瘤が破裂したのであった。

　武見太郎、沖中重雄をはじめ医学界の大家たちが続々と呼ばれた。武見は語る。「診断の結果、大動脈瘤が破裂して腎臓に血が流れ出していた。腎臓には強い皮がかぶさっているが、血はその皮の内側に出て、腎臓を外から圧迫していた。それで腎臓の実質が小さくなって小便も出ない。ものすごく腰が痛いわけだ」

　相談の結果、心臓の権威榊原仟教授が九州の学会から急遽河野家がチャーターした日航機で呼び戻されることになった。榊原は、大型旅客機ＤＣ６Ｂ型一機に一人で乗せられて東京に帰って来た。

　翌八日の午後三時半ごろ、いちど意識が回復したとき、河野は夫人に、「これはいったいどうしたことだ。驚きましたネ」と冗談をいい、また、「こんなことで死んでたまるか」といった。それは天下をとる目的のためには手段をえらばない、と目された男が、その目的をとげる前に倒れたことに対する無念の言葉とも聞えた。

　午後四時四十分、ふたたび大動脈瘤から大出血がはじまって、天井をにらんでいた眼の光が徐々に弱まり、やがて肉の厚い瞼が重みにたえられないかのように閉じられ、彼はまた人事不省におちいった。そして榊原博士らの人工呼吸、心臓マッサージなどの手当もむなしく、午後七時二十五分に絶命した。

　このとき武見太郎は「河野先生はおかくれになりました」と記者団に発表した。記者の一人は邸内で黒い服を着た男に呼びとめられ、素性を訊くとその男は「児玉の者だ」といった。

　彼の急死は、時の首相佐藤栄作にとって、怖るべき時限爆弾が除去されたことを意味した。佐藤が強運の人であるといわれた理由の一つである。そしてまた「世界で私のきらいな人間が三人ある。韓国の李承晩と、インドネシアのスカルノと、日本の河野一郎だ」といった吉田茂も（吉田五十八談）ニヤリとしたに相違ない。

壺井栄（一九〇〇——一九六七）

『二十四の瞳』で知られる作家壺井栄は喘息の持病があり、大学病院でステロイド・ホルモンによる治療を受けた。以来彼女は、発作が起ると、自分で町の薬局からステロイド・ホルモンを買って来て連用したために、その副作用で、高血圧、低血糖、そして副腎萎縮によるむくみをひき起した。

　昭和四十二年六月二十一日の夜、またも喘息の発作がとまらず、ゆかた姿のままで病院にかつぎこまれ、手当を受けたが、途中彼女は苦しみのあまり「死にたい」とか「わたし、もう疲れたわ」とかつぶやいた。翌日の夜十時半、

息をひきとった。
最後の病床をみとった親友の作家佐多稲子は弔辞を読んだ。
「……あなたの臨終を見まもる激しい不安のとき、あなたの生涯を一瞬におもい浮かべるのは悲しいことでした。そこには私自身の姿もあったのです。……この数年、あなたに安らかなときの少なかっただけに、あなたの最後の苦痛を見守っていて、ただ見守るしかなかったことが私は悲しゅうございました。が、あなたの命のたたかいが終ったとき、あなたはまったく美しいほど平静なおもかげに戻っていられました」

平林(ひらばやし)たい子(こ)（一九〇五――一九七二）

平林たい子は若いときから多病で、しかもいわゆる人民戦線事件などで投獄されたりして、いくども絶望的な闘病生活に追いこまれたが、その間、食べたいものがあると、春先に梨を要求するなどして、貧しい夫の小堀甚二を悩ませた。たまりかねて小堀が悲鳴をあげると、病床のたい子は切口上でいった。
「人は病気になったら、治る権利があるわ。だから欲しいものは何でも要求するわ。でも、それを受けいれるかどうかは、あなたの自由よ」
これほど生命力の強いたい子は、ついに病気を克服し、戦後超人的な執筆活動を開始した。
外見では肥満体の彼女は、同時に闘志のかたまりのようで、ほかの文士を「とかくメダカは群(む)れたがる」と揶揄(やゆ)して物議をかもした。
が、彼女と半生愛憎をともにした夫で、そのために別れるとき彼女らしいどぎつい仕打ちで苦しめてやった小堀甚二が、昭和三十四年不遇のうちに死亡したころから、彼女の多病がまたぶり返しはじめた。
三十五年には高血圧のため原稿の口述筆記さえ出来なくなり、三十六年春には鎖骨カリエスになって入院した。その年の秋には心臓喘息で入院し、三十七年には糖尿病の診断を受けた。三十九年以後二度乳ガンにかかり両乳房を切除し、四十三年には高血圧で眼底出血し、以来悪化しあと一年もすれば失明状態になると宣告された。さらに肝硬変もすすんだ。
この状態でしかしたい子は、何度か外国旅行をし、一見精力的な執筆をつづけた。若いころのたい子は、病人としては医者のいうことをよく守る模範生であったが、晩年の

たい子は、残る余生を『林芙美子』『宮本百合子』などの執筆に燃やしつくすことを怖れなかったように見える。
昭和四十七年一月、彼女はふとした風邪から肺炎をひき起し、二月五日昏睡状態におちいって病院にかつぎこまれた。薬漬けのような彼女の肥満体は抗生物質も効かず、病状は一進一退した。途中意識がはっきりしたとき、医者に「私にはやるべき仕事がまだ残っているんです。まだ死ねません、先生、助けて下さい」と訴えたが、二月十七日午前五時四十分に死去した。

花森安治(はなもりやすじ)（一九一一――一九七八）

昭和二十三年、三十七歳のとき「暮しの手帖」という独創的な雑誌を生み出した花森安治は、五十八のとき最初の心臓発作を起し、それ以来煙草を断ち、糖分を控え、高血圧と心臓病に挟撃されながら働いた。しかし、美食癖と健啖ぶりはどうにもならなかった。
昭和五十二年十一月、みずから八ミリカメラを持って隅田川から荒川へ撮影に出かけて風邪をひき、それをこじらせて入院する羽目になった。
翌五十三年の正月は南麻布の自宅で過すことが出来るようになり、一月十三日の夜も居間でくつろいでいたが、突然心臓発作を起し、夫人に背中をなでさすってもらっているうち、痛みは去った。が、十四日午前一時過ぎ、先に寝た夫人がふたたび居間をのぞいてみると、彼はソファの上で死んでいた。
告別式は彼の意を体して、暮しの手帖研究室で、デスクに白布をかけただけの祭壇に、遺影と骨壺のみが安置され、花で埋められたほかには、線香も榊(さかき)も神父の影もなかった。そして社の花森の部屋は、その後も、机、椅子、すべて花森生前のままにして、「いつ彼が帰ってきてもいいように」鉛筆も削ったままにしてならべられた。

イングリッド・バーグマン（一九一五――一九八二）

映画「カサブランカ」「ガス燈」「誰(た)がために鐘は鳴る」など、気品にみちた知性的な美貌で、戦後の日本人にも数多くの讃美者を生んだスウェーデン生まれのイングリッド・バーグマンは、一九七四年、五十九歳のとき、ニューヨークで芝居に出演中、偶然新聞で乳ガンについての記事を見た。

「わたしも新聞の記事を読みながら無意識のうちに胸にさわっていた。やがて手がぴたりと止まった。ああ、まさか！　わたしに限ってそんなはずはない！」

と、彼女は自伝『マイ・ストーリー』で書く。乳房にシコリがあったのだ。

しかし、医者にかかるのはきらいで、芝居が終って、数カ月ののち、ロンドンで手術を受け、一方の乳房を切除された。そのあと、放射線治療をつづけながら、アガサ・クリスティー原作の「オリエント急行殺人事件」に出演して、オスカー賞を受賞した。

四年後の一九七八年、祖国を共にする名監督ベルイマンが演出し、彼女の最高作といわれる「秋のソナタ」の撮影がほぼ終ってから、二度目の手術を受ける羽目になり、もう一方の乳房も切除された。

さらに四年後の一九八二年一月、テレビ映画「ゴルダという女」で、ガンと十二年間闘って死んだイスラエルの元首相ゴルダ・メイアに扮して出演したときは、もうメーキャップもいらないほどの衰弱ぶりを見せていた。

彼女は自伝の終りに書く。「わたしはかねがね命あるかぎりいつまでも演技を続けようと思っていた。……わたしは生涯の終りにあっても、いつでも演技をする用意だけはできている」

そしてバーグマンは、その年の八月二十九日、ちょうど六十七歳の誕生日に、ロンドンの自邸で死去した。彼女は三度結婚したが、死ぬときは独身であった。

インディラ・ガンジー（一九一七――一九八四）

昭和二十四年、敗戦後で動物園に象のいない日本へ、インドの初代首相ネールは、自分の娘と同じくインディラと名づけた象をプレゼントしてくれ、日本の子供たちをよろこばせた。

そのほんもののインディラは、のちにインドで「ネール・ガンジー王朝」の鉄の女帝と呼ばれ、「私こそインドである」と宣言する強烈なカリスマ性を持つ首相となったが、彼女をはじめヒンズー教徒が大部分を占めるインドで、北部のパンジャブ州の分離独立をさけぶシーク教徒を弾圧し、一九八四年六月、パンジャブ州アムリツアルにあるシーク教徒の総本山ゴールデン・テンプルを軍隊をもって攻撃し、指導者ビンドランワレ師ら三百人以上を掃蕩した。

その年の十一月三十一日午前九時二十分ごろ、首都ニューデリー、サフダルジャン通り一番地の私邸から、ビデオ撮影のため隣接する官邸へ向う途中、ブーゲンビリアの茂みのかげで両側に立っていた二人の護衛警官を見て、彼女はインド式に両掌を合わせ、「おはよう！」とにこやかに声をかけた。

そのとき、応礼するかに見えた二人の警官は彼女めがけてピストルと自動小銃を発射した。

ガンジー首相は悲鳴をあげて倒れ、まとっていた黄色いサリーは一瞬に鮮血に染まった。すぐに病院に運ばれたが、彼女を蜂の巣のようにした弾丸の中の一発は心臓をつらぬいており、ほとんど即死の状態であった。

犯人の二人の警官は、一人はその場で射殺され、一人は重傷を受けて逮捕されたが、このとき彼は、「おれはやるべきことをやった。あとは好きなようにしろ」といった。「やるべきことをやった」とは、ゴールデン・テンプル事件の復讐の意味であった。彼らはガンジーが永年最も信頼していたボディガードであったが、両人ともシーク教徒だったのである。

その日から全インドは、シーク教徒狩りの嵐が荒れ狂い、三千人以上のシーク教徒が惨殺された。ガンジー首相の遺灰は、彼女の生前の遺言により、飛行機からヒマラヤの山にまきちらされた。

六十八歳で死んだ人々

生は有限の道づれ旅
死は無限のひとり旅
――山田風太郎――

大伴家持（おおとものやかもち）（七一七――七八五）

大伴家持は延暦四年、持節征東将軍として、仙台に近い任地の多賀城でこの世を去った。

彼の死後一カ月ほどして、都の長岡城で藤原の一門藤原種継（たねつぐ）の暗殺事件が起り、その首謀者として大伴一族の継人（つぐと）らが捕えられ、陰謀の嫌疑はすでにこの世にない家持にまで及び、彼は官位を奪われ、私財は没収された。

その没収された遺品の中に、彼が選んだ先人の歌及び彼

自身の歌を集めた厖大な歌集の草稿があった。これがすなわち『万葉集』であった。

北条政子（一一五七―一二二五）

頼朝と政子の間には、二男二女があった。

政子は四十歳のとき、十九歳の長女大姫を失った。その翌々年、夫の頼朝と次女乙姫を失った。四十七歳のとき、長男頼家を自分の父時政のために殺された。そして六十二歳のとき、次男の実朝も、頼家の子公暁のために殺された。

夫と子のすべてを失った政子は、いわゆる尼将軍となる。そして、六十八歳の嘉禄元年五月二十九日から病み、加持祈禱が繰返されたが、六月十六日、二十一日と二回失神し、七月十一日この世を去った。藤原定家の日記『明月記』に「不食の疾」とあるが、正確な病名は不明。

血で血を洗う一族の内乱に、若いころからの自分の労苦、夫や子を失った悲しみなど、「何の命のながらえて、かかる浮身のむくいに、重ねてものを歎くらん」とめんめんと述べる人間味のあった政子である。死に臨んで、わが人生すべて空という哀傷にとらえられたろうか。

それとも六十四歳のときのいわゆる「承久の乱」に、後鳥羽上皇に対して「非義の綸旨」という言葉を投げつけ、麾下の鎌倉武士を断乎として京へ駈け向わせたほど剛毅な政子である。哀傷の念などめめしい感情はつゆほどもなく息をひきとったろうか。

新井白石（一六五七―一七二五）

たまたま儒臣として仕えた甲府中納言綱豊卿が六代将軍家宣となるや、その政治顧問として白石は政治の改革に全智能をかたむけた。

しかし、博識と自信に加えて、その近代性、合理性、徹底性、独創性は、当時においてのみならず徳川時代を通じて稀有のものであり、むしろ日本人離れしているともいうべき異質性を持っていた。当然彼は孤立の戦いを戦わねばならなかった。

不幸なことに、ただひとり彼を信任した家宣は、将軍たることわずか三年余で歿した。その幼児家継もまた三年余で死んだ。果然、白石は排斥の嵐の中に立った。

「万里の江流片月孤なり
南に飛ぶ雁は白雲と倶にす

当時滄浪の曲有るにあらずんば
憔悴誰か憐れまん楚の大夫」

八代将軍吉宗が立ち、完全に彼が失脚した享保元年ごろのみずからの心境を語る詩である。ときに彼は五十九歳であった。

楚の大夫とは、楚に仕え、あまりに率直な正論を吐いたために追放され、汨羅の淵に身を投じた屈原のことである。

彼はそれから身をひいて、孤独な生活の中にただ学問的な著作にふけった。吉宗が朝鮮聘使のことについて諮問の使者をよこしたときも、彼は「老いて、若き時のことは少しも記憶し申さず」といって、何も答えなかった。

白石の健康は六十五歳ごろから急速に衰えた。数え年六十六のとき、彼はこんな手紙を書いている。「まずは老朽、つつがなく暮してはおりますが、今年はここかしこが不快で、気分爽快な日は一日もありません。腰なども脱力感ひとしおで、食物の味も以前とは変らぬものの、歯が動いて危いので、飢えをしのぐ程度の食事をしております」

その翌年には、「ただただなにとぞ名のなくなり候ようにと心がけ候」とか、「死し候已後百年も二百年も後の人々の公論に身を任せ候より外これ無く候」とかいう手紙を書いている。彼を覆っていたのは、深い諦念であったろう。

そして、死の数日前、『采覧異言』の改稿を終え、享保十年五月十九日にひっそりと死んだ。

シュリーマン（一八二二―一八九〇）

貧しい育ちから奮闘努力して大商人になったハインリッヒ・シュリーマンは、五十歳を過ぎてから、ホメロスの詩は、ただの空想ではない、真実を歌ったものだと確信して、ついにトロヤの遺跡を発掘し、発見した。それでさらに巨富と、ビスマルク、モルトケにつづく三番目のベルリン名誉市民という栄誉を得た。

彼は、旅行好きと、健康のための水浴と、倹約という三つの趣味を持っていた。

その水浴で、耳に水がはいり、彼は耳疾にかかった。耳は一八九〇年夏からさらに悪化し、十一月には手術した。が、手術のときに耳内の骨膜を傷つけたらしく、いよいよ痛みがひどくなった。それでも旅行好きな彼は、ゆきあたりばったり医者にかかりながら、ドイツからフランス、イタリアと歩きまわった。

一八九〇年クリスマスの日、彼はイタリアのポンペイの

サンタ・カリタ広場で突然倒れた。例の倹約からあまりみすぼらしい服装をしていたために彼は病院から入院を断わられ、交番に連れもどされた。そうこうしているうちに、やっと胸ポケットから厚い札束が発見され、ホテルに運ばれ、八人の医者が呼ばれて頭蓋骨を切開すべきかどうか相談しているうちに、この大富豪にして大考古学者たるシュリーマンは、異国の町でゆきだおれのごとく死んでしまった。

伊藤博文（一八四一——一九〇九）

明治四十二年十月、伊藤はロシア蔵相ココフツォフと会談するために渡満し、十月二十六日、ハルピン駅に到着した。プラットフォームには、ロシア兵、清国兵、それに在留日本人官民が整列していた。

伊藤はロシア兵を閲兵し、各国領事の一人一人と握手し、さらに日本人官民のほうへ歩きかけたとき、一人の男が参列者の間から躍り出し、拳銃をかまえて数発を発射した。

伊藤は随員宝田義文のほうへよろけて、「宝田、やられた」といった。

犯人はすぐに兵隊の手でとらえられた。

伊藤は、随行の満鉄総裁中村是公らに支えられて車内につれ戻されたが、三十分後に絶命した。死ぬ前に彼は、犯人は安重根という韓国人だと聞き、

「馬鹿なやつだ」

と、一言つぶやいた。彼の身体には三発の弾丸が撃ちこまれていた。

どこから出た話か不明だが、内田百閒によれば、伊藤が韓国人に撃たれたという報告を受けた明治天皇は、「なぜだ？」と大声をあげたという。

安重根は韓国人の英雄となったが、日韓併合はこの事件のために可能となった。

右の満鉄総裁中村是公の大学時代の友人夏目漱石は、中村に招かれてその九月から満韓旅行をし、十月十四日に帰国したばかりであったが、翌年の三月から「朝日新聞」に連載した『門』の中で、この事件に対する日本人の庶民の反応を次のように書く。

「どうして、まあ殺されたんでしょう」と御米は号外を見たとき、宗助に聞いたと同じ事を又小六に向って聞いた。

「短銃をポンポン連発したのが命中したんです」と小六は正直に答えた。

「だけどさ。何うして、まあ殺されたんでしょう」

小六は要領を得ない様な顔をしている。宗助は落付いた調子で、

「矢っ張り運命だなあ」と云って、茶碗の茶を旨そうに飲んだ。御米はこれでも納得が出来なかったと見える。

「どうして又満洲抔へ行ったんでしょう」と聞いた。

「本当にな」と宗助は腹が張って充分物足りた様子であった。

「何でも露西亜に秘密な用があったんだそうです」と小六が真面目な顔をして云った。御米は、

「そう。でも厭ねえ。殺されちゃ」と云った。

「己見た様な腰弁は、殺されちゃ厭だが、伊藤さん見た様な人は、哈爾賓へ行って殺される方が可いんだよ」と宗助が始めて調子づいた口を利いた。

「あら、何故」

「何故って伊藤さんは殺されたから、歴史的に偉い人になれるのさ。ただ死んで御覧、斯うは行かないよ」

ゴーリキー（一八六八——一九三六）

『どん底』で知られるロシアの文豪ゴーリキーは、一九三四年彼が六十六歳のとき、三十七歳の息子マクシムが猟に出て風邪をひき、肺炎を起して急死してからめっきりと衰えを見せた。

死の年の一九三六年三月二十二日、彼はロマン・ロランに手紙を書いている。

「たくさん仕事をしておりますが、何も出来ないのに、恐ろしく疲れます。その上おまけに、不愉快至極にも、今も、大量の喀血を見ました」

彼には肺結核の痼疾があった。

「私はただ一つのことだけを怖れております。——ロマンを書き終えないうちに心臓が止まりはしないかということです」

彼は最大の長篇『クリム・サムギンの生涯』に鏤骨の苦心を重ねていた。

五月に彼は流行性感冒にかかった。

彼の治療に当ったスペランスキー教授は、プラウダの記者に語っている。

「私が、病気のゴーリキーにはじめて逢ったのは六月六日だった。まだ発病の最初の時期であったにもかかわらず、容態はそのときすでにかなり重篤だった。息切れのために横になれなかった。昼も夜もほとんどずっと彼はソファに

坐りこんでいなければならなかった。その上、まもなく心臓の血管系統の変化と若干の神経的徴候が加わった。後者の徴候は基本的には呼吸と脳の血液循環の乱れに起因していた」

コンチャロフスキー医師は、死の二日前のゴーリキーのようすを語る。

「ゴーリキーは、われわれ医師に、どうやら癒りそうだ、といった。その際彼は、熱っぽく私たちの手を握った」

彼によると、死の前は次のような症状だった。

「……朝、突然、おびただしい喀血があり、心臓の働きが急に衰えはじめ、意識不明の状態におちいった。すでに十七日の朝には、運命的なフィナーレが近づいていることは明らかだった」

かくてゴーリキーは、六月十八日午前十一時十分に息をひきとった。折から雷鳴がとどろき、庭の大木が折れたという。

友人の画家コーリンは、死んだ直後のゴーリキーについて記す。

「私は病室に入った。ゴーリキーは、亡くなったときのままベッドに横たわっていた。たいへん痩せて、若返ったようで、薄い空色のシャツを着ていた」

プラウダは十九日発表した。

「党中央委員会ならびにソ連邦人民委員会議は、偉大なるロシア作家、天才的な言葉の芸術家、勤労者の献身的な友、コミュニズムの勝利のために戦った戦士——同志アレクセイ・マクシモヴィチ・ゴーリキーが、一九三六年六月十八日、モスクワ近郊ゴルキにおいて逝去した死亡通知を深い悲しみをもって発表するものである」

六月二十日、盛大な葬儀が赤の広場で行われた。

死後に、鉛筆のメモが発見された。

「物が重くなる——本も、鉛筆も、コップも。そしてすべて前より小さく見える。……夜が長い。だが、本が読めない……！」

「ロマンの終りは、主人公の終り。——作者の終り」

「戦争が来る。準備しなければならない」

それは日本では二・二六事件が起り、中国では西安事件の起った年であった。

——以上が、死後二年、定説となっていたゴーリキー病死の状態である。ソビエトでは一般にいまでもこれが信じられている。

しかるに一九三七年に、スターリンの側近であり、政治警察の長官であったヤゴダが逮捕され、翌年その裁判の過

程で驚くべきことが明らかになった。

それによると、右の医師たちの証言はぜんぶ嘘で、ブハーリン一味が、まずゴーリキーの息子のマクシムに、シャンパンを多量に飲ませ寒い雪のベンチに眠らせて、発病のきっかけを作り、ゴーリキーの場合は、ゴーリキーを焚火のそばに長時間坐らせて気管支をいためつけて感冒にかからせ、発病するとジギタリス剤を与えて、弱っている心臓を逆に昂奮させて死に至らしめたという。

またトロツキー一派の手によって毒殺されたという説もあるが、トロツキーは、ゴーリキーはスターリンの命令によって医師たちに毒殺されたもので、それはスターリンにとってゴーリキーの「良心」が邪魔になったからだ、という。

ルイス・フィッシャーは『スターリン伝』で次のように書いている。

「スターリンはゴーリキーに数々の栄誉を与えた。ゴーリキーは、スターリンの残虐性を柔げようと思って、この独裁者の招きに身をまかせたのかも知れない。スターリンにとっても、これは満足のゆくとりきめだった。

しかし、やがてソ連政権に対するゴーリキーの熱狂も冷却した。そして彼とスターリンとの関係も冷却して来た。一九三五年、彼は外国へゆこうと望んだが、旅券の交付を拒否された。一九三六年六月十八日の彼の死は神秘につつまれている」

まさしく彼の死は神秘につつまれているが、いずれにせよゴーリキーは毒殺されたということが、いまでは定説になっている。

山室軍平（一八七二——一九四〇）

昭和十五年三月八日、さきに軍部批判をした斎藤隆夫議員をその前日除名したばかりの第七十五回帝国議会衆議院で、山梨県選出の代議士今井耕造は、一冊の書物を手にして愚かしい弾劾演説を行った。

「この『平民の福音』がいかなる内容を持っているかと検討いたしますると、驚くべき不敬の文字が全巻を通じて羅列してある。反国体の許すべからざる書物であると私は信じます。その序言に、はじめてキリストの救いを経験し、身も魂も一切をあげて真の神に託した、とある。畏れ多い話でありまするが、わが皇祖皇宗の御神霊を無視いたしておる個所が多々ある」

『平民の福音』は、明治三十二年に書かれ、以来四十年、

キリスト教伝道書中のベストセラーになっていたものであった。
同じ日に、日本救世軍の創設者にして司令官たる著者の山室軍平は、二月末にひき起した肺炎のために死床にあった。
その日の午後零時四十分、昏々と眠っていた彼は、枕頭を守る人々に、突然明瞭な言葉で告げた。
「諸君、あと数日で私は天に召される。諸君の祝福を祈る」
三月十三日夕、救世軍吹奏楽の聖歌の中に、軍平ははっきりと「神よ、御国へ参ります」とつぶやき、午後七時眼をとじた。
十七日、葬儀の前日、その準備にごった返す救世軍本営へ『平民の福音』没収のために警視庁のトラックが乗りこんだ。

桐生悠々（一八七三――一九四一）

昭和八年『関東防空大演習を嗤う』という社説を書いて軍部の怒りを買い、信濃毎日新聞主筆の地位を追われたジャーナリスト桐生悠々は、以来名古屋郊外の守山の自宅で個人雑誌「他山の石」を発行して、不撓不屈の軍国主義批判をつづけた。
その昭和八年ごろから彼は慢性の咽喉カタルを自覚していたが、昭和十六年に至って、急にのどの腫物が大きくなり、呼吸困難を感じはじめた。彼はこれがガンだとは知らなかった。
発禁につぐ発禁にも屈しない「他山の石」に、県当局から廃刊命令が来たのは昭和十六年八月のことであった。彼もようやく死期の近づいたことを知った。彼はわざわざ赤飯を炊かせ、読者への「廃刊の辞」を書き出した。その末尾は、
「……小生は寧ろ喜んでこの超畜生道に堕落しつつある地球の表面より消え失せることを歓迎致し居り候も、唯小生が理想したる戦後の一大軍縮を見ることなくして早くもこの世を去ることは如何にも残念至極に御座候」
という激越なものであった。
その後、水のほかは摂取し得ない状態になり、衰弱はその極に達したが、彼は医者の手術を拒否した。この最後の「他山の石」八月二十日号が読者の手にとどいた九月十日夜半、彼はその生涯をとじた。
九月十二日の葬儀に、憲兵が「他山の石」発行停止命令を持ってやって来たとき、長男の浪男は父の句を口ずさんだ。
「蟋蟀は鳴きつづけたり嵐の夜」
太平洋戦争勃発三カ月前のことである。

米内光政（一八八〇――一九四八）

断乎として終戦に導き、終戦時にあっては厳乎として海軍を抑えた米内は、しかしすでに昭和二十年四、五月ごろには、心臓は脊椎にくっつくまで肥大し、肝臓も悪く、血圧は二六〇を数え、夜中、四、五回厠に通うほど健康を害していた。
小泉信三は書く。「白皙豊頰の美丈夫であったが、晩年、殊に終戦の後は、頰の肉がにわかに落ちて別人かと思われるようになっていた」緒方竹虎も書く。「あの堂々たる偉軀は、見るかげもなく憔悴して昔日の俤を失ってしまった。それは一切の闇物資を口にせず、栄養不足にもあったろうが、更に彼の、国家の将来を思い既往に哭する傷心の大きかったことによるものが多かったと思われる」
昭和二十年十一月二十九日の『戦中派不戦日記』に山田風太郎は記す。
「きのうの議会『正義を叫ぶべくわが国はその力を失っている』と首相の述懐。議員、戦争犯罪人を糾弾せよと吼えまくる。
『軍として国民の前に深くおわびを申しあげる。ただ、尽忠の将兵と英霊には御同情を……』と壇上手をついて首を垂れる下村陸相、野次の嵐に、ただ一人軍服の巨軀黙して語らぬ米内海相。
終戦のドサクサに軍用品を持逃げした不心得の軍人は許せないが、この最後の陸海両相の態度は悲壮見事にして、いかにも日本人らしく武士的である」
米内は空襲によって家も家財も全焼したが、わずかに誰かが運び出したらしい米内家累代の重箱と、翡翠の原石と中国製の花瓶を、終戦後知人に売却を依頼し、それが一万円で売れたことを報告すると、ついぞ金のことなど口にしたことのない米内が、「ほう、そんなに高く売れましたか」と、よろこんだ。ときに老軍人の自殺記事が新聞に出ると、「自殺するのは感心しませんね」と、ポツンとつぶやいた。
昭和二十二年九月下旬、彼はA級戦犯、陸軍の畑俊六大将の弁護側証人として東京裁判に出廷したが、検事の訊問にとんちんかんの返答を繰返し、ウェッブ裁判長から「これほど愚かな証人ははじめてだ」と罵言を受け、あとでさ

すがは米内だ、よくとぼけ通したと妙なほめ方をされたが、別にまた、実はこのときの法廷通訳が終始メチャクチャな通訳をやったので、結果的に米内が不得要領な返答をしたのだ、彼はそんな人を喰ったお芝居をやるにはあまりに誠実過ぎる人物だという説があり、おそらくこの方が当っているであろう。

やがて米内には神経痛が出てきて、ついで中耳炎、さらに激痛を伴う帯状疱疹という奇病に苦しむようになった。そして、昭和二十三年四月二十日、目黒富士見台の家で死去した。

東京裁判で証人として出廷した彼は、東条らA級戦犯たちより八カ月も先立ってこの世を去ったのである。

緒方は書く。「筆者は偶然に米内邸に居合わせて、巨木の倒れるのを目のあたりにした。それこそ肝脳を国に捧げ尽したという印象を深うさせるものであった。苦悩の跡はなく、いわゆる大往生であるが、あの初めて海軍大将に就任したころの豊頬は、見るかげもなきはもちろん、眼窩はくぼみ、皮膚は枯れ、人並みはずれてたくましい骨組みのみが、いたずらに目立って見えた」

その枕頭には、九十一歳にしてなお息子にとり残された母のとみが、黙禱したきりいつまでも顔をあげなかった。

東郷茂徳（一八八二――一九五〇）

秀吉の征韓の役に際し、島津義弘によって薩摩に強制連行された朝鮮陶工の子孫、朴茂徳は四歳のとき東郷と改姓し、昭和十六年東条内閣において外相の地位にあった。

そのとき日米交渉において、アメリカからつきつけられたハル・ノートの苛酷さに彼は憤然開戦に踏み切ったが、のちその責任を深く感じ、二十年の鈴木内閣の外相としては終戦に死力をつくした。

当時の東郷を下村海南は描く。

「彼の顔面は蒼白である。切れ目で、とげとげしい。言葉は切口上で、声はかすれて鼻にかかっている。愛想とか愛嬌とかはどこかへ置き忘れている。秋風粛殺、木枯しの寒々とした感じである。話ににべがなく取りつくシマもない。開戦時外相であった彼の態度にグルー米大使が反感を持ったというが無理もない。

しかし、いよいよこの段階に入ると、木で鼻をくくったような彼のしぶとい冷静さがものをいいはじめた。昼夜の別なく、不忠なり、卑怯なり、裏切りなり、謀叛なりという大手からめ手の軍部のゆさぶりに、彼はテコでも動かな

かった」

敗戦後、東京裁判でA級戦犯として被告席にひき出された彼は、日本と自分の名誉のために不撓不屈の闘志をもやした。開戦の通告問題で海軍の島田元海相と烈しい論争をしたのもそのためであった。

昭和二十三年彼は禁錮二十年の判決を受けたが、その後彼の最後の戦いが始まる。それは自分の回想録の執筆であった。

のちに『時代の一面』と題されたこの回想録は、昭和二十五年一月五日から三月十四日までかけて、四百字詰原稿用紙にして八百枚に及ぶ厖大なものであった。その間、厳冬の独房で彼は何度か風邪をひいたが、アメリカ側の手当は充分でなかった。しかしそれに耐えて彼はこの回想録を完成させた。

東郷はすでに狭心症の持病を持ち、また前年の暮には黄疸症状を起したことがあったが、五月十七日朝から突如悪寒高熱を発し、アメリカ陸軍病院に入院した。

その後快方に向ったが、七月二十一日午後容態急変し、聖路加病院に移された。そして二十三日午前五時二十五分、だれひとり看取る者もなく絶命した。病名は動脈硬化による心疾患と急性胆嚢炎。

辞世。

人の世は風に動ける波のごと
そのわだつみの底は動かじ

中村吉右衛門・初代（一八八六――一九五四）

吉右衛門は若いころから、身体の具合がちょっと悪いとすぐに医者を呼べと大騒ぎする癖があり、そのあげくとうとう主治医の隣りに引っ越したくらいの「医者好き」で、そのころ芝居の役者の間では、病気になると「吉右衛門になりました」という冗談がはやったほどであった。

それでも防げない病気というものがある。

昭和二十九年夏、終戦後歌舞伎の復興に援助の手をさしのべた元GHQの民政担当官バワーズが、退官後再来日したのに際し、その希望によって吉右衛門は「熊谷陣屋」を演じた。すでに彼は病んでいたが、必死の舞台をつとめ、これが最後の舞台となった。

この芝居が終った翌日、ギラギラと灼けつくような暑い日、親交のある元総理吉田茂を大磯の自邸に訪ねたが、ひどく疲れて帰ってから病床につき、黄疸の症状が著明となった。そして昭和二十九年九月五日午後二時五十三分、心

筋梗塞で死亡した。

主治医市川一郎はいう。「しかしあの黄疸の進み方からみて、どうも肝臓癌の疑いが持たれて仕方がないのだが、小宮豊隆さん等の賛成が得られぬままに、遂に局所解剖も行われずにおわった」

吉右衛門が死んだとき、のちに中村吉右衛門二世となる孫の万之助はまだ十歳であった。すでに祖父とともに何度か舞台に立っていたが、こんな記憶しかない。「覚えていませんよ、一緒に出ていましたけどね。……もう晩年で歯がなくなっちゃって、ツバだのヨダレだの出てくるわけですよね。ああ、きたねえな……そういう風にしか思ってなかったから。……」（昭和五十六年一月二十三日・テレビ朝日「徹子の部屋」より）

むろん、孫は親愛の情をこめて語っているのだが――一代の名優も思えばはかないことである。

田中絹代（一九〇九――一九七七）

六十五歳の田中絹代は、昭和四十九年の映画「サンダカン八番娼館」、テレビ「りんりんと」で、鬼気せまる演技を見せ、観客を感動させた。「りんりんと」が放映された翌朝、脚本家の倉本聰が電話すると、田中絹代のさけび声が聞えた。

「ああ倉本さん　倉本さん！　ほめられましたよ　ほめられました！　みなさん感激して下さいまして田中の電話は鳴りっ放し！　みなさんインテリアの方々で。――」（倉本聰『さらば、テレビジョン』）

昭和五十一年のNHK連続ドラマ「雲のじゅうたん」に彼女はナレーターとして出演したが、その途中九月ごろ愛猫のエサを買いに鎌倉駅前のデパートにいったとき、足がよろめいて転んだ。それ以来吐き気や頭痛を訴えはじめ、自宅で横になっていることが多くなったが、不調をおして「雲のじゅうたん」総集編のナレーターも無事録音した。

その年の十一月末、日本テレビ「前略おふくろ様」の撮影で倉本が立ち会ったとき、しかし田中絹代はすでに異常を呈していた。倉本は書く。

「その日の仕事はめちゃくちゃだった。辛いことだが田中さんはもうセリフを云うことが出来なくなっていた。しかし田中さんはよくしゃべり、よく笑った。いや、正確に云ってしまうなら、異常に、と表現すべきだろう。田中さんは明らかに精神の均衡を失っていた。何でもないことにプッと吹き出し、かと思うと急にギュッと口を閉じ、更に突

然すさまじい口調で人の悪口を次から次へ云った。麹町から代々木の稽古場へ一緒の車で向う中でも、田中さんは一人激しくはしゃぎ、激しく怒り、そして笑った。

僕は田中さんに懸命に合わせながら、どうしてこんな田中さんを（テレビに）引っ張り出すようなことをしたのか、錯乱の中で後悔していた。田中さんの背に手を廻して鎮めよう鎮めようとさすりながら、熱い塊を必死に抑えた。田中さんの身体は異常に小さく、僕の腕の中にすっぽり入った。（中略）

激しい神経的躁状態が田中さんの内部からほとばしっていた。『あいつは何だ』とか、『あのヘタ監督が』とか凄じい表現が機関銃のように田中さんの口から奔走り出た」

暮の二十七日、彼女はついに本郷順天堂病院に連れてゆかれ、翌五十二年一月に入院した。彼女自身は聞かされなかったが、病名は脳腫瘍であった。

入院後の二月ごろ、つきそいの映画監督小林正樹につぶやいたことがあった。「セリフをしゃべらず、じっと動かないでつとまる役はないかしら」小林は答えた。「それはできますよ。セリフがなくても動かなくても、名女優は名女優です」

むろん小林は、絹代のことを考えていたのだ。

自分の病名を知らず、早くよくなろうとして彼女は、うなぎやアナゴを必死で食べた。

しかし三月にはいって彼女は、箸を使うことが出来なくなり、手で食べはじめた。しかしそれでも田中絹代らしく、それはいかにも可愛らしかった。

厠にも立てなくなると、おしめをあてがわれたが、十七歳のときから付き人をしている仲摩篤美が手をのばして具合をたしかめようとすると、首をふっていやだといった。その一方で仲摩の手で毎日顔にクリームをぬらせた。

倉本は記す。

「ただ一つ書いておきたいことは、その時田中さんに全く金がなかったことである。鎌倉の家と、三崎に建てかけて中挫したままの別荘はあったが、田中さんには使える金がなかった。それどころか借金を抱えていた。入院費すら全くなかった。抵当に入っていた鎌倉の家すら、放置すれば人手に渡るところであった」

「田中さんは恐らく三崎の家に、最後の夢を注いでいらしたのだと思う。だが、不幸にも資金が続かなかった。九分通り出来上ったその家は、ここ二、三年放置されていた。それでも田中さんは時折少しずつ、気に入った電気器具や小さな家具を買い、三崎のその家に運びこんでいた。未完

成の家の中に、それらの品が、店の包装のままちょこんと置かれていた。（中略）いずれにしても日本映画界を代表するスターの、これが最後の夢だったのかと思った。そしてその家へ恐らく一度も、足を踏み入れずに果てられるであろう田中さんの口惜（くや）しさを思った」

いったい、半世紀にわたり一代の名女優として彼女が稼いで来た莫大なギャラはどこへ行ってしまったのか。

「田中さんの病室を最後に訪ねたのは、あれは二月の何日だったろうか。

田中さんは既に口がきけなかった。それでも壁のレリーフ（五十一年度の芸術祭優秀賞として彼女主演の「幻の町」が文部大臣から受賞した盾のレリーフ）を指さし、そして必死に笑おうとされた。でもその笑いはすぐに涙に変った。田中さんは自分の袖をまくってみせた。何か仰（おっしゃ）ったが、ききとれなかった。その二の腕のあまりの細さに僕は何も云えなかった。田中さんは自分のその腕の細さを窓の光にかざすようにし、永いことじっと見つめておられた」

最後には、眼も見えなくなった。痰（たん）がつまって苦しむので、のどに穴をあけた。

三月二十一日午後二時十五分、彼女は順天堂病院で息をひきとった。

口がきけるうち従弟（いとこ）にあたる監督の小林正樹にいった最後の言葉は「桜の咲くころは、きっと鎌倉の家へ帰ってお花見するからね」という言葉であった。

やはり監督の中村登はいう。

「お通夜のとき、小林正樹さんが言いました。『とても良い顔をしています。見てやって下さい』白布を拡げた時の絹代さんは、六十年という修羅場を女ひとりで戦い抜いて来たとは見えない安らかな顔でした。不覚の涙がこぼれました」

その翌日の夕方、倉本ははじめて田中の鎌倉の家を訪れた。

「──その部屋はひどく寒かった。寒いのに暖房の設備が殆どなかった。寒い上にやたらに暗かった。（中略）洋間に続く四畳半があり、そこに小さな置きごたつがあった。こたつのすぐ脇に電話があったので、田中さんはいつもここにいたンだなと判った。古びたテレビが一台あったが、驚いたことにそれは白黒テレビだった。それがたったの一台きりだった」

四十年間田中につきそい、彼女がボディさんと呼んでいた老優隼（はやぶさ）信吉はべろべろに酔い、泣くように話しかけた。

「先生ごらんよ、ここにいたんだよ、田中絹代はいつも独りでね。俺がたまに来るとこの暗い部屋で、こたつに当って頭かかえてたンだ。両手でこうやってさ、電気もつけずにさ、田中絹代はいつも独りで、頭抱えて坐ってたンだ。え、判りますか。天下の田中絹代がですよ！　頭抱えて坐ってるんですよ！」（倉本聰『さらば、テレビジョン』）

築地本願寺の葬儀には、しかしカッポウ着姿といったおばさんたちをふくめファン二千人が集まり、みな焼香台の上に百円玉を置いていった。ああ、これこそファンが、昭和期最大の映画女優田中絹代に捧げた最高の勲章ではあるまいか。──この金は遺骨とともに墓地に埋葬された。

死後に「楢山節考（ならやまぶしこう）」と「愛染（あいぜん）かつら」が再上映された。映画が終ると劇場内には期せずして万雷の拍手が起り、いつまでも鳴りやまなかった。

新田次郎（にったじろう）（一九一二──一九八〇）

「昭和五十五年二月十五日の早朝、夫のよぶ声に目をさました。

『のどが痛むんだ。胸もいたい』

と云う。大へん寒い朝だったので、もう少し時間を待って主治医のところへ行くようにと私は云った。

『じゃそうしよう』

夫はお手洗に立った」

と、藤原ていは『夫・新田次郎』に記す。

「二、三分後、廊下で大きな音がした。私はとび出した。夫はそこへ大の字になって倒れていた。あわてて抱き起そうとするのだが重くてどうにもならない。夫は二、三回起き上ろうとした。同じ敷地内に住む次男を私は大声で呼んだ。その声と殆ど同時に次男夫婦がハダシで飛び込んで来た。すぐ抱きかかえて、フトンの上に運んだが、夫はパジャマの胸をかきむしりながら、ころげ落ちてしまった。私はあわてて救急車と主治医に連絡をした。次男は夫の上に馬乗りになって人工呼吸をはじめている。夫の顔が紫色にかわって、ノドが苦しそうである。その唇へ私は口をつけて全力でつまっているらしいタンを吸い取ろうとしたが、ただ熱く乾いた呼吸があるだけだった。

救急車と主治医が来た。あらゆる手当はしたようである。

『瞳孔が開いています』

およそ五分ばかりたって、私はこの言葉を聞いた。

『そんな筈はない。もっともっと人工呼吸を、注射を……』

私は、その言葉を繰返したように思う。しかし夫の呼吸

は停止してしまった。
その間、およそ二十分ほどの時間がたっていたが、夫の言葉は一つもなかった。無言での意思表示もなかった。ただ冷たくなってゆく夫を、そうさせまいと私は必死になって毛布をかけてやっていた」
死因は心筋梗塞。午前七時五十分。新田は、「毎日新聞」に、モラエスの伝記小説『孤愁（サウダーデ）』を連載中であったが、この急死によって中絶した。

田岡一雄（たおかかずお）（一九一三――一九八一）

二十五のとき、組の事務所に殴りこみをかけてきたやくざを日本刀で斬殺し、懲役八年の刑を受け、出獄後の昭和二十一年、三十三という異例の若さで神戸の暴力団山口組の三代目組長となった田岡は、神戸港の荷役を一手に収め、ついで関西の芸能興行の支配者となり、歌手美空ひばりなどから「お父ちゃん」と呼ばれるまでになり、この間、暴力団のみならず政財界とのコネクションを作って、全国の暴力団を制覇し、マスコミからドン田岡と称される存在となった。
彼は昭和四十年五月、いちど心筋梗塞を起して危篤におちいったこともあり、五十三年七月京都のナイトクラブでやくざに狙撃され頸部貫通銃創の重傷を負ったこともあったが、いずれも回復して、その配下は無数の血なまぐさい暴力事件を起して民衆を恐怖させながら、彼自身は組長となってからはいちども刑務所にはいることはなかった。
しかし、その不死身のドン田岡も、昭和五十六年七月上旬風邪をひき、それがひきがねとなって、七月八日、また軽い心臓発作を起した。
長女の由伎によると、田岡は山口組のことを「こんなに大きくなるとは思わなかったなあ」といい、また「これでええんかなあ、俺。こんなにうまいことといって、世の中、こんなに甘いもんかなあ。おかしいんちゃうかなあ？」といってた矢先に倒れた、という。
ただちに関西労災病院に入院しようとしたが特等室がふさがっていたので、神戸市灘区の自宅、通称「田岡御殿」に病院の医療器具すべてを運ばせ、医者を呼んで治療をつづけた。
主治医の中山英男医師は語る。「田岡さんは床に臥せったままで、苦悶する状態が続いた。『苦しい、苦しい』というては『起こしてくれ』いうてな。起こせばそれに耐えられんで、『寝させ』いうたり。……」

七月二十三日の朝、寝室で彼が絶息しているのを看病当番の組員が発見して、救急車で関西労災病院へ運び、十三時間にわたり大量の薬物投与や激しい心臓マッサージをつづけた。午後二時二十五分、いちど心臓が停止したが、電気ショックでまた甦った。しかし午後七時三十一分、ついに完全に絶命した。
その幹部の一人はいう。「いや、オヤジは大往生やった。何しろ畳の上の大往生やから、倖せな最期やったろう」
田岡の死後、その相続をめぐって山口組は分裂し、血で血を洗う抗争にはいった。

池田弥三郎（いけだやさぶろう）（一九一四――一九八二）

銀座のしにせのてんぷら屋「天金」の三男坊に生まれたが、国文学者として、恩師折口信夫のいわゆる折口民俗学の伝道者となった池田弥三郎は、他方三十を超える学会芸能界その他の審議会の委員となる多忙な生活をおくり、かつ粋（いき）な「江戸ッ子」の代表的人物として知られたが、昭和五十五年三月、慶応の教授を定年退職すると、意外にも富山県の魚津短大の教授をひき受けて世人を驚かせた。
が、赴任の前々日、銀座を歩いていて、足がもつれて動けなくなり、四月上旬魚津に到着してから高熱を発して寝こみ、五月には帰京して入院する羽目になった。
彼は、家庭で晩酌はしなかったが、銀座で友人とつき合うときは十二、三軒の酒場をハシゴするのがふつうという酒豪で、すでに慢性肝炎にかかっていたのが肝硬変に進行していたのである。しかし、このころまでは自覚症状はなかった。
やがて退院はしたものの、静かな余生を送るつもりでせっかく魚津にいったのに、頼まれごとはことわれない気っぷで、さまざまな仕事に以前にまさって東奔西走する生活に忙殺された。二、三百種の清酒の利き酒をやる金沢地方酒類審議会の委員までひき受けた。
が、二年後の昭和五十七年にはいって急速に肝硬変の症状が現われはじめ、五月には吐血、十二日に救急車で魚津から東京まで九時間走って東京女子医大病院に入院した。そのとき彼は、主治医の久満助教授に泣き笑いの表情で、「やっぱり先生のいうことを聞いてりゃよかったなあ」といった。
しかし、久満助教授はあとでいう。「酒を飲んでもいいとはいえないから、やめた方がいいですよ、とはいいます。やめて肝硬変がなおるものなら、本人もやめるでしょう。

池田さんが三十歳ならば、妻子の将来も考えて何としても酒をやめてもらったでしょう。しかし、もう六十歳を過ぎ、功成り名とげた人に、やめて下さいというのは、どれだけ意味があるでしょうか」これは名医である。
入院後も彼は東京の食い物屋の店の名をメモさせ、それを回って歩くことをうわごとのように口にしていたが、次第に意識不明の状態になり、七月五日午前十一時過ぎ、肝硬変による静脈瘤破裂を起して死去した。

六十九歳で死んだ人々

> 大多数の人間は、死なないですますわけにはゆかないので死ぬだけである。
> ——ラ・ロシュフーコー——

千利休（一五二二——一五九一）

利休が秀吉からにらまれた原因についてはさまざまの説があるが、公式には、彼が自分の木像を大徳寺の山門に置かせたのを、不遜僭上の行為として断罪されたことになっている。
天正十九年二月十三日、彼は堺へ追放され、蟄居を命じられた。利休は一切の嘆願を拒否して堺へ退去した。それから十五日目、切腹の命令が追い討った。

二月二十八日、直径五分という雹までまじえた大雷雨の日、

「人生七十
力囲希咄
わがこの宝剣、祖仏ともに殺す
ひっさぐるわが得具足の一つ太刀
いまこのときぞ天に投打つ」

という、現代人には意味不明の、しかし何やら大いに怒っているらしい辞世を残し、彼はいかなる戦国武士も及ばぬ壮絶な切腹をとげた。
「茶道」という日本文化への影響もさることながら、彼ほど自分の子孫に余徳を与えた人間は例がない。同時に、彼こそ巧妙無比の収奪組織「家元制度」の元祖ともいえる。
ともあれ、利休の死は、日本歴史の謎の一つである。

セルヴァンテス（一五四七——一六一六）

セルヴァンテスは二十四歳のとき祖国のスペイン艦隊の一水兵として、当時強大を誇ったトルコ艦隊を撃破した有名なレパントの海戦に、マラリアをおして参加し、左手に負傷して生涯使用不能となった。彼はみずから称して「レパントの片手ン坊」といった。
しかしその後トルコの海賊船に襲われて捕虜となり、五年にわたる奴隷生活を送ったり、海軍の糧食係の小役人となったり、大変な貧乏の中に何度か牢獄にはいったりしたが、五十八歳のときに書いた『ドン・キホーテ前篇』が、当時としては異例の評判を得た。ただし当時のスペインでは、著書は作者の意志とは無関係にどこでも出版できたので、彼はちっとも豊かにならなかった。
それどころか、別の男が勝手に『ドン・キホーテ後篇』を書いて出版した。
さすがにセルヴァンテスは狼狽して、自分の書いた『ドン・キホーテ』の後篇を急いで書き出した。このことがなければ、『ドン・キホーテ』は未完のまま終ったかも知れないといわれる。なぜなら、この後篇につけた献辞の日付が一六一五年十月末日で、その半年後、本が出版された一六一六年の四月十三日に、彼はマドリードの自宅で死ぬというきわどい芸当だったからである。
正確な死因は不明。しかし死の数年前から盛んにのどのかわきを訴えているところから、糖尿病にかかっていたらしい。
シェクスピアと同年同日に死んだという説もあるが、ふ

つう伝えられるシェクスピアの死亡年月は旧暦の四月二十三日で、新暦でいえば五月三日にあたる。セルヴァンテスは新暦の四月二十三日に死んだのであり、旧暦でいえば四月十三日となり、シェクスピアより十日早く死んだのである。

なお日本では同年に徳川家康が死んだ。

『ドン・キホーテ』が世界文学史上無視出来ない作品として評価されたのは、しかし十九世紀にはいってからのことであった。

伊達政宗（一五六七――一六三六）

寛永十三年春、出府の途中から彼は病み、四月二十八日、江戸桜田の屋敷に到着後、五月一日には登城したが、以来腹が少しずつ張り出し、二十一日将軍家光が見舞ったときには、政宗のウエストは百二十センチくらいになっていた。この一、二年前から彼は、食後むせることがしばしばあったというから、現代医学から診断すると、食道噴門ガンによるガン性腹膜炎ではなかったかと思われる。腹が張ったのは腹水のためである。

二十三日、病室を清掃させ、夜にはいってから身体を洗わせ、衣服を改めて寝についた。夜中に何度も目覚めて時刻を訊き、「今夜は秋の夜より長いように思われる」といったり、また「畳の上で死ねるとは思わなかった」と感慨深げにいったりした。

おそらく彼の頭には、若い日、敵の人質となった父を敵もろとも殺したり、会津を争って豪勇蒲生氏郷と戦ったり、秀吉に小田原に呼ばれて切腹の命令を待ったり、その他朝鮮役、関ヶ原、大坂の役など、数々の死地に落ちた日々のことが明滅していたであろう。

五月二十四日朝、手水をすませたのち、床の上で西方を合掌礼拝し、死後みだりに死顔を人にみせるな、と遺言して、午前六時ごろ、独眼竜政宗のもう一つの眼、左眼も永遠にとじられた。

千　姫（一五九七――一六六六）

慶長八年六歳のとき、祖父家康の政略によって四歳年上の豊臣秀頼に嫁いだ千姫は、十二年後の元和元年五月一日、燃える大坂城から坂崎出羽守らの手で救い出された。ときに彼女は十八歳であった。

翌年の十月、千姫は、徳川四天王とうたわれた本多平八

郎忠勝の孫忠刻のもとへ再嫁し、姫路に住んだ。十年後忠刻も病死した。ときに彼女は二十九歳であった。

以後千姫は江戸城内の竹橋御殿に住んだ。将軍家光もこの悲劇の姉を手厚く遇したという。そして四十年の静かな生活ののち、寛文六年二月六日――世はすでに四代将軍家綱の時代になっていた――この世を去った。

千姫についていわゆる吉田御殿の妖譚が生まれたのは、竹橋御殿の家老が吉田修理介という者であったことと、安芸の吉田（毛利元就発祥の地）に「吉田通れば二階からまねくしかも鹿の子の振袖が」という俗謡があったこと、また彼女の二人の夫が若くして死に、さらに坂崎出羽守の事件があったため、「男を殺す女」という無責任なレッテルが貼られたこと、などがからみあって発生した俗説である。

千姫の前半生の波瀾は、姑の淀君とはちがってすべて受身の悲劇であった。その上こんなあらぬ俗説のヒロインにされては間尺に合わないが、しかしその代りいまに残る姫路城の「千姫の化粧櫓」の美しさは、彼女をも幻想的に美姫化してしまった。いまではだれも、六十九歳の千姫様など想像する者はない。

田沼意次（一七一九――一七八八）

いわゆる「田沼時代」を作った田沼意次は、天明四年、子の意知が殿中で刃傷のため殺されると運命傾き、天明六年にはわずか二日間で屋敷の引払いを命ぜられるありさまで追放された。やがて彼は、所領三万七千石のうち二万七千石を没収され、溜めこんだ貨財はすべて吐き出させられ、天明八年六月二十四日、さびしく死んだ。

しかし幕府の「近代化」は、彼の死とともに葬られた。田沼の命脈はほとんど絶えたかに見えたが、七十数年後その六代の孫田沼意尊は幕軍の総大将となって、幕末のいわゆる水戸天狗党をみな殺しにしてしまう。

平山行蔵（一七五九――一八二八）

文化文政のころの剣豪で、相馬大作などの師匠。

爛熟をきわめた化政の時代にもこういう人物があった――というより、その世の爛熟をいきどおり、彼は、食事は玄米に味噌と漬物に限り、茶も飲まず水だけ飲み、寒中も袷一枚で足袋をはいたことなく、夜具も掛蒲団一枚だ

けで、一生不犯の生涯を過した。

これほど鍛練しても防げない病気がある。文政十一年彼は中風にかかった。彼のファンであった松平定信が蒲団を贈ったが、しかし彼は頑然として板敷の上に横たわり、掛蒲団だけかけて十二月に息をひきとった。むしろこういう生活で栄養失調にもならず数え年七十歳まで生きることが出来たのがふしぎであろう。

間宮林蔵（一七七五――一八四四）

常陸国筑波郡の百姓の子として生まれながら、間宮林蔵は幕府の蝦夷地御用雇に採用されて以来、北海道、千島、カラフトなどの探険と測量に従い、はてはその足跡はシベリア、満州にまで及んだ。

そして文化五年（一八〇八年）に、カラフトが離島であることを確認したことをシーボルトによって世界に紹介され、ロシアの大水路学者クルーゼンシュテルンに、

「われ日本人に敗れたり」

と、さけばせた。この林蔵三十三歳のときの偉業は、いまも間宮海峡として名を残す。（もっともそのことを公式に認めたがらぬソ連は、なおタタール海峡と呼んでいる）

しかし文政十一年、右のシーボルトはもとより、恩人の幕府天文方高橋景保ほか五十人に及ぶ処罰者を出させるに至ったいわゆる「シーボルト事件」の端緒をひらいたのは、当時五十三歳の間宮林蔵であったといわれる。

彼は進歩的な高橋景保とちがって、日本の地図を異国人に譲るのは――たとえそれに匹敵する交換物があったとしても――日本の国益に反すると確信する保守的愛国者であった。

この事件後、上司たる川路聖謨でさえ「先生」と呼んだ林蔵が、後半生幕府の暗い一隠密として、薩摩をはじめ西海諸国に潜入し、働いたのも、同様の信念から来る忠誠心によるものであったろう。

彼自身は、裃もつけずに江戸城に登城しようとしたほど変物であり、彼の養子を幕府がとりたててやろうとしたとき、「私はよろしいが、伜にはその働きがありませぬから」といって断わったくらい出世には無欲な男であった。

一生妻帯しなかった彼は、晩年、妾というより下女兼内妻と呼ぶほうがふさわしい女性と、深川蛤町のわびしい陋屋に住んだ。

――壮年のころ、極寒の地で苦難の生活をしたので、その指はことごとく凍傷にかかって形を変えていたといわれ

る。

やがて、かつて夏日炎熱の下も、トレーニングのためいつも裸足で歩き、蚊の多い深川に住んで蚊帳もつらず、冬に火鉢もおかず、鍛えに鍛えたその鋼鉄のような肉体も老い、「爛然人を射る双眼の雷」と評された眼光も衰える日が来た。

弘化元年二月十九日の日付で、右の内妻りきが、林蔵の郷里に急報した「然れば林蔵今日七ツ半頃よりふと打ふし……色々手当いたし候えども、よろしき方も相見えず」云々という手紙が残っている。

そして二月二十六日、林蔵は死んだ。病名は不明だが、発病以来わずか一週間後という急死であった。

二宮尊徳（一七八七――一八五六）

「骨身をおしまず仕事にはげみ
夜なべすまして手習い読書
せわしい中にもたゆまず学ぶ
手本は二宮金次郎」（文部省唱歌）

小田原の貧農の家に生まれ、少年時父母を失った金次郎は、後年の銅像の通りに刻苦勉励してわが家を立て直し、ついで若党として奉公した小田原藩家老の家の経済を立て直した。彼の財政再建法は「仕法」と呼ばれて注目され、やがて小田原藩の仕法、さらには幕府の関東各地の天領の仕法を命じられるに至った。

彼は身長一メートル八十、八十四キロ、十二文の足袋をはき、一日に八十キロ歩くという体軀と体力の持主であったが、六十歳前後、最後に幕府からの日光神領の荒地開拓の御用に骨身を砕いていたころから、過労のためか病気がちになった。しかし彼は「駕籠に乗っていては土がわかるものではない」といって、杖にすがりながら山野を歩いて任務を果そうとした。

この功績によって、安政三年二月、幕府からはじめて御普請役という役人の地位を得、三十俵三人扶持を受けることになった。そのころ彼は病床にあった。病名不明。

たんに大地の管財人であるのみならず、すでに独自の尊徳哲学、尊徳倫理学を打ち樹てていた彼は、しかしそういう報酬の多寡を問題にすることもなかったろう。

その年の十月二十日、今市の居宅で多くの崇拝者に囲まれ、「葬るに分を越ゆるなかれ、墓や碑を立てるなかれ、ただ土を盛り、そのわきに松か杉一本を植えれば足る」といって、午前十時ごろ瞑目した。

梁川星巌（一七八九―一八五八）

幕末の大詩人といわれ、三十五歳のとき妻とした十八歳年下の女流詩人紅蘭とは琴瑟相和したが、同時に攘夷の老アジテーターとして若い志士たちに囲まれ、幕府から「悪謀の問屋」として眼をつけられていた星巌は、安政五年九月一日下痢をした。

妻の紅蘭が「きのうハモをたんとおあがりなされたのが悪かったのではないでしょうか」というと、「うまかったから沢山食ったのだ。コロリなどではない」といった。

しかるにその翌日、コレラの症状が明らかになった。彼は「男子婦人の手に死せず、お前は隣りにおれ」と妻を去らせて、弟子の頼三樹三郎らに支えられ、正座したまま死んだ。

五日後に、何も知らぬ幕吏らが急襲した。安政の大獄の始まりで、頼三樹三郎らもこのとき捕えられた。しかし星巌はすでに天国にあった。彼がこのときコレラにかからなかったとしても、老体に待ち受けていたのはまちがいなく怖ろしい拷問と斬首の運命であった。死が死を救った、ともいうべく、死が最高のプレゼントであったとは珍しい死といえる。

世に「星巌は死上手（詩に上手）」といわれたが、この幸運ばかりでなく、好物のハモを飽食して威張って死んだのは羨望に値する。

もっとも、三田村鳶魚によれば、星巌は事前に検挙を察知して服毒したということで、それだと話は一変する。

内村鑑三（一八六一―一九三〇）

内村の遺骸は、解剖の結果、「左心臓冠状動脈の高度の延長拡張及び蛇行」「心臓自身の肥大」「心嚢水腫」などが認められた。

「第一高等学校不敬事件」「日露非戦論」――等、官権はおろか世論ともたたかい、その厳格な信念のゆえに、彼は何人の弟子を破門し、何人の友と絶交したことであろう。――そのたびに彼の心臓冠状動脈にはコレステリンが付着したに相違ない。

そのため彼は、東京柏木の自宅で昭和四年十二月二十六日から病床につき、年が明けても病状は一進一退を繰返した。

昭和五年三月二十三日、彼は病床に端座していたが、心臓部の痛みを感じ、顔の色も変り、眼をすえて、駈けつけた医者に、

「君、いよいよ最後の時が来たのだろう。福音万歳！　日本国万歳！」

と、さけんだ。医者は脈をとって、

「脈がしっかりしていますから大丈夫です」

といって強心剤を注射した。内村は平静になって、

「もし御心ならばふたたび健康を回復して福音のために働けますよう。御名によりて、アーメン」

と、いった。

二十六日午後一時、また心臓の発作が襲った。内村は病床に端座して、苦痛にたえながらいった。

「人類の幸福と日本国の隆盛と宇宙の完成を祈る」

午後三時ごろ、夫人をそばにおいて祈った。

「奇跡をもってこの病を癒したまえ。ただし、自分のためならず、福音のためにこの病を癒したまえ」

夕方、弟子の藤沢音吉にいった。

「音吉。最後はお前に抱かれてゆく。最後の名誉はお前にとらしてやる」

音吉は感激のあまり座にたえず、庭に出て、思いきり声をあげて泣いたあと、病室に戻って内村を抱きかかえた。内村は安らかな眠りにおちた。

しばらくして眼をさました彼は、医者と看護婦にいった。

「悪魔よしりぞけ、キリスト来りたまえ。……エホバはおのれを愛する者によき眠りを与え給う」

そして彼はまた眠った。

二十七日午後一時ごろ、また発作が来て彼は苦しんだ。こんどこそ最後の時かと思われたが、その生命力は強く、二時ごろ内村は、突然讃美歌二十三番を歌い出した。

夕方になって、医者にいった。

「内村鑑三、主イエス・キリストにありて眠れり」

十一時半、注射によって彼はこころよげに熟睡した。

しかし、二十八日の午前四時半ごろからまた変調が来た。そして、家族や弟子たちの見まもる中に、八時五十一分、こんどこそはほんとうに彼の肥大した心臓は鼓動をとめた。

相当に騒々しい死に方といえる。

子の祐之は、死せる父にいった。

「一族および枕頭にある者に代って申しあげます。あなたがよく七十年の永い間、神のために働かれたことを感謝いたします。どうか今、神様のところで安らかに眠られることを祈ります」

庭の桜の老樹は満開で、弟子の婦人たちによって切りと

られたその一枝が枕頭に供えられた。
その墓碑銘。

「我は日本のため
日本は世界のため
世界はキリストのため
すべては神のため」

小山勝清（一八九六――一九六五）

若いころ激越な社会主義者として古河銅山のストライキを指揮したり、また右翼の北一輝とつきあったり、かと思うと明治の軍事探偵明石元二郎大佐の英雄譚『煽動大煽動』を書いたりした小山勝清は常識的にはまるで脈絡のない変転の人生の行路をあゆんだが、それだけに、そのたびに本人も傷ついて、故郷の九州球磨の山村に逃げ帰った。

が、現実に彼を七十年近く生かしたのは、天生の「嘘ばなし」の才能であったろう。彼が昭和十年から「少年倶楽部」に連載した『彦一頓智ばなし』は好評で六年間もつづいた。

そしてまた昭和二十七年、五十六歳のときから「熊本日日新聞」に連載しはじめた『それからの武蔵』も好評であった。

が、生得無頼の性を捨てきれなかった彼は、老いらくの恋をはじめて妻子を捨て、新しい恋人とともに東京へ出たものの、やがてその二度目の妻とも争いを起して、『それからの武蔵』で得た家も印税もすべて失って、また故郷へ逃げ帰る始末になった。

二千枚を超える『それからの武蔵』が完成すると、それを待っていたかのように、下血その他の直腸ガンの症状が現われ出した。昭和三十六年秋のことであった。

以来熊本大学病院に入退院を繰返し、ときに、武蔵の死んだ岩殿山で死ぬのだといい張ったりしたが、結局、昭和四十年夏、故郷に近い人吉で死にたいと人吉の病院に転じ、十一月二十六日午後八時、静かに息をひきとった。

入院中彼は、五木の子守唄の節まわしで自作の歌をしばしば口ずさんだ。

「山に行きたや草木の中に
泣こと喚こと風ばかり
泣いて狂うて野山で死んで
生れ変って鳥となる
九万の山々谷々こえて
勝清鳥が泣いてとぶ
勝清鳥はわがまま鳥よ
人の言うことききはせぬ……」

中山義秀（一九〇〇――一九六九）

作家中山義秀は、昭和四十年秋、東京女子医大で中山恒明教授から食道ガンの宣告を受け、手術前に千葉県稲毛の放射線綜合医学研究所に入院することを勧められた。身長一メートル七十センチ、剣道四段、柔道三段で、剣豪小説を書いたこともある義秀は顔色を変え、しばらく教授のいっていることも聞えない風であった。

その夜、東京から自宅のある鎌倉へ帰るときの心境を、あとで彼は評論家の平野謙に語った。「車中、女房がひとりで泣いている。僕も憮然としたが、おかしいことに、車外に眺められる人々の姿が、急にまるで遠くはなれた別世界の人々という感じがしましたね」それを聞いた平野謙も、十年後同様に食道ガンになった。

しかし、手術は成功した。そして彼はまた一升酒を飲み出した。食道の代りにプラスチックの管を通し、その管を手でおさえながら飲んだが、酔うにつれて酒がもれるので、ふところにタオルをいれて、もれる酒を吸いこませながら飲んだ。

四年後の昭和四十四年七月、こんどは白血病で彼は倒れた。

八月十八日、彼は見舞いに来た友人の門馬義久に、突然「洗礼をやってくれ」といった。門馬は毎日新聞学芸部の記者であったが、また牧師でもあった。

門馬は自分がその任でないことをいい、また洗礼用の器もないことをいってことわったが、中山の要請もだしがたく、いままで自分が飲んでいた茶碗に水道の水を汲んで洗礼してやった。洗礼が終ると、中山は「広い世界がひらけたようだ」と、いった。

その翌日に中山義秀は息をひきとった。

円谷英二（一九〇一――一九七〇）

昭和十七年、東宝映画「ハワイ・マレー沖海戦」の特撮で全日本人を瞠目させた円谷英二は、戦後も「ゴジラ」その他の怪獣映画、「太平洋の嵐」その他の戦争映画などの特撮で、その天才的独創能力をいかんなく発揮した。

昭和四十三年暮から円谷プロダクションを作ったが、このころから糖尿病に原因すると見られる心臓の異常を訴え

はじめ、常時、心臓発作をおさえるニトログリセリンを携帯しているようになった。彼の完全主義のせいもあって、プロダクションの経営状態は思わしくなく、それがいよいよ心臓に悪影響を与えたようであったが、彼の仕事に対する意気と情熱は衰えの色も見せなかった。

しかし、昭和四十四年八月、翌年の大阪万博のパビリオン三菱未来館の映像展示の企画を引受け、そのため鳴門の渦潮を撮影にいって、船上で心臓発作を起し、入院するに至った。

そして退院後の十二月、伊豆高原の浮島の別荘に妻とともに静養にいった。一生涯仕事の鬼であった彼が、ある期間妻と二人だけの世界を持ったのはそれがはじめてであったが、それでも次の映画「ニッポン・ヒコーキ野郎」の企画に頭をひねっていた。

昭和四十五年一月二十五日、彼は日記に、「意味のない一日だった。完全静養のたいくつさを味わう。今日もヒコーキ野郎の企画書脱稿に至らず。わが無能を嘆くのみ。明日は東京に帰るので今更止むを得ず、東京に於て完成せん」と書いたが、その直後の午後十時十五分、突如狭心症による心臓喘息の発作を起して急死した。

評論家・増淵健はいう。「円谷のノー・ハウを言葉や筆で再現することは不可能である。それはあくまで彼自身のもので、円谷の肉体が消えた瞬間、消えてしまった。円谷の後継者がうけついだのは特撮のメニューやら材料表やらで、真実のノー・ハウはあくまで一代限りのものだ」

スカルノ（一九〇一——一九七〇）

太平洋戦争後独立したインドネシアの独裁者スカルノ大統領の没落は、一九六五年の「九・三〇事件」から始まった。それは大統領親衛隊員による反共六将軍の惨殺事件であった。

一九六八年九月二十八日、インドネシア軍部はスカルノを、デビ夫人の住むウイスマ・ヤソオ宮殿に幽閉し、「九・三〇事件」との関係について査問した。元来華僑の跋扈のため反中国の気風の強いインドネシアで、スカルノは左翼政権的色彩を濃く持っていたので、その親衛隊員による反共将軍惨殺は、スカルノの意を受けての行動ではないかという嫌疑によるものであった。

六九年はじめから面会は全面禁止になった。四カ月後、やっと面会を許されたハルティニ夫人は語る。

「スカルノは私たちの姿を見ると、幼児のように泣きました。健康と精神状態はどうしようもないほど損なわれていました。髪はすっかり白くなり、顔色は青ざめていました」

一九七〇年六月二十日夜、スカルノの四人の妻の一人デビ夫人（日本人、根本七保子）はパリからジャカルタに帰り、陸軍病院に移されていたスカルノに逢った。彼女は記す。

「……私は一人で、病院に入った。ガーッ、ガーッ、大きな音がしていた。ベッドに横たわっている彼は、大きく口を開け、必死に空気を吸いこんでいらした。私はひざまずいて彼の手をとり、

『パパ、デヴィです。帰って来ました』

とだけ言った。昔はあれほど活力にあふれ、人の心をとろかさずにはおかなかった人なつっこいお顔が、いまは一人ぽっちで懸命に死と戦っておられるのだった。かつては、そのあいだから、八重歯がこぼれおちていたくちびるが、からからに乾いていた」

その翌朝、スカルノは死んだ。

あとをついだスハルトは、国民のスカルノ信仰を一掃することに努めたが、一種のカリスマ性を持っていたスカルノは永くインドネシア人の人気を失わなかった。

オナシス（一九〇六——一九七五）

アメリカのハワード・ヒューズとともに、二十世紀における、えたいの知れない謎の大富豪。

船舶王として一代で巨富を築いたギリシャ人アリストテレス・オナシスは、情事の世界でも猛者で、かつて彼を追いまわす新聞社のカメラマンに、かんしゃくといたずらっ気から、自分の巨大な男根を皿にのせて見せ、「これがおれの成功の秘密さ。これを写真にとればお前さんのスクープになるぜ」と、うそぶいたほどであった。

大歌手マリア・カラスをはじめさまざまの女性と浮き名を流したが、一九六八年、六十二歳のとき、三十九歳のジャクリーン・ケネディ——ケネディ大統領の未亡人——と結婚した。彼はそのとき昔別れた妻のティナとまたよりを戻して、もういちど結婚するところであったが、ジャクリーンから結婚承諾の電話があったので、たちまちこちらに乗り換えたのである。ティナはおとなしく身をひいた。

しかし、そのティナの生んだ一人息子アレキサンドルが飛行機事故で、二十四歳で死んだあと彼は急速に衰え、特に心臓が悪くなった。翌年、彼の所有するオリンピック航

空がギリシャ政府に強制的に国有化され、そのかけひきで彼は十五キロも痩せてしまった。

一九七五年二月上旬、胆嚢炎のためパリのアメリカン病院に入院し、手術を受けたが、二月末からは胃も呼吸も心臓も、医療装置で動いているだけの昏睡状態になった。そして三月十五日に息をひきとったときは、すでにさめきった仲の妻のジャクリーンはニューヨークに帰っていて、そばにいなかった。

あとで主治医はいった。

「アレキサンドルが死んでからは、アリストテレスはもう生きることを拒否しているように見えました」

十億ドルといわれる彼の遺産中、ジャクリーンに与えられたのは年金二十五万ドルだけで、ほとんどはティナに生ませた娘クリスティナに相続させるという遺言が残されていた。

ちなみにこのアリストテレス・オナシスの父親の名は、ソクラテス・オナシスという。

七十歳で死んだ人々

> 幸福の姿は一つだが、不幸のかたちはさまざまだ、とトルストイはいった。同じように、人は、生まれて来る姿は一つだが、死んでゆくかたちはさまざまである。
>
> ——山田風太郎——

ピタゴラス（前五七〇頃——前五〇〇）

「ピタゴラスの定理」を発見したピタゴラスは、ピタゴラス教団の開祖でもあった。彼はイタリアのクロトナという町に住んで、この世はすべて輪廻であると説き、人間はあらゆる動物植物がめぐりめぐって転生したものであると説いた。

この教義に反抗したクロトナの市民たちが、ある日彼の家を襲って火をつけた。ピタゴラスは四十人ほどの弟子とともに逃げ出したが、途中でそら豆の畑にゆき当った。

彼の植物に対する尊敬の念が、彼の運命を決した。

「ここで死のう」と、ピタゴラスは畑のへりに腰を下ろした。「このあわれなそら豆を踏みにじるよりは」

そして彼は、弟子たちとともに、追って来たクロトナの市民に虐殺された。

どうもよくわからない。

ソクラテス（前四六九頃——前三九九）

ソクラテスは、国家の神々を信ぜず青年を謬らせるという罪で投獄され、死刑の宣告を受けた。そのとき、彼はいった。

「死というものは、実は人間にとって最大の祝福かも知れない」

また法廷を退廷するときにいった。

「われわれはついに別れるときがきた。私は死ぬために、君たちは生きるために。——しかし、どちらに幸福が多く訪れるかは神のみぞ知る」

友人のクリトンが逃亡をすすめたが、「悪法もまた法なり」とこれをしりぞけ、みずから毒をあおいで死んだ。

しかし彼は自殺したのではない。みずから毒をあおぐというアテナイ法廷の判決に服したのである。

「——あの方は、足が重くなったといって仰向けに寝られた。毒を渡した男があの方に触って、足から足へと調べ、足を強く押してわかりますか、と尋ねた。あの方は、わからない、とおっしゃった。その次にその男は、腰から上へ触っていって、身体が冷えて硬くなってゆくのを教えた。あの方自身も触れてみて、これが心臓まで来たら往生するのだ、とおっしゃった。

もうかれこれ、下半身が冷たくなったとき、かけてある布をとっておっしゃるには、『おいクリトン、アスクレピオスさまに鶏をあげなきゃならん。あげてくれ、忘れずにな』

『そりゃ、あげるが、どうだ、ほかに何かいうことはないか』

クリトンがそう尋ねても、もう返事はなく、しばらくして痙攣が来た。ふたたび布をかぶせたときには、あの方の眼は動かなくなっていた」（プラトン『ファイドン』）

マルコ・ポーロ（一二五四――一三二四）

一二七一年すなわち日本の文永八年、十七歳のとき故郷ヴェネチアから、父と伯父に連れられて、商売のために――というにはあまりにも冒険的な野心に憑かれて、陸路東方へ旅立ったマルコ・ポーロは、その果てに蒙古帝国の王フビライ汗に仕える羽目になり、やっと機を得て帰国することが出来たのは、二十四年後の一二九五年のことであった。

その翌年彼はジェノヴァとの戦争にかり出され、捕虜となったが、ジェノヴァの牢獄の中で、自分の冒険の回想記『東方見聞録』を口述筆記した。彼は自分の中国滞在中に起った一二八一年の日本への再進攻とその失敗（弘安の役）についても書きとどめている。

一二九九年釈放され、ヴェネチアに帰ってふたたび貿易の仕事にたずさわったが、一三二四年、病気のために死んだ。

彼は「ほらふきマルコ」と呼ばれたが、黄金の国ジパングの記述はヨーロッパの大探険時代を呼び起し、やがてコロンブスのアメリカ大陸発見の結果をもたらした。

兼好法師（一二八三？――一三五三？）

兼好の生年歿年には諸説があるが、ここでは『広辞苑』に従う。

日蓮の死んだ翌年に生まれた兼好は、若いときは宮廷に仕え、三十代のはじめに出家し、各地を漂泊し、のちに洛西双ケ岡の麓に庵をむすんで、無常観と人間知にみちた『徒然草』を書いた。

彼は一代のうちに、北条の滅亡や湊川の戦いや南北朝の興亡――すなわち『太平記』の世界を見たことになる。のみならずその『太平記』によれば、暦応年間――兼好五十六、七歳のころ――足利家の権臣高師直のために、師直が懸想した出雲の太守塩谷判官高貞の奥方に艶書の代筆をしたとある。奥方がその艶書を見もせず捨てたことから、塩谷判官は師直に憎まれて殺される羽目になり、これが後年の『仮名手本忠臣蔵』の素材となった。

兼好は、正平五年――楠木正行が高師直と四条畷で戦って討死した翌々年――伊賀の国にあって、四月七日、国見山の麓で死んだというが、その様相は不明である。

「死は前よりしも来らず、かねて後に迫れり。人皆死ある事を知りて、待つことしかも急ならざるに、覚えずして来る。沖の干潟遥かなれども、磯より潮の満つるが如し」

――『徒然草』――

コペルニクス（一四七三――一五四三）

ポーランドの一地方国パルミアの司教座聖堂参事として教区の財産管理の事務に従いながら、ポーランド王とドイツ騎士団との抗争の調停にあたるなど外交手腕を示したニコラス・コペルニクスは、一方でギリシャ時代と変らない素朴な観測器具を用いて、一五三〇年、『天体の回転について』という論文を書いた。すなわち人類最初の地動説である。

そのとき彼は五十七歳であったが、天動説を神学の根本教義とする教会からの圧迫をおそれ、草稿は少数の友人に見せたのみで、そのままひそかにしまいこまれた。

以後彼は、約十三年、聖職者として実務に従いながら天体の観測と論文の手直しをつづけたが、理解者たちに激励されて、ついにこの自説を著書として出版することを決意した。が、彼は一五四二年以来脳溢血の発作をくりかえすようになり、右の『天球回転論』の初版が病床にとどけられたのは、実に彼が息をひきとる翌一五四三年五月二十四日のことであった。日本では天文十二年種子島に鉄砲伝来の年。

彼の本の出版に尽力した友人の司教ティデマン・ギーゼは知人に知らせた。「彼は脳溢血の結果の右半身麻痺でだいぶ前からすべての記憶を失っていたので、息をひきとった五月二十四日には、もう完成した論文を見ることはできませんでした」

しかし彼は、地動説発表と同時に死んだから、彼個人は迫害の憂き目を見ずにすんだのである。彼の説を決定づけたガリレオは、コペルニクス後約一世紀を経ているのに、なお異端審問所に屈服を余儀なくされた。

ライプニッツ（一六四六――一七一六）

ドイツ文化の基礎を築いたといわれる「法学者」兼「哲学者」兼「数学者」兼「神学者」ライプニッツは、晩年宮廷から冷遇され、ハノーヴァーのシュミーデ街で、痛風に苦しみつつ孤独寂寥の生活を送り、一七一六年十一月十四日午後十時ごろに死んだとき、ただ一人の秘書だけが葬っ

たという。彼の死去は同時代の人々によってもまったく注目されず、墓の所在も不明である。

日本では吉宗が将軍となった享保元年。同年に尾形光琳が死んでいる。

シーボルト（一七九六――一八六六）

文政六年長崎出島のオランダ商館にドイツ人の医者として赴任した彼は、西洋医学を日本人に教授する一方、日本について種々研究し、文政十一年帰国しようとしたが、このとき幕府天文方の高橋景保から『クルーゼンシュテルン航海記』とひきかえに伊能忠敬の日本地図などを受取り、これを持ち出そうとしたのを間宮林蔵に密告され、高橋の獄死以下日本側の連累者五十人の厳罰という悲劇をひき起した。いわゆる「シーボルト事件」である。

シーボルトも出国を禁じられたが、一年後許されて帰国したのち、大著『日本』その他日本研究の著作を刊行した。

三十七年後の、一八六六年（慶応二年）十月十八日、ミュンヘンで死んだ。呉秀三の『シーボルト――其生涯及功業』には、感冒にかかり、ついで血液中毒（敗血症）で死んだとある。

彼が日本に残した娘のイネはすでに産科の医者となっていたが、このとし三十九歳でなお出島で再修業中であった。

アンデルセン（一八〇五――一八七五）

デンマークの貧しい靴屋で二十二歳の父と、無教養な洗濯女で四十近い母との間に生まれたハンス・クリスチャン・アンデルセンは、「デンマークのオランウータン」と綽名のあったくらいの醜男で、そのくせきわめて女性的な性格の持主で、一生ついに女性から恋愛されることなく独身で終った。――実は彼は男色の大家であったといわれる。

しかし、それにもかかわらず彼は、人に愛される性質と自分を幸運児だと神に感謝する性質を持っていた。彼は自伝で書いている。「私の生涯は一篇の美しい童話である。それほど豊かで幸福なものだった」「私の生涯を語ることは、この世には万事を最善に導いて下さる一人の慈愛の神がいられるのだ、ということを世間に向って語ることである」

この醜い男色の大家は、自分のみじめな少年、青年時代をさえ「童話」化した。いみじくも彼は自伝に『わが生涯

の童話』という題をつけた。

彼は二十八歳で『即興詩人』を書き、三十歳から『人魚姫』『おやゆび姫』『みにくいあひるの子』『赤い靴』『マッチ売りの少女』などの童話を書いて、やがてそれは全世界に知られるようになり、そのために発表当時はたいして認められなかった祖国デンマークから、晩年王室顧問官やコペンハーゲン名誉市民の待遇を受けるようになった。

一八七五年四月二日の七十歳の誕生日には、国をあげて祝福され、銅像を建てられることもきまった。しかし、七十歳のアンデルセンの身体はすでに病魔に冒されていた。肝臓ガンだったといわれる。

晩年の彼を庇護していたユダヤ人の富商メルキオール家では、彼を海沿いの別荘に移し、手厚く看護した。

彼はベッドに横たわったまま、こんなつぶやきをもらした。

「なんと私は幸福なのだろう。なんとこの世は美しいのだろう。人生はかくも美しい。私はまるで苦しみも悲しみもない遠い国へ旅立ってゆくかのようだ」

八月四日の午前十一時、メルキオール家のドロテア夫人がいつものように病室を見舞うと、アンデルセンはすやすやと眠っていた。夫人はしずかに病室を去ったが、数分後に、看護にあたっていた下男が駈けて来て、アンデルセンが息をひきとったことを告げた。

ドロテア夫人は戻って、死者の枕頭に、インドの『ピドペイ寓話集』のページがひらかれたままになっているのを見た。

彼女はアンデルセンの日記帳の余白に書きつけた。

「いま、光は消えました。なんという幸福な死。十一時五分過ぎ、最愛の友はこときれたのです」

葬儀は国葬をもって行われ、王侯から乞食、老人から子供まで参列し、広大な聖母教会には弔問者の十分の一もはいれなかったという。

同年にフランスでは画家ミレーが死んでいる。

コペンハーゲンのアシスタンス墓地の墓には、いまも花が絶えない。（山室静『アンデルセンの生涯』より）

ワーグナー（一八一三――一八八三）

ワーグナーは以前から狭心症の持病があった。一八八三年、彼はその前年からヴェネチアのホテルの二階十六部屋をすべて借り切って滞在していたが、二月十三日午後二時、

彼が机の前に坐り、嘔吐しながら苦しんでいるのを召使いが見つけた。

「医者と妻を！」と、彼はうめいた。妻のコジマが駈けつけて、いつも使いつけている薬を飲ませたが、何のききめもなかった。召使いが窮屈な衣服をぬがせにかかると、ワーグナーは「私の時計を！」と、いった。それを最後に彼は妻の腕の中でこときれた。

二月十六日、防腐処理をされた彼の遺体がドイツのバイロイトに帰るため、青銅とガラスで出来たすばらしい棺に入れられ、黄金の獅子の飾りのついた死者のためのゴンドラに乗せられて、サンマルコ広場から離れたとき、「神々の黄昏」の葬送行進曲が奏でられた。

日本では明治十六年、岩倉具視の死んだ年。

水野広徳（一八七五——一九四五）

三十歳のとき海軍大尉、水雷艇長として日本海海戦に参加し、東郷大将から感状まで授けられた水野広徳は、明治四十四年、右海戦を活写した『此一戦』を書き、陸軍の『肉弾』とならぶ大ベストセラーとなった。

しかるに彼は、その印税を旅費として大正五年、第一次大戦中のヨーロッパを視察し、ついで大正八年、戦後の惨澹たるヨーロッパを再視察し、戦争の害悪と、特にかつて軍国主義国家にして敗戦国になったドイツの悲惨な姿をまのあたりに見、日本の未来に思いをいたして慄然とした。

かくて彼は熱烈な不戦論者、平和論者となり、大正十年四十六歳のとき、ついに海軍の現役を退き、民間にあって右の思想にもとづく行動や著述に身を挺したが、彼の行為はことごとく弾圧され、著書のほとんどは発売禁止となった。

昭和十二年、ときの海軍大臣永野修身に『海軍の自主的態度を望む』と題する公開状を発表したが、同時に、万一のテロにそなえてであろうか、ひそかに遺言状をしたためた。

「——陳ば小生此度人生の召集を解除せられ、元体に復帰の為め、本日永遠の旅に上ることと相成候。自由と良心とを喪失したる人間界に何の未練も無之、七生は愚か二度と生まれこようなどとは夢更思い申さず、之が永劫の訣れと思えば誠に御名残惜しき極みに御座候」

七生云々はもとより「七生報国」を皮肉ったものである。

——当時名古屋にあって反戦の論陣を張っていた桐生悠々は彼より二歳年上であったが、やがて悠々も書く遺言状と、

符節を合するものがある。

しかし、日本はこの年の日中事変から太平洋戦争にのめりこんでゆき、彼はなお生きてその末路まで見なければならなかった。

昭和二十年四月、七十歳の彼は、愛媛県越智郡津倉村に疎開して農耕生活にはいった。彼の東京三軒茶屋の家は空襲で焼かれ、その著書や寄稿文の切抜きなどはすべて焼失したのに、日本の上空を飛ぶ米機からは、かつて彼が「中央公論」に発表した平和論の抜萃がビラとなってまかれた。

日本は水野の予言通りに潰滅した。明治の軍人魂によって愛国的平和論を説いた彼は、自分の予言の的中したことに快哉をさけぶことなく、おそらく慟哭したことと思われる。

敗戦直後の十月十八日、彼は腸閉塞を起し、今治市の病院に運ばれたが同日死去した。

水野は知らなかったが、彼が『此一戦』を書いた年に生まれたただ一人の息子光徳は、終戦前日の八月十四日、フィリピンで戦死していた。

真山青果（一八七八——一九四八）

敗戦直後の秋、沼津に疎開していた劇作家真山青果は、娘の美保が家を出、新劇女優になるといい出したのに激怒した。

美保はいった。「お父さん、あなたは私をどういう娘に育てましたか。お父さんが教育した方向へ、私は一人立ちしてゆくのです」

青果はまっ青になり、火鉢にのせた指をふるわせていった。

「貴様は真山の家をどうする気だ。貴様は真山の家の犠牲になるのだ」

これが、それまでの数多くの史劇で、「おれはおれのために生きる」とさけぶ主人公を好んで登場させ、いまや六十七歳になった老作家のうめきであった。

「お父さんは私を侮辱するのですか。私は私のための生命です。まさかあなたがそんなことをいうとは思わなかった。もうあなたと話し合う必要はありません」

美保はさけんで、家を飛び出した。

三年後の昭和二十三年三月二十五日、脳溢血で青果は死

んだ。
「誰もいない沼津の間借の十畳の間で、本当にひとりぼっちで」
　と、駈けつけた美保はいい、しかしその死顔は「もう何年も何年も見せたことのない、静かな顔であった」と書く。

広田弘毅（一八七八――一九四八）

　日中事変勃発当時の外相であった広田は、昭和二十一年一月十五日、巣鴨拘置所に拘引され、A級戦犯として極東国際軍事裁判にかけられた。
　それ以来、裁判のひらかれる日は、雨の日も風の日も、次女の美代子、三女の登代子の姿が傍聴席に見られた。夫人はほとんど巣鴨を訪れなかったが、五月十四日、珍しく広田に面会にいった。そして四日後の五月十八日夕刻、遺書も残さずに自殺した。面会時、広田との間にいかなる話があったか、知る者はない。
　夫人の死を知らされたとき、広田は深くうなずいただけで、一語ももらさなかったという。――夫人の自殺は、当時は秘され、のち昭和二十八年の広田弘毅追悼会ではじめて一般に公表された。
　拘置所で広田は終始平静でおだやかであった。同室の戦犯がトランプや碁をやるのを、そばで黙々と見ていた。トランプも碁も知っているのに、いちども手を出さなかった。
　そして彼は、法廷で弁明のために、ついに証言台に立たなかった。弁護人が言葉をつくして勧めても、「私は立ちません」と、すげなくことわった。「もしものことがあったら御家族もあきらめきれないでしょう。あなたのお嬢さんたちのためにも立って下さい」といわれたときも、「なに、家族の者は覚悟しているでしょう」と簡単に答えた。
　二人の娘の訪れに、二十一年の秋から、満州からひきあげた長女の千代子が加わった。広田は傍聴席の娘たちをちらっと見て、しずかに微笑するだけであった。
　しかし、判決最終日の前日の光景について、同囚の重光葵は書いている。「十一月十一日、その日の法廷を終えて我々のバスが市ヶ谷の地獄谷を下って行った時に、広田君の令息や二令嬢が正門の側に立ってハンカチを振っている姿を、目かくし窓のすき間から見つけた広田君が、席から立ち上って気も狂わんばかりに帽子を振ったのは、静かなる広田君の平生を知る同囚者の眼に深い印象を残した」
　その翌日、昭和二十三年十一月十二日、判決の日、広田は瞑目して、ウェッブ裁判長の宣告を聞き、デス・バイ・

ハンギングのところでちょっと眼をひらいたが、静かにイヤホーンをはずした。そして傍聴席の令嬢たちを見あげ、会釈し、いつものように微笑して去った。
　彼は本裁判において、太平洋戦争に対する日本の共同謀議の共犯者（訴因第一）、中国に対する侵略戦争の責任者（訴因第二十七）、戦争中の残虐行為の責任者（訴因第五十五）として有罪を宣告されたのだが、実質はその最後のもの、中でも南京大虐殺の罪を当時の外務大臣として問われたものであった。
　この事件において「彼の不作為は犯罪的な過失に達するもの」と判決文にあるが、しかし軍人のやった行為で外相を死刑にするとは非常識である。
　当時の首相近衛文麿が生存していたなら広田は少くとも死刑をまぬがれたにちがいない。彼は近衛が自殺したために身代りとしてその罪を負わされたものと思われる。
　十二月二十三日、絞首刑執行のとき、その直前に執行された東条、松井、土肥原、武藤らの「天皇陛下万歳」の声が聞えて来た。広田は花山教誨師をふりむいて、「いま、マンザイをやりましたね」といった。
　そして、彼と同時に処刑される板垣と木村が万歳を唱えたときも、彼だけは黙っていた。
　十二月二十三日の午前零時二十分、彼は絞首台の穴から消えた。

宇野浩二（一八九一――一九六一）

　宇野浩二は、昭和二十八年、六十二歳で、生まれてはじめてみずから進んで社会的事件とかかわり合った。「松川事件」である。彼はこの事件の被告たちの手記を読んで、文学者としてその無罪を信じ、親友の広津和郎とともにその救援に乗り出したが、その秋、喀血した。
「その間、二年、三年をへだてて浩二は喀血している。そのたびに床に入って寝て暮し、少しよくなるとすぐ起きて外を歩き、快方に向うと旅行を試み、そして、また喀血しては床へ戻って寝るという生活が、足かけ九年つづいたのだった。しかもその床は、若い頃からの習慣である『万年床』であった。誰がみても、蒲団に入っている浩二は、それこそ『自然』なのであった」
　と、水上勉は書く。
「三度の喀血をみたのだから、老人結核とは素人でもわかるはずなのに、先生は固く医者を拒否した。そして、陽当りへ出てはカナリヤに餌をやり、気の向く編集者が来れば

玄関に坐って、客は三和土に立たせたままの長話だった。そのときすらも先生は片手にチリ紙の束を放さず、咳込めば痰が出ていた。顔も蒼く、手足も骨ばり、異様な病人相ではあったが、しかし、誰もそれほどの『重病』の人とは思わなかった。これは、先生の悲劇である」（水上勉『宇野浩二伝』）

昭和三十六年九月十九日、彼は水上勉を呼び、蒲団に横たわったまま、にらみつけて、

「水上さん、ぼくにいま残念なことは、躯が……躯が弱っていることです。それだけです」

と怒ったようにいった。

「先生は、書けなくなったわけではない。書かねばならぬことが、まだ残っていたのである」と、水上はいう。その言葉は、それにもかかわらず躯がいうことをきかない「文学の鬼」の妄執の言葉であった。

それから三日目の二十一日、宇野浩二は洗面器一杯くらいの大喀血をして死んだ。

――宇野浩二は、三十六歳のとき梅毒に因する精神異常を起したことがある。

「ジフィリス（梅毒）で精神異常を起すと、早く死ぬものが多いが」と、広津和郎はいう。「その後三十年以上も生き、而も代表作と云えるようなものを幾つも書いているその強靱さに、寧ろわれわれは驚嘆すべきではないか。医学的に見ても、これは奇蹟なのではあるまいか」

吉川英治（一八九二――一九六二）

吉川英治は、昭和三十六年春ごろから健康がすぐれなかった。彼自身が書いた年譜に、三月「このころより机忙おりおりに疲労を覚ゆ」四月「（京都より）帰京後下痢、疲労甚し」五月「疲労深し」六月「（ゴルフ）アウト8番にて気分すぐれず落伍する」などの文字が見える。

しかし彼は、三十三年一月以来、『毎日新聞』に『私本太平記』を連載中で、七月になって軽井沢の別荘に出かけた後も、その執筆をつづけなければならなかった。

八月中、「夜々烈しい咳痰に悩まされて睡眠も浅く、異状ただならぬ容体をひそかに思う」「このころより咳痰に血線を見る」（自筆年譜）

九月、軽井沢でゴルフ中、吉川が力のない咳をしているのを見た川口松太郎夫妻は、その前夜テレビで千葉医大の中山恒明教授の肺ガン手術とその解説を見たこともあって、吉川のようすに思い当ることがあって、面を犯して然る

べき病院の本格的な診断を受けることを忠告した。

しかし、吉川は原稿の義務に従う。

「九月、『私本太平記』の完結、あといくばくもなし。一日一回の稿も、ようやく心身を削るの思いをなす。厠に立ちては中二階の階段をはうて机に戻るの有様に至る。血痰も日毎に濃く、疲労はなはだし。食欲、体重すべて減る」「軽井沢診療所より日々往診を乞うて当座の注射などを受けつつ稿をつづけ、からくも月末二十七日、最後の一稿を毎日の村松学芸部長に手渡して、何かと連載四年間の社の好意を謝す」

その夜、待ちかねたように慶応病院の笹本浩助教授が東京から来診し、一刻の猶予もなく入院手術すべきことを伝えた。

しかし、彼にはまだ雑誌「日本」に連載中の『新・水滸伝』を書く仕事が残っていた。彼はなお数日の猶予を乞うてその原稿を書きあげた。吉川英治は自分の仕事に最後まで渾身の力をふりしぼったのである。

原稿は二十三枚でとまり、その末尾に「余儀なく今月は短章に終る。読者諸子の寛恕を乞う」とあるのが、読者を大切にする大作家吉川英治の読者に対する最後の文章であった。

――かつて秘書をしていた田中義一は記す。

「（小説武蔵を）起稿されてからの先生は、日夜、彫心鏤骨の連続であった。徹夜明けの早朝、先生が寝室へ戻られたあとの書斎は、もうもうとたばこの煙がたちこめていた。そのたばこのけむりを裏付けるように、何十本もの吸いがらが、火桶に突きさされ、散乱した書反古原稿とともに、先生の体臭まで匂ってくる程、生気を注ぎこんでおられた跡がのこっていた」

おそらくこれは吉川英治の生涯を通じての光景であったろう。この鏤骨のけむりが凝ってガンをなしたとしてもふしぎではない。

彼が慶応病院に入院したのは、十月二日のことであった。

「三日以後、連日、手術に備うるための肺、心臓、その他種々のテストを受ける。『日々地獄めぐりのようだ』と笑う。手術は六日と決まる。執刀は石川七郎博士にて、石川氏より病症説明を直接聞く。五日夕、長男英明、大阪より呼び返されて枕頭に顔を見せる。同日深夜は妻とただふたりきりの病室にて、生涯の思いと昨今の感慨とを語り合うて更ける。妻、この夜初めて、余の病症のまことは『肺癌』なることを打ち明ける。あらましは自分にも察しられていたせいか、かえってすがすがしく思う」

それは彼があまりに仕事のことを気にして、病院を逃げ出すことまで口にするので、夫人がついに思い切って真実を知らせたのであった。

「六日、午前九時十五分手術を受け、十二時四十五分終了。もちろん全身麻酔を受けてのこと、何も知らず。十三日抜糸。この日『私本太平記』の連載、紙上にて完結を告ぐ」

手術後の経過は一応良好に見え、十二月三十一日、「試験的」に赤坂の自邸に帰り、そのまま帰りきりになった。

翌三十七年二月十一日のパレスホテルにおける娘の曙美の結婚式には、みずから出席して来賓に挨拶したほどであった。

しかし、ガンは再発した。石川博士のレポート。

「七月十日朝、吉川夫人から青天霹靂の電話を頂いた。吉川氏が急に意識不明になられたというのである。急いでかけつけて診ると、意識はやや恢復していたが応答が明らかでなく（失語症）記憶喪失があるようであった。神経学的には特別の異常はないが、血圧が200〜120mmHgもあった。症状は高血圧性の脳障害か、ガンの脳転移が考えられた。

すぐに近所の山王病院に入院して頂き、長谷和三院長の診療をえた。笹本助教授も往来して、高血圧に対する治療が行われた。そのころ、私は、初めて、吉川氏の左鎖骨上窩に、かすかではあるが硬い膨隆を認めた。やはりリンパ節転移があったのである」

以後吉川は植物人間のようになったが、いちど夫人の激励に応えて、紙と鉛筆を求め、たどたどしく、

「ヨ　ク　ナ　ル」

と書いたことがあった。

「しかし、（八月）二十二日午前十一時、三度目の発作が来てしまいました」と、妻の文子は書く。「ほんのわずかな間でございましたが、その瞬間、何かおそろしいものにでも取りつかれたように、大きく目を見開きました主人の表情を、私は忘れることが出来ません」

石川博士のレポート。

「九月七日午前二時、輸血が進むにつれて、血圧110　脈搏124　呼吸46という状態に安定した。

この頃、報道関係の方々と第一回の会見をして病状を伝えた。御臨終は時間の問題であろうが、現在は持ち直して落ち着かれたとのべた。この時から午前五時頃までは、全く同じ状態が続いたが、その後、徐々に、灯の消えてゆくような感じが、吉川さんの脈をはかり続けている私の肌に伝わって来た。脈搏数が110，100と下がり、呼吸数が35

に減った。しかし、これは好転の徴ではなく、全身が疲れ、心臓が弱った証拠にほかならなかった。私と米山博士とは、もう医師として、何もすることのできない自分達を悲しみながら、ただ脈をみ続け、酸素テントのビニール膜を通して吉川さんの顔色をうかがっていた。

吉川さんは、そのとき、房々した黒い髪を少し乱し、顔を右側に向け、眼をとじて、あえぐような呼吸をしていた。咽喉部には、気管切開孔があり、その金具が呼吸とともに動いた。痩せが目立ちはじめていたが、皮膚はきれいで、浮腫や出血はどこにも見られなかった。何者かが、この人の生命を、ある一点でおさえて、とどめを刺している。自分達はそれに対して、対抗するすべがなく、ただ吉川さんの死を待っている、という感じであった。

九月七日午前九時九分、吉川さんは、あえぐように、大きい呼吸を四つ五つしてから、永久にその呼吸を止められた。同時に心臓は、永い酷使から解放されたように、その働きを止めた」

吉川が文字通りかくも「死力」をしぼった『私本太平記』は、いかんながら吉川作品中決してAクラスのものではないが、しかしその死に方はまさしくAクラスというべきものであったといえる。

高群逸枝（一八九四——一九六四）

日本は上代、母系制社会であったとして、彼女以前の男性史学の通念をひっくり返した独創的な研究にとりかかったのは、昭和六年彼女が三十七歳のときであった。

以来、逸枝を不世出の天才とし、かつまた聖女と信じる三歳年下の夫、橋本憲三は、その生活のすべてを——ふつうには女性の役割とされている炊事洗濯に至るまで受けもち、そのおかげで逸枝は研究に全力をそそぐことが出来た。

逸枝が十四年かかって大著『招婿婚の研究』を完成したのは、昭和二十八年であった。しかし彼女は日記にかく。

「朝日に『招婿婚の研究』の批評のる。ごく小さく片づけている。前人未到の大著とか、努力と精進は驚嘆に値するとかの文字はあるが、書評らんの最下段に僅か十数行」

彼女が生涯をあげてとりくんだのは、経済的にひきあわぬことはいうまでもなく、在野の女性史家として学界から冷ややかに黙殺されるおそれの充分ある仕事であった。

その後彼女は自伝『火の国の女の日記』を書くことにかかったが、その半ば、昭和三十九年にはいったころから全身に甚だしい疲労をおぼえ、視力が衰え、かつ四月から激

痛を伴う顔面疱疹にかかった。

病状ようやくただごとでないと知って、憲三が彼女を国立東京第二病院に入院させたのは五月十二日であった。後援者の市川房枝らが、医者から聞いたガンの診断を憲三に告げると、思いもかけなかった憲三は椅子から崩れおちて失神した。

逸枝はガン性腹膜炎を起し、六月七日、大吐血とともに息をひきとった。

わが道はつねに吹雪けりさりながら　逸枝

最後の日の、七十歳の妻と六十七歳の夫との対話。

憲三「私はあなたによって救われてここまで来ました。無にひとしい私をよく愛してくれました。感謝します」

逸枝「われわれはほんとうにしあわせでしたね」

憲三「われわれはほんとうにしあわせでした」

常人の眼から見れば、デーモンに憑かれたような著作への共同の苦闘、社会からの孤絶、夫婦間の「聖愛」——異常としか見えない性格と生活を持った逸枝と憲三は、この入院から死に至るまでの手順や手ちがいで、市川房枝ら庇護者たちと衝突し、その葬式には後援者のほとんどが姿を見せなかった。

逸枝の遺言により、彼女と憲三が昭和六年以来三十余年住んでいた世田谷の、三十坪ばかりのペンキのはげた洋館、いわゆる「森の家」は、夫憲三の手により、昭和四十一年に解体され、家財道具はもとより、おびただしい研究資料も、彼女が愛用していたマンドリンまで一切焼却された。

大宅壮一（一九〇〇——一九七〇）

生来健康で病気ひとつしなかった大宅壮一は、昭和三十八年六十三歳の夏ごろから異常にふとり出し、一メートル六十八の身長で体重九十キロを超えるようになり、書庫の階段を一段ずつ上るたびに立ちどまって、呼吸を整えなければならないありさまになった。

医者に体重をへらさなくてはいけないといわれ、心理学者の宮城音弥にコンニャクをすすめられ、以来主食をコンニャクとし、その結果体重はたしかにへったが栄養失調をきたし、ライフワーク『炎は流れる』も中断する羽目になった。

昭和四十一年、六十六歳のとき愛児歩の夭折に逢い、彼の衰えは人の目に立つほど進んだが、しかし仕事とマスコミに対するサーヴィスはなお馬車馬のように超人的で、最後の三年間も毎年外国旅行をやめなかった。昭和四十五年一月に西サモア、フィジー、トンガ諸島を訪問し、西サモアの大酋長に任じられたが、その旅行中も、見ていてもいたいたしいほどの歩行ぶりであった。

その年十月二十六日、山中湖の山荘で急に息苦しさを訴え、同日急遽帰京して東京女子医大心臓血圧研究所に入院した。

十一月十六日には妻の昌子に「こんな苦しいなら、一服盛ってもらったほうがいい」と弱音を吐いたが、失禁状態のためおむつをあてがう娘の洋子には、薄目をあけて、「洋子か、ふるさと見学だな」と、いった。

しかし、医者のいうことは実によく聞き、手と足に点滴を受けながら、「動かないように」といわれると、小学生のように手を太腿の上にのせてじっと動かなかった。

草柳大蔵は記す。

「十一月十八日のことだった。大宅氏は昏睡状態から醒めると、『ああ、ハラがへった。なにか食うものをよこせ』といった。絶体絶命のピンチに追いこまれて、酸素吸入まではじめた病人がどなったのである。彼はまず、酸素吸入のための幕をうるさがった。

『なんだ、これは。こんな邪魔くさいもの、早くとってくれ』

彼は、見舞客のために用意した幕の内弁当の中から小さな枕のようなニギリメシ一個とカエデの葉くらいの鳥肉ソテーをむしゃむしゃと食べた。それからは、入ってくる見舞客約六十人に対して、仕事の上のアドバイスを与えたり、女性関係をからかったりして、しゃべりつづけた。この饒舌は午前五時まで続いた。

翌日また昏睡に入った。その翌日は、睡りながらも意識はハッキリしていて、『講演にゆかなけりゃなあ』といい、『それには入歯をなおさんと、どうも具合がわるい』とつぶやいたりしている。（中略）

交代で病室に入ってみると、大宅氏は小さなシャックリを繰りかえしながら、ベッドに斜めになっていた。十月二十六日の入院以来剃らなかったヒゲがのびて、ちょっと愛嬌のある顔が赤く輝いている。（中略）

ふつう、臨終にある病人は、小さくしぼんで、見る影もない姿になるものだが、大宅氏はすこしもかわらなかった。一カ月も点滴だけで生命を支えてきたというのに、掌にも足にもふっくらと肉がついていて、身体のムキをかえるのにも四、五人がかからなければ動かせないほど重かった。藤倉医師の聴診器があてられている胸は、胸廓がぐっと張って、農民や筋肉労働者のような盛上りを見せていた」

十一月二十二日午前三時四分、いちど心臓が停止したが、また戻り、三時四十三分に永遠にとまった。死ぬ直前に妻に、「おい、だっこ」といったという。
　実際はガンであって、医者が大宅の気力を信じてこれを告げたところ、大宅はショックのため三日間ベッドの上で毛布をかぶって動かなかったというゴシップが伝えられたが、草柳はいう。「大宅氏の死因は『動脈硬化症による腎不全および心不全』ということであって、たとえばガンとか蜘蛛膜下出血というような決定的な因子があったわけではない」

サトウハチロー（一九〇三――一九七三）

「ちいさい秋見つけた……」の詩一篇だけでも、かつて不良少年であった彼は父紅緑の全仕事を凌駕するかも知れない。
　サトウハチローは、昭和四十八年十一月三日「勲三等瑞宝章」を受賞した。その夜彼は妹の佐藤愛子にテレたようにそのことを報告し、愛子は「お兄さんが勲章をもらうようでは、日本も落ちるところまで落ちたわね」と冗談をいった。それでも十二月三日には、家族、親戚だけで叙勲パーティをやる予定だった。
　ところが十一月八日、急に気分が悪くなり、築地の聖路加病院に入院した。心臓の不整脈と診断されたが、その後経過はよく、十一月十三日はベッドの上で腹這いで原稿を書いたくらいだった。
　ところが午後二時半ごろ、腹がへった、飯を食うか、といい出し、時間はずれなので夫人が昼食を用意した。そしてベッドの上で肉を口にしたとたん、突然前のめりに倒れた。夫人があわてて肉を口から出してやったが、そのとき入歯もはずれてしまった。すぐに酸素吸入が施されたが、三時二十二分、心臓が停止した。
　入歯のない口をあいたままであったので、夫人があごの下にタオルを入れて閉じさせた。

戸村一作（一九〇九――一九七九）

　若いころからクリスチャンの反戦主義者であったが、家業の農機具修理と二科展の彫刻家として静かな生活をしていた戸村は、昭和三十八年、成田国際空港設置に地元民代表として反対同盟委員長となったが、四十三年、デモ隊と機動隊の衝突に際し、機動隊のために大けがをしてから、

いよいよ政府への抵抗の権化となった。
　彼は「廃港」へむけて徹底抗戦を唱え、五十二年四月、妨害鉄塔撤去後の集会では、「平地に波瀾を起そう。内乱と暴動を起そうではないか」と絶叫した。老いの姿に白いヘルメットをかぶった姿はいわゆる成田闘争のシンボルとなり、国家の権力も手がつけられなかった。
　が、昭和五十四年夏ごろから彼は病んだ。国立がんセンターの中沢英一運営部長は語る。
「入院は八月二十七日。病名は悪性リンパ腫というんですが、これは簡単にいうと血清の病気で、全身が腫れて衰弱する。わりと珍しい病気です。罹患はかなり前からだったんじゃないでしょうか。
　こちらに来ても、手術ができる病気ではないし、放射線も体の衰弱で無理。結局、化学療法（制ガン剤）一本で行くしかなかったわけです。この病気はリンパ腺の機能がやられるわけですから、他の病気への抵抗力も弱くなる。そっちの方にも気を配らないとなりませんでした。ですが、苦痛はさほどひどくなく、ちょっとトイレに行くぐらいはできる病気なので、ハタ目に見ていていたわしいという感じではありませんでした。食事だって普通にとってらした。
　九月中ごろは、顔色も良く、病状も好転しまして、一時、腫瘍の進行も止ったかなと思われたんですが、十月に入ってからは食べ物がのみ込めなくなり、栄養不良の感じになってしまった。病状が目に見えて悪化したのは亡くなるほんの少し前からで、約二カ月の入院生活は、非常に平穏なものでした。
　亡くなられたのは十一月二日午前十一時三十一分、全身の衰弱で、意識がとぎれ、呼吸の間が長くなり、ふっと息が止って御臨終でした」（「週刊新潮」昭和五十四年十一月十五日号）
　意識を失う前、かすかに笑みをうかべ、夫人につぶやいたのは、「デモは出発したか」という言葉だった。

大平正芳（一九一〇――一九八〇）

　大平正芳は一見茫洋たる風貌に似ず、その内閣は国民を驚かせることが多かった。
　昭和五十三年十一月、自民党総裁予備選で、大平は幹事長として、首相の現職にある福田赳夫を大差で破って福田を茫然自失させた。こうして誕生した大平内閣は、一年後、絶対の自信をもって総選挙をやったが、投票日全国的な大嵐のためもあって自民党は過半数を割る敗北を喫して、こ

んどは大平が茫然自失した。

総辞職をすすめる福田に彼は、「辞めろということは死ねということか」といい、まるで『婦系図』のお蔦のせりふのようだと笑われた。そして五十五年五月十六日、野党の不信任案が自民党反主流派のだだっ子的欠席により可決されるという、あり得べからざるハプニングによって解散となり、この結果には与野党ともにびっくり仰天した。

しかしこの総選挙に大平は異常にハッスルし、五月三十日、遊説第一日で、彼には珍しい絶叫型の街頭演説を行ったが、その夜倒れて虎の門病院に入院する羽目になった。平生頑健を誇っていただけに、だれよりも本人が驚いた。

病院では狭心症と診断され、その後の経過は順調と伝えられ、当人も六月二十二日に予定されているヴェネチア・サミットに出席するつもりでいた。

六月十一日には「一日一日とよくなっている感じだ。この程度のことでなんで入院しているのか」と森田秘書官にいい、また伊東官房長官に、「おれやお前は、ひとにいやがられるほど長生きするんじゃないかな」といった。そして本屋から本を五冊買って来させた。昼食からは、それまでのおかゆが御飯になった。夕刻には桜内幹事長から選挙戦の情報の報告を受けた。おそらく彼は、「生還」の確信を持ったであろう。

しかるにその夜半が過ぎた六月十二日午前二時二十五分、彼は突如不整脈によるショックを起し、心筋梗塞によって午前五時五十五分に死去した。

このショックを起した時間から見て、大平が何か夢を見て、それが生死のきわどい一線上に鼓動していた心臓に影響を与えたということは充分考えられる。果してしからば、彼の見た最後の悪夢はいかなるものであったろうか。それまで不本意に政権の座からひきずり下ろされ、「ナマ乾きのホトケ」といわれた彼の政敵たちのだれかの顔であろうか。

オーソン・ウエルズ（一九一五——一九八五）

一九八〇年「キネマ旬報」（十二月下旬号）がえらんだ「外国映画史上・ベストテン」の第三位が、彼の主演した「第三の男」で、第四位が、彼の監督主演した「市民ケーン」である。（ちなみに第一位は「天井桟敷の人々」）

ラジオドラマ「火星人襲来」で全米をパニックにおとしいれたのが一九三八年、彼が二十三歳のとき。右の「市民ケーン」が一九四一年、二十六歳のときである。

このころに得た怪物的天才・神秘的名優の名は伝説的な栄光となって彼を一生食わせたが、一方で彼自身を縛りつけて、いつまでも怪物的天才・神秘的名優としてふるまおうとした。そのためかハリウッドと合わず、生涯ヨーロッパや中南米での仕事が多かった。強烈なエゴイズムのゆえか三人の妻とも次々に離婚し——その中には女優リタ・ヘイワースもいた——晩年はさびしい独り暮しだった。

それでも一九八三年のカンヌ映画祭で賞を与える役目で舞台に登場したオーソン・ウエルズには、受賞者（日本の「楢山節考」の今村昌平たち）よりも大きな拍手が送られた。

しかしこのころ彼は百四十キロに肥満し、糖尿病に苦しんでいた。その後一年間に二十三キロも減量したのがたたったのか、一九八五年十月十日朝、ハリウッドの自宅のベッドで、バスローブ姿でひとり息絶えているのが、運転手によって発見された。糖尿病による心臓発作を起したのであった。

同日に、精悍な坊主頭をトレードマークにし、映画やミュージカル「王様と私」で知られた俳優ユル・ブリンナーが、肺ガンのため六十五歳で死んだ。

「生はやがて終るからこそ、人間は生をエンジョイするのである。死こそ生の最高の味付けだ」

——オーソン・ウエルズ——

七十一歳で死んだ人々

おいとまをいただきますと戸をしめて出てゆくやうにはゆかぬなり生は

——斎藤史『ひたくれない』——

近松門左衛門（一六五三——一七二四）

六十七歳で『心中天網島』、六十八歳で『女殺油地獄』、六十九歳で『心中宵庚申』などの傑作を書いた近松門左衛門は、享保九年初冬、しかし、みずからの画像に賛をして次のごとくしるした。

「……市井に漂いて商買知らず、隠に似て隠にあらず、賢に似て賢ならず、物知りに似て何も知らず、世のまがい者、唐の大和の数ある道々、技能、雑芸、滑稽の類まで知ら

ぬ事なげに、口にまかせ筆に走らせ一生を囀り散らし、今わの際に言うべく思うべき真の一大事は一字半言もなき倒惑」

大作者として、これ以上真率痛切の言葉はあるまい。作家の「最後の文章」中の最高作であろう。

その年の十一月二十二日に彼はこの世を去ったが、日本のシェクスピアとうたわれるほど人間の万象を描きつくしながら、彼自身はどこで、どんな風に死んだのか、妻子はいかなる人であったのか、正確なところは不明である。

デフォー（一六六〇――一七三一）

メリヤス商、貿易商、煉瓦商などの商人をやったり、反政府党の兵士となったり、政論家となったりする間、入獄したり国外逃亡したり、波瀾万丈の人生を経験したダニエル・デフォーは、五十九歳のときに書いた『ロビンソン・クルーソー』で一山あて、以後臆面もなく同傾向の作品を書きまくって巨富を得たが、六十九歳のとき大邸宅から姿をくらまして小さな隠れ家にひそみ、七十一歳のとき寂しくこの世を去った。

ぜいたくな生活の結果負債が山積したせいとも、不肖な息子との不和のせいともいわれる。

死んだとき、当時の週刊誌「ユニヴァーサル・スペクテイター」は、「過日ダニエル・デフォー氏逝く。氏は多数の著作を書いた知名の人」とだけ報じ、『ロビンソン・クルーソー』については、一語もふれなかった。

ただ「多数の著作」の中に十把ひとからげにされたこの著書は、しかしその後、その一篇だけ不朽の生命をもって伝えられるようになった。駄作ばかりの量産作家も、希望を失ってはいけない。

本居宣長（一七三〇――一八〇一）

生来蒲柳の質に見えたが、しんは意外に丈夫で大病もせず、ただ自分の学問の道をうまずたゆまず歩みつづけるのみの日常生活に、ほとんど奇談逸話のたぐいを残さず、自説に対する自信過剰の気味はあったが、人格もおだやかで、これといった破綻も弱点もなかった宣長が、死の一年前に作った遺言書だけは異常なものであった。

それは家督や遺産についての指示ではなく、自分の納棺、葬式、戒名、位牌、墓地、供養について、微にいり細をうがち、図入りで説明した長文のものであった。

「彼は遺言書を書いた翌年、風邪をこじらせて死んだのだが、これは頑健な彼に誰も予期しなかった出来事であり、彼の精力的な研究と講義とは、死の直前までつづいたものであって、精神の衰弱も肉体の死の影も、彼の遺言書には、先ず係わりないのである」（小林秀雄『本居宣長』）

遺言書を書いた一年後の享和元年九月十七、十八日ごろから彼は風邪をひいて臥床した。二十五日に名古屋の門人宛の手紙に、「愚老儀、去る十七、十八日頃より風邪にて、痰気強くさし起り、大いに悩み申し候。食甚だ少なく大いによわり一向何事も出来申さず候」とある。

それから三日目の九月二十八日から二十九日に移った時刻に、眠るように死んだ。

門人が「宣長喫煙ヲ嗜ムコト甚ダシク、談笑ノ裡、常ニ煙管ヲ放タズ、タメニ室内朦々トシテ白煙満チ、コトニ粗葉ナレバニヤ、臭気甚ダシク席ニ堪エズ」と書いているから、煙草による慢性気管支炎の気味もあったのではないか。それが風邪と老齢のため肺炎をひき起したものと思われる。

「……さて其よみの国は、きたなくあしき所に候え共、死ぬれば必ずゆかねばならぬ事に候ゆえに、此世に死ぬるほどかなしき事は候わぬ也、然るに儒や仏は、さばかり至ってかなしき事を、かなしむまじき事のように、いろいろ理屈を申すは、真実の道にあらざる事、明らけし」（本居宣長『答問録』）

司馬江漢（一七四七――一八一八）

「我若き時より志を立てん事を思い、何とぞ一芸を以て名をなし、死後に至るまでも名を貽すことを欲して」

と、のちにその著『春波楼筆記』に書いた司馬江漢は、その一芸を絵に求め、はじめは浮世絵を学んだが、平賀源内を介してオランダ趣味を養い、オランダの百科事典のエッチングの項を研究して、日本最初の銅版画を作り出した。天明三年、三十六歳のときであった。「江戸の西洋画士」と呼ばれるゆえんである。

江漢は銅版画を通じて西洋を知り、近代的な科学思想の持主となった。「大と小とは限りなき事にて、又その先は人力にては知られず」の言葉は宇宙の無限と原子の極小を暗示しているかのようであり、「喰ふてねるつるんで迷ふ世界虫上天子より下庶民まで」の歌は彼の人間平等観を表現している。

この思想は、生来の皮肉、自嘲の性格と重なって、晩年には一種のニヒリストとなったらしい。

文化十年、六十六歳のとき彼は、「今は画も天文も窮理もおらんだも不残あきはて困入申候」という心境になり、蒸発を試みて、自分の死亡広告をチラシにしてくばった。

「江漢先生老衰して画を需る者ありと雖描かず、諸侯召ども往かず、蘭学天文或は奇器を巧む事にも倦ミ、啻老荘の如きを楽しミ、（中略）相州鎌倉円覚寺誠拙禅師の弟子となり、遂に大悟して後病うて死にけり」

このころから彼は、自分の年を九歳もサバを読んだ。ただし年上にである。

しかし、天性自己顕示欲からのがれられなかった江漢は、やがて円覚寺からぬけ出して江戸に帰った。翌々年の六十八歳のときの知人への手紙。

「……今麻布岡崖（笄町）の辺地へ庵を結び一人の老婆を遣い、安居仕候。（中略）去年八月、死たると申事を世上に告げければ、訪人一人もなし。比間になりては不死事を漸く知り、今にては段々と人尋申候。夫故又々蘇生して詩文書画の才子となり、亦如旧」

それでも、町で人が呼びかけると、死んだ人間が口がきけるか、といって知らん顔で立ち去ったという。

そして三年後の文政元年十月三十一日に、こんどはほんとうに死んだ。

なお彼は随筆『春波楼筆記』に、彼が熱海滞在中、阿波侯の別荘から早朝も弓弦のひびきが聞えるので、阿波侯は暗君と伝えられるが実はそうではないのではないか、と書いた。この一節をのちに吉川英治が読んで、『鳴門秘帖』の構想が成ったという。

無といふもあたら言葉の障かな
むとも思はぬ時ぞむとなる　　司馬江漢

松平定信（一七五八――一八二九）

文政十二年三月二十一日、江戸で焼失家屋三十六万七千戸、焼死者二千八百人の大火があった。焼け出された人の中に十返舎一九もいた。

原因は神田の一商店の奉公人が煙草の吸いがらをカンナ屑の中に落したことによるものだが、その処分は、「……不届につき江戸払い申しつける」というもので、その判決文も現代と大差なく、日本の裁判が当時からきわめて近代的なものであったことがわかる。江戸時代だからといって、ムヤミヤタラに火あぶりにしたわけではないのである。

それはともかく、いわゆる寛政の改革をやった松平定信は、すでにこのころ隠居となって久しかったが、この火事で上屋敷、中屋敷、下屋敷すべて焼き払われ、親類筋の松山侯の屋敷の一部を借りて暮すことになったが、二カ月後の五月十三日、卒去した。前年の暮まで毎日剣槍の稽古をするほど健康であったが、病名不明。

大名の隠居で、いっときは老中までした人物が寄宿先の家で死んだのは例がなく、ために「十万石の宿なし」といわれ、改革で民をしめあげたタタリだとも噂された。

ドーミエ（一八〇八――一八七九）

十九世紀後半フランスで、痛烈な政治諷刺の石版画四千枚を残したドーミエは、絵とはうらはらに一見やさしくお人好しの人間に見えた。少なくとも牡牛のようにずんぐりした短軀は頑健そのもので、創作能力も半永遠的なものに思われた。

しかしその彼も、夜明けまで蠟燭の光で細かい石版画を描きつづける習慣のせいか、一八六七年――五十九歳のころから、眼の異常を訴えるようになった。

五年後には、画中の線が思うように重なり合わないようになった。

七三年の春のある夜から瞼が垂れ下がり、やがて片方の眼が閉じたままになり、七八年にはもう一方も同様になり、ついに完全に失明した。筋無力症か。

翌一八七九年二月八日、セーヌ・エ・オワーズ県の谷間の村ヴァルモンドワの小別荘を散歩中、突然脳溢血を起し、三日後の二月十一日に死んだ。日本では明治十二年。

古河市兵衛（一八三二――一九〇三）

京都の貧しい豆腐屋の子として生まれ、継母に虐待されて育った市兵衛は、十八で高利貸の手代となり、生糸の輸出商となり、明治九年には元大名相馬家の家令志賀直道と共同で、足尾銅山の経営にのり出す。この志賀直道が志賀直哉の祖父である。

やがて市兵衛は日本の銅山王と呼ばれる存在になったが、同時に明治二十年代なかばから、足尾を源とする渡良瀬川の鉱毒問題で悩まされるようになる。もっとも彼は自分の事業は国益と信じ、かつ当時の金にして一千万円以上の巨費を投じて鉱毒の防除工事につとめたが、惨害はやまず、田中正造をはじめとする世論の嵐の中に立った。

市兵衛は明治三チョンマゲの一人といわれ、彼がチョンマゲを切ったのは、やっと明治三十三年、六十八になってからであった。これだけ旧弊で、ともかくも近代技術を要する銅山経営によく成功したものだ。

彼はこのように強情な男であったが——明治三十四年十一月三十日早朝、蒔絵の櫛をきちんと髪にさしたままの女の死体が神田川に浮かんだ。それは市兵衛の妻タメであった。市兵衛の道楽に悩んでの自殺という説もあるが、やはり鉱毒問題を気にやんでの自殺であったと思われる。

田中正造の渡良瀬川鉱毒の惨状についての天皇直訴事件の起ったのは、それから十日後の十二月十日のことである。

そして市兵衛も胃ガンにかかった。——ただしこれは鉱毒問題を気に病んでのことではなかったろう。彼は女道楽は別として、ほかになんの趣味も教養もなく、ただ晩年まで鰻丼でも二人前食わなければ物足りないほど大食で、それもろくに嚙まずにむさぼり食うといった男であったから、そのほうから来た胃ガンであったろう。

大磯や熱海で療養したが衰弱は次第にすすみ、明治三十六年四月五日午後三時に死んだ。

市兵衛は日露戦争の前年に死んだわけだが、日露戦争は軍需資源として銅を絶対必要とし、日本の銅生産量の二〇パーセントを占めていた足尾の存在を絶対必要とした。

古河家は養子の古河潤吉——陸奥宗光の子——がついでいたが、この好機をいかんなく利用して巨利を得——昭和のいまに至るまで第一勧銀をはじめとする古河グループという財閥を残すことになる。

児島惟謙（一八三七——一九〇八）

明治二十四年五月十一日、凶徒津田三蔵がロシア皇太子を傷つけたいわゆる「大津事件」で、ロシアを怖れて津田を死刑にしようとする政府に対し、司法権を盾にとり、それを無期徒刑にとどめることを主張し、ついに屈しなかった大審院長児島惟謙は、これによって護法の偉人の名を残す。

児島は実にその五日前の五月六日に大審院長になったばかりで、あたかも天は彼をしてこのドラマを演じさせるために登場させたかのごとくであった。時に彼は五十四歳であった。

「被告三蔵ヲ無期徒刑ニ処スルモノナリ」という判決が下ったのは、事件後十六日目の五月二十七日であったが、この十六日間で彼は一代の花を咲かせたのである。

しかしこのことによって政府首脳を七転八倒させた彼は、翌年その復讐を受けた。大審院判事の中で花札を弄ぶものあり——待合で部下が花合せするのを、彼もその席にあって傍観していたという風評を立てた者があったが、おそらくは彼を憎む向きからの故意のデマで、部下の行為の責任を取らされて彼は大審院長を追われたのである。

以後彼は衆議院議員になったり、二十銀行頭取になったりして、平凡な晩年を過し、明治三十九年から喉頭結核の症状を現わして病床につき、四十一年七月一日に逝去した。

逝去後、男爵という声も出たが、これまた「大津事件」が障害となって沙汰やみになった。

コナン・ドイル（一八五九——一九三〇）

一八八六年、スティヴンソンの『ジキル博士とハイド氏』が一世を風靡している年、二十七歳のコナン・ドイルは、シャーロック・ホームズがはじめて登場する『緋色の研究』を書いていくつかの出版社に送ったが、みなつき返され、ようやく一社に著作権買切り、二十五ポンドという条件で買いとってもらった。

しかし、シャーロック・ホームズはたちまち全世界に最も愛される名探偵としての存在を獲得し、ドイルもまた四十三歳のときナイトの爵位を授与された。

冷徹奇矯の名探偵ホームズを生んだドイルは、しかし良識の紳士であった。

にもかかわらず、大衆のアイドルとなったこの良識の大探偵作家は、第一次大戦に出征した息子を失ったこともあって、晩年心霊学に凝りはじめ、心霊学に関する論文や小説を書き、持病の心臓疾患をおしてイギリスはもとよりヨーロッパ各地を講演してまわった。

一九二九年晩秋、ついに彼は倒れ、療養の結果、翌年春ごろ回復したように見えたが、夏からまた悪化した。

一九三〇年七月七日朝七時半、衰弱した彼は、ベッドから出て椅子に坐りたい、といった。家人が手をかして、窓に面した柳の枝で編んだ椅子に坐らせた。彼は口をきくのも困難な状態にあったが、二度目の妻ジェーンに向って、

「この地上で最も優秀な看護婦へ、と刻んだ勲章をお前のために作るべきだと思うよ」

と、感謝の言葉をもらした。

開かれた窓の外の芝生はまだ翳っていたが、すでに夏の太陽はのぼっていた。彼の両手を握っていた妻のジェーンと息子のアドリアンは、八時半にドイルがその手を握り返

したのを感じた。ドイルは家族を一人一人見まわし、椅子にもたれかかったままじずかに眼をとじた。
珍しく幸福な作家の、珍しく幸福な死であった。特に彼は「死後の生」を信じていたから。——
この年、ハメットは『マルタの鷹』を書き、クロフツは『マギル卿最後の旅』を書き、カーは『夜歩く』を書き、日本では江戸川乱歩が『黄金仮面』を書いている。

新渡戸稲造（一八六二——一九三三）

日米破局に至る前、アメリカに日本を理解させることに情熱を燃やしつくした代表的日本人。
青年時代クラーク博士に学び、「われ太平洋に架ける橋とならん」という志をたて、明治三十三年に英文『武士道』をアメリカで出版して多数の読者を得た新渡戸稲造は、しかし大正末年からのアメリカの排日移民問題、昭和初年からの日本の満蒙進出問題で、急激に高まるアメリカの日本への悪感情に悩まされつつ右の目的のために努力した。
昭和八年夏、彼はカナダのバンフで開かれた太平洋問題調査会の国際会議に出席したが、カナダ到着後すぐにバンフに赴く車中で激しい腹痛を訴えた。
会議には日本代表の委員長として懸命に日本の弁護に当ったが、ついに入院のやむなきに至った。入院中、「軽井沢の水の音が聴きたい」というので——彼の軽井沢の山荘にはせせらぎの音があった——天井に水槽を吊るし、ゴム管でバケツに落して、その水の音を聴かせた。
一応軽快して退院し、ヴィクトリアで静養し、九月十一日にはドライヴに出かけたほどであったが、その日からまた激しい腹痛を起し、ジュピリー病院に入院した。やがてスプーンも持てないほど衰弱したが、それでも鉛筆で、昭和五年以来「東京日日」のために筆を執っていた『感想文』を、死の三日前まで書きつづけた。
十月十六日午前、手術した。開腹してみてはじめて出血性膵臓炎であることが判明した。手術後、彼はしきりに「足が痛い痛い」と訴え、またまどろみ、ときどき目ざめて手真似で話をしたが、夜にはいって容態急変し、午後八時三十五分に永眠した。病院をつつむオーク樹の森には、冷たい夜の雨がしずかに降っていた。
遺言らしいものはなかったが、重態に陥ってから書いた紙片を判読すると、それはどうやら「外国人の妻（アメリカ人、メリー・エルキントン、日本名万里子）を一人あとに残してゆくが、よろしく頼む」という意味らしかった。

メリー夫人は、夫が死んだあとさすがに落胆して眼をとじていたが、しかしとり乱すこともなく、博士の病状篤しときいて続々輸血を申し出たバンクーバーの在留邦人に対し謝礼の言葉を伝えてくれるように、といった。それはあたかも日本の武士の妻のようであった。
矢内原忠雄はいう。「先生は猛火をおかして飛びこんで消防士の如く自分自身で焼け死しました」

島崎藤村（一八七二——一九四三）

藤村は、昭和十八年「中央公論」新年号から『東方の門』を連載しはじめた。
前年に引っ越したばかりの大磯の別邸で、八月二十一日、その第三回分五十枚を書きあげ、静子夫人に読ませて聞いていたが、その直後脳溢血を起し、二十二日午前零時三十五分死去した。意識不明になる前の最後の言葉は「涼しい風が吹いて来る」というつぶやきであった。
彼はかねてから「自分の死んだところに埋めてくれ」といっていたので、遺骸は近くの地福寺の梅の木の下に埋葬された。

野口遵（一八七三——一九四四）

日本窒素コンツェルンの総帥。
鴨緑江に水豊ダムを建設し、朝鮮に君臨していた彼は、昭和十五年二月、京城のホテルで入浴中、脳溢血で倒れた。
その後静養に専念したが回復ははかばかしからず、昭和十六年九月、朝鮮から特別列車を仕立てて内地へ帰って来た。そして、伊豆の韮山に療養のための別荘を作れと命じ、それが完成するまで近くの旅館に滞在した。別荘は敷地三千坪、建坪七百坪という超特大のもので、時の首相東条でさえ三十坪の家を作るのにとやかくいわれた戦争のまっただ中に、突貫工事で建てさせた。それでも半年かかった。
身体不自由のため、トイレにも両側から二人の看護婦に抱きかかえられてはいらなければならなかったが、そのため入口一間の観音開きの便所を作らせ、タイル張りの大浴場に一日二回はいるのに、若い看護婦十人あまりに水着をつけさせ、胴上げのようにして入浴の世話をさせた。しかし十八年ごろから病状は次第に悪化、十九年一月十五日午前六時三十分に彼は死んだ。（「燕雀」昭和五十二年三月二十日号・防衛庁弘済会理事長青木勉の記述）

彼の作りあげたコンツェルンの一工場「新日窒水俣工場」が戦後いわゆる水俣病という一大公害事件をひき起す。

市村羽左衛門・十五世（一八七四——一九四五）

昭和二十年一月十一日、歌舞伎座にいった山田風太郎は記す。「芝居は羽左衛門の『高田馬場』と『源平布引滝』なりき。安兵衛この寒さに着流しの赤鞘、御老体の奮闘、真に同情す。大いなる観客席に、見物半ばにも満たず。空襲のおそれあれば招待券ありとも来らざる者多くあるべし。ゲートル戦闘帽の工員、或いはモンペの女工達が、モソモソと玄米の握飯を口に入れつつ寒そうに見る。熱気はらむ雰囲気もなければ、たちばなやの掛声も稀なり。ただし羽左は熱演。ことに実盛のごときは一分のゆるみもなき至芸なり」

当時歌舞伎座は閉鎖中で、これは「産業戦士」激励のため、特別に開かれたのである。だから、これが十五世羽左衛門の最後の舞台だったのではないか。

その三月五日には、羽左衛門は妻たちとともに信州に疎開しなければならないことになる。たまたま、途中同じ信州の別所温泉に疎開する新派の花柳章太郎と車中いっしょになり、彼は南京豆をプレゼントした。

「市村羽左衛門が花柳章太郎に贈る。へっ、そいつが南京豆たァ、これも戦争のたまものかい、ありがたく出来てらぁ」

と、羽左衛門は苦笑いした。

彼は湯田中の「よろずや」という宿に泊ったが、最初は米の配給通帳を渡して三日間の逗留を頼んだだけで、別に疎開先を探すつもりであったらしいが、たまたまこの宿が気にいり、改めて当分滞在することを依頼した。いかにゆくえ定めぬ流離の旅であったかがわかる。

ここで彼は、朝食後、宿の主人と話しこむのを日課とした。また気さくに、疎開中の東京千住の子供たちに話しかけたりした。が、廊下を歩いてゆく羽左衛門の姿の美しさは、彼を羽左衛門と知らないほかの客もどきりとして立ちどまらせるほどであった。また天気のいい日は、そのころには珍しいニッカーズボンに小粋なハンチングで散歩した。

彼は明治初年の日本政府外交顧問フランス系アメリカ人のル・ジャンドル将軍が日本女性に生ませた混血児であったが、生涯この出生の秘密をかくし通した。しかし湯田中滞在中、東京の妹関屋愛子に、こんど東京に帰ったらこのことを世間に公表しようという手紙を書く。

旬日後の五月五日、その日に限って彼は帳場に下りて来なかった。ようすを見にゆくと、風邪気味で腹具合もよくないといって寝ていたが、たいしたこともなさそうなのでそのままにしておいたところ、翌六日容態が急変した。

その日、昼寝して、ふと眼をさまして時計を見て、「三時かい」といったあと、眠るように息が絶えた。しかしそれは腕時計の針の見まちがえで、午後零時十五分であった……。

以上は主として戸板康二『役者の伝説』による羽左衛門の終焉記だが、里見弴の『羽左衛門伝説』には、宿のおかみと女中からの聞書として、

「前の日から泊りがけでみえていた、なんという方か、松竹のお使者が、十時の下りで新潟へおたちになるのを玄関まで見送っていらしったついでと、おふろを召してから、廊下で大旦那との立話に、来月久しぶりで歌舞伎座に出ることに決めた、とか、少し気分がよくない、今から昼寝だ、とかおっしゃって、ここへお帰りになり、横におなんなすったきり、十二時二十分にはもういけなかった。お医者は、当地で一番といわれる方が、すぐさま飛んで来てくれたのだが、心臓まひとやら、どうにも手のつけようのない急なことで、大したお苦しみもなかったご様子」

と、ある。

信州の遅い桜が戸外から舞いこんで、遺体の胸に点々と散っていた。死に方までも美しく、いさぎよかった。

同じ日、その日も日本は阿鼻叫喚の空襲下にあった。

斎藤茂吉（一八八二——一九五三）

茂吉は敗戦後の昭和二十一年ごろから飛蚊症（眼球硝子体の混濁により眼前に蚊が飛んでいるように見える症状）を訴えはじめ、以来年ごとに老化現象を深めていった。

六十八歳の昭和二十五年十月には、左半身の麻痺を起した。やがてこれは軽くなっていったが、それ以来左脚を軽くひきずって歩くようになった。そのころ彼は、息子の茂太に、「俺の仕事は終った。あとは最悪の場合を考えていればまちがいないよ」といった。

まことに斎藤茂吉は、彼の人生が入日にはいった昭和二十一年から二十二年にかけての歌集『白き山』で、彼の歌の最高境地に達していた。

けふ一日雪のはれたるしづかさに
　小さくなりて日が山に入る

最上川の流のうへに浮びゆけ
行方なきわれのこころの貧困
最上川逆白波のたつまでに
ふぶくゆふべとなりにけるかも

二十六年四月五日、アララギの歌人柴生田稔は訪れて、「対面した茂吉は、すでに顔面の筋肉が弛緩して、別人のような風貌になっており、私は何とも言いようのない衝撃を受けた」と書き、さらに、「茂吉が、ほとんど口を利くのも億劫にするようになった頃の或る日、夫人が、以前は机に向って何か彼にかしていたのでしたが、もう全く何にもしなくなりましたと、寂しそうに語られたことも私は忘れることが出来ない。そうして、その時の茂吉は私たちの傍に茫然としていたのであった」と書く。知能の働きも完全に停止していたのである。

そうなった茂吉に、このとし十月、文化勲章が授与された。授章式に彼は身体不調のため宮中に伺うことは遠慮するつもりであったが、その日の数日前に突然ゆくといい出し、宮内庁の長い廊下を杖をついて懸命に歩いていった。彼はこのころ小便の近いのに往生していたが、この日御陪食中にこのことがなかったのを何よりよろこんだ。

二十七年三月三十日、妻や息子の茂太や北杜夫に護られて浅草観音に詣り、抱きかかえられて左手だけで拝んだ。

その年から自分の手で食事をすることが難しくなり、食事をしたことを忘れるようになり、寝床からオイオイと盛んに家人を呼び、自分が放擲されているような被害妄想を現わすようになった。そして暮からは完全に寝たきり老人になった。

茂吉の最後の歌はしかしこの年に作られる。

いつしかも日がしづみゆきうつせみの
われもおのづからきはまるらしも

二十八年二月二十五日午前十一時ごろ、突然顔色が蒼白になり、脂汗が流れ出し、最後にはいつ呼吸がとまったのかわからないような状態で、十一時二十分心臓が停止した。

息子の茂太は医師として解剖を希望した。茂太の表現によれば「ドライな合理主義者」である妻の輝子はただちに賛成した。

二十六日、東大病理学教室で解剖した結果によると、要するに高度の動脈硬化症による老衰死であった。

茂吉の妻輝子は彼より十三歳も若く、茂吉が幼な妻と呼んだほどであったが、茂吉の死後、鳥の羽ばたくごとく全世界を飛びまわり、その天衣無縫ぶりから世に「快妻オバ

サマ」と呼ばれた。八十八歳でなおインド洋のセーシェル諸島に旅し、翌年の昭和五十九年、茂吉の死後三十一年目にして胆嚢ガンで死去した。

大川周明（一八八六——一九五七）

「学者であるには血が熱きに過ぎ、志士であるには学問があり過ぎた」と評され、昭和前期「三月事件」「十月事件」「五・一五事件」などの右翼クーデター事件の背後にあったといわれる大川周明は、敗戦後A級戦犯として極東国際軍事裁判にひき出されたが、その第一日目、昭和二十一年五月三日、法廷で前列に坐っている東条大将の禿頭を突如ピシャリとたたくという異常行為を示した。

診察の結果、彼は脳梅毒と診断され、裁判は免訴になった。マラリア療法を受けた結果快方にむかい、松沢病院の病室でコーランの翻訳にかかり、昭和二十五年完成した。

そして退院後、農村再建のために行脚中、昭和三十二年風邪をひき、心臓衰弱をひき起し、十二月二十四日死亡した。

ところで大川は、どこで梅毒に感染したものであろうか。

大川夫人はのちに奇怪な事実を述べる。「夫は女と交わることの出来ない人でした。夫と私の関係は終始兄と妹のようなものでした。だから夫がほかの女から梅毒を移されるようなことはあり得ません」（西丸四方『狂気の価値』）

しかし大川は決して佯狂者ではなく、事実梅毒性脳炎であることが医学的に証明されていたのである。彼の発病は永遠の謎である。

チャンドラー（一八八八——一九五九）

四十五歳で石油会社のサラリーマンをクビになったレイモンド・チャンドラーは、生活のためにパルプ雑誌に通俗小説を書きはじめ、五十一歳で『大いなる眠り』を発表するや、一躍アメリカのハードボイルドの大旗手となった。

彼はしかし、神経質で、移り気で、そのくせ頑固で、社交ぎらいな、まことにつき合いにくい性格の人物で、一九五三年彼より十八歳も年上の妻シシーが八十三歳で死んだあと、アル中になって、何度もアル中専門病院に入退院する生活をつづけ、さらに何度か自殺を計った。また老いて女性関係の悶着もひき起した。

かつて、「人間の性格というものを無視している」とい

って、世界推理小説の女王アガサ・クリスティーに最大の侮蔑を表明し、『そして誰もいなくなった』を殺人の動機と方法にごまかしがある最低の作品だ、ときめつけたことのある彼が、一九五九年春、アメリカ探偵作家クラブの会長に推されたのは、何ぴとも認めざるを得ない彼の推理小説の文学的な力のせいもあるが、彼を生活の荒廃から救おうというまわりの配慮のおかげでもあった。

　が、その三月が終らないうちに、チャンドラーはまた飲みすぎて身体をこわし、風邪をひき、一人暮しのために手当が遅れて肺炎になり、救急車で入院する羽目になった。入院後二日目の三月二十六日午後三時五十分、彼はあっけなく息をひきとった。

花柳章太郎（一八九四――一九六五）

「牡丹のような」と形容された新派女形の花柳章太郎は、若いころから、大きな動きのある役だと息を切らせる傾きがあったが、昭和三十七年暮ごろから、胸部のさしこみを訴えるようになった。そして、年とともに発作が頻繁になったが、当人は「舞台で死ねたら本望だ」といっていた。

　昭和四十年一月、新橋演舞場で彼はとくいの一葉の「大つごもり」をやることになったが、この芝居で彼のやる女中おみねは長時間本水を使って洗濯をする場面があり、寒中のことでもあり、友人の川口松太郎はこれが心臓にこたえはしないかと心配したが、花柳はこの芝居は寒中でないとやれないといってきかなかった。川口はいう。

「多くの俳優は『残る』という事にこだわる。役者の芸は消えてしまうといって悲しむ。花柳もその一人だ。一月の寒さの中で『大つごもり』をやるのも傑作を残したい一種の見栄であり、悲願でもあった」

　芝居は大当りであったが、四日目の一月四日、舞台後倒れた。

「あれほど心配した『大つごもり』がやはりいけなかった」と川口は記す。「あとで聞くと、この朝（六日）は体を二つ折りにして苦しがって、手のつけようがなかったという」

　急報を聞いて川口は、花柳が入院している東大の小石川分院に駈けつけた。

「恐らくは明治か大正の遺物ではないかと思う。古風きわまる石造建築で入院患者があるのかないのかシーンとしている。中に入ると寒いの何の、暖房設備は何もなく厚い外套を着ていても縮み上りそうだ。心臓病に最も恐いのは寒

さだ。心筋梗塞による死亡者の大半は冬の寒さにやられている。それだのにこんな病院へ入れやがって――と腹を立てながら病室へ行くと京塚昌子がたった一人で泣いている。医者は誰もいない。

『どうした昌子』

『先生が、先生が』

　声を高くして泣きじゃくっている。東宝へ移っていても花柳の弟子だ。ぎょっとしながら蒲団の中へ手を入れると手はまだ暖かいが脈はもうない。目はうすく閉じて苦痛の色が残っている」（川口松太郎『八重子抄』）

江戸川乱歩（一八九四――一九六五）

　昭和三十七年十一月二十八日の深夜から朝にかけて、何者かが、江戸川乱歩の知り合いの作家、翻訳家、編集者など数十人に、乱歩が危篤だという電話をかけ、寒夜みなをあわてて池袋の江戸川邸に参集させるという怪事件が起った。

　これはいたずらにしてもあまりタチのよくない偽電話であった。実際に乱歩はこのころ高血圧にパーキンソン氏病を併発して病床に臥していたからである。

　パーキンソン氏病は、中枢神経の錐体路系に異常を起して発生する原因不明の難病で、そのころの乱歩の症状を見て友人の大下宇陀児は書いている。

「歩くところを見ると操り人形の足どりだった。足が身体を運ぶのではない。上体が倒れるから足が前に出るのである。つまり上体が足を運んでいる。そうして横へ曲がると、自分一人では、すぐ転んだ。顔や頭の生傷をぼくは何回となく見ている。……その状態で生き続けて、先には何があったか。時と共に全身の自由が失われる。遠慮なしにいえば、乱歩という置物がそこにあるだけのことになる」

　その身体で乱歩は、乱歩賞について打ち合せの客が来ると、夫人に抱きかかえられるようにし、洋菓子をボロボロ膝の上にこぼしながら応対した。

　彼は主治医の東大、中尾教授が作ってくれた幾種類かの特別の薬を、几帳面に指示通りに服用したが、決定的な治療法のない病気で、症状は徐々に悪化していた。

　そして昭和四十年七月二十七日の昼、ついに蜘蛛膜下出血を起し、二十八日には危篤状態におちいった。

　作家山村正夫は記す。

「病室は庭に面した奥の八畳間だった。その床の間の前に夜具が敷かれ、先生は目を閉じてあおむけにして臥してお

られた。両腕を掛蒲団から八の字に出しておられたが、各種の点滴の針が刺し込まれてそのゴム管が畳を這い、鼻には酸素吸入のチューブが絆創膏でとめられていて、痛々しいばかりだった。しかも荒い息のために寝巻の胸が大きく波打ち、何とも苦し気な唸り声が先生の口から間断なく洩れていた。（中略）

私が電話機にしがみついているあいだに、先生の終焉の時が来た。その場に居合わせた作家たちの話によると、先生は最後に大きな呼吸を一つされ、閉じておられた目をスーッと開かれた。それからまわりの人たちを一人一人たしかめるように見回して、まもなく静かに閉じられ息を引き取られたという。

主治医が臨終を告げたのは午後四時七分」

このとき、やはり臨終の座にあった角田喜久雄は、最後に乱歩が涙をぽろりと頬におとすのを見たといい、中島河太郎はそんなものは見なかったという。――『D坂の殺人事件』で乱歩は明智小五郎に託していう。「ミュンスターベルヒが賢くも説破した通り、人間の観察や人間の記憶なんて、実にたよりないものですよ」

三十日の告別式の後、遺骸は落合火葬場に運ばれ、茶毘に付された。名簿による電話の順番がヤ行のため、臨終には間にあわなかった山田風太郎は記す。

「暑い日であった。鉄の扉をあけて中の台をひき出すと、骨になった乱歩先生が現われた。寝棺に入れたときの姿勢のままで、頭蓋骨が転がり、その向うに腰のあたりの骨が貝殻みたいに堆積している。

やがて、安置場で壺に入れたが、大きな頭蓋骨は入り切らず、口から盛り上っている。係員が遠慮会釈もなくふたで押えると、あの数々の妖麗な幻想をえがいた偉大な頭蓋骨は、ガシャリとつぶれて収まってしまった。

『乱歩先生、永遠にさようなら』

と、僕はつぶやいた」

この日乱歩が尊敬した谷崎潤一郎が死んだ。

タイプはちがうが、江戸川乱歩は、最上の意味においての指導者であったこと、またそれゆえに多くの弟子に敬愛された点で、漱石に似ている。

その翌年に大下宇陀児が死に、二年おいて木々高太郎が死んだので、「推理作家は五十音順に死んでゆく」というブラック・ユーモアがささやかれ、ヤ行の山田風太郎はひとまずほっとして、このことを横溝正史に話したところ、横溝は、「それならぼくは風ちゃんよりもまだあとだ」といった。

佐藤千夜子（一八九七――一九六八）

昭和初年、流行歌手の第一号として、「磯の鵜の鳥や日暮れにゃかえる……」の「波浮の港」、「昔恋しい銀座の柳……」の「東京行進曲」、「紅屋の娘のいうことにゃ……」の「紅屋の娘」などの歌をレコードに吹きこんで一世を風靡し、当時世に出たばかりの古賀政男も自分の作詞作曲した歌を彼女に歌ってもらうことに恐懼感激したという佐藤千夜子は、その後人気歌手の地位を失い、持病のバセドー氏病に悩み、戦後は老い、落魄してついには青山のあるビルの掃除婦にまでなったが、しかもなお若いころの浪費癖とぜいたく癖は完全にはやまず、知人たちの間を借金して歩いた。

やがて乳ガンのために新宿の都立大久保病院に入院し、かつては身長百六十五センチ、体重七十五キロ、バスト一〇〇、ウエスト七八、ヒップ一一〇というグラマーを誇った肉体が、両乳房を切りとられ、空気のぬけた袋のようになってベッドに横たわった。その後も、ときどき「東京行進曲」のレコードをかけてもらって、とじた眼から涙を流して聴いていた。

昭和四十三年十二月十二日、意識が混濁しはじめ、「あら、藤原あきさんはもうお帰りになったの」などと、ずっと以前に亡くなった知人の名を口走ったりした。そして翌十三日午後二時、息をひきとった。蒲団の下から綴じ糸も切れたバイブルが発見された。

劉少奇（一八九八――一九六九）

劉少奇と毛沢東は、相ともに中国共産革命の偉業をなしとげた同志である。しかし、毛沢東はあくまで乱世の雄であり、統一後、中国の近代化を進めるのには不適な人物であった。劉少奇はそのゆえに毛沢東を排しようとした。あたかも日本の大久保が西郷を排しようとしたのに似ている。

しかし毛沢東は、西郷とちがって凄まじい権力欲の持主であった。彼は「文化大革命」という乾坤一擲の奇策をとり、紅衛兵を使って、「走資派」「労働貴族」などの罪名を投げつけて劉少奇を打倒した。

一九六七年七月十八日、北京中南海にある劉少奇の家は突然家宅捜索された。二日後、劉少奇は逮捕されたが、彼は妻の王光美に向って、「歴史の審判は人民が下すだろう。私が死んだら、灰は海にまいてくれ」といい残して、連行

されていった。
投獄された六十九歳の彼は、紅衛兵に殴られ、監視され、みるみる憔悴し、髪も髯ものび放題になり、手がふるえてマッチをすることも出来なくなった。やがて歩行も困難になり、便所にもゆけなくなり、大小便を垂れ流すありさまになった。
一九六九年、彼は肺炎にかかり、十一月、重病の身を一枚の毛布にくるまったまま、北京から河南省開封の監獄に送られたが、このとき担架にのせられた彼は、骸骨同然に痩せ衰えて、三十センチ以上ものびた髪や髯の中からシャリコウベのような顔がのぞき、軍隊毛布の下からは何とも名状しがたい異臭がたちのぼっていたという。
開封到着後、二日目に彼は死んだ。その五人の遺児は語る。「父は一九六九年十一月十二日午前六時四十五分、恨みをのんで開封の監獄で死にました」
死体はボロ毛布につつまれたまま火葬場に送られ、骨壺には「無職、伝染病による病死」と書かれていたという。
遺児たちは語る。「……母の王光美も投獄され、八十歳になる母方の祖母、長兄の允斌、次兄の允若が次々に悲惨な死をとげました。長女の愛琴は牛小屋といわれる私的監獄に監禁されて何度も殴られました。十九歳だった平平は独房におしこめられ、十七歳の源源は血を売って生計をたてなければならないありさまでした。十四歳の亭亭は町をさまよい、六歳の瀟瀟まで吊るしあげられました」
因果は小車のごとくめぐり、一九八〇年「四人組裁判」にひき出された毛沢東未亡人江青を見て、傍聴席の劉少奇未亡人王光美は、「愉快！　愉快！」と、さけんだ。

柳家金語楼（一九〇一――一九七二）

喜劇俳優としてエノケンと天下の人気を二分した柳家金語楼は、芸人仲間や演劇関係者にも愛嬌をふりまいたが、実は小心でカンシャク持ちで、怖ろしい人間ぎらいだった。
彼は、「出演中の劇場の楽屋で石を三つ投げれば、どれか一つはかならず金語楼の子供にぶつかるといわれたほどの大量生産メーカー」と長男の山下武に書かれたほど一座の女優に片っぱしから手をつけたが、生来の女好きのほかに、それはこの外面内面の落差からくるストレスを解消させる手段でもあったのだろう。
晩年、老齢のために急速に仕事を失ったが、それでも第四夫人までであった。
彼は死ぬ日まで仕事をしていた。彼は自分が胃ガンにかかっていることを知らなかった。彼も自分の身体の異常に気づかなかったはずはないが、扶養すべき人間を数多く持っている身として、死物狂いに働かないわけにはゆかなかったのであろう。まさに悲喜劇である。
金語楼がついに倒れて、東京信濃町の慶応病院に入院したのは、昭和四十七年十月十六日のことであった。主治医の尾関全彦医師は語る。
「十六日に入院なさいましたころから朦朧状態で、腰が痛いとおっしゃっていました。この腰の痛みと、最近の食欲減退、不眠症のために入院なさったわけなんですが、検査の結果、十八日にはガンであることがわかりました。しかも非常に悪い状態で、肝臓、腰椎などもやられていました」
ベッドのまわりには「何人もの夫人」がとりまいていた。まるで「柳家金瓶梅」である。
金語楼は入院七日目の二十二日午後十一時四十七分に死んだ。それまで彼が「自宅」と称していた第四夫人は、遺体を第一夫人の家に運ぶように申し出たが、第一夫人はこれを拒否した。夫人がたくさんあると、主人公の遺骸の奪い合いになることもあれば、押しつけ合いになる場合もあるらしい。金語楼は後者であった。
火葬場で白骨と化したとき、係員はそれを見ていった。
「この人の骨は、からだを磨り減らした人の骨だ」（山下武『父・柳家金語楼』より）

ハワード・ヒューズ（一九〇五――一九七六）

ハリウッドの映画王、トランスワールド航空のオーナー、ラスベガスの支配者として、資産二十億ドルと伝えられたハワード・ヒューズは、晩年十年間、少数のお付きの者をのぞき完全に外界と接触を断ち、しかも紐で結ぶパンツをはいて、暗室のベッドに横たわったままという生活をつづけた。
一メートル九十センチの身体は四十キロ足らずとなり、髪はのび放題、爪はのびて内側に曲っているという怪物さながらの姿であった。彼は腎臓を患っていた。
最後はメキシコ、アカプルコのプリンセスホテル二十階の暗室としたペント・ハウスにいたが、一九七六年春、容態の悪化を見てとった侍医団が、彼を米本国のテキサス州ヒューストンの病院へ運ぼうとした。ヒューストンは彼の故郷であった。
しかしそのジェット機がヒューストン飛行場到着三十分

前の四月五日午後一時二十七分、大空で彼は息をひきとった。

平野謙（ひらのけん）（一九〇七——一九七八）

評論家平野謙は、昭和五十一年五月、癌研で食道ガンの手術を受けた。

食道を切除し、胃をひきあげてのど近くでつないだため、食べたものがうまく落ちずに苦しむことがあったが、それでも食べようと懸命に努力した。それは仕事をするための体力をつけようと願ってのことであった。

彼の日記・十月九日。

「四六・五K。……面ヤツレハナハダシク、末期高見順ソックリナリ。8時晩メシチラシズシ。7日晩メシウナ丼ニテ、栄養ツケタハズナノニ」

四六・五Kとあるのは体重である。手術前は六十キロあった。

十二月四日。

「四四・五K。……午后ソバヤヘユキ、鏡ニ映ジタ老イサラバエタ姿ニ愕然トスル」

しかし彼はこの状態で懸命に仕事をつづけた。「疲れたと思ったら負けだ」と彼は夫人にいった。

こういう事態の中に、彼はわずらわしい過去の亡霊にからみつかれた。

それは、かつて書いた「アラヒトガミ事件」と題する文章の中で、彼が昭和十六年から情報局第五部第三課（文芸課）に勤務したことを「ひとつの偶然だった」とさりげなく書き、当時の課長井上司朗の策動や無能ぶりを嘲罵（ちょうば）したくだりがあるのを、その井上司朗がまだ生きていて、昭和五十二年秋刊行中の『平野謙全集』の中に発見して、彼に猛烈な抗議を申しこんできたことであった。

井上は逗子八郎という歌名を持ち、戦争中歌集も出した人物であった。逗子によれば、そもそも平野の情報局就職が「偶然」などいうものではなく、戦前左翼運動に参加したこともある平野が就職口のないのに苦しみ、情報局の逗子のもとへ、さらに夜ふけてその自宅へ二度までもおしかけて切々と哀願した結果によるもので、かつまたそれ以後の井上の言動についての批判も、ただ平野が戦争中の自分の免罪符を得るために、他に権力の悪役を仕立ててこれを罵る卑劣忘恩の虚構話に過ぎないというのであった。

いちど席を設けて是非会談を要求する、という逗子の手紙に、平野は「目下厄介な仕事にとりかかっていて、頭を外に向ける余裕なし」と答え、再度の要求には無反応であった。

このやりとりの当否は別として、ガンを病む平野には、常人以上に心を悩ませた事件であったにちがいない。

昭和五十三年二月十一日、彼は自宅で倒れた。蜘蛛膜下（くもまくか）出血であった。ガンにかかっていてもさらに脳溢血を起すこともあるのである。

以後意識不明の状態がつづいたが、一カ月後の三月十日午後七時ごろ突然意識を回復し、「ああ、あんまり寝たから疲れちゃったな」と、いかにもあきあきしたようにいった。その直後また意識不明になり、四月三日午後一時五十五分に死んだ。

山岡荘八（やまおかそうはち）（一九〇七——一九七八）

『徳川家康』の山岡荘八は、昭和五十三年九月三十日に死去した。

夫人の話。

「去年の暮でしたか、あれほど好きなコップ酒も一滴も飲まなくなり、足も不自由になりまして、床についている時間のほうが長くなりました。今年の五月頃になりますと、ついに喉（のど）のリンパ腺が脹（は）れ出しました。それで医者ぎらいのあの人が、やっと腰をあげて検査したわけでございます。

ホジキン氏病だとわかったのは、今年の七月七日で、その日に癌研附属病院に入院いたしました。ホジキン氏病というのは、万人に一人かかるか、かからない病気だそうですけれども、あるいは主人にふさわしい病気だったのかも知れません」

ホジキン氏病とはリンパ腺系統に肉芽腫を生ずる奇病であり、難病である。全身のリンパ腺や脾臓、肝臓等が腫（は）れ、衰弱し、最後は悪液質で死亡する。

「息をひきとる前日、『おれはもうダメだ』と二度ほど声にならないような弱い言葉でつぶやきましたので、私が、『あなたらしくもないわ、がんばりましょうよ』といいましたのですが、無言で眼を閉じていました。

息をひきとった日は、午前中に、『あなた！』と呼びますと、少しは眼をあけるのですが、言葉は還って来ませんでした。応える元気もなかったのでしょう。眠るがごとくというのでしょうか、静かに息をひきとりました。仕事に全精力を燃やしつくして死んでいったと思っております」

近藤日出造（一九〇八——一九七九）

風刺漫画と辛辣な人物評で知られた近藤日出造は、漫画の実作の世界でも、漫画界のリーダーとしてもかがやかしい成功者と目されていたが、しかし還暦を過ぎてから三つの苦難や悲哀に逢着することになった。

昭和四十三年、彼が主宰し発刊した雑誌「漫画」が失敗した。翌年、彼が理事をしていた「漫画学校」が倒産した。これらは彼の肩に重い負債を残した。そして四十八年には彼の最愛の次男喬が二十五歳の若さで、新宿のレストランで肉をのどにつめて急死した。

これらの難儀や悲しみに耐える晩年を迎えた彼は、なお生来の勤勉性と負けぬ気概を失わない日々を過していたが、昭和五十一年一月四日、こんどは彼が有楽町のレストラン三笠会館で食事中、突然脳溢血で倒れた。

治療の後、三月から中伊豆温泉病院に移ったが、右半身は完全に麻痺していた。筆を持たせても描くことにまったく興味を示さず、ただいちど英夫人（漫画家横山隆一の妹）が「パパ、私の顔を描いて。これまでいちども描いてくれなかったじゃないの」というと、やっと筆をとり、ゆっくりゆっくり、数日かかって描きあげたが、これが絶筆となった。

九月、なんの成果もなく帰京したが、『近藤日出造の世界』の著者峯島正行は、「東京に移されてからの病状はあまりに悲惨で、ここに書くに忍びない」と書く。

以来彼は、リハビリテーションすらいやがり、訓練室に連れこまれると発作を起すので、リハビリテーションは中止された。毒舌で知られたこの人物が、うれしいことがあると幼児のように笑い、何かといえば声をあげて泣く状態になったのである。

発病以来つき切りで看病していた英夫人は、五十三年七月、これまた脳溢血で急死した。日出造は、夫人が「怪我をして入院している」と教えられた。そして妻の死を知らないまま、五十四年三月二十三日に死亡した。

笠置シヅ子（一九一四——一九八五）

昭和二十三年の「東京ブギ」から三年間ばかり、「ジャングル・ブギ」「買物ブギ」などの強烈な歌と踊りで全日本を席巻したブギの女王笠置シヅ子は、ブームが終ると歌手もやめ、テレビのいわゆる「ナツメロ」にも一切出なかった。もっとも全身体当りのブギは、ある年齢を過ぎると、やろうとしてもやれないかも知れない。

以後彼女はフジテレビの「家族そろって歌合戦」の審査員などをやって、静かに長い後半生を過した。その番組で、落ちた人をほめたたえる親切な心を持つ一方、彼女には古風なきびしい一面があって、子供が演歌を歌うと、「子供は子供らしい歌を歌いなさい」とズケズケいった。ブギの全盛時代、少女の美空ひばりが、ブギの物真似で売り出したのを禁じたのも、たんに商売上の防衛ではなく同じ心理からであろう。

笠置は自分にもきびしく、他人にも自分の弱いところ醜いところを見せることをきらい、昭和五十六年乳ガンの手術で乳房を一つとったあと、身体のバランスを失ってよく階段などから落ちそうになり「天から二つ授かったものは、あれは一つなのね」と、こぼしたのが、他人が聞いた珍しい弱音だった。

それ以外は、体調の悪いときでも人前では思いきり元気よくふるまったが、昭和五十九年九月、こんどは卵巣ガンで再入院した。しかし醜い姿を見せたくないといって見舞客もすべてことわった。

彼女は昭和六十年三月三十日午後十一時四十三分に死んだ。訃報をきいて知人がかけつけたとき、すでに棺には釘が打たれていた。笠置シヅ子もまた「死顔を見せたくない人」の一人だったのである。

七十二歳で死んだ人々

「私の死んだ後、私はどうなるのでしょうか。はっきりおっしゃって下さい」
「それはすべてであり、そして無だ」
——ショーペンハウエル『小対話篇』——

孔子（前五五一——前四七九）

諸国を遍歴し、道を説いてまわったが、どこでも用いられなかった孔子も、六十九歳でようやく礼をもって故郷の魯の国に呼び戻され子弟の教育に専念することになった。

しかし、その翌年には長男の孔鯉が死んだ。二年目には最も信頼していた弟子の顔淵が死んだ。孔子は「天が私を滅ぼした」と慟哭した。三年目には最も愛していた子路が衛の国のクーデターに巻きこまれて死に、屍体はシオカラにされてしまった。その報を聞いた孔子は、家にあったシオカラを捨てさせた。

『礼記』によれば、七十三歳のある日の朝、孔子は杖をついて散歩していたが、そのとき、

「泰山もやはり崩れるだろう
橋の横木も腐り落ちるだろう
哲人だって病んで死ぬ日が来るだろう」

という意味の歌を口ずさんで、部屋に戻って横たわった。

弟子が来ると、

「自分は殷人の子孫だが、殷では死ぬと応接間の二本柱の間に置かれて祭られたが、昨夜わしがそうやって祭られた夢を見た。死ぬ日が近づいたらしい」

と、静かにいった。そして寝ついて七日目に死んだ、とあるが、これは作り話らしい。死についての信頼できる記録はない。平穏な寂しい老衰死であったと思われる。

「いまだ生を知らず、いずくんぞ死を知らん」
——『論語』——

阿倍仲麻呂（六九八——七七〇）

阿倍仲麻呂は養老元年（七一七年）十九歳のとき、総員

五百五十七人の第八次遣唐使中の留学生の一人として、吉備真備らとともに唐の長安に渡り、玄宗皇帝に仕え、次第に昇進した。

彼はその後、第九次遣唐使とともに帰国することを請うたが玄宗の許すところとならず、さらに第十次遣唐使の帰国（七五三年）に同行することを許されたとき、すでに五十五歳となっていた。

その秋、揚子江河口まで来て彼の歌ったのが、有名な、

「あまのはらふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも」

である。三十六年異郷にあっても、彼は日本の歌ぶりを忘れてはいなかったのである。

しかしこの船は遭難し、行方不明になったという報を聞いた親友の大詩人李白は「晁卿衡（仲麻呂のこと）を歎く」と題し、

「日本の晁卿帝都を辞す
征帆一片蓬壺を繞る
明月帰らず碧海に沈む
白雲秋色蒼梧に満つ」

と、哀悼した。

しかし仲麻呂をふくめて百八十余人を乗せた船は沈まず安南（ベトナム）まで漂流し、安南の現地人に百七十余人まで殺されたが、仲麻呂はあやうく逃れ、二年後長安に帰った。

その後彼は、安禄山の乱や楊貴妃の悲劇などを見る羽目になり、ついに日本に帰ることが出来ず、唐の大暦五年一月、望郷の思いにかられつつ長安で死んだ。

同じ年に杜甫が死んだ。日本では和気清麻呂が弓削道鏡を弾劾した翌年のことである。

西行（一一一八——一一九〇）

ねがはくは花のもとにて春しなんそのきさらぎの望月の頃

かつてそう詠んだ通り、ただし日は一日ちがっているが、西行法師は、建久元年——義経が殺された翌年——二月十六日、河内国葛城山西麓の弘川寺で示寂した。

これはいまの暦で三月三十日にあたるから、葛城山麓の桜もほころんでいたであろう。当時から人々はみんなこのことに感心したらしい。

哀々此の世は縦やさもあらばあれ
来む世も斯や苦しかるべき

——西行——

沢庵（たくあん）（一五七三―一六四五）

正保二年十一月十一日、品川東海寺で臨終の近いのを知った沢庵和尚は、午前四時ごろ、筆をとって、ただ「夢」と書き、遺戒（ゆいかい）を残した。

「全身を埋めて、ただ土を覆うて去れ。経を読むことなかれ。斎（とき）を設くることなかれ。道俗の弔賻を受くることなかれ。衆僧、著衣喫飯平日のごとくせよ。塔を建て像を安置することなかれ。碑を立つることなかれ。……年譜を作ることなかれ」

そして、死んだ。東海寺の僧たちは、遺戒通りに彼を埋葬し、ただその上に松の木一本を植えた。

同じ年の五月十二日、宮本武蔵がやはり禅的な死を迎えているのは一奇といいたいところだが、現実の沢庵と武蔵は、おそらくは何の関係もない。

三井高利（みついたかとし）（一六二二―一六九四）

通称八郎兵衛。伊勢松阪の出身で、金貸しから呉服店、両替商と発展して元禄の大商人となった三井高利は、元禄七年二月、病んで最期のときが近いと知ると、京都の越後屋本店に一族を集めて、いわゆる『宗壽様元禄之御遺書』を発表した。

それは自分の死後、遺産を子供たちにただちに分割して配分するのではなく、全部の共有財産として、共同で商売をやり、その利益から配当を受けよ、という独創的なものであった。後年の三井財閥の基礎はこの遺書で定められた。

そして彼は、五月六日、念仏を唱えながら大往生をとげた。

同じ年の十月、これは俳句以外に一物も遺さぬ芭蕉が大坂で死んでゆく。

水戸光圀（みとみつくに）（一六二八―一七〇〇）

西山に隠居ののちも『大日本史』の完成を督励していた光圀は、元禄十二年暮ごろから疲労が人の目にも見えるようになった。翌十三年晩春のころからは、ひどい食欲不振におちいった。

しかし幕府から何度も見舞いの使者が来ると、そのたびに彼は、上使を西山の隠居所ではなく水戸城に迎え、そのために西山から水戸へ五里半の道を、駕籠（かご）ではなく馬でいった。

「あまつさえ御城中をば、御歩行遊ばされ候。御杖にすがり、ようやくおたどり候えども、おんわきよりお手をとり申すことはおきらい遊ばされ候」（『桃源遺事』）

十二月一日までは、彼は床につこうともしなかった。その日の夜も、背後に衣服などおかせてよりかかったまま、侍臣を召し寄せて『列伝』の原稿の文章を訂正した。

二日から病床についたが、女は近づけず、「儒者の礼」に従って、男だけに看病させた。

三日夜十時過ぎ、夜具の上に坐った。口がかわいているように見えたので侍臣が湯をすすめると、二口ほど飲み、黙って手を出した。家来が鼻紙を出すと、口をふき、それからだんだん呼吸が細くなっていって、六日午前三時ごろ死んだ。光圀はこの死病のあいだ、いちどもうなり声をもらしたことがなかった。

諸国漫遊は講談だが、黄門さまは、水戸藩の財をかたむけた『大日本史』の発起といい、六十六歳のとき寵臣藤井紋太夫を能舞台の楽屋で刺し殺したことといい、この剛毅な最期といい、怖るべき老人にちがいなかった。

ショーペンハウエル（一七八八―一八六〇）

カントを尊敬する彼は、カントと同様、日常生活は完全に規律正しく、健康に注意した。

朝は七時と八時との間に起床して、大きなスポンジを使って冷水摩擦し、眼をあけたまま顔を水にひたして洗眼した。そして、自分でコーヒーをいれてベッドで朝食をとり、午前中は著作に専念した。昼は町のレストランで食事したが（彼は生涯独身であった）甚だ健啖（けんたん）であった。そのあと帰宅して一時間ほど午睡し、さめたあと読書し、夕方になると犬を連れて、住んでいるフランクフルト・アム・マインの郊外を散歩した。夜の八時と九時の間にまたレストランに出かけて冷たい肉料理と半瓶の赤のワインをとるのを常とした。帰宅後一時間ほど読書してベッドについた。睡眠時間はふつうの人よりたっぷりとった。

これが「厭世哲学」で知られるショーペンハウエルの判で押したような晩年の生活であった。

カントにならった彼は、しかしカントよりはるかに壮健な肉体を持っていることを自負していて、実際最後の年まで足どりはしゃんとしていたが、その一八六〇年の四月の

ある日、昼食のレストランから帰る途中、はじめて呼吸困難と心臓の異常な動悸を感じた。そしてこの現象がその後もいくどか起るようになった。
　八月のある朝、起床後、突然狭心症の発作に襲われ、窒息状態におちいったが、医者が来たときは平常に戻っていた。医者は薬を置いていったが、もともと薬を不自然なものとする信条を持っていたショーペンハウエルは、ついにそれを服用しようとはしなかった。冷水摩擦や散歩の習慣もやめようとはしなかった。
　九月上旬、肺炎をひき起していることが明らかになったが、すぐに回復したように見えた。しかし九月十八日、起床後また心臓発作が来た。が、午後見舞いに来た近親者のヴィルヘルム・グヴィナーが、万一の場合死後解剖を受ける意志があるかと訊くと、ショーペンハウエルは少し考えてから答えた。
「だれも、生まれる前の私について何も知ってはいないのだから、死んだあとの私についても、何も知らなくていいだろう」
　その眼には、病気はおろか老年のしるしさえ見えなかった。
　九月二十一日の朝、ショーペンハウエルは、起床後いつものように冷水摩擦をやり、ベッドでコーヒーを飲んだ。やってきた家政婦が窓をあけて朝の空気を部屋にいれて立ち去った。そこへ往診の医者が訪れた。家政婦が医者を案内して戻って来ると、ショーペンハウエルはソファによりかかったまま、顔を仰むけにして息絶えていた。
　日本では桜田門外で井伊大老が殺された年。

榎本武揚（一八三六――一九〇八）

明治四十一年七月十三日発病し、十月二十六日、向島自邸で死去した。近代、これだけの人物にして、病名不明。
しかし彼は江戸ッ子の代表のごとく目され、その葬式は江戸ッ子葬ともいうべき景観を呈したという。
　鷗外の日記「三十日（金）午後榎本子武揚の葬を送りて駒込吉祥寺に至る」
　榎本は、明治の最良官僚としての働きをしたが、しかし与えられたのはついに伴食大臣であり、また子爵に過ぎなかった。
　がんじがらめの薩長閥の中で、前政権の残党というハンディキャップを認めてやっても、彼が日本の近代化に貢献した業績は、果して彼があえて生きのびたにふさわしいものであったか、どうか。彼が誇った幕末の留学体験は、新政府以来おびただしいハイカラが生まれたせいもあって、それほど役にはたたなかったのである。
　それより、オランダ帰りのこの海将が、義と侠の旗の下に、五稜郭で、三十三歳で壮烈な死をとげていたら、あるいは彼こそ、維新の嵐における最大のヒーローとなり、それどころか永遠に日本人を鼓舞する幾人かの叙事詩的英雄の一人として残ったのではあるまいか。
　福沢の「瘠我慢の説」は、あながちまとはずれでもなかったのである。
　しかし、おそらく彼は最後まで、ほんのちょっとしたゆきちがいで、自分の一大スポークスマンとなってくれたかも知れない福沢諭吉という人間を敵にまわしてしまった愚に気がつかなかったかも知れない。そしてまた、自分の人生の花は、彼が一つの挫折と考えていた五稜郭で咲ききってしまったことに気づかず、それ以後の、幕臣としては珍しい明治の官僚としての働きに自己満足して瞑目したのではあるまいか。

田中正造（一八四一――一九一三）

　大正二年七月中旬、足尾鉱毒事件運動の田中正造は、「たくはつ」（注・運動費募金）に出かける、といって谷中村を出て、近郷の有志を歴訪中、八月二日、病んで足利郡吾妻村の庭田清四郎の家にころがりこみ、そのまま病臥した。
　渡良瀬川の鉱毒を沈澱させるため、谷中村を廃村にして遊水池を作る政府の方針は、田中正造らの反対を押し切って、明治四十年六月にはついに谷中村の強制破壊が行われ、正造らは絶望状態にあった。
　八月二十三日未明、彼はふいに病床に起き上り、「現在を救いたまえ、現在を救いたまえ、ありのままを救いたまえ」と、怖ろしい声でさけんだ。
　九月四日朝、「見舞いの者が多勢来てるそうだが、みんな正造に同情するだけで、正造の事業に同情して来る者は一人も無え。おれはうれしくも何とも無え。いって、みんなにそういえ」といった。
　また、大息をつきながら、
「どうもこの日本の打ち壊し（注・環境破壊のこと）というものはひどいもので、国が四つあっても五つあっても足り

ることでは無え」といった。

午後零時五十分、木下尚江に抱かれて病床に起き直り、痰を吐こうとして吐けず、大きな眼をむいてみなを見まわし、大息を吐こうとしてそのまま呼吸がとまった。彼の病名は胃ガンであった。

最後の旅の遺品は、菅笠一蓋、頭陀袋一個、中にはいっているのは新約聖書と日記だけであった。日記は八月一日に書かれたものが最後で、

「悪魔を退くる力なきは其身も亦悪魔なればなり。茲に於てか懺悔洗礼を要す」

と、書かれてあった。

その最期を看とった木下尚江は「恰も太陽の海に入るが如し」と形容したが、この時点において客観的に見れば、この明治最大の義人は、まさしく野たれ死にひとしい死に方をしたのである。

後藤新平（一八五七——一九二九）

明治十五年、板垣退助が岐阜で刺客に襲われて遭難したとき、二十五歳の愛知県立病院院長として駈けつけ、退助に、「御本望でしょうな」といった後藤新平は、その後政治家となり、満鉄総裁、東京市長などを歴任し、その経綸の規模がすべて雄大なため「大風呂敷」といわれたが、晩年は少年団の総裁となり、少年団の事業に力を注いだ。

少年団が勢揃いして、

「ぼくらの好きな総長は
白いおひげに鼻めがね
団服つけて杖もって
いつも元気でニーコニコ」

と、「後藤団長弥栄の歌」を歌うと、彼の鼻眼鏡の下は必ず涙でひかっていた。

大正十五年二月、六十九歳のとき第一回の脳溢血の発作を起したが、すぐに回復して、以来、一年の間に政治倫理化運動としての演説を百八十三回やった。しかし翌年八月に二回目の脳溢血を起した。

しかも彼は十二月から訪露旅行をし、帰国後、昭和四年四月四日、講演のため岡山にゆく途上、米原付近を列車が通過中、第三回目の発作を起し、京都府立病院にかつぎこまれたが、四月十三日に死去した。

徳田秋声（一八七一——一九四三）

秋声は、昭和九年六十三歳のとき、「私は近来ペンを持つ手が非常に顫えるようになった。……今後仕事をすることは相当に困難である」と書いたが、その後なお『勲章』『仮装人物』などの名作を発表した。

晩年の秋声の姿を、子の一穂は記す。

「冬には、自分で、火鉢の炭の中にタドンを入れて、それを床の中に入れた炬燵にうつし、床に就くのだったが、床を敷かずに炬燵にあたって、頭を本棚の側の柱にもたせ、静かに眼をつむって、瞑想しているような時も多かった。日当りの悪い、貧弱な書斎で一人夜更けに、こうしている時の父の姿は、気の毒な感じのするほど物悲しげに見えたが、『こうして一人でいるのも亦案外たのしいものだよ』と父は言っていた」

昭和十六年、最後の長篇『縮図』を「都新聞」に連載中、情報局から中止させられた秋声は、翌年の夏から健康すぐれず、昭和十八年七月中旬、三回にわたっておびただしい鼻血を出して、病臥した。

八月下旬、その二十二日に死んだ島崎藤村の葬式に列するために軽井沢から出てきた川端康成が、鮮魚を手にして見舞いに訪れた。

そのときのことを川端は記す。

「藤村氏の死に誘われて思う御自分のことを、短い時間話されたのだが、私はその言葉を覚えていないで、沈痛森厳な印象だけが残っている。その時私は病室に入るに先立って、秋声氏が藤村氏の死を知っていられるのかどうかを令息一穂氏に確めた。すでに新聞記者が来て伝えたそうであった。談話をもとめたのであろう。その一日秋声氏は黙りこんでものを言われなかったそうである。……私は藤村氏は秋声氏のように怠けられなかったから、と言った。秋声氏がうなずかれたので、私は更に、しかし小説家は怠けることが必要だと言った。秋声氏は深く肯定して、そうだ、小説家は怠けることが大切だ、怠けなくちゃだめだと強く言われた。それは激越な調子だった。凛烈な気迫に私は打たれてその話はそれで切れた」

このとき康成が、「怠け者は怠け者じゃない。怠けているのは怠けているのじゃない」というと、秋声が「そうだ、怠け者は怠け者じゃない。怠けているのは怠けているのじゃない」と答えたという記録もある。

このあと秋声は帝大病院に約一カ月入院し、肺ガンの診

断を受け、十月下旬退院、本郷森川町の自宅の書斎で、十一月十八日午前四時二十五分死亡した。

そのとき秋声は苦しさのあまり寝床からはい出して枕元の机にしがみつき、机の上にはかきむしった爪跡が無数に残っていたという。

添田啞蟬坊（一八七二――一九四四）

「あゝ金の世や金の世や
　地獄の沙汰も金次第
　笑うも金よ泣くも金
　一にも二にも三も金」

明治から大正にかけて、数々の演歌を作詞したのみならず、自身演歌師としてその時々において一世を風靡した啞蟬坊は、さすがにレコード、ラジオが流布した昭和期にはいると沈黙を余儀なくされ、ただ西国一円を巡礼して歩くのみとなった。

晩年は本所の友人の倉庫に居を与えられ、居候をしていたが、戦争中の昭和十七年軽い脳溢血を起し、十八年には馬込の息子知道の家にひきとられた。

知道はいう。

「毎日ぶらぶら歩きをしていましたが、その足もとを案じて、家人がステッキをもつことをすすめても、杖なんかいらんとはねつけ、ふところ手でゆらゆらと歩きまわる。あるとき顔面にすりむき傷をこしらえてきた。大森駅前の石段でころんだといいながら、それでもステッキをもつことをしなかった。日常のことであれこれ家人を手こずらせていたようです。やがて臥ていることの方が多くなり、さらに臥ているばかりになりました。……ねどこの啞蟬坊はよくにくまれ口を叩いて、そのとげっぽさだけが自己主張になっているかのあんばいになりました」

昭和十九年二月のある日、知道は父にきつい言葉を与えて旅に出た。このきつい言葉が最後の会話となったことを、のちに知道は悔いる。

その留守中、二月八日の朝、前夜までは何の異常もなかったのに、啞蟬坊はだれにも気づかれず、寝床の中でひっそりと死んでいた。

ユトリロ（一八八三――一九五五）

モーリス・ユトリロの生涯は、酒漬けの生涯だった。

サーカスの軽業師から絵のモデルとなり、さらにその魅

力的な姿態と異常な官能からおびただしい画家に身をまかせたあげく――その中には、シャヴァンヌ、ルノワール、ロートレック、ドガの名もあり、ユトリロの父はシャヴァンヌであるという説さえある――ついには自分も一流の画家となったマカ不思議な女シュザンヌ・ヴァラドンは、父の名も不明な子ユトリロを生んでから、幼年の彼を貧しい祖母にあずけたきり、ほとんど遺棄し、そのためかユトリロは八歳のときから葡萄酒を飲みはじめ、それは生涯の飲酒癖となった。

成績不良のため中学もやめさせられた少年ユトリロは、銀行や商社の使い走りとして就職したが、酒のためどこもクビになり、はてはアル中のために精神病院に入院させられる羽目になった。

そこで、彼に酒以外に何か精神を向けさせる方便のために、成長後やっと彼をひきとった母のシュザンヌは彼に絵筆を与えた。十七歳のときである。それまで彼は、小学校時代もふくめて、絵に対して何ら特別な才能も興味も示したことはなかったといわれる。また母も何ら特別な期待をもたず、手をとって教えることもなかったといわれる。

アル中治療の方便が、十九世紀から二十世紀へかけての屈指の大画家を生むきっかけになったのだが、その抒情的で静謐で甘美な絵が広く世に迎えられ、莫大な金がはいるようになっても、ユトリロのアル中とそのための奇行愚行は一生癒らなかった。ユトリロは大画家の名声を得てからも、何度も留置場や精神病院を出入りした。

一流画家の才能を持ちながら絵の売れない母のシュザンヌは、やがて彼の金をあてにして生来の大浪費家の行状をいかんなく発揮しはじめた。のみならず、同時にまた生来の無道徳家であったシュザンヌは、四十四歳で、息子のモーリスよりなお若い美貌の画家アンドレ・ユッテルと同棲し、のちには結婚するに至った。

ユッテルは画家をやめ、生活的に八方破れのシュザンヌ、ユトリロ母子の保護者となる道をえらんだが、同時に彼もまたユトリロの絵による莫大な収入を浪費し、かつアル中となった。

この常軌を逸した三人の悲喜劇的な同棲生活は、ユトリロをも画家たるより金貨製造機に変えた。彼は鉄格子のはまった部屋にいれられ、半強制的に絵を描かされた。彼のおびただしい作品には愚作も少なからず、ことに後半生のものにそれが多いのは、この生活と彼のアル中の昂進によるものである。

母が脳溢血で死ぬ前年、五十四歳でユトリロはやっと結

婚した。相手は六十五歳の未亡人だった。そして彼女もまたユトリロが大画家であるということだけの虚栄心から結婚した女性で、ユトリロはまたも石臼につながれた盲目のロバのような夫の位置におかれた。

一九五五年秋、七十二歳のユトリロは、この妻とともに大西洋岸のダックスに保養にいったが、ここで風邪をひき、いったん元気になったかに見えたが、十一月五日の朝食時、ひどい疲労を訴え、体温を計ったところ四十度八分あった。そして、正午過ぎ、突然喀血して息をひきとった。（J・P・クレスペル『ユトリロの生涯』佐藤昌訳より）

日本では同年に安井曾太郎が死んだ。

柳宗悦（一八八九―一九六一）

「民芸」という言葉を作り、その芸術世界を発見した柳宗悦は、還暦を迎えたとき、三人の息子を呼んで、自分の家も所蔵の民芸品もぜんぶ民芸協会に寄付したから、お前たちに遺すものは何もないよ、といい渡した。

六十七歳のとき、脳溢血で倒れ、左半身不随となったが、長期治療の結果、回復した。

昭和三十六年四月二十九日、爽やかな五月晴れの祝日、いつものように日本民芸館で仕事をし、昼食後館員と談笑していたが、ふと黙って、椅子の上で両手をくんだまま首を垂れているので、みなが驚いて駈け寄ると、すでに昏睡状態であった。そしてその状態のまま、五月三日午前四時二分に死んだ。

佐藤春夫（一八九二―一九六四）

昭和三十九年五月六日、佐藤春夫は「放送朝日」のラジオ番組「一週間自叙伝」の録音を文京区関口町の自邸でとることになった。

担当の放送朝日社員大熊邦也は語る。

「五月六日の夕方、蔦が緑色に美しくかがやいている佐藤家の門をくぐりました。

和洋折衷の十畳ほどの部屋で、和服姿の先生はこころよく私を迎えて下さいました。

『大阪から来たのでは大変お疲れでしょう。お茶でも飲んでから始めましょう』と、私の遅れて来た心苦しさをいたわって下さいました。私はその暖かい心づかいに感謝しながら、先生のお顔を拝見して、耳の大きさ豊かさに驚きました。

自分の半生を自分で話すということは、たいていの人が少しはテレる場合が多いのですが、先生も少々その気持があって落ちつかれないのか、タバコをかなり吸われ、あらためて『それじゃ、やりましょう』と申されて、元気に録音を開始いたしました。この開始時間は私の記録では五時三十五分だったと思います。

一回目のお話は、和歌山ですごした小学校時代のエピソードが主で、言葉も生き生きとして、お年のわりにツヤのあるよい声だな、と私は聞きほれていました。

約九分ほど録音したところで、一回目の区切りがつき、『調子はどうですか』と先生は満足げに私にきかれました。『先生、大変結構です』と申しますと、先生はふたたびタバコに火をつけて、『一休みしましょう』と血色のよい顔色でタバコをゆっくりと吸っておられました。

やがて二回目の録音が始まりました。依然として快調なペースで話も一回目より調子にのり、中学生時代のお話に切りかわりました。『この時代に文学への情熱が芽ばえたが、思想問題で停学となり、友だちからは冷たくあしらわれ、孤独感がますます強くなった』というようなお話をされました。録音が終り、ふたたび先生は『調子はどうかね』と満足げに申されました。

三回目の録音に入る前に、『ぼくは、中学校時代には、話すことがたくさんあるんだ』と、かなり長い間、頭の中を整理されて、『それじゃ……』ということで三回目の録音に入りました。六時十分ごろだったと思います。

前回と同じ調子で録音がはじまり、三十秒ほどしたとき、私は耳にイヤホーンをかけてお話に聞き入っていましたが、突然息づかいが変になり、次第に苦しそうになりました」

そのとき佐藤春夫はこんなことを話していた。「学校ストライキがだんだん大きくなってしまって、学校の特別教室というのが、まあ化学教室やなんかからの一棟が、放火事件で……放火らしい形で……火事が起って焼けてしまったんでね。そのとき私は東京に来ていたんで、倖いに……」

そこで言葉は切れた。大熊は語る。

「私は本能的にその異常を感じて、『先生、大丈夫ですか』と叫んでいました。だが、その答えはなく、呼吸は乱れ、机の上にばったり倒れられると、人間ではないような、大きな、しかも怖ろしいうめき声に変りました。

私は異様な恐怖につつまれ、録音中、先生の書斎には外からカギがかけられていましたので、『奥さん、奥さん』と大声で叫びました。だが、返答がありません。

一方、先生のうめき声は、机にうつぶせになったまま異様さを増すばかり、私はカギのかかっているドアを破るつもりで、『奥さん』と叫びつづけました。

——奥さんがこられるまで三分はたったでしょうか。先生の声はすでに消えておりました。血色のよいお顔、張りのあるお声、数分前のあの元気なお姿を知っているだけに、私は茫然としていました。

ときに六時十五分。私はただひとり、一時間余の時間のなかで、文豪の生と死の境界を見つめたのです」（「放送朝日」昭和三十九年五月号）

彼は心筋梗塞を起したのであった。

佐佐木茂索（一八九四——一九六六）

戦後の「文藝春秋」の祖となった佐佐木茂索は、ふだん自分の感想や思いつきを、手近の紙きれに書きつける習慣があった。そのメモ。

「昭和四十年七月十五日記。

一、飛行機は落ちるかも知れないから、こういう場合、大てい遺言めいたことを書いて来た。どこからか沢山出て来るだろうが、これが最新のものである。

一、死ぬのはイヤ。勿論その通りだが、死ぬのも自然だから止むを得ない。晩年になるほど幸福になったのは至幸である。要するに相当な一生であった。何物かに深く感謝をささげる。

一、多少書きたいこともあったが、今はどうでもよい。

一、葬儀は極力寂しいものにしてほしい。結婚式の時は招かれた人だけ出席する、その流儀で葬儀、通夜等も招いた人だけでありたい。むつかしい事だが、その努力を切望する」（抄）

これはおそらくどこかへ、飛行機で旅行するときのものだろう。

「四十年十二月廿六日深夜記す。

いよいよ書くべき事を書き残さねばならぬ。整理すべきことは整理せねばならぬ。いつまでも生きていられるものではない。小心翼々という点がないでもない。いや大いにあるらしい。死を眼前に控えていつまでもそうあってはならない。人の思わくの如きを介意せず、自由自在でありたい」

昭和四十一年十一月九日、彼は腸間膜動脈栓塞で、虎の門病院に入院、同月二十九日に手術を受けたが、十二月一日午後零時六分、死去した。（松本清張『形影』より）

ひとみなのいのちほろばばほろぶべし
おのがいのちにつつがあらすな
——佐佐木茂索——

内田吐夢（一八九八——一九七〇）

昭和十年代すでに大監督として「人生劇場」「土」「限りなき前進」等を世に出した内田吐夢は、もはや内地での映画製作は絶望的となった昭和二十年四月、「満映」で仕事すべく渡満して、敗戦にぶつかり、満映理事長甘粕正彦の自殺にまで立ち合う羽目になった。

その後彼は、何度も帰国する機会はあったのに、なぜか満州にとどまったが、その理由については、「のち、故郷（岡山市）と中国の話はしない、といわれたほどかくしとおした」（小川徹『内田吐夢における人間の研究』）

とにかく彼は、敗戦前は「日本精神」の権化のごときことを口にしたが、昭和二十八年やっと帰国したときは、中国の工人帽をかぶり毛沢東思想の信奉者のごとき言動があった。彼が帰国第一作「血槍富士」を作ることができたのは、二年後の昭和三十年になってからであった。彼は撮影所であだ名を「巨匠」と呼ばれた。

爾来、急速に吐夢は、ベレ帽にパイプといういでたちに戻ってゆく。

外観の二転三転とは別に、しかし彼が次々に作った映画は、「大菩薩峠・三部作」「飢餓海峡」「宮本武蔵・五部作」など、骨太な男性映画で一貫していた。

彼の本心は、ただ映画をとりたい、いつまでも現役でありたい、という望み以外に何もなかったのだ。そのために、帰国直後、それまで八年間も捨てていた妻子に、これからは献身的な夫となり父となると誓ったのに、やがてまた家族を捨てて、ひとり小田原に六帖一間の間借りをするという生活に戻ることになる。彼はあくまで「家庭人」ではなかった。

吐夢は最後まで夫人以外の女性に生ませた子供の認知問題で心を悩ませていた。

昭和四十五年四月、彼は「宮本武蔵」の別篇たる中村錦之助主演の「真剣勝負」の撮影にはいってから、急速に衰弱しはじめたが、とみには入院を承知せず、また入院しても病院をぬけ出して、ロケ先の御殿場へ、宙を歩くような足どりでひき返した。登場人物に赤ん坊を使っているので、撮影が遅れると、赤ん坊が成長して変化してしまう、あるいはバックの自然の草木の色が変ってしまうことを怖れて

のことであった。

吐夢はしかし、やがて動けなくなった。巨体が四十八キロにまでなった。健康のときは化物のような胃袋を持っていた彼が、食べたいものをメモして渡しても、それを買ってくると受けつけなかった。しかし女優などが見舞いにくると、その直前に酸素テントをとり払わせ、ベッドにあぐらをかいて呵々（かか）大笑し、見舞客が帰ると気息えんえんと横たわるのを常とした。

結局「真剣勝負」は彼の手では完成せず、昭和四十五年八月七日夜明け方、「あと十年は生きたい。こんなに頭の中に作りたいものがたくさんあるのに」と歎きつつ、死んだ。

彼はその数年前から、胃を病んだり、肺を病んだり、心臓を病んだりしていた。彼自身は最後まで心臓動脈瘤のために入院していると思いこんでいたが、死後解剖されてはじめて前立腺から発生したガンが全身に転移したものであったことが明らかになった。

小田原の部屋に残されていた貯金通帳の残高は、三万円であった。

墓石には彼自身の筆になる「命一コマ　吐夢」の文字が刻まれている。

リンドバーグ（一九〇二――一九七四）

「翼（つばさ）よあれがパリの灯だ」――リンドバーグが一九二七年はじめて大西洋を飛行機で単独横断無着陸飛行して一躍世界の名士となったのは、彼が二十五歳のときであった。

以後も彼は、愛児の誘拐惨殺事件や第二次大戦前ナチス礼讃論を唱えたりして話題の主でありつづけた。しかし晩年は「墜（お）ちた偶像」であったといっていい。

リンドバーグは自分の肉体がガンに冒（おか）されていることを、死の一年前から知っていた。ニューヨークのコロンビア大学病院で、十一人の医者と完璧な設備に守られた治療を受けていたのである。しかし、死をはっきり自覚したとき、リンドバーグは病院を出た。

「ニューヨークで薬ぜめにあって一カ月生きのびるより、美しいマウイの家で楽しい一日を送りたい」

といって、彼はハワイのマウイ島に飛んだ。一九七四年八月のことであった。（ついでにいえば、マウイ島で生まれたジェシー・クハウルアという青年は、その十年前から日本へいって、高見山大五郎という力士になっていた）

リンドバーグはハワイのマウイ島の美しさを愛し、一九六九年、その島の地主ブライヤーから土地を借りて別荘を作っていたのである。

マウイに着くと、彼はすぐに自分で葬式の計画をたてた。墓石の寸法から棺の作り方、死装束、参列者、葬式のやりかたに至るまで、みずから設定した。

それによると、彼の死装束は作業服で、参列者も平服だった。葬式はハワイアン式で、ハワイアンコーラスの四人の女性に、ハワイの葬式の唄「カ・ラ・ニ・クウ・ホメ（天使のお迎え）」を歌わせるというのだった。

マウイに着いてから八日目に彼は死んだ。八月二十六日午前七時十五分であった。

彼の葬られた墓地には、彼が大阪万博にいったとき日本の皇太子から贈られ、その後毒の花を食べて死んだキャミーという愛猿がすでに埋められていた。動物とともに葬られる――これはキリスト教に対する彼の叛逆的行為であった。（「文藝春秋」昭和五十二年十一月号　佐藤早苗『リンドバーグの反骨』より）

山本嘉次郎（やまもとかじろう）（一九〇二――一九七四）

おびただしい東宝喜劇映画を作る一方、「馬」「ハワイ・マレー沖海戦」など道標的名作を残し、黒沢明、高峰秀子、エノケンなどを育てあげ、カツドウヤと自称した映画監督山本嘉次郎は、戦後はこれといった作品を作っていない。

しかし、生活を愛し、スコッチウイスキーを好み、親子丼の発明者は自分のおやじ（明治のころ岩谷天狗煙草の支配人）だと唱え、

「ボクは親子どんぶりを食ってから死にたい。それも、そば屋から出前されたようないい加減なものではなく、自らの手で精魂を傾けて仕上げたものでなくてはならぬ」

と、昭和四十八年「文藝春秋」の十一月号に書いたほどであった。

それには、二、三十年前の東京湾で採れたものと同じ海苔（のり）、秋田の比内鶏（ひないどり）、絶滅した上山（かみのやま）の酸川米（すかわまい）、上州沼田産の大豆で作った醤油等を必要とし、

「すべて根本からやり直さなければならない。これを考えると、まだまだ二十年や三十年は死ねない」

といった。

しかし、それから半年たつやたたずの昭和四十九年六月はじめから脳軟化症を起し、ついで肝硬変がそれに重なった。

……外見では生活を愛し、食道楽を楽しむ趣味人と見え、

しかし「仕事」のない山本嘉次郎の晩年の実態は、むろんそんなにエレガントなものではなかった。世田谷区会議員となって彼を養った千枝子夫人は記す。

「仕事の方向を失い、常軌を逸した行動に走り出した晩年の夫の姿が目に浮かびます。独特の調子で痛烈な皮肉をあびせかける夫。体をこわすとわかっている劇薬同様のウイスキーをあおって、酔いで自分の良心を殺そうとする小心の夫。いっそのこと、私の手で夫の生命を絶ち、自分も死のうと何度考えたことでしょう。（中略）

それでも私には、夫が早く生涯を終りたいという気持が痛いほどよくわかりました。夫が夜中にフラフラと台所へ行ってウイスキーやビールをベッドに運んでいることも知っていました。その空きビンがベッドの下に山のようにあることも知っていました。

なぜ、そんなに死に急ぐのですか。そう思っても私はそれを口にすることはできませんでした。夫一流のダンディズムがわかっていたからです。敗残の老監督は、夫のいちばんいやがる姿だったのです。

三鷹の杏林大学に入院した夫は、一カ月間というもの、ほとんど食事に箸をつけませんでした。何を出しても食欲というものを見せませんでした。医師もついにサジを投げて退院することになりました。帰宅して、まっさきにいったのは、『酒』のひとことでした。こうして夫は終幕に向って突っ走ったのです。――」（山本千枝子『カツドウヤ女房奮闘記』）

九月二十一日の昼ごろ、しきりにオスシーとつぶやくのを、やっとウイスキーだと聴きわけ、夫人がスコッチを脱脂綿にひたして口にあてがってやると、うまそうにチューチューとそれを吸った。

午後七時五十五分、眠るように息をひきとった。親子丼とはいかなかったが、からくも食通の最後の面目は果した。

棟方志功（一九〇三――一九七五）

昭和四十九年夏、版画家棟方志功は妻のチヤとともに故郷の青森へゆき、郊外の三内霊園に自分たちの墓地を買い、墓碑銘を作った。「静眠碑」という志功独特の造字造語による墓碑銘であった。そのとき集まった旧知の人々に彼はいった。

「私がこの静眠碑に入ったら、ほかに何もなくてもいい。白い花一輪とベートーヴェンの第九でも聞かせて下さい。きみたちとも、また、すぐに会えるよ、魂で、きっと、なあ……」

そして、ネブタ祭に加わった志功は、豆絞りの鉢巻き、浴衣に赤い襷、白足袋裸足の姿で、手に「名誉市民」と書かれた弓張提灯を持って踊りまくった。

志功はその五年前に、青森市名誉市民第一号に選ばれていた。群衆はその彼の姿に拍手した。彼は完全に「酬いられた」芸術家となっていた。

帰京後も、彼は精力的に描き、旅をした。そして十月には、アメリカで個展をひらくために妻とともに飛んだ。この旅行中、カナダでの飛行機の中で、彼は気持が悪い、といって倒れ、応急処置を受けた。これが彼の死病の最初の徴候であった。

十一月二十七日、ニューヨーク空港でまた倒れ、サンフランシスコ、ホノルルで休養しつつ、十二月二日羽田に到着後、ただちに慈恵会医大病院で診察を受けた。肝臓に発生したガンはすでに転移しており、年を越すのは難しいかも知れない、という診断が下された。

しかし生来頑健な彼は、よく生き通した。そして翌年の九月十三日午前十時五分、チヤ夫人によれば、「線香花火の玉がポトリと落ちるように」息をひきとった。

十一月、彼の遺骨は青森の墓地に埋葬され、青森市葬が行われ、ベートーヴェンの第九が奏でられ、小中学生らによるネブタ祭の舞踊が演じられた。

舟橋聖一（一九〇四――一九七六）

「『花の生涯』では丹羽文雄氏の『蛇と鳩』と、野間賞を争ったが、ついに僅かの差で敗れ、丹羽さんに先を越された。このときはよほどくやしかったと見え、それから、丹羽さんの小説を一寸でも話題にすると、機嫌が悪くなった。丹羽文学は禁句であった」

と、弟の舟橋和郎は書く。

「昭和三十年代の終わりごろから、毎年十一月が近づくと、周期的に兄の神経がいらだってくる徴候が見えた。これは芸術院会員の発表が、毎年十一月ごろにあり、そこに自分の名前がなく、ライバルの名や、ときには後輩の名前が出ていることが、ここ二、三年続いたからである」

昭和四十年、舟橋聖一、数え年六十二歳。

「還暦の翌年の十月に、兄は眼疾を患い、そのために、心たのしまぬ日々を送るようになった。

そのころから彼は一段と癇癪持ちになった。

彼はなにかにつけて、完全主義をふりかざした。それは

極端なほどのきびしさをもって、彼に接する人々に向けられた。家族や使用人ばかりでなく、彼の病気を診察に来る医師たちに対してまでも。
　彼はめったに笑わなくなった。彼の屋敷には常に彼の不機嫌からくる、陰気さが漂った。（中略）
　彼は失明と闘いながら、ますます完全主義者になっていったのである。（中略）
　彼は医者を信用できずに、あれこれと医者を替えているうちに、とんだ藪医者にひっかかり、その処方した塩酸ピロカルピン液を左眼に点眼した結果、薬物中毒を起こして、片眼を失明してしまったのである。（中略）『生兵法は大けがのもと』とはこの事だ」（中略）
　勲章好きの聖一は、昭和五十年秋、やっと文化功労者の栄誉を受けることになった。が、弟たちがお祝いの品をとどけなかったことについて、彼はまた大癇癪を起し、暮に和郎たちを呼びつけて、「弟妹たち合わせて百万円持って来い」と怒号した。
　そのあと彼は心臓喘息の発作を起した。
　年が明けて弟妹たちが鳩首協議しているうち、一月十三日の早朝、聖一はまた大発作を起して、意識不明のまま救急車で日本医大附属病院に運びこまれた。
　そして、懸命の心臓マッサージもむなしく、午後零時五十八分、急性心筋梗塞によって、死去した。
「兄は煩悩の塊と言ってもよい人だった。その死に顔を見たとき、私は兄の体から、もろもろの煩悩が、まるで見えない煙かなんぞになって、すうーッと空中へぬけて行くような感じを受けた」（舟橋和郎『兄・舟橋聖一の素顔』より要約）

ジャン・ギャバン（一九〇四――一九七六）

　戦前では「地の果てを行く」「望郷」「霧の波止場」、戦後では「現金に手を出すな」等で日本にも多数のファンを持ったフランス映画の名優ジャン・ギャバンは、六十歳を過ぎたころから高血圧のため、妻にもう仕事をやめたら、といわれながら、死ぬ前年まで映画に出た。「稼がなければ税金が払えないから」と彼はいったが、ギャバンは金も芝居も大好きな男だった。
　一九七六年十一月十日、彼は、もらったばかりのレジオン・ドヌール勲章の記念パーティを予定していて、その日に心臓発作を起してベッドについた。彼のレジオン・ドヌールは四等で、日本の芸能人が常に勲四等をもらうのと符

節を合している。
　ギャバンは十三日に、ヌイイーにあるアメリカ病院に入院して、アイゼンハウアー病棟二七〇号室にいれられたが、十五日午前四時二十分に息をひきとった。それは前年にギリシャの大富豪オナシスが死んだのと同じ部屋だった。
　この日、フランス国営放送は、「すべてのフランス人にとって悲しい知らせです」とトップで放送、彼の死をたしかめ合うためにフランス中の電話が鳴った。
　十一月十九日、彼の遺骨は、ジスカール・デスタン大統領の特別措置で、フランス海軍の軍艦で運ばれ、大西洋に水葬礼された。このとき大統領は、「フランス大統領に恥をかかせるような二等兵曹は、もう二度と現われないだろうね」と笑った。
　ジャン・ギャバンは第一次大戦のとき二等兵曹として召集された。そして死の前年、ジスカール・デスタン大統領がエリゼ宮の宴会に招待したとき、都合が悪いといって出席をことわった男だったからである。
「俳優はしょせん道化者だよ」というのが彼の辞退の弁であったが、実は高すぎる税金に腹をたてての肘鉄だったといわれる。

ジョン・ウエイン（一九〇七――一九七九）

　西部劇の王者ジョン・ウエインは、一九六三年、五十六歳のはじめから咳がひどくなり、六四年「サーカスの世界」撮影中には、夜通しはげしい咳に苦しみ、吐き出す痰は青黒く、しばしばひどい胸痛をおぼえた。
　そこで同年九月、左肺の全部と右肺の一部を切除した。一部の新聞は彼の病気が肺ガンであるとスクープしたが、その後五年近くなっても、依然超人的な活動をつづけるウエインに、「ほんとうに肺ガンだったのだろうか？」という声が出た。このときの病名は一切発表されず、カルテは秘密に保管されたままであった。
　しかし一九六八年、不人気なベトナム戦争を題材に、アメリカ軍を正義化した「グリーン・ベレー」を撮影中、また咳の発作と背中、脚の激痛に苦しむようになり、ときには酸素吸入器の助けをかりて撮影しなければならないほどであった。六十一歳の彼は鬼神に憑かれたようにこの映画を完成させたが、結果はひどい不入りであった。
　しかし、彼はなお生きつづけた。十年後、一九七八年四月には心臓の手術を受けた。七九

年の一月には胃ガンの手術を受けた。九時間半にわたる大手術であった。このとき各新聞は追悼記事を用意したほどであったが、彼は奇蹟的によみがえり、四月のアカデミー賞授賞式に彼はオスカー贈呈者（プレゼンター）として姿を見せ、受賞者以上の大きな拍手をあびたが、その姿は、以前より二十キロも痩せ、見る影もないほどやつれていた。

そのすぐあと、五月一日、カリフォルニア大学附属病院で、こんどは腸閉塞の手術を受け、このときガンがすでに全身にひろがっていることが明らかになった。

五日にはカーター大統領みずから見舞い、ついで二十六日、アメリカ国民最高の名誉である「ゴールド・メダル」（ワシントンからディズニーまで八十三人しか与えられていないもの。ウエインは八十四人目となった）を与えられたが、六月にはいってからは、鎮痛剤でからくも生命を保つという状態になった。

しかし、死ぬ前には意識を持って子供たちの顔を見ていたいという希望で、最後の二十四時間は薬をことわり、六月十一日午後五時二十三分、七人の子供たちに見守られながら、ガンとの長い戦いを終えた。

彼の最後の映画は、ガンを宣告された老ガンマンが壮絶な決闘で死んでゆく七日間の物語「ラストシューティスト」で、彼自身が遺作のつもりで作った映画であった。これは一九七六年の製作だが、日本ではわざとオクラにして、彼が死ぬのを待って公開された。

彼が死んだとき、日本の新聞はすべて、ガンと最後まで戦ったのちの壮絶な死、というような形容でその死を報じたが、しかし死ぬまで死病と戦うことを余儀なくされるのは、何もジョン・ウエインに限ったことではないのである。

それにしても、フランス映画とアメリカ映画、双方の代表的伊達男が同じ年齢で死んだのは一奇である。

松本幸四郎（まつもとこうしろう）・八世（一九一〇——一九八二）

八世・松本幸四郎は昭和五十四年秋、ベーチェット病（口腔炎、湿疹、虹彩炎、その他全身病を患う原因不明の難病）にかかってから入退院を繰返した。「あんた、何が面白くて生きているのかね」と中村勘三郎に笑われたほどきまじめで、がまん強い幸四郎は、苦しそうな表情を見せながら苦しいとはいわず、家人が「痛いですか」と訊くと「どの程度から痛いといっていいかわからんのだ」と、いった。

彼は昭和五十六年十月から十一月にかけて、長男染五郎に九代目幸四郎を、孫の金太郎に七代目染五郎を譲る「三代襲名披露興行」を行ったのを機会に、自分は白鸚（はくおう）と名乗り、みずから「口上」のほか、「加賀鳶」の松蔵、「忠臣蔵七段目」の大星、井伊大老などをつとめた。

しかし、体調不充分のままの出演で、弟の松緑も無理だと見てはいたが、兄がすべて承知の上だということを感じて、やるがままにまかせた。果せるかな幸四郎は、以上の役を順次休演してゆき、ついに病床につくようになった。

昭和五十七年一月十一日、東京の住まい赤坂パークハウスで急に容態が悪くなり、本人の望みで鎌倉雪ノ下の自邸に車で帰り、同日午後十一時四十五分、心不全で息をひきとった。「芝居は終ったか」と夫人にいったのが最後の言葉であった。

『幸四郎三国志』を書いた千谷（ちや）道雄は記す。

「白鸚の遺骸と対面したときに、堂々と肉付きのよかったこの人の身体が病気のために骨と皮に痩せ縮んでいたのに一驚した。よくもこの身体で、わずか二カ月足らず前まで七段目の由良之助という大役がこなせたものだと、ひそかに思った。

一時間四十五分という長丁場を、おそらく衣裳の下に幾重にもタオルを巻き、また肉布団を着込んで、ダルマさんのようになって勤めていたのだろうが、そういう肉体の衰えを、観客だけでなく内輪の人々にさえそれほど感じさせなかったということは、とても並の人間のできるところではない。

舞台の上だけでなく、文化勲章を受章して参内したときも、紋服の下は同じように装うていたことだろう。

役者一筋七十年、はがねのように鍛え上げられた精神力が、燃えつきようとする肉体を最後の舞台まで支えきったのである。決して演出することのできないはずの死を、ものの見事に演出し了（おお）せて見せたというひとことだけでも、古今東西に類を見ない『極上々吉』の名優というべきである」（千谷道雄『白鸚追懐』）

この『図巻』の中にも、これほど自分の臨終のために準備万端整えて、そのすべてを始末しおえた人はない。

田村泰次郎（たむらたいじろう）（一九一一——一九八三）

「肉体」という文字を見ただけでみな昂奮して胴ぶるいした敗戦直後、田村泰次郎は『肉体の門』『肉体の悪魔』その他いわゆる「肉体文学」で一躍超人気作家となった。昭和二十二年八月、日本初のストリップショーといわれた新宿帝都座の「額縁ショー」で上演された「肉体の門」は、

以後三年間のロングランとなった。
田村の全盛期は数年で終ったが、その間にころがりこんだ莫大な収益で新宿に広い土地を買い、ビルを建てた。
昭和四十二年、田村は五十六歳のとき脳溢血を起して右半身不随となり、マッチをするのも不自由な身体になったが、泰次郎より十五若く、一目惚れされて二十歳で結婚した美好夫人は彼の死後いう。
「食いしん坊のうえ、なにしろお風呂が大好きで、昨年夏までは十日にいっぺん、運転手に新宿のストリップ劇場とトルコ風呂に車で連れていってもらっていました。ですから、てっきり主人は新宿のそういうところで死ぬと思っておりました」
風呂が好きだから、トルコ風呂にゆくやつはあるまいが——しかし田村は、昭和五十七年ごろから、糖尿病で入退院をくりかえすようになった。そして結局、五十八年十一月二日午後二時十四分、病院で心筋梗塞で死亡した。
若くして「人生の美食家」生活を保証された彼は、作家として幸福であったか不幸であったか。
夫人談。「でも、こうして新宿の、地下一階、地上十階のビルをやってきたおかげで、今後も食べてゆくことができます」（「週刊新潮」昭和五十八年十一月十七日号）

七十三歳で死んだ人々

「人間は、他人の死には不感症だ、といいながら、なぜ『人間臨終図巻』など書くのかね」
「……いや、私は解剖学者が屍体を見るように、さまざまな人間のさまざまな死を見ているだけだ」
——山田風太郎——

山上憶良（六六〇——七三三頃）

『万葉集』の歌人山上憶良は、六十を過ぎてから「……四肢動かず百節みないたみ、身体はなはだ重く、なお鈞石を負えるがごとし。布にかかりて立たむとすれば翼折れたる鳥のごとく、杖によりて歩まむとすれば足跛えたる驢のごとし」という状態になった。関節リューマチではなかった

かと思われる。
しかもこの状態が十年以上もつづいたらしい。
「殺生の中に暮している人間でさえ安らかな生活を送っているのに、日夜善行と信仰につとめている自分が、なぜこんな重病になるのか」
と憤った憶良は、天平五年六月三日、見舞いの人に、
「おのこやも空しかるべき万代に語りつぐべき名は立てずして」
という歌を返した。そしてこの年死んだものと推定されている。

カザノヴァ（一七二五——一七九八）

司祭、三文文士、とみくじ屋、スパイ、外交官秘書など、でたらめな職業につき、ヨーロッパ中を放浪しながら女たらしの生活を送ったジアコーモ・カザノヴァは、六十を越えてから、オーストリアの一伯爵の城の図書係となって、彼の過去を知る周囲の軽蔑のまとになりながら孤独な晩年を迎えた。
その寂寥をまぎらわせるために、彼は痛風に痛む指で、一日十三時間も自分の回想録を書き出した。
「いたるところでしめ出しをくい、女たちからもの笑いにされ、孤独で尾羽うち枯らし、性的不能になってからはじめて、気むずかしい、みじめな老人になってはじめて彼は、体験の代用物としての仕事に逃げ道を見つけた。楽しみを失ない、退屈まぎれに、まるで歯のぬけたかいせんかきの野良犬みたいに、むずがゆさにいらだちながら、ぐちっぽくなった彼が、自分自身の生涯を語りはじめたといってよい」（シュテファン・ツヴァイク『カザノヴァ』吉田正己訳）
一七九八年二月ごろから彼は膀胱をわずらい、六月四日に死んだ。そばにいたのは甥一人だけであった。彼は最後に「おれは哲学者として生きた。そしてキリスト教徒として死んでゆく」と、自分だけに通用する自己評価をやって眼をとじた。
その回想録の完全な公表は著者の死後百六十余年を経なければならなかったが、しかしひとたび世に出るや、好色で、危険で、堕落漢で、でたらめで、卑劣で、いかがわしく、ふしだらなカザノヴァという男の人間自身、生涯そのものの面白さで、しゃあしゃあと不滅の人物の仲間入りをしてしまった。

伊能忠敬（一七四五——一八一八）

下総佐原村の勤直にして篤実な名主であった伊能三郎右衛門（忠敬）は、四十九で隠居し、翌寛政七年、五十歳で突然発心して江戸に出て、十九歳も年下の幕府天文方高橋至時の弟子となって、西洋暦学、測量術を学んだ。

そして五十五歳から七十一歳まで、十七年間にわたり、三万五千キロを歩きつづけ、日本ではじめての正確な地図「大日本沿海輿地全図」を作製するという偉業をなしとげた。こういうみごとな後半生、こういう壮大な隠居仕事もあり得るのである。

しかも彼は、決して頑健な体格ではなく、年毎に深まる老いと、痔や痰咳などの持病に苦しみながら、憑かれたようにこの労苦に従った。そして文政元年四月十三日、江戸八丁堀亀島町の屋敷で大往生をとげた。遺言はただ「恩師高橋先生のお墓のそばに葬ってくれ」ということだけであった。

十年後、その高橋至時の子高橋景保が、忠敬の作った地図をシーボルトに贈ったことを、忠敬の弟子間宮林蔵に密告され、捕えられて獄死するという、いわゆる「シーボルト事件」が起ったが、むろん忠敬はその悲劇を知らない。

良寛（一七五八——一八三一）

越後出雲崎の名主兼神職橘屋の長男に生まれながら、いかなる次第でか二十二歳のとき出家して故郷を去った良寛は、三十八歳のとき飄然と帰って来て、出雲崎に近い国上山の庵に住んで、「五合庵」と名づけ、日々托鉢と、子供らとの遊戯に三十年の歳月を過した。

「霞立つながき春日を子供らと手毬つきつつこの日くらしつ」

その歌と書と、それよりも良寛が訪れただけでどこでも一家和楽の春風を残すその天真無垢ぶりは、子供らのみならず、町や村の人すべてから敬愛のまととなった。

しかしその良寛も、文政九年、六十八歳に及んで、老いの身の山中暮しを憐れまれ、麓の和島村島崎の能登屋という家の裏に庵をたててもらって、そこで養われる身になった。

文政十一年十一月、越後地方に大地震が起ったとき、知人から見舞状をもらった返書に、

「災難に逢時節には、災難に逢がよく候。死ぬ時節には、

死ぬがよく候」

と、良寛は書いている。

その前後から彼は、彼を慕う若い美貌の尼僧貞心とプラトニック・ラブともいうべき交わりをかわしている。みずからのことを語らず、名を後世に残そうという気のなかった良寛の伝記や詩や歌をのちに伝えた最大の功労者はこの貞心尼であった。

文政十三年七月、良寛は暑気当りか烈しい下痢を患った。病状は夏から秋へ、また冬にかけて一進一退した。大腸ガンではなかったかといわれる。その間、やや小康を得たときに書いたり、書きかけたりした反故の中に、

「ぬばたまの、夜はすがらに、屎まり明かし、あからひく、昼は厠に、走りあえなくに」

「この夜らの、いつか明けなむ、この夜らの、明けはなれなば、女きて、屎を洗はむ、こひ転び、明かしかねけり、ながきこの夜を」

「言に出て言へばやすけし瀉腹まことその身はいや堪へがたし」

などの歌があった。

暮に見舞いに来ていた弟の由之も、大晦日の所用のため、介抱を貞心尼に依頼して去った。貞心尼は精根をかたむけて看病したが、良寛の病状はさらに重くなっていった。彼女は絶望のあまり口ずさんだ。

「生き死にの界離れて住む身にも避らぬわかれのあるぞかなしき」

すると、昏睡状態にあった良寛が眼をあけて、

「うらを見せおもてを見せて散るもみじ」

と、細くつぶやいた。「うら」とは、自分の醜態のことをみずから笑ったのである。しかしさすがの良寛もこの句は借用であった。

明けて天保二年一月六日、雪ふりしきる越後の夕、大愚良寛はしずかにこの世から去った。

「おなやみもなく、ねむるが如く座化したまう」と貞心は記す。

あは雪の中に立ちたる三千大千世界
またその中に沫雪ぞ降る
——良寛——

グリム・弟（一七八六——一八五九）

『ヘンゼルとグレーテル』『赤頭巾』『灰かぶり姫』『白雪姫』『狼と七匹の小やぎ』などで知られるグリム童話集は、

このウィルヘルム・グリムが、兄のヤーコプ・グリムと共同してとりくんだ古代ドイツの法律、言語学、民俗学の研究の一環として蒐集したドイツ民話集に過ぎない。
小柄で、痩せ気味で、男性的で、剛毅な兄のヤーコプとは正反対に、彼は大柄で、ふくよかで、やさしい性格の持主であったが、生涯兄と一体のごとく協力し合い、超人的大著『ドイツ語辞典』の完成に一生を費した。
ウィルヘルムの最後の年、八歳ぐらいの女の子がグリムの家のベルを鳴らした。七十四歳の老ヤーコプが逢うと、「おもしろいお話をお書きになったのはおじさまですか」と、少女はいった。「そうです、私と弟が書いたのです」とヤーコプが答えると、「それじゃ『利口な仕立屋』のお話をお書きになったのね。おしまいに、このお話をほんとと思わないひとは、一ターラー（銀貨）払いなさい、と書いてあるお話よ」と、少女はいった。「それは弟が書いたのです」とヤーコプはいって、弟のウィルヘルムのところへ連れていった。少女はグリム童話集の中の『利口な仕立屋』を朗読し、「このお話はほんとうとは思えないわ。だからあたしは、おじさまに一ターラーを払わなくちゃなりません。でも、あたし、そんなにお小遣いをもらえないから、一ぺんに払えません。きょう一グロッシェン（銅貨）だけ払います」と、小さい財布から銅貨を出して、ウィルヘルムにおしつけて帰っていった。（高橋健二『グリム兄弟』より）
ウィルヘルム・グリムは元来心臓が悪かったが、この一八五九年初冬、背中に疔をわずらい、いったんは危機を乗りこえたかに見え、「自分はまだすることがたくさんあるのだ」といって原稿用紙を注文したりしたが、その後悪化して、十二月十六日、ベルリンの自宅で、ヤーコプに呼吸を数えられながら息をひきとった。
ヤーコプは、「私の半身が死んだ」といって落涙した。
その勤勉で温雅で質実な性格や生活から、日常においては童話的なところは全然ない兄弟であったが、この稀有な兄弟愛こそ童話的であった。
日本では吉田松陰が処刑された年。

斎藤弥九郎（一七九八——一八七一）

幕末、九段坂下に「錬兵館」をひらき、師範代桂小五郎をはじめ、品川弥二郎らのちに新政府の高官となった人々を弟子とした神道無念流の名人斎藤弥九郎は、維新後、会計官として大阪造幣寮に出仕した。どうみても剣術とは関係のありそうにない職である。こういう職しか使いようがなかったのか、それとも元弟子たちのせめてもの師匠救済法であったのか。
明治二年十一月四日、この造幣寮が出火焼失した際、彼は重要書類を運び出そうとして大火傷を負った。このあたり古武士の面目躍如たるものがある。
その後彼は東京に帰り、明治四年十月二十四日、牛込見附の自宅で死んだが、それがこの火傷と関係があるかどうかは不明である。
なお彼の長男で父以上の剣の天才といわれた斎藤新太郎は、二代目弥九郎の名をついだが、宮内省の門衛となった。開化の時代、剣道は不遇の道であった。

ダーウィン（一八〇九——一八八二）

一八五九年、五十歳で『種の起原』を刊行し、以後も『人間と動物の表情』以下十冊の大著を世に送り出したチャールズ・ダーウィンは、美しい白髪と髯、赤らんだ顔、澄んだ眼を持ち、老いても一見健康そうであったが、実は病身であった。少なくとも彼は、若いころからしばしば身体の不調を訴えた。（神経的ないし心理的なものであったという説もある）
ロンドン南方の郊外ダウンの町の、敷地三万坪の邸宅で、しかし彼は充実した、幸福な晩年を過した。
二十代の、五年間に及ぶ『ビーグル号航海記』の著者は、晩年ほとんど気ばらしの旅行さえしなかった。
午前中、八時から九時半まで執筆、午後は四時半から五時半まで執筆したが、あとは愛犬と散歩し、寝室で休息し、夫人に通俗小説を読んでもらったり、ピアノを聴いたり、いっしょにスゴロクをしたりして、夜十時半に就寝した。この日課は、それぞれ時間的にも几帳面に守られた。
世界の生物学のみならず、思想、宗教をも震撼させたこの大学者は、しかし政治に対しても宗教に対しても芸術に対しても、平凡で、微温的で、常識的で、そして少しばかりブルジョア的な人物であった。
一八八一年十二月に心臓の発作を起し、翌一八八二年はじめは病状が一進一退の状態で、それでもときには、サフランが咲き鳥のさえずる果樹園で、幸福そうに夫人といっしょに坐っている日々があった。
が、四月十五日、夕食のとき、急にめまいを起してソファに坐りそこなった。その後一時よくなったが、十八日夜半にまた急激な発作が起り、意識を失った。いちど意識を

回復し、「死ぬことは少しもこわくない」と、いった。翌十九日朝、吐気を訴え、衰弱が甚だしくなり、午後三時半に、妻や娘たちに看とられながらこの世を去った。
　遺骸は、英国の偉人としてウエストミンスター寺院のニュートンの近くに葬られたが「人間は猿から進化した」という説の独創者として、イギリスの教会はにがい顔をした。
日本では明治十五年。

清水次郎長（一八二〇——一八九三）

　慶応二年春の荒神山の大喧嘩をクライマックスとして血なまぐさい生涯の、多くのライヴァル、朋友、乾分の大半はそれまでに非業の最期をとげたのに、「海道一の大親分」次郎長は、明治二十六年六月十二日早暁、生まれ故郷清水港の自分の家のたたみの上で、大往生をとげた。病名不明。
　六月二十日の「朝野新聞」は伝える。
「静岡県下の遊侠児山本長五郎（綽名次郎長）の死去せしことは前号の紙上に報道せしが、今又、其葬儀の模様を聞くに、葬式は去る十五日清水波止場の自宅を出棺し、同港梅蔭寺へ埋葬せり。当日の会葬者は、京浜、上、武、遠、三の諸方より来れるものと、之に隣接の乾児朋友親戚等にて其数殆ど数千の上に出でたりと伝え聞く。
　次郎長の将に死なんとするや、人に言って曰く、吾れ年少気鋭、敢て一歩も人に譲らず、故を以て闘争搏撃殆ど吾が半生を埋めたり。此間吾れの得たるもの絶えてなし、只僅かにあるものは渾身の瘢痕と他の剛臆を知るとの事のみ。汝ら少壮血気の徒、誓って現在と将来とを問わず、濫りに闘争するを已めよ。然れども其已むを得ざるの時に当りては死且つ辞するなかれ。
　吾れ今臨終に際して、吾れの剛臆を験するの法は、他と剣を搏つの時に於て、相互の剣端触れて、他の剣の余りに確かと握られ居ざるものは油断なり難し。何となれば、彼はその間幾分の余地を存するものなればなり。若し夫れ他の両手を以て確く一剣を握り詰め、吾れの切先触るるも、敢て動かざるものに至りては極めて臆病者なり、云々」
　面白いことに、このとし二十一歳の樋口一葉がその日記、六月十八日の項に次郎長の死を書きとどめている。
「俠客駿河の次郎長死亡。本日葬儀。会する者千余名、上武甲の三州より博徒の頭だちたるもの会する五百名と聞えたり」

パストゥール（一八二二——一八九五）

　狂犬病の予防接種をはじめ、微生物の世界で数々の不滅の功績をたてたフランスの大化学者ルイ・パストゥールは、一八九四年の十一月、突然尿毒症の烈しい発作に襲われて、四時間の間、意識不明におちいった。
　重態は一応去ったが、それ以後彼は弱りはじめた。しかしなお彼は後進を指導し、激励することをやめなかった。
　一八九五年六月、彼はパリ郊外のヴィユヌーヴ・レタンに転地療養にゆき、そこで妻と娘の手厚い看護による最後の三カ月を過した。
　九月二十七日、一杯のミルクをすすめられたとき彼は、「もう何も……」と、ベッドの上で首をふった。その眼には何ともいえないあきらめと別れの表情が見られた。そういったあと彼の頭は枕の上に落ち、短時間眠った。その眠りのあとで、二十四時間つづく最後のあえぎが訪れた。
　彼は敬虔なカトリック教徒として、一方の手に十字架を握り、一方の手を夫人や弟子たちに握られ、九月二十八日午後四時四十分、おだやかに息をひきとった。

「死を無と断定することは、人間の心を侮辱することだ」
——パストゥール——

橋本雅邦（一八三五——一九〇八）

　近代日本画の父を岡倉天心とするなら、橋本雅邦はその母であった。雅邦は画家としてより、天性の美術教育者であった。明治三十一年、官立の美術学校を辞職して日本美術院を創立したあと、天才的な一面投げやりなところのある天心をよく助け、辛抱強くその尻ぬぐいをした。
　雅邦は「よく勤める人」で、食後に人を訪ねても、食事が出れば相手を気づかってぜんぶ平らげた。酒を飲むこと以外には趣味がなく、それだけに大酒豪であった。その大酒大食のためか、彼の死病は胃ガンであった。
　不羈奔放の天心と温厚篤実の雅邦は、おたがいに酒飲みということもあって、ふしぎにウマが合った。
　明治四十一年、雅邦の命旦夕に迫るや、天心はこれを見舞った。
「雅邦翁の最後の時の天心先生とのお別れは、両雄の永別として特に注目すべきものでありました」
　と、雅邦の養子、画家橋本静水は語る。

「翁が重態で、もーいけないという時です。天心先生は米国行を一船後くらして居ったのでしたが、『ドウモ発てないね』とつぶやきながら、一族親類の看まもって居る病室の翁の枕元で、突然持参の弁当を開いて、それを食べ始めたものです。そうして弁当の中にあった牛肉の切れを一ト切れ挟んで翁に出した。すると瀕死の翁は、すぐ手を出して之を受け、その牛肉の切れを一トロに食べてしまった。天心先生は、それを見るなり、矢庭に弁当箱を両手に持って涙をぽろぽろ流しながら廊下を走り廻ったものです。ソレが翁との永別で、先生は米国に向って発足し、翁は幾ほどもなく歿しました」

雅邦が死んだのは、明治四十一年一月十三日のことであった。

河本大作（一八八二――一九五五）

昭和三年六月四日、関東軍高級参謀にして大佐たる河本大作は、満州に君臨する張作霖を爆殺し、いわゆる「満州某重大事件」の責任者として昭和五年予備役にいれられた。彼のこの「凶行」は、張作霖の子張学良を日本への復讐の鬼と化せしめ、やがてその奔走により中国を国共合作させて抗日運動に起ち上らせる端緒を作った。

河本はその後、満州事変の口火となった柳条湖事件にも参画し、満州国成立以来、満鉄理事などを勤めたが、昭和十八年には、中国山西省の太原で山西産業の社長となり、「山西の帝王」と呼ばれた。

太平洋戦争敗戦後、なお三千の日本人とともに太原にとどまっていたが、昭和二十四年五月、共産軍が太原を占領するに至って、重要戦犯として捕えられ、北京監獄に移された。彼は六十七歳になっていた。

そして昭和二十七年秋、ふたたび太原監獄に戻されたが、同じ監獄に収容されていた元秘書の大西健は語る。

「収容所で再会したときは、正直なところびっくりした。わずか三年たらずのあいだに、頭髪は真っ白になり、痩せて体がひとまわりも小さくなっていた。寒い北京ですごした三年間の監獄が、いかに河本の体をむしばんでしまったのか、と胸がいたんだ。（中略）

河本は、はじめ軽い農作業をやっていたが、健康が思わしくないので、そのうち作業はやめ、獄房内でマッチのレッテル貼りかなにかやっていたようだった。

二十八年の夏に入ると、河本の衰弱は目にみえて昂じていた。作業からはずされた河本は獄舎から出され、赤レンガの長い塀の下に硬い椅子をだし、終日、陽にあたっていた。真っ白な頭髪とのび放題にのびた長いあごひげは、仙人のように見えた。

動く応接間みたいなパッカードを乗りまわし、軍司令官閣下さえ膝下においた、威風堂々たるかつての面影の片鱗だに、そこにみることはできなかった」

河本が息をひきとったのは、昭和三十年八月二十五日の夕刻であった。心臓病から全身浮腫をひき起し、俄に意識不明におちいった。

本人の意志はともあれ、やがて日本を大破局にたたきこむ炎を最初に点じたこの暴勇の風雲児――そのくせ、酒が飲めない、甘党の妖軍人の最後の言葉は、

「カルピスに、カステラが食いたい」

であったという。（相良俊雄『赤い夕陽の満州ガ原に――鬼才河本大作の生涯』より）

高村光太郎（一八八三――一九五六）

高村光太郎は若いときからときどき少量ながら喀血したことがあり、かつ昭和二十年五月、六十二歳にして空襲で東京のアトリエを焼かれ、岩手県花巻に疎開した直後に急性肺炎をわずらったときにも、医師の診断では胸部に痼疾のあることが認められたという。

しかし生来の強靱な肉体はこれを克服したかに見えたが、敗戦直後の十月から、戦時中の数々の戦争詩のためにみずからを岩手の山中に「自己流謫」した後、極寒と吹雪の中の孤独な足かけ八年の生活は、徐々に彼の健康をむしばんだ。

「今日も愚直な雪がふり
小屋はつんぼのやうに黙りこむ。
小屋にゐるのは一つの典型、
一つの愚劣の典型だ」
（『典型』）

昭和二十二年一月に、喀痰中に血痕を発見し、以来何度か血痰を見るようになったが、自分では肺の毛細管が破れやすい体質なので、決して結核ではないと思いこんでいた。

昭和二十七年、彼は、十和田湖畔の記念碑としての彫像制作のために、八年ぶりに東京に帰り、中野区桃園町の故中西利雄画伯のアトリエを借りた。時に六十九歳であった。

彼はこの制作の後、ふたたび山に戻るつもりであったが、二十八年その彫刻が完成したとき、すでに結核の徴候ははっきりと現われていた。

しかし彼は容易に入院しようとはしなかった。主治医と

相談の結果、いかにすれば仕事が沢山かつ長く出来るか、ということを主眼として、治療はただ悪化しない程度にとどめることとし、彼はアトリエにベッドを置いてそこに横たわった。

晩年弟子として出入りした奥平英雄は、昭和二十九年当時の光太郎について記している。

「私は光太郎の枕辺で独りビールを酌ぎ、光太郎の顔を見ながら独りで飲んだ。七月の夕暮れ、このアトリエの蛍光燈の光はなにか夕べのひとときをしんみりと静かに照らしていた。そのおちついた光の中で、静かに横たわっている光太郎とただ二人で向いあっているのは、実に名状しがたい光景であった」

三十年を迎え、光太郎の身体はやや回復したように見えたが、四月にはいってまた喀血し、ついに赤坂の山王病院に入院した。入院前彼は、「まったく人間の生涯は苦しみの連続だ。死でやっと、解放され、これで楽になるという感じがする」といった。

七月になって軽快したように思われ、退院したが、九月になると奥平に、「以前は痛みが一ケ所だけだったが、今では胸全体に拡がってきたようだ。ときには肋骨がバラバラになるような痛みを感じる」といった。それで奥平がびっくりして、医者にそのことを報告すると、それを知った光太郎はふきげんになって、「この苦痛は君だから話したんだ。もう君に話すことも控えなければならない」と叱った。

三十一年一月になって、光太郎の衰弱は目に見えていちじるしくなった。結核のために肋膜の癒着が起り、呼吸運動が制限され、気管支の狭窄を起し、ために胸痛と息切れがひどくなった。

そのころ光太郎は、昭和九年八十二歳で死んだ父の光雲について、「父は内的なものを持たない人だった。だから父は空虚な生き方しか出来なかった」といった。それは父をなつかしみ、憐れむ思いのこもった語調であったが、しかし評語そのものとしては、辛辣きわまる評語であった。

彼は以前から父の彫刻を買っていなかった。光雲の作った二重橋の楠公像は五月人形で、上野公園の西郷像は置物だといっていた。

……しかし、楠公像と西郷像は、そんな批評眼を度外視した民衆の敬愛の眼につつまれていまも厳然と立ち、光太郎の精魂こめた十和田湖の乙女の像は、いまだに民衆からはあまり好評をもって見られていないのである。最後まで詩人よりも「彫刻家」であることを誇りとした高村光太郎

の悲劇であった。

そのころ、光太郎は奥平にいった。「きみはぼくがこうして独りでいるのが淋しいとでも思ってやって来るのかね。もしそうなら来てくれなくてもいいんだよ。ぼくは独りでいても、ちっとも淋しくなんかないのだ」それから、またいった。「ぼくには智恵子がやってくる。ぼくは智恵子とふたりでいつも話しあっている。だからぼくは淋しいなんてことはちっともないのだ」

死の近づいた光太郎の魂には、十八年前に死んだ狂妻智恵子がまだ生きていたのだ。

二月ごろ、彼は弟の彫刻家豊周に、ことしは木彫をやるつもりだ、といい、こころもち唇をまげて微笑を浮かべながら、

「気持が楽しいと木彫が出来る。腹が立つと詩が出来る」

と、独り言のようにつぶやいた。

三月十九日の夕方、喀血して、病勢にわかに改まった。二十四日の午後、奥平が見舞うと、アトリエのベッドに横たわっていた光太郎は、看護婦に足をさすってもらいながら、

「ぼくの心臓は強いんだそうだ。弱いんだと、三、四分で楽になれるんだがなあ」

と、低い声でいった。

四月一日、ふたたび大喀血が起り、二日の午前三時四十五分、窓の外に季節はずれの雪のはげしく降る中で、ついに光太郎は息をひきとった。

奥平は記している。

「光太郎の顔から白い布をとったとき、私はその死の顔を実に静かな美しい顔だと思った。生前あれほど彼を苦しめた胸の痛みからも、苦しみの連続だと語った人間の生涯からも、いまやっと彼は死で解放されたのだと思った。

私がこれまでしばしば見てきた光太郎の顔は、魂の底に深い孤独の影をたたえるような、謹厳な中にも悲愴のにじんだ顔であった。私はそうした彼の顔に惹かれてきたが、いまここに見る光太郎の安らかな死顔は、生前の顔とはまた別な、実におだやかな美しさをたたえていた」

この日、雪のあがったアトリエの庭には連翹の花がたわわに咲いていた。棺の上に彼が愛用したビールのコップがおかれ、一枝の連翹がいけられた。

以来光太郎忌を「連翹忌」と呼ぶ。（主として奥平英雄『晩年の高村光太郎』による）

室生犀星（一八八九――一九六二）

昭和三十六年六月、青野季吉の葬式から帰って来た犀星は、娘の朝子にいった。

「いやしくもペンを持って、三十年四十年生活して来た者が、癌という病気を周囲の者達だけが皆承知していて、本人だけが知らずに死ぬということは、文学者として許されることではない。もしもわしがそのような病気になったらば、君は忘れずに、そして遠慮なく言ってくれ」

その八月、軽井沢の別荘にいった犀星は、咳、痰、胸痛、微熱に苦しみはじめた。

徹底的に医者ぎらいの彼を、朝子は帰京させ、苦労して近くの医者に見せ、さらに虎ノ門の逓信病院へいって診察を受けさせた。それが肺ガンによるものであることを、担当の本間医師から朝子が告げられたのは十月十七日のことであった。

朝子はさきの父の言葉を思い出して、父に告げるべきかどうか医師に相談した。本間医師は厳しくそれはいってはならないと命じた。

犀星はコバルト照射その他の治療を受け、十一月八日一応退院し、以後自宅で以前と同じような執筆生活に戻った。彼は自分の病気を、医者からいわれた通り肋膜炎だとばかり思いこんでいて、客が来ると、

「コバルト60のためにこんなに色が黒くなってしまって……」

と、いろいろ弁解し、コバルトという言葉を聞いて変な顔をする客の反応にも気がつかなかった。彼は最後まで自分が肺ガンであることを知らなかった。

翌昭和三十七年一月二十五日、犀星も審査委員になっている読売文学賞の審査会があり、犀星はそれに出席するといってきかなかった。朝子は、その席で父がまた「コバルト60のために黒くなって……」とやり、ほかの委員も作家が多いので、これに対して作家特有の遠慮のない応答をする人がありはしないかと心配になり、あらかじめ御配慮願いたい、と委員の一人正宗白鳥のところへ頼みにいった。白鳥は承知し、朝子の教えた応答のしかたを復誦までしておぼえてくれた。世にもつまらない、といった風な白鳥の顔が想像される。

その白鳥も、犀星の死後七カ月で死ぬのである。

以後も父にそのことを気づかせないようにして献身の看護をつくす朝子たちを見て、本間医師はそのことを朝子に

知らせたことさえ悔いた。

犀星は次第に弱り、排尿困難、行動困難となり、三月にはいるとガンが脳に転移した徴候が認められた。そして三月二十六日午後七時二十六分、息をひきとった。（室生朝子『晩年の父、室生犀星』より要約）

臨終に立ち合った森茉莉は、息をひきとるとき犀星は、顔を右に左に烈しく伏せ、俺は貴様に俺の命を持ってゆかせはしない、どうしても持って行こうというのなら俺の方から渡してやる、俺は貴様に負けはしない、貴様と取組みあって討死するのだ、というように、まるで禿鷹が羽をバタバタさせるようにした、と記している。

川端康成（一八九九――一九七二）

「無用」の世界を描いて、昭和四十三年、日本人としてははじめてノーベル文学賞を受賞した川端康成は、それ以来俄然として「有用」の世界に生きなければならないことになった。

昭和四十六年の東京都知事選挙に元警視総監秦野章の応援に立ったなどはその例で、川端の心事は知らず、その活躍は真剣に見えたが、真剣に見えれば見えるほど、客観的にはアブノーマルなものに感じられた。

彼はこのころ一首の歌を作った。

「友みなのいのちはすでにほろびたりわれの生くるは火中の蓮華」

火中の蓮華とは、あり得べからざること、という仏語である。

昭和四十七年四月十六日午後二時四十五分ごろ、川端は散歩にゆくといって、鎌倉の自宅を出かけたが、夜になっても帰らないので、お手伝いの娘が、九時四十五分ごろ、川端が仕事用に使っている逗子市小坪の逗子マリーナ・マンション四階四十七号室にいってみると、中から鍵がかかり、強いガスの臭いがした。マリーナの警備員が合鍵でドアをあけてはいったところ、川端康成は洗面所でガス管をくわえて絶命していた。

屍体の皮膚は、ガスの一酸化炭素ヘモグロビン中毒特有のバラ色を呈していた。

神奈川県警の警察医は、検死の結果、死亡時刻は同日午後六時ごろと推定した。鎌倉の自宅書斎にあった「岡本かの子全集」の推薦文が絶筆であった。

かつて芥川龍之介が自殺したとき、「芥川氏ともあろう人が（中略）なぜ『或旧友へ送る手紙』のような遺書を書

いたかと、やや心外であった。あの遺書は芥川氏の死の汚点だとさえ思った」(『末期の眼』)と批判した川端は、一通の遺書も残していなかった。従って自殺の原因については、三島由紀夫自決の影響だとか、睡眠薬多用の結果だとか、いろいろ取沙汰されたが、結局真因は不明とされた。

若き日からの友人今東光は記す。

「世間並みに見れば川端が死ななければならない条件は何にもないように見える。もし死ぬ必然なものを求めれば彼は幼少の時に死を択んでも不思議ではないのだ。天涯の孤独な孤児川端なら、彼が物心ついた時に世をはかなみ、つたなき運命を悲しんで死んだところで人は寧ろ彼が幸福な道を択んだと言うであろう。

それほどの不幸の中から静かに彼は自分の人生をはじめた人物だ。それなのに今更どうして数え年七十四歳にして死なねばならないのだ。

彼は文学を志して文壇に登場し、芸術院会員となり、文化勲章を授けられた。更に日本に於て唯一のノーベル文学賞受賞の栄誉に輝いた。若い時からの病弱の身を保って七十歳を越えることが出来た。鎌倉の閑居には素晴しい書庫付きの書斎も出来た。身辺は国宝級の古美術に満ち溢れ、日本人の多くの敬愛を受け、誠実な夫人の愛情に包まれ、また三月には盲腸の手術も無事にすみ、何所から見ても満足する状態であり、誰が見ても羨望に値する彼が、何故死なねばならなかったのか。

これに明快な解答を与え得る者は誰一人として無いだろうと思う。

ところが僕は敢て言いたいのだ。彼は死んだのではないのだ。彼は単に古き肉体を離脱したに過ぎないのだ。仏画の中に『早来迎』という画題がある。これは阿弥陀如来が観音と勢至の両菩薩を伴って飛雲に乗じて死者を迎えんとするのに、一刻をも争うて浄土に迎える様相の構図だ。川端は早来迎にむかえられて、万年筆のキャップもしないで急いで飛び出していったのだ。

確かにそれに相違ない。そのために彼は永年連れ添うた妻君にさえ一言の『さよなら』を言わずに、長谷の自邸から逗子の仕事部屋へ行ったのだ」

しかし、ガスが爆発する危険性を彼は考えなかったのか。ガスが爆発してほかに被害者が出ていたら、彼の名声は根本から崩壊したであろう。

昭和五十三年四月に、臼井吉見は『事故のてんまつ』という作品で、川端がお手伝いの娘を愛し、拒絶された悲しみが自殺の原因だと書き、川端の遺族から名誉毀損で訴え

られるという裁判沙汰をひき起した。川端をよく知る川口松太郎はいう。「川端はそんなことで死ぬような胆の小さい男ではない」

彼は気にいった骨董を見つけると金の有無にかかわらず持って帰る人物で、死後骨董商に数千万円の未払金があった。

岩田専太郎（一九〇一——一九七四）

昭和四十九年二月十九日午前一時半ごろ、渋谷区神宮前の自宅で、「小説サンデー毎日」の山岡荘八の『徳川家光』の挿絵四枚を書きあげた岩田専太郎は、突然「おーい、頭が痛いんだ」と妻の富美を呼び、「いつもとちがう痛みなんだ」と訴えた。

かかりつけの木田医師が駆けつけたとき、岩田の意識はすでになく、左半身が麻痺して、右手だけでしきりにたたみをかきむしっていた。脳溢血であった。

午前八時過ぎ慶応病院に運ばれたときはすでに瞳孔がひらいており、十時三十五分息をひきとった。

彼はあまり無理な仕事を強要されると、しばしば「人を馬鹿にするな。おれは提灯屋をやっても食えるんだぞ」と、さけんだ。それは挿絵画家という脇役の歎きのあまり出た言葉であったろう。しかし彼の死とともに、日本の「時代小説」も死んだように思われる。もっとも提灯もそれ以前に消滅していたけれど。——

朝永振一郎（一九〇六——一九七九）

一九六五年（昭和四十年）ノーベル物理学賞を受賞した朝永振一郎は、昭和五十三年五月ごろ、食事がのどにつかえる自覚症状があって、癌研附属病院で診察を受けた結果、医者に「のどにできものが出来ているから、放射線照射をしましょう」といわれたとき、ガンですか、と訊き返しもせず、ただ苦笑していたが、あとで、友人に「酒を飲みすぎてガの字にやられたよ」と語った。実際彼は食道ガンにとりつかれていたのである。

十月にはいって、主治医から、「手術するなら今しかありません。ただし、手術は成功しても声が出なくなる確率が九〇パーセント以上あります」といわれた。彼はこのころ『物理学とは何だろう?』と題する本を執筆中であった。結局手術することにしたが、そのとき息子に、この本について「未完成交響楽は未完成だからいいんだよ」といった。

そして、のどから食道に至る大手術を受けたが、果せるかなその結果、声が出なくなった。手術後二日目に、大平政権が誕生した。彼は息子の淳に「オーヒラニシュクデンヲウテ」と紙に書いた。淳が驚いて「大平さんを御存知なのですか」と訊き返すと、朝永は「ジョーダンダ」と書いた。

翌昭和五十四年七月八日午前十時四十分、気管のガンから大出血を起し、窒息して死亡した。

水原　茂（一九〇九――一九八二）

巨人軍の「名将」とうたわれた水原は、昭和五十七年二月六日、胃潰瘍の手術を受けて胃を三分の二切ったが、このとき肝硬変にかかっていることが発見された。十七日、吐血、三月二日に胃の残り三分の一と脾臓を切除した。一応小康状態を得たが、その後また悪化し、三月二十二日から意識不明になり、二十六日午前六時前に死去した。

佐分利信（一九〇九――一九八二）

劇作家池俊行は記す。

「佐分利さんほど、奥さんを愛していた人を知らない。黒木しのぶという芸名の元女優さんだった人である。朝晩の送り迎えのときには、二人は必ず玄関で手をとり合って、口づけしていた」

その愛妻が肝臓ガンで死んだ。佐分利が五十五のときであった。

「その奥さんが亡くなった通夜のことをいまでも私は忘れない。死体にとりすがって、泣くというよりもう慟哭だった。（中略）霊柩車が火葬場に向うとき、佐分利さんは車の窓に口づけして、長いこと奥さんとの永別を悲しんでいた」

彼はそれ以来、妻の骨壺を墓に埋めずそばにおき、「私が死んだとき、いっしょに墓にいれてくれ」と、子供にいった。

昭和五十七年八月中旬ごろから佐分利は、食欲を失い、黄疸症状を呈しはじめ、九月三日、日大病院に入院した。病名は妻と同じ肝臓ガンであった。

すでに手術不可能の状態にあり、胸に穴をあけて高カロリー液を注入することを医者がすすめたが、

「そんなことまでしなければならないのなら、もう人間の死に方じゃない。人間は自然の姿で死ぬものだ」

と拒否して、九月二十二日午後十一時五十五分、異名「サブリどん」にふさわしい死に方をした。彼は妻と同じ病気で死ぬことをせめてものよろこびとしたにちがいない。

児玉誉士夫（一九一一――一九八四）

いわゆるロッキード事件は、昭和五十一年二月五日、アメリカ議会の多国籍企業小委員会で曝露されたのを発端とするが、チャーチ委員長は冒頭声明でいった。

「最も許せないのは、ロッキード社が、日本の極端な軍国主義の政治集団の指導者に、巨額の金を支払ってきたことだ」

このことが日本の新聞に報道されるや、朝野驚倒した。

まだこの時点においては、いわゆるロッキード事件の全貌は知られず、日本人がまず驚いたのは、右のチャーチの声明があきらかに指している「児玉誉士夫」という名であった。

児玉は、日中事変中、海軍省の嘱託として上海に児玉機関なるものを作って、海軍から支給された莫大な金で軍需物資の獲得にあたり、敗戦後A級戦犯となった。そして釈放後は、児玉機関に残された巨額の資金を保守党に投じ、かつ右の経歴を武器にして政財界の隠然たるフィクサーとなっていた。人々はその名をきいて怖れつつ、しかし一部では彼を右翼の巨頭、一種の国士として見る者もあったから驚いたのである。

彼自身、自伝の中で「家族のために汗を流せ、友のために涙を流せ、祖国のために血を流せ」とか、また「財閥や権力と手を結び、私腹を肥やすことのみに没頭しきった悪徳政治家に極度の不信と侮蔑を持つ」と書いた。（『児玉誉士夫回想録』）

終戦時、神風特攻隊の指揮者大西滝治郎海軍中将の割腹にも立ちあったその児玉が、山本五十六大将を撃墜したP38機を作り出したアメリカの航空機会社ロッキードの秘密コンサルタントとして、巨額の報酬と、日本への売りこみのためのワイロを受けとっていようとは！

児玉誉士夫の国士としての威名は一挙に崩壊した。

のちに考えれば、アメリカの航空機会社のコンサルタントが日本に存在してもふしぎではないのだが、これが曝露されて驚愕したのは、一般の日本人よりも児玉自身が甚だしかったろう。この曝露直後の彼の狼狽ぶりがそれを物語る。のちに彼は検事の取調べに対し、「日本海軍を悩ませたロッキードのコンサルタントとなったことは、一生の不

覚であった」と述べたといわれる。
　彼は、それ以前の昭和四十九年九月、大西海軍中将の伝記映画「ああ！　決戦航空隊」の試写会で脳梗塞を起して倒れ、秘密裡に入院し、一応治癒して退院したことがあったが、このロッキード事件開幕直後の二月十二日、便所で再発作を起して倒れたのは、やはり事件の衝撃のゆえであったろう。
　このとき入院しようとして、事件以来自邸付近に張りこんでいる新聞記者たちに追跡されて果せず、二十七日に至って病態悪化して、ついに救急車で世田谷等々力の自邸から新宿の東京女子医大病院に向った。しかし、病院前に集った群衆からの、国賊、売国奴という罵声の渦につつまれ、またも入院不可能となってひき返す羽目におちいったが、その光景はまざまざとテレビ中継によって全国民の眼前にさらしものになった。
　しかも、三月二十三日には、特攻隊の服装をした若いポルノ俳優前野光保が小型機で彼の屋敷に突入命中して「戦死」をとげるというブラック・ユーモア的活劇まで演じられた。
　しかし彼は、そのころは身体は不随でも意識はまだ正常であったが、五十五年九月に三度目の発作を起して入院した。これ以来、意識は混濁状態になった。五十六年三月に、第一審で、ロッキード社から受領した巨額の金の脱税その他で、懲役三年六月、罰金七億円が求刑されたが、彼の病状が重いために判決言い渡しは不可能となった。しかしそれは「有罪」であったといわれる。
　そして、廃人状態のまま昭和五十九年一月十七日午後六時十三分に死んだ。
　主治医の東京女子医大病院の喜多村孝一院長談。
「前年の十一月二十一日、新しい脳梗塞が起って昏睡状態となり、このときから流動食を鼻から管で流しこむようになりました。一月十六日午後一時ごろ不整脈が起って血圧が下がり、直接死因は心不全でした」
　通夜の晩、児玉邸には黒眼鏡や眼つきの鋭い男たち百八十人が集まった。
　末期の廃人化のため裁判が結着しないままになったのは彼の幸福であったか。同じ理由で、事実上汚名を着たまま生を終えたのは彼の不幸であったか。
　なお、ロッキード事件摘発の端緒を作った米上院議員フランク・チャーチは、同年四月七日、膵臓ガンで死去した。

三原脩（一九一一——一九八四）

　戦後、水原の巨人に追われたかたちで西鉄ライオンズ監督になった三原は、ジャイアンツ打倒を生き甲斐とし、昭和三十一年から三年連続して日本シリーズで巨人を連破したのみならず、三十五年にはそれまで六年間ドンジリであった大洋の監督になってこれまた日本一の座につけ、プロ野球の「知将」だの「魔術師」だのとたたえられた。
　以来各球団を転々としたのち晩年は日本ハム球団社長をやったが、糖尿病が持病となり、歩行も不自由な状態になり、昭和五十九年二月六日午後十時四十分、急性心不全で死んだ。
　三原と水原茂は生涯のライヴァルであったが、死亡年齢も数えでは同年（満では三原が一歳下）で、いずれも若いころ人並すぐれた肉体を鍛えあげたであろうに、両人とも、当時における男性平均寿命にも至らずに死んだのは、野球の生涯もそれほどラクではないということか。

七十四歳で死んだ人々

> 自分が消滅したあと、空も地上もまったく同じ世界とは、実に何たる怪事。
> ——山田風太郎——

白楽天（七七二——八四六）

　日本の平安朝、清少納言が、雪の日、皇后に「少納言よ、香炉峰の雪はいかならん」と訊かれて、黙って御格子をあけ、御簾を高くかかげて見せ、その才気を感嘆させたのは、白楽天の詩の一節、
「遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴き
香爐峯の雪は簾を撥げて看る」
を踏んまえたからであった。いかに白楽天が日本人にも

愛されていたかを知るに足る。

三十四歳で絶唱『長恨歌』を作り、四十四歳で傑作『琵琶行』を作った白楽天は、貧しい家に生まれながら、地方公務員をふり出しに勤勉な官吏生活をつづけ、途中、政治の乱脈を諷諭して地方に追放されるなどいうこともあったが、最後は刑部尚書（法務大臣）の地位まで上り、功成り名とげて死んだという、詩人には珍らしい順風の一生であった。

彼は六十八になったとき軽い中風にかかって左足が不自由になったが、病気よりもむしろそれを名目に退隠し、悠々たる余生を愉しんで死んだ。みずから詩っていう。

「……飢えては食らい、楽しくて飲み、
穏やかなる眠りに安んず
死生は可も無く不可も無し
達せる哉、達せる哉、白楽天」

毛利元就（一四九七——一五七一）

安芸の一豪族から、無数の戦闘を繰返して中国一円の覇者となった毛利元就は、一見温厚篤実の人柄に見えながらその実厳島の戦いに見るように反間苦肉のかたまりともいうべき権謀家で、家康以前の西の家康的人物であった。

元亀二年——信長が比叡山を焼いた年——六月十四日、彼が死ぬ前、三子を集めて、三本の矢をたばねて、かくのごとく結束せよと教えたというのは中国の『西秦録』という書物にある話の盗用だそうだが、結束の遺言をしたことは事実である。その遺言の中に、

「当家をよかれと存じ候者は、他国の事は申す能わず、当国にても一人もあるまじく候」

とあるように、中国の覇者となってもなお安心しない用心深さを最後まで失わなかった。

「腹中の詰る」症状を示していたというから胃ガン説がある。

徳川家康（一五四二——一六一六）

家康は若いころ、秋には珍らしい桃を贈られたが、時期はずれの果物は危険だ、といって捨てた。また、老いてから少し病んで快方に向ったとき、その食がやや進んだのを見て侍医がめでたがると、「命は食にあるとは、大喰いということではない。人は飲み食いが大事だ、という意味だ」と諭した。また、鷹狩りはレジャーのためではなく健康のためだ、運動すれば筋骨を鍛え、疲れれば快眠するから従って閨房のことにも遠ざかることになる、といった。しかし、彼が側妾の一人お勝に最後の子供を生ませたのは、数え年六十六歳のときであった。

晩年、好んで思春期前の美少女と同衾したというのは、一見「いやな爺い」に思われるが、やはり彼の弱りを示すものであろう。とはいえ、老人最高のぜいたくといわざるを得ない。

この衛生学の大家の命とりになったのは、しかしその遠因は、皮肉にも放鷹であり、直接原因は食当りであった。

元和二年一月二十一日、放鷹から帰った彼は、榊原大内記から献上された鯛を、茶屋四郎次郎が油であげて蒜をかけた料理を、昼間の運動による空腹のせいで大食し、その真夜中午前二時ごろから、腹痛、吐瀉など烈しい食中毒症状を起した。

その症状はいったん去ったかに見えたが、以来不調は一進一退し、四月十七日午前十時ごろついに他界した。

しかし『寛政重修諸家譜』に「御腹中に塊あり」とあり、もともと胃ガンにかかっていたのではないか、という説もある。

大坂城を片づけてから十一カ月目であった。逆にいえばその発病が一年早ければ大坂城の命脈はなおつづいていたに相違ない。

大岡越前守（一六七七——一七五一）

いわゆる「大岡政談」はすべてフィクションだが、大岡越前守忠相が吉宗に最も信頼された名官僚であったことにまちがいはない。

彼は、十九年間に及ぶ町奉行、十六年間——死ぬ年までの——寺社奉行等の公務に、精励かつ正確無比な仕事ぶりを見せたが、身体も丈夫でほとんど休むということがなかった。日記によると、稀に「腹具合悪敷候ニ付」休んでいるが、それも二日とはつづけて休んでいない。

とはいえ、六十六歳のとき、ギックリ腰ではじめて八日間休み、同年から痔にかかっている。さらに七十三歳の春ごろから、腹痛、咳、めまいなどに悩まされるようになった。

そして、元来壮健な彼も、翌年の寛延四年六月二十日、吉宗が死ぬと、その葬儀委員長はつとめたが、以後気落ちしたとみえて、六カ月後の宝暦元年（この年十月改元）十二月十九日、吉宗のあとを追うように死んだ。

彼は有能な政策官僚であったとはいうものの、「大岡政談」のごとく血あり涙あり、機智に富んだ、特に面白いというお奉行さまではなかったが、ほとんど偶然のように名奉行の伝説の主人公に祭りあげられた。庶民の歴史には、時に、たとえば吉良上野介のように運の悪い人物を作り出すこともあれば、逆にこういう幸運児を作り出すこともある。人間、棺を覆って事定まるというけれど、それもあてにはならない。

ヘンデル（一六八五――一七五九）

ドイツ人でありながらイギリス宮廷に愛され、テムズ河に遊ぶジョージ一世に捧げる「水の上の音楽」などの名曲を残したヘンデルは、一七三七年、五十二歳のとき、脳溢血に襲われ、右半身麻痺を起し、それどころかあやうく死ぬところであったが、猛烈な自己流リハビリテーションによって治癒した。

彼は以前の通りの旺盛な創作力をとりもどしたが、女王の崩御や戦争や冬の異常寒波などで、ロンドンの劇場は不況をきわめ、ついに彼の経営する歌劇団は破産して債鬼に追いまわされる始末になった。

巨体に無限の精力と才能をみなぎらせた彼も、いちじは絶望の極に沈んだが、一七四一年夏、五十六歳のとき、旧友の詩人から送られた詩を読んでいるうちに凄まじいインスピレーションを得て、三週間パンをむしり食うだけでほとんど眠らず、デーモンにとりつかれたかのようにオラトリオ「メシア」の作曲に没入した。そのあと彼は、十七時間ぶっ通しに眠りこけた。

これ以後、彼は復活した。債鬼はなお襲い、痛風が両足を痙攣させ、六十六歳のときには失明するに至ったが、くじけることなく仕事をつづけた。

一七五九年四月六日、彼はポディアムの音楽会場で、すでに病重く盲目の身で、みずからタクトをふるって「メシア」を演奏した。これが彼の知人やファンへの「告別」であったことがあとでわかった。

帰宅してベッドに横たわると、彼は医者に「私は聖金曜日の四月十三日に死にたい」といった。四月十三日は、十八年前、彼を復活させた「メシア」がはじめて公演された記念の日であった。

「四月の十三日に心身の力はヘンデルを見捨てた。彼はもう何ものをも見ず、何ごとをも聴かなかった。重い体軀は蒲団の中に臥して動かず、それは空ろな貝殻のようであった。しかし空ろな貝殻の中に大海の潮騒のとどろきが反響するように、彼の内部には、かつて聴いたことのあるどの音楽よりもめずらかな音楽が人知れず鳴っていた。その音楽の盛り上がる満潮が、おもむろに魂を、力尽きた肉体から釈き放して、無碍の境へと運び上げて行った。潮を潮の中に、永遠の響を永遠の世界の中に運んで行った。そしてその翌朝、復活祭の鐘の音がまだ目ざめないころおい、ついに彼は世を去った。――ゲオルク・フリードリッヒ・ヘンデルと呼ばれた存在のうちの、滅ぶべき部分だけが滅びたのである」（シュテファン・ツヴァイク『人類の星の時間』片山敏彦訳）

サド侯爵（一七四〇――一八一四）

地球上にサディズムの名をひろめたサド侯爵は、その背徳の罪によりいくどか逮捕、逃亡を繰返し、三十八歳のときついにヴァンセンヌの牢獄に収容され、さらにバスティーユの牢獄に移されたが、五十歳のときフランス大革命のおかげでようやく釈放された。

革命後『ジュスティーヌ』その他の作品を発表し、ちょっとした流行作家になったが、三年後、反革命の罪でまた逮捕され、一年ばかりで釈放されたものの、以後窮乏のどん底に落ちた。

六十一歳のとき『新ジュスティーヌ』がワイセツ書として作者たるサドも逮捕され、以後死に至るまで、シャラントン精神病院から出ることを許されなかった。そのころサド侯爵は怪物的に肥満した豚のような老肉塊と化していたが、一八〇六年一月三十日、遺言書を書いた。

「いかなる口実のもとにであろうとも、私の遺体は絶対に人に見せてはならない。遺体は木の棺に入れ、ふたに釘を打たず、私が死んだ部屋に四十八時間安置しておき、四十八時間経過したら、釘を打ってもよい」

彼は、「早すぎる埋葬」を怖れたのである。

「遺体は、レガリテ通り一〇一番地の材木商ル・ノルマン氏の二輪馬車で、エマンス市のエベルノン近くにある私の所有地の森に運んでもらいたい。森の中の広い道を古城のそばから進むと、右側に雑木林がある。その林の中に、儀式は一切とり行わずに私の遺体を埋葬して欲しい。墓に土をかぶせたなら、その上に樫の実をまき、そこにふたたび木が芽生え、墓の上に雑木林がもと通り生い茂り、地上から私の痕跡が消え去ることを願う。そして、あらゆる世人の記憶から私の名が抹消されることを望む」

八年後の一八一四年十二月二日、七十四歳のサド侯爵は、自分の不当な運命を呪いつつ、喘息性肺栓塞のため、シャラントン精神病院の一室であっけなく死んでいった。
彼の望みに反し、彼の名は永遠に残った。

蜀山人（一七四九——一八二三）

寛政の改革時、
「世の中にかほどうるさきものはなしぶんぶといふて夜も寝られず」
という狂歌の作者だという評判をたてられて、江戸後期の狂歌師、大田南畝またの名を蜀山人またの名を四方赤良は、「コレ大田ノ戯歌ニアラズ偽作ナリ。大田ノ戯歌ニ時ヲ誹リタル歌ナシ」と、大まじめに弁明した。この歌のほんとうの作者がだれかは知らず、蜀山人は本名大田直次郎という幕府御勘定所に勤務する謹直な役人であった。
しかも彼の晩年、支配勘定見習いに出ていた一子定吉は精神病にかかり、孫の鎌太郎は遊惰で期待出来ず、南畝は死ぬまで勤めをやめることが出来なかった。
文政五年三月三日、七十三のとき彼は二階から下りようとして階段を落ちて、それ以来身体が弱った。「つらつら思えば、老病ほどみたくでも（みっともなく）いまいましきものはあらじ。家内のものには飽きられて、よくとりあつかうものなし」と彼は歎いている。
しかしその後やや元気をとりもどし、翌文政六年四月三日、市村座に菊五郎、団十郎、半四郎などの芝居を見にいった。
翌日ようすがすこしおかしかったが、夕食はきげんよく、ひらめをおかずに茶漬を食べ、詩歌など作った。
「ほととぎす鳴きつるかた身はつ鰹春と夏との入相の鐘」
というのが絶筆となった。
六日の朝、彼は起きてこなかった。家人がのぞくと、床の中で死んでいた。脳溢血であった。

鶴屋南北（一七五五——一八二九）

日本橋の紺屋職人の子に生まれた南北は、二十歳のとき芝居の作者部屋にはいったが、以後三十年無名下積みの生活を過し、ようやく『天竺徳兵衛韓噺』によってはじめて名を出したとき、彼は数え年五十になっていた。
以後彼は、『東海道四谷怪談』その他、時空を超越した構想と、爛熟した文化文政の闇の底にうごめく血みどろの

人間像の描写で、後世まで人々の魂をとらえる名作を堰を切ったように書きつづける。彼の作品についてはいろいろ「深読み」は出来るけれど、何より彼は大パロディ作家だったのではあるまいか。
しかし、徳川期の多くの作家画家同様、彼の生涯はよくわかっていない。
ただ文政十二年十一月二十七日に死んだことが判明しているが、この月に傑作『金幣猿島郡』を書きあげているところを見ると急病によるものか。しかもこの作に「一世一代」と書き添えているところを見ると、死を予感する状態にあったものか。
しかし、生前すでに自分の葬式のだんどりを、彼らしく徹底的に茶化した『寂光門松後万歳』という脚本にしていた。だいたい南北は狂言の中に棺桶を使う趣向を好み、芝居に棺桶が出てくるとそら南北だ、と客が笑ったくらいだが、これも棺桶の中の南北が挨拶する趣向で、
「略儀ながら、狭うはござりますれど、棺の内より頭をうなだれ、手足を縮め、御礼申しあげたてまつりまする。まずは私、存生の間、ながながごひいきになし下されましたる段、飛び去りましたる心魂に徹し、いかばかりかありがたい冷汗に存じたてまつりまする。さて私事もとより老衰に及びますれば、みなみなさまの御機嫌をも損なわぬうち、早う冥途へ赴けと、これまでたびたび仏菩薩の霊夢をこうむりますれど、さすがは凡夫のあさましさに、たって御辞退仕りますれど、定業はもだしがたく、是非なく彼地へ赴きますれば、誠にこれがこの世のお名残。……」
本所押上春慶寺の葬儀はにぎやかであったという。

ハリス（一八〇四——一八七八）

ペルリ提督が細目にこじあけた日本の扉を、さらに大きくおしひらいたアメリカ公使タウンゼント・ハリスは、一八五八年（安政五年）「日米修好通商条約」の調印が終ると、しきりに帰国を望んだが許されなかった。彼はついに一八六一年、リンカーン大統領あてに高齢のゆえをもって辞職願いを出し、やっと許可を得て、一八六二年ニューヨークに帰った。唐人お吉を寵愛した、などはウエット好みの日本人の作り話である。
しかし当時アメリカは南北戦争中であった。彼は年金でつつましく余生を送り、一八七八年（明治十一年）二月二十五日、喀血して死んだ。日本駐在の六年間のあいだに、

老人性結核にでもかかったのであろうか。日本駐在をもふくめて十一年間海外にあった彼は、親戚知人とも疎遠になり、日本を開国させた功績も南北戦争とその余波の騒ぎのため、ほとんど世人の注意をひかず寂しく死んだ。

日本では大久保利通の暗殺された年。

このアメリカのハリスといい、イギリスのパークスといい、幕末の日本を震撼させた碧い眼の人物たちは、それぞれの本国ではほとんどだれも知らない辺境の一外交官に過ぎなかったのである。

ヨハン・シュトラウス・子（一八二五――一八九九）

ヨハン・シュトラウス二世は、少年時、父から音楽を禁じられて商工学校などにやられ、銀行員にされ、彼が音楽の道にはいったのは、その父が母と自分と四人の弟妹を捨てて愛人のもとへ走ったあとであった。

彼は父に捨てられることによって、その天才を解放されたのである。そして「美しき青きドナウ」「ウィーンの森の物語」「皇帝円舞曲」をはじめ、ワルツの名曲を溢れるように生み出して「ワルツの王」と呼ばれるに至った。人柄のいい彼は、自分たちを捨てた父を許し、敬意を表して和解した。風姿にもすぐれた彼は、ウィーンの全女性の憧れのまとであった。

三十七歳のとき、十歳も年上の子連れの未亡人ジェッティと結婚してウィーンの市民を驚かせた彼は、しかし十六年後、若い美貌の愛人を得て、妻ジェッティを自殺させるに至る。父の業は一見温厚な彼の血の中に伝えられていたのである。しかしこの結婚は失敗し、若い妻は彼を老いぼれと罵って去り、五十八歳で、また子連れの、ただし莫大な持参金も持って来た未亡人アデレと結婚した。

一八九九年五月二十二日の聖霊降誕祭に、彼は自作の「こうもり」序曲を指揮していて、ひどい悪寒をおぼえ、やっと演奏を終えると、馬車を走らせて自宅に帰った。帰宅したときは上衣からズボンまで汗にしめっているほどであった。

しかし、マッサージを受けてから気分は回復し、以後彼は「シンデレラ」作曲の仕事をすすめていった。

しかし、数日後、ある祝宴で、ファンにサイン中、熱い湯のようなものが背骨を這いのぼって来るのをおぼえ、彼は卒倒した。

医者が呼ばれて、彼の両肺は重い結核に冒されていることが発見された。

彼は高熱にうなされ、夜になると歌いつづけ、さけびつづけた。そして「シンデレラ」の楽譜を手さぐりで求めた。

六月三日、よく晴れた朝、彼は久々にすっきりした顔で、妻の手に接吻した。

「もう少しお休みになったらいかがです」

と、アデレがいうと、彼は微笑んで、

「どっちみち、そうなるだろう」

と、答えた。これが彼の最後の言葉となった。その日の午後四時十五分に、彼はしずかに息をひきとった。

三日後、彼の自宅から中央墓地へゆく道は、ウィーン全市民のみならず、各国の人々で満たされた。沿道の家はすべて黒幕で覆われ、柩車の上の羽冠につけられた青白い灯は、夏の太陽の下でぶきみに燃えた。灯はあとからあとからつづいた。それは何とも形容出来ないふしぎな光景であった。

日本では明治三十二年、勝海舟の死んだ年。

谷 干城（一八三七――一九一一）

西南の役で熊本城に籠城し、西郷軍にひと泡吹かせた谷干城は、以後明治期、政治家として保守の一牙城たる存在であったが、数え年六十六のとき、一知人の葬式に参列した夜、こんなことを記した。

「……余も本年已に六十六歳なれば今より永きも十五年に過ぎざるべし。左れば生前遺言を書き置くも亦妙なるべし。即ち試みに左に記す。

……余死せば青山又は谷中の祭場に運ぶを要せず、粗末の棺に入れ赤毛布に包み庭前に仮り己屋を作り、此の中に入れ供物を為し、親戚一統告別を為すべし。知己の人へは左の通り報知すべし。

拝啓、然らば谷干城何月何日死去致候。葬式の儀は遺言により邸内に於て神式を以て相営候間此段御報告 申上候。

但、遺骸の儀は火葬に致し郷里へ送り候間、親戚始め一統告別は何月何日第何時より第何時迄に至る。生花放鳥は固より其他の御贈物失礼乍ら一切御 断 申上候也。

右の如き文にて宜し」

また、本来ならこんなことも下らないのだが、何かしないと式場がさびしくなるからやるまでで、自分としては「神官や坊主抔の力により死後の幸福を得べきものに非ず」と考えている、と述べている。

それから九年後の明治四十四年春ごろから彼は萎縮腎のため病床につき、五月十三日午後五時半に逝去した。

しかし十六日の葬式には、朝野の名士が雲のごとく参集した。人間は遺骸とともに遺志もまた棺桶にほうりこまれる。

大山　巌（一八四二——一九一六）

大山巌は大正五年十一月上旬の九州大演習に、天皇に供奉したが、その帰途、十一月十七日に不快を訴えて須磨で途中下車し、実業家内田信也の別邸に宿泊したが、同夜上腹部に激烈な疼痛をおぼえ嘔吐をもよおし、苦悶の様子がただごとでなかった。

十九日やや軽快したので、二十日須磨を発したが、車中でふたたび苦しみはじめ、一睡もすることが出来なかった。二十一日帰京し、診察の結果胆嚢炎と診断され、以来治療につとめたが、嘔吐とシャックリがつづいて安眠出来ず、次第に衰弱し、十二月上旬から危篤に陥った。

十二月十日午前十一時四十五分に息をひきとった。

死ぬときに、枕元に蓄音機をおき「雪の進軍」のレコードをかけさせたというがどうであろうか。ただ、死ぬとき、外に雪がふりしきっていたことは事実である。

彼はかつて副官にいった。

「私が好運といわれるのは、ただ長生きしたからだよ。私よりえらい人はたくさんいたが、みんな死んでしまった。若いころに不摂生したものは、四十から五十前後にかけて二回は病気にかかってここでふるいにかけられるようだ。この二回をしのげば、あとは健康に注意しておれば相当長生きするものだよ。船は少くとも十年毎にドックで修繕せねばならん。人間もときどきドックに入って修繕することが必要だ」

人間ドックという言葉の発明者は大山かも知れない。

大山が死ぬ前日の九日に夏目漱石が死んだ。十三日、芥川龍之介は許婚者の塚本文に手紙を書いた。「……先生の主治医の真鍋さんは医科大学の先生をしているんですが大学生は皆大山さんの容態なぞは一つもきかずに先生の病状ばかり気にしてききに来たそうです」

大山は生前、西那須野に別荘を持ち、そこで猟をするのをたのしんだが、墓地もそこにしてくれと遺言した。そこで遺骸は、騎兵隊に送られて西那須野に運ばれた。

当時二十六歳で「時事新報」の記者であった菊池寛は、その取材に那須にやられたが、埋葬式に参列するには記者といえどもフロックコート着用のこと、という通達があったので、友人からフロックをかりてトランクにつめていった。さてその日着てみると、ふとった彼の身体はどうしてもフロックにはいらない。当惑のあげく彼は、ついにサルマタまでぬいでまるはだかになり、フロックコートだけつけて参列した。おかげで真冬の那須野ガ原で、彼は風邪をひいて帰って来た。

ガウディ（一八五二——一九二六）

日本人の眼から見ると、その怪異凄艶な曲線と曲面で、超現実派の幻想をそのまま地上に描き出したような建造物を残したスペインの大建築家アントニオ・ガウディは、一八八三年——彼が三十一歳のころからバルセロナのサグラダ寺院の建築にとりかかったが、これが彼にとってはからずもその生涯をかけた作品となった。

それから三十年を経て、ガウディが六十を越えても、それはまだ完成しなかった。それどころか一九一四年には、資金難のために工事を中断せざるを得なくなった。彼は若いころの豪奢な生活を捨て、教会の建築事務所で独身で寝起きする生活をつづけ、さらにはみずから建築資金を集めるために街へ出て、帽子をとるというようなことまでして、細々と建築を続けた。

一九二六年六月七日、彼は教会の地下聖堂に吊り下げるアラバスターと金属のランプをいじっていたが、午後になって、日課としていたミサに参列するため、三キロばかり離れたサン・フェリペネリ教会へ出かけようとして、手伝っていた職人に、「ヴィンセントや、明日は早くおいでよ。うんときれいなものを作ろうじゃないか」といいおいて、出ていった。途中、バルセロナのある通りを横切ろうとしたとき、市電がこの貧しげな老人をはねた。

三日後、ガウディは意識を回復しないまま息をひきとった。サグラダ寺院は未完のままにとり残された。

同寺院は、ガウディが着手してから百年以上たった現在も、後継者によって建設が継続している。

南方熊楠（一八六七——一九四一）

その生物学（特に菌類、粘菌類）の知識と、天衣無縫の野人的人間性において、柳田国男をして「日本人の可能性の極限」と評させた南方熊楠も、昭和十三年七十歳のころから身体にあちこち故障が生じ、十六年八月中旬、南紀の大

暴風雨中、はだかで、培養中の菌類のとりかたづけをしてから発熱して病床についた。
　いちど回復したかに見えたが、十二月にはいるとまた衰弱が甚だしくなり、厠で倒れて後頭部を打つなどのことがあり、筆記も不自由になった。
　それでも、十八日には、八日のハワイ海戦に感激して東京の知人を介し、山本五十六大将に紀州蜜柑を送ることを依頼している。
　そして十二月二十八日、病状が重くなったので、家人が医者を呼ぼうとすると、「医者はいらん」とことわり、
「天井に美しい楝の花が咲いている。医者が来るとその花が消えてしまうから呼ばないでくれ。縁の下に白い小鳥が死んでいるから、朝になったら葬ってやってくれ」
　と、詩のような不可解なことをつぶやいた。
　夜になってから、
「私はこれからぐっすり眠るから、羽織を頭からかけてくれ。ではお前たちも休んでおくれ」
　と、いった。
　そして二十九日午前六時三十分、息をひきとった。
　楝の花は紀州田辺あたりに見られる藤に似たうす紫の花で、熊楠は甚だこの花を好んでいた。
　翌日、その遺言により、大阪医大の解剖学助教授らの手により、晴天ながら師走の風の吹く南方邸の庭で、縁台に横たえられた熊楠の遺骸の頭部だけが解剖に付された。
　彼の脳は平均より百グラム多く千五百グラムあった。
　直接の死因は萎縮腎で、黄疸を併発していた。
　日本人の大半は真珠湾奇襲とマレー沖海戦に熱狂し、いかなる将軍提督よりも偉大なこの一日本人の死にほとんど注意する者もなかった。
　死後、その遺稿を求めて多くの客が訪れたが、妻の松枝はみなことわって、これを書庫に収め、彼女が昭和三十年七十七歳で死ぬときまで、毎年お盆には迎火を焚いて書庫の戸をひらき、眼鏡をおいて「さあ、おはいりなさいませ」と、死せる夫をうながした。

川上貞奴（一八七一――一九四六）

「私も一風変っておりましたので、ことに書生風の人が好きでありましたし、川上ならば生涯役者をしてもいまいと思いましたのでございます」
　と、のちに貞奴は劇評家川尻清譚に語っている。
　つまり明治二十三年、すでに葭町の売れっ妓であった

彼女が川上音二郎の妻となったときは、まさか川上が生涯役者で過すとは思わず、そのうち政治家か実業家にでもなるだろうと見ていたのである。それには川上がとうてい役者としての素質はないと見る眼もあったにちがいない。
　しかるに川上は、いかにも芸は終生泥くささをぬぐえなかったが、意外に熱心で、しかも役者としてより興行師としての才能の所有者であった。その情熱と、かつ興行上の必要から貞奴も舞台にかり出されることになり、しかも川上よりも役者としての才能を発揮することになった。マダム貞奴――彼女こそ、名実ともに日本の「女優」第一号となる。
　そして川上の死後も芝居をつづけ、大正六年四十五歳のとき「アイーダ」で引退興行をしたのち、岐阜県鵜沼にみずから金剛山貞照寺という寺を作って、そこで余生を過した。若き日の恋人で、のちに有名な実業家となった福沢桃介の庇護もあったといわれる。
　太平洋戦争中、貞奴は口述で自伝を書かせはじめたが、六分通り進んだところで、空襲のためそれがみんな焼けてしまったという。惜しいことをしたものである。
　昭和二十一年十二月七日、熱海で食道ガンにより死去した。

スターリン（一八七九――一九五三）

　スターリンは一九五三年三月二日未明、脳溢血に襲われ、意識を失った。
　三月二日の朝、モスクワの大学の授業に出ていた二十七歳になる娘のスベトラーナのもとへ、モスクワ西郊クンツェヴォにある父スターリンの別荘から、大至急来るようにという電話があった。
　彼女は車で、クレムリンから約十五キロのその別荘へ駈けつけた。
「わたしが聞かされた話は次のようなものだった。卒中は、どうやら、深夜の出来事であったらしい。父は午前三時ごろ、この部屋のこの場所、じゅうたんの上、ソファのわきに倒れているところを発見された。（中略）
　父が臥っていた大広間には、大勢の人がつめかけていた。この患者を見るのははじめてという医師たちが（多年、父を診ていたアカデミー会員V・N・ヴィノグラドフは投獄されていた）、てんてこ舞いのさわぎを演じていた。後頭部と首にひるがつけられ、心電図がとられ、肺のレントゲン透視が行われ、看護婦はひっきりなしに何かの注射

を打ち、一人の医師は手も休めずに病状経過をカルテに書きこんでいた。必要な手がすべて打たれていた。だれもが、もはや救いえない生命を救おうとして、躍起になっていた。
　どこかで、医学アカデミーの特別会議が開かれ、このうえなおどのような処置を講じうるかを討議していた。隣室の小広間でも、それとは別の医師たちが、やはり対策を協議するため、ぶっ通しの会議をつづけていた。どこかの科学研究所からは、人工呼吸装置が運ばれてきて、若手の専門家たちがそれについてきた。彼らのほかには、だれもその扱いを知らないのに相違なかった。巨大な装置は、使われることもなくそのまま放置され、まわりの出来事にすっかり気を呑まれてしまった若い医師たちは、ぽかんとして、落ちつかぬ視線を周囲に走らせるばかりだった」
　ついで彼女は、この騒ぎの中でただ一人、政治警察の長官ベリヤが、燃え出した権力欲を阿諛の仮面の下におしかくし、なんどもスターリンの病床をしげしげとのぞきこんでいた姿を書きとどめる。
「医師の診断によれば、父は意識を回復することがなかった。卒中の発作はきわめてはげしいもので、言語は失われ、右半身が麻痺状態だった。数回、父は目をあけたが、まなざしはかすんでいて、だれかの顔を見分けたかどうかさえ、知るすべがなかった。父が目をあけると、全員がそのそばに駆け寄って、彼のもらす一言をとらえ、せめては目の動きに彼の希望を読みとろうと必死になった。わたしは枕もとにすわって、父の手をにぎっていた。父の目は私のほうを向いていたが、おそらく何も見ることはできなかっただろう。わたしは父の唇に、父の手に接吻した。それ以上、わたしのできることは何もなかった。(中略)
　父の死は苦しげな、恐ろしいものだった。(中略)
　脳溢血は徐々に全中枢にひろがっていくものだが、心臓が強く、丈夫な場合には、それはゆっくりと呼吸中枢をおかし、人間は窒息のために死んでいく。呼吸はますます頻繁になっていった。最後の十二時間には、酸素の欠乏が昂進していくのが、もうはっきりと見てとれた。顔が黒ずんで、人が変ったようになり、その輪郭からもしだいになじみの面影が消えていき、唇が黒くなった。最後の一、二時間は、要するに、人間がゆっくりと窒息していく過程だった。断末魔の苦悶は恐ろしいばかりだった。それは、みなの眼前で彼を絞め殺していった。ある瞬間に――それが実際にあったことなのか、ただそう思えただけなのかはよくわからない――たしか、もう最後の数分というときになって、父はふいに目をあけ、周囲に立っていた者たちをぐる

りと見わたした。それは無気味なまなざしだった。狂気ともつかず、怒りともつかず、ただ死への恐怖と、自分の上にかがみこんでいる見知らぬ医師たちへの恐怖とにみたされたまなざし――そのまなざしが、一分の何分の一かの間、ぐるりとみなを見わたしたのだった。そして、このとき――それは不可解な恐ろしいことで、わたしにはいまもって理解できないが、かといって忘れることもできない――このとき、突然彼は左手を上にあげ（左手はそれまでも動いていた）、その手でどこか上のほうを指差すとも、わたしたち全員をおどしつけるともつかぬ身ぶりをした。それは、不可解ではあったが、いかにも威嚇的な身ぶりだった。そして、それがだれに、何にかかわるものだったのかは、知られぬままに終った……つぎの瞬間、魂は、最後の努力をなし終えて、肉体から離れ去った」（『スベトラーナ回想録』江川卓訳）
　スターリンは、三月四日夜二度目の卒中が心臓と呼吸器を冒し、三月五日午後九時半に死亡した。
　彼の死は、神でも超人でも鉄人でも天才でも悪魔でもない、通常の肉体を持った人間の通常の死にかたであった。しかし、それが彼の場合、異常であったといえる。
　一方、亡命歴史学者アフトルハーノフによれば、スターリンはベリヤが送りこんだ看護婦に麻酔薬をかがされ、失神したのち毒薬を注射されたのだというのだが。――

小林古径（一八八三――一九五七）

「戦後の昭和二十五年、古径は文化勲章を受章したが、芸術の上においては衰えを見せた」
と、作家近藤啓太郎は『近代日本画の巨匠たち』でいう。
「小品には『猫』『唐俑』などの秀作があるが、大作には特に推奨出来るようなものはない。もっとも、これは戦前の古径にあまりにも名作が多く、つい比較してしまうからであろう。多くの画家の生涯ただ一つの名作と言えるようなものが、古径の場合はごくあたりまえになってしまうのである」
　昭和二十六年二月、大森馬込の小林邸に写真をとりにいった土門拳はいう。
「古径先生は、想像していた以上に小さなお爺さんだった。大きな才槌頭と、女のようにふっくらとした手が印象的だった。甚兵衛を着て、毛糸の足袋をはいていられた。お嬢さんが編んで上げられたんだな、とぼくは直感したが、その赤い毛糸の足袋は、何か古径先生の生活を象徴的に物

語っているように思われた。古径先生は別に御機嫌が悪いわけでもなさそうなのだが、むっつりとして、口をきかない人だった。ぼくが一時間ほどお邪魔していた間に、古径先生の方から言い出された言葉といえば、『どこで撮りますか』という一言だけだった」

古径は翌年の院展に「菖蒲」を出品したが、そのうち徐々にパーキンソン氏病の症状を現わしはじめ――あるいは土門の訪問時すでにその徴候を見せていたのかも知れない――昭和三十二年四月三日、最後には脳溢血を起して死んだ。

久保田万太郎（一八八九――一九六三）

小説、戯曲、なかんずくいわゆる万太郎俳句において、「絢爛たる枯淡」の世界を現出させながら、現実の久保田万太郎は、彼を最も愛し、最も理解する弟子からも、「己が身勝手で過ちの連続をし、しかも矯めることのできない生得の性を痛いほど知ったあげく、なまじな世才をめったやたらに振り廻し、不義理不人情のそしりには、不貞腐れで押し通し、『寂しい、寂しい』と洟水たらして、巷を右往左往している、我執のかたまりみたいな稚い老人」（後藤杜三『わが久保田万太郎』）と評されるような人物であった。

一人目の妻を自分の女狂いのために自殺させ、二人目の妻とは惨憺たる喧嘩別れをし、ただ一人の息子には親子断絶の状態で先立たれた万太郎は、六十を超えてからはじめて彼の気にいった三番目の愛人を得たが、その愛人も、昭和三十七年暮に、帰りのおそい万太郎を寒風の中に待ち受けたあと、急に風呂にはいったために脳溢血を起して急死した。

彼はまた蕭条たる晩年を迎える羽目になったが、肉体だけは頑健で、作品では大通人に見えるが、実際は卵焼きとか生揚げとかを、熱燗の酒とともに乱杭歯の大口にたてつづけに放りこむといったありさまであったが、この殺風景な飲み方食い方のために、愛人の死後半歳にして、その頑健な生命を失うことになったのは、彼にとって不幸であったか、幸福であったか。

昭和三十八年五月六日、万太郎は市ヶ谷加賀町の梅原竜三郎邸の美食会に招かれた。相客は、小島政二郎、美濃部亮吉、福島慶子、奥野信太郎、松山善三・高峰秀子夫妻らであった。

彼は上機嫌で雑談し、応接間の一隅に据えつけられた鮨のつけ台の前に奥野とならんで坐った。赤貝が握られて、

目の前におかれた。

万太郎はふだん刺身や生貝を食べない習慣であったのに、この日はじめて梅原邸に招かれてふだんの調子を失ったのか、何気なくその赤貝を口にいれたとたん、のどの奥から怪音を発して立ちあがった。

彼はハンケチで口をおさえ、トイレに走ろうとしたが、その途中大音響をたてて廊下にひっくりかえった。口から泡を吹き、みるみるチアノーゼ状態をきたし、救急車で信濃町の慶応病院に運ばれたが、すでに絶命していた。午後六時二十五分であった。

死因は、赤貝が気管に貼りつき、完全に閉塞したことによる急性窒息死であった。

彼は、赤貝にむせたとたん、その場ではき出せば助かったかも知れない。しかし、これについて小学校時代の同窓画家の鴨下晁湖はいう。「赤裸々に言えば久保田さんは（中略）スタイリストでした。それが死因に結びつくのは悲しいことです」

あと「美食会」はどうなったものやら。

前年の暮――妻の死後十日目――「銀座百点」の忘年句会での万太郎の句。まさに、絶唱の意味においても絶句。

湯豆腐やいのちのはてのうすあかり

築地本願寺での葬儀には、慶応時代からの友人佐藤春夫が、「……遮莫、我はまた誰とか与に詩を語らん」と告別の詩を詠んだが、その佐藤春夫も、翌年の同月同日、放送録音中に大苦悶の声をあげつつ急死した。

東海林太郎（一八九八――一九七二）

日中事変前「赤城の子守唄」、事変中「麦と兵隊」などで一世を風靡した流行歌手東海林太郎も、太平洋戦争後はドサまわりのうちに没落したかに見えたが、昭和四十年、東京12チャンネルの「懐かしの歌声」で奇蹟的に一躍復活した。そのとき彼は六十七歳であった。

白いタキシードに黒い蝶ネクタイの正装、そして直立不動の姿勢をとり、半白髪をふりみだして堂々と歌う姿が、人々に一種の感動を与えたのである。

が、昭和四十五年、テレビスタジオの階段を踏みはずして転んでから右足を痛め、杖をつかなければ歩けないようになった。彼はそれまでに結腸ガンの手術を七回受け、人工肛門をつけていた。

それでも彼は歌いつづけたが、次第にギャラのないチャリティ・ショーなどが多くなった。

昭和四十七年九月はじめ、三十七歳になる三度目の妻と離婚した。

その二十日後の九月二十六日の午後、立川に住むある女性の家で、マネージャーと九州沖縄公演の打合せをしている途中、「ちょっと昼寝をする」といって隣の部屋でごろりと寝たが、それっきり動けなくなった。脳溢血を起したのであった。

彼はそのまま意識を回復せず、立川中央病院に運びこまれたが、十月四日午前八時四十分に死亡した。

佐藤栄作（一九〇一――一九七五）

昭和三十九年から四十七年まで、足かけ九年間の佐藤内閣が終ってから、昭和四十八年佐藤栄作は奈良へいって、天理教の中山真柱に御馳走になったあと、立ちあがろうとして足のしびれのため、仰向けにひっくり返り、足を捻挫して三日寝こんだ。

「そのうちに尾ヒレがついて、佐藤栄作が骨折したとか、風呂場でハダカのまますべってころんでケガしたらしいという記事まで出た」

と、その年の「文藝春秋」七月号に佐藤はみずから書き、さらに、

「そんなわけで、久しぶりに三日ほど寝込むことになり、やはり年をとったもんだという気持が急にして来た。安静にしていると妙な気分になるもので、なぜか、自分もこれで畳の上で死ねるんだなあと、非常に安らいだ気持になったものである」

と、書いた。首相をやっている間、さすがに彼も非命の死は一応覚悟していたものであろう。

――幸か不幸か、人間で自分が二年後に死ぬと予測出来る者は一人もいない。

昭和五十年五月十八日、彼は日記に「きょうゴルフにいったが、ちっとも当らない。何だか体のぐあいが悪いように思うから、なるべく近いうちに精密検査をしたい」と記した。（細川隆元『わが宰相論』）

その翌日、彼は自民党幹部、財界首脳と築地の料亭「新喜楽」で会食中、突然テーブルをたたき、みな驚いてそちらを見たとたん、横倒しに倒れた。

同席していた福田赳夫は語る。

「宴席につこうとしてドサッと倒れた。苦労して体を立て直そうとして、また倒れる。私は隣りの仲居さんに『体のデカイ人は不経済だね。立つのにも力がいる。その点、僕は痩せてるから』なんていったんですが、そのうちようやく起き上ったと思ったら、本格的にドサッと倒れた。もう目を見開いて高イビキで」

また財界の永野重雄は語る。

「佐藤は僕の隣、横山大観の絵がかかっている床の間を背に坐ろうとして、いきなりばたっと倒れた。僕は、くたびれたときは、よくやるしぐさと思って、左手で佐藤の体を支えてやった。顔を見ると、あの大きな目玉をかっと見開いているが、これが虚ろなんだな。みんな『どうした、どうした』と総立ちだ」

末席に坐っていた代議士粕谷茂は、あわてて友人の医者に電話した。彼はいう。「失禁していれば脳溢血だといわれた。下に手をあてたら、濡れていた」

それから十五日間、「新喜楽」で昏睡したまま、日本医学界の最高の治療を受けたが、ついに意識を回復せず、六月三日午前零時五十分に死去した。

人の死するに当ってだれもが怖れるのは、死への恐怖と、死の苦痛と、遺族についての心配であるが、佐藤栄作はこの三つの怖れをいずれもまぬがれた。彼は政治的ライヴァルの相つぐ死や病気で首相の座を獲得することが出来たが、最後までついていた男であった。

いくら畳の上でも、高級料亭で死んだのは、戦後で準・大宰相ともいえる佐藤栄作にとって不本意であったかも知れないが、しかし料理屋かゴルフ場で死ぬことは、男にとって極楽浄土で死ぬようなものだ。ましてや、その双方のどちらかにいることを日課としているような自民党領袖としては最もあり得る、かつ、最もふさわしい死場所であったといえるのではないか。

古賀政男（一九〇四――一九七八）

昭和六年「酒は涙か溜息か」の作曲で登場して以来、戦前戦中戦後、無数の「古賀メロディ」で日本を風靡した古賀政男は、昭和四十年六十一歳のとき軽い脳卒中を起し、四十九年に再発作を起し、以来健康がすぐれず病院通いをすることが多かった。

代々木上原の約四千五百平方メートルの宏大な屋敷の中に七カ所観音像をおき、日夜読経を欠かさず、晩年は、日本の最高の音楽は御詠歌だ、といった。

昭和五十三年七月二十五日、いつものように午前五時ごろ起床し、般若心経を読んだが、そのあと気分が悪いと訴えた。医者が来て心臓の冠状動脈硬化症の診断を下し入

院をすすめると、ウンザリしたように「入院はいやだなあ」といった。
そのうち容態が急変し、午後一時十五分、家人や音楽関係者十人ばかりに看とられて息をひきとった。

水谷八重子（一九〇五——一九七九）

水谷八重子は、昭和三十七年、五十七歳のとき子宮ガンの手術をし、四十年には乳ガンの手術をして、「これでわたし、女の器官はぜんぶとっちゃった」といった。以後彼女の胸は手術でえぐられて、放射線治療のあとが生々しく残っていた。
五十一年ごろから、背中の痛み、頭の痛み、胸の痛みなどを訴えはじめ、順天堂病院に入退院を繰返したが、これは完治したと思われていた子宮ガンや乳ガンが背骨その他に転移したものであった。ガンはふつう手術後五年を経て異常がなければ完治したものといわれているが、十年以上たっても再発することがあるのである。
彼女は、昭和五十四年五月、「婦系図」に出演中、たえがたい背中の痛みのために、七日夜の部から休演した。
八月にはいって、彼女のつもりではほんの一週間ばかりの予定でまた順天堂病院に入院したが、そのままになった。
それでも九月三十日午後、見舞いに来た娘の良重には、
「お願い、早く帰ってちょうだい」といった。
それは早く国立劇場の舞台稽古に帰ってゆくように、という意味だった。——八重子は、彼女についていた番頭が「不世出の名女優だが、女ではない」と嘆声を発したほど芸以外には何もない女であった。
その夕方まで食事をとり、話もしていたが、夜になって意識不明となり、十月一日午後七時二十三分、この老いを知らぬ大輪の牡丹は静かに散った。
「老醜をさらしてくれるなの希望通り『婦系図』の小芳の水々しい美しさを残して逝った。晩節はけがれなかった。老醜をさらさなかった」
と、川口松太郎は書く。
十月四日、築地本願寺で行われた通夜に向った彼女の霊柩車は、途中国立劇場に立ち寄った。舞台では、彼女が出演するはずであった新派公演の「夢の女」が開演中で、母に代って娘の良重が熱演していた。手の空いていた座員と、ロビーにいた客がこの霊柩車を迎えて黙祷したが、人波の中からは「水谷！」というかけ声がかかった。
彼女の遺骸は、死化粧がほどこされ、紫のお高祖頭巾を

つけ、梅と牡丹を刺繍した豪奢なうちかけに包まれていた。

湯川秀樹（一九〇七——一九八一）

昭和九年、彼が二十七歳のときに発表した「中間子理論」で、昭和二十四年日本人としてはじめてノーベル賞を受け、敗戦に打ちひしがれていた日本人に希望の光明を点じた湯川秀樹博士は、晩年は核兵器廃絶を唱える平和運動に力を注いだが、昭和五十年、二度にわたって前立腺ガンの手術を受けた。
スミ夫人はいう。「前立腺ガンの手術をおえた湯川は、体のあちこちに管を通し、血と尿がその管から流れ出すなど、死ぬのではないかと思うほどひどい姿でした。それ以来湯川は毎晩五、六回も尿意を催し、私はそのたびに世話をしつづけてきました」
湯川は、昭和五十六年九月五日ごろ風邪をひき、それから微熱がつづいた。
八日朝、朝食に起きて来ないので、七時半ごろスミ夫人が見にゆくと、蒲団の中でうつろな眼をしていて、検温してみると四十度あった。午後一時過ぎ主治医が駈けつけ、人工呼吸を施したが、二時に死去した。
死因は急性肺炎と心不全であった。死後解剖してみると、以前の前立腺ガンのほうは完全に治癒していた。

七十五歳で死んだ人々

> 老いても、生きるには金がかかる。——人間の喜劇。
> 老いても、死ぬには苦しみがある。——人間の悲劇。
> ——山田風太郎——

アルキメデス（前二八七頃——前二一二）

アルキメデスは、生まれ故郷のシチリア島シラクサの王に仕え、いわゆるハンニバル戦役においてローマ軍の攻囲を受け、物理を利用した投石機や敵艦焼打ちを目的とする大反射鏡などを作り出してローマ軍を悩ませたが、ついに及ばずシラクサの陥落のとき、彼を「アルキメデスの原理」で有名な大物理学者とは知らないローマ軍の一兵士の手で、誤って殺された。

鑑真（六八八——七六三）

日本に来ようと試みて失敗すること十二年の間に五回、その間に盲目となったが、天平勝宝五年ついに来朝して、六年、東大寺に戒壇を建て、七五九年唐招提寺を建立した唐の高僧鑑真大和上は、かねてから、

「我もしついに亡ぜんときは、願わくは坐して死なん」

といっていた通り、天平宝字七年五月六日、唐招提寺の宿房で、西に向って結跏趺坐したまま死んだ。

死んで三日たっても体温が感じられたので、久しく葬られず、のちに火葬に付したときは香気が山内に満ちた、というのが高僧の死特有のオハナシだが、（松本清張『思託と元開』によれば、鑑真の唯一の伝記『東征伝』は虚構の書だと説く）しかし示寂に先だって弟子たちに作らせた「鑑真像」は、ほのかに笑いをふくんで瞑目した、いかにも人間味ゆたかな脱活乾漆像で、最大級の国宝としていまも唐招提寺に安置されている。

柳生宗矩（一五七一——一六四六）

『寛政重修諸家譜』に、正保三年三月、但馬守宗矩の病篤しと聞いて、二十日、将軍家光は親しく柳生邸を見舞った。家光は宗矩に剣法の奥義を訊き、また願うところあれば申すように、といった。宗矩は、私ことさらに恩遇をこうむり万石の列に加えられた上は、いまさら何を願うこともありませぬ。私死したるときは家禄ことごとく御返上申しあげたく、倅三厳、宗冬の二人はどうともみこころのままに、といった、とある。

三月二十六日に宗矩は死んだ。病名不明。

その長男十兵衛三厳は四年後に死ぬ。

護持院隆光（一六四九——一七二四）

五代将軍綱吉とその母桂昌院の帰依あつく、生類憐みの令を出させ、いわゆる「お犬さま時代」を現出して元禄のラスプーチンという後代の評を受けた妖僧護持院隆光は、宝永六年一月綱吉が歿すると彼もまたしりぞけられて、八月、故郷の大和超昇寺に隠退した。ときに六十歳であった。

その後彼は十五年生きて、享保九年、病を得ると医薬をしりぞけ、呪をとなえ印をむすんで、六月七日に死んだ。妖僧ながら大往生というべきであろう。

同じ年の十一月に大坂で近松門左衛門が死んでいる。

両人とも元禄の代表的人物だが、死んだのは吉宗の時代なのである。

上田秋成（一七三四——一八〇九）

「父無シ其ノ故ヲ知ラズ、四歳母マタ捨ツ」（自像箱書）私生児として生まれ大坂堂島の油屋に拾われて育てられた上田秋成は、その出生よりその純粋狷介の性によって人を罵ってはばからず、孤高清貧の生涯を送った。

凄艶の怪異譚『雨月物語』を書いたのは、彼が数え年三十五歳のときである。

六十四歳のとき妻を失い、同じころ眼を患って半盲の状態となり、六十九歳のとき、京の南禅寺山内西福寺の紅梅の下に自分の墓を作った。日本の古来からの習慣では自分の墓を作ることはしない。妻を失い子のない彼はそうするよりほかはなかったのだが、これも奇人の評ある秋成の

奇行の一つとして伝えられた。

文化五年数えで七十五歳のとき、自分の精神生活の総決算ともいうべきエッセー『胆大小心録』を書いた。この本には、彼みずから書いた異本が多い。いったん本として出しながら、その旧稿に手を加えているうちに、別の文章を書き加えてしまったらしい。ボケの一種ともいえるが、内容にボケの現象は見られない。

居室の壁に「禁物、酒、たばこ、肴、油」と書き、ふだんの副食物はひしこ味噌とごま塩だけとして、それを健康食とした。

しかし彼は、自分の人生をふりかえってまったく無意味なものであったと考え、このとし「ああ天は何すれぞ我を生みしや」と痛切な嘆声を発している。

その翌年の文化六年、京の百万遍屋敷、門人の羽倉信美の家に老病の身をひきとられ、六月二十七日ひっそりと死んだ。

塙保己一（一七四六——一八二一）

七歳にして盲目となりながら、記憶力のみによって国学者となり、幕府の「和学講談所」の主宰者として、『群書類従』一千六百八十一巻を編纂するという大偉業をなしとげ、盲人世界でも最高の総検校の地位にのぼりつめた塙保己一は、文政四年八月十八日から病床につき、九月十二日に死んだ。

しかるに一子の次郎はこのとき数え年でまだ十五歳であった。（従って保己一、六十一歳のときの子ということになる）この年齢では家督相続に一歳足りない。

よって塙家では保己一の死をかくし、翌年七月三日に保己一の名で、

「私儀去巳年八月中瘧疾相わずらい、その後労役の症となり、その上持病の癪気も加わり、久々相悩み候につき……」

と、幕府に病気届けを出し、七月九日に至ってやっと死亡届けを出した。

おそらく保己一の遺志によるものと思われるが、こうまで苦労して「和学講談所」のあとをつがせた塙次郎は、のちに尊王攘夷のテロ時代に、幕府のために学者として廃帝の例をとり調べたという風評により、文久二年十二月、九段坂で暗殺された。斬ったのは伊藤俊輔——のちの博文であったという。

せっかくの保己一の末期の策略は、かえって息子を殺す

運命を招いた。目明きを笑った彼も未来についてはやっぱり盲目であったのだ。

新門辰五郎（一八〇〇——一八七五）

下谷の鳶の人足から町火消の頭となり、浅草上野一帯を縄張りとする大親分となった新門辰五郎は、いっとき石川島人足寄場に放りこまれるといった前科もあったが、勝海舟に、「新門の辰などは、随分物の分った男だった。あんな男は、金や威光にびくともせず、ただ意地ずくで交際するのだから、同じ交際をするにも力があったよ」（『氷川清話』）と買われたような男で、おまけにその娘が徳川慶喜の愛妾の一人となるという玉の輿に乗ったこともあって、幕末、慶喜の上洛には乾分三百人をひきいて肩で風を切ってお供をするという、やくざ史上稀有の栄華時代を持った。

維新後も、やくざのおかげでたいして困窮もしなかったらしく、明治八年九月十九日、浅草馬道の自宅で病歿したが、

思ひおく鮪の刺身鰒汁
ふっくりぼぼにどぶろくの味

などいう辞世を残して死んだというから、極楽往生だったのであろう。彼の大好物をならべた歌である。

リスト（一八一一——一八八六）

「ハンガリー狂詩曲」などで知られるハンガリー生まれのフランツ・リストは、少年時代から天才的ピアニストとしてヨーロッパじゅうでもてはやされ、天性の美貌と相まって、その女性遍歴はカザノヴァもしのぐばかりであった。恋した女性は必ず情人とし、その多くは人妻、それも貴族の夫人であった。彼の娘のコジマも、彼が二十六歳のとき、フランスの伯爵夫人マリー・ダグーに生ませた娘であった。

中年になってからリストは、二歳年下の無名の作曲家ワーグナーの天才を認め、心酔し、あらゆる手段をつくしてこれを世に出すことに熱中した。

ところが、リスト五十九歳のとき、そのワーグナーは、すでに人妻となっていたコジマと姦通し、ついに善良なその夫からコジマを奪いとった。この問題で、ワーグナーとコジマにこんこんと説教したリストに、ワーグナーはいった。「あなたは昔もっとまっとうな人でした。あなたは女を愛すれば、それがすべてでした。もし当時のあなたが正しかったとすれば、いまのわれわれだって決してまちがっ

ていないわけです」

このときの悶着で、コジマは父のリストと断絶した。リストの好色は、実の娘によってその酬いを受けたのである。

娘からそんな仕打ちを受け、かつリスト自身も一種の地獄を痛感して、やがて彼は僧籍にはいり、司祭になった。しかし、それでもなお彼の女道楽はとまらなかった。

一八八三年ワーグナーが死んだとき、その葬式にリストを呼ばなかったコジマも、一八八六年七月末、バイロイトでワーグナー音楽祭がひらかれたときには、気をとり直して招いてくれた。リストはいそいそとバイロイトに出かけた。

そこで風邪をひき、発熱したが、うれしさのあまりそれを押してリストは音楽祭に出席した。このときも若い美しい女弟子を同伴していた。

が、彼は宿で動けなくなり、医者が呼ばれ、肺炎になっていると診断された。はじめて見舞いにやって来たコジマは、つきそいの女弟子を見つけて追い出してしまった。

七月三十一日リストは死んだ。

日本では明治十九年、同じ年にアメリカではクラーク博士が死んでいる。

エンゲルス（一八二〇――一八九五）

マルクスは『資本論』第一巻を刊行したところで死んだ。それ以後の厖大な原稿は、おそらくマルクス自身にも読めないような走り書きで、かつ独特の書体のものであった。これを判読し、編集し、刊行する仕事は、すべて親友のフリードリッヒ・エンゲルスの肩にかかった。

マルクスの死後十二年、エンゲルスの死の瞬間まで、エンゲルスはその全精力をこのことにそそいだ。彼はつつましやかにいう。「マルクスが第一ヴァイオリンで、私は第二ヴァイオリンだ」

しかし、レーニンはいった。「われわれのこの科学は、学者であり闘士であった二人の合作である。この二人の間の友情は、人間の友情について昔の人の語り伝えているいかなる感動的な物語よりも美しいものであった」

エンゲルスは一八九五年（明治二十八年）八月五日に、喉頭ガンのため、ロンドンで死んだ。

その遺言には、死骸は火葬にし、灰は水葬にすることを望むとあったので、八月十日に遺骸は火葬場に送られた。

八月二十七日、エンゲルスの骨壺は友人に抱かれ、エンゲルスが愛したロンドン南方のイースト・ボーンの岸から六マイル離れた沖で、秋近いドーバーの波に投ぜられた。だから、エンゲルスの墓は存在していない。

マーク・トゥエイン（一八三五――一九一〇）

若いころミシシッピー河の水先案内人などやったこともあるマーク・トゥエインは、富裕な石炭商の娘を妻とした上に、中年から書き出した『トム・ソーヤーの冒険』『王子と乞食』などでアメリカの国民的作家となり、大邸宅に六人の召使いを傭い、専用列車で旅行する王侯のような生活を送った。家庭も円満であった。

しかし、老年期にはいってから、みずから投資した出版社の破産、長女スーザンの脳膜炎による死去、そのショックによる妻オリンピアの喘息発作の発病と死、ついで三女ジーンの癲癇による死亡など、相つぐ身辺の不幸な出来事のために、明るく快活な彼の性格は、次第に暗いものに変っていった。

死ぬ一年前に彼はいった。「私は一八三五年ハレー彗星とともにこの世に生まれた。来年はまた彗星が近づく。私は彗星とともにこの世を去りたい」

翌年、ハレー彗星が現われた翌日の四月二十一日の夕刻、彼はコネティカット州レディングの自宅で、次女クララやその夫に、ジキルとハイドの二重人格の話などをしていたが、突如狭心症の発作を起し、六時二十二分に絶命した。

それでも最後に、

「じゃあまた、いずれあの世で会えるんだから」

という言葉を遺したという。

ベル（一八四七――一九二二）

二十九歳のとき、はじめて電話を発明したアレキサンダー・グラハム・ベルは、三十歳で結婚したが、怖ろしい大食漢で、結婚式のときにはいたズボンが数カ月後にはもうはけないほどであった。数年後、身長百八十センチの彼の体重は百十二・五キロに達した。

案の定、ベルは晩年糖尿病に悩むようになった。

一九二二年、七十五歳になったベルは、糖尿病が悪化してみるみる痩せ細り、八月一日の朝に死んだ。最後に妻のマーベルが「私を残してゆかないで」というと、その妻の手に彼は指で「ノー」と書いた。

八月四日彼が埋葬されるとき、午後六時二十五分を期し

て、その哀悼のためアメリカじゅうの電話は一分間休んだ。
それにしても、「ベルを鳴らす」という言葉が消えてから久しくなった。

モラエス（一八五四――一九二九）

日本ではモラエスと呼ばれるポルトガルの海軍将校ヴェンセスラオ・デ・モライスは明治二十六年来日し、四十五年大阪、神戸の総領事となったが、ラフカディオ・ハーン以上に日本に心酔した。

「私は日本を、気も狂わんばかりに愛し、日本を、まるで神酒に酔い痴れるように、むさぼり飲んだ」（モラエス『日本の異国情緒』）

彼は、徳島生まれの芸者福本ヨネと結婚し、明治四十五年ヨネが死ぬと、その墓を守るために徳島に住んだ。その後ヨネの姪斎藤小春と同棲したが、大正五年小春も病死すると、あとは四軒長屋の一軒に天涯孤独の暮しをつづけた。晩年、腎臓病と中風に悩んでいるのを知ったポルトガル公使が生活の面倒を見ることを申し出たが、ことわった。

だれ一人に看とられることもなく彼が死んでいるのが発見されたのは、昭和四年七月一日の朝であった。

翌二日の「朝日新聞」記事。

「上衣をぬいだ翁は、縁先から庭に打ち倒れ、庭石に前額部を打ち絶命していた。検死の結果、夜来ブランデー二合をあおり、十分酔った上で裏口の廊下から庭先の置石に自ら身を投げ、顔面を打付て覚悟の自殺をとげたものらしい」

庭への投身自殺とは前代未聞である。――事実は、酔っぱらったあげく、水を飲もうと庭の井戸へゆこうとして縁側からころげ落ち、頭部を打って死んだものと推定される。

なぜ自殺と思われたかというと、柱に風呂敷が貼られ、その下から日本語、英語、ポルトガル語三様に書かれた遺書が発見されたからである。その日本語の文。

「ワタクシハ、モシモ、シニマシタラ、ワタシノカラダヲ、トクシマデヤイテクダサレ。トクシマ大正二ネン、七月二十九日。　モラエス」

彼はその十六年前から遺書を書いていたのだが、これは万一に具えての遺書であったろう。

一説に、評論家中村光夫によれば、モラエスは「手足の自由を失ってから、世話していた女が大小便の始末に一回いくらという報酬を要求したために糞尿にまみれて死んだということです」と、ある。

後年作家新田次郎は、『孤愁』という題名でこのモラエスを書き、未完で歿した。

西田幾多郎（一八七〇――一九四五）

昭和十六年一月、西田幾多郎は天皇に「歴史哲学について」を進講したが、その中で彼は、ファシズムとリベラリズムは両立し得るもので、それは日本の皇室に具現している、と述べた。このとき、自分のことをいうには「西田は」といわなければならぬと注意されていたのに、彼は途中で「わしは、わしは」といい出した。

その三月に第二回文化勲章を受けたが、十月にはリューマチの大患にかかり、約十カ月病臥した。その後やや軽快して鎌倉極楽寺姥ヶ谷の別邸で思索と執筆生活をつづけていた。しかし、用紙、印刷は次第に不自由になり、岩波書店編集員の布川角左衛門によれば、「先生が老年になられるに従って、却って意欲的になられ、論文の発表についても、ますます情熱的になられたことであるが、せっかく原稿を書かれても容易に発表できないもどかしさを私に訴えられるようになった」

昭和二十年五月十八日、西田を訪ねたカトリック哲学者松本正夫に、西田は「時に戦争はいつ終るかね」と訊き、また「天皇制は、どうなると思うかね」と訊いた。むろん敗戦を前提としての問いであった。松本が「ハイマート・ベウストザイン（郷土意識）としてなら残るかも知れませんね」と答えると、西田は膝をたたいて、「君、それだよそれだよ」と、うなずき「天皇制は、一地方国家の郷土意識に過ぎなくなるのだ」といった。村の鎮守の神様というところか。

一週間後、彼は病床についた。腎疾患であった。

死ぬ少し前に、彼は夫人に墨をすらせ、ゲーテの「旅人の夜の歌」を自分なりに訳したものを紙に書いた。

「見はるかす山の頂、梢には風も動かず、鳥も鳴かず、まてしばし、やがて汝も休らん」

原文は濁点なく、九行に分けて書いてある。

その後すぐに意識不明となり、これが西田の絶筆となった。六月七日午前四時に死去したが、医者も間に合わず、見守っていたのは妻と娘の二人だけであった。直接の死因は尿毒症であった。

仏教学者の鈴木大拙は西田と同郷、かつ四高の同窓で生涯の親友であったが、その悲嘆ぶりを知人の石井光雄はこう書いている。「七日の昼頃（中略）午餐を喫していると

其所へ鈴木先生が来られたと山妻が知らせて来た。早速玄関に御迎えに出ると之れは大変、先生は靴も脱がず玄関の敷台に頭をうつ伏せに伏せて欷々と泣いて居られ、私の顔を見らるるや否やワァーと一層激しく泣き出され、『到頭西田死んだ』と云うて愈々涙をぽろぽろ落して居られ、又再び敷台に顔を伏せて泣かるるばかりで其顔色土灰の如く蒼ざめ、悲嘆の状は父母骨肉を失うも之れには及ぶまいと思えた」

　B29の大群はこの日も焦土と化した大阪に大爆撃を加えていた。

佐藤紅緑（一八七四——一九四九）

　昭和二年の『ああ玉杯に花うけて』以来、『紅顔美談』『少年讃歌』『一直線』とつづく少年小説で満天下の少年を熱狂させた佐藤紅緑は、昭和十五年、「少年倶楽部」の編集長から、連載中の『牛若弁慶旅日記』についてマンネリズムを指摘されて、不遜無礼なりと激怒し、以来「少年倶楽部」と絶縁した。時に紅緑は六十六歳であった。

　晩年はただ「少年倶楽部」のみに書きつづけた紅緑にとって、これは以後一切の原稿収入が途絶えることを意味した。

　翌年日本は戦争に突入し、紅緑は興津へ、さらに蓼科の山中に疎開しなければならなかった。ついで敗戦の日が来た。山中疎開の荒涼たる生活と敗戦の悲嘆のため、紅緑はめっきり衰えた。

　昭和二十二年元旦に、彼は自分の一生をふりかえって、次のような感想を記している。

「……車は元と直径すべく作られしものなるに余は曲径せるにあるざるなきか。天の余に賦する所のもの別にこれあるにあらざるか」

　七十三歳にして彼をとらえた惨憺たる疑惑であった。彼は書いた。「今にして之を考うる既に晩し」

　その五月、紅緑は東京の子息サトウハチロー宅にひきとられたが、すでに世に忘れられた存在であった。ある婦人雑誌には「故佐藤紅緑」と書かれた。それでも一日、往来で復員兵らしい青年に呼びとめられ、かつて愛読者であったことを告げられたあと、その青年を見送る紅緑の頬には一筋の涙が伝わっていた。

　二十三年ごろから、紅緑は肝臓が肥大し、病床についた。それでも寝床に尿瓶をさしこまれると彼は、「無礼者！」とさけび、丹前をコウモリみたいにひろげて便所へよろめいていった。

　——紅緑にかぎらず、死病の人間が最後までこだわるのは、自分の排泄物の始末だ。これこそ人間が精神的動物であることの最大の例証である。

　二十四年四月、ハチローが辰野隆、徳川夢声とともに天皇を慰めるために宮中に召され、恩賜の煙草をもらって帰って来た。紅緑は蒲団の上に身を起して書いた。

「余、驚愕と恐懼に堪えず、右の品々を両親の扁額前に捧げて涙下ること雨の如し。余が一家いまだかつて一度も斯の（如き）光栄に浴せず、八郎によってはじめてこの光栄に接す。蓋し佐藤家万代の栄誉にして、余が一身亦父母の一大光栄なり。感激胸に塞りて嗚咽ものいう能わず。……」

　それが彼の最後の日記となった。

　彼は初老にして糟糠の妻たる前妻を離別し、若い美しい女優を後妻とした。半ば捨てられた前妻の子たちは成長してみな不良少年となり、しばしば彼を卒倒させるほど悩ませた。その苦悩の中で彼は数々の少年熱血小説の傑作を書きつづけたのである。

　サトウハチローも前妻の子で、かつてはその不良少年の一人であったが、彼だけあやうく立ち直り、最後にこの感激を老父に与えたのである。

　それから約二カ月たった六月三日の夜明け方、看病に疲れた末娘の愛子がふいに目ざめると、襖をあけはなした隣りの病室で紅緑は眠るがごとく死んでいた。（佐藤愛子『花はくれない』より要約）

会津八一（一八八一——一九五六）

　『鹿鳴集』で知られる歌人会津八一は、戦争中故郷の新潟県に疎開し、戦後もそのままとどまっていた。晩年の新潟における秋艸道人（別号）について、養女の蘭子はこう記している。

「晩年は専ら揮毫に明けくれて居りました。毎晩散歩に出るのが楽しみで、雨が降っても雪の日でもよく出かけて、町を一廻りして帰るのが常でした。その折に看板と云う看板には、きっと足を止めるのです。映画の予告の看板の前でも十分も二十分も立って居りますので、映画を観るのかと思うと、そうではなく、看板やの書いた広告の文字、ペンキ屋の書いた宣伝の文字に目を留めているのです。そしてその筆法を私に一々説明し、ひとりうなずきながら何かを探究するような風でいるのです。毎日、同じ道を同じ看

板であっても、父は幾度もその前に立ち止って『どれもこれも仲々うまいものだ』と感心して見てあるきました」

昭和三十年の春ごろから彼は健康がすぐれず、外出も出来なくなり、十一月十日ついに臥床し、十六日、新潟大附属病院に入院し、心臓冠状動脈硬化症の診断を受けた。

編集者松下英麿は記す。

「昭和三十一年十一月二十一日、七十六歳の先生は、新潟大学医学部附属病院の一室に、その最後の一日をむかえた。このすぐれた学者・芸術家を一ときも長くこの世にあらしめたいという悲願から、病院をあげての処置がとられた。

リンゲル、葡萄糖、その他のあらゆる注射は、容赦なくつぎつぎとその衰えた肉体に注ぎこまれる。その苦痛にたえる努力のみでも、生命力のマイナスではないかと思われるが、人の好意に対しては、たとえば自分の意志に反している場合でも、非常な感謝をもってむかえる習性の先生は、あきらかにこれを堪えしのんだ。

しかし、それにも限度がある。やがて幾度目かの注射のとき、ベッドの鉄骨をつかんで身を反し、その苦痛からのがれるために怒号した。したたる汗を拭いもできず、足部をおさえていた私が、『先生、もう少しのがまんです』というと、私と分ったのかどうか、『ばか！』とさけんで、うつろな眼でしばらく睨みすえた。そして幾リットルかの多量の液がおわるころ、非常に苦しんで、『やめろ！ 天下の会津を……後悔するな……』と、死の迫っている病人とは思われないはげしい声で叱咤した。これがいわば末期の一喝で、医師も、居合わせた人々も、ただ頭をさげるだけが、このときのなりゆきであった」

もっとも彼は、壮年のころからカンシャク持ちで有名であった。

「これからの五時間ほどの後に（午後九時四十八分）先生の生涯はついに終止符を打ったのである。窓のそとの黒い松林には、日本海特有の霰をまじえたしぐれが幽かな音をたて、依頼をうけて最後の顔をスケッチしていた杉本健吉が、ついに歔欷して鉛筆をなげたこのときの光景を、私はときどき思い返す」

堤康次郎（一八八九——一九六四）

「商売というのはだね、刑務所の門まで行く。行くけれども、中には入らない。そういうやり方なんだ。中にはいってしまってはモトもコもなくなる。しかし、刑務所に近づかないようでもダメなんだ」

といいながら、実業家として西武王国を築きあげ、その一方で、気にいった女があればいかなる素性の女性であろうと誘拐同然にして犯すという、「英雄色を好む」などというなまやさしい言葉では表現出来ない人物であった「ピストル堤」は、代議士として打って出るや、戦後、衆議院議長の栄職までのぼりつめた。梶山季之の小説『悪人志願』は彼をモデルにしたものである。（上之郷利昭『堤一族の血と野望』より）

右のような批判を受けてもいたしかたない一面を持ちつつ、まさに功成り名とげた彼は、昭和三十九年四月、NHKのテレビ番組「わが生涯」に満ち足りた表情で出演した。

その二日後、時の首相池田勇人の夫人に真珠のネックレスをプレゼントすべく、車で渋谷区広尾の自宅を出かけたが、途中気分が悪くなって、熱海の別荘で静養する気になり、東京駅についたが、そこで倒れた。心筋梗塞であった。ただちに新宿の国立第一病院へ運びこまれたが、三日後の四月二十六日に死亡した。

堤康次郎の色豪ぶりは、その結果として、数種の異腹の子を残すことになり、そのまま結果として、後に西武王国の大分裂をもたらすことになる。

三木露風（一八八九——一九六四）

明治末から大正にかけて白秋と相拮抗し、一般には童謡「赤とんぼ」（山田耕筰作曲）で知られる詩人三木露風は、七歳にして母と生別した。原因は父の放蕩であった。母はその後、碧川家に再嫁した。

……六十七年後、この母は九十一歳で死去した。七十三歳になっていた露風は、異父弟の日大教授碧川道夫にゆるしを請うて、通夜の晩、亡母とならんで寝た。

その二年後の昭和三十九年十二月二十一日午前九時十五分ごろ、彼は、住んでいた三鷹市の下連雀郵便局から往来に出たところをタクシーにはねられて頭を強打し、救急車で病院に運ばれたが、八日後の二十九日午前三時三十五分に息をひきとった。

薩摩次郎八（一九〇一——一九七六）

大正八年、十八歳で渡欧した薩摩次郎八は、オクスフォードを卒業後パリに赴き、祖父が綿花と貿易で一代にして築いた巨富を湯水のごとく使って、実際は爵位はないのに

「バロン・サツマ」と呼ばれ、パリ社交界の花形となる一方、昭和四年、当時の金で二億円を投じて日本館を建設し、また藤田嗣治、藤原義江、原智恵子、渡辺一夫らパリに滞在した日本の芸術家文化人のパトロンとなった。

しかし、昭和二十六年、無一文となって、五十歳の次郎八は帰国した。

元伯爵令嬢で、純銀のロールスロイスに、淡い紫と銀色のドレスを着せてシャンゼリゼーを走らせた夫人はすでに結核で亡くなっていたが、帰国後彼は浅草の踊り子秋月ひとみ（本名利子）と恋をした。彼女は彼よりも三十も年下であった。

昭和三十一年から二人は六帖のアパートで暮したが、昭和三十四年、彼女の故郷徳島市へ阿波踊りを見物にいったとき、彼は突然脳溢血で倒れた。以後利子はミシンを踏んで次郎八を養ったが、昭和五十一年二月二十二日、利子から牛乳を飲ませてもらって、しずかに彼は瞑目した。

彼はふだんからいっていた。「祖父が一人で作った金を、孫が一人でなくしただけのことで、別にどうってことはない」

豪快なる蕩児と純情な踊り子が、現実に描いた大ロマンス。

サルトル（一九〇五―一九八〇）

第二次大戦後「実存主義」の旗手として、全世界の青年たちの魂をつかんだジャン-ポール・サルトルは、七〇年代にはいると急速に思想的に孤立した存在となった。

彼は一九七三年から視力障害を起し、七五年には作家廃業を宣言した。

以後サルトルはモンパルナス近くの小さな借家で、印税だけの、月に三千フランという、当時のフランスの労働者の月収平均五千―六千フランよりはるかに少ない、いわば最低のつましい生活をし、レストランに現われるときも、よれよれの背広にレーンコート、ウールの襟巻という姿であった。彼自身「八十まで生きたら、私は無一文になるよ」といっていた。また、「私の葬式の費用はどうすればいいのだろう?」と尋ねたりした。

彼と「契約結婚」をしたボーヴォワール女史が、彼の家と、歩いて五分のアパルトマンに住んでいて、毎日かよって、もはや本の読めない彼のために本を読んでやるのが日課であった。

サルトルはそれでも文学上の会合に出たり、イタリア旅行などを試みたが、高血圧、動脈硬化、糖尿病などによる思考力鈍麻、めまい、顔面その他の筋肉麻痺、運動失調などが相ついで現われ、はては時ところをわきまえない排泄の不始末までひき起すようになった。彼は「恍惚の人」になったのである。

そして、一九八〇年三月二十日から、肺水腫のためにパリ市内ブルーセ病院に入院したが、四月十五日午後九時に死去した。たまたま自宅に帰っていて、電話によってかけつけたボーヴォワールは、死んだサルトルのそばに身を横たえて抱いてやろうとしたが、看護婦から、サルトルが床ずれのために身体に壊疽を起しているからといったんとめられた。

ヨーロッパでは、まだ土葬がふつうであったが、遺言によって遺骸は火葬に付された。

ボーヴォワールは六年後の一九八六年四月十四日、循環器系疾患で死去し、モンパルナスのサルトルの墓の隣りに埋葬された。

「絞首台でとり乱さないようにあらゆる配慮をめぐらしているのに、スペイン風邪でぽっくりやられる死刑囚、それがわれわれだ」

――サルトル――

七十六歳で死んだ人々

死とは……モーツァルトが聴けなくなることだ。

――アインシュタイン――

豊太閤夫人（一五四八―一六二四）

信長をあるじとする尾張清洲城の弓衆頭の浅野又右衛門の姪ねねが、草履取りの木下藤吉郎と祝言をあげたのは十四歳のときであった。藤吉郎はやがて太閤秀吉となり、淀君を愛妾とするに至る。北政所ねねが四十歳のときである。そしてねねは五十歳で夫を失い、落飾して高台院と称する。翌年、彼女は大坂城を淀君にゆずり京都三本木に退隠する。さらに翌年関ヶ原の役が起る。五十七歳のと

き、家康は彼女のために京の東山に高台寺を建ててここに住まわせた。十年後、大坂落城して豊臣家は滅んだが、家康は彼女に一万三千石を与えた。ねね六十七歳である。寛永元年九月六日、彼女は高台寺で歿した。七十六歳であった。

年譜は無味乾燥なものだが、これを見ていると無限の想像が喚起される。

秀吉が彼女に与えた手紙の情愛深さは有名だが、それだけに秀吉が淀君を愛妾としたとき、四十歳の彼女の反応はどうであったか。秀吉死後、大坂城を淀君にゆだねて退隠するときの彼女の心中はどうであったか。

現代の夫婦のモラルをもって律するわけにはゆくまいが、そうはいうものの、すでに秀吉在世中から豊臣麾下の武将たちが、三成らの淀党、清正らの北政所党と対立していたことから見ても、彼女が穏和一方の女性ではなかったことが推察される。そもそも若いころ信長から、「お前は藤吉郎には過ぎた妻だ。が、それはそれとしてお前は女だから、不足は抑え、やきもちなどやいてはならぬ」という手紙をもらったほどのねねである。

果然、関ヶ原で、淀党の三成に苦杯を喫せしめたのは、彼女の甥の小早川秀秋であった。秀秋が伯母の高台院の心を裏切ってまでしてこの裏切りをやることがあろうか。

以後、大坂城の炎の中に死んだ淀君たちをよそに、彼女は家康の庇護のもとに、外見的には平静な生涯を過す。彼女は淀君を、豊臣家を滅ぼした愚か者として、蔑んだか、憐れんだか、胸のつかえを下ろしたか。それとも、結局は秀吉を裏切ったかたちとなった自分を悔いたか、女として淀君に敗北した自分を悲しんだか。

冥界の秀吉、淀君のもとへゆく日を迎えて、彼女はいかなる心境であったろうか。

勝海舟（一八二三――一八九九）

明治三十一年暮に、海舟は訪問客に、

「おりゃ、もう十日もたって明年になれァ七十七になるよ。人生七十古来稀というが、その古稀より七つも余計に生きたよ。まだ身体に別状はないが、何となく死ぬときが近づいたような気がするよ。死んだときは、きっと夢がさめたときと同じようなものだろうよ」

といい、客が先生の銅像を建てたいと思っている、というと、

「銅像なんか、時勢の変りようで、いつ大砲や鉄砲の弾に鋳られるかわかりゃしない。そんなつまらないことをするより、その費用の三割でいいから、いまのうち金でもらいたいよ」

と、大笑した。

その翌年一月十九日午後五時ごろ、常のごとく入浴した海舟は、風呂から上ると坐りこんで、「胸が苦しいからブランデーを持って来い」と家人に命じ、それをグラスにいれて、「こんどはどうもいけないかも知れんぞ」といって、一口飲んだとたん、倒れて意識を失った。脳溢血であった。

彼が息をひきとったのは二十一日の午後五時であった。

旧幕臣の戸川残花は、「トノサマシヌスグコイ」という電報で赤坂氷川の勝邸に駈けつけた。

「例の小室に入れば室中暗澹として燭火もまた力なく照せり。先生はあたかも安眠するの状に似たり。猛烈の機尽きて慈温の相現われ、あたかも仙客に対するがごとし。

傍に頭巾をいただける老媼あり。すなわち先生の令妹（順子）にして、佐久間象山先生に嫁したる人なり、何にも申しませんが、ただ『コレデオシマイ』と申しました、と語れり」

さすがは生涯人を食った海舟で、人間最後の言葉の中の最大傑作。

海舟が死んだとき、海軍大臣は山本権兵衛であった。彼は若いとき勝家に食客となり、海軍にはいるきっかけを作ってもらった縁もあり、海軍省に海舟の銅像を建てようと提案したが、海舟が銅像など馬鹿にしていたと聞いて、この計画をとりやめた。

徳川慶喜（一八三七――一九一三）

三十歳で波瀾万丈の「最後の将軍」の運命を終えた慶喜は、そのあと四十六年間の余生を持ったが、側妾群（その中には侠客新門辰五郎の娘もいた）に、男十人、女十一人の子を生ませることで人生を過した。幕末に彼が「豚一」という異名をつけられたのは、ハイカラで豚肉を食う一橋という意味からだが、子供の製造のほうでもこの異名はあたっているのではないかとさえ思われる。

そして、彼に対する勝利者明治天皇よりあとまで生きて、大正二年十一月二十二日、自分の伝記『徳川慶喜公伝』の原稿を読んでいるうち、極楽往生をとげた。彼は数日前から風邪をひいていた。

坪内逍遙（一八五九―一九三五）

逍遙が二十年の歳月をかけて『シェークスピヤ全集』四十巻を完訳したのは、昭和三年、数え年で七十歳のときであったが、昭和八年七十四歳の年からさらにこの全巻の修正改訳にとりかかった。

以後、熱海の別荘双柿舎で、時に大病を患い、急速な肉体の衰えの中にこの仕事をすすめ、最終巻『オセロ』の改訳を終えたのは昭和十年一月半ばのことであったが、その直後彼は発熱、不眠、食欲不振のため病床についた。医者の診断は気管支カタルということであったが、実は彼はすでに肺浸潤に冒されていた。

二月十日、彼は『オセロ』校正の件について弟子たちに指示するところがあったが、その夜から高熱を発し、二十日には足に浮腫を生じ、二十八日午前十時三十分、昏睡状態のまま死去した。

しかし。――

松本清張は『行者神髄』という作品で、小説のかたちをとりながら、逍遙は生涯躁と鬱の周期を繰返したが、その鬱は逍遙が若いころ根津遊廓の遊女を妻としたことに根源を発したもので、公式の逍遙伝には、彼がその妻を生涯重んじ、またセン夫人もよくそれに応えてあっぱれな名夫人として通したとあるが、それは両人の仮面であって、逍遙はこれに因する悩みのためにこの年に至って鬱の極に達し、アダリン、ベロナールなどの睡眠薬を多量服用して自殺したのではないか、という怖るべき疑惑を提出している。

しかし、それにしては破綻も見せぬ夫妻の生涯が長過ぎるように思われるのだが。――

坂田三吉（一八七〇―一九四六）

「吹けば飛ぶよな将棋の駒に……」――「王将」で有名な（ただし、娘の美代は「実際の父とは違う映画や芝居の『王将』はあんまり見たくありません」という）坂田三吉は、太平洋戦争が終った翌年の夏、食当りから腸カタルをひき起して、みるみる弱った。それで将棋の弟子である病院長が入院させようと車まで家によこしたが、三吉は入院をいやがって承知しなかった。

死ぬ二日前の夕方、往診に来た近所の医者が、もうだめだから親戚を呼ぶようにといったが、当人は高いびきをかいて寝ているので、ただ一人家に残っていた娘の美代は、

まだ大丈夫だとためらっているうちに、二日後、気がつくと三吉の息はとまって、安らかな顔で死んでいた。昭和二十一年、七月二十三日のことであった。

彼に日本将棋連盟から正式に名人位、王将位が贈られたのは、歿後九年経過してからのことであった。

彼の実像は、娘の美代のいう通り映画や芝居の虚像とはかけ離れていて、大阪でいわゆるとぼけ阿呆ともいうべき人物であったが、東京の将棋界に対抗して「関西名人」を名乗って物議をかもすなど奇矯なところのあったことは事実で、彼自身も親しい知人中村浩に「わてが死んだら、わてをきっと芝居や活動写真にしよりまっせ、見ててみなはれ」といったこともあったという。

アインシュタイン（一八七九―一九五五）

一九〇五年、二十六歳で「特殊相対性理論」を発表し、原子核物理学の窓をひらき、バートランド・ラッセルから「人類はじまって以来最大最深の頭脳」という評を受けたドイツのアルバート・アインシュタインは、一九三三年、ヒトラーのナチ政府に追われてアメリカに亡命し、以後プリンストン大学の研究所で、愛嬢と女性秘書だけの三人暮しで静かな研究生活を送っていたが、一九五五年四月十五日、胆嚢炎のためにプリンストン病院に入院し、十八日午前一時十五分に死去した。

死の数時間前に、彼はドイツ語で何か看護婦にいったが、あいにくこの看護婦がドイツ語を解さなかったので、この二十世紀最大の科学者の「最後の言葉」は永遠に失われてしまった。

北大路魯山人（一八八三―一九五九）

昭和初年赤坂に「星岡茶寮」を経営し、料理はもとより、書、篆刻、陶芸、建築、造園にも、天衣無縫、稀有の大才を発揮しながら、相手がだれであろうと、気にいらないところがあれば横をむき、直情径行の毒舌をふるい、はては非情酷薄とも思われる態度を見せる不幸な性格のために、当然の反応としてだれからも反感を買い、憎まれ、冷眼視され、友人はおろか、何人かの妻にも去られ、一方彼のほうからも肉親の子さえよせつけなかった魯山人は、ふだん、

「この年になるまで運動一つしないで、こんなに丈夫なのは、うまいものを食べているせいではないかと思う」

と、小島政二郎に語ったほどの肉体と美食趣味の持主であった。（小島政二郎『食いしん坊』）

その彼が、昭和三十二年七十四歳の秋ごろから、下痢、しかもところきらわず失禁状態を繰返すようになった。そして三十四年秋にはついに尿閉症状を起して、横浜の十全病院に入院手術の結果、肝臓ジストマに罹っていることが判明した。

この病気は、肝臓ジストマという寄生虫を持つ鯉、鮒などを食べることによって起る。彼の「美食の報酬」であった。

彼は自分の病室に勝手にテレビや冷蔵庫を持ちこみ、ときにぬけ出して南京街へ支那料理を食いにいったりした。看護婦の注射のしかたが悪いと平手打ちを食わせたりするので、看護婦はあらかじめドアをあけて逃げ腰で注射する始末であった。

魯山人は五人も妻をとりかえ、秘書や家政婦にまで手をつけることを辞さなかったのに、どの女性にも下半身を見せることを極端に恥じ、病院ではカテーテルで導尿することを余儀なくされたが彼はそれをはずし、悲鳴をあげながら自分でトイレにゆこうとした。彼の伝記を書いた白崎秀雄はいう。「彼が、その自覚的な全生涯に、自らの生殖器に対する強烈な、ほとんど滑稽な劣等感を懐きつづけたことは、疑いを容れない」

十二月にはいって魯山人は、右の脇腹のあたりに小孔をあけて、そこへカテーテルを入れて尿を排出させるようになったが、そこから出て来るのは、尿というよりほとんど血であった。大便にも多量の血がまじった。それは本来の臭いに、魚の臓物の腐敗した臭い、腐乱屍体の臭いが混合して、人々の戦慄をさそう悪臭を放った。（白崎秀雄『北大路魯山人』）

十二月二十一日のあけがた、身内のだれ一人も看取る者もなく、やとった家政婦もうたたねしている間に息をひきとっていた。

日本人には珍らしい天才らしい天才の、天才らしい死に方の一典型。

子母沢寛（一八九二——一九六八）

『弥太郎笠』や『父子鷹』の作者、というより「座頭市」の生みの親として知られる子母沢寛は、昭和四十一年十一月、妻たまを喪ったとき、かっとむいた眼から滝のように涙を流しつづけ、はては涙も涸れつくして、ただのどの

奥から嗚咽の声をもらすのみといった状態で悲しんだが、それ以来めっきり弱った。翌々年の四十三年七月十九日、心筋梗塞で死んだ。

お手伝いの辻口外子は語る。

「おひるちょっと前でした。心臓がまた痛み出したといわれるので、いつものように首すじを指で押えてあげたんですが、つぼがなかなか見つからないうちに変になられたんです。

先生はまたふざけているのかなって、最初は思ったんです。いつも変な風に眼をひらいて、死ぬまねばかりしていらっしゃったから。

お医者さんもまに合わないほど急でした」

子息の梅谷竜一は語る。

「父の死んだことは、母のそばへゆくことで、父にとってはそれがかえって楽しみだったんじゃないかと思います」

なお有名な座頭市の原作『座頭市物語』は四百字詰原稿にして十五、六枚の短篇に過ぎない。

獅子文六（一八九三——一九六九）

かつては『南の風』『海軍』『自由学校』『大番』など最上質のエンターテインメントを書いた獅子文六は、昭和四十二年に七十四歳で「読売新聞」に『但馬太郎治伝』を連載したが、その出来ばえは小林信彦が「古い痛んだレコードでシャンソンを聞くようなもので」「同じ記述、説明のくり返しが多く、敬愛する『金色青春譜』の作者が、こんなにナマったのかと、悲しく思いながら最後まで読んだ」と評したようなものであった。

文六は、翌昭和四十三年二月半ばの大雪のふった翌日、午前中、テーブルに向っていて、突然背中に絞めつけられるような痛みを感じ、医者の来診を請い、胆嚢炎の診断を受け、さらに検診の結果、動脈瘤があるという診断を受けた。爾来、次第に身体が弱って来た。

九月に彼はこんなことを書いた。

「……人間は、ある程度以上の激痛に襲われれば、失神するようにできてるのだ。あまり考えない方が、いいかも知れない」

「……病気の正体を知ろうとしたり、行き先きを予測したりしても、何になるのか。要するに、私は苦しみ、そして死ぬ——それだけのことだ」

「……しかし、生きる妄執がなければ、自若として毎日を送れそうなものだが、そうはいかない。天命を待つ人とは

およそ遠い。クヨクヨした取越苦労に、追われてる」
「……私は、無限の暗黒の中を、無限に落下していく自分を、死後の姿として、若い時に、よく空想したが、その虚無を、好もしく思ったのだろう。しかし、そんなことは、若い時の甘ッちょろい考えに過ぎない。人間は虚無なんて、好都合な認識を許されてない」
「……マグロの刺身が、なまぐさくて食べられなくなったのだから、是非もない。（中略）合掌ぐらいして呼吸をひきとりたいものだが、肉体の苦痛に弱いから、動脈瘤破裂の際には、七転八倒して、それどころではあるまい」（遺稿『手記』より）

約一年三カ月後の昭和四十四年十二月十三日、彼は死んだ。死因はしかし脳出血であった。

その翌日弔問にいった友人の徳川夢声は、帰宅してトイレにはいり、そのまま出て来ないので家人がのぞいてみると、おびただしい吐物の中に、彼は半失神で坐りこんでいた。

戒名は牡丹亭豊雄獅子文六居士。

大仏次郎（一八九七―一九七三）

大仏次郎は、七十歳の昭和四十二年一月から「朝日新聞」にライフワーク『天皇の世紀』の連載を開始した。

一回分五枚書くのに、毎日八時間から十時間をかけるという労作で、夕刻書斎を出て茶の間に現われるときの大仏の顔は鬼の面のようで、夫人さえ声をかけられないほどであった。

が、翌昭和四十三年の春、下腹部に痛みを感じ、築地の国立がんセンターに入院し、手術を受けた。病名を医者はいわず、彼のほうも訊こうとしなかったが、彼はすでに肝臓ガンにとりつかれていたのであった。

それから間歇的に入院しながら、彼は『天皇の世紀』の仕事をつづけたが、ついに昭和四十七年五月、本格的に入院しなければならない状態になった。しかし彼はその後もベッドの上に坐り、ときには仰向けに寝たまま、脊椎の激痛に耐えながら、重い本を両手でかかえ、細い指でページをめくり、マス目のない奉加帳にフェルトペンで稿をつづけた。

「大仏さんから最も深い感動をうけたのは、死の近づいて来る病床で、最後の力をふりしぼって『天皇の世紀』の原稿を書いていた、あのすさまじい気力である。それは文字どおりの死闘であった」
と、友人の記者門田勲は書いている。

死の二カ月前に彼は兄の野尻抱影に自負の手紙を書く。
「（天皇の世紀は）日本の小説家程度の頭では、理解困難なのです。百年後には日本文学で、太平記や平家物語より上の扱いを受けましょうか」

彼は幸福な作家であった。

大仏は、「元気なときに安楽死の方法を考えとくんだった」と歎いたほど苦しいときでも、ベッドに結んである綱で身を起し、人の手をかりないで、病室の隅のトイレにいった。

昭和四十八年四月にはいったころ、彼は手洗いにゆく途中、ころんで、ひたいに傷を作った。それ以来、ベッドに坐って原稿を書くことは不可能となった。坐ると脊椎が圧迫されて痛みがひどくなったからである。そして腹水がたまって腹がふくれ出した。それでも彼は「作家は仕事が生命だ。生命あるかぎり私は書かなければならない。私は作家です」といって、仰向けになったまま書いた。

その超人的な気力もついに尽きるときが来た。四月十五日、彼は連載一五五五回目の原稿を書いた。それは、北越戦争で河井継之助が死ぬところで、
「そうこうして、いよいよ二歩三歩かつぎ出すと、私をお呼びになって『血が沢山出たから顔の色は悪いかも知れぬが生命には別状なかろう。然し足は役に立つまいてや』とおっしゃった。又二歩三歩歩き出すと、寅、寅と私をお呼びになって『人が聞いても傷は軽いと言っておけよ』とお言付けになりました。この時は思わず涙が出て、何ともいえない感慨に打たれました」
という文章で終り、その次に「病気休載」と書いた。彼の「傷」は軽くなかった。

翌十六日、担当の記者櫛田克巳にこの原稿を渡すとき、大仏の眼には涙があふれていた。

その日、ノートに彼は「……これだけ充実せる仕事のあと感情人の知らぬところならん。（中略）今となってみれば、予は幸福につつまれ来たり。落日の最後に到りその味一層深し」と書いた。

総計七七七五枚に及ぶこの未完の『天皇の世紀』の最終回が「朝日」紙上に載ったのは、四月二十五日のことである。その日のノートに彼は「新聞の掲載今日の夕刊限りである。ついでおいとまできれば理想的なり。みんな、しんせ

つにしてくれてありがとう。皆さんの幸福を祈ります」と書いた。これが最後の文章となった。

以後、彼の気力はがっくり落ちたようであった。しかし最後まで冷静に自分の病状を眺め、看護婦に、「連休あけまで持つかな」と、ひとごとのようにつぶやいた。そして死の直前まで、うつらうつらしながら、まだ字を書くように指を動かしていた。

四月三十日午後二時、連休ににぎわう銀座のどよめきの聞える築地の国立がんセンターで大仏次郎は息をひきとった。

吉川武蔵と大仏天狗は好個のライヴァルであったが、その最後もいずれ劣らぬ壮絶さであった。

その鞍馬天狗について、この生みの親は、以前から「私がこの世を終る時、彼も死ぬのだ。その為には、彼に隠して、この快男児が彼らしく堂々と終る場面を持った小説を、ひそかに準備しておかねばなるまい」（昭和二十九年『鞍馬天狗と三十年』）といっていたが、その準備が整わないうちに作者のほうが世を終った。不死の鞍馬天狗は高笑いしながら、いまも白馬で翔けている。

上原専禄（一八九九――一九七五）

昭和三十五年のいわゆる六〇年安保闘争で、学者・文化人の支柱の一人となった歴史学者上原専禄は、運動の過程で友人たちから裏切られたと本人が感ずること多く、かつ四十四年に妻を失うと、深い悲しみに襲われ、四十六年六月、知人たちに、妻のために回向三昧の境涯を求めて旅立つとだけ手紙を出して、国立音楽大のピアノ講師をしていた娘の弘江を連れて東京武蔵野吉祥寺の家を引払い、行方を絶った。

一人息子の東大教授上原淳道とも縁を切った。淳道はいう。「オヤジは周りの物や人を切っていって、最後に切ったのが自分の息子だったというわけです」

以来上原は、だれにも知らせず、宇治に高島宗助という変名で住み、夫人の冥福を祈り、日蓮の研究をする生活にはいった。（この変名をつけるとき、上原の頭には、漱石の『門』の主人公の名があったのではあるまいか）

四十九年九月、彼は京都桂病院に入院、五十年十月二十八日午後五時二十四分に死去した。病名は肺ガンと急性腎不全であった。しかし、みんなおれの死ぬのを待っている、

おれの死んだことはだれにも知らせるな、と娘の弘江に遺言した。

弘江は語る。「宇治の住所をだれにも教えなかったのは、静かに本を書きたいことと、親しかった人に裏切られたのが原因でした」

彼女は一年後、父の遺骨をひそかに苔寺に埋めた。そしてその死が公表されたのは、三年七カ月後の五十四年五月十六日になってからであった。

この『臨終図巻』に「死顔を見せるな」と遺言した人が少なからずある。死顔はおろか、伝説にいう象の死のごとく、自分の死をも知人にかくしたい希望の持主は意外に多いのではあるまいか。しかし出家遁世のならわしのあった古えは知らず、実際上、なかなか実現はむずかしい。それをあえて実行した人としてここに特に上原専禄をあげる。

ブレジネフ（一九〇六――一九八二）

一九六四年以来十八年間、ソ連の最高指導者であったブレジネフ書記長は、一九八二年十一月七日の革命記念軍事パレードには、二時間に及び零下五度の寒風の中に立って親閲し、またそのあとのクレムリン宮殿での祝賀レセプションにも出席したが、終始ニコリともしなかった。

そのころソヴィエトは、政治、外交、経済すべてゆきづまり、民心は沈滞の底にあり、彼に笑顔の出る余裕などはない状態にあった。

彼は少くともその七年前からアメリカ製の心臓ペースメーカー（脈搏を調整する小型電子機械）を心臓に植え込んでいたといわれる。またその二、三年前から表情にとぼしい仮面性顔貌を呈していたのは、脳の動脈硬化の進行にともなう神経の錐体外路系の障害を物語っており、おそらく適正な政治判断を下せる精神状態にはなかったものと見られている。

同時に、そのころから彼に、個人崇拝を期待する自己顕示性がいちじるしくなり、上半身をおびただしい勲章で覆った彼の姿がしばしば写真で見られるようになった。彼の心臓を悪くしたのは、この勲章の鎧のせいもあったかも知れない。

パレード親閲の三日後の十一月十日午前八時、彼は心筋梗塞で急死した。大国の指導者が死亡したというのに、それが公表されたのは二十六時間後であった。

十八年間ソヴィエトに君臨していた人物であったにもかかわらず、その死後、ソヴィエト国民の間に彼の名がささ

やかれることはほとんどなかった。

長谷川一夫（一九〇八――一九八四）

昭和二年、十九歳のとき林長二郎という芸名で松竹映画「稚児の剣法」で売り出してから、「雪之丞変化」その他で、水もしたたるその美男ぶりでたちまち全女性の渇仰のまととなり、昭和十二年東宝に移籍したとき、松竹の意向を受けた韓国人のやくざに顔を切られるという事件以来、本名の長谷川一夫と改めてからも、彼は半永久的に天下の二枚目の盛名を落さなかった。

映画は昭和三十八年、五十五歳のときの「江戸無情」で終ったが、それ以前昭和三十年からの「東宝歌舞伎」はながく東宝のドル箱となった。

が、昭和五十八年の正月の東宝歌舞伎「半七捕物帳」に出演したときは、さすがに老醜のかげ覆いがたく、長谷川一夫はひけどきを誤ったという声が出て、彼はショックを受けた。

長谷川はその十数年前から心臓をわずらい、ときに引退を考えないわけでもなかったが、「東宝歌舞伎」は彼だけの双肩にかかり、彼一人で切符一万枚をさばくという状態で、容易にやめるわけにはゆかなかったのだ。だが、その年の秋から持病となっていた糖尿病、心臓病、痔などの治療のために入院し、昭和五十九年の恒例の正月公演ははじめて休演するに至った。

そこに二月十七日、繁夫人が肺ガンで死去した。かつて新橋の名妓であった彼女は、二度目の妻ながら、四十年ちかく、世間的には彼の蔭にかくれ、しかも彼を後顧のうれいなく背後から支え、「役者の妻のかがみ」といわれた。妻が死んだとき長谷川はまだ退院後の静養中であったが、みなのとめるのをふり切って、二十九日の葬式の陣頭指揮をとった。

……ところが、十九日後の三月十九日、前妻の子成年によれば「最も忌むべき記憶に塗りこめられた一日」が来る。長谷川と妻繁は以前から財産を二分割し、かりにどちらが先立つことになっても、前妻の子二人、後妻たる繁の子一人、併せて三人すべて公平に遺産分配を行うようおたがいに遺書を書いていた。

しかるにこの日、改めて繁の遺書を調べたところ、長谷川には無断で、繁の娘のみに有利なように書き直されていたことが明らかになったのである。

信じていた妻のこの意外な行為を知って長谷川は「私は

七十五歳のきょうまで、いったいなんのために生きてきたのだ！」と、成年の表現によれば「血を吐くようなさけび」をあげた。

しかし、三日後の三月二十二日の繁の納骨式には、長谷川はこのような内部の葛藤をだれにもうかがわせず、異常によく雪のふったその春の寒風の墓地に立ちつくして、納骨式をすませた。

これが彼の命とりとなった。彼は風邪をひき、二十五日から高熱を発し、慈恵会医大病院に再入院したが、三十日腎盂炎を発し、翌朝脳血栓を起して意識がなくなり、さらに頭蓋内膿瘍となり、頭蓋骨切開手術が行われたが、珍しくまだ花の咲かない遅春の四月六日午後十一時二十分、ついに息をひきとった。手術のため最後は坊主頭であった。

息子の林成年はいう。「世間がこしらえた二枚目ではなく、自分のものをつくるには、父は〝若死した〟と思っているかも知れません」またいう。「父は人生も芝居も、幕切れを大切にしていました」

芝居はともかく、人生の幕切れのほうは、彼の願い通りにいったというべきであろう。とはいえ、長谷川一夫は、昭和全期を通じてみれば最大の人気俳優――ただし女性ファンばかりだが――であったといえる。七十半ばまで、大劇場の舞台を一人でもたせたなどいう役者は彼だけだろう。

しかし国家は生前これを遇すること甚だ薄かったので、この点コンプレックスを持っていた息子や娘たちは、ひとたび父が死ぬや、全新聞が第一面にこれを報じ、NHKテレビもただちに特別番組を放送したことに驚き、かつよろこんだ。

七十七歳で死んだ人々

地上最大の当然事——他人の死。
地上最大の意外事——自分の死。
——山田風太郎——

ハイドン（一七三二——一八〇九）

一八〇五年一月のある朝、ハイドンは快適な気分で朝食のテーブルについていて、ふと朝刊に眼を落すと「ヨーゼフ・ハイドン死す」という見出しの下に「深い悲しみをもって、われわれは、昨日ヨーゼフ・ハイドンが七十三歳の高齢をもって安らかに永眠されたことをお伝えする」という記事が出ていた。

ハイドンは立腹して抗議を申し込み、新聞社はこの誤報を陳謝した。

それから四年後の一八〇九年、ナポレオン軍が破竹の勢いでオーストリアに侵入し、五月十日の夜、シェーンブルンに達したとき、そこから半里離れた家で、老いたるハイドンは、こんどはほんとうに死の床にあった。

スタンダールは書いている。

「翌朝千五百発の大砲が彼の家から二百歩のそばで発射された。彼があれほど愛したウィーンは攻撃されていた。四つの砲弾が彼の家のすぐそばに落ちた。（中略）五月二十六日には、著しい力の減退が認められた。しかし彼は無理にその身体をピアノの傍に運ばせ、残った力を集めて三度歌った。

神よ、フランス皇帝を救い給え。

これは白鳥の歌であった。ピアノの前で彼はすぐに昏睡状態に落ちた。そして五月三十一日の朝に死んだ」（スタンダール『ハイドン』大岡昇平訳）

しかし、さすがにフランス軍は、ベートーヴェンの師でもあったこの「交響楽の父」に敬意を表して、その臨終の二日間にわたってハイドンの家の前を通過することを禁じたといわれる。

鳥居耀蔵（一七九六——一八七三）

いわゆる天保の改革をやった水野越前守の匕首となり、頑冥強烈な洋学ぎらいから、幕府目付また江戸南町奉行として高島秋帆、渡辺崋山、高野長英らの英才を罪におとし、「天保の妖怪」と呼ばれた反動の化身鳥居耀蔵は、やがて水野が失脚すると彼もまた町奉行を免ぜられ、四国の丸亀藩に無期禁固に処せられた。弘化元年、彼が四十八歳のときである。

以来、嘉永、安政、万延、文久、元治、慶応と星霜をけみし、幽閉足かけ二十四年、六帖一間の座敷牢の格子の外に投げた枇杷の実が生えていつのまにか大樹となったという。

明治元年十月、ようやく禁を解かれたが、

「その令に接したれども容易に動かず、拙者は罪ありて幕府より当家に預けられたるものなり。徳川家の命によらざれば寸歩も進退を私になすべからずといいて動かず。京より命ありてようやく丸亀を去る。時に七十余歳の高齢なれども強健にして衰えず、木綿紋付の服に袴を着し、厳然たる町奉行の威を具えたり。

頭髪雪をいただけども威容少しも昔に減ぜず、傲然として大言して曰く、昔、予、官家のために蛮夷と近づかば必ず災害をなすと論ぜり。しかも聴かれずして今日の変となる。今はたこれを如何せんと。

勝伯賞して曰く、旗本八万騎中にかくのごとき人を見ず、また一丈夫というべしと」（戸川残花編『旧幕府』）

いったん東京に帰ったが、明治三年彼の生家たる元幕府儒官林家を頼って駿府に移った。

彼には弘化二年丸亀流謫の年からつけている日記があって（後に子孫の鳥居正博はこれを「鳥居甲斐晩年日録」と名づけた）明治五年七十六歳にして、みずから「壮年の頃は格別肥大、当時は老羸、耳目未だ衰弱せず」と記している。いま年はとったが、耳も遠くなく眼も老眼ではないと誇っているのである。

しかしこの年ごろから、胸痛や足のむくみを訴える記述が多い。心臓と腎臓を病みはじめたのである。そして翌六年八月十五日「澄清、暑さ堪え難し」の記述を最後に、十月三日に死んだ。

彼は最後まで、自分は強硬に攘夷を唱えたから幕府が持てあまして流謫したのだ、と信じていて、天保改革の失敗の責任や、崋山などを窮死させた罪など、頭の隅にも意識していなかったようだ。死んでも反省しない男の亀鑑。

河竹黙阿弥（一八一六——一八九三）

「おれの家なんざァ芝居にゃ書けねえなあ」と黙阿弥が苦笑した通り、彼の家庭は波一つ立たない平和で幸福な家庭であった。とくに七十を過ぎてからは、妻が子女を集めて、「余命のほども計り知られないのだから、いっそう心を尽して仕えよう」とひそかに申し合わせたので、家内中は黙阿弥を家人の形容によれば手車にのせてほいほいと、言わないばかりの待遇をした。

明治二十五年四月のある日、彼は娘のお糸に、「おれは来年ゆくから、そのつもりでいてくれろ」と、いった。

何事にも用意周到な彼は、毎年元旦ごとに遺言状を書き改めるのを常としていたが、明治二十六年の元旦もそれを書き、二日後の三日、朝食後ふと左の手さきが動かなくなった。軽い脳溢血を起したのである。

以来彼は床につき、しかし別に苦痛はなく、脚本のアイデアを話したり、替唄をつくったりして愉しんでいたが、二十二日午前九時ごろ、「きょうはいよいよゆくぜ。午後まではもつめえ」といい、念仏を唱え出し、午後四時過ぎ、眠るように息をひきとった。真に珍らしい大往生であった。

ロダン（一八四〇——一九一七）

四十歳ごろまで職人仕事に埋もれていたオーギュスト・ロダンは、このころ以後、「カレーの市民」「接吻」「バルザック」「地獄の門」（例の「考える人」はこの中の群像の一つである）等の衝撃的作品で、フランスの誇る大彫刻家として、みるみる富と名声の世界に昇った。

前半生、社交的に不器用で、孤独で、寡黙な野人であったロダンも、晩年に近づくに従って、さまざまな勲章や名誉職につつまれ、日常生活においても取巻きたちのお世辞や色事に居心地よげにひたっている観があった。

中年から彼は美と天才をかねそなえた女弟子カミーユ・クローデールを愛人とする。

しかし、七十歳近いロダンを、一九一〇年（明治四十三年）鷗外は『花子』で次のように描く。

「オオギュスト・ロダンは為事場へ出て来た。（中略）

いくつかの台の上に、いくつかの礬土の塊がある。また外の台の上にはごつごつした大理石の塊もある。日光の下に種々の植物が華咲くように、同時にいくつかの為事を始めて、かわるがわる気の向いたのに手を着ける習慣になっているので、いくつかの作品が後れたり先だったりして、この人の手の下に、自然のように生長して行くのである。この人は恐るべき形の記憶を有している。その作品は手を動かさない間にも生長しているのである。この人は恐るべき意志の集中力を有している。為事に掛かった刹那に、もう数時間前から為事をし続けているような態度になることができるのである」

花子は一九〇六年ロダンが六十六歳のとき彼の前に現われた日本の踊り子で、以後彼はいくつかの花子の彫刻を生む。

ロダンは七十二歳のとき脳溢血のため、半身不随となった。七十六歳のときまた再発作を起した。

彼はしかしそれ以後も何かを描こうとしたが、人々は彼からペンも鉛筆もとりあげた。彼が妙な遺言書を書きはしないかと怖れたのである。

ロダンには、彼が二十代半ばから事実上の妻としていっしょに暮していた農民出身の女ローズがあった。二人の間には少し知能の足りないオーギュスト・グレという息子もあった。ロダンは晩年まで、この妻を世間の眼からかくそうとした。

一九一七年一月、彼はやっとこの糟糠のローズを正式に自分の妻として結婚式をあげた。その十五日後、七十三歳のローズは安らかに世を去った。

結局ロダンに捨てられたカミーユは、発狂して一九一三年以来精神病院にいれられていた。彼女の弟、詩人ポール・クローデールは、のちに駐日大使となる。

その年の十一月十二日、ロダンは高熱を発し、医者は肺充血（肺炎）と診断した。十七日午前四時、彼は臨終のときを迎えた。時あたかも第一次欧州大戦中であった。

犬養毅（一八五五——一九三二）

昭和七年五月十五日午後五時半、直接行動による国家改造を企図した陸海軍軍人九名が首相官邸に自動車で乗りつけ、表玄関と裏玄関からピストルを乱射しながら突入した。いわゆる「五・一五事件」である。

そのとき食堂にいた犬養に護衛巡査が急を告げたが、犬養は「そいつたちに会おう。話せばわかる」と、首をふって逃げなかった。そして、乱入して来た将校たちに、議会で弥次を制するときのように右手を上下に動かしながら、「待て、撃つのはいつでも撃てる。あっちへ行って話を聞こう」

といい、懐手をしたまま、無造作に別の和室に案内した。犬養は床の間を背にして坐り、まわりをとりかこんで立つ将校たちを見まわして、「靴くらいぬいだらどうじゃ」と叱り、卓上の煙草入れから敷島を一本とり、将校たちにもすすめる動作をした。このとき三上卓中尉が、

「われわれが何のために来たか判るだろう。いい残すことはないか」

と、いった。犬養はうなずいて、両手をテーブルについたまま何かを話し出そうとした。その刹那山岸宏中尉が、「問答無用、撃て！」とさけび、三上中尉と他の一人の銃口が火を噴いた。犬養は前につっ伏した。将校たちは駆け足で退去した。

そのあと女中が駆けこんでみると、卓上の血の海に犬養は血まみれの頭部を伏せていたが、女中に、右手につまんだままの煙草に火をつけるように命じ、

「いまの若い者をもういちど呼んで来い。話して聞かせることがある」

と、三度繰返していった。

それから四時間後、犬養は絶命した。彼は最後まで「痛い」という言葉をもらさなかった。

前日神戸から東京入りをして、東京駅で熱狂的歓迎を受けた初訪日のチャプリンは、その自伝に、この日犬養の息子の健と相撲を見物中凶報を聞き、二時間後、まだ血のたまっている首相官邸の現場を見た、とか、暗殺団はその時刻自分が官邸のお茶の会に招かれていることを想定して、アメリカと戦争を起すために自分をも犬養もろとも殺す予定だった、と述べているが、果して事実かどうか。

——それはともかく、多年「清貧」で聞えていた犬養に、死後莫大な財産が残されていることを知って、世間は驚いた。犬養は決して財閥の走狗ではなかったが、しかし青年将校たちの決起は、まるきり見当はずれでもなかったのである。

出口王仁三郎（一八七一——一九四八）

「王仁三郎は、一介の農民から出発して、巨大な『新興類似宗教』皇道大本を率いる有数の指導者として大をなしたが、大日本帝国のトップレベルの支配層にとっては、しょせん異質で得体の知れない『怪物』であった」（村上重良『評伝出口王仁三郎』）

明治二十五年、京都府綾部で開教した大本教は、大正十年第一次の弾圧を受け、昭和十年十二月第二次の弾圧を受

けた。

検挙された教団関係者三千名余、綾部に築かれた「神苑」の殿閣で破壊されたもの二百四十余棟、「宗教」としては徳川初期のキリシタン弾圧にも匹敵する大弾圧であった。

教祖の王仁三郎も、第一審で、不敬罪、治安維持法違反に問われ、無期懲役の判決を受けたが、二審、大審院と控訴し、懲役五年の判決が確定したのは、敗戦後の昭和二十年九月八日のことであったが、十月十七日に大赦によって刑を免除された。彼はすでに七十四になっていた。

かつて大本教の新教典『霊界物語』を口述筆記するのに、一日あたり四百字詰原稿用紙に百枚というスピードで進め、詠んだ歌は生涯に八万首といわれ、最後の二年間に熱中した作陶は三千六百点という「超能力」（ただしある種の精神病者は、これに似た病状を示す）の持主王仁三郎は、十年前の弾圧により廃墟と化したままになっていた綾部の神苑の再建にとりかかり、みずから毎日現場で指揮をつづけたが、二十一年八月、脳溢血を起して病床についた。

その後病状は一進一退をつづけたのち、昭和二十三年一月十八日の朝から昏睡状態にはいり、十九日午前七時五十五分、波瀾万丈の生涯を終った。

シェーンベルク（一八七四——一九五一）

「十二音技法」を創案して二十世紀音楽の歴史に決定的な影響を与えたオーストリアの作曲家アーノルド・シェーンベルクは、ナチスに追われてアメリカに亡命し、カリフォルニアのハリウッドに住んだが、十三という数を異常に恐怖していた。

かねてから心臓が悪く、自分はきっと十三日に死ぬだろうと信じ、毎月十三日が来ると不安におびえ、十三日の夜は妻のゲルトルートがそばに坐って手を握っていてやらなくてはならないほどであった。

近くに住んでいた文豪トーマス・マン夫人カーチャによれば、一九五一年七月十三日の夜、シェーンベルク夫妻は、いつものように二人でじっと坐っていた。そして時計が午前零時になったので、シェーンベルクは安心して二階の寝室に上っていった。

妻のゲルトルートは台所にいって催眠用の飲物を作り、しばらくして寝室に上ってみると、シェーンベルクは倒れて死んでいた。

ゲルトルートはびっくりして寝室の時計を見た。すると、

その時計はまだ零時になっていなかった。階下の時計は何分か進んでいたのである。
なんだかO・ヘンリーか何かの小説のようだが、トーマス・マン夫人が書いているのだから、うそではあるまい。

五島慶太（一八八二——一九五九）

東急コンツェルンの総帥五島慶太は、太平洋戦争中の昭和十八年十二月、六十一歳のとき東条内閣の顧問となり、木造船の行政査察使としての過労のため腸疾患を起し、一カ月寝込むほどの大病を患ったが、それから十年目の昭和二十八年二月、箱書に筆をとっている途中ふるえ出し、以後半身不随になった。脳溢血であった。
彼は伊豆長岡で静養したが、見舞いに来た大学同窓の親友正力松太郎に、「仕事こそ健康のもとだ」と励まされて奮起し、症状が軽快するとともに以前にまさる事業の鬼となり、とくに西武の堤康次郎との間に、箱根伊豆の交通とレジャーの世界での争覇戦をくりひろげた。
彼は健康にはきわめて留意していた。
毎日、四時から五時の間に目ざめ、ラジオのニュースを聞いたあと起床し、一時間散歩し、そのあとで四百匁（約一・五キロ）の樫の木刀を百五十回振り、先祖の霊に祈念した。午前中は東急関係の訪問客の報告を聞いたり裁断を下したりして、十二時に十品前後の朝食兼昼食をとる。午後、二時間昼寝したあと、客に会ったり、東急の会議に出た。そして夜は、一週に四日は新喜楽その他の宴会に出た。晩年まで大食漢で、うなぎ、てんぷらなどのあぶらこいものが好物であった。芸者を愛し、「若い女といっしょにいるとホルモンの分泌がよくなり、運動するのと同じ効果がある」という信念を持っていた。帰宅後、入浴して、書類を見、十時半から十一時までに床についた。
昭和三十四年五月二十一日、日課の朝の散歩に出かけようとして、急に右足が冷えるといい出し、また軽いめまい症状を起した。持病の糖尿病による血行障害のためであった。
しかし、医師を呼んで症状が軽快すると、すぐにお供をつれて、伊豆や料亭に出かけた。が、二十八日に至り、こんどは胸痛を訴え、狭心症のおそれがあると診断されてはじめて正式に床につき、医師団がつききりで治療にあたることになった。
彼は医者に、「先生、私はいま、方々で、たくさんケンカしているので……」とか、「足なら一本くらい、なくなってもかまわないが……」といった。まだやらなければならない事業が山積しているのでよろしく頼む、という訴えであり、また彼の衰えぬ闘志の現われであった。

六月四日の朝から、右の足頸が痛むと騒ぎ出した。「熔鉱炉だ。千五百度だ」「熱い、熱い、人間もけだものも、何もかもぶんなぐってやりたい熱さだ」と、夜中一睡もせず彼はわめきつづけた。今清盛の悩乱ぶりであった。血栓がつまったのだ。
医師団が足の切断を相談しはじめると、こんどは冷たいといい出し、何枚も蒲団を重ねさせ、その中に湯たんぽ、電熱器をいれさせた。そのあとにこんどは、本人にいわせると「いやーな感じ」のしびれが到来した。
東急では、重役、秘書らで四十人を越える看護団を組織し、五島が苦痛のため眠れないというと、夜でも彼をかごに乗せて、数人でかついで庭に出て、みなが団扇であおぎながら練り歩いて忠節を競った。五島はかごの中から、「馬鹿者ども、おれの苦痛がわかるか」とどなりつけた。
七月十二日、彼はこの世田谷区上野毛の高台の自邸から、二子玉川の花火大会を見ながら、「これが最後の花火だな」と、つぶやいた。
しかし彼は、これ以外、病中いちども「死ぬ」とか、「もうだめだ」とかいうような言葉は吐かなかった。後継者の昇に「遺言」も残さなかった。彼は死ぬことなど考えてもいないようであった。
八月にはいる前後から病状やや軽快し、四日には、ある釣師から贈られたガラスのステッキをついて、柱から柱へ、歩く練習をはじめたほどであった。
しかし、その翌日から彼は昏睡状態におちいった。
そのとき、彼が昔寵愛した京都の料亭「中はな」の女将中島ハナが見舞いに来た。五島は昏睡からさめていたが、口はきけなかった。眼でハナに扇子をよこせといい、握らせると、その扇子で彼女の身体のあちこちにふれ、そのうち手に若干の力が復原して来たと見えて、顔すり寄せるハナの頬や唇にさわったり、襟もとから手をいれようとしたり、はては抱きしめたいような表情を示した。しかし彼はまたすぐに昏睡におちいった。
それ以来、十日間眠りつづけた。ときどき目ざめて、枕頭の春子、昇らの子を見るとコクリとうなずいたが、また昏々と眠りにおちた。血圧は次第に降下していったが、彼は最後まで酸素吸入器を吸おうとする意志だけは失わなかった。
八月十四日午前二時二十五分、やっと五島慶太の息はと

まった。外は嵐の夜であった。

最後を看取った人々は、死の直前病人の唇をしめしたオールド・パーをあけて飲み、五島の好んだ「木更津音頭」のレコードをかけたが、そこにはかえって大きな空虚がひろがるばかりであった。（三鬼陽之助『五島慶太の臨終』より要約）

広津和郎（一八九一――一九六八）

六十歳を越えてから「松川裁判」批判のために闘った作家広津和郎は、昭和四十三年九月十日、国立劇場で鴈治郎や扇雀の「双蝶々曲輪日記」を観劇するほど元気であったが、十二日の夜半、熱海の自宅で心臓発作を起した。

主治医は入院をすすめ、広津はいま身体を動かすことはよくないと思うといって抵抗したが、数日後朦朧状態におちいり、十六日熱海国立病院に入院した。

やがて、口のもつれ、痙攣、吐き気などの尿毒症の症状を起した。

「一度『ドストエフスキーが……』私の顔に眼を向けながら、そんなことを口にしたことがあった。父の脳裏をどんな思いがかけめぐっていたのだろう」

と、娘の桃子は記す。

「看護婦たちが用があり、私だけ枕元にいた短い時間、その頬に頬を寄せて、父が『好きだ』と告げる私の言葉に、一寸うなずき、ふとみせた、やさしい嬉しげな表情、まるで幼児のような純な、父の表情を眼にした瞬間、とめどなく溢れはじめた私の涙、そのあと、なにに向ってとも言い得ぬ腹立たしいものがこみあげてきて、

『どうしても助けてみせる』

と、医務室への廊下を踏む私を見て、向うから歩いてきた看護婦が、ぎょっとした表情をみせたが、そのときの私はよほど、すさまじい形相をしていたのだろう。

が、入院して六日目、九月二十一日の午前二時十分、父は息をひきとった」（広津桃子『父広津和郎』）

父の讃美者たる娘を持つ父は倖せなるかな。――その例は本『図巻』でも枚挙にいとまがないが、ふしぎに讃美者たる息子を持つ父は少ない。

徳川夢声（一八九四――一九七一）

昭和四十六年三月十八日、NHKスタジオ101で「放送記念日特集アンテナ半世紀」のビデオ収録が行われた。

ゲスト出演の徳川夢声は、車のままスタジオに運びこまれ、抱きかかえられるようにして下りて来た。

司会者の三国一朗は、まさか夢声の肉体がこの状態に立ち至っているとは夢にも知らなかったので驚いたが、夢声の顔色はきわめてよく元気そうであった。そしてにこやかに、

「三国さん、このごろは交通情報のほうを……」

と、話しかけた。夢声は何かかんちがいをしているようだった。三国はそれに気づいたが、「はい、このごろは交通情報をやっております」と答え、心中にこの調子で大丈夫だろうか、と心配になった。

しかし、やがて開始されたビデオ収録で、夢声は別人のようにしゃんとなり、一流の絶妙の間の話術を披露した。

（三国一朗『徳川夢声の世界』より）

しかし、これが徳川夢声の最後のテレビ出演となった。

それから約一週後の三月二十六日、夢声は左手が麻痺し、呂律があやしくなった。医者の来診で、軽い脳軟化症と診断された。

「脳軟化症とはねえ」と、夢声はもつれる舌でさびしげにつぶやいた。「ナサケないねえ」

彼は壮年時からガンと中気を怖れ、魔除けのおまじないに「含宙軒」と称していた。またその自伝に「若いときにいくら好い思いをしても、年をとってから半身不随で何年も苦しむのでは、差し引きゼロどころか、とても引き合わない人生ではあるまいか？」と書いたことがあった。

しかし彼はついに怖れていた中風にかかり、寝たきり生活にはいった。孫の話になるとサメザメと泣き、食事を運んでやっても、沈黙したきり口をつけないことが多くなった。

大小便はおむつを使用したが、その年の七月半ば、嫁の八重子がおむつを替えようとして、ペニスがひどくよごれているのに気づき、それを拭いてやった。夢声は「恐れ入りますなあ」と、テレたように笑った。

それから三日後、彼はペニスが痛むと訴え、医者から腎盂炎を起しているという診断を受け、二日後の七月二十二日、阿佐ヶ谷の河北病院に入院した。腎盂炎は膿尿をもらすのを症状とする。

七月の末、彼は八重子に手足の爪を切ってもらったあと、その手を眼の先に持っていってじっと眺めていた。八重子は、病人が自分の手をじっと見つめるようになると間もなく死ぬ、という話を思い出して、さりげなく「疲れますよ」といって、その手をとって下ろした。夢声は「ありが

とう」といい、ぽろりとひとしずく涙をこぼした。

それから三日目の八月一日午後零時二十分、肺炎のため息をひきとった。死の直前、妻の静枝に彼は、「おい、いい夫婦だったなあ」といったという。

フルシチョフ（一八九四――一九七一）

一九五三年、スターリンの死後、党の第一書記となったニキータ・フルシチョフは、いわゆる非スターリン化を推進し、五八年にはみずから首相も兼任して権勢をふるったが一九六四年十月十二日、ソチの別荘で、宇宙船で地球を回っている宇宙飛行士のコマロフ大佐と陽気な会話を交わし、「ものすごい歓迎会を用意して君の帰還を待っているよ」とさけんだ。

彼の別荘の電話線が切られて外部との連絡を一切断たれたのは、その日の午後であった。彼の外交と内政に不満なスースロフ、シェレーピンら中央委員会幹部がフルシチョフを解任する行動を開始したのである。

モスクワに呼ばれ、その地位を解任され、引退を強要されたフルシチョフは、それまで超人的な体力の持主として知られていたのに、以後いっぺんに、その孫が小学校の先生に「おじいさんはいま何をしているの？」と訊かれると、「おじいちゃんは毎日泣いてるよ」と答えたような老人に変った。

その後フルシチョフは回想録をものし、それは一九七〇年アメリカで出版された。党中央委員会はこれを偽造文書であると声明し、かつフルシチョフにもそのことを認める声明を出すように強要したが、彼はこれを拒否したといわれる。

また、かつて彼が昇進させてやり、いまは中央委員会書記となっていたキリレンコが彼を罵って、「あなたは、まだ恵まれすぎているようですな」といったのに対し、フルシチョフは、

「よろしい。君は私の別荘をとりあげることは出来る。私の恩給をやめることも出来る。そうしたら私は乞食になって国中をまわろうじゃないか。民衆は私にきっと何かを恵んでくれるだろう。しかし、君が同じ運命になっても、彼らは何も恵んでくれまいがね」と、いったという。（ロイ・メドヴェージェフ『失脚後のフルシチョフ』）

その日、この問答後に、昂奮のためかフルシチョフは、最初の心臓発作を起して入院した。

その後いちど退院したがまた入院し、一九七一年九月十

一日午後に死んだ。

九月十三日、プラウダは死亡広告欄に、ただ簡単に「前党中央委員会第一書記、個人恩給生活者N・S・フルシチョフ」の名をのせただけで、その死を悼む一行のコメントもつけ加えなかった。

それまでのソ連歴代最高指導者で、存命中に解任されたのは彼だけであり、また死後クレムリン墓地でなく一般庶民の墓地に入れられたのも彼だけであった。フルシチョフはあけっぱなしの野人性で、「陽気なニキータ」として世界的には一番人気を博したが、指導者にカリスマを必要とする「ロシア」では、彼の自負にもかかわらず、そういうタイプは必ずしも尊敬の的とはならなかったのである。

吉屋信子（一八九六――一九七三）

七十を越えてから『徳川の夫人たち』『女人平家』などの歴史小説で人気作家として復活した吉屋信子は、昭和四十六年ごろから身体の衰弱が目立ち、六月に診察を受けた。すでに『女人平家』の執筆が、下腹部の痛みと悪戦苦闘の中の仕事であった。

医者は秘書の門馬千代だけに、直腸ガンであること、すでに手術不可能の状態にあることを告げたが、千代は信子には秘した。

四十七年四月、同じ鎌倉に住む三歳年下の川端康成が自殺し、信子はショックを受けたらしく、以後病床について憔悴が甚だしくなった。それでも母校栃木高女に句碑が立つことになり、彼女は病床で、

秋灯机の上の幾山河

という句を作り、その句碑の除幕式に出席したいから、廊下を歩く練習をしたいといって千代を困らせた。

しかし四十八年にはいると、みずから日記に、

「1月1日、夜明け多量の便通でおびただしく、ピジャマの裾を汚すさわぎ。おどろく」

「1月13日、千子（千代のこと）とさんぽに出る。大海老のあたりで失禁の気配。帰宅後、千子用意したパンツ（防水）とガーゼを用いることにする。この下痢をなおさねば常人にあらず」

と記す状態になり、二月に鎌倉七里ヶ浜恵風病院に入院した。

医者からは何度もひそかに絶望を宣告されながら、彼女は持ちこたえた。本人はついにガンであることを知らされなかったが、いちど、「どうもね、私よくなって、もうい

ちど生きることは出来ないんじゃないかしら」と、ぽつんとつぶやいた。

しかし、千代はいう。

「信子さんはカンのいい人ですから、そりゃあもう、秘密を守るのに必死でした。でも、うすうすは気づいていたんだと思いますよ。遺言状を書きかえたりしておりましたもの。

それに、妙にさびしがりやになって、一ときも側から離したがりませんでした。信子さんと暮した五十年の歳月の中で、この一年間ほどつらく、悲しく、苦しい日々はありませんでした」

秘書門馬千代は、五十年に及び吉屋信子と同性愛の関係にあった。

その後、五月、六月と、安定剤や睡眠薬のせいでウトウトと睡眠状態がつづいたのち、七月十一日午前十一時、永眠した。

稲垣足穂（いながきたるほ）（一九〇〇――一九七七）

「僕の読者はまァ五百人くらいだろうが、しぼると二、三十人というところだ」と、みずから認めていた作家稲垣足穂が、『少年愛の美学』で、昭和四十四年、新潮社の第一回日本文学大賞を受賞したのには、選考委員三島由紀夫の熱心な推輓（すいばん）があった。その翌年三島が死んだとき、その生首（なまくび）がころがった新聞の写真を見て、足穂はいった。「実のところ三島の首は、生きているときから生首の感じがした」

つまり、身体とつながっていない、文壇の批評を計算した秀才文学に過ぎない、という意味だが、彼は三島のみならず、だれの文学も認めようとはしなかった。彼の口にかかると、文壇の諸大家ことごとくクソミソであった。

しかし、この受賞で彼はやや一般に知られ、編集者が京都の伏見桃山にある彼の家をしばしば訪れるようになった。以前からアル中だった足穂は、東京から訪問の連絡電話があると、そのとたんに夜昼ぶっ通しに酒を飲みはじめ、二日後に編集者が現われたときは、もうどうしようもない状態におちいっているありさまであった。彼は、シラフでは未知の人間に逢えない性格であったのだ。そして編集者が空しく帰ると、またそれを気にして、苦しみつつ酒を飲みつづけた。

さて、若いころから寡作でアル中で、窮迫その極に達していた彼を救ったのは、京都の西本願寺少女保護施設六華

園の保護主任篠原志代という女性であった。近くに住むユリイカ出版社主の伊達得夫から「少女五十人を救うより、一人の稲垣足穂を救ったほうが日本のためになります」といわれ、足穂を京都に連れて来て結婚したのである。昭和二十五年のことで、そのとき足穂は五十歳であった。

結婚後も足穂はひたすら酒を飲み、妻の志代のところに男客があるとヤキモチをやいてあばれ狂い、「お前のような低級な女と結婚したのはおれのまちがいだった」と罵倒した。その飲みっぷりは凄惨壮絶をきわめ、半死の状態になって病院にかつぎこまれたことが何度もあった。しかし志代は、このエゴイズムの肉塊のような夫に至純な童児性を認めて、嘆きながらよく面倒を見た。

その志代が昭和五十年子宮ガンの徴候を現わしたとき、苦痛の顔を見せると、酒がまずくなるといって隣室に追っぱらい、やがて彼女が入院しても、死ぬまで彼は一度も病院に足をむけなかった。やがて家に帰って来た妻の棺桶を横目で見ながら「あれは人の心の少しもわからん女だった。男が黙ってじっとひとりでいるような気持を、少しも理解出来ない女だった」といった。

しかし、その前後から足穂は酒も飲めなくなり、横たわっているばかりになった。貯金通帳を下にいれた蒲団の中で、ただ自分の著作だけを読みふけり、『少年愛の美学』や『一千一秒物語』の表紙は自分の手垢でよれよれになっていた。稲垣足穂の最大の愛読者は稲垣足穂自身であったのだ。

やがて彼もまたガンのため京都日赤病院に入院し、人工肛門をつける手術をしたときも「痛い」という言葉をいちどももらさなかったが、看護婦がうっかり「おじいさん」と呼ぶと、憤然として「稲垣といって下さい」といった。

そして昭和五十二年十月二十五日早朝に死んだ。弟子の折目博子は、足穂が死体となって帰って来た稲垣家を訪れて、そのデスマスクを見た。デスマスクは、人間離れした怖ろしい大魔王の顔容であった。（折目博子『虚空　稲垣足穂』より要約）

中野重治（なかのしげはる）（一九〇二――一九七九）

中野重治は、最後の数年、心臓病に耐えつつ『中野重治全集』の「うしろ書き」に精根をかたむけていた。この「うしろ書き」をあとで別に一冊にまとめようという企画があり、その表題を「わが生涯と文学」としようという提案に対し、「わが生涯というのは仕事をやり終えた人間の

いうことだ。僕はまだこれからなんだ」といった。

しかし、昭和五十四年五月三十一日の「平野謙を偲(しの)ぶ会」に出席した中野はいかにも息苦しげで、山口瞳が「医者を呼んだほうがいいのではあるまいか」と考えたくらいの体調に見えた。やがて中野は乾杯の音頭役を依頼され、ソロソロと演壇に歩いていって、「死んだ人に、その一周忌に酒を飲んで乾杯するのは、少しおかしいのではあるまいか」という意味のことを、まわりくどく論じて、一同を笑わせた。

六月十一日、評論家荒正人の葬儀に出た中野の姿はいよいよ衰えが甚だしかった。知人が、「元気でいて下さい」と励ますと、「僕はそういわれると困るんだ」といった。

七月にはいって、その顔色が異常に黄色いことに気づき、東京女子医大附属病院に入院し、つらい種々の検査に、「スターリン主義を思わせる」と悲鳴をあげ、また「精神力とは別に、肉体の限度というものがあるからね」といい、「しかし今日の検査に耐えられたのだから、明日も耐えられるだろう」といった。

検査の結果は胆嚢(たんのう)ガンで、しかもすでに肝臓に転移して手術不可能、ということであったが、この病名は最後まで本人には知らされなかった。

しかし佐多稲子はいう。

「今ははっきりと、中野さんは自身ががんであることを知っていた、と思わせられるのである。(中略)自身から決して自分の病名を問うことのなかったのは、むしろそれを知っているからであったろう。この態度は中野さんの他への優しさであり、自分へ向ける強さであるように思う。中野さんはそういう人であった」

暑さが盛りへ向うとともに、中野はみるみる衰え、八月二十四日午後三時ごろから昏睡状態におちいった。

四時過ぎ、病院のロビーに待っていた人々のうち、佐多稲子だけが病室に呼ばれた。

「『ねっ』

と原さん(中野夫人の女優原泉(はらせん))はベッドのそばに並んで掛けた私に、目で病人を指しながら、

『もう、意識はないらしいの』

と、云い、なお病人を見つめたままつづけた。

『きのうの夜中までは、紙を持ってこさせて、自分で何か書いたりしているんですよ。だけどその中で、死というのと、原、という字がそれらしく読める程度でね。私に何か云い残しときたかったんじゃない。……私、そのときいなかったの。昨夜、どうして泊まりになんか行ったんだろう』

原さんは、自分に対して怒るように顔を歪(ゆが)めた」(佐多稲子『夏の栞(しおり)』)

原泉は、病院の近くに宿をとって看護にあたっていたのである。

「『あなたは、とってもよくなすったわよ』

私は原さんに肩を寄せてそう云うしかない。

中野は絶えず、荒い息づかいを立てていた。その息づかいが、意識はもう無い、というのを私に実感させなかった。

(中略)

そして原さんは、そんな話の中で突然、あっ、と声を上げたのである。

『息が止まった』

叫びながら立つと、中野にかぶさるようにして、

『お父ちゃん、お父ちゃん、中野さぁん』

と、必死に呼びかける勢いで、中野の頰をぱたぱたと叩いた。

中野の息づかいはやんでいた。やんだ瞬間を私は知らなかった。原さんの鋭どくなっている神経が、まっ先にそれをとらえていた。

医師たちが馳けつけ、人工呼吸をするためにみんなは廊下に出された。原さんは病室を出たとたん、入口わきの壁に身体をもたせてずるずると腰を落とし、

『ああ、もうだめだァ』

と、いつもと違う太い声を発して顔を伏せた。私は彼女のそばにしゃがんだ。

みんなが病室へ呼ばれたのは、まもなくである。

『残念ながら、御臨終です。五時二十一分でした』」(同右書)

小田切秀雄は記す。

「かつてタタミの上では死ねないかも知れぬ、と見られていたこの作家が、タタミではないが病院のベッドの上で、一カ月にわたり、考えられる限りの治療と看護と家族その他の世話を受けて、生命の灯がしだいに燃えつきてゆくようにして、わたしたちのあいだから去っていった。なすべきことはなした、といったような、静かな死顔であった」

嵐寛寿郎(あらしかんじゅうろう)(一九〇三――一九八〇)

アラカンの「鞍馬天狗」は、昭和二年、二十四歳のときの「鞍馬天狗余聞・角兵衛獅子」にはじまり、昭和三十一年、五十三歳のときの「疾風！鞍馬天狗」に終った。そ

の数四十本。原作者の大仏次郎はチャンバラばかりやるアラカンの鞍馬天狗に大不満であったが、しかしアラカン以外の俳優による鞍馬天狗はすべて成功しなかった。

颯爽たる鞍馬天狗を演じながら、しかしアラカンははじめから人生破滅型の俳優であった。

「剣をとって立ちまわれば、これほどみごとな役者はいない。ところが、世間とのつきあい、実生活ときた日には、これほど不器用に立ちまわる人も、ちょっとまれやないか。寛プロ時代から一貫して、この人は損のいく方へ、損のいく方へと立ちまわって来たんや。破産したり、ルンペンしたり、悪い奴に欺されたり、せっかく籍を入れてやった芸者に離婚訴訟起されて追ン出されたり、かせいだ金は惚れた女やら、一緒に仕事した連中やらにことごとくくれてやって、人生七十無一文」(マキノ雅弘・談)

アラカンの最後の十三年は、四十も若い、五度目とか七度目とかいわれる妻との二人暮しで、彼が晩年、前半生とは別人のようなオカシ味のある脇役として映画やテレビに出たのも、その若い妻に少しでも金を残してやろうとする心からであったといわれるが、その妻とも、死ぬ二カ月前に離婚した。

そのいきさつは、映画の上での快男児、実生活での怪男児とはおよそ縁遠いわびしさに満ちたものであった。

昭和五十五年夏、彼は脳血栓で倒れ、自宅で静養中、八月十四日、妻の久子が故郷の姉一家を招き、外へ夕食に連れ出した。トイレに立つにも妻の手をかりなければならないアラカンは、それでイライラした。みなが帰宅してからアラカンは、「ここは旅館やないぞ」とイヤミをいい、口論の果てに妻に「そんならお前も出てゆけ」とどなったあげく、自分のほうからヨタヨタと出ていった。その家は、京都嵐山の、二階建てだが長屋の一戸であった。

この騒ぎに呆れはてた久子と姉一家もそのあとから家を出て、ゆくさきもないままに名神高速の大津インターで車中一夜を過すという哀れな始末になった。この事件で、十三年間の夫婦の縁はあっけなく切れた。人間の世界には、腹立ちまぎれの一語が決定的な破局を呼ぶことがある。

以後彼は、五十九になる従妹の世話を受ける身となったが、九月に心不全を起し、十月二十一日午後一時ごろふたたび発作を起し、午後七時十分に死んだ。

「女と別れるたびにスッテンテン、さるまたにシャツ一枚、車で逃げました。……」と、かつてひょうきんに語ったアラカンだが、最後の妻は、妻のほうが身体一つで出てゆく始末となり、葬式には彼女はついに姿を見せなかった。映

画関係者もほとんど来ないわびしい葬式であった。

志村(しむら)　喬(たかし)　(一九〇五——一九八二)

そのアラカンの「右門捕物帖」で、戦前はひきたて役のアバタの敬四郎をしばしば務め、たんなる笑わせ役ではなく独特の持味を見せたものの、あくまで脇役であった志村喬は、戦後黒沢明の「酔いどれ天使」で準主役に抜擢されて以来、「生きる」「七人の侍」などの黒沢映画で、いぶし銀のような重厚な演技を見せ、日本映画史上の名優の一人という印象を残した。

彼は昭和五十六年、前立腺肥大の手術を受けて以来経過思わしからず、それでも黒沢映画「影武者」には老武将として出演したが、その後肺気腫(病院発表)におかされた。

彼の扮した「生きる」の主人公は、雪のふる公園のブランコで哀切な死を待つが、「近代医学」はそんな静かな死を許さず、例によって例のごとき医学的拷問を与えた。

「もう無残とも思える治療でさぞつらかったろうと思います」

と、親交のあった本多猪四郎監督のきみ夫人は語る。

近代は、死に対するさまざまの恐怖に、病院の「治療」の恐怖を加えた。

志村ははでな交際を好まず、晩年は夫人と二人でひっそりとマンションに暮していたが、本多夫人はいう。

「仲のいい御夫婦ですがお子さんがいらっしゃらない。それで奥さんを残してゆかれるのがさぞつらかったのでしょう。もう最後の最後まで、ウツロになりながら、眼は奥さんの姿を追っていました。最後は手をとり合い、うなずき合っていました」

昭和五十七年二月十一日午後十時四十分に死亡した。かつてのアバ敬は、死ぬ年齢までむっつり右門につき合ったのである。

エラリー・クイーン　その2　(一九〇五——一九八二)

クイーンの半身の一、フレデリック・ダネイは、一九七一年半身マンフレッド・B・リーが死んだあと、「エラリー・クイーンズ・ミステリ・マガジン」の編集とアンソロジーの編集で十年を過し、その間日本に来たりしたが、実作としてはついに一篇の推理小説も発表せず、一九八二年九月三日、ニューヨーク郊外のホワイト・ブレーンズ病院

で死去した。

病名は発表されなかった。で、いまなお病名は不明である。それはのちに明らかになるだろうが、彼かその遺族かが病名を隠そうとした事実は変らない。

二十世紀後半、一般にアメリカでも日本でも、奇妙に死者の病名をあいまいにする傾向が生じたようだ。おそらくそれは、ガンだけが不治の病気となったために、ガンを隠すためにほかの病名も隠さざるを得なくなったせいと思われる。

チェスタートン「一枚の木の葉を隠すなら森の中に隠せ」

近代医学「ガンを隠すなら他の病名もすべて隠せ」

もっともダネイがガンであったかどうかは別である。

七十八歳で死んだ人々

人間は青年で完成し、老いるに従って未完成になってゆき、死に至って無となるのだ。

——山田風太郎——

ガリレオ（一五六四——一六四二）

みずから作った望遠鏡で天体を観測し、コペルニクスの地動説を証明したガリレオ・ガリレイは、一六三三年、六十九歳のとき、その説が聖書を冒瀆（ぼうとく）するという罪に問われ、著述も出版も禁じられ、終身監禁状態になった。

「それでも地球は動く」といったというのは伝説で、彼はこの裁判に服したのだが、しかしこの伝説は彼の心中を表現したものであった。

そのころ彼は、最愛の娘マリア・チェレステを失い、さらに緑内障で失明した。しかし盲目の彼は弟子に口述して「落下の法則」「振子の定律」などを収めた著書を、ひそかにライデンで出版した。

一六四一年十一月、彼は熱病にかかり、翌年一月八日に死んだが、なお教会の迫害はつづき、約百年間その遺体は棺に納められたまま教会の地下室に置かれ、墓をたてることは許されなかった。

ヴァチカンが教会側の非を認め、ガリレオに謝罪したのは、右の宗教裁判から三百五十年後の一九八三年、ローマ法王ヨハネ・パウロ二世によってであった。むろん、ガリレオの知ったことではない。

スウィフト（一六六七——一七四五）

五十代で『ガリヴァ旅行記』を書いた司祭ジョナサン・スウィフトは、六十代の半ばから、持病のメニエル氏症候群——目まい、難聴、頭痛などに悩み、厭人癖（えんじんへき）と孤独感にさいなまれていた。

老いたるスウィフトは、散歩中、てっぺんのほうから枯れかかった老木を見て、あれがおれだ、とつぶやいた。

一七四二年、七十五歳で彼は完全な痴呆状態におちいり、専門医によって精神鑑定され、もはやすべてにおいて「責任能力なし」と診断された。さらに言語を発することも困難になり、一七四四年の四月のある日、七十七歳の彼は召使いを呼んで何か命じようとしたが言葉が出ず、苦悶ののち、

「阿呆だ、おれは」

という一語を発したきり、あと唖になってしまった。

そして一七四五年十月十九日、枯木のごとく死んだ。彼は、自分が『ガリヴァ旅行記』で描き出した、老醜無惨の姿でただいたずらに長生きするラグナグ国の不死人間ストラルドブラグさながらに死んだのである。

サッカレーはいう。「なんという怖ろしい崩壊と廃墟。それは大英帝国の没落を思わせる」

狂気説ないし梅毒説もあって、死後ただちに解剖されたのみならず、のち二度まで掘り出されて調査研究の対象になったが、死因はただ「老衰」であったというのが定説になっている。

グリム・兄（一七八五――一八六三）

弟のウィルヘルム・グリムと共同して『グリム童話集』を著わした兄ヤーコプ・グリムは、小柄でやせていたが、弟よりも強健で、古武士のごとき剛毅な精神の持主で、生涯孜々としてこれも弟と共同の『ドイツ語辞典』の完成に努めた。

一八五九年、弟に先立たれて彼は「私の半身が死んだ」といったが、すぐに打撃から立ち直り、それ以前と同じ研究生活に戻った。

彼は一生独身で通した。一見とっつきにくい学者肌のヤーコプは、しかしやさしい魂をも持っていた。

死の前年の一八六二年（文久二年）、日本の遣欧使節団の中の三人が、ベルリンのヤーコプを訪ね、単調な研究生活を送っていたヤーコプをよろこばせたが、この三人がだれであったか不明である。

ヤーコプは、一八六三年の秋、小旅行をし、元気で帰って来たが、そのあと風邪をひき、肝臓をわずらった。それでもベッドで読書をやめなかった。夜は眠れず、毎夜窓ぎわに腰かけて星を見た。九月のある夜、窓ぎわに腰をかけたとき、発作を起して、亡弟の妻ドルトヒェンの腕の中に倒れ、右半身不随となった。

九月二十日、弟の写真を右手にとって、眼におしつけるようにして眺め、しばらくしてそれをベッドに落し、まもなく死んだ。

イプセン（一八二八――一九〇六）

『人形の家』『ペール・ギュント』などで知られるノルウェーの文豪イプセンは、一九〇〇年七十二歳のとき、第一回卒中発作に襲われて右半身が不随となった。

療養の結果いくらか回復したが、一九〇一年第二回の発作が来て、散歩はおろか手紙も書けない状態になった。一九〇三年、第三回の発作が来たときは、新聞は死亡記事の用意をしたほどであったが、彼はまだ生存をつづけた。しかし翌年から失語症におちいった。

一九〇六年五月ごろから、衰弱が次第に加わり、月半ばから昏睡状態がつづくようになった。

二十二日の昼ごろ眼をさまし、付添いの看護婦が家人に、少しよくなられました、というと、ベッドから不自由な口でただ一言「とんでもない」と、いった。

翌日の午前二時半に死んだ。ノルウェー政府は国葬とした。

ルノワール（一八四一――一九一九）

一八七九年夏、三十八歳のときルノワールは、驟雨のあと自転車で出かけて水たまりに転び、石の上に倒れて右腕を折った。そのときは彼は大したことではないと思っていたが、この骨折が彼の後半生を苦しめた難病のもととなった。

以来、その後遺症として起った変形リューマチは、間歇的に烈しい発作を起したり、あるいは陰湿な痛みを持続させたりしながら、徐々に彼の右手を、さらに四肢を蝕んでいった。六十歳のころには、彼は歩くのに二本の杖を必要としなければならなくなった。

一九〇七年、ルノワールが六十六歳のころ、彼の胸像を作った彫刻家マイヨールはいう。「彼は口と呼べるようなものは持っていなかった。唇はダラリと垂れて、見るも無惨なありさまだった」

彼は、カーニュの二・五ヘクタールという宏大な土地のオリーヴに囲まれたコレット荘と呼ばれる家で、毎朝、折りたたみ寝台に寝かされたまま二階のアトリエに運びあげられ、エア・マットをしいた椅子に坐らせてもらう。パレットを膝においてもらい、厚手の包帯で包まれた人差指と親指の間に絵筆をさしはさんでもらう。そして描きはじめる。苦痛にゆがむ彼の手は、しかしカンヴァスの上に、寸分狂いのない豊麗な傑作を創り出してゆく。

ときどき戸外に運び出してもらうと、彼は「畜生、なんて美しいんだ！　くそっ、なんてこの世は美しいんだ！」とさけんだ。ルノワールの眼には、女も、子供も、風景も、ひたすらに美しい、光と色彩にあふれた絵の対象であったのだ。

彼はありとあらゆる療法を試みたが、病気は徐々に悪化していった。一九一二年ごろ彼はリューマチの名医として有名な医者の治療を受けた後、ある日実験的に歩かされた。と、数年間まったく歩けなかったルノワールは、一歩、一歩、めざす椅子までたどりついた。みんな拍手したが、彼はいった。「ありがとう、先生。先生は超一流です。しかし私は歩くのはあきらめました。だって、歩くことにこんなに気力を使ってしまっては、もう絵を描く気力がなくなってしまいますからね。私は歩くことより、絵を描きたいんですよ！」

日本の梅原竜三郎が師事したのは、このころのルノワールである。
「ルノワールは二本の松葉杖に引懸(ひっかか)ったぼろ服」に見える、と梅原は書いている。しかし「ぼろ服は荘厳なる首をのせて居た。就中(なかんずく)美しく強き眼を持っている」
一九一八年三月、七十七歳のルノワールを訪ねた画商ルネ・ジャンペルは書いている。
「眼の前にあるのは、ボロキレのような人間だった。彼は持ちあげられ、倒れないように両肩をささえられながら、肘掛椅子に移された。だが、彼の曲ったままの膝はのびなかった。彼の身体は、どこも直角であった。鉛の兵隊の中の落馬した騎兵のような、ひとかたまりの物体だった。
椅子に腰かけた姿も悲惨だった。一方の脚は包帯でグルグル巻きにされていたが、両腕もテープで巻かれ、その指は、羽根をむしられ縄でくくられ、焼き串で刺される寸前の鶏の脚みたいだった。
この人間のていをなさぬものが、私の言葉に答えることが出来るだろうか。まだ少しは意識が残っているのだろうか」
ジャンペルはおそるおそるありきたりの挨拶を口にした。ところがこの「人間のていをなさぬもの」に生命力が充ち満ちていることを知って彼は愕然とした。
実にルノワールは後半生リューマチに苦しみつつ、とくに最後の二十年、時には手に絵筆をしばりつけてまでして、「あまりにも描くよろこびにみちあふれた絵」を描きつづけたのである。
一九一九年十二月二日も、ふだんと同じように静物画を描き終え、料理女のルイーズが指の間から絵筆をぬきとってやった。前日ちょっと発熱したために呼ばれ、その日も念のため往診に来ていた医者が、狩猟で山しぎを二羽撃ちとめた話をするのを、彼は興味深げに聞いていた。
午後七時ごろ、彼は紙と鉛筆を求めた。が、それが与えられる前に、椅子で眠りにおちた。
八時ごろ、いきなり彼は、「パレットをよこしなさい。この二羽の山しぎは……」といった。それはうわごとで、彼の眼は皿(さら)の上の幻の山しぎを見ているらしかった。「山しぎの位置を変えてくれ、早く、絵具を……パレットを私によこしてくれ。……」
深夜になって落ちつきはじめた。午前二時に、ルノワールはしずかに息をひきとった。

イーストマン（一八五四――一九三二）

二十四歳のときコダック写真機を発明し、イーストマン・コダック会社を作って巨富を築いたジョージ・イーストマンは、七十六歳のとき脊髄下部の硬化症にかかり、歩行困難となり、さらに病気は進行した。
そして七十八歳の三月十四日、自邸の寝室で拳銃自殺をとげた。
テーブルの上の遺書には、「私の仕事は終った。なぜ待つ必要があろうか?」と、あった。
同じテーブルに裁縫箱が置いてあり、中には、一生独身であった彼を五十過ぎまで世話をして死んだ母親の手袋が、大事そうにいれてあった。

嘉納治五郎(かのうじごろう)（一八六〇――一九三八）

講道館の創始者嘉納治五郎は、第十二回オリンピック（昭和十五年度）の日本開催に奔走し、昭和十三年春、カイロで開かれたオリンピック委員会に出席し、ついにその誘致に成功した。当時日本は国際連盟から脱退しており、また日中事変を起していたので国際世論はきびしく、これに当っての彼の心労はひとかたならぬものがあった。
彼がカイロで熱弁をふるっているころ、日本の議会では政友会の若い代議士河野一郎が、「かくのごとき時局にオリンピックとは何事ぞ。オリンピックは中止すべきではないか」と、近衛首相に迫っていた。
嘉納はその帰途アメリカに渡り、シアトルから氷川丸に乗船した。
氷川丸船長鉋内(かんなうち)晴麿の五月二十五日付の報告。
「――御乗船までのお忙がしき御旅行――ニューヨークより旅客機にて米大陸横断シヤトルへ、シヤトルより自動車にてバンクーバーへ――而(しか)して各地にて待設(まちもう)けたる連日の歓迎会等にて、おそらく御保養の暇なかりしものと察せられ候。さすがお元気の先生も御疲労の色蔽(おお)うべくもなく、物憂(う)げに見受けられ候。
加うるに、カイロ以来、咽喉を痛められし由にて、未だ軽微の咳と喀痰とあり、毎日二回吸入を続けられ候。
五月一日、突如御発熱あり、御食欲も減退致し候を以(もっ)て、お手当をなし、安臥をお勧め致し候。爾後船医始め看護手給仕等、日夜手当と看護に全力を尽し候も、病勢衰うるに至らず、急性肺炎を併発するに至り候。

御病臥中は、かつて御苦痛を訴えられしことなく、多く安眠を続けられ、注射を施す際も平然として微動もなされず、常に静かに横臥致されおり候。
高熱中にもオリンピック大会のことは脳裏を離れざるものの如く、無線電話にて委員と打合せ致したし等と申され、三日の夜の如きは『いかなる社会生活にも耐え得る気力が出て来た』と申され、起床したき旨、看護の者に申し出でられたる由に候。その気力の旺盛なるには驚嘆のほかこれなく候。
四日午前四時半に至り、危篤に陥られ候が、何ら御苦痛の色も見えず、静かに安らかに、午前六時三十三分、眠るが如く御逝去遊ばされ候。
その温顔は御平素と異なるところなく、実に安心立命の境地に達せられたる士の臨終はかくのごときものかと、目のあたりに拝せる我々は、悲しみの中にも無限の教えを受け、感動いたしたる次第に御座候」
氷川丸が横浜に到着する二日前の太平洋上であった。遺体は氷詰めにされて故国に帰った。
嘉納の死後わずか七十二日目の七月十五日、近衛内閣はオリンピックの東京大会返上を決定発表した。

ロマン・ロラン（一八六六——一九四四）

ロマン・ロランは一九二二年、五十六のときから十五年間、スイスに住んでいた。生来呼吸器の弱かった彼にとって、清澄なスイスは健康によく、彼はここで『魅せられたる魂』その他を書いた。
しかし、一九三八年、七十二歳になったとき、愛する祖国フランスで余生を送りたいという願望にかられ、フランスのヴェズレーという町に小さな土地を買い、二度目の妻と妹とともに帰って来たが、翌年第二次世界大戦が起り、四〇年六月にはヴェズレーも独軍の占領下におかれるに至った。彼はなおベートーヴェンの研究その他の著作にふけったが、老衰の度は急速に深まった。
人間の自由と反ファシズムを高唱するロランが、奇蹟的に独軍の逮捕をまぬがれたことについて、あとで多くの議論が交されたが、その理由はドイツの一将校がロランの愛読者であったことによるといわれる。それはロランの代表作『ジャン・クリストフ』がドイツ人であるという設定によるものであったかも知れない。
一九四四年八月、フランスは解放された。その十月、パ

リのソ連大使館で革命記念の祝宴がひらかれ、ロランも招待されてこれに出席したのが彼の最後の外出になった。
十二月三十日、彼はヴェズレーの隠栖地で死んだ。

村岡伊平次（一八六七——一九四五）

長崎県島原で生まれた村岡伊平次は、明治十八年、十八歳で香港に渡って以来、日本の女を「からゆきさん」（中国・東南アジア向けの日本の売春婦）として売り飛ばす商売をはじめた。
日本の前科者を集め、「皆さんが日本国民として、生まれながら国家にあだをし、国民性を失い、身を持ちくずして尊い先祖の墓に足を踏むことさえでけん身のありさまを不憫に思い、あなたがたを国民の一人として、国家百年の事業にたずさわらせ、改めて真人間になしたいゆえ、この先いかなる業をもいとわず努めて下さい」と演説し、天皇陛下万歳を三唱させて、日本各地から貧しい娘たちを誘拐させた。
そして、集めた女たちを手当り次第に犯し、売春婦に売り飛ばし、「あなたがたは、兵隊を作る器械をこわしておる。国家を無視しておる。婦道の違反者である。犬にも劣った人間なり。これを回復する道は、金をためて故郷に土地を買い、模範的女性となることである」と激励した。
彼自身、こうして売り飛ばした女は数万人に上った、といい、それらの女が日本へ送金して「国家経済」に奉仕したことは莫大なものがある、とそり返った。
しかし、昭和十二年、のちに『村岡伊平次自伝』の著者となる河合譲に台湾で逢ったとき、フィリピンのレガスピーに住んでいて、そこから来た七十歳の伊平次は、「可哀そうな女たちのことを思い出しますと、わたしは地獄へいっても死に切れません」と、眼に涙をためて懺悔した。しかしそれは、老いの感傷に過ぎなかったろう。
この天醜爛漫の「人買い伊平次」には天罰も下らず、太平洋戦争前にフィリピンをひきあげ、天草の富岡町で、昭和二十年三月二十日、敗戦も知らず七十八歳の大往生をとげた。

小泉信三（一八八八——一九六六）

「父は晩年、というより、亡くなる前日まで活気に溢れていた。青年らしい老人で、七十八歳という年を人に感じさせず、自分も忘れているかのようだった」と、次女のタエ

は書いている。

皇太子の師父で美智子妃殿下との仲人となった小泉信三は、昭和四十一年四月二十九日の天皇誕生日に宮中に拝賀にゆき、午後夫婦で京都に旅立った。

その翌日、タエの夫準蔵が膵臓炎を起して入院した。長女の加代は、迷った末、五月一日朝、京都の父母にそのことを電話で告げた。

電話に出た信三は、加代の話を聞いているうち、突然、

「ああ、どうかどうか」

といって、絶句した。――どうかどうか、たいしたことのないように、という意味であったろう。

「兄の戦死の報が入った時、やはり私が父に知らせた。

『そうか、すぐ帰る』

と父は言っただけだった」

と、加代は記す。昭和十七年十二月、信三のただ一人の息子小泉信吉が海軍主計大尉として南太平洋で戦死したことを、外出先の父に知らせたときのことである。

「空襲の大火傷の時、

『お前たちでなくてよかった』

と、始めに言った」

加代は、その剛毅な父がいまや老いたことを感じた。昔の父は「私にあのように『どうかどうか』と言うような父ではなかった。私は電話の前に暫く、そのまま坐っていた」

小泉信三夫婦はその日の午後帰京し、以後連日のように病人を見舞いにいった。病人は危機を脱した。しかし、五月二日、信三の妻とみ子は、加代に、

「お父様が時々『胸がしめつけられるようなことがある』と仰言るのよ」

と、いった。加代が改めて信三に訊くと、

「旅行にゆく前、教会でも一度なったんだよ。しかし、いつもちょっとたつと直るんだ」

と、冴えない顔つきでいった。

加代は、その日のうちに父を病院につれていって診断を受けさせた。医者は狭心症ではあるまいか、といったが、心電図を見ると異常がなかったので、信三は晴れやかな顔になった。

五月四日は信三の七十八歳の誕生日で、小泉家では慣例の祝宴がひらかれたが、信三は冗談のにくまれ口をきいて、加代を怒らせ、泣かせたほどであった。

十日の夜半、ふいに信三は妻に心臓の苦痛を訴えた。そして、あわてて医者を呼ぶ妻に「心配させて済まないね」

といった。これを最後の言葉として、彼は安らかな眠りにはいり、翌朝七時過ぎ、突然大きな息を吐いて、そのままこの世を去った。

「父は常々『俺は滑稽なことを言いながら死んでやる』といっていたが、そうは行かなかった」

と加代はいう。また、

「『お前たち、おれが死んだら、眼と口はすぐに縫いつけて、とじさせてくれよ』と、父はよく言った」

それは昭和二十年五月二十四日の大空襲のとき、信三は焼夷弾を浴びて顔に大火傷を受け、それまで堂々たる美丈夫であったのが、以後眼も口も完全にはとじることが出来ない無惨の顔貌と化していたからであった。

「しかし、眼を母が撫で、父の愛した姪やその他の親しい方々が撫でると、縫わなくても、父のまぶたは、きっちりと閉じられた。入歯をはずしたので、口も、きりっとむすんだ」

父の死顔は美しかった、と加代は記している。

熊沢天皇（一八八八――一九六六）

敗戦直後の昭和二十年十月、それまで名古屋で洋品雑貨商を営んでいた熊沢寛道なる男が、突如自分こそ天皇の正系であると名乗りをあげ、マッカーサー元帥にそのむね直訴した。

そのころ占領軍は天皇神話を解体させるべく腐心していたところであったので、「ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン」や「ライフ」などが大々的にこれを報じたところから、俄然日本でもいわゆる「熊沢天皇騒動」をひき起した。

彼は「余は万世一系の正皇統を継ぐ」と檄し、MPに護られて全国を遊説してまわった。「侍従」と称する取巻きも現われてうやうやしくつき従ったが、ときどきジープに乗る「陛下」を「早くしろ」と怒鳴ったりした。

しかし熊沢天皇は真剣かつ執拗で、「現天皇不適格確認」の訴訟を起したりした。現天皇は逆臣足利氏のたてた北朝系であって、後醍醐天皇のあとをつぐ自分こそ正系である、というのである。しかしこの訴訟は却下された。

そのうち熊沢一族の中に自分こそ正系であると称する者が現われ、ほかにも自称天皇が二十数人出現して、彼は喜劇の中の一役者に過ぎない存在となり、はては忘れられた。

南風競わず、晩年は落魄して池袋の人生横町の棟割長屋、女指圧師の階下の物置小屋同然の二帖に身をよせたり、板

橋の裏町のアパートにひとり暮しをしたりしていたが、最後は埼玉県の片田舎で、昭和四十一年五月十一日、膵臓ガンで「崩御」した。

東京で密葬の日、彼を後援する「南朝会」の事務所に警視庁の手入がはいった。

西条八十（一八九二――一九七〇）

詩に、童謡に、流行歌に、ゆくとして可ならざるはない巨大なる天馬のごとき大才を発揮した西条八十は、一方では大正五年結婚の初夜、妻を角かくしの花嫁姿のままにして一夜清らかに過させたというのに、やがてその妻が、「七十になったらパパもおちついてくれるかしら」と嘆きの声をもらしたほど、老いてもなお盛んな恋愛遍歴をやめなかった。

その八十も、昭和三十五年、妻が脳溢血で死ぬと、ようやく憑きものが落ちたように「おちつい」た。

そして、旅行先のホテルで、妻の好物だった海老の生けづくりが出されると、童児のように両手を顔にあてて泣き、はては廊下の隅に逃げて嗚咽するといったありさまであった。

やがて、老いた八十を最後の打撃が襲った。彼が会長をしている「日本音楽著作権協会」の収入を彼が私しているという非難であった。彼は怒りと憎しみで、病床でみずから反論のペンをとった。彼を病床につかせていた病気は喉頭ガンであった。

――昭和四十四年六月から、突然彼は声が出なくなった。喉頭ガンという病名は知らされなかったが、それ以来彼は訪客のだれにも会わなくなった。

それでも彼は身だしなみを失わず、部屋にはよい匂いのオーデコロンをまいて暮した。その八十が、そのうち口のそばに御飯粒をつけていても気がつかなくなった。また娘の嫩子が朝五時ごろゆくと、明けやらぬほの暗いカーテンのかげに、彫像のような寂しい表情で、黙ってうずくまっている姿を見るようになった。

病床の枕もとにはいつも金魚の餌と犬のビスケットがおいてあり、池の金魚と庭の犬にそれをやるのが、彼の唯一の日課となった。

しかし彼は、晩秋の虫のようなかすれ声で、「僕の頭脳をこの世に残せないのは惜しいな」と、しみじみつぶやくことがあった。彼はランボオ論につづいて、十六世紀以後の八十人のフランス詩人の伝記にとりかかっていた。

昭和四十五年八月、死の数日前の夜、彼は娘に「お前にいい音のする銀の笛をやった夢を見たよ」といった。嫩子は、「パパ、私、あかちゃんじゃないわよ」と笑った。

八月十一日の夜、嫩子が旅行から帰って、二階の八十の寝室にゆくと、八十はいつになくふきげんで、黙って部屋の外を指さした。嫩子は自分の部屋に戻り、一時間ほどたってまたいってみると、八十は眼鏡をかけたまま寝こんでいたので、彼女はその眼鏡をとってやったが、彼は気がつかない風であった。夜中にまたのぞいてみると、ベッドの傍には痰をふいたティッシュ・ペーパーが落ちており、彼はまだ安らかに寝入っていた。

朝七時ごろ、朝食を持ってあかったお手伝いが、蒼白になって駈けて来て、八十が冷たくなっていて呼吸していないことを知らせた。

眠ったままで息をひきとったとしか思えない死顔で、お手伝いは「先生はこんなきれいな方だったのですね。……」といった。

嫩子は、父の死骸をだれにも見せずに拭い清めた。

八十は、松戸の霊園に――その浮気で一生苦しめた妻のそばに葬られた。嫩子はつぶやいた。「パパ、お母さんの隣りに坐って。もう寂しがりやの世界、これで、ジ・エンドだわ」

書物をひらいたかたちの墓碑にはこう刻まれている。

「われらたのしくここにねむる。離ればなれにめぐりあひ、短かき時を愛に生きしふたり、悲しく別れたれど、ここにまた心となりてとこしへに寄りそひねむる。西条八十」

（西条嫩子『父西条八十』『父西条八十は私の白鳥だった』より）

ジョン・フォード（一八九五――一九七三）

西部劇のジョン・フォードは、一九七三年八月三十一日、ガンのためカリフォルニア州パーム・デザートの自邸で死去した。

彼はなお数作の映画を準備ないし構想中であった。が、アメリカの世界の「騎兵隊」たる地位がゆらぎはじめた六〇年代以降、彼の西部劇も生彩を失っていた。

しかし九月五日に行われた葬儀には、ジョン・ウエイン、ジェームス・スチュアート、ヘンリー・フォンダ、チャールトン・ヘストンら彼の西部劇に登場した名優たち、ウィリアム・ワイラー、ヘンリー・ハサウェイ、フランク・キャプラらの名監督がキラ星のごとく集まり、ハリウッドでもめったに見られない盛大な葬儀であった。埋葬にあたっ

ては海軍儀仗兵が礼砲を発射し、消燈ラッパが吹奏された。

周　恩来（一八九八——一九七六）

毛沢東はその後半生において、かつて自分のライヴァルであった者は、すべてこれを失脚させるか、非業の死に追いこんだ。ただ一人周恩来のみはこの運命をまぬがれ、「不倒翁」という異名をとった。

周恩来はその声望においても毛沢東をしのぐものがありながら、政治上いちども毛にとって代る野心を見せたことはおろか、その後継者たらんとしたこともなかった。彼は生涯、毛に対して忠誠の態度を崩さず、晩年の毛の暴挙とも思われる文化大革命にすら加担のそぶりを見せた。

彼はただ毛沢東を怖れ、保身のために忍従の道を選んだのであろうか。それとも次善の策として、始皇帝ともいうべき毛にぴったりより添い、その暴走に一足でもブレーキをかけるのを自分の天命と考えたのであろうか。

周恩来が毛沢東の批判者であったことは、彼がすべて後事を託したのが鄧小平であることを見れば明らかである。

しかし、彼がその命を終えようとする時点においては、まだ毛は生きていた。五歳年上の毛沢東は周恩来よりなお八カ月余命があったのである。

周恩来は前立腺ガン、膀胱ガンのため、北京の首都病院で三カ月以上も重態のつづいたあと、一九七六年一月七日、昏睡からさめて、「私のところはいいから、他の病人のところへいってやりなさい。そっちのほうが君たちを必要としているから」と、医者や看護婦に、力をふりしぼっていった。これが最後の言葉となった。

翌朝一月八日午前九時五十七分に絶命した。

その他最後の様相、彼の心境について、信頼出来る記録はない。そもそも周恩来自身、超人的な活動を示しながら、政治上の演説や報告以外、まとまった論文や回想録のたぐいはまったく残さない人物であった。

彼は毛に対してひとことの批判もしなかったのに、それでも彼を毛の批判者と見る中国の大衆は、それから三カ月後の四月五日、天安門広場に集まって周恩来追悼のために人民英雄記念碑に無数の花束を捧げ、これを市当局が撤去したことから騒乱を起し、いわゆる「天安門事件」が勃発した。

一九七二年、アメリカ大統領として毛沢東、周恩来に会ったニクソンはいう。「死ぬ前の周は、毛の暗黙の支持を得たらしい四人組によって実権を奪われたそうだが、周は

その前に、やがて起るべき毛の後継者争いに備え、わが意を体した人々を枢要ポストに静かに送りこんでいた。……毛の後継者たちは先を争って毛の教えを捨てたが、周の政策は彼の死後も生きている」

藤原義江（一八九八——一九七六）

その臨終を看とった最後の愛人の三上孝子は語る。

「……人間は棺を覆ってみて、その人の幸、不幸が分ると申します。彼の場合は、自分で幸福だといっていたのですから、最高に幸せな人だったと思います。ただ、すっかり痩せてしまったのが可哀そうでなりません。

女性関係が絶えない人だったけれど、身体が悪くなっていくにつれ、彼に利用価値がなくなると、その女性たちも集まってこなくなりました。そんな関係からか、私だけを頼りにし、全面的に甘えさえみせました。

……借金王というありがたくない名前を頂戴しても、この四、五年、藤原個人は借金の催促を受けたことがありません。裸の男に返せといっても無理だったのでしょう。

帝国ホテルが彼の住まいになったのは、鎌倉の家も六本木の家もなくなってからでした。確かに帝国ホテルは彼にとって〝恋愛のたまり場〟であったのです」

藤原義江は大正十二年から帝国ホテルに住みついた。しかも入院の一週間前まで、地下の理髪店でもみあげと爪の手入れを欠かさないダンディな生活をつづけた。その晩年の費用の大部分を支払ったのは、「三上サルベージ」の娘に生まれた三上孝子であったといわれる。

彼女は記す。

「……昭和四十九年の誕生日、十二月五日に藤原の『流転七十五年』の出版記念会と、團伊玖磨氏と森繁久彌氏の受賞記念会タキシード会が催され、彼は好きなカキやローストビーフなどをよく食べました。

その翌日、帝国ホテルで転び、東大病院に入り六カ月、小康を得ましたが、再び六月に転び、腰骨を痛め、その夏を向丘病院で三カ月」

彼は、大脳の病変により運動・表情の機能に硬直をきたすパーキンソン氏病におかされたのである。

美食家で、しかも食欲の衰えない義江には、その間も病院の食事は口に合わないので、孝子は銀座や六本木のレストランから食事を運んだ。

歩行不自由となった義江が転べば、それを抱いている孝子も転び、双方ともに身体じゅう痣だらけになった。

「秋ぐちに入り、パーキンソン氏病が喉をおかしたらしく、薬も食事もむせてだんだんと喉を通さなくなり、咳も痰もひどく、元気がなくなりました。
夜半に発汗のため、幾度も衣服を替える始末でした。私は安住の場所に移したく、ひとまずホテルに帰りました。その後、好天気の日、この世で最後の外出となった日比谷公園に、服を着せ、車椅子にのせ、サングラスをかけて出かけました。ほんのわずかな時間でしたが、
『ああ、よい散歩をした。今がいちばん倖せだ』
と、つぶやいて、私を澄んだ目で見ました。
その翌日、向丘病院の主治医が八時頃まで訪ねていました。その夜半、急に咳きこんで、苦しそうなので、吸入をしました。朝までにはおさまったのですが、再び七時頃、痰がつまり、私は八方、電話をしましたが、日曜日の早朝とてラチがあかず、救急車で知り合いの日比谷病院に運びました。
ふと、私はいやな予感がしました。再びこの帝国ホテルに帰れるかしらと。すでに無熱肺炎におかされていて重体とか。すぐ気管を切開して痰を出すとか。私はためらいましたが、致し方ありませんでした。『快くなれば、また話せるようになりますよ』といわれた時、彼は『エッ』と驚きの声をあげました。これが藤原のあの美しかったナマの声の最後の一声となりました。
十月七日に一時退院して、その十二月に入院して以来、危険な状態が何度か続きました。人間の身体からこんなに痰が出るものかと思いました。彼は食べられない眠れない日が続きましたが、心臓の強靭さが生命をつないでいました。
鼻孔食。このメニューに私は連日頭を悩まし続けました。私の親友たちはローヤルゼリー、漢方の自然食と暖かい心づかいをしてくれました。それにもまして五カ月間、小川軒が毎日スープを届けてくれました。これは出来ることではないと、彼ともども心から感謝していました。少し量が過ぎたり、体位の具合で食物が気管に入り、大変なことが度々でした。いかに細かいところまでの看護が必要か、それに付添いの感情の違い、度々のミスに私は私自身の我慢と神経をすりへらしていくばかりでした。
幸い日比谷病院の婦長、看護婦さんは特別にしてくれ、若い女性たちに看病されて、彼は御満悦のようでした。
朝夕のご回診の折り、彼は最大の感謝の意をこめて一人ひとりに握手でこたえていました。『我慢強いおとなしい患者ですね』と、一日に何度も見舞って下さるママ（後援

会の会長さん）にいわれていました。一時小康を得て、はっきりと用件をのべていたことがあります。
（昭和五十一年）三月に入り、幾分風邪ぎみになり、とこずれもひどく、元気のない日が続きました。私も月末までは無理と覚悟をきめ、お別れだからと皆さんに病院まできて戴いて、病室は一時、賑わいました。
そして静かな付添と替え、私は終日看護に心をつかいました。一寸離れると『なおらなくてもよいから傍にいてくれ』と、彼は何度もいいました。その度に、そっと涙をぬぐい、それこそ、かつての華々しい女性たちに下の世話までしてもらいたいと思いました」
大小便のみならず、彼のあごの筋肉はゆるんで口はあけたままになり、ヨダレはながれ放題であった。
なお彼女は語る。
「……藤原には息子が一人いますが、あまり訪ねてはくれませんでした。私は孫ができたということをきき、子供好きの彼だから、いつ来てくれるかと心待ちにしていたのですが、やっと八カ月ぶりにホテルにつれてきたのです。あまり会っていないから、親子水入らずで、何かいろいろ話があるだろうと、どんなに嬉しいことだろうと私は席をはずし、そのついでにパンダの縫いぐるみを買って部屋に戻ると、もう帰ったあとでした。彼は一人でしょぼんとしていました。彼も年をとって、過去がどうあろうと、たった一人の裸の老人に過ぎません。実の父と子といっても、こんなものだろうかと、愕然としたものでした」
しかし、かつての妻「藤原あき」との間に生まれたその息子の義昭は憮然としていう。「親らしいことはなにもしてくれなかった人です。これが父の生き方でした」
女道楽のかぎりをつくしながら、男はその子から敬愛を受けることは難しい。
そして三月二十三日が来た。
「六〇一号の部屋で五カ月余、病と闘い、最後の息をつく時、間に合った息子やビクターの熊倉氏、事務の山中夫妻、八時三十分にかけつけてくださった院長に見守られて、三十五分に御霊は亡骸を離れました。寝顔のままの昇天でした。
……僕は裸になったから、葬式もせず墓も造らず、骨をまきにいってくれ、といつもいっていましたが、私は小さな分骨を持って、幾度か彼と一緒に歩いたヨーロッパの地に約束を果すべく、彼の御霊とともに旅立つでしょう」
三上孝子はその通り、その年の秋十一月九日、ナポリのサンタ・ルチアの浜辺で彼の骨を紺碧のイタリアの海へ流

した。藤原義江は日本人とノルウェー人の混血のせいか、かえって生前ふつうの日本人より日本人らしいことをよく口にしたが、骨はやはりヨーロッパの海に沈められたのである。

田村秋子（一九〇五——一九八三）

昭和十年前後、山本安英とならび新劇の名女優とうたわれた田村秋子は、戦後も、数少ないが舞台や映画に出演して依然大女優の評価を落さなかったが、昭和二十七年、四十七歳のとき、舞台から突然身をひいた。新劇の女菊五郎と呼ばれたほどみごとな演技力を持ちながら、この「早すぎた退場」は、彼女の俳優としての完璧主義が満たされなかったからであった。

以来秋子は完全に演劇と縁を断ったが、約三十年後の昭和五十六年九月、やはり新劇俳優で、昭和十二年十月、出征後二十日目に中国で戦死した夫友田恭助との間に生まれた一子英司の家からも離れて、千葉県君津の山中の老人ホームにはいった。

秋子は以前からリューマチを患っていたが、激烈な痛みがあるはずなのに、ほとんど痛みを訴えなかった。役者としては強烈な個性の持主なのに、実生活では大げさなことをきらう克己心が彼女にはあった。

昭和五十八年一月、秋子は肺炎を起し、君津の病院に入院したが、死ぬ三日前から食事を拒否した。それは衰弱のせいではなく、もはやみずから生きることを拒否したかのようであった。

二月二日の夜七時ごろ、彼女を尊敬し、しばしば訪れて看護にあたっていた豊田正子——かつて『綴方教室』で知られ、このころ赤坂の古美術商に勤めていた——があとを子息の英司にまかせて帰ろうとすると、ふいに秋子は「さよなら！」と声をかけた。

「暗い感じのさよならではなくて、軽い、はずんだ調子の、寧ろいたずらっぽく云ったという感じ、だったという」と友人の劇作家内村直也は「早すぎた退場」で書く。

「最後の瞬間に至極平凡な言葉で、明るく永遠の別れを告げる。深刻なところがみじんもない。これはもしかすると、とっさに出た言葉ではなくて、彼女のなかで充分考えられ、練られた言葉だったのではないか」

豊田正子はこの言葉で行けなくなってしまった。

時計が二月三日の午前一時をさしたとき、田村秋子は息をひきとった。

七十九歳で死んだ人々

人間「うまいものは、一番あとにとっておこう」
癌「食い物の話なら、それもよかろうが。……ワハハ」
——山田風太郎——

法然（一一三三——一二一二）

四十二歳のとき浄土宗をひらき、「ただ往生極楽のために南無阿弥陀仏と申せば、うたがいなく往生するぞ」と説き、時あたかも諸行無常の鐘鳴りひびく源平争覇の時代におびただしい信者を生み出した法然は、晩年、延暦寺や興福寺の反感と憎しみを買い、七十四歳のとき四国に流罪となった。

しかし、同情者が多く、その年のうちに赦免の勅旨を受け、流罪後五年にして帰洛も許され、建暦元年十一月から東山大谷の草庵に住んだが、翌年一月二日に発病した。病名不明。ときに七十九歳であり、ここ二、三年物忘れがひどかったというから、動脈硬化、さらに老衰そのものであったろう。

しかし法然は病床でたえず念仏を唱えつづけ、眠っていると見えるときも唇や舌が動いていた。そして、

「私はもと極楽浄土にいた人間だから、いまはただその故郷へ帰ってゆくだけである」

といい、弟子が師の御房の御遺跡はどこにしたらいいでしょうか、と訊くと、

「念仏の声のあるところは、海人、漁人の苫屋まで、みな私の遺跡である」

と、いった。

建暦二年一月二十五日、庭まで雲集した信者たちの念仏の声の中に、正午過ぎ彼は入寂した。

「（法然上人は）終ニ大谷ト云東山ニテ入滅シテケリ、ソレモ往生往生ト云ナシテ、人アツマリケレド、サルタシカナル事モナシ」（愚管抄）

念仏聖の死に何か瑞相か凶変の起ることを期待して弥

次馬が集まったが、何の変ったことも起らなかったというのである。

藤原定家（一一六二――一二四一）

『新古今集』を編み、みずからも歌聖と呼ばれる藤原定家が、数え年十九歳から七十四歳まで書きつづけた日記『明月記』によると、彼の一生は病気だらけである。

まず十四のときにかかった赤斑瘡（いまの「はしか」）、十六のときの疱瘡の想い出からはじまり、三十七のときに瘧（マラリア）を病み、四十二のときには瞼が腫れ、発熱して眼から膿汁が出て鍼を打ってもらった。歯痛も頻発し、蛭に吸わせたり、蓮塩で洗滌したりしたあげく、五十一のときは麻を歯に巻いて抜かせたりした。冬には必ず風邪をひいて悩んだ。六十四のときには執拗な腹痛に苦しみ、六十九のときには手足が腫れて麻痺し、立つことも出来なくなり、咳と下痢が重なり、便所で倒れて人事不省になった。七十二のときは左眼が腫れ、面上に小瘡が生じた。七十四のときは消渇（糖尿病と輸尿管障害）にかかり、桃花を煎じて飲んだが、このために激しい下痢を起してまた人事不省におちいった。

この時代、大宮人も病気の上では優にやさしく艶なる体にはゆかなかったのである。

しかし彼は数えで八十歳まで生きて、仁治二年（鎌倉幕府、執権泰時の時代）八月二十日に死んだ。『明月記』は七十四歳で終っているので、病名はわからない。

本阿弥光悦（一五五八――一六三七）

大坂城を攻め落して京都へ帰って来た家康は、京で屈指の「町衆」本阿弥光悦が祝いの挨拶にも来ないので、光悦はどうしたか、と所司代の板倉伊賀守に訊いた。光悦は、家康が大坂城を攻めほろぼしたことが気にくわなかったにちがいない。伊賀守は、「あれは変り者でございますから」と弁解してやり、「光悦はこのごろ京には住み飽いた。どこぞへんぴなところに住みたいと申しております」と、その近状を伝えると、家康はちょっと思案して、「それでは近江か丹波か、京へはいるあたり、追はぎでも出そうなところを手広く与えてやれ」といった。

かくて洛北鷹ヶ峯の土地が選ばれた。光悦がそこに一族及び知合いの芸術家たちとともに移り住んだのは元和元年、五十七歳のときであった。鷹ヶ峯は一種の芸術村となった。

ここから光悦は、日本美の極致ともいうべき陶芸や工芸や書の最高作品を生み出した。京の紺座を支配し、有名な吉野太夫を妻にした同時代の文化人灰屋紹益は、このころの光悦の生活、人格、芸術に対し「他に有べき人間とハ覚侍らず」と讃辞をささげている。

光悦は晩年中風にかかったらしい。寛永二年東下して将軍家光に謁したとき、家光から「光悦は年寄ってヨロヨロしておると聞いたが、見れば達者ではないか。お前は天下の重宝ともいうべき人間だ。養生せよ」とねぎらいの言葉を受けた。三代将軍家光には、名君説暗君説の両説があるが、この一言が事実とすれば、この一言だけでも名君説を認めたい。

さて寛永十四年初頭、光悦の病篤しと聞いて、板倉伊賀守が子息阿波守同道で鷹ヶ峯に見舞いにゆくと、光悦は粗末な木綿の蒲団に寝ていた。伊賀守が、伜のために何か遺言してやってくれぬかというと、この「大町人」は大名の心得をこんこんと説諭し、二月三日、大往生をとげた。

おそらく日本における最も幸福な大芸術家。いまでも京の鷹ヶ峯には閑寂で美しい光悦寺がある。

大久保彦左衛門（一五六〇――一六三九）

「天下の御意見番」は講談だが、彦左衛門が剛直無比の人物であったことは、彼が晩年に子孫のために書き残した『三河物語』――大久保家代々の徳川家への忠節ぶりと、それに対しての薄禄の嘆き、にもかかわらずなお忠誠を失うなかれ、という教訓の書――を見てもわかる。

彼は生涯草創期の徳川家のために力戦奮闘して千石の扶持しかもらわず、七十二歳に至ってやっと二千石を与えられた。

そして寛永十六年二月一日、三河額田郡の釆地で死んだ。臨終にあたって将軍家光が、特に一万石を与えるという恩命を伝えさせたとき、彦左衛門はへそをまげてこれをことわったといわれる。

銭屋五兵衛（一七七三――一八五二）

加賀の海運業者として巨富を築いた銭屋五兵衛は、八十歳近くになってから河北潟埋立ての大事業に乗り出した。それは、海運業というものは当時あまりに不安定で、子孫

のために——特に彼が愛した三男要蔵のために、もっと安全な道を切り拓いてやるためではなかったかといわれる。

その埋立てによる新田の七五パーセント（収穫高二千石以上）は銭屋のものになるという許可を藩から受けていたが、実際にとりかかってみると工事は容易ならず、しかも河北潟沿岸の零細漁民の深刻な恨みを買った。死の前年、病床にあった五兵衛は、その苦しみと不安を、「自分の栄華ではない。子孫のためになるかと事業にとりかかったが、工事費が意外に巨額なものになり、心痛のために夜も眠られぬ」云々と述べている。

しかも、その翌年、嘉永五年八月末から、銭屋一族、さらに関係者たちがいっせいに加賀藩に検挙され、埋立事業は瓦解した。

まだ埋立てられぬ地域で魚が腐死し、死人まで出たのを、埋立て反対漁民を追い払うために銭屋が毒物を投げこんだのだ、と漁民が騒ぎ出したのをとりあげられたのだが、加賀藩内部における銭屋派とアンチ銭屋派との政争のとばっちりだともいわれ、また五兵衛が国禁の密貿易をやっていたのを幕府に探知され、藩が恐怖して事前に銭屋一族を始末しようとしたのだともいわれる。

五兵衛は九月十一日に検挙され、十一月二十一日に牢死した。尿道狭窄による尿毒症といわれるが、毒殺説もある。とにかく一代の海傑といわれた銭屋五兵衛は、この老齢で、日本海から吹きつける寒風蕭殺たる牢獄の中で、これ以上はない悲惨な死をとげた。

翌嘉永六年十二月、要蔵は河北潟の砂丘で磔にかけられたが、見物人中、同情の声をはなった者は一人もなかったという。「公害」への怨念は江戸時代においても深刻無残なものがあったのである。ほかの兄弟姉妹ことごとく罰せられ、銭屋は滅亡した。

北里柴三郎（一八五二——一九三一）

ドイツのロベルト・コッホに師事して破傷風菌の純粋培養、ジフテリア血清療法などの業績をあげ、北里伝染病研究所を設立した北里柴三郎は——彼自身は東大医学部出身だが、その後慶応医学部の総帥たるべき運命におかれ、東大閥と宿敵の関係となった。が、結局彼は明治から昭和にかけて日本医学界の大御所的存在となり、巨富と栄爵を得るに至る。

晩年顔面神経痛と音声の不自由をきたしたが、身体そのものは頑健無比で、死の前々日も慶応病院の歯科に歯の手

入れにいったほどであったのに、昭和六年六月十三日の朝、麻布の自邸の寝室の蒲団の中で安らかに大往生をとげているのが発見された。脳溢血を起したのであった。

彼はブルジョワ生活の限りをつくしたが、死においても、生前からこんな風に死にたいものだと希望していた通りに死んだ。

河口慧海（一八六六——一九四五）

明治三十年、三十一歳のとき日本を出発、三十二年ネパールにはいり、ラマ僧に化けて三十三年ヒマラヤを越えてチベットにはいり、三十五年日本人であることが発覚してあやうく脱出するという、日本人としてのみならず世界探険史上稀有の冒険をなしとげた河口慧海は、その後再度のチベット旅行を果し、厖大な経典、書籍、宗教用具、美術品、動植物の標本などを持ち帰った。

しかし、その強烈な信仰心と意志力は、日本の仏教界を弾劾することあまりにきびしく、ために多くの敵を作って一種の一匹狼となり、その『西蔵旅行記』すら信憑性を疑われ、インチキ坊主の烙印さえ押された。

その旅行記がほんものであることが証明されたのは第二次世界大戦後になってからである。しかし第一次の『西蔵旅行記』は出版されたが、第二次の旅行記は原稿のままでいまだに出版されていない。

昭和十五年から彼は、ライフワークとした『チベット語字典』を出版してもらうために、毎日編纂先の「東洋文庫」にかよって仕事に励んだが、昭和十九年十二月のある夜、誤って道路ぞいに掘られた防空壕に転落し、頭と手足に怪我をして失神した。たまたま通りかかった人に助けあげられたが、それ以後急速に元気を失った。

彼は生涯独身で、完全菜食主義者で、晩年になるまで極めて健康であったが、翌二十年二月十六日、昼食中突然左手の茶碗をとり落し、ついで左足の麻痺を起した。脳溢血であった。

ただちに床につかされたが回復せず、二十四日正午死去した。

二十六日の葬式は、前日の大規模な空襲と大雪のため交通杜絶した中にあわただしく行われた。『チベット語字典』は未完成のまま終った。

ガンジー（一八六九――一九四八）

第二次大戦前、断食と非服従運動によって英国に抵抗し、インドの聖雄と呼ばれたマハトマ・ガンジーは、宿願のインド独立後の一九四八年一月三十日午後五時過ぎ、ニューデリーの「夕べの祈り」に出るべく、遠縁の二人の若い女性に両側から支えられながら、礼拝場へ歩いていった。

そのとき群衆をおしわけて一人の男が出て来て、ガンジーの前に立ち、小型自動ピストルを三発発射した。

第一弾でガンジーは立ちどまったが、なお立っていた。二発目で、白い着衣に鮮血がにじみ出て、合掌していた手が垂れ下がった。

「ヘイ、ラーマ（おお、神よ）」

と、彼はつぶやいた。そのとき三発目が撃ちこまれ、ガンジーの身体は地上に崩れ落ち、眼鏡が飛び、革のサンダルがぬげた。

犯人は、インド独立後、イスラム教とヒンズー教との宥和運動に奔走していたガンジーに怒りをおぼえたヒンズー教の狂信者ゴードセーで、彼はのちに公判廷で、「撃つ前には、ほんとうにガンジーの倖せを祈り、お辞儀した」といった。彼は死刑になった。

ガンジーの葬式には、五千人の兵士、三千人の警官が行進し、百五十万人の人々がつづき、百万人の人々が見まもった。

――ただし、犯人の一味で弟のゴパールはいう。「ガンジーが撃たれたとき、ヘイ、ラーマといったというのは信奉者たちが作りあげた嘘だ。事実は最初の銃弾で気を失い、たんに物理的な身体の反作用で、『アーア』と息がもれたにすぎない」

幣原喜重郎（一八七二――一九五一）

大正末期から昭和初期にかけて、いわゆる「幣原軟弱外交」のレッテルを貼られ、昭和六年末から失意の日々を送っていた幣原喜重郎が、敗戦により、突如埃をはらったコットウ品のごとく首相として登場したのは昭和二十年十月のことで、時に七十三歳であった。

翌二十一年に公布された新憲法において、戦争放棄の第九条が明記されたのは、彼自身のアイデアともマッカーサーのおしつけともいまだ明確でなく、その理念そのものも日本に永遠の疑問符を残した。

しかし「日本はアングロサクソンの許容範囲でしか生存出来ない」という、日本にとって「痛苦に満ちた真実」を、これほど冷厳に見ぬいていた外交家はないといわれる。

――太平洋戦争は、実は日本がこの掟を破ろうと試みて失敗した戦争であったのだ。

彼は、昭和二十六年三月八日深更、世田谷区岡本町の自邸で、心筋梗塞で倒れ、十日午後五時十分に死去した。

長谷川伸（一八八四――一九六三）

『瞼の母』『関の弥太ッペ』『暗闇の丑松』『沓掛時次郎』『一本刀土俵入』などの戯曲で、あるいは同時代の大衆小説の大作家のだれよりも長い作品生命を持つかも知れない長谷川伸は、昭和三十八年一月、風邪から肺炎を起し、一月二十二日危篤状態で聖路加病院に入院した。その後小康を得ては危篤に陥るという状態を数回くりかえしたが、その頑健な体質と気力は、ついに病気をねじ伏せたかに見え、五月六日退院した。

しかし、「このころ、伸は死のうと考えた」と弟子の戸川幸夫は記す。

「はっきり自殺とわかる死に方は嫌だし、人に迷惑をかけるので、食を断とうとした。そのことが門下生たちにわかったとき、一同は泣きながら翻意を促した。伸が食を断って死のうと考えた理由は、自分個人のために多くの人たちが自分の仕事を置き、貴重な時間をさいて見舞いに来るが、そのロスは総計すると大変なものになり、国家的な損失になる。自分が死ねばそれが食いとめられる、という考えからのようであった」

生きている意味を、他人とのかかわりあいに見る人間なら、つきつめるとこういうことになる。

伸はしかし翻意して、やがて細々ながら食事をとり出した。見舞いの人たちが工夫して作るいろいろな食事を、その好意にむくいるためにそれぞれ一匙ずつ口にした。

しかし自宅でまた風邪をひき、一カ月後の六月五日に再入院する羽目になった。六月十日に戸川が見舞うと、伸は衰弱甚だしかったが精神は元気で、こんなことをいった。

「戸川君ね、生と死はつまるところ同じものでね、生きながら死んでる者もいれば、死んでも生きている人もいる。生きるっていうことは何だろう、と考えることがあるが、それは生きているという存在価値を示すことじゃあないかね。自分でなけりゃあやれないということをやればいいね」

長谷川伸が、自分でなければやれない仕事だと考えていたのは、国のため世のためつくしながら、黙々と無名のまま死んでいった人々の「紙碑」をかくことであった。

その翌日の六月十一日午前十時半ごろから心臓に異常が現われ、午後零時三十分ついに永眠した。

谷崎潤一郎（一八八六――一九六五）

谷崎は生来病気らしい病気をしたことのない丈夫な肉体の持主であったが、昭和十年四十九歳で憧憬の森田松子と、彼にとっては三度目の結婚をしたころから、高血圧の症状を感じはじめた。しかし、不安をいだきつつ、医者の診断は受けなかった。

昭和二十一年、六十歳のとき、『細雪』終回近くを執筆中、血圧が二〇〇前後あることが判明し、はじめて医者の治療を受けるようになり、次第に回復した。

昭和二十七年、血圧はまた二〇〇を超え、眩暈、記憶喪失、異常感覚等に悩まされるようになり、時に死の予感に打たれて涙ぐむこともあった。「青年時代の『死の恐怖』は、多分に空想的、文学的のものであったが、七十に近い今日では『死』は恐怖よりもひたすらに悲哀をもたらすのみであった」と彼は、のち昭和三十四年『高血圧症の想い出』で回想している。そういう症状に苦しみながら、彼は『源氏物語』新訳の筆をすすめ、三十九年に完成させた。

その後健康をとり戻し、昭和三十一年七十歳のとき『鍵』を発表したが、三十三年十一月二十八日、親友笹沼源之助の金婚式の前夜、贈り物の帛紗の箱書きをしている途中、突然右手に軽い麻痺が起り、以後ペンを持つと疼痛をおぼえ、夏が来ても手袋をはめていなければならないほどの冷感に悩まされるようになり、それ以来原稿はすべて口述筆記のやむなきに至った。

このときの苦悩を、昭和三十七年の『わが小説』に、「手が利かなくなってから何より先に考えたのは、今後いかにして生活の道を立てるかと云うことであった。（中略）私は一時前途が真っ暗になったような気がした」と書いている。豪奢きわまる生活を営みつつ、あるいはそれゆえに、文豪谷崎潤一郎はまずこういう心配をしなければならなかったのである。

ついで昭和三十五年二月、狭心症の発作を起し、二カ月ばかり東大病院に入院したが、医師が回診に来るたびにベッドの上に起き上って挨拶し、その起き上り方の懸命さに、医師のほうがめんくらうほどであった。若い日傲岸不敵で

あった谷崎も、老いては――女性関係を除けば――薄運の父同様の律義な老人に変っていたのである。

それ以後、昭和三十六年『瘋癲老人日記』、昭和三十七年『台所太平記』などを口述筆記で発表した。生きているかぎり、書かずにはいられない作家谷崎潤一郎の業であった。

昭和三十九年七月、湯河原の吉浜蓬ヶ平に新邸が完成した。が、そのころから健康がまた悪化した。夫人が書いている。「一点を凝視するような時が目立って多くなった。そして無口になっていった。（中略）尿閉を起しカテーテルを留置しなければならなくなった。不快、苦痛はいわん方なく『こんなことして生きていたくない。これじゃ物なんか書けやしない。死にたい。書けなくなって生きていても仕様がない』と繰り返すので、私は聞く辛さに堪えかね、洗面所に閉じ籠りかくれ忍んで泪を拭うた」

四十年七月に、潤一郎は『七十九歳の春』で前年からのことを書いている。

「そうこうするうちに、十二月も押し詰って大晦日になってから、果して腎盂炎の兆候を表し、熱が四十度近くに上ったが、二三日すると奇蹟的に熱が下がったので、正月早々東京お茶の水の病院へ運んでもらった。

入院したのは今年の正月八日であった。舟橋聖一君が体を伸ばして寝られるような大型の自動車を持っていたので、それに乗せて運んでもらった。（中略）

毎日々々カテーテルの出し入れをする度毎に、顔馴染みのない、気心の分らない医師や看護婦にいじくり廻されるので堪らなく不愉快で、こんなことをいつまでも繰り返すのなら死んだ方がましだ、と思ったことは度々で、『死にたい、死にたい』と始終言い暮した」

二月五日に、膀胱瘻の手術（腹に孔をあけて、膀胱から直接外へ尿を出す手術）を受けた。

その結果、もと十八貫あった体重が十二貫まで痩せていたのが、次第に回復し、食欲も出てきて、神田明神の甘酒、納豆、連雀町のやぶそば、銀座の浜作、辻留などから何かのとり寄せて食べるようになった。「こんなにも食べるものがおいしいものか、と自分ながら不思議であった」と、彼は書いている。潤一郎は死ぬまで大美食家というもう一つの根性を失わなかった。

三月九日に退院した。しかしこの『七十九歳の春』が彼の絶筆となった。（この文章は、彼の死の直後の「中央公論」昭和四十年九月号に掲載された）

帰宅後、回復は順調に見えた。夫人は書いている。

「食欲の方は、あらゆる食べられるものの全てに、又新たな好奇心を擡げたように旺盛になり目を瞠るばかりであった。熱海だけでは間に合わなくて東京まで奔り京都からも好みのものを取り寄せた」

潤一郎は新たな創作の準備にとりかかり、道元の『正法眼蔵』のメモなどとりはじめた。

しかし一方で、気力をとり戻した潤一郎は早速「お気に入りの女性」（注・女中の一人か）を連れて外出しようとした。

「夫と永劫の別れを告げる十日程前に、私は禁句を舌端に載せてしまった。それもいそいそと、最後に気に入られていた人を連れて行こうとする人の背へ……」と、夫人はいう。『長い間心配ばかりした私をおいて』と云いながら顔を掩い、寝室のベッドに打ち伏した」

死の十日前までも、女を愛さずにはいられなかった「痴人」谷崎潤一郎の凄まじさよ。

七月二十四日、七十九歳の誕生日には、親しい友人を招いて祝宴をはり、彼は久しぶりにシャンペンを飲み、卓上の料理を片っぱしから平らげる健啖ぶりを見せた。夫人によれば「殊に、ぼたん鱧（鱧をよく骨切りしたものに葛粉を叩き込みゆで上げ、おつゆの実にしたもの）が大の好物で、味わう暇があるかと思うほどの速さで、平らげた」

ところが、翌朝血尿を見、夕方から悪寒を訴え、医者から腎不全と診断されるに至った。

「その夜は是からが大変だから今夜は少しでも眠って置いた方がよいだろう、と先生方のすすめで、深更二時ごろ睡眠薬を飲んで、夫の寝室につづく和室に体を横たえて眠ろうとした」と夫人が書いているのは、二十八日のことと思われる。「眠りに入ろうとすると胸許が絞られるようで容易に眠れなかったが、薬の効目もあって、うつらうつらすると、何ともいえぬ声をききつけ跳ね起きた。ウオッウオッと、それは猛獣の唸のように耳から頭へ響き渡った。渾身の力をこめて言葉にしようとする声であった。前日まで三日続いた高熱も下り無尿状態であったのが、少量ずつ排尿も見られるが、既に尿毒症を併発していることは素人眼にもあきらかであった」

「終焉の前日も、『このまま寝かせて置いては僕は死んじまうよ』と喚き一気に起き直った。泊り込んで戴いていた先生方の手を借りて、漸く体位をかえて一応は得心が行ったかと思うと、又しても幼児のように諸手を差し伸べて、起して起してと振り絞るような声で云った。これこそ死の手から逃れる最後の抵抗、激しい拒否と見られた。一時は

どうしても東京にゆかねば、と愛用のバッグ、お財布まで持って来させ、お財布は懐中深く自ら納めた」

危篤状態のまま、七月三十日の朝が来た。医者の診察を受けた直後、突然潤一郎は酸素吸入のマスクをはねのけてのけぞった。医者はただちに人工呼吸を施し注射を打ったが、そのまま絶命した。七時三十五分であった。

「寝室の窓から夏の強烈な陽が容赦なく、息絶えたばかりの夫の顔に降り注いでいた」（谷崎松子『倚松庵の夢』）

山田耕筰（一八八六——一九六五）

日本近代音楽草創期の最大の指導者であり、一方北原白秋などと組んで「待ちぼうけ」「ペチカ」「砂山」「からたちの花」などの名曲で大衆にも知られた山田耕筰は、昭和二十二年一月、六十一歳のとき脳卒中のため左半身麻痺をきたし、それ以後もときどき脳虚血発作を起しながら、作曲活動をつづけた。

昭和三十八年、七十七歳のとき彼は「墓無用論」と題し、次のような随筆をかいている。

「人間は誕生のウブ湯を使うときは素っ裸だから、死ぬときも、一物もまとわぬ清浄な姿で墓に入れぬか。死の当夜ぐらいは、親しい者達が寄り合って、静かに故人をしのぶ話をして酒を酌むのもいいが、その翌朝は焼き場へ、その骨と灰は、庭のすみへでもまくという程度の葬式はむりかしら。そうすると香典を包む必要もないし、寒い葬式でカゼをひいて死ぬこともなくなる」

翌年の八月末から高熱がつづき、肺炎と診断されて聖路加病院に入院した。脱水症状が甚だしいので、医者ができるだけ水分を摂取することをすすめると、水などそうガブガブ飲めないがビールなら飲むといって、ビールを飲んだ。

そのうち脳軟化が進み、嚥下能力が衰えて食物をとるとすぐにむせるので、鼻孔から管で栄養を補給した。言語も不自由となり、そのため彼はカンシャクを起して、しばしば異常な行為をした。

入院一年をすぎたころから、耕筰はしきりにゼスチュアをもって退院希望をのべるので、昭和四十年十一月二十七日、鼻腔にチューブをさしこんだまま寝台車で成城の宏壮な自邸に帰った。

彼は裸で生まれたのだから裸で死にたいといったけれど、近代では人間は、管でつながれて生まれ管でつながれて死ぬのである。

一月後の十二月二十八日夜半、彼は腰痛を訴え、看病す

る輝子夫人にむかってかっと眼をむいているので、夫人が「眼をつぶってお休みになったほうがいいですよ」というと、眼をとじた。この夫人にむかってかっと眼をむいていたのが、単なる肉体的反応か、それともある感情の表現であったかが問題である。

　翌朝そのまま死んでいるのが発見された。心筋梗塞を併発したのであった。

　彼は、熱心なクリスチャンの母に育てられ、少年期も牧師の家に寄宿してミッション・スクールにかようという雰囲気に育ちながら、青年期以後は恋の狂詩曲を地でゆく生涯をすごし、また、かつて右のような心境を吐露した随筆を書いたが、葬式は築地本願寺で盛大に行われた。

　金田一春彦の『十五夜お月さん』によれば、葬式には「五千人の会葬者があり、近衛秀麿の指揮により、耕筰の作品が次々に演奏された。しかし、山田の場合、生前の放縦な生活がたたって、彼の息子も娘も葬式には来なかった」

　美貌の歌手で彼の一番目の妻となった永井郁子は「残酷で、浮気で破廉恥で、彼の人間性はゼロです」といった。

　山田耕筰は、谷崎潤一郎と同年に生まれ、同年に死んだのである。

ともあれ、彼の名曲は歌いつがれてゆく。

桂文楽・八代目（一八九二——一九七一）

　桂文楽は昭和四十六年八月三十一日、国立劇場の落語研究会の高座で、得意の演目で、前日東横落語会でもやったばかりの「大仏餅」を演じている途中、突然絶句してしまった。登場人物の一人、神谷幸右衛門の名を度忘れしたのである。

「まことに申しわけありません。もういちど勉強して参ります」

と、彼は深ぶかと頭を下げ、舞台の袖に消えていった。それ以来文楽が高座に上ることはなかった。

　——しかし文楽は、晩年このような失態を予感するところがあったらしく、高座に上る前に必ず客にあやまる稽古をしていた。右の悲痛な謝罪もまた彼の「稽古」の結果なのであった。

　それから百日ばかりたった十二月十一日、彼は死んだ。病名は肝硬変であった。

　その訃報を聞いた八十一歳の古今亭志ん生は、ふとんを頭からかぶり、「あんにゃろ、おれのめんどうをみるっていってやがったくせに、先にいっちまやがって……どうしてるんだか……」と、いった。

林武（一八九六——一九七五）

「林武にとって、かけがえもなく貴重な妻の幹子は、昭和四十八年の暮れに、脳血栓で倒れた。間もなく回復したあとの昭和四十九年の夏、ふたたび発作に見舞われて、林家の機能は停止したのと同然になった。それまでの五十年の間、絵を描くこと以外のすべてを妻にまかせきった林にとって、妻の発病は闇夜に杖を失うより重い負担となった。

　生活上の心労に、妻の看護と、画業の疲れも加わった。その間に、疲れ果てた林には病魔がしのびこんでいた」

（田中穣『現代画匠列伝』——「妻が育てた天才・林武」）

　それは肝臓ガンであった。

「昭和四十九年の秋の独立展に、ついに林は作品を仕上げることができず、コニャックの一びんを二日であけていた酒量が目にみえて衰えてきた。昭和五十年の三月には、体に異常を感じ出した。そして、その下旬に、ついに林は慈恵医大病院に入院した。

　診察に当った医師は、どうしてこれまで放っておいたのか考えられない、と驚いたそうである。若いころから持病の胃潰瘍も、血を吐きながら治し、悪所の病気さえ、〝ヨガ〟式運動で治し切った不死身のバイタリティを過信したことにもよった」

　と、田中穣は書く。

「亡くなる何日か前のことだった。三度目の見舞いにいった私は、その病室で、風呂にはいりたい希望を、ウロともクロともつかぬ発音でいいつづけるベッドの上のこの人に、『ついに不死身の林武も——』という残酷なこの世の痛ましさを思った。

　風呂にはいるのは無理だから、体をふいてあげましょう、いい子だから、そうしましょ、と看護婦たちが赤子をあやすようにしてその準備にとりかかったところで、私はひとまず病室を出たが、それから約四、五十分後、患者の懇望した〝入浴〟はすでに終っているはずの病室へ、私は帰り際の挨拶をしにはいってたじろいだ。

　ベッドの上の裸のその人の男性が、天に向っていきり立っていた。それは不死身の巨大さを見せて、怒りにふるえ泣いていたのだ」

　もっとも、性欲とは無関係に、ペニスの局部的疾患、神経系統の疾患、あるいは全身的疾患によっても陰茎強直症

をきたす場合があるが。
彼の死は、昭和五十年六月二十三日であった。

今東光（一八九八——一九七七）

作家にして平泉中尊寺貫主、今東光が虎の門病院の人間ドックにはいり、結腸ガンが発見されたのは、昭和四十六年九月末であった。医者は手術の用意をしたが、この権大僧正は手術をいやがって、夜中に病院を逃げ出した。
しかし、二年後の昭和四十八年十一月、国立がんセンターでやはり手術を受けなければならない状態に立ち至った。摘出されたピンポン玉大のガンをはったと彼はにらみつけて、「この野郎、ツクダニにして食ってやる」と、罵った。
当時手術にあたったがんセンターの小山靖夫博士は後にいう。
「腸は詰まり、尿もちゃんと出なくなっていて、かなり進んだS状結腸ガンでした。手術後はすっかり元気になられたが、二年半後に血尿が出て外来に来られた。すぐ、再手術したかったのですが、ベッドがふさがっていた。二、三日入院を待っていただいている間に『膀胱をとる手術なんていやだ』と自分で見切りをつけておしまいになり、二度と病院に来ようとなさらなかった。あのとき二度目の手術を受けていたら、今でもあの毒舌が聞けたかもしれません」
この二年半の小休止の間に、彼はふたたび健筆と毒舌をふるった。七十半ばを越えた作家とは思えない生産力であった。
しかし、ガンは右のごとく五十一年ごろから再発し、いったん、がんセンターを拒否したものの、結局五十二年七月、国立下志津病院に入院したときは、すでにS字結腸と膀胱とが癒着して穴があいていた。そして九月十九日に死去した。
外科医長の藤井武夫は語る。「雑誌などで知っている先生とは大ちがいで、まじめで、深い思考をする、心のやさしい人でした。自分で今度が最後と認識されていました。いつ剃られるのか、頭の毛がのびていることはありませんでしたね」
最後の死床において医者を感服させるのは、平生においても必ずや相当な人物である。その裏返しもまた真ならん。

山手樹一郎（一八九九——一九七八）

『桃太郎侍』など、明朗で平易な、いかにも大衆小説らしい大衆小説を書き、貸本屋の王様といわれた山手樹一郎は、孫の井坂洋子によると、
「私の知っている祖父は、ほとんど家から外へ出ず、作家仲間の会合はおろか、近所の煙草屋へもめったに出向かなかった。終日書斎に引きこもり、文机の脇にふとんが敷いてあって、書いては休み、休みながら考えてはまた起きあがって書くという風であった」
このように勤勉な多産ののちに、彼は老年を迎えた。彼女は記す。
「晩年は足腰も立たないほど弱って入退院を繰り返していたが、つましい感覚の人で、毎日好物のとろのお鮨を食べるのに、家計は大丈夫かと尋ね、それを聞いて胸がつまったと叔母がいっていた」
山手樹一郎はむろん高額所得者であった。
「どんなに稼いでも、それは家族がつかうものと頭からきめてかかって、自分自身でつかうことに遠慮を感じていたのかも知れない。家長の責任をまっとうしたのだろう。まだ肌寒い三月某日、日大病院で家族に見守られつつ七十九歳の生涯を閉じた」
昭和五十三年三月十六日午後三時十一分。病名は肺ガン。

マウントバッテン（一九〇〇——一九七九）

父はジョージ五世の従兄弟、母はヴィクトリア女王の孫という名門に生まれ、第二次大戦では東南アジア連合軍最高司令官としてビルマの日本軍と戦ったマウントバッテン伯爵には、晩年こんな挿話がある。
一九七四年、映画「オリエント急行殺人事件」の試写会のあと、彼は、彼より十歳年上で八十四歳になる原作者アガサ・クリスティと親しげに語りあった。それはこの映画のプロデューサーがマウントバッテンの女婿ブラボーン卿だったという縁からだけではなく、実に五十年前に発表されたクリスティの『アクロイド殺し』の度はずれたトリックのアイデアを提供したのはマウントバッテンであったからだ。（グエン・ロビンス『アガサ・クリスティーの秘密』による）
もしこの話がほんとうなら、マウントバッテン卿は、ビルマで日本軍を征伐したよりも人類の愉しみに貢献したこ

とになる。
二年後クリスティは死に、さらに三年後の一九七九年八月二十七日、アイルランドのムラモアで、マウントバッテン伯爵がヨットに乗りこんだところ、突如ヨットが爆発して、令嬢や娘婿ブラボーン卿とともに惨死した。事件後、北アイルランド過激派ＩＲＡ（北アイルランド共和国軍）から、自分たちの犯行である、という声明があった。
彼はエリザベス女王の夫君エジンバラ公の伯父にあたるので、九月五日行われた葬儀は英王室主催によるものであったが、日本関係者に対する招待状は出されなかった。ビルマにおける戦いで、戦後も日本に対する嫌悪感を消すことのなかったマウントバッテン卿の遺言によるものと伝えられた。
死後、去る一九六八年に彼を首謀者とする一団の陸軍将兵が当時のウィルソン労働党内閣を倒すクーデターを計画し、未遂に終った事実や、マウントバッテン夫妻が双方とも生涯ほとんど別の女性や男性とベッドを共にして過したという奇怪な事実が曝露された。

沢田美喜（一九〇一――一九八〇）

三菱の総帥岩崎久弥の長女として生まれ、外交官夫人として海外生活中カトリックの信仰を得た沢田美喜は、昭和二十三年、占領軍の落とした混血児を収容する「エリザベス・サンダース・ホーム」を自力で大磯にひらいた。
以来二千人に及ぶ孤児を育てたのは、喜怒哀楽をむき出しに子供たちにたたきつけながら、「私こそこの子らの母」といいきる彼女の情熱と、財産のすべてをそそいで――庭の石燈籠や庭石を売ってまで――悔いぬ彼女の意志力によるものであった。当時の日本に、これに匹敵する行為をした宗教人、宗教団体は、ほかに一つもなかった。皮肉好きの大宅壮一も、彼女ばかりは真の女傑である、と讃える。
その後美喜は三十数回、北米南米に飛んだが、すべてこの事業に関連した旅であって、プライベートな外国旅行ができるようになったのは、晩年の数回だけであった。
美喜は昭和五十五年晩春、グループ観光旅行に加わってスペインに出かけた。中年からの持病の高血圧と糖尿病が昂進して、出発前からテレビを見ながらよく居眠りすることなどがあったが、この旅行で地中海のマヨルカ島についたとき、発熱してホテルから動けなくなり、五月五日、パルマの小さな病院に入院した。
以下、小坂井澄『これはあなたの母』より要約。
――入院の翌日、激しい心臓発作を起し、「あたし、死ぬの?」と洩らした。それでも八日午後、東京から長男の信一が到着したときには大分持ちなおし、信一の顔を見ると、「あんた何しに来たの」と、いつもの調子で憎まれ口を叩いたほどであった。
たしかに、一時は、美喜の顔にも、危機を乗り切ったとの安堵感があらわれていた。ベッドから起きて、安楽椅子に座る練習を始めようというところにまでなった。
しかし、十日ごろから、ふたたび病状は悪化を見せた。十一日、日曜の夜は寝苦しいとベッドの上で身を輾転とした。
十二日午前七時二分、美喜はこと切れた。苦しみの跡はなく、安らかな顔であった。

横溝正史（一九〇二――一九八一）

昭和八年三十一歳のとき最初の喀血をして以来、横溝正史はほとんど生涯間歇的に血を喀いた。のみならず、それとほぼ同時期に乗物恐怖症という神経症を得て、晩年に至るまでほとんど外出出来なかった。
その病気と、閉じこめられた生活の中から、彼以前までの、本格推理小説と日本の風土はマッチしないという定説を打破り、むしろこれを融合させることによって成功した『本陣殺人事件』『獄門島』をはじめとする、厖大な「探偵小説」の金字塔を築きあげたのである。坂口安吾はこれを世界の推理作家で「ベスト・ファイブにランクしうる才能」と評した。
そして晩年、これらの作品が角川文庫に収録されるに至り、突如空前のベストセラー化する奇蹟が起り、それに鼓舞されてほとんど老廃したかに見えたその創作力もまた奇蹟的に復活し、昭和五十四年七十七歳にして『病院坂の首縊りの家』という長篇を完成した。
昭和五十四年十一月、このとし喜寿を迎えた横溝に、山田風太郎は「先生より御長寿の作家に次の人々があります。西条八十（満七八）、谷崎潤一郎（七九）、幸田露伴、永井荷風（八〇）、滝沢馬琴、山中峯太郎、野村胡堂（八一）、内田百閒（八二）等。まだまだお若いデス（！）」と、当人は激励のつもりで無遠慮なハガキを送った。
そのころ横溝は右のような病歴を持ちながら、酒量にお

いても食欲においても、山田をはるかにしのぐものがあったから、山田はそんなことを書いたのである。
　これに対して横溝は、「朝日新聞」の「横溝正史のてれづれ草」と題するコラムに、「私より二十歳若い風ちゃんの気性をよく知っている私は、このはがきを読んでもけっして悪い気持はしなかった」と、かえってなだめたが、「しかし、これでみると私の余命は長くてあと五年、早ければ来年あたり、ポックリということも考えられる」と書いた。これを読んで狼狽した山田は、再度「八十二歳までとどめたのは、ハガキがそこで尽きたからで、むろんそれ以上御長命の方々はたくさんあります」と書き送った。
　しかし横溝はさらに、「これら高名な諸先輩と比較してもらっただけでも光栄の至りと感謝している。ただ惜しむらくはこれら諸先輩が、何歳まで筆を執られるという天職を全うされたかわからないことである。五月二十四日生まれの私は現在ちょうど七十七歳の半ばだが、まだまだ筆を執れるというあかしに、このコラムを書いている」ノダと豪語した。
　その通り彼は、その豪語にそむかず、さらに五十五年に至り、『悪霊島』という長篇を書きあげた。
　彼はまた生涯自分を苦しめた肺結核さえ全治したむね医者から太鼓判をおされたとよろこんだが、しかし彼の身体にはすでに、その病気とはべつのガン細胞が結腸に忍びよっていたのである。
　昭和五十五年夏、彼は突然軽井沢の別荘で腹痛を訴え、腸狭窄（ちょうきょうさく）の診断を受け、手術の結果人工肛門をとりつけることになったが、実はガンに冒（おか）されていたのであった。
　それでも彼は、翌五十六年の六月、第一回横溝正史賞授賞式にはきげんよく出席し、一応元気に見えたが、秋ごろから入院のやむなきに至り、その年の暮十二月二十八日午前五時十九分、生涯その病身を看取（みと）り、半身というより同体ともいうべき夫人に手を握られたまま息をひきとった。
　横溝正史は山田の書いた「八十二歳」の域に達することが出来なかったのである。

武見太郎（たけみたろう）（一九〇四――一九八三）

　武見太郎は戦前から銀座の診療所に、鬼面人を驚かす「現役の大将、大臣、急患優先」の札をかかげ、一方で縁戚の吉田茂をはじめとする政財界人、一方で岩波書店につながる高名な文化人たちの主治医となった。本『図巻』中にも、岩波茂雄、中谷宇吉郎、河野一郎、幸田露伴など、

彼が死水をとった有名人は数多い。
　しかし彼の名を有名にしたのは、それよりも昭和三十二年から二十五年間、日本医師会会長として君臨し、開業医を擁護して、保険医総辞退など横車を押し、歴代の厚生大臣をアホ、バカ、マヌケ呼ばわりして「武見天皇」「喧嘩太郎」の異名をとった、傍若無人の剛腹さであった。その結果、開業医の収入の七二パーセントには税金がかからないなどのいわゆる医師優遇税制を成就したが、そのため、財を積むことにのみ熱中する医者たちを生み出して、その功罪は相半ばする。
　その武見も、七十六歳の昭和五十五年春ごろから腰痛を訴え、五月に入院し、開腹手術を受けるに至った。彼は「名医」として定期検診による病気の早期発見をモットーにしていたくせに、彼自身はそれまで人間ドックにはいったこともなければ、定期検診を受けたこともなかった。
　手術の麻酔からさめると、彼は「おれはガンではなかったのかね」ときいた。手術した院長は、「いや、出血性ポリープ（良性腫瘍）でした。よかったですね」と、答えた。武見はこの言葉を信じて、少しも疑わなかったという。
　しかし、それは胃ガンであった。
　手術後しばらく小康を保ったかに見えたが、秋になって黄疸（おうだん）症状が起り、築地がんセンターで再手術を受けた。「自費診療」で有名な武見太郎であったが、自分のときは保険証を持っていった。
　ガンは総胆管に転移していることが判明したが、それは本人に知らされなかったので、武見はガンの疑いについてはなお半信半疑のていであった。
　しかし、わがままな患者で、まずい病院食には抵抗し、「自分の好みに合った食事をとる自由は、もっと寛大に病人に許されなければならない」といって家から御馳走をとり寄せた。また、歩行が禁じられている時期に、勝手に病院の廊下を歩きまわり、看護婦が「許可があったのですか」ときくと、「おれが許可したんだ」といった。漢方薬を掌一杯に飲んだりして、「医者のいうことは神さまのねごとだと思え」といった。
　この再手術後、しばらく健康をとり戻したかに思われたが、昭和五十八年夏ごろからまた衰弱が甚だしくなり、十一月下旬母校の慶応病院に入院したが、たった一晩で帰宅した。
　彼は「老人には在宅治療が最高だよ」といい、また「入院してみて、はじめて病人は弱いものだということがわかったよ」といった。

しかし十二月十八日、また容態が悪化して再入院し、二十日午前零時五十分に死んだ。死後解剖してみるとガンは肝臓膵臓にひろがり、背骨にまで及んでいた。

八十歳で死んだ人々

> 死ぬとはとっても手間のかかるものだな。
>
> ――アナトール・フランス――

釈迦（前四六三―前三八三）

ネパールの一王族の太子として生まれながら、二十九歳で出家し、三十五歳で悟りをひらいた釈迦――ゴータマ・シッタルタは、以後、ネパールからインド北部を伝道し、八十歳のとき、その旅の途上、クシナガラ近くで病んだ。信者の捧げた茸の食あたりであったという。

死期の近づいたことを悟った釈迦は、弟子のアーナンダに命じて、サーラ樹（いわゆる沙羅双樹）の林に縄床を敷くことを命じた。

釈迦は、頭を北にし、右脇を下にして横たわり、手で枕し、両足を重ねて臥した。そして弟子たちに、なお心をゆるめることなく修行するように告げて死んだ。二月十五日夜半であったといわれる。

このとき風はやみ、鳥獣は声をとめ、樹木も液汁を流し、木々の花は散ったという伝説がある。

釈迦の生死の年代については諸説があるが、最も学問的な年代説と認められている中村元説による。

木のもとに臥せる仏をうちかこみ
象蛇ども泣き居るところ　　子規

プラトン（前四二七―前三四七）

インドで釈迦が死んだとき、ギリシャでプラトンは四十四歳であった。

彼は生涯、自分の哲学的理想をシシリー王国で実現しようと努力したが成功せず、晩年は政治をまったく断念して、アテネ郊外の学苑アカデミーで学問的著作のみに没頭した。

彼が二十八歳のときに逢ったその師ソクラテスの死の様相は、彼によってみごとに書き残されたが、彼自身の死の様相は明らかでない。

一説に、最後の大著『法律篇』を、「書きながら」死んだという。脳溢血か、心筋梗塞か。

ちなみにプラトンとは大男の意味で、少年時代からの彼の綽名であって、彼の本名はアリストクレスである。

世阿弥（一三六三？―一四四三？）

少年時から能の天才として、かつ絶世の美少年として将軍足利義満の寵童となった世阿弥の後半生は、悲劇的というより悲惨の光につつまれている。

彼が四十五歳のとき義満が急死して、義満にうとまれた義持があとをつぐと、義持はあてつけのように田楽の増阿弥をひいきにして世阿弥をしりぞけ、さらに六十五歳のときその弟義教があとをつぐと世阿弥の甥にあたる音阿弥を重用して世阿弥を迫害した。あまつさえ、七十一歳にして彼は佐渡へ流された。この異常な迫害の理由については諸説があるがたしかなものはない。

すでに彼はその二年前、六十九歳のとき、後継者としてまたなく頼んだ長子元雅を薄運のうちに失っている。

「思わざる外、元雅早世するに依って、当流の道絶えて一座既に破滅しぬ」

という悲嘆の中に佐渡に流された老世阿弥は、義教の横死によって、彼自身の言葉によれば「不思議にも」許されて京に帰ったが、その正確な年代は不明である。どうやら女婿の金春禅竹に養われたらしい。

壮年時、「たとい、天下に許されを得たる程の為手も、力なき因果にて、万一少し廃るる時分ありとも、田舎・遠国の褒美の花失せずば、ふっと道の絶うることはあるべからず。道絶えずば、又、天下の時に逢う事あるべし」という楽観をいだき、また「いかなる上手なりとも衆人愛敬(大衆の支持)欠けたる所あらば、寿福増長の為手とは申し難し」という信念を持っていた世阿弥だが、晩年は、「かようの能の味わいは、末の世に知る人あるまじければ、書き置くもものぐさき」という、俗世とも大衆とも孤絶した境地にあった。

嘉吉三年八月八日に、大和の飛鳥に近い越智の庄で影の消えるように死んだらしいということしかわかっていない。

さて世阿弥の右の言々をふくむ著書が『風姿花伝』だが、この日本はおろか世界でも最高の芸能秘伝書は深く観世家に秘められ、その門外に出たのは明治四十二年、史家吉田東伍によってであった。

実に世阿弥の死後四百数十年間、日本人はこの秘伝書の存在を知らずして――多くは世阿弥その人をも知らずして――能を舞い、能を鑑賞していたのである。そしてまた世阿弥自身の命日が確定したのも、彼の死後五百数十年後の昭和三十年代にはいってからであった。

「命には終りあり、能には果あるべからず」

――世阿弥『花鏡』――

尾形乾山(一六六三――一七四三)

輪王寺宮の庇護で江戸の入谷に窯場をひらいた老乾山は、元文三年、宮が薨去するとともにめっきり衰えた。仕事もせず、病んでも薬も飲まず、また世話をする人もなく、ひとり老いさらばえて、住み荒らした江戸の巷の長屋に影のように生きていた。

寛保三年(将軍吉宗時代)六月二日、その長屋の戸がいつまでも開かないので、近所の人がのぞいてみると、乾山はひとり死んでいた。辞世が書いてあった。

「放逸無慙八十一年、一口呑却、沙界大千

うきこともうれしき折も過ぎぬれば
ただあけくれの夢ばかりなる」

この偉大なる陶工の生涯はほとんど不明だが、彼はいかなる「放逸無慙」の人生を送ったのであろう?

近所の人々は、この老やきもの師が、尾形光琳の弟で、光琳と相ならぶ大芸術家だということをだれも知らなかった。ただ輪王寺に多少ゆかりのある者だということだけしか知らなかった。そこで輪王寺の用人にかけ合って、一両下げ渡してもらって、寂しい葬式をいとなんだ。

カント(一七二四――一八〇四)

カントは虚弱で筋骨薄弱であった。頭だけ大きく、背は一メートル五十センチくらいで、胸は扁平で、痩せこけて、脊柱側彎症の気味があった。

それが八十歳の長命を保ったのについては、友人の哲学者ヤハマンは、「彼は自然から生命を無理取りしたのだ」という。すなわち、それは彼の極度の摂生と規律正しい生活によるものだというのである。

カントは一生ほとんど生まれ故郷のケーニヒスベルクを離れず、結婚もせず、旅はおろか、隣町のダンチヒにさえゆかず、ただ同じ町の同じ地点を同時刻に通過する散歩だけを繰返す日々を過した。

彼は夏も冬も正確に五時に起床し、食事は、昼飯はバターとチーズを豊富に使い、数時間をかけてよく食べたが、朝と夕は葡萄酒と水だけですませた。その葡萄酒も適量を厳重に守った。書斎には寒暖計を置いて、一定温度を保った。夕方には、よほどの悪天候でないかぎり、必ず日課通り正確な散歩をした。そのとき彼はいつもブロンドのかつらをかぶり三角帽をかぶるのを常とした。それで彼は、虚弱な肉体にもかかわらず、慢性の便秘に悩まされる以外は、一生ほとんど病気をしなかった。

彼にとって存在するのは「それを思うごとに感嘆と崇敬の念をもって満たされるもの、天に輝ける星と、わが内なる道徳律」だけであった。

晩年に達すると、カントはケーニヒスベルクの高齢者の年齢をすべて記憶していて、毎年自分が次第に昇格して、「先輩」が少なくなってゆくのをたのしみとした。

さて、そのカントも、死の半年前、すなわち一八〇三年の夏、ヤハマンが訪れたとき、彼がだれか、もうわからないようになっていた。

ヤハマンはいう。「私が室内にはいるや否や、腰の屈ん

だ老人が、ふらふらする足元で椅子から立ち上がって私を迎えました。私は走り寄って、悲痛な気持でその胸に抱きつき、子供のような接吻をその唇に押しつけました。私は再会の喜びを述べました。するとこの老人は——生気のない探るような眼で私を見、鄭重な様子をして、どなたでしたろうか、と尋ねました」

ヤハマンは、自分たちが協力してやった研究や、いろいろな想い出や、共通の友人をあげたが、それらはまったくカントの心に痕跡を残していないことを知った。

ただカントは、自分の身体具合のことについてはとぎれとぎれに語ったが、それもしばしば言葉につまった。そこでうしろから妹が（カントは九人兄弟で、そのうちただ一人生き残って、養老院にはいっていて、カントの看護のために呼ばれていた七歳年下の妹バルバラであった）つまった言葉を教えてやった。

「神よ、人間とは何であり、人間における偉大とは何でありましょうか」

と、ヤハマンは書く。

「この偉大な精神が、かつてはその兄の精神を決して理解することのなかった老いたる妹の口から、まったく平俗な思想をいい現わすために一語一語を教えてもらわなければならなかったのです」

カントは七十を越えてから徐々に精神的肉体的に衰弱し、次第にその老衰の速度を早めて、あの規則正しい食事も不規則になり、バターパンとチーズだけをむやみにむさぼり食うようになっていた。

この一八〇三年十月八日は特にそれが甚だしく、妹がやめさせようとすると立腹した。翌日、突然倒れ、失神状態のまま食ったものを吐いた。

十二月には、自分の名前も書けなくなった。アルファベットを教えても効果がなかった。

「さて二月が来た。かつてカントは、二月は日数が少ないから苦痛も最も少ないだろうといったが、カントはこの月に生涯で最も多くの苦痛に耐えなければならなかった」

と、やはり友人の学者ヴァシアンスキーは記す。

「かつて自分を痩身の極限だといったその身体は、まったく、法外に痩せこけてしまった。カントはほとんどもうわずかに植物的生命をつないでいたに過ぎなかった。……二月三日には、生命のすべてのゼンマイがすっかりゆるんでしまい、まったく伸び切ったもののように思われた。……カントの生存は、八十年の運動の後の一種の遠心力の作用としか見えなかった」

それでも医者が来ると、彼は譫妄（せんもう）状態としか見えない、とりとめのない言葉ながら敬意を表し、医者が坐らなければ自分も腰かけず、みなを感動させた。

しかし、この日以来彼は何も食べず、無理に食べさせても口から出した。六日からは、眼をすえて坐っているだけで、ただ影法師のような存在となった。七日以後には、ベッドから出られなくなった。

十一日の夜に至って、「何かの必要があったものと見えて寝床を離れようとする様子を示し、起き上ろうとあがいたけれど、それは無駄であった。……カントは眠らなかった。容態の衰弱といわんよりはむしろ昏迷であった。スープをいれて差し出された匙（さじ）をしばしばおしのけた」

と、ヴァシアンスキーは書く。

「しかるに夜中の一時頃に、自分で匙の方へ向いた。私はこれは渇（かわ）いたのだと思い、葡萄酒と水を甘く割って差し出した。カントは口をグラスに近づけた。そうして衰弱のためもはや飲み物を口にふくむことができなかったので、それがごろごろ鳴ってすっかり下りてゆくまで、手で口をとじていた。カントはもっと欲しそうだったので、私は幾度も差し出したが、ついにそのために元気づいて、もとよりはっきりはしないが、それでも私にはまだわかるように、

『エス・イスト・グート』（よろしい）

と言うことができた。これがカントの最後の言葉だった」

これが「すべてよし」という大哲学者カントの最後の言葉として有名になったが、事実はおそらくただ「うまい」という意味に過ぎなかったろう。

「十二日、午前十時、カントの様子の変化はいちじるしく目立って来た。眼はまったくすわっており、蒼白い死の影が顔や唇を彩った。……呼吸がとまった。上唇のひきつるのがわずかに認められた。つづいて、弱い微かな呼吸を一つした。それっきりもう呼吸がなくなった。脈搏はなお二、三秒つづいたが、一層弱くなり、もはや感じられなくなった。……機械の最後の運転が停止した。あたかもそのとき十一時が打った」

埋葬のしかたについては、カントはかねてから書きものを残していた。それは早朝ひそかに、ただ少数の食事友達だけに見送られて埋葬されたいというのであったが、ヴァシアンスキーはその遺言を一目見ただけで、そんなことは不可能だと考えた。

二月二十八日、ケーニヒスベルクでは、かつて見たこともないような敬意と荘厳さにみちた大がかりな葬儀が行わ

れた。（ヤハマン『カントの生涯』木場深定訳より）

井上　馨（一八三五——一九一五）

元治元年、密航留学中のロンドンで馬関戦争の報を聞くや、急遽日本に馳せ戻り（といっても当時のことだから三カ月近くかかったが）、長藩を説いて大過なからしめたが、同年俗論党に襲撃されて瀕死の重傷を負った。時に志道聞多はまだ二十九歳であった。

この勇敢無比の志士が、維新後、時に奸物の名を冠せられる井上馨となる。彼は明治政府の元勲として国家のために奔走したが、その傍若無人の性格は私欲の方面でもいかんなく発揮されて、尾去沢銅山事件とか藤田組贋札事件とかに悪名を残し、そのためついに一度も首相になることが出来なかった。

しかし、政界裏面にあって元老としての存在は大きく、生命力もまた強靭であった。

明治四十一年、七十三のとき彼は腎臓炎から来た尿毒症のためいちじ重態に陥ったが、奇蹟的に回復した。

井上は若いころから毎朝冷水浴をするのを健康法としたが、この大患後はさすがに冷水摩擦のみに改めた。

大正二年一月二十七日午前六時過ぎ、彼はこの冷水摩擦をしていて、突然倒れた。家人が駈けつけてみると、左半身が不自由になっていた。しかし彼は、自分で壁を伝わりながら食堂にゆき、朝食をとりはじめた。主治医が来て、食事よりもまず安臥を命じると、彼は大声で、「具合が悪いから、食事をしておくのだ」といって、ハムエッグス一皿とオートミール一皿を食い終えた。

爾来、さまざまな療法を試みたが、病状は一進一退であった。それでも彼は茶会を催したり訪客に逢うことをやめず、人が静養を勧めると、「生きていればこそ、いろいろ面白くないことを聞く。おれは早く死にたいのだ。かまうな」と、どなりつけた。これが晩年の彼の口ぐせとなった。

この状態で二年経過し、大正四年にはいり、春には興津の別荘で例年のごとく貴顕三百人を招いて大園遊会をひらいたり、夏には海水浴をしたりした。彼は晩年に至るまで、てんぷらやすっぽんなどの濃厚な食事を好んだ。

八月三十一日、興津の別荘で食後の雑談中、午後二時ごろ椅子を立とうとして立てなくなり、あわてて臥床させられた。夜、東京から主治医が呼ばれて来ると、「何しに来たか」といい、「あっちへいって休め」といった。以前から彼は、無理に診察されると激怒するので、医者はやむな

く退いた。

このころ井上は、全身に湿疹を発していたので、帝大皮膚科の土肥慶蔵博士も呼ばれた。

翌九月一日、彼は土肥博士に「こんなに皮がたまったゾ」と、コップを見せた。毎日剝離する皮膚を自分でコップにためて、それが一杯になっていたのである。少々悪趣味の気味がある。

それでも彼は、病床で朝食をとることをきらい、その日も車椅子で食堂に運ばせ、平生通り、ハムエッグス二皿、オートミール一皿、パン二片、牛乳二〇〇ccを平らげた。

午前十時半ごろ、手を食卓につき、「ドッコイセ」といって立とうとしたとき、彼はまた倒れ、そのまま人事不省におちいった。そして十一時十一分に息をひきとった。

彼の湿疹は尿毒性皮膚炎であって、死因は尿毒性心臓麻痺であった。

アナトール・フランス（一八四四——一九二四）

『神々は渇く』『タイース』などを書いたアナトール・フランスは、七十九歳のとき若い友人にいった。

「私の人生は終った。今ではもはや、死は時間の問題に過ぎない。若いころと同じようないいかたをしていいなら、虚無だけが私を待っており、私のあとには何も残らないと信じている。私は完全に消えてしまうことに、どんな怖れも持っていない」

それまで彼は病気一つしなかったが、そのころから左手の神経痛、動脈硬化症状などが起りはじめた。しかし、いずれも重いものではなく、また回復した。

八十歳の夏から病気にかかり、その苦しみが一月ばかりつづいた。ある日、彼は、

「死ぬとは、とても手間のかかるものだな」

と、つぶやき、また別の日には、医者に、

「早く死ねるように、何か薬をくれないか」

と頼み、医者がことわると、

「まだそんな偏見があるのかね」

と、嘆いた。

やがて彼は、人の訪ねて来るのを好まなくなった。自分の姿を見て人に悲しい思いをさせるのを望まなかったからだ。しかし彼の黒くかがやいている眼は、依然光を失わなかった。

十月十日から昏睡状態におちいり、十二日に最後の意識が甦った。彼は妻に、やさしい声でいった。

「もうお前にも逢えないね」

その夜、苦痛にさいなまれながら、八十歳のアナトール・フランスは、「ママン、ママン」とつぶやき、息絶えた。

「もし私が神であったなら、青春を人生の最後に置いたであろう」

――アナトール・フランス――

H・G・ウエルズ（一八六六――一九四六）

貧しさのために十四歳で反物屋の丁稚(でっち)奉公に出されたH・G・ウエルズは、刻苦の独学の後、二十九歳で『タイム・マシーン』、三十一歳で『透明人間』、三十二歳で『宇宙戦争』という風に、SFの鼻祖(びそ)となる作品を書き、三十代にして大ベストセラー作家となったが、以後小説の世界に安住せず、『世界史大系』『生命の科学』などの啓蒙的大著を著わして、通俗的ながら世界的な思想指導者となった。

超人的な著作活動のみならず、実生活上も彼は、一夫多妻主義といわれるほど精力絶倫で、また絶えず出版社や批評家、はては友人とも喧嘩を繰返す戦闘的生涯を送った。

一九三八年十月三十日、オーソン・ウエルズが彼の『宇宙戦争』を脚色してコロンビア放送からラジオ放送し、その迫真の演出にアメリカじゅうがパニックを起したときも、原作者のH・G・ウエルズは自分の名声を傷つけられたと立腹してかみついたほどであった。

しかし、そのウエルズも、一九四〇年七十四歳のとき、彼の持論である世界連邦の講演のためアメリカを旅行したが、そのときの姿をサマセット・モームはこう描いている。

「彼は年をとり、疲れて、萎(しな)びているように見えた。いつものように肩をそびやかしていたが、どこか無理をしているようであった。彼の講演は失敗であった。民衆は彼のいうことに耳をかそうともしなかった。……彼は傷つけられ、失望していた。過去三十三年間いいつづけてきたことと同じことを話しているのに、なぜ民衆が彼に対して寛容でないかということを彼は理解できずにいた。河の水があふれ、彼を土堤(どて)におしあげてしまい、そのまま彼をおきざりにして、水がひいてしまったのである」

すでにその前年から第二次世界大戦は始まっていた。ウエルズの最後の「人類の未来」観は暗いものであった。

戦争中から、H・G・ウエルズは次第に弱りはじめた。

それでも彼は、最後のライフワーク『世界史概観』の執筆をつづけた。

彼は神経炎、心臓病、糖尿病等に悩まされたが、最後に彼をとらえたのは肝臓ガンであった。

戦争が終った年の翌年「八月の初めごろから、H・G・ウエルズは部屋にとじこもりきりになったが、調子がよさそうに見えたので、家族のものは彼が持ちなおすのではないかと期待していた。臨終はまったく突然におとずれたが、おだやかなものであった。一九四六年八月十三日木曜日の午後、彼は看護婦に、いつものように昼寝をしたいといって彼女をさがらせた。それから数分後の四時十五分に、彼は息をひきとったのである」（ノーマン&ジーン・マッケンジー『時の旅人』村松仙太郎訳より）

幸田露伴(こうだろはん)（一八六七――一九四七）

昭和十九年秋、露伴は空襲警報でただいちど庭さきの防空壕にはいってから身体の具合が悪くなり、それ以来死に至るまで起(た)つことがなかった。二十年春、信州に疎開したのも、担架にのせられたままであった。

このころ露伴は、特攻隊の話を聞き、「若い人がなあ……」といって、涙をこぼした。

戦争は終ったが、東京小石川の蝸牛庵(かぎゅうあん)は空襲で焼かれていたので、娘の文(あや)が探し出した市川菅野の小さな陋屋(ろうおく)にはいった。

昭和二十二年春、露伴は口述で『評釈芭蕉七部集』を完成した。一日じゅうしゃべったあと、夜、ひとりになってもなおだれかと話していた。いったいだれと話しているのか、と訊(き)くと、露伴は、「女と話をしていたのだ。この床の間の隅から出て来るのだよ。知らない女の人だ」といった。

夏が来て、七月十一日夜半、露伴は血を吐き、朝になってもとまらなかった。彼は娘の文に、口中にたまった血塊を指で出したり入れたりして見せて、

「おまえは血を怖(こわ)がるが、おれは驚きはしない」

と、いった。

診察の結果、局部的な歯からの出血だということがわかったが、それ以来衰弱の度を深めた。

七月二十一日、ビールでも飲んでみるか、とつぶやいたので、苦労してそれを入手して吸飲みで飲ませると、露伴は「おいしいもへったくれもあるもんか。吸飲みで飲むビールなんかくそ面白くもない。まるで牛の小便みたようにとろとろと出て来やがらあ」といって、すぐにやめた。そ

のあとで発熱した。
二十四日から露伴は呼吸困難を起すようになり、ときどき意識を失った。かかりつけの医者武見太郎が、「一雨来てくれると、ずっとよくなられるんだがね」と、空を仰いで長嘆息した。雨のない暑い夏であった。
二十七日、露伴はそばに来た文を、「歌子かい」と、なつかしそうに呼んだ。それは明治四十五年、十二歳で死んだ長女——文の姉にあたる——の名であった。
二十八日のあけがた、露伴は娘の文と話し、「じゃ、おれはもう死んじゃうよ」といった。この日の父の姿を文は記す。
「骨太(ほねぶと)なだけに筋肉が萎(な)えはじめては、胸や肋骨がむごたらしく浮き出し、鎖骨の窪(くぼ)みは気味が悪かった。胃部が断崖のように落ち窪んで、腹がたふたふしていた。酒焼けの衿(えり)もとがV字型に赤く、全身美しく白い皮膚だった。これが私のよく知っている四十余年間の父の、臨終の肉体だった」
二十九日、武見太郎が病状経過を口述した。「齦(はぐき)ノ出血ヒドク、ソレニヨル嚥下(えんげ)性肺炎ヲオコシタガ、コノ発熱ハ約一週間ニシテ消退シタ。シカシ多量ノ出血ノタメ胃腸ヲ害シ、カツ心臓ノ衰弱モ甚ダシク、加ウルニ暑サノタメニ二十七日ヨリ狭心症様(よう)ノ発作ヲ起シ、重態ニ陥ッタ」
三十日朝、武見が往診に来て注射をし、娘の文と岩波書店の小林勇が送って玄関まで出たとき、見舞いに来ていた文芸評論家の柳田泉が病室から追っかけて来て、「先生が大変だ」とさけんだ。
みなあわててひき返した。露伴の顔に現われた死色は、みるみる全身にひろがった。武見が脈を見て、「御臨終です」といった。文が両手をついて、
「お父さん、お鎮(しず)まりなさいませ」
と、お辞儀をした。
九時十五分、露伴は息絶えた。黒い眼を少しあけ、薄く笑ったような死顔であった。そのあと、待ちに待っていた雨が一過した。

トーマス・マン（一八七五——一九五五）

二十六歳のときに発表した『ブッデンブローク家の人々』以下の作品により、五十四歳でノーベル賞を受けたトーマス・マンはナチスをきらって、一九三三年二月スイスへ亡命、一九三八年六十三歳のときアメリカに亡命し、四年がかりの大作『ファウスト博士』などを書きつづけたが、七十歳のとき肺ガンで右肺の肺葉一枚半と肋骨一本を

切除するという大手術を受けた。手術は成功し、その後、七十七歳のとき、こんどは右傾化の嵐に襲われたアメリカを去って、スイスに移住した。
その七十七のときでも、彼はいくつかの創作プランを持ち、「たとえ私が百二十歳になったとしても、アイデアに不足することはないだろう」といった。
最後の年となった一九五五年の一月に、彼は知人に手紙を書いた。「騒々しい年になりそうです」。それはドイツ各地で予定されている巡回講演のことであった。「そのあとすぐに私の八十歳の誕生日が来ますが、私をこれ以上あまり長生きさせないように、ありとあらゆる祝賀行事が行われそうな気配です」
この巡回講演は、果せるかな、予想もできなかったほどの多大の栄誉を受けて一種の凱旋行進となった。
その旅行の途中、彼が十八歳のとき何のみれんもなく捨てた故郷、バルチック海に面する港リューベックの町を訪れた。若いころ彼は、いつか「土地の人びと」はきっとこう耳打ちし合うことだろう、と皮肉に書いた。「学校でもとびぬけて怠け者の、いたずらばかりしていたあの小僧トーマス・マンが、れっきとした文学史に残るような詩人だなんて、そんな馬鹿なことがあってたまるものか」
その予言の通り、彼はリューベックの名誉市民として迎えられ、彼はこの再会を「暮れなずみゆく生涯の偉大で感動的な瞬間」として感謝した。
晩年のマンについて、夫人のカーチャはいう。
「呼吸困難をおぼえるようなことはありませんでしたが、それでもものを書くのにいろいろな工夫をしました。背中が痛くなるというので、机にむかって書くのをやめ、ソファの片隅に坐り、左腕を肘かけで支え、原稿用紙を下敷きにのせて、膝の上において書きました。最後までこの姿勢で執筆しましたが、それ以外は階段の上り下りにも不自由はありませんでした。……ある日、ホテルのエレヴェーターが動かなかったことがありましたが、それでも彼は『じゃあ、階段を上ってゆこう』と言ったものです。彼はほとんど死ぬ直前まで、こういう調子でした」
それほど足の丈夫だった彼も、動脈硬化に原因する血栓による足の静脈炎を起して歩けなくなり、一九五五年八月十二日午後八時、心筋梗塞のため、チューリヒで死んだ。

真崎甚三郎(まざきじんざぶろう)（一八七六——一九五六）

陸軍大将真崎甚三郎は、いわゆる昭和軍閥の血で血を洗

う権力闘争の中の暗黒星の観がある。

荒木貞夫とならび陸軍皇道派の巨頭として革新派青年将校の信仰のまととなり、昭和十一年、その青年将校らが決起した二・二六事件の目的は真崎内閣を作ることにあった。事実、彼らの理念的指導者北一輝は「国家人なし、勇将真崎あり」という霊示をかかげ、真崎自身、叛乱軍のたてこもる陸相官邸に乗りこんで、「お前たちの心はヨオックわかっとる。ヨウーックわかっとる」と叛乱軍を慰撫激励したほどであった。これが少壮将校らの下剋上に阿諛する彼の象徴的言辞として後世まで残ることになる。

しかるに天皇の激怒により、叛乱軍が鎮圧され、真崎もまた軍法会議にかけられるや、彼はあくまでも知らぬ存ぜぬでおし通し、卑劣笑止、奸佞邪智とも形容すべき態度を示したと世に伝えられる。しかし、一年半の禁錮ののち、結局「罪状明白なれども、証拠不充分にして無罪」という不可思議な判決によって無罪になったが、予備役に退かされた。

しかし、これで真崎に対する声望は一挙に下落した。

この二・二六事件を逆用して陸軍軍閥はいよいよ恐怖集団の威をほしいままにし、猪武者のごとく太平洋戦争に突入し、結果的に統制派皇道派を問わずそのほとんどがあるいは戦死し、あるいは処刑されることになる。そして退役していたため戦争自体には関係なかった真崎も、軍閥の元凶として巣鴨に収監される羽目になったが、二年後釈放された。

以後彼は影のごとく生き、来客に「朝日を拝む者はあっても、夕日を拝む者はない」と自嘲したが、しかし二・二六事件について自分は関係もなければ責任もない、自分は対立者たちの陰謀の犠牲者だといいつづけ、白髪鬼のごとくその陰謀者たち——多くは彼より先に死んだ——を呪いつづけた。

——またながく後年に至るまで、真崎の汚名をすべて悪意とデマによるものとして、彼をなお信奉しつづける人々もあった。

最後の二年間喘息に苦しみ、二・二六事件からちょうど二十年後の昭和三十一年八月三十一日午後三時十五分に死んだ。

太平洋戦争で、次男はフィリピンで、三男はビルマで戦死していたが、長男は外交官になっていた。昭和五十年、天皇がアメリカを初訪問したとき、ホワイト・ハウスその他で影の形にそうごとく天皇のために通訳の大任を果したのは、かつて天皇の怒りを買ったという真崎大将の長男たる右外交官の真崎秀樹であった。

老いたるその母——甚三郎の妻信千代は、そのテレビを見ていった。

「御聡明な陛下が、まさか逆臣の子をお側近くお使いになるようなことはございますまい」

永井荷風（一八七九——一九五九）

昭和三十二年、荷風は市川市八幡の四十坪の敷地に十二坪の家を新築し、そこにひとり住んで、食事は主として浅草のアリゾナという店で、面倒なときはすぐ近くの京成八幡駅裏の大黒屋という大衆食堂でとるのを常とした。

三十四年三月一日、アリゾナで昼食を食べてから、歩いているうち、雨の中で彼は転んで膝をしたたか打った。そこから雷門まで、常人なら数分の距離を数十分かかって歩き、雷門からタクシーに乗って帰宅した。この日が、彼が浅草へいった最後の日であり、以来彼はほとんど臥床して暮すようになった。

「四月二十九日。祭日。陰」とあるのが、『断腸亭日乗』の最後の文字である。

その日、彼は午前十一時ごろ大黒屋にゆき、酒一本を飲み、カツ丼をきれいにたいらげて帰った。

東京新聞記事。「四月三十日午前九時ごろ荷風氏の身の回りの世話をしている市川市菅野町五ノ三一五福田とよさん（七五）が、いつものように荷風氏宅に出勤掃除をしようと荷風氏に声をかけたが返事がないので不審に思い、奥六帖の間のフスマを開けたところ、荷風氏はふとんから半身を乗り出しているのを発見、附近の佐藤病院に急報した。

死体は南向きうつぶせで、紺の背広コゲ茶のズボンをはき、頸にマフラーを巻いていた。吐血したらしく、畳三十センチ四方が血に染まっており、まくらもとの火ばちに吐いたらしい飯つぶがついており、つねに大金を入れて持って歩いていたといわれるボストンバッグはまくらもとに置いてあった。

近くの飲食店では、荷風氏は二十九日午前十一時ごろ食事に来たが、いつもより顔色がとくにさえなかったという。

佐藤医師の話によると、死亡推定時間は同夜午前三時ごろで、胃かいようによる急死と見られているが、一応市川署では変死と見て、今関捜査課員らが検屍を行っている」

新築して二年目の家なのに、六帖の居間は掃除婦もはいることを禁じられていたため、蜘蛛の巣だらけで、安物の

手あぶり火鉢、炭籠、ボストンバッグ、埃まみれの書物が散乱しているという状態であった。

「――愛人に対して加虐者であった彼は、最愛の自己に対しても最大の加虐者であった」と、かつて荷風に師事し、しかも『断腸亭日乗』中で冷嘲された佐藤春夫は書く。

「老軀をいたわって医者に見せることもせぬばかりか、万一にそなえて看病人ひとりを頼まぬばかりか、更に近隣の一品料理屋などへ出かけて何の油を使っているとも知れない安テンドンを残さず貪っていたと伝えられるのを聞いては、これがただ食いしん坊以上、むしろ自然死による覚悟の自殺を企てていたものとしか、わたくしには考えられないのである」

荷風の遺産は当時の金で二千三百数十万円。（この年の大学卒・公務員初任給は約一万円）しかし十二坪の安普請の家に、衣類家財道具は一切皆無であった。

なお彼は、五十七歳のとき、昭和十一年二月二十四日の『断腸亭日乗』に次のごとき遺言状を記している。

「一、余死する時葬式無用なり。死体は普通の自動車に載せ直に火葬場に送り骨は拾うに及ばず。墓石建立亦無用なり。新聞紙に死亡広告など出す事元より無用。

一、葬式不執行の理由は御神輿の如き霊柩自動車を好まず、又紙製の造花、殊に鳩などつけたる花環を嫌うためなり」

しかし、死が事実となったときには、簡素ながら天皇より祭祀料、文化勲章などを飾った仏式葬儀は行われ、雑司ヶ谷墓地に墓も作られた。おそらく火葬場へは例の御神輿の如き霊柩車で運ばれたであろう。いかなる徹底的反俗の鉄人も、死んでしまえば徹底的無抵抗の物体と化するよりほかはないのである。

小沢治三郎（一八八六――一九六六）

昭和十九年十月、米軍のレイテ上陸作戦にあたり、丸腰の囮艦隊としてハルゼー機動部隊をひきよせ、ニミッツをして「ハルゼー艦隊はいずこにありや、全世界は知らんと欲す」と焦燥狼狽させた第三艦隊の司令長官小沢治三郎は、敗戦のとき五十九歳であった。

敗戦後、彼は自宅の一室だけに住んで、他の部屋は人に貸し、うずらや鶏を飼って卵を売るような清貧の生活を送った。防衛庁戦史室の戦史作成には協力したが、そのほかは戦争について一切語らなかった。

昭和三十九年ごろから前立腺肥大となって、排尿困難を訴えるようになったが、鍼で回復した。ついで四十一年八月ごろから足が不自由となり、手指の震顫と尿失禁の症状を現わし出し、九月からシャックリがとまらなくなった。十月から嗜眠がちとなり、嘔吐頻発し、次第に衰弱した。

死の数日前、かつて小沢の囮艦隊に助けられながら空しくレイテ湾頭からひき返した栗田健男元中将は、その死床を見舞い、あとで語った。

「すっかりやせちゃってねぇ。それが、こう手をのばして……にぎってやると、いろいろ世話になった、そういうと、目からとめどなく涙が流れてねぇ」（児島襄『悲劇の提督』）

同期の桑折英三郎元中将は、十一月九日、危篤の報に貧しい小沢の家へ駈けつけた。

「枕頭並びに病床周囲には同夫人始め近親並びに知己の婦人方数名取りかこみ、看護しおられ、ある人は手をまた背を、ある人は手足などをさすり、数名の婦人方、ひたすら一息にても一秒にても安らかに生命の延長を願いおられる様子がいかにも尊く見え、あたかも釈迦の大往生に当りその子弟や禽獣までもがその周囲に蝟集して相悲しみ相歎きおる絵図を見せられた感じであった」（寺崎隆治『海軍魂・小沢治三郎司令長官の生涯』）

そして、苦痛の色はほとんど見せず、午後一時五十五分に息をひきとった。

その葬儀には、『第二次大戦米海軍作戦史』の著者モリソン博士から、「近代戦にふさわしい科学的リーダーシップを具えた名提督」という追悼の辞が花束とともにとどけられた。

ただの挨拶ではない。敵国の敗将に、このアメリカの高名な軍事史家がかかる高い評価を与えたのは、日本では小沢だけである。

同じ年の二月に、彼より一歳年上のニミッツ提督もこの世を去っている。

ド・ゴール（一八九〇――一九七〇）

一九六九年四月、フランス大統領を引退したド・ゴールは、やがてコロンベーの私邸に籠って、大戦終結後の回想録『希望の回想』の執筆にとりかかった。

彼はいった。「この回想録は、是非死ぬ前に書きあげたい。私は急いでいる。とても急いでいる。これは死ぬ前の私の使命なのだ」「今の私にとって大切なことは、回想録を仕上げる時間をもつことだ。が、はたしてその時間があるかどうか、私にはわからない」

一九七〇年十一月二日、毎年万聖節のしきたりとしている通り、ド・ゴール一家と、女婿のボアシュ将軍一家は、ド・ゴールの末娘だったアンの墓に詣でた。墓参のあとで、ド・ゴールはボアシュとともに森の中を散歩した。ボアシュが、この十月七日に出版された回想録第一巻の驚くべき売れゆき（七十五万部）について話すと、ド・ゴールは、

「その発行部数は本当かね？ 水ましの数字じゃないかね？ 私をおだてて、あと続けさせるために言っているのじゃないかね？ 証拠があるかね？ 仕入れた本は全部売切れた、という本屋を知っているかね？」

と、疑わしげにいった。

その日、ド・ゴールは一時間四十五分も歩いた。

十一月七日には、夫人とともに、百五十キロほど、二時間以上もドライブし、かつ二十分ばかり散歩した。八日には、コロンベーの教会のミサに参列した。

十一月九日も、朝から、それまでの日々と変らない生活が始まった。ド・ゴールは午前十時から書斎で回想録の執筆にとりかかり、夫人とともに昼食をとったあと、驟雨の晴れ間の暗い空の下の庭を散歩し、また書斎にはいった。

午後六時四十五分過ぎ、ド・ゴールは隣りの図書室にはいり、いつもの夕食後の習慣通り、安楽椅子に坐ってひとりでトランプをならべ出した。夫人はそばの小机で書きものをしていた。

七、八分して、ド・ゴールは突然「ああ、ここが痛い！ 背中だ。……」と苦痛の声をあげて、手を背中にまわした。ついで彼は椅子の腕につかまり、頭を前に垂れ、ゆっくりと横に倒れかかった。眼鏡が床に落ち、そのまま彼は意識を失った。

電話で急報されて、神父と医者が駈けつけたのは、七時十分であった。医者が、図書室の長椅子に移されたド・ゴールの身体を診たとき、その心臓はまだかすかに打ちつづけていたが、もう何の手当も及ばないことが判明した。心臓が鼓動をやめたのは、七時二十五分であった。

医者は、動脈瘤による腹部大動脈破裂と診断した。

浜田広介（一八九三―一九七三）

『むく鳥の夢』『泣いた赤鬼』その他のいわゆる「ひろすけ童話」で知られた浜田広介は、晩年、日本児童文芸家協会理事長となったり、故郷の山形県高畑町に「広介童話碑」を建てられたりして、その世界では恵まれた、静かな生活を過したが、一方で「日本の童話は滅びた」と友人に歎い

ていた。実際、昭和後期、童話はマンガとテレビに子供の世界を奪われた。

昭和四十七年一月末、七十九歳になった彼は、左脇腹から腰にかけて鈍痛を訴えたが、これが前立腺ガンの最初の自覚症状であった。それでも彼は、以前からの恒例となっている各地の講演旅行をやめなかった。

翌四十八年一月には血尿を見たが、約束の東北地方の講演旅行をすませた。帰京後医者の診察は受けたものの、家族は広介を愛するあまり、入院させて注射針と管の操り人形のような姿にさせるのに忍びず、食餌療法、灸治療、漢方薬、鍼治療などに頼った。烈しい足腰の痛みにたえながら、その間広介は病床でも原稿の仕事をつづけていた。

「父は、その朝、珍しく洗面の水で、着物の衿を濡らし、そのまま床の上の座椅子にもたれて瞑目していた」

と、その年の十一月十七日のことを、娘の留美は記す。

「朝日が明るく部屋の半ばまで射し込んでいるのに、『夕暮れのように暗いな』と言って、私を驚かせた。朝食にも箸をつけないので、座椅子を外して横にさせようとしたとき、父は無力に転がり、その途端、意識は失われていた。

（中略）

一時、人事不省に陥った父は、母と私と、やがて駆けつけてきた弟と、三人で手足を揉むうちに、また蘇生した。『来てたのか』と弟を認め、母や私の顔も見回して、父はにこにこした。家族に囲まれた和やかさが、うれしかったのだろう。そんな状態にありながら、なお父は、その日、『児童文芸』掲載の『広介童話の軌跡』の初校を見ようと、朝のうちに電話をかけさせて、待っていたのだった。昨夜から、霜柱のような飴一つしかとらない父のために、みかんをしぼって持って行くと、『おいしい』と喜んで飲んだ。その後、しばらく眠り、家のものが昼食をとったあとに目覚めて『初校は来たか？』と尋ねた。『まだです』と言う声にうなずいて、また目をつぶった。

三時を過ぎて、ようやく校正刷りが届けられ、母が玄関に立った間に、突然、父の目がすわり、顔の相が変った。急いで呼びもどされた母が枕許に座るか座らぬかに、『あかい、あかい』と、父は言い、『ほら、クリ、クリ』とわけのわからぬことばをまた言った。目のすわった顔の表情は変らなかった。急変を悟って必死に呼びかける母の方に、父は両手を差しのべ、母の手と、隣に座っておろおろする私の手の指二本とをつかんだ。

その時、父の目は開いてはいたけれど、もう見えなかったろう。口をゆっくりと四回開いたが、声は全く聞えなか

った。父はとうとう、手を離して、崖から滑り落ちるように落ちて行ってしまった。私の熱い涙が、ぽつぽつとその手を濡らしていた。（中略）
十一月十九日、荼毘に付した真新しい父の遺骨を抱いて帰る途中、車の前方に突然現れた大きな入日は、生涯を通してその讃美者だった父の霊魂を迎えに来たもののように思われた。
『お父さん、ご一緒に見る、これが最後の夕日です』
まばゆい日射しの中を突き抜けて、車が徐々に向きを変えると、落日は父の霊を抱いて、すでに海の上にあった」
（浜田留美『父浜田広介の生涯』）

片岡千恵蔵（一九〇三——一九八三）

戦前戦後の時代劇の「御大」の一人、片岡千恵蔵は、昭和五十七年九月九日、やはり生き残りの御大の一人市川右太衛門と二人で、NHK「この人」に出演した。二人で「侍ニッポン」をデュエットしてみせたりしたが、闊達な右太衛門にくらべて、若い日「明朗時代劇」で売った千恵蔵にはどこか憂愁の翳が感じられた。

実は彼はその七月に「肺ガン」の診断を受けていたのである。むろん彼には知らされていなかったが、八月から入院中の身であったのだ。

このテレビ出演のあとも入退院をくりかえし、慈恵会医大病院から離れられなくなり、翌五十八年に入ると口もきけず、ただ紙にみみずのような文字で「南無妙法蓮華経」など書くようになった。

ところが二月十三日になって、突然しっかりした声で法華経を唱えはじめ、「バカ騒ぎしなけりゃ棺桶にはいれねえ、これから伊東へつれてゆけ」といい出した。伊東とは東映の某知人の家という意味であった。そこへ車で運ばれた千恵蔵は、憑かれたように八時間にわたって自分の人生を語ったが、そのあと二十時間も昏睡状態におちた。

そして三月三十一日午前十一時十一分に死んだ。肺ガンで入院したのだが、直接の死因は腎不全であった。

一代ほとんどスターで過した千恵蔵は京都の七千坪の本邸をはじめ多くの別邸や店舗その他財を残したが、最後の二十余年は妻のいる本邸にはよりつかず、名古屋で愛人と暮し、彼の最期をみとったのもこの愛人であった。しかし彼女には遺骨の一片も与えられなかった。遺骨は名古屋を石のごとく無視して通過し京都へ送られていった。

ワイズミュラー（一九〇四——一九八四）

一九三二年、二十八歳から、一九四七年、四十三歳に至るMGMの「ターザンの逆襲」その他合計十二本のターザン映画（そのうち五本は太平洋戦争中に作られたというのだから驚く）で、歴代のターザン役者中最高の人気を博したジョニー・ワイズミュラーは、その後プロデューサーとの興行収入分配をめぐる争いからコロムビア映画に移ったが、ターザン以外ではぱっとせず、引退した。

「銀幕から引退後は事業という事業に失敗、そのうえ数度にわたる離婚でほとんど無一文になり、あげくに盗みで逮捕されるというテイたらく、しかも二十何本ものターザン映画に出たムリがたたってか（注・事実は十二本）体はガタガタで入退院の繰返しだった。最後は頭もおかしくなり、真夜中に『ターザンの叫び』で病院中を震撼させ、退院を強制されたこともある」（「週刊新潮」昭和五十九年二月二日号）

七年に及ぶ心臓病の病床生活ののち、一九八四年一月二十一日、メキシコのアカプルコの養老福祉病院で死亡した。翌日アカプルコ郊外の墓地に埋葬されたが、ひと握りの土が棺の上にばらまかれたとき、突如また「ターザンの叫び」が起って、人々を驚かせた。会葬者のだれかがテープで流したものであった。アァアー、アァアァアー！

彼に劣らぬ「名優」であったチンパンジーのチーターは、とっくの昔彼より幸せな生を終えていたろう。

美濃部亮吉（一九〇四——一九八四）

昭和四十二年から三期連続、十二年間東京都知事をやった美濃部亮吉は、もし女性票がなかったらその幸運に恵まれなかったろう。貴公子然たる容貌と、いわゆる「みのべスマイル」とダンディな服装、さらにお坊ちゃん的な舌ったるいイントネーションは、女性から圧倒的な支持を受けたからである。

彼ははじめ革新都政の旗手と呼ばれたが、あたかも城詰めの家臣ばかり加増する殿様のごとく、都庁職員の給料や退職金を大盤ぶるまいし、都の財政を惨澹と評される赤字に落し、同様の傾向を持つ革新知事全般への失望を確定的なものとし、結局スローガンだけがうまいタレント知事であったという印象を残した。

同時期に長く横浜市長を務めた社会党の飛鳥田一雄が数

億に上る退職金をすべて返上したのに、東京都知事をやめたとき彼は、それ以上の退職金をビジネスライクに受領していた。

　知事をやめたあと、参議院議員となったが、昭和五十九年十二月二十四日、冬晴れの午前十一時半、渋谷区南平台の自邸から参議院へ出かけるため、晩年再婚した時子夫人が二階の書斎に美濃部を呼びにゆくと、ジャンパー姿の美濃部は机の前の椅子に坐り、あおのけざまに眼をつぶっていて、ゆり起しても起きなかった。

　机の上には朝刊がひらかれたままになっていた。すぐにかかりつけの医者が呼ばれ、強心剤を打ち心臓マッサージを施したが、十一時五十分、心筋梗塞による死亡が確認された。

　父美濃部達吉をはじめ一族に大学者を雲のごとく持つという家系に生まれ、途中「人民戦線事件」で裁判にかけられるという難に遭ったとはいえ、彼の好物が分厚い上等なビフテキであったため、都内の一レストランが「みのベステーキ」なるものを看板料理で出したことに象徴されるような優雅な生活を崩さず、長命し、その死もまた「自分の家でのだれにも知られない急死」という、だれもが最も望むかたちで迎え得たとは、結局彼は幸福なお坊ちゃん的生涯の運命を持っていた人ということになろう。

　しかし、盛大な彼の葬儀には、わけあって離婚した信州小坂家出の前妻も、その間になした三人のすでに成長した遺児も姿を見せなかった。

石川達三（いしかわたつぞう）（一九〇五――一九八五）

　石川達三は、昭和五十年七十歳のとき、日本ペンクラブ会長として、「言論の自由には、譲れない自由と譲れる自由がある。ポルノを書く自由などなくてもいい」と発言して、若手の会員から攻撃を受けた。

　かねてから石川の思想は、反骨に見えて実は常識的なもので、それが彼を新聞小説作家として成功させたゆえんだといわれ、この論などがその好例だと評されたが、しかし日本では、作家として「常識的」なことをいうのは、やはり一つの反骨である場合もあるのである。

　もっとも彼は、この件にかぎらず、小説の上でも評論の上でも日常の交際の上でも、あらゆることに一貫して憤（いきどお）れる人物であった。

「（昭和五十八年）夏の末から秋にかけて私は二カ月以上も入院した。私は要心深く暮していたはずである。なぜ病気になったのかよく解らない。睡眠不足が続いて、もともと睡眠剤の嫌いな私が或る夜一錠だけ薬を飲んだ。すると翌る朝足が立たなくなった」

　彼は入院した。入院してから、医者に、看護婦に、検査に、治療に、自分の身体の異変に、徹頭徹尾彼は憤りつづける。

「私は左の足の感覚が無くなっていた。何の為だか解らない。右手の薬指と小指がしびれて居た。自分では覚えのない事ばかりだ。味覚は全く無くて、水が飲めない。ほとんど一カ月水を飲まなかった」

　医者は胃潰瘍と診断するが、彼は信じない。自分が胃潰瘍になるはずがない、と断定する。

　かかりつけの主治医宮林太郎（みやりんたろう）は言う。「医者にいわせると大変扱いにくい医者泣かせの患者の一人であった」

「医者に対して自分の考えを述べる。それが相手の医者の急所をつくか神経を逆撫でするみたいな言葉になる。（中略）これでは医者もたまったものではない。どうぞ御勝手にと匙を投げ出してしまう」「患者が自分ひとりで自分の病気を判断してはいけないのだが、万事この調子のところがあった。その論理は繊細にして、浅薄であり、抜けたところがある。（中略）詮ずるところ達三の論理は屁理屈である」

　達三自身は「死の床で考えたこと」（「新潮＋45」昭和五十九年四月号）で書く。

「この病気の期間中一番辛かった事は気力の喪失であった。なぜ気力が無くなったのか解らないが、何をする気力も起らなかった。読むこと書く事見ること、何も面白くない」

「気力の喪失と言う事がどれ程辛い事か、経験者だけが知って居る。結論的に言えば生きている事が無意味に見えるのだ。ベッドに寝て、生きて呼吸をしている事が、全く無意味である。だから死にたいと思う。私は本当に死にたいと思った。（中略）治る事も無意味だった。私はほとんど半月自殺を考えて居た。幸か不幸か、決行するには身体が不自由であった」

　彼はこの病気以前にも、晩年自分が生きていることについて、しきりに「もういいじゃないか」という言葉をもらしていた。それは社会派小説の作家として自分のやれることは一応やったという満足とともに、最も気力を要する社会派小説の創造力を失ったという諦念の混合した述懐であったろう。

「退院の時に病院は大袋一杯の薬を持たせてくれたが、私は中身を見ないで皆捨ててしまった。一週間毎に通院する

約束であったが、遂に一度も行っていない」

退院後「最後の日記」で彼はこんな感想を書きつける。

「私はたくさんの仕事をしたようでもあるが、要するにみな虚しかったような気もする。夏目漱石、志賀直哉などの文豪が結局何を書いたかと言うと、みな虚しかったようにも思われる」

「私の死はもう眼の前に迫っているが、私は死について何も考えていない。考える事の興味が無い。多くの人が死について色々考えているが、すべて無駄だと私は思っている」

そして昭和六十年一月十一日に、

「私は死期が迫っていて、今晩死んでも当り前だと思っている。何の感慨もない。夢の如しと人は言うが私は永かったと思う。決して夢ではなかった」

と、書き、翌十二日、「寒い冬だ。春が待ち遠しい」と書いたのが絶筆となった。

十日後の一月二十一日、達三は朝食後吐血して、救急車で目黒の東京共済病院に運びこまれる。宮医師は記す。

「達三は救急車の中でも血を吐きつづけ、それと同時に、下血もかなり非道(ひど)かった。つまりこれは、いわゆる失禁といわれる状態であり、悪い徴候であった」

達三は血便にまみれて、最後の病院へ運ばれていったのである。

「意識が朦朧(もうろう)としていて、目をあけていても見ているのではなく、ただぼんやりとした視線を車の天井に向けている。しかし、その目にはもう力はなく、その視線がさまよいながらぼくの方へむいて、じっとぼくの顔をみている。誰だろうというような目つきである。頭がベッドからくずれ落ちそうなので、ぼくは左手でその頭をささえ、右手に洗面器をもって、彼の口の中の血の塊りが出来るだけ無理のないように流れ落ちるのを助けていた。そのとき、ぼくは達三の肉体から死臭を嗅いだのである」

石川達三はやがて肺炎を併発し、一月三十一日午前五時二分、消えいるように息をひきとった。

「人間は誤解されたまま生き、誤解されたまま死んでゆく」

——石川達三『私ひとりの私』——

入江相政(いりえすけまさ)（一九〇五——一九八五）

昭和九年から宮内省侍従、昭和四十四年から宮内庁侍従長となり、その軽妙な随筆やざっくばらんな座談で天皇の

敬愛すべき人間味を説きつづけ、天皇家の名スポークスマンと評された入江相政は、長大な肉体を持ち、晩年に至るまで毎日体操器具で、ボートこぎ三百回、竹踏み五百回をつづけていたほど健康に留意し、かつ健康であった。

そして、かねてから「陛下がやめよとおっしゃるまでは勤めさせていただく」といっていたのに、昭和六十年九月二十六日、突然この九月一杯をもって勇退する旨発表し、お別れ会見の記者団に、「毎日楽しく、いやなことは何ひとつなく、身体も丈夫だが、八十になってもお仕えするというのは沙汰のかぎりなので、区切りをつけるために」と、その理由を述べた。

二日おいて二十九日、千代田区紀尾井町の公邸で彼は朝食をとったあと、「これでやっと楽になれた。……きょうは日曜だからもういちど寝ようか」といい、またおどけて、「それではまたお目にかかることもあるでしょう」と家族にいい、寝室に帰っていった。

午後零時四十分ごろ、長男の妻がようすを見にはいってゆくと、入江はベッドの上に横たわって呼んでも返事がなく、救急車が駈けつけたときはすでに脈も呼吸もとまり、手足は冷たくなっていた。午後一時三十一分、医者によって死亡が確認され、死因は虚血性心不全（急性心筋梗塞）と診断された。恐ろしく鮮やかに「区切り」をつけたものである。

五十年仕えた入江から辞任を申し出られたとき天皇は「八十になったか」といっただけであったが、その死を報告されて、「えらく急だね」といっただけであったという。

生涯天皇の人間味についての巧みな「語りべ」であった入江だが、自分の死についての天皇の人間味のある反応については名脚色者がなかったのである。

とまれ、美濃部亮吉と同じく老貴公子の幸福な大往生と見えたが、しかしその数年来、自分の天職と人生を楽しみぬいていたかに見えたこの侍従長が、家庭内の心配事(ごと)にひそかに心労を重ねていたことを伝えた週刊誌もあった。

八十一歳で死んだ人々

> 彼らは、そのゆくさきが墓場である、いりくんだ道を、セカセカと急ぎ足にゆく。
> ——ムンク——

則天武后（六二四——七〇五）

唐の太宗の下級の一妾でありながら、太宗が死ぬとその子の高宗を誘惑して妾となり、皇后と、それと相ならぶ蕭妃を捕え、四肢を切断して酒壺に投げこんで殺し、さらに皇帝に代って、彼女みずから政務をとった。

彼女は、旧王室につながる者は、女子供、その家臣に及ぶまでほとんど根だやしにしたのみか、自分の一族も、自分の気にくわぬ者は兄弟といえどもこれを殺しつくし、あたかも一生かかって巨富を築いた者が死に臨んでも、その財産を遺してやるに値する者がない、という事態にひとしい運命をみずから作り出した。

武后の望んだのは、ただ彼女自身のあらゆる欲望の充足であった。彼女のあやつり人形と化した夫の高宗が死んだとき、彼女はすでに六十歳になっていたが、みずから聖母神皇とか聖神皇帝とか称し、徹底的な恐怖政治をしき、大宮殿を建て、美男による「男の後宮」を作って肉欲をほしいままにした。

しかも彼女は、残忍、狂気、濫費癖の一面に、人間離れのした冷徹、寛大、周到なところがあって、最晩年に至るまで反抗者を成功させなかった。武后は、それまでの大唐の儒教政治の悪弊を、鉄腕をもって破壊清掃しようとした、真の革命的英雄であったとする見方もある。

よかれあしかれ、武后は古今のあらゆる独裁者をたばにして一身に集めたような女性であった。

最後の年の一月になって、やっとクーデターが起ったが、八十一歳の武后はなお二人の男妾を侍らせていたといわれる。彼女は幽閉され、武后党の者たちが処刑され、旧王室が復活するのを見なければならぬ羽目になったが、彼女自身は依然ぜいたくな囚人として、その年の十一月に悠々と

この世を去った。

日本では奈良朝、文武天皇の時代。

ペスタロッチ（一七四六——一八二七）

近代西欧教育史上の偉人ペスタロッチは、晩年の最後の二十年、スイスのイーヴェルドンにひらいた学園に全力をあげ、各国からの見学者がひきもきらないほどの名声を得たが、やがて彼がまたとなく頼んだ部下の二教師が、教育法と学校経営法についての意見のくいちがいから、利害、感情もからんで深刻な派閥争いを始め、それにペスタロッチもまきこまれ、とどのつまり彼ら双方から代る代る攻撃を受ける羽目になり、ペスタロッチ学園は荒廃し、一八二五年崩壊するに至った。

「私は、私の事業が完全に挫折したものと言明せざるを得ない」と、彼は悲痛な声明を公けにした。

無一文になり、孤独になった八十歳の彼はノイホーフに隠退したが、訪問者があると、帰途どこまでも送ってゆき、道々教育論をやめなかった。死の数週前のある日など、吹雪の中を同様に送ってゆき、境界石に腰を下ろして、遠ざかる客に、「私は君の先生だよ!」とチューリヒ訛の呼び声を送った。それは児童を見送る先生に、自分をなぞらえたものであった。

彼はここで自己断罪ともいうべき自叙伝『わが生涯の運命』を書きはじめたが、その内容について関係者（右の教師の一人）から激烈な反論を受け、弁明の筆をとろうとした。しかし昂奮と苦悩のため、彼はペンをインクにひたすことも忘れ、乾いたペンを走らせて空白の文字を書き、それに気がつかないありさまであった。

そのあと持病の胆嚢炎が悪化し、腹部の激痛に苦しみ、一八二七年二月十七日の朝に息をひきとった。

滝沢馬琴（一七六七——一八四八）

天保六年、馬琴六十八歳のとき、一子宗伯が三十八で死んだ。そのとき以来馬琴は、急に背がまがり、腹痛などを訴えるようになった。

彼は天保四年ごろから右眼を失明していたが、天保十一年に至って、左眼も「わずかに昼夜を弁じ、東西を知るのみ」といった状態になった。

天保十二年には妻のお百も死んだ。

律義で神経質な馬琴は、家庭内のいざこざや、あまりに

も恵まれぬ経済や、女中や隣近所とのつき合いに苦しみつつ、しかし『南総里見八犬伝』の完成に進んでいった。ついには完全な盲目となった彼は、嫁のお路に口述筆記させたが、まったく漢字を知らない筆記者で、筆記するほうも口述するほうもともに泣くといった状態であった。『八犬伝』は天保十二年、馬琴七十四歳のときに完成した。

そのあとも彼はなお、十年ちかく「無」の中に生きる。

嘉永元年、馬琴八十一歳。その十月十三日、彼は発病した。家族が然るべき名医の診察を請おうとしたが、彼は「若い者かこれ以上余命を望む者なら知らず、わたしにもう医者はいらない」といってしりぞけ、十一月六日午前四時ごろに死んだ。

辞世「世の中のやくをのがれてもとのままかえすは天と土の人形」

やくとは、六十年になんなんとする著作生活の「役」と「厄」を意味するものであろう。

著作と俗事、何ごとにも異常に粘着し、拘泥してあえぎ苦しんだ彼の生涯を見て、真山青果はいう。「彼の歿年の八十二歳を十年はやめて、若し七十にして死ねば、馬琴はそれだけ幸福であったと思う。六十にして死し、五十にして死し、一年でも早くこの世の終りを告げ得たなら、彼は必ずそれだけ幸福であったと思う」

馬琴自身が、自分の人生の長きに過ぎたことを、だれよりも痛感していたにちがいない。

大前田の栄五郎（一七九三——一八七四）

若いころ二、三人たたっ斬ったことはあるものの、生涯の大半長脇差に封印し、芝居になるような大喧嘩も女沙汰もなく、やくざは盆の垢をなめてゆく日蔭者だとして大きな肩をちぢめて生き、しかも国定忠治や清水の次郎長さえも頭を下げたという上州一の大親分大前田の栄五郎は、七十五歳になった明治元年、引退して故郷の上州大胡で、鶏を飼い、橋の掃除をする平穏な隠居生活にはいった。

そして明治七年正月、ふとひいた風邪がもとで、二月十六日、「天下の和合人」と呼ばれた大侠客らしく、たたみの上で大往生をとげた。

大槻文彦（一八四七——一九二八）

明治八年、二十八歳のとき文部省から国語辞書の編集を命じられた大槻文彦は、爾来ほとんど独力で、イギリスのウェブスターに比肩する日本最初の近代的国語辞書の創造にとりかかった。それは一語ずつ、発音、語別、語源、語釈、出典など辞書に不可欠な条件を満たしたものでなければならなかったから、そういう条件を欠いた古来の日本の辞書類には範を求めることが出来ず、まさに「創造」ともいうべき仕事であった。

のちに文彦はその苦心をもらす。

「酒宴談笑のあいだにも、ゆくりなき人のことばの、ふと耳にとまりて、はたと膝打ち、さなりさなりと覚りて、手帳にかきつけなどして、人のあやしみをうけ、又、汽車の中にて田舎人をとらえ、その地方の方言を問いつめて、はては、うるさく思われつることなど、およそ、かかるおこ(愚か)なる事もしばしばありき」

明治十七年、やっと厖大な原稿は完成したが、その後の文部省の事情で、自費出版のやむなきに至り、ようやく、これが『言海』として世に出たのは明治二十四年四月のことであった。その間星霜十七年、彼は四十四歳となり、彼の最愛の妻とただ一人の幼女は、その前年に死んでいた。

しかし大槻文彦は、四十四年という前半生で後世に残る偉業をなしとげたのである。「後世いかなる辞書が作られようと、必ずこの書が根拠となり、参考になるであろう」と彼は自負した。

大正元年から彼は、『言海』を増補した『大言海』の編集にとりかかった。大正十一年に彼は知人に書く。

「増訂言海編輯も毎日朝七時より一寸の隙もおかず、夜業までつづけ居候。九時ともなれば七十五歳の身は疲労して倒れむと致し候。しかし解釈のよく出来たる時の面白さ、分らぬ語源の分りたる時のうれしさなどにて聊か疲れを医し候」

昭和二年十二月三十一日、彼は風呂場で倒れた。年が明けた昭和三年一月三日夜、また椅子から崩れ落ち、二月半ば、肺炎を併発した。

二月十七日未明、大槻文彦は、寂しいけれど充実した後半生の幕を下ろした。（高田宏『言葉の海へ』より）

山本権兵衛（一八五二——一九三三）

昭和八年三月、海軍大将、山本権兵衛は前立腺肥大症——おそらくはガン——にかかって病臥し、妻の登喜子もまた二階に病臥していた。

三月末、権兵衛は医者から妻がガンであることを教えられると、豪胆無比のこの老人は顔面蒼白になり、やがて椅

子のまま二階に運んでもらい、涙を流しながら長年の労苦をねぎらう言葉をかけた。

登喜子は、明治十一年品川遊廓にいたのを彼が脱廓させて妻とした女性であったが、爾来五十有余年、その間二度も首相夫人という座に坐りながら、ほとんど表に出ず、よく夫につくした賢夫人であった。

登喜子は三月三十日夜、この世を去った。

そして、その年十二月八日、権兵衛も死んだ。

その日からちょうど八年後の昭和十六年十二月八日、彼の作りあげた日本海軍は真珠湾を攻撃するに至る。

ムンク（一八六三——一九四四）

人間の根源的な孤独や不安や恐怖を、「春」「白夜」「叫び」など、神秘的、暗示的な独特の色彩や構図で描いて、いちど見たものには忘れることの出来ない印象を残すノルウェーの画家エドヴァルド・ムンクは、六十代の終りごろから眼を悪くし、晩年に至って盲目に近い状態にあった。

その晩年——一九四〇年以降、ノルウェーはナチスに占領されたが、ムンクは独軍に一切の協力を拒否した。もっともナチスも彼の絵を病的だときめつけて黙殺した。

一九四三年クリスマス前、オスロは一連の烈しい爆発にゆり動かされた。ムンクの家政婦はムンクを地下室に避難させた。ムンクはそこに数時間坐っていて風邪をひき、以来高熱を発してベッドにつき、翌年一月二十三日、心臓麻痺を起して死んだ。

鈴木貫太郎（一八六七——一九四八）

二・二六事件に際し、侍従長として叛乱軍に襲われ、頭部、胸部などに三発の弾丸を撃ち込まれながら、トドメの一発を鈴木の妻から制止されてそのまま叛乱軍が去ったために九死に一生を得、昭和二十年四月、七十八で首相となった鈴木貫太郎は、沈毅茫洋たる「腹芸」で日本を終戦に導いた。

同じく二・二六事件で奇蹟的に死をまぬがれ、前年東条内閣打倒に死力をそそいだ同じ海軍の老提督岡田啓介とともに、歴史の上では「老益」もあるという稀有な一例。どちらも九死の中に得た老いたる生命が、のちに九死の中から日本を救ったのである。

三年後の昭和二十三年、彼は肝臓ガンのため、四月十七日、静かにこの世を去った。みずから戒名を考えて「大勇

院尽忠日貫居士」とつけた。これほど適確に自分に「評定」を下した戒名は珍しい。

土井晩翠（一八七一——一九五二）

明治三十一年、二十七歳で「荒城の月」「星落秋風五丈原」を作り、翌年詩集『天地有情』を出して一躍国民的大詩人の名を得た土井晩翠（もと土井だが、東北弁でツツイと発音する人が多いため後みずからドイと改めた）は、仙台の富める質屋を生家とし、仙台付近にいくつかの土地や家を持つほか朝鮮にも千三百町歩の山林を所有し、愛妻と、秀才のほまれ高い三人の子供たちを持ち、「最も幸福な家庭」として新聞にも出たほどであった。

が、晩年その妻や三人の子供たちすべてに先立たれた。

人はみな長命を望むけれど、あまりに長命すれば多くはこの悲しみを味わわなければならない。

その女婿の中野好夫は、世上のレッテル、東洋的国士風の愛国的詩人、というのは錯覚で、晩翠はただ感傷と哀感の詩人であったといい、もし晩翠が「言うところの放胆、雄渾の男性的性格だったならば、老妻に先立たれたあと、ああ意久地なく気力もなにも挫けてしまうということはなかったでしょう」という。

妻の八枝が急性肺炎でこの世を去ったのは、昭和二十三年、晩翠が七十八のときであった。

「亡妻や、それに亡児のただ記憶に生きる晩翠には、目を掩いたいほど痛ましいものがありました。極度の不眠から、ビールで睡眠薬をあおるように用いたのが、完全に神経を悪化させることになり、とうとう長い入院生活をすることになりました」（中野好夫『土井晩翠と私』）

家族に先立たれたのみならず、彼は戦災で家屋を失い、敗戦と土地改革で土地もすべて失っていた。

「人々の好意で贈られたいわゆる晩翠草堂に、年老いた実妹と一緒に、完全に孤独、病弱の暮しをしていました。幸い晩年、文化勲章の授与、名誉市民への推戴、詩碑の建立などで、幾らか慰められたとは思いますが」（同右書）

昭和二十七年八月、仙台の青葉城址天守台跡に「荒城の月」の詩碑が建てられて、その除幕式に病軀をおして出席したのが、彼が公式の場に姿を見せた最後であった。

十月十六日、風邪から肺炎を併発し、十九日午後九時二十五分にその生涯をとじた。

野村胡堂（一八八二――一九六三）

胡堂が『銭形平次捕物控』を書き出したのは意外におそく、昭和六年「オール讀物」創刊号に第一話を発表したのは、四十九歳のときである。それ以来昭和三十二年まで二十六年間に、長短三八三篇の平次物を書いた。

その第一話「金色の処女」は三代将軍家光の時代とあるのに、だんだん文化文政の世としか思えない内容になっていったのは愉快である。

この怖るべき生産力を持つ胡堂も、昭和二十年代終りごろから、馬琴と同様、老人性白内障を患って執筆が困難となり、三十二年、七十五歳のとき最後の銭形平次を発表したあと筆をたち、三十八年、私財一億円を投じて育英奨学金を目的とする野村学芸財団を設立したのち、四月十四日、大往生をとげた。直接の死因は肺炎であった。

遺言「思い残すことはない。満足だ」

ガン、脳溢血、心臓疾患をまぬがれた高齢者は結局肺炎で死亡することが多い。風邪がもとというより、老衰のため長期間寝たきりの姿勢を余儀なくされるために肺下部に血液が鬱滞して、沈下性肺炎をひき起すのである。

ニミッツ（一八八五――一九六六）

太平洋戦争初期、「出て来いニミッツ、マッカーサー」と日本の子供にからかわれ、やがてその歌の文句通りに出ていって日本海軍を撃破した米太平洋艦隊司令長官チェスター・W・ニミッツ元帥は、戦後アメリカ海軍作戦部長などを務めたあと海軍を退役して、サンフランシスコの家で静かに老いていった。

ニミッツは他の米提督に比して、篤実でおだやかな人物であった。彼は戦後、日本の軍艦三笠の修復や東郷神社の復旧に援助の手をさしのべた。

一九六三年十月、七十八歳のニミッツは転倒して右ひざのさら骨を割り、以来右腰部と下背部にはげしい痛みをおぼえるようになった。やがて脊椎の関節炎を起していることが明らかになった。

一九六五年秋から痛みがさらにひどくなったので、十一月に手術をし、手術は一応成功したが、やがて肺炎、軽い脳卒中、鬱血性心臓病などの老衰症状を現わすようになった。

年を越えて一月になると、見舞いに帰って来た長女に、

夫人が「どうしてもお父さまに会いたいというのなら会ってもいいけれど、お会いしないほうがいいかも知れませんよ」と申しわたしたほどの状態になっていた。

二月二十日の午後五時ごろ、彼はふるえながらひっそりと死んだ。

東郷青児（一八九七――一九七八）

「そのモダンでキュービックな、それでいて、底に日本的な哀愁をただよわせた東郷の絵は、いまの女子高校生にまでもてはやされる甘さを持っているという理由から通俗的に甘い作風の作品とされて来たのである」

と、美術評論家の田中穣はいう。

その東郷青児は、二科の超ワンマンとして企業的才腕を発揮し、自分の娘のたまみを二科の会長にすえるほど権勢をふるい、女性関係をふくめて私生活も豪奢をきわめた。（といわれているが、「メイゾン・シド」をやっていた名コック志度藤雄は『一料理人として』という著書の中で、全盛期の東郷がさんざん飲み食いしながらほとんど代金を支払わないので、たまりかねて請求すると、東郷は、あとで絵をやるから、と澄ましていた。そこで「あんな首の長い変テコな絵なんかいらない。それより料理代を払ってくれ」といってやった、と回想している）

画壇の大ボス視されながら、「洋菓子屋のケーキの包み紙」「芝居の緞帳」「喫茶店の壁画」などという定評は画商さえどうすることも出来ず、彼の絵は、生存中は最後まで、同時代の大家たちの十分の一という値段であった。

しかし、東郷青児は八十を過ぎてもなお矍鑠として「いくつになっても女とクネクネしているのは実にいいもんだよ」などタフ・ガイぶりを豪語していた。

それが事実であることは、娘のたまみがのちに公表した彼の死の前年秋からの〝性愛日記〟でも明らかで、それには孫よりなお若い愛人との猛烈な性愛ぶりが赤裸々に描かれている。

ところが。――

「昭和五十三年四月二十五日のこと、東郷はその日から始まる二科の熊本展のテープカットのため、前日から泊っていたホテル・キャッスルの部屋で、朝九時半ごろ突然意識不明になって倒れた。付き添いの人の連絡で、救急車が呼ばれ、近くの西郷病院へ運ばれて手当を受けたが呼吸困難となり、正午すぎに熊本大附属病院へ送られて心臓マッサージなど最後の手段がほどこされたかいもなく、午後二時

八分に息をひきとった」（田中穣『心淋しき巨人・東郷青児物語』）

このとき青児は、「苦しい。こんなに苦しいことははじめてだ」と、うめいたという。

「死因は、心不全のため、と、あった。しかし、そのころ私が勤めていた東京の新聞社の熊本支局の記者から聞いた話では、いっしょに熊本に乗りこんでいた側近たちのあまりにもきびしい報道管制のために、死因について現地ではかえってさまざまな噂がひろがったそうであった。その一つなど、どうやら東郷の死因は単なる酒や過労による心不全ではなくて、熊本市内でひろった女との度の過ぎた遊びによる腹上死だったらしい、というものだった」（同右書）

ヒッチコック（一八九九――一九八〇）

アルフレッド・ヒッチコックは、十歳のころから肥満症に悩んでいた。彼は一生、減量のためにありとあらゆる療法を試みたがだめであった。

映画監督になってから、彼が自分を自作映画の一シーンに必ず登場させたギャグは、ただのお遊びではなく、ひとから笑われるより先に自分で戯画化するという、彼の映画を成立させているデリケートなバランス感覚から出た心理的必然性によるものであった。

ヒッチコックは、一九七六年、七十七歳のときの「ファミリー・プロット」の脚本制作中に心臓発作で倒れ、以後ペースメーカー（心臓の搏動を一分間七〇回のペースで保つ医療器具）を胸にとりつけて、この映画を完成させた。

それから次回作「みじかい夜」の準備にとりかかったが、腎臓病と関節炎も併発して、車椅子によらなければ動くことも不自由となり、ただ脚本をいじりまわしていることを余儀なくされ、本人も自棄的になり、自分のプロダクションの事務所にやって来ると、看護婦の眼を盗んでコニャックをがぶ飲みし、泥酔状態になってかつがれて帰るという毎日になった。

一九七九年三月七日、ＡＦＩ（米国映画協会）から功労章が贈られ、その受章祝賀会で、イングリッド・バーグマン、ケイリー・グラント、ジェームス・スチュアート、アンソニー・パーキンスなどのスターたちが代る代るお祝いの言葉を述べた。

ヒッチコックは、一週間前からアルコールを断ってこの日にそなえ、車椅子で出席したが、出席者たちは彼がこのパーティのおしまいまで保つかどうか、ハラハラのし通し

であった。彼は車椅子から立ちあがれない状態であったが、ともかくも挨拶をした。その中で彼は、「私は、私の仕事においてだれよりも貢献してくれたある人々の名をあげなければ、これから眠れぬ夜を過さなければならないでしょう。その一人はシナリオ・ライター、一人は私の映画の編集者、一人はみごとな奇蹟をみせてくれた料理人、一人は私の娘の母親で、この四人の名前はひとしくアルマと申します」とのべた。

彼の妻アルマは、しかし数年前から脳溢血で倒れ、以来病床にあった。ヒッチコックはその妻に先立たれることを極度に怖れていた。

八月十三日、彼は八十歳の誕生日を迎えたが、そのころの彼について知人は語る。「彼は『みじかい夜』のシナリオを眼の前において、いつもの調子で、その中のシーンをどんな風に撮るかあれこれ語ってくれたが、もはや彼自身がそれが実現するとはまったく信じていないことはあきらかだった」

彼は、翌一九八〇年四月二十九日にこの世を去った。

中村翫右衛門（一九〇一――一九八二）

昭和六年、河原崎長十郎とともに既成の歌舞伎に叛旗をひるがえして「前進座」を設立したのに、その至妙の芸によりのちには歌舞伎の名題さえ共演することを望んだ名優中村翫右衛門は、昭和四十五年六十九歳のとき、舞台出演中突然右腕が麻痺したが、自宅の片隅に特別の一室を設け、指の動きを回復させるための指階段という治療法、砂袋をあげさげする滑車運動、大きな車のハンドルをまわす輪転運動などの道具をそなえ、ひたすら運動機能の回復につとめ、約一年で克服した。

昭和五十七年一月、京都南座で松本清張原作の「左の腕」に卯助役で出演したが、日に日に疲労を累積させ瘦せ衰えてゆくのを、共演者たちは毎日不安と驚嘆の眼でながめ、ハラハラしながら舞台に送り出したという。

そのあと病床につき、膵臓ガンの診断を受け、三回手術したが、同年九月二十一日午前四時五十分、「寒い……」という一語を残し、しずかに息をひきとった。武蔵野市に建設中の新しい前進座劇場は六日後に完工するばかりであった。

小林秀雄（一九〇二——一九八三）

六十五歳のころ小林秀雄は、親近者の郡司勝義に語ったことがある。

「人間は、ぼけるのがいちばん恐ろしい。今まで同じ人に、同じ話を二度とするようなことはなかったのだが、この頃はどうやらそれも怪しくなった。だから、この話は前に話した事があるかね、と不安なときは必ず確かめることにしているのだ」

このころ彼は大著『本居宣長』を「新潮」に連載中であった。が、すでにぼけを自覚していたのである。

晩年の小林秀雄について、なお郡司は記す。

「先生は、みずからの健康については、臆病と言っていいほど細心の注意を払われていた。風邪気味だと思えば、それが軽微の兆候であっても一切の外出を中止し、寝室にとじこもって蒲団をかぶり、風邪の抜けるまで三日でも四日でも大事をとられた」

友人の中村光夫もいう。

「晩年の氏は、長寿を希っていたようで、『このごろ惜しいのは生命だけだ』とどこかで言っていました。氏は若い時夭折を恐れなかったように老齢の一日一日を天の贈り物として、悪びれずに楽しむことを知っていました」

『本居宣長』は五十二年に完成し、このように彼は、鎌倉雪ノ下の自邸で、ゴルフや、クラシックや落語のレコードをたのしむ静かな日を送っていたが、昭和五十七年三月三十日、大量の血尿と尿道痛の症状を発し、診察の結果膀胱ガンと判明して東京信濃町の慶応病院に入院し、七月、手術を受けた。

妹の高見沢潤子（田河水泡夫人）は語る。

「三月末入院、一時はよくなったようであったが、それから毎日毎日、検査がつづいた。大手術に耐えられるかどうかの検査であったが、随分辛かったらしい。精神的にも大きな疲れだったらしい。

『身体の中のいろんな内臓の検査なんだよ。写真をとってね。今に脳みその中もしらべて写真をとるだろう』

などといっていた。

その結果大手術が行われ、手術は成功し、経過もよかったが、身体は、精も根もつきはてたという状態であった。見舞いに行く度に、色つやはよかったが、いつもうとうとと寝ていた。たまに目をさまして、私の来ていることが解ると、私はいつも、

『疲れたでしょう』

といった。兄はうなずいて、また目をつぶるのであった」

この手術の経過について、友人大岡昇平も弔辞でいう。

「その苦闘は想像を絶するものがありましたが、これで体中悪いところは一個所もなくなったので、それほどの大きな手術の後では、使用した麻酔薬その他の薬物も、多量に残存しているに相違なく、日常如何に健康体だったとしても、八十歳の肉体から、副作用が除去されるまでに当然二カ月や三カ月はかかり、元気な顔を見られるのは、秋の気候が定まってからと、私は指を折りました。後日も、附添われた人から聞きましたが、あなたは病床で『我慢だ』『我慢だ』と、しばしば独語されたそうです。

いよいよ秋風が吹きはじめた夕方、鎌倉の市中で、私は奥さんにお目にかかり、どうも食欲が恢復せず、心配だという立ち話を聞きました」

小林は九月末、一応退院して、鎌倉の自邸に帰っていたのである。このころの状態を高見沢潤子は語る。

「粥を食べ終ると、兄は奥の間で横になった。この部屋からは硝子戸越しに庭が見え、兄の好きなしだれ梅と、しだれ桜が一番近くみえた。しだれ梅の枝には、あちこち二つわりにした蜜柑の実がつけてあった。ひよどりが二羽やって来て、それをつっついて行くのである。兄はねながらそれをみるのを、楽しみにしていた」

翌五十八年一月中旬、風邪をこじらせ、下旬また慶応病院に入院し、二月中旬再手術を受けたが、二十七日から腎不全による尿毒症のため容態が悪化し、三月一日午前一時四十分に死去した。

彼は生前に鎌倉東慶寺に墓地を求め、そこに宣長が愛した山桜を一本植えていた。

璽光尊（一九〇三——一九八四）

昭和二十二年一月二十一日深夜、金沢市高岡町の新興宗教璽宇教本部を警官隊が急襲したとき、これに抵抗する信者の中でひときわ壮大なる巨漢が大太鼓の撥をふりかざし、警官隊を投げつけて奮戦した。それは不世出の大横綱双葉山であった。いかなる怪事が起っても驚かない敗戦後の世相の中にも、この珍騒動は人々を驚かせ、さらにその璽宇教なるものの教祖が璽光尊という女性であることが人々を驚かせた。

璽光尊の本名を長岡ナカという。彼女は岡山県の農民の

娘だが、二十代の後半からしばしば発作を起して神憑りの状態となり、昭和二十一年元旦天皇が「人間宣言」をした後にそれに代って天皇宣言をし、自分の住まうところを皇居と称し、信者三十万と号し、厚生大臣は双葉山、大蔵大臣は碁界のこれまた不世出の天才呉清源という「内閣」を持っていた。そして敗戦後の飢餓時代にその本部には信者が献納する米俵が山と積まれた状態であったために、食糧管理法違反容疑で警官隊に踏みこまれたのであった。

検挙された璽光尊は妄想性痴呆と診断され、釈放された。それ以来璽宇教は南風競わず隠れ切支丹のごとき存在となったが、なお相当数の忠臣を失わず、「皇居」を山中湖、箱根、横浜、藤沢に転々と移しながらもついに皇基を護持しつづけた。

璽光尊は、昭和五十九年七月七日、ひっそりと崩御した。現人神であるがゆえに医者にもかけてもらえず、従って病名は不明である。

その遺体は、夏期に入っていたのに、復活を信じる信者たちによって三日間床上に横たえられたまま置かれ、俗界の葬儀も行われなかったという。

円地文子（一九〇五――一九八六）

昭和二十一年、四十一歳のとき子宮ガンで子宮をとってから円地文子は、凡庸なお嬢さま作家から一流作家に変身したといわれる。

晩年は網膜剝離に加えて糖尿病のため口述筆記のやむなきに至ったが、昭和六十年には軽い脳梗塞にかかって歩行不能となり、その年の秋文化勲章を受けたときも、宮中へは車椅子に乗っていった。

瀬戸内寂聴は語る。

「ありとあらゆる文学賞、ほしいものはみなお取りになったけど、最後は文化勲章をね、とても欲しがったのね。……あれ欲しいとなるともう矢も盾もたまらない。それをお貰いになって、嬉しそうでしたよ。そのときにね、無邪気によろこぶのね、ホントにうれしがるの」

最後まで食欲も創作意欲も旺盛で、「私は書いて書いて書き死にする」というのが口癖で、昭和六十一年十一月十一日も「新潮」のために自宅で第一回の口述をし、第二回は十五日の予定であった。

十三日の夕食は、彼女の所望でうなぎを食べて九時には

就寝した。十四日の朝七時ごろ、家政婦が「ちょっとごみを出して来ます」と声をかけると、寝室で「はい」という返事があった。五分ほどして家政婦が「そろそろ朝食ですから、起きられたらいかがですか」といったが、返事はなかった。寝室をのぞいてみると彼女は死んでいた。死因は急性心不全と発表された。

通夜にいった作家芝木好子は書く。

「優れた仕事をして、前夜までおいしいものを食べて、朝、ことんと息を絶った。なんといういい死に方だろう、とうらやましかった。死に顔は衰えもなく、やすらかであった」

木村義雄（一九〇五――一九八六）

東京下町の下駄屋の伜に生まれ、昭和十年、実力名人制がしかれると第一期名人位について以来、昭和二十年代に至るまで将棋界に君臨した木村義雄は、江戸ッ子のべらんめえ調にもかかわらず棋風は粘強無比で、かつ盤外でもむき出しの闘魂で相手を圧倒した。

第三期名人戦で長考苦悩する神田辰之助八段に「時間が来たじゃあねえか！」と叱咤したり、木村に対して異常な敵意をもやす升田幸三八段と凄絶きわまる口喧嘩したりした逸話は有名である。

無敵といわれた彼も、昭和二十七年、四十七歳のとき第十一期名人戦で大山康晴八段に敗れてから引退し、以後将棋の普及に力をつくすことで余生を過した。

昭和四十九年にいちど脳血栓で倒れたが回復し、後遺症もなかった。妻がプロテスタントのクリスチャンのせいもあってか、晩年は宗教書関係の本をよく読んでいた。鼻ッ柱が強く、殺気と俗気みなぎる壮年以前の木村からは想像もつかぬ変貌であった。

昭和六十一年夏ごろから体調を崩したように見え、八月十八日余りだるそうなので入院、急性骨髄性白血病（一種の血液ガン）と診断を受けたが、本人には貧血症と知らされただけであった。

入院後もそのふくよかな容貌は変らなかったが、やがて抗ガン剤を打ちはじめてから衰弱を早め、最後の一週間はただうつらうつらしていたが、死の直前に洗礼を受けた。直接の死因は敗血症であった。

死の三日前に妻が「何かして欲しいことはありませんか」と訊いたのに対し、「何もない」と答え、「苦しくも痛くもないよ」といったのが最後の言葉となった。

十一月十七日午前五時三十五分、安らかに息をひきとった。

葬儀はキリスト教で行われた。

八十二歳で死んだ人々

> 人間たちの死は『臨終図巻』の頁(ページ)を順次に閉じて、永遠に封印してゆくのに似ている。
>
> ——山田風太郎——

ゴヤ（一七四六——一八二八）

スペインの寒村の鍍金(めっき)師の子として生まれたゴヤは、やがて肖像画家として売り出し、ついに宮廷画家になった。

彼は牡牛(おうし)のような頑健な肉体と、馬のような精力の持主で、妻のホセーファに二十人の子供を生ませたのみか、四十七歳以来、完全な聾者（おそらく梅毒治療のための水銀の副作用と見られる）となったにもかかわらず、六十七歳で人妻レオカーディアと姦通し、子供を生ませるといった男で

あった。

ゴヤは、自分のためには何びとを犠牲にしてもかえりみないエゴイストではあったが、世の常のエゴイストではなく、彼の旺盛きわまる生命力の現われで、それは彼の一生衰えぬ絵の創作力の原動力と同じものであった。

彼は無数といっていい大官貴女の肖像画の傑作を残したが、ただ奴隷根性の宮廷画家ではなく、一方では、異端審問所がなお威力をふるう時代にあって、彼自身の生命の危険を招きかねない春画すれすれの「裸のマハ」を描いたり、ナポレオン軍の侵入や、叛乱によって支配者が変転するマドリードで、これまた危険な反戦画「一八〇八年五月三日」あるいは版画「戦争の惨禍」などを描くしたたかな精神の持主であった。

一八一九年、七十三歳のとき大病を患(わずら)ったが、その翌年、瀕死の自分の姿の自画像を描いている。それは瀕死の自分の姿を実際に鏡で観察していたとしか思われない絵であった。そして彼は不死の人のごとく回復し、この年からマドリード郊外の自分の家に、売物でもなければ人に見せるつもりもない、ゴヤの黙示録ともいうべき怪異凄絶の「黒い絵」の大壁画を描きはじめた。

一八二四年、七十八のときボルドーに移ったが、彼の制作力はなお燃えつづけ、ただ視力の衰えは防げなかったが、彼は二重レンズの眼鏡をかけて描きつづけた。

そして、一八二八年、八十二歳。

レオカーディアは書く。

「……四月二日、朝五時に目覚めた時、口がきけませんでした。それは一時間後に治りましたが、体の右半分が不随になりました。十三日間、そのままの状態がつづきましたが、死ぬ三時間前まで、まわりの者を見分けることが出来ました。ゴヤは、自分の手を見詰めておりました。意識はすでに朦朧(もうろう)としていたようです。……十五日から十六日にかけての夜の二時に亡くなりました。とても静かで、眠っているような死顔でした。医者でさえ彼の気力に感心していました」

同年にウィーンで、シューベルトが死んでいる。

彼が妻のホセーファに生ませた二十人の子供は十九人まで夭折(ようせつ)し、ただ一人生き残った男の子ハビエールは父の遺産で一生無為にして終り、その子マリアーノは長じて山師となってすってんてんとなり、かつ子供も生まれなかったので、ゴヤの血はここに絶えた。

それにしてもスペインという国は、このゴヤといい、ガウディといい、ピカソといい、異次元の大芸術家を生む。

トルストイ（一八二八――一九一〇）

トルストイは、五十歳のとき『我が懺悔』を書きはじめた。それまでに書いた『戦争と平和』や『アンナ・カレーニナ』をふくむすべての著作を「くだらない仕事」「悪徳の書」と否定し、「私は夢からさめた」といい、自分の持つあらゆる物欲、愛欲、慢心、憤怒、功名心、権勢欲などを――具体的には、愛する妻も、ほとんど隔年に生んだたくさんの子供も、伯爵という地位も、毎年もたらされる巨額の印税も、すべて捨て去ることを決意した。

が、それを実現するには、当然、妻や家族たちの抵抗があった。愛し合っていた彼と妻は、おたがいに頭が変だときめつけ、妻のソフィアはヒステリーになり、一方トルストイは妻が姦通しているという妄想にとりつかれ、年とともに争いは深刻化した。

この争いが、実に三十年以上もつづく。すべての欲望は捨てたといいながら、性欲だけは別と見えて、トルストイはこのソフィアとの間に十三人の子供を作り、最後の子を生ませたのは彼が六十歳のときという不可思議な事実もあるが。――

その間彼は何度も家出を計ってはとりやめる、ということを繰返したが、一九一〇年十月二十八日、八十二歳の彼はついに実行した。

「十二時半に就寝。三時半近くまで眠った。ふと眼がさめた。と、前夜、前々夜と同じように、またしても扉のあく音と足音が聞えた。……隙間ごしに見ると、私の書斎に燈火がついて衣ずれの音が聞える。ソフィアが何かを探し出して読んでいるのだ。……昼夜の別なく、私のあらゆる行動、あらゆる言葉が、あれの監視下におかれているのだ。またしても足音、そっと用心深く扉をあけて、書斎へ通ってゆく。……眠ろうと思ったが眠れない。一時間ほど輾転反側、蠟燭に火をつけて坐った。……突然、家出の決心を固めた」

この日記を最後に、トルストイはその朝の六時ごろそっとヤスナヤ・ポリャーナの家を出て、身のまわりのものをつめた小さな包み一つだけ持って汽車に乗り、ゆくえ不明になった。

その家出を、自分にあてつけたものと思ったソフィアは、邸内の池に飛びこんだが、家族に救いあげられた。

トルストイは家を出てから四日目に汽車の中で熱を出し、リャザン・ウラル鉄道のアスターポヴォという寒駅の駅長

室に運ばれた。そこで肺炎と診断され、あとを追って来た妻や家族にみとられて、十一月二十日午前六時五分に偉大なる生涯を閉じた。日本では明治四十三年。

これについて正宗白鳥はいう。「人生救済の本家のように世界の識者に信頼されていたトルストイが、山の神を恐れ、世を恐れ、おどおどと家を抜け出て、孤往独邁の旅に出て、ついに野垂れ死した経路を日記で熟読すると、悲壮でもあり滑稽でもあり、人生の真相を鏡に掛けて見るが如くである。ああ、我が敬愛するトルストイ翁！」

板垣退助（一八三七――一九一九）

板垣が、明治十五年自由党総理として刺されたとき、「板垣死すとも自由は死せず」とさけんだという「伝説」を残して死んでいたら、あるいは明治最大の英雄となっていたかも知れない。

しかし、人間は花のひらいたときに、うまい具合に人生の幕を下ろすのは難しい。彼はそれから三十七年間も、ほとんど無意味なダラ幹として、老残ともいうべき余生を持った。

彼の晩年は甚だ不遇で、大正八年六月、風邪で病床についてから医者を介して、政界の黒幕といわれた杉山茂丸に、所蔵の刀剣を買ってくれるように依頼した。熱心な刀剣趣味の板垣がそれを売るというのはただごとではない、と杉山が首をひねって、三田の板垣家をはじめて訪れると、雨漏りするような借家住まいで、しかも家賃もとどこおっているという。

杉山はすぐに山県邸にいって板垣の話をすると、山県有朋は他の元老連と相談して六千円の金を集めたが、杉山は、板垣ほどの者がこれほど困窮しているのに、なぜ陛下にお願いせぬか、といった。そこで改めて宮中から二万円の見舞金が下された。

板垣は風邪が悪化して肺炎となり、七月十六日午前三時四十分に死んだ。板垣夫人は「御下賜金のおかげで葬式が出来ました」と、杉山に礼を述べた。

その日、土佐出身の作家・田中貢太郎は、板垣家を弔問した。

「そこには床の方に寄って、覚めざる眠りに落ちた伯の黒衣を被た遺骸が横たわっていた。その前には二つの経机を据えて、それに線香を立て燈明を点けてあった。枕頭には黒い机を置いて、それには枕団子を供えてあった」

と、貢太郎は記す。

「未亡人は伯の顔に被せてあった黒衣を除った。両眼を閉じて安らかに眠った黄な大きな顔があらわれた。頭髪は銀の色をしていた。両手の手首には数珠をかけて組み合わさし、その上には白い紗のような衣をかけてあった」

高橋是清（一八五四――一九三六）

幕末、十三歳でアメリカへ留学し、だまされて奴隷に売られたり、帰国後の明治初年も、大酒飲みの放蕩生活で芸者のヒモになったりしたが、その財政における能力と、何びとも魅する楽天的な活気は、後年の高橋是清を、大正末年までに三度蔵相とし、一度は首相の地位にまでつけた。

大正十四年、七十一になった高橋は、これで政界を引退するつもりであったが、昭和にはいってからの嵐の時代は、この老人をさらに四度目の蔵相にひっぱり出した。禿頭白髯、そのユーモラスな風貌は、「ダルマ蔵相」というニックネームで、国民の敬愛のまとであった。

昭和十年十一月末の、昭和十一年度予算閣議で、巨額の軍事費を要求する軍部に対し、高橋は、国家の健全財政あっての国防だといって懇々と軍部を説得し、あとになって心ある国民の共感を得たが、この閣議が終って自邸に帰った高橋は、玄関で靴をぬいでも脚があがらず、自分で一本ずつ脚を持って式台に上ったという、文字通り達磨を地でゆく状態であった。

それから三カ月後、二・二六事件が勃発した。すなわち、昭和十一年二月二十六日朝五時ごろ、百二十余人の叛乱軍は、機関銃、小銃、拳銃等で武装して、赤坂表町の高橋邸に殺到した。

高橋正衛『二・二六事件』によれば、

「中橋中尉は表門から、中島少尉は東門の塀を乗り越えて邸内に侵入し、内玄関から兵とともに乱入、家人に蔵相の部屋を案内させた。二階十畳の間にまだ就寝中の蔵相を発見、蔵相は落着いて寝たままであった。叛乱者側が『天誅』と叫びながら、布団をまくりあげ、拳銃で蔵相を射殺した。左第五肋骨ほか二カ所で絶命。しかもその体に刀をもって更に斬りつけた」とある。

今村武雄『高橋是清』によれば、

「――高橋もなにか起ったということを直感したらしく、白い寝まきのまま床の上に坐っていた。そして、かけこんだ女中を見て『なんだ、あれは雪の落ちる音かね』と立ち上って、おもてを見ようとした。そのとたん、四列縦隊を組んで梯子段をドカドカと上ってきた兵隊が部屋になだれ込んだ。高橋のまなざしが、けわしくキラリと閃めくと同時に『何をするかッ』と大声に叱りつけるのと、パンパンというピストルの発射音とが殆ど同時であった。高橋は胸から腹のあたりへかけて数発の弾丸をうちこまれ、がっくりと倒れて打俯せになった。と、兵隊を引率してきた若い中尉が、いきなり軍刀をふりかぶって、倒れた高橋の右肩から胸部へかけて、けさがけに切り下ろした。右の腕はほとんどぶらぶらになった。白い寝衣は朱に染まり、あたりは泥だらけの兵隊靴でふみにじられた」とある。

有馬頼義『二・二六事件暗殺の目撃者』によれば、

「――裁判記録では、是清は蒲団をはがれるまで眠っていたようになっているが、（女中の）阿部千代の証言は、反対であった。信ずべき報告によれば、是清の寝室にはいったのは、中橋基明（中尉）と、中島莞爾（少尉）の二人だけであった。中橋は先ず『天誅！』と叫んだ。それに対して高橋是清は『馬鹿者！』と、どなりかえしている。高橋是清はそのとき、八十三歳の高齢であった。

――『父はとしをとっていましたし、寒いときでしたから、寝衣の上に、真綿のチャンチャンコを着て寝ていたんですが、殺された父の姿を、私は正視出来ませんでした。拳銃で撃たれて横に倒れたところを、日本刀で斬りつけられ、右腕は胴からはなれ、蒲団の外へぶらんと出ていました。（中略）胴は胴で、輪切りにされていました。これは全く惨殺です。死んだ者に、幾太刀もあびせているんですから、これくらい惨酷なことはありません。（後略）』と高橋是影（是清の六男）は語っている」とある。

天皇は事件を聞いて「朕が股肱の老臣を殺戮す。此の如き凶暴の将校等その精神に於ても何の恕すべきものありや」と激怒したが、民衆の中には、乱入した将校が、蒲団からひきずり出した高橋に着物を与え「高橋、コレキヨ」といったというけしからぬジョークを作った者もあった。しかしそんな武士の情けはあらばこそ、真相は右のごとく狂気の凶行で、天皇の怒りは当然である。

ベルクソン（一八五九――一九四一）

「人間は、可笑しいから笑うのではない。笑うから可笑しいのだ」――一般には『笑いの哲学』で知られるフランスの哲学者で、ノーベル賞も受けたアンリ・ベルクソンは、六十五歳ごろからリューマチにかかり、公的活動からしりぞいて蟄居生活を余儀なくされた。

それから十六年間、身体の不随は徐々に進行し、訪問客

があれば、いつも書斎の同じ椅子で、指のかたちのゆがんだ白い手をさし出すのを常とした。

一九四〇年十二月、ナチ占領下のパリで、彼はさびしげにつぶやいた。「私は長生きし過ぎたようだ」

その年の冬は、石炭欠乏のためパリでの生活はきびしく、彼は風邪をひいた。そして肺炎になってわずか三日ばかりで、一九四一年一月四日にこの世を去った。ナチ占領下にあったため、ユダヤ系であるこの大哲学者の葬儀は、葬儀らしいかたちをなさないほどわびしいものであった。

ジイド（一八六九——一九五一）

小学生のころから手淫の悪癖があり、成績不良で退学させられたアンドレ・ジイドは、成長後も妻マドレーヌを終生処女で過させたほどのホモであったが、一方で『狭き門』『田園交響楽』『法王庁の抜穴』などの傑作を書いて、ノーベル賞、ゲーテ記念賞その他数々の栄光につつまれ、一九五一年二月十九日、パリ、ヴァノー街のアパルトマンで宿痾の肺結核と心臓病で死んだ。

死床を見まもったのは、『チボー家の人々』の作家マルタン・デュ・ガールと、ジイドの生涯を妖しく彩った女性たち——熱狂的ファンとも恋人ともつかぬ女性たちであった。マリアもその一人であったが、男色家のはずのジイドはなんとその娘のエリザベートに女児を生ませ、彼の奇蹟的な唯一の子供となったそのカトリーヌも、母、祖母と共にそこにいた。

臨終の枕頭で彼女たちは、ジイドの遺体は十三年前に死んでいた妻のマドレーヌの墓のそばに埋めることを決めた。

三田村鳶魚（一八七〇——一九五二）

江戸についての学識一世を圧するも、性狷介孤高、大衆小説全盛期に、当時の大流行作家、吉川英治の『宮本武蔵』、白井喬二の『富士に立つ影』、大仏次郎の『赤穂浪士』はおろか島崎藤村の『夜明け前』まで考証的にコテンパンにやっつけて恐慌を起させた。根が善良な鳶魚は、あとで「まずかったかな」と苦笑した。

「家族に子女なく、老いてのち夫人に先立たれ、旅に死んだ寂寞の晩年を思い浮かべると、時勢に合う合わぬの、ひとの運命に今更のように感慨を催すのである。（中略）翁の性格は人を容れなかった。出入りの者は或いは御勘気を蒙り、或いはみずからおん出てしまって、側近寥々

たるに至った」（岡本経一『江戸ばなし三田村鳶魚・付けたり』）

戦後、弟子として親近された菊池明は語る。

「三田村先生という方は、ほんとうに自分の過去を語らない方ですね。私もずいぶん、週に三べんくらい行っているのに、一ぺんもそのような話を聞いたことがない」また「三田村先生の晩年はお気の毒でしたね。ほんとうに気の毒だと思います。奥さんが亡くなって（昭和二十六年二月）その後しばらくして私がいきましたら、『君、無性にさむしいものだね』と言われたのを覚えていますけれども」

昭和二十三年に、江戸ばなし『女の生活』が出た。仙花紙仮綴じのひどい本であったが、鳶魚はよろこんで知人の間を持ち歩いた。彼が死ぬ昭和二十七年まで、戦後に出た本はこれ一冊で、当然その生活は貧窮をきわめた。

妻を失ってから彼は、戦争中一ト月ほど疎開していた山梨県の山峡、下部温泉の不二ホテルを頼ってまた流寓した。

松本清張は語る。

「ホテルの方では、戦争中のことがあるものですから、息子の宣伝も手伝って、東京のあの偉い先生が来るというので大騒ぎする。しかし（中略）鳶魚に余り原稿依頼が無かったんですね。それで、ホテルの方でもちょっと当てはずれの状態だったそうです。そのうち鳶魚の体がだんだん悪くなって、半身不随という有様になる。ところが、その宿の女中さんに一人、大変親切な人がいて、その世話を長く見たんです」（『三田村鳶魚全集』月報第八号）

昭和二十七年五月十四日、不遇老衰の果てに、この宿で鳶魚はこの世を去った。遺骸は山の共同墓地に葬られた。

武林無想庵（一八八〇——一九六二）

『性欲の触手』『ピルロニストのやうに』などの作品を発表して大正期ダダイズムの先駆者となり、また妻の文子とともにフランスに渡り、コキュとなって妻をピストルで撃ったりして、その破滅的生活で有名となった武林無想庵は、昭和十二年からようやく日本に定住するようになったが、ときあたかも日本は戦争期にはいり、その生活は火の消えたように不遇なものとなった。

戦争中の昭和十八年、六十三のときには、緑内障のため盲目となってしまった。

生活に困り、自伝『むさうあん物語』を口述筆記させて、あらゆる出版社や知人の作家の間を持ちまわったが、どこ

も相手にしてくれず、やむなく昭和三十二年から会員制の自費出版としたが、それでも会員は予定の三百人が得られないという悲惨な始末であった。

日記・昭和三十七年一月二十四日。

「きのう朝子（帰朝後再婚した妻）がわたしの上体を、四谷の婆さんが両足を持って、それからきんかくしをやっとまたがしてもらい、両手は桟につかまりどうやら下剤をかけて二日目のりょうせい（注・上圊？）を満足することを得てホッと息をついた。こうした二人がかりの手数をかけ、愛する人びとにいやがられにくまれてこんな思いをしてまで便所へかよわなければならないとは、なんたる因果のことであろう」

これは口述だから、朝子たちに対するお世辞をかねていたのかも知れない。

しかし無想庵はこうまでしてなぜ「無想庵日記」を残そうとしたのか？——彼としては、やはり彼なりの——「自分を記録する」という文学の業にとり憑かれていたのだ。

日記・一月二十六日。

「目が覚めて楽しみに毎朝のパンを食べ、コーヒーを一口のんだ瞬間、例の喉が詰りゃあしないかと思う刹那ぴたりと中村屋のパンが喉ちんこを塞ぎ、まったく息ができなくなった。今度こそ『来たな』と思うその喉の状態がいつものごとく、五秒経っても十秒経っても解放されない。朝子がお婆さんに手伝ってもらいわたしの上体を起し、植田さんへその旨を電話した後、口中へ何度かスプーンを差込みそのうちつかえていたパンと痰がひどく出てやっと息ができるようになった。その間、唇は元よりみるみる顔面紫色になってしまったので、朝子もお婆さんももう駄目か、と思ったそうだ」

人間、死ねないのもラクではない。

こういう惨憺たる状態で、老衰の果て、三月二十七日午前一時、やっと無想庵は死んだ。

藤田嗣治（一八八六——一九六八）

藤田嗣治は太平洋戦争後、昭和二十五年、パリに渡り、二十九年フランスに帰化し、さらに三十四年、七十三歳でカトリックに改宗した。そのとき彼が語った「私は士族の出である私の家から与えられた嗣治という名も、神道も捨てるつもりである」という言葉には、戦争中おびただしい戦争画を描いたために敗戦後彼を糾弾した日本の美術界への嫌悪と、ひいては日本への憎悪がこだましていた。

しかし、死の二年前、パリ東北五十キロのランスの大聖堂の大壁画を描いた教名レオナルド・フジタは、晩年しきりに清元や常磐津を聞きたがり、広沢虎造の浪花節「森の石松」のレコードを日本からとりよせ、塩カラと塩昆布で米のメシを食っていたといわれる。しかし日本人に対するときは胸をそらして、フランス人レオナルドに戻った。

彼は前立腺ガンにかかり、死の半月ほど前、療養先のスイスのチューリヒから、日本にいる数少ない友人の一人、画家高畠達四郎に電話して、最後の別れを告げる間にも、痛い痛いと悲鳴をあげて泣いた。

チューリヒのカンスピタル州立病院で、一九六八年（昭和四十三年）一月二十九日午後一時十五分に死んだ。

今村均（一八八六——一九六八）

太平洋戦争において、ジャワ方面軍司令官としてジャワを攻略し、以後ラバウル方面軍司令官としてラバウルを死守した今村均大将は、敗戦と同時にラバウル戦犯収容所に、ついでジャワの刑務所に、さらに日本に送り返されて巣鴨に拘置されたが、昭和二十五年、みずから志願して、部下たちがなお服役している東ニューギニアのマヌス島に移った。ときに今村は六十四歳であった。

彼はいう。「戦勝のときに功一級を与えられる地位の者が、敗戦を招いた場合、罰一級をこうむることを避けようとするのは、許すべからざる厚顔無恥と言わなければならぬ」

昭和二十八年八月、マヌス島の濠軍刑務所が閉鎖されるに及び、ふたたび巣鴨に送り返され、二十九年十一月、刑期満了して釈放された。

以後彼は、世田谷の自宅の庭の一隅に巣鴨の独房と同じ大きさの三畳の掘立小屋を作り、「謹慎小屋」と称して籠り、回想記の執筆と、戦歿あるいは処刑された旧部下の遺族を弔問して余生を送った。回想記を書いたのも、その印税で少しでも遺族を助けようとしての念願からであった。

「なぜあなたはあの無謀な戦争をやめさせるように上層部に進言しなかったのか」というような質問に対して、今村はおだやかな表情で「敗戦の責任は自覚しております。私は罰せられることを望んでいるだけで、ほかにお答えすることはありません」と答えるだけであったが、心の中で「あの戦争は日本民族が存続するための活路を見いだそうとした、やむにやまれぬ戦争であり、後世の史家は必ず太平洋戦争のアジア解放の世界史的意義を明らかにするだろ

う」とつぶやき、この信念は最後まで変らなかった。

彼が進んで瘴癘の孤島で服役したのは「戦争犯罪人」としての自責からではなく、日本人に対して敗軍の将としての贖罪のためであったのだ。

昭和四十三年五月、妻の久子が肝硬変で亡くなってから、今村は急速に衰えはじめた。

それから五カ月後の十月十四日の夕方、かねてから依頼されていた、赤坂の乃木神社に建立される「乃木大将と辻占売少年像」と題する銅像碑文を一気呵成に書きあげたあと、一浴して居間にはいった。嫁の正枝がお茶を持ってゆくと、今村はいつも腰かけている椅子の足もとに、坐らないでうずくまっていた。

午後九時三十四分、彼は絶命した。心筋梗塞であった。

死後、「身体を浄めてから死ぬとは、いかにも今村さんらしい」と評した者があった。

いろいろの意味で、彼を太平洋戦争における陸軍第一の「名将」とする声は高い。

内田百閒（一八八九――一九七一）

「正月三日の御慶ノ会、五月二十九日の麻阿陀会に出席出来ない年が三年程つづいた」

と、弟子の平山三郎は書く。

「去年（昭和四十五年）の夏時分には、それでも自分の足で、寝間から廊下へ出て食卓のある座敷まで、奥さんに肩をしっかり支えられて、ゆっくり辿りつけた。（三畳が三間並んだ奥に六畳の新座敷を建増してそこに洋風の食卓を据えた）――一ト足、一ト足、重い危な気な足を引きずりながら、自分に号令をかける気持からか、あるいは自嘲からか、口誦むのは、チンチンゴウの、チンチンゴウ、電車ノミチハ十文字……昔々の市内電車の歌だった。私は、先生が食卓にたどりつかれるまで、呼吸を詰める様にして、待つ。立ち上がって手を貸そうものなら追い退けられるにきまっている。食卓にようやくのことに落着かれて、先ずシャムパングラスに手を伸ばす。用件はいっさいそのあとで、それも一つの用事がすむと、『今日はもうそれでいいことにして、あとは適当に頼むよ。僕はもうクタクタにくたびれた』と手を振られた。――物事を適当に片附けるなど、それを先生自身のくちから云われると私は不意をつかれた様にうろたえてしまう。あの気難しさが少しずつ衰えてゆくのを見るのはいやなことだった。――盃を持って、埒もない雑談のうちに、椅子の背に凭れて眠ってしまわれることが多くなった」（平山三郎『百鬼園先生逝く』）

内田百閒が次第に痩せ衰え、起居も困難な状態になったのは、昭和四十二年春先からであった。最後の随筆集『日没閉門』は、夫人に背中から支えさせて書いたものである。

かつて一劃もゆるがせにしなかった文字は、判読に苦しむほど乱れたものになった。

そしてこの本の校正刷が出はじめたのは、昭和四十六年二月からであった。

「大きな食卓のある座敷の方へ出て来られることは既に出来ない。旧い三畳の真ン中の部屋を寝間にして、先生は横臥したままの日常だった。臥せた先生の傍、次の三畳の敷居あたりに私は坐って、奥さんが運んでくれるお盆の上のシャムパンをいただく。先生は横になったまま、シャムパン杯にストローを入れて飲まれる。ビニールの管で吸い飲むシャムパンは旨くはなさそうだった。――校正刷をその枕元でひろげて、不審な個所を次々に訊くのだけれど、先生の文字と言葉遣いについての神経は、さほど衰えているとは思えない。

――書きたいことはもう二三きまっている。早く床上げして机に向う積りだが……そうだね、その前に、ステーションホテルで快気祝いをしよう、と云われる。満更、カラ元気でもなさそうだった」（同右書）

そして、四月二十日、午後五時二十分。

「シャムパンをストローですすり、煙草をちょっと吸ったあと、苦痛の色もなく主治医に見とられたまま息絶えられた」（平岩八郎『百鬼園大人の生と死』）

「四月二十二日午後、前日の好天気にひきかえ、出棺のときはどしゃぶりの雨であった。

何しろ先生の家は狭いので、裏庭に面した廊下で最後のお別れをした。みんなで先生の顔のまわりを生花で埋めた。

平山三郎が、いろんなものを柩の中につめていた。昨日見本ができたばかりという先生の最後の本『日没閉門』といっしょに、先生の手のある辺に、昔から見惚れていた例の籐のステッキが置かれてあるのを見て、ぼくははじめて涙が溢れてきた」（雑賀進『詩酒琴の人』）

なお百閒が旅順戦の古い記録映画を観て書いた『旅順入城式』には、次のような描写がある。

「……そうして水師営の会見が終わった。乃木大将の顔もステッセル将軍の顔も霧の塊りが流れた様に私の目の前を過ぎた。

悪戦二百有余日と云う字幕が消えた。鉄砲も持たず背嚢

も負わない兵隊が、手頸の先まで袖の垂れた外套をすっぽりと著て、通った。（中略）兵隊はみんな魂の抜けた様な顔をして、ただ無意味に歩いているらしかった。二百日の間に、あちらこちらの山の陰で死んだ人が、今急に起き上がって来て、こうして列んで通るのではないかと思われた」

思えばこの『図巻』に登場した人々も、この兵隊の行列に似た感がないでもない。

羽仁五郎（一九〇一――一九八三）

マルクス史学の大御所といわれた羽仁五郎は、死の前年の夏にも葉山の海で泳ぐほど健康であったが、昭和五十八年三月肺炎を起して藤沢市の病院に入院、四月末には一応回復したが、五月はじめまた再発した。老衰による肺炎であった。

息子の進は語る。「去年の夏、父と二人で食事をしていたら、父がふっと、『自分が死んでからあとの情景を夢に見る』っていうんです。父から自分の死など聞いたことがなかったので、これは死を覚悟というか予感してるな、と思いました。今年の三月入院してからお医者さんにも『おれの人生は終ったから、無理な治療はしてもらわなくて結構、リンゲルも打ってくれるな』といって困らせました。

死ぬ五日前に、かすれた声で、『ありがとう』っていいまして、それでも足りないと思ったのか、『ダンケシェーン』とドイツ語でいって、ニヤッと笑ったんです。いかにも青春をすごしたハイデルベルクのことを思い出しながらという顔でした。

母には死ぬ一週間前にこんなことがありました。いつも病室から帰るときには、額に接吻して帰るんです。その日も同じようにしようとしたら、父が首をふって『若い時みたいにしてくれ』と、ねだったんです。それで母が唇に触れると、病人とは思えない力強さで接吻を返してきたんです。そのとき母は、これが最後の挨拶かな、と思ったそうです」

八十二歳の夫と八十歳の妻との接吻であった。

説子夫人は語る。

「入院中に『苦しすぎるから殺してくれ』と、何度かいわれました。殺すのはきらい、といい返しますと、ニヤリと笑うんです。

八日、私が付き添って、ベッドの下に座蒲団を敷いて本を読んでいましたら、なんか急に音がなくなりました。びっくりして立ちあがって、のどに手をやると、もう呼吸が

なかったんです。それで先生を呼びましたら、心臓はふだんから水泳できたえていたのでまだ動いていたんですが、もう息は戻りませんでした」

六月八日午後三時十分。

大学生たちから反体制の教祖のごとく見られながら、横須賀に建坪だけでも二百坪ある白亜の豪邸に住み、白いタートルネックをトレードマークのように着こみ、「ビフテキを食うアジテーター」と呼ばれた人物の、これ以上はない幸福な死。実際に彼は、入院中何度か「ビフテキを電子レンジにいれておいてくれ」と、馬のように長い顔でうわごとをいった。

中村草田男（一九〇一――一九八三）

あまりに感受性が強くてしばしばノイローゼになり、中学から大学まで二十年かかったという学歴を持つ俳人中村草田男は、十回の見合いののち結婚し、四人の娘を持ってからもひたすら俳句ひとすじで暮し、妻や娘たちにただ「ミコシ」のように面倒を見られる幸福な家庭生活を送った。彼はまた、しゃべり出したらとまらない奇人でもあった。

が、昭和五十二年七十六歳のとき夫人が急逝してから急速に老衰の度をふかめ、八十前後から車椅子を必要とするようになった。

彼は晩年まで「朝日俳壇」の選者をしていたが、同じく「朝日歌壇」の選者をしていた歌人近藤芳美はいう。

「あるときは選句の時間に姿が見えず、騒ぎとなり、どこかの公園に坐っているのを担当の記者が探しに行ったりした。わたしもまた、新聞社の廊下を、選句の部屋から便所まで、車椅子に乗り、助手の人に連れて歩かれるのを見て、暗澹とした思いを抱いたことがしばしばであった」

こういう状態でも選句はできるものらしい。

昭和五十八年七月十八日、健康診断のため入院し、自宅静養のほうがよろしいということになって八月三日退院した。

「二百年生きると豪語した父、それにしてはあまりにも急な父の死でした」

と娘の郁子は記す。

「退院した次の日の八月四日、元気がなく、口もあかず目をつぶったようにしている父に、昼食のパンを食べさせようと必死でした。私は少しでも父の気持をもちあげようと話しかけました。

『玫瑰や今も沖には未来あり、という句がありますね。あれは季節はいつですか』
　すると、かすかな声で、
『マ……ナ……ツ』
『え？　マナツ？　ああ真夏ですか、今だねえ、じゃ今だねえ』
　と私が言っているうちにぐったりとうなだれてしまいました。私は思わず、
『ダメ！　食べなきゃ駄目！　そんなにしていたら死んでしまう、食べなかったら死んじゃうんだよ！』
と、叫びました。
『アリガトウ』
　弱々しく声にもならず父の言葉が返ってきました。これが父と交した最後の言葉でした」
　救急車で再入院する騒ぎとなったが、翌五日朝、急性肺炎をひき起して臨終の時を迎えた。

　　降る雪や明治は遠くなりにけり

の名句で知られた明治生まれの俳人は、真夏にこの世を去ったのである。

中野好夫（一九〇三――一九八五）

シェクスピア、モーム、スウィフトの名訳や『蘆花徳冨健次郎』などの伝記で知られる一方、戦後のいわゆる「進歩的文化人」の代表と目され、美濃部亮吉を初の革新都知事として送り出すために奔走した――これについて河盛好蔵は「正直なところ、御当人も決して好きでもなさそうな人物を知事にするために飛び回っている姿を見て、ああ勿体ないことをする、と惜しんだ」という――中野好夫は、その叡山の悪僧然たるつらだましいと、辛辣痛烈の言論で保守陣営をひるませたが、平生の人柄は寛容で親切で律義であった。
　彼は昭和五十九年八月、結腸のポリープの手術をしてから、一時外出ができるほど回復したが、十二月中旬からまた具合が悪くなり、こんどは肝硬変と診断された。実は八月、良性ポリープと発表されたが、ポリープとは別に肝臓を中心にガンがひろがっていたことが判明していたのである。彼はそのことを知らなかった。
　そのころ訪れた編集者に、彼は湯呑を指して、持つのもおっくうという手付きをしながら「肝臓が悪いというのは何とも人を無気力にするね、タテのものをヨコにするのもいやになる」といった。
　そして十二月二十四日、美濃部亮吉が急死したというニュースを知らせても、彼はすでに何ら特別の反応も示さない状態にあった。
　六十年一月十四日から再入院したが、「機械によって生かされるのはごめんだな」と何度もいった。
　一月十九日の午後、見舞いにいった哲学者古在由重に、中野は「こうなったら持久戦ですな……まあ、勝てんとは思うけど」と、いった。
　そういえば中野好夫は、真正の意味での正しき人、しかもその行為の空しさをも知りつくしている正しき人であった。
　二月十七日見舞った劇作家木下順二は記す。
「十七日朝、信頼する医師団が今明日中に急変あるやもといった由なので病院へ飛んだ私は、先生のおでこに手を当てながら、小一時間もじっと先生の顔を眺めていたが、時に表情をゆがめるほか、意識は全くないと思われるのに、からだ全体からほとばしってくる意志の精気を私は感じた。男が、最後の最後まで闘いぬいている。本当は、これが中野好夫だと思った」
　三日後の二月二十日午前三時三分、眠るように死んだ。
　妻静はいう。「二、三日前から意識はなく、呼びかけると返事はしましたが、本当はわかっていなかったようです。安らかな死でした」
　中野好夫は、平生から「自分は死後の世界など全く信じない」といっていた。本人のかねてからの意志により、柩には花束もおかず、遺影一枚が飾られただけであった。

八十三歳で死んだ人々

自分が死ねば、世界も宗教も、神そのものも消滅するのだ。

——正宗白鳥——

孟子（前三七二——前二八九）

中国の戦国時代、天下に「王道」を二十年遊説してまわった孟子は、ただ権力のみ念頭にある諸国の君主たちについにいれられず、むなしく故郷に帰って隠遁して死んだ。

それでも彼の残した数々の言葉は、王道に遠い二千数百年後の後代の日常にもなお生きて、われわれの思考を支配しているのに驚く。

いわく、「五十歩百歩」「恒産なければ恒心なし」「仰いで天に愧じず」「往る者は追わず来るものは拒まず」「人みずから侮りて然る後人これを侮る」「天の時は地の利にしかず。地の利は人の和にしかず」「みずから反みて縮くんば、千万人といえどもわれ往かん」……

ゲーテ（一七四九——一八三二）

七十二になって、マリエンバートの十七歳の娘ウルリーケに真剣な恋をしたゲーテだが。——

鷗外の『ギヨオテ伝』にいう。

「一八三二年三月にギヨオテは感冒して、十六日に床に就いた。日記の最後の一行には『終日不快にて臥褥』と書いてある。フォオゲルが療治して一旦起きたが、十九日から二十日に掛けての夜寒に病気が重くなって、二十二日午後十一時三十分に腕付の椅子の左の隅に身を倚せ掛けた儘で亡くなった。よめに『握手をしよう』と云ったのと、家隷に『窓を一つ開けてくれ。明かりがもっと這入るように』と云ったのとが、最後の詞である。『も少し明かりを』と云う象徴的の語は此に本づいている。死に瀕した時、右の示指で空中に文字を書いた。それはWの字らしかった」

ギヨオテとはおれのことかとゲーテ言い。

同年に日本では、頼山陽や鼠小僧次郎吉が死んでいる。

ユゴー（一八〇二——一八八五）

ストイックな超人ジャン・ヴァルジャンを生み出したヴィクトル・ユゴーは、超人的な好色の牧神でもあった。

恋するアデールを妻とした初夜に九回交合したと彼自身が述べている。その絶倫の精力は老いても毫も衰えず、最後の年の八十三歳の一月一日から四月五日までに八回、女と交わったという記録がある。

死ぬ数日前にも、文学者協会の委員と料亭で会食した際、彼は居眠りしているように見えたが、やがて彼のために乾杯が行われると、立ちあがって熱弁をふるい、さっきまで居眠りしていなかったことを証明した。

五月十六日に彼は付添いにいった。

「私は死んだ」

「何をいうのです。ぴんぴんしていらっしゃるじゃありませんか」

「君がそう思うだけなのさ」

彼は何か異常を感じていたのであろう。十八日に彼は倒れた。ベッドに寝かされたときにユゴーはいった。

「君、死ぬのはつらいね」

「でも、死んだりなさるものですか」

「いや死ぬね」

しばらくして、スペイン語でいった。

「だが、死を大歓迎するよ」

死の床にある間に、彼は、

「ここで夜と昼とが戦っている」

と、つぶやいた。

二十二日朝から臨終の苦しみがはじまった。彼は、砂利に打ち寄せる海の音のようなあえぎをつづけ、午後一時三十七分に息をひきとった。「黒い光が見える」というのが最後の言葉であった。

ロマン・ロランは「老いた神が断末魔の苦しみに喘いでいたとき、凄まじい嵐がパリを襲い、大旋風が巻き起り、雷が鳴り、雹がふった」と記している。

五月三十一日、偉人廟に葬られたが、パリ全市をあげて、フランスに新しい神が誕生したことに有頂天になって、さながらバッカスの祭りのようであった。

同年に日本では三菱の岩崎弥太郎が死んでいる。

ビスマルク（一八一五――一八九八）

それまでドイツ人による小国の集合体に過ぎなかったドイツを、一大帝国として統一し、普仏戦役でフランスを破り、手品師のごとき老獪（ろうかい）きわまる外交術を駆使してドイツを磐石の安きにおき、鉄血宰相とうたわれたビスマルクも、彼を重用したウイルヘルム一世が死んで、孫のウイルヘルム二世があとをつぐと、少壮血気の新帝とたちまち衝突した。（このウイルヘルム二世がのちに第一次世界大戦をひき起すことになる）

彼は追放同然に追われ、ハンブルクに近い一寒村フリードリッヒスリューに隠退した。ときに七十五歳であった。

隠退しても、ウイルヘルム二世は種々冷遇し、それに対して彼も皇帝を冷嘲した。

その生活は孤影索然たるものがあった。特に彼をして「おれは妻を残して死にたくない。さりとて妻の死後にも生きたくない」といわせた妻のヨハンナが、彼の七十九歳のときに喘息で死んでからは、彼の孤独はいよいよきびしいものになった。

やがて彼は神経痛に苦しみはじめた。顔面ことに口辺に苦痛甚だしく、ときには口をあけることができないこともあった。壮年時、いちどに卵を十五個食い、またいちどに牡蠣（かき）を百七十五個食ったこともあるビスマルクは、「これは食い過ぎの罰だ」と自嘲した。

八十歳の誕生日のとき、お祝いに来た客が、なお彼の息災を祈るというと、彼は、「余もそれを欲する。ただしこの神経痛の苦しみさえなければだ」といった。また、「余にもこれから先、ただいちどだけ幸福な日が来る。それは、寝て、ふたたびさめぬ日だ」といった。

一八九八年七月三十日の夜、彼はふいに胸部の疼痛を訴え、午後十時、看病の愛嬢にひたいの汗をぬぐってもらったあと、眠るがごとく死んだ。病名は肺充血（肺炎）といわれたが。――

「ビスマークが臨終の床にいるという時にどことか新築の橋の上を歩いていたそうでそれを見かけて敬礼した人が沢山あるというのは有名な話だ」（佐藤春夫『首くくりの部屋』）

ドガ（一八三四――一九一七）

逆光の中に、踊子や競馬や洗濯屋や帽子屋など、ムーヴマンの瞬間的な動きをとらえて、数々の近代的な傑作を描

いたドガは、生来の鋭敏な神経と辛辣な性格のためか、ついに生涯独身で、世に大家と認められながら友人もほとんどなかった。

一八七七年彼が四十三歳のころ、その数少ない友人の一人に、「私の眼の前に薄い雲のようなものが通り過ぎるのが見えるようになりました」と書いたドガの眼は、晩年いよいよ悪化し、ある日画室でモデルを描きながら、突然両眼をおさえて倒れたこともあった。

そしてついには片眼は完全に失明し、残る片眼もわずかに見えるほどになってからは、彼は手さぐりで彫刻を彫るようになった。

さらに悪いことに、一九一二年、住みなれたパリ、ヴィクトル・マッセ街のアパルトマンを土地収用のため追い立てられた。彼は新しい別の住居になじめず、町を徘徊し、いつのまにか昔の家のほうに向い、建物の取壊しの行われている工事現場の板囲いに、まだ視力の消え残った片方の眼をおしあてるのだった。……

ドガは新しいアパルトマンで家政婦と二人で暮し、讃美者が訪れても「絵？　そんなものは私は興味はないね」と横をむき、記者がインタビューにやって来ても、「おれは君なんか知らないよ」と追い返し、いよいよ孤独狷介（けんかい）な老年を過した。

彼はついに完全に失明に近い状態になり、一九一七年九月はじめ病床につき、二十六日夜、脳溢血を起して死んだ。

安田善次郎（やすだぜんじろう）（一八三八――一九二一）

富山の百姓の子から一代にして安田財閥を作りあげた安田善次郎は、大正十年九月二十八日、彼の暴富を憎んだ壮士朝日平吾のために、大磯の別邸で刺し殺された。

凶行現場にまっさきに駈けつけた女中のつる（十九）の談。

「午前九時二十分ごろ、玄関先に『昨日来た風間ですが』といって参ったから、取次の書生の山梨茂雄さんは旦那さまに伺（うかが）って、十時ごろ、客間に案内しました。私が、茶や煙草盆を出して間もなく、旦那さまはお会いになって何やら話をしておられたが、およそ三十分くらいたって、突然、ギャッという声がしたかと思うと、ドタンドタンと物凄い音がしましたので、何事が起ったのかと駈けつけてみると、右の男が、眉間（みけん）に傷ついたまま庭先へ逃げ出した旦那さまを押し倒し、短刀を逆手（さかて）にのどぶえに突きたてましたところですから、『大変だ大変だ』と大声をあげて茶の

間に逃げこみ、多勢の女中たちとふたたびひき返してみましたところが、その男は血潮のしたたる短刀をふりあげて、『騒ぐと殺すぞ』とどなりつけましたので、私どもは恐ろしさにふたたび逃げこみました。

そのすきまに男は応接間に上って、西洋剃刀でのどをみごとに三寸ばかりかき切り、あおむけになったままことぎれておりました。何か印刷した紙切れ（斬奸状）がちらばっておりました」

明治大正にわたって、一代にして彼のごとく巨富を積んだ者はない。その彼は「寄附は、もらった人間を誤まらせる」という信念を持ち、甚だしわん坊であった。晩年、爵位を望んで急に寄附を始めたが――東大の安田講堂はその一つである――時すでに遅かった。

そこで、安田善次郎は殺されるために大金持になったようなものだ、という世評が生まれた。ともあれ、いまの富士銀行は、彼の作った安田銀行の後身である。

フロイト（一八五六――一九三九）

一九二三年二月、精神分析学の創唱者ジグムント・フロイトは、満六十七歳の誕生日を前に、口中に白板症のひろがっているのを発見した。これははげしい喫煙者に生じ易いものであり、フロイトは大変な葉巻愛用者であった。

四月に彼は、家人に何も告げずに病院へ行って手術を受けた。これが、以後十六年にわたり、三十三回に及ぶ手術の第一回目であった。この白板症はガンに変化する公算の多い病気であり、以後彼は間断なくX線治療を受け、ラジウム照射を受け、その副作用の激痛にまた苦しむことになる。

その手術後の六月、彼は最も愛していた孫のハインツを小児結核のために失った。冷徹なフロイトが涙を流したのは、あとにも先にもこのときだけであったといわれる。

果然、白板症は悪性腫瘍化した。彼は、口中の上顎、口蓋全部を切除され、鼻腔と口腔は一つになり、新しい人工顎と人工口蓋と義歯をはめた。日常生活において、これをとりはずし、またはめるのが、毎日の一家の騒動となった。

以後、手術を繰返しつつ、一方で彼は『神経症と精神病』『幻想の未来』『続精神分析学入門講義』などの著作をし、また精神分裂の患者の治療行為に当った。

一九三六年、八十歳のとき、腫瘍は完全なガンに変り、彼はまた大手術を受けることになった。このときの焼灼手術で、彼は「もうこれ以上はたまらん」と大声でさけんだ。これが彼のもらした唯一の悲鳴であった。

一九三八年六月、ナチ政権のために、ユダヤ人の彼はその著書を焚書され、財産は没収され、七十九年間住み馴れたウィーンをあとにロンドンに亡命のやむなきに至った。

その翌年からガンはいよいよ悪化し、七月になると感情鈍麻の徴候が現われ、八月にはガン特有の悪臭が病室を満たした。

そして九月二十三日夜半前、十六年間にわたる闘病生活を、なんの感傷も錯乱もなく、不撓不屈の意志をもって耐えぬいた巨人は、はじめて主治医にモルヒネを請い、みずから「安楽死」をとげた。

ただしかし、心理学者宮城音弥によれば、フロイトの精神分析は、「ほんとうではないにしても、うまく考えたものだ」というイタリアの諺を連想させるものがあるという。それならば一種の推理小説と同様ではあるまいか。

……ともあれ、フロイト自身はこれを真理だと確信して、右のごとき偉大にして長い苦闘の人生を捧げたのである。

正宗白鳥（一八七九――一九六二）

二十代のとき白鳥は、「バイブルは吾人が恐れ入るにも当らない、凡書である」と書いた。

四十代のとき、「トルストイはキリストとは比較にならない厚みのある人間なのだ。（中略）キリストの光明はお伽噺の光明で、トルストイの暗黒は大地と人心の底に渦を捲いている現実の暗黒である」と書いた。

ところが、七十代にはいると白鳥は「……私は断末魔の際、南無阿弥陀仏と唱えるだろうか。イエス・キリストに救いを求めるだろうか」と書いた。

……懐疑主義者正宗白鳥は、不可抗の力にひかれて、徐々に回心の道をたどりはじめたのである。

その白鳥は、昭和三十七年夏ごろから食欲不振がつづくので、八月二十七日、日本医大第一病院に入院し、胆管に異常があると診断されて手術した。

手術後も依然食欲不振であったが、「食べないのが一番いいんだが、食べなくては餓死するから」といって、お粥に梅干という食事を流しこむようにとり、背、胸の痛みを訴えながらも、病院の廊下の散歩を欠かさなかった。彼は自分が膵臓ガンにかかっていることを知らなかった。

十月にはいって、その流動食も口にはいらず、白鳥は体重三十キロの、骨盤と手足ばかりのような姿になった。

深沢七郎は書く。

「……正宗白鳥は病院で、ガンで死にました。その一週間ぐらい前に、白鳥は『なんとかいう人にボクは救われた』と私に話しました。あとで、そのヒトは内村鑑三という人だと知りましたが、あのときは、どんな人だか名前をいわれてもわからなかったのです。が、とにかく、重態になって、ベッドで言うので、私はその人に知らせて、すぐにここへつれてきたいと思いました。それで『その人の家はどこです。私がここへ呼んできます』と言うと、白鳥は『そんな人は生きていない』というので私はまごついてしまいました。なぜ、そんな人のこと言うのかと思いました。次の日に『植村環（うえむらたまき）という人がその人の娘で牧師をやっているのです、その人にここへ来て下さるようおねがいにゆきます』と奥さんは言うので『私も一緒に行きましょう』と言いました。奥さんも老齢なので、ひとりで行くのは心配でした。奥さんも『おねがいします』と言うのです。私は『植村環』は歌劇のソプラノの有名な『三浦環』の本名だろうと思い込んでいました。（中略）

植村環という人は翌日来てくれました。白鳥のベッドの枕許で『神を信じますか？』というようなことを言って、白鳥が『アーメン』とか言ったそうですが、私はそばにいたがなんの話をしているのかわけがわかりませんでした。白鳥がいまにも死んでしまうのだと思うと、ぼーっとしていたのですが、ソプラノの三浦環とは『ちがうな』と思っていました」（深沢七郎『思想濃老日記』より）

深沢は内村鑑三と植村正久を混同しているが、植村環は、白鳥が若いころ崇拝した牧師の植村正久の娘であった。彼女は十月十二日から毎日のように病院を訪れた。

死の一週間ばかり前に、白鳥は植村環に、「国木田独歩は死ぬ前に、あなたのお父さんに、お祈りしなさいといわれ、僕は祈れない、と号泣したそうだが」といった。

「私は、先生にいった――『先生は複雑な方だから、懐疑がつきまとっていた。けれど単純にならないと、天国にははいれませんね』と。すると先生は、大きな声で『私は単純ですよ、今は』といわれた」

と、植村環は書く。

環は、ヨハネ伝第二〇章第二六節などを読んだのち、「先生に質問した――『先生は、キリストを救い主と信じますか』と。先生は言下に答えられた。『信じます』と」

環は、さらにヨハネ伝第一一章第二五節を読んだ。「先生は『私は罪人で、沢山（たくさん）悪いことをしたけれど、キリストは許して下さる、そして天国にいだき入れて下さる』とはっきり言われた。幾度も、私は讃美歌を歌い、聖書を読み、

祈りをしたが、先生は『アーメン』と唱和された。……」

――これについて、舟橋聖一はいう。

「非礼を顧みずにいえば、正宗氏は死ぬ前に、脳細胞の障害を起し、脳軟化症のような病状になられたのにすぎない。これはどんな偉人にもある生理的病理的変化であって、そういう臨終場面のみに、正宗氏の長い一生を片付けてしまうことはナンセンスのほかはない。（中略）私の臆測が許されるなら、正宗氏自身も、しばらく臨終の苦痛を和らげるべく『アーメン』と祈られたが、若しあれで息を吹っかえしたら、元気矍鑠（かくしゃく）として、今まで通りリアリストらしい毒舌をほしいままにされたのではないか」

この舟橋の文章について、獅子文六はいう。

「正宗白鳥が瀕死の床で、アーメンと唱えたのを舟橋聖一が、脳軟化症云々とかいって、軽侮の文章を書いたのを、浮薄聞くに堪えずと思った。

血気の頃の白鳥は、神を畏れざることを考え、書いてたろうが、老年となり、死が見えてくれば、心境は変るのである。変らなければ、人間ではない。（中略）死に面した時に、すべてはちがう。神の懐に招かれて、死にたいという考えが出て来たのは、当然であり、自然である。負けたとか、変節だとかいうことではない。舟橋如きの解し得る問題ではない。白鳥は最後まで頭も、魂も、ハッキリしていたのである」

十月二十七日、白鳥は妻の顔を眺めて、「一文もないのだから、早く家に帰りたい」といった。正宗家の経済は、死の床にある白鳥が、入院費のことで気をもまなければならない状態にあったのである。妻が残金十七万円の札束を一枚一枚数えてみせたところ、白鳥は首をふるしぐさで、ゲンコで妻の顔をポンポンとぶった。（当時、大学卒公務員初任給約一万六千円）

――その妻は、五十一年前、三々九度の盃を交わしたとき、新妻の唇にふれた盃にふれた自分の唇を、白鳥が指でぬぐったという妻であった。同時に、晩年の数年、毎日曜の夜、妻がバイブル・クラスの集まりにかようのを、雨の日も雪の日も、毎夜駅まで白鳥自身が迎えにいってやった妻であった。

彼女は夫のために祈りつづけた。

「神様、忠夫（白鳥）の命を取りとめ、長くとは言いませぬが、御心ならば生かして下さい。必ず神様を信じます。今はあなた様のみ、今は絶体絶命の時、忠夫に信仰を持たせますよう、全身全霊をもってあなた様の御慈悲をたれて下さい」

翌日二十八日の午前九時半ごろから、白鳥は口をあけて意味不明のことをつぶやき、妻の手を手さぐりに探しはじめた。その手や足、顔が徐々に黒ずんでいって、十一時妻に手をとられたまま息絶えた。

死の二年前に、白鳥は「一つの秘密」と題する怖ろしい文章を書いている。

「人間は誰でも一つや二つは絶対に、死ぬまで人に打明けたくない秘密があるものだ」

それを自分も持っている。それは犯罪とか破廉恥とか、そういう次元のものではない、と、彼はいい、

「それは私自身の身心に関係したことなのだが、それを打明けるよりは、むしろ死を選ぼうという気持になるのである。私の心理が異様なのか。その秘密を思い出すと、自己嫌悪自己侮蔑に身震いするのである。死後、審判の座に引据えられたときにも、こればかりは除外されたかった。(中略)そういう秘密に悩まされない人は幸いなるかな。(中略)私が持っている一つの秘密にしても、近親者の誰もが看破しえないのである。(中略)人間老境に達すると、記憶が薄らぎ、過去の悲喜哀歓の経験もまぼろしのようになるものだが、私の秘密は、昔ながらの毒気を持って出現するのである」

彼はついにこの秘密に口を閉じたまま、あの世へ去った。

スプルーアンス（一八八六——一九六九）

それまで米海軍で無名に近い存在でありながら、ミッドウェーで日本の空母群を全滅させ、太平洋戦争の戦勢を一挙に逆転し、以後、硫黄島、マリアナ、沖縄等の作戦の指揮をとったレイモンド・エイムズ・スプルーアンス提督は、戦後、海軍大学長、フィリピン大使を経て、一九五五年、六十九で隠退生活にはいった。

穏やかな生活の中に彼は次第に老い、やがて、腰痛、白内障、動脈硬化などの老人病に悩みはじめ、そのうち長年の友人と逢っても相手がだれかわからない状態になった。

一九六九年春、息子の退役海軍大佐エドワードが自動車事故で死んだときも、何度そのことをいっても理解できないようであった。

それ以後みるみる衰弱し、ついに寝たきり老人になった。ある夜、看護婦に何かいい、看護婦が耳を近づけると、

「私は妻にさようならをいいたいのだ」といった。

これが完全な意味を持った彼の最後の言葉となった。そしてその年十二月十三日にこの世を去った。

古今亭志ん生・五代目（一八九〇——一九七三）

昭和三十六年十二月十五日、七十一歳の志ん生は、高輪プリンスホテルでの巨人軍優勝祝賀会の余興を依頼され、飲み食いの始まる前ならという条件で承知したが、川上監督の到着が遅れて一時間も開会が遅くなり、志ん生が高座に上ったときは、出席者はみんなもう飲み食いを始めていた。志ん生は気分を悪くし、しかし努めて一席やっているうちに、脳出血で人事不省になった。

それ以来、彼は右半身不随となり、呂律もよくまわらないようになり、その病状はよくなったり悪くなったりした。悪くても彼は酒を飲みたがり、よくなれば高座に出たがった。

四十二年に勲四等瑞宝章を授与するという内示が役所から伝えられたとき、志ん生は「そうかい、ありがとう。けどネ、おれもこんな身体になっちまって、そっちにとりにゆけねえんだ。すまないけど、とどけておくれよ」といった。

四十三年十月九日、彼は七十八で霞ヶ関のイイノホールの「精選落語会」に「二階ぞめき」をやって、それが最後の出演となった。ただし「二階ぞめき」のはずが、途中で「王子の狐」に変ってしまった。

寝たきりになってから、弟子がパジャマを買って来てやったが、志ん生は着るのをいやがった。それを無理に着せ、無理に鏡を見させると、「見ろ、西部劇の鍛冶屋だ、まるで」といった。

四十六年にはこんなことをいった。

「ことしはなに年？　亥かい。八十一ンなるんです、あたし。やんなっちゃうね。どうしようかと思っちゃう。ほんとに。

八十ンなったとき、これから、なにやろうと思っちゃって、なにしろあなた、八十ってば、こりゃあ、もう……おじいさんですからね。

いままでひとの年齢きいて、八十なんていわれると、へえっと思ったもんだけど、こんだ自分でね、その八十ンなっちまって、八十になりゃ、たいてい参っちまうもんだけど、参らないから、まごまごすると、九十まで生きちまうかも知れない。

でもね、最近はよく、冥土へ行った夢見るんです。ええと、ここが冥土なんだなって、そんな夢を見てる。じっさ

い、ここまでくると、どこまで生きりゃいいんだって、いいたくなっちまう。ねえ、つまんないもう。いつもそう、なんかあると、ああ面倒くせえ、はやく参っちめいてえなって。けど、こればかりはね、まさか、刀持ち出し腹ァ切るわけにもゆかないし、だいいち、そのう、ああいうことはやりつけないから、上手くいく気づかいがない」（『文藝春秋』昭和四十六年一月号「こうなりゃ、九十まで生きる」より抜萃）

その年の十二月には、若いころからケタはずれの道楽でさんざん苦労させた妻のりんが、これも脳溢血で死んで彼を落胆させた。しかしりんは、ある意味で破戒無慚ともいうべき夫が、落語界の名人といわれ、紫綬褒章までもらうのを見て、満足して死んだ。

そして志ん生自身も、よく出来た息子たち（金原亭馬生、古今亭志ん朝）や娘たちに手厚く看護され、昭和四十八年九月二十日夜、親子丼を食い、吸い飲みで酒を飲んだあと、十一時ごろ「胸がやけて苦しい」といった。心筋梗塞とは知らない家族は、胃散を飲ませた。志ん生は夜中にチョコレート色の血を吐いたが、あとトロトロと眠り、翌二十一日午前十一時半ごろ、いつ息をひきとったのかだれも知らない状態で安らかに死んでいた。外にはしずかに彼岸の雨がふっていた。

葬式における長男馬生の挨拶。

「エ、大変倖せな父で、死ぬときも、まことに極楽往生、眠るがごとく亡くなりました。ええ、マ、死ぬときまで名人だな、といって、マ、その点、大変に倖せだったんじゃないかと思います」

生涯飲む打つ買うの道楽をやりつくして、しかも極楽往生をとげた人間の見本がここにある。しかし志ん生にその幸福を与えたのは、道楽の間も忘れなかった芸への執念の、細いが強靭な糸であった。

毛　沢東（一八九三——一九七六）

毛沢東は乱世の雄であり、戦いの哲学の大教師であったが、現実の政治を指導する力は周恩来や劉少奇に及ばなかったのではないかと思われる。

そのため晩年やや影が薄くなったかに見えたが、突如として一九六六年からいわゆる文化大革命の嵐を作り出し、年少の紅衛兵をあやつって、ついに一九六九年政敵劉少奇を斃すという乾坤一擲の怖るべき奇策を成功させた。

一九七二年、日中国交正常化のため日本の首相田中角栄

が北京を訪れたとき、彼は悠然として、「人間はケンカしないといかんです」などいっていた。

しかし文化大革命は、毛沢東の権力への執念の最後の炎であった。さしもの彼もやがて八十を越えては老衰の運命をいかんともすることが出来なかった。

一九七六年五月十二日、彼がシンガポールのリー・クァンユー首相と会見したときの写真は、香港の株価を暴落させた。ソファに落ちこむように坐った毛沢東の姿は、その老衰をあますところなく伝えていたからである。老衰のみならず彼は不治のパーキンソン氏病に冒されていた。

六月十五日、中国外務省スポークスマンは、北京駐在の外国人特派員を集め、「毛主席は今後、外国賓客と会見しないことになった」と発表した。英紙「ザ・ガーディアン」は、この会見停止後の社説で、「悲しいことに、毛が長生きすればするほど、中国の政治的不安定はより甚だしいものになって来るのだ」と書いた。

すでにその四月五日には、毛沢東とその側近いわゆる「四人組」への大衆批判を意味する天安門事件が起こっていた。そして七月二十八日には工業都市唐山に大地震が起って、民衆はこれを天下大乱の兆と受けとった。

彼はもはや自分の膝下で繰りひろげられる江青ら四人組と鄧小平ら現実派との闘争をどうすることも出来ない状態にあったと思われるが、九月のはじめ、ついに脳溢血で倒れ、一週間後の九月九日午前零時十分に死んだ。

華国鋒への遺言の実否をふくめて、その死の前後の様相は、正確には明らかではない。そして、この巨人の中国史における功罪も、とみには断定しがたいものがある。おそらく半永久的にそうであろう。

伊藤大輔（一八九八——一九八一）

昭和初年、大河内伝次郎主演の「忠治旅日記」三部作などの名作を発表し、「時代劇映画の父」といわれた伊藤大輔（そもそも「時代劇」という言葉を作ったのが彼であったという）は昭和五十六年七月十九日、老衰の果て腎不全で、京都の病院で寂しく死んだ。

戦後の代表作は阪妻主演の「王将」だが、これについて映画評論家滝沢一はいう。「市井の俗塵にまみれながら、将棋一途にわが道をゆく三吉は、映画一途に生きた伊藤大輔の自画像であり、（中略）羽ぶりのよいときには、それをおだてたり、かつぎあげようとする人間がむらがってくるが、それがひとたび落ち目になると彼を捨ててかえりみ

ない人間も出てくる。この世界の表裏、人情のどんでん返しのありようが、伊藤大輔の人生に照応する」(キネマ旬報『日本映画監督全集』)

「映画監督の死は、なぜかくも寂しいのだろう。器用な人ならテレビの仕事でもやって食いつなげただろう。しかし伊藤監督は、そんなことには決して手を出さぬ『気骨の人』だった。ここ十年は映画の仕事もせず、晩年は『恍惚の一歩手前だった』という。その監督を実の親のように思い、経済的にも精神的にも、最後まで面倒を見たのが俳優の萬屋錦之助だった。そして、かろうじて、悲惨な困窮生活をまぬがれたという」(「週刊新潮」昭和五十六年七月三十日号)

彼と同じ年に生まれ、「巴里の屋根の下」「巴里祭」「自由を我等に」などの名作を発表し、日本にも多くの心酔者を出したフランスの大監督ルネ・クレールも、第二次大戦後は冴えず、この年の三月十四日に同じ八十三歳で死んでいる。

が、クレールの名作のすべてはパリのシネマテークに保存されているだろうが、日本では映画をいっときの興行物としか考えなかった映画会社は、保存ということに露ほども思いが及ばず、伊藤大輔のサイレント期の名作はすべて失われて、こんにちわれわれは見ることはできない。

なお、伊藤大輔が死んだ直後、萬屋錦之助プロは倒産し、錦之助は筋無力症になった。あやういところであった。

八十四歳で死んだ人々

> これこそまさに昼と夜のたたかいだ、と死床のユゴーはいった。
> しかし、夜の次にもう昼は来ない。
>
> ——山田風太郎——

貝原益軒(かいばらえきけん) (一六三〇——一七一四)

貝原益軒は七十八歳で、それまで損軒と称していたのを益軒と変え、これ以後、いわゆる『女大学』をはじめ、彼の名を有名にした大衆教訓書を書き出した。特に、年齢に適当した性交回数まで説いた『養生訓』は世に知られている。

いわく、「二十の者は四日に一たび泄(もら)す。三十の者は八日に一度、四十の者は十六日にひとたび、五十の者は二十日にひとたび、六十の者は精をとじて洩らさず。……」

しかし益軒は、性交回数は知らず、三十九歳のとき十七歳の花嫁をもらったが、子供が出来ないので三人の妾を持ってみたが、ついに子が出来なかった。

とはいえ、生来蒲柳(ほりゅう)のたちだが健康に対する注意と克己の徳で長生きした、と彼自身述べ、特に後半生においては常人以上の健康ぶりを誇っていた益軒も、八十を越えてからはようやく衰えを見せはじめた。数え年八十三の正徳二年には、「脾胃(ひい)調(ととの)い難く候。時々微泄(びせつ)仕り候ゆえ、元気衰え、対客長談成り難く……」云々と知人への手紙に述べている。不時に大便をもらすようになったのである。

翌年の十二月末、妻を失い、彼はいよいよ元気を失い、その翌年の二月まで客を一切ことわって家に閉じこもっていたが、四月からは足が麻痺して立てなくなった。

そして、その年、正徳四年八月二十七日に最期の息をひきとった。彼が生前排仏論を主張していたので、呼ばれた和尚は、黙って坐っているだけでお経を唱えなかった。

ヴォルテール (一六九四——一七七八)

十八世紀、小説、詩、戯曲、評論等で一世を風靡(ふうび)する一

方、いわゆる神学はおろか聖書、教会にも痛烈な批判を加えたために、いくどか投獄され、ついにフランスから亡命の途に上ったが、イギリス、ドイツ、スイスなどにあって執筆をつづけ、全ヨーロッパから最高の叡智と仰がれたヴォルテールは、一七七七年、八十三歳で、十七年ぶりにパリに帰って、王者の凱旋のごとく迎えられた。

　全パリから熱狂的な歓迎を受けながら、老来、肺結核や前立腺肥大や膀胱炎の持病を持つヴォルテールの健康は急速に悪化し、パリに帰って十五日目に鼻口から血を吐き、重態におちいってしまった。当時は教会から認められなければ、葬式がしてもらえなかった。無神論の代表者と見られていたヴォルテールはどうしたか。

　彼はともかくも司祭を呼んだ。しかし聖餐の儀式を受けることになったとき、「私はいまでも痰に血が混ります。神の血と私の血がいり混らないようにして下さい」といったので、その儀式はとりやめになった。

　その後彼の健康は回復し、翌年三月三十日、彼の戯曲「イレーヌ」がコメディ・フランセーズ座で大成功裡に初公演され、彼は最高の栄光につつまれたが、五月にはいるとまた健康が衰えはじめた。

　五月三十日夕刻、病床で司祭が、「あなたはまもなく御臨終です。死の前に、イエス・キリストの神性をお認めになる気はありませんか」といいかけたのに対してヴォルテールは、

「イエス・キリスト？　イエス・キリスト？」

と、繰返しつぶやいたあと、両手を出して司祭をおし戻し、

「静かに往生させてもらいたい」

といったのが最後の言葉であった。その夜十一時ごろ彼は息をひきとった。

　このためパリに埋葬することは許されなかったので、彼の遺骸はシャンパーニュの寒村に葬られたが、十三年後、フランス革命の革命政府が遺骸をパリに運び、パンテオンに埋め直した。ところが、それからまた二十三年後、こんどは王党派の者がパンテオンからヴォルテールと、同年に死んだルソーの遺骸を盗み出し、以来そのゆくえはわからない。

　なお、彼が死んだときたまたまパリにいたモーツァルトは父への手紙に書いている。

「多分もう御存知かと思いますが、お知らせしましょう。つまり無信仰者でひどい無頼漢のヴォルテールが、犬畜生みたいに――けだものみたいにくたばったことです。因果

応報です！」

フランクリン（一七〇六――一七九〇）

　アメリカの一般大衆に最も尊敬される歴史的人物は、ワシントンよりこのベンジャミン・フランクリンであるという。

　印刷屋の小僧から成功し、政治家、外交家、実業家、社会事業家、思想家、文筆家、科学者（特殊な装置を施した凧をあげて、雷と電気が同じものであることを証明した話は有名だ）……そのいずれにも独創力と万能ぶりを示す一方で、人間的にも、自由と勤勉を愛し、人権と福祉への奉仕に努め、愛国的で寛容で楽観的で、要するに「よきアメリカ人」の典型のような人物であったとされる。

　生来健康を誇っていた彼も、一七八八年ごろから胆石に苦しむようになり、有名な『フランクリン自伝』のおしまいのほうはベッドの上で書いた。

　一七九〇年の春になると、胸痛を訴え、「ちゃんと死ねるようにベッドを整えてくれ」と命じた。娘が、「そんなことをおっしゃらないで。お父さまにはもっともっと長生きしていただかなくっちゃ」というと、「私はそうは思わないね」と答え、その呼吸が苦しげなのを見て、「もっとラクな姿勢をなさっては」と娘がいうと、彼は、「死にかけてる人間は、どんな姿勢をとってもラクじゃないのだよ」と答えた。さすがに生来の寛容性も失われたようだ。

　そのうち胆石に肋膜炎を併発し、四月十七日午前十一時に息をひきとった。

　同年にイギリスでは、アダム・スミスが死んでいる。

杉田玄白（一七三三――一八一七）

　江戸中期の蘭方医杉田玄白は古稀を前に「養生七不可」という自戒の言葉を書きとどめた。

一、昨日の非は恨悔すべからず。
一、明日の是は慮念すべからず。
一、飲と食とは度を過すべからず。
一、正物にあらざればいやしくも食すべからず。
一、事なき時は薬を服すべからず。
一、壮実を頼んで房を過すべからず。
一、動作を勤めて、安を好むべからず。

　晩年に至っても彼は、雨の日も風の日も、日本橋の自宅から丸の内、深川あたりまでテクテクと往診に歩いた。彼

は決して頑健ではなく、むしろ虚弱の体質であったのに大長命を保ったのは、この緊張した摂生生活と、勤勉な運動のせいであったと思われる。

そして八十二歳で、若き日の、オランダ医書『ターヘル・アナトミア』（解体新書）翻訳の苦心を回顧した『和蘭事始』を書いた。

その原本は彼の死後失われたが、ただ一部残っていた写本を、幕末に湯島の露店で洋学者神田孝平が発見し、福沢諭吉が一読し、『蘭学事始』として世に紹介する奇蹟が生じた。八十二歳の人の著作で、後代これほど多数の人々を感動させた書物はない。

玄白は、内部に自虐的な一面はあるものの、結局は幸福な学者であった。この回顧録を絶筆のつもりで書いたのだが、さらに長命して、文化十四年四月十七日、八十四歳で眠るがごとき大往生をとげた。

彼の絶筆。

「医事は自然に如かず」

カーネギー（一八三五——一九一九）

スコットランドからの貧しい移民少年としてアメリカに渡り、十四歳で電報配達夫として生活しはじめたカーネギーは、やがて投資家から汽車・鉄橋などを製造する経営者となり、ついにはアメリカの鉄鋼の半分を生産する大鉄鋼主となったが、一九〇一年、六十六歳のとき会社を鉄道王モルガンに譲ることを余儀なくされ、産業界から引退した。

事業者としては結局モルガンに負けたわけだが、その後の余生の事業によって彼はモルガンよりも名声を残す。

すなわち彼は、「人間は富を墓の下まで持ってはゆけない。金を持ったまま死ぬことは馬鹿げている」といって、巨額の私財を全力をあげて公共事業に投ずることに余生を捧げた。有名なカーネギーホールやカーネギー工科大学はその一例である。

一九一九年八月十一日、彼は肺炎でこの世を去ったが、そのときカーネギー家の金庫はからに近かったといわれる。

大隈重信（一八三八——一九二二）

大隈重信は、大正六年七十九歳の八月、持病の胆石で重態におちいり、一時は四十度の高熱を発したが、その後快方に向い、十月には床払いして、「死に損なったよ」といった。そして芝の紅葉館で全快祝いの賀宴をひらき、

「我輩も老人になったにはちがいない。そこでこれからは、我輩という言葉をやめて老生と呼ぶことにする。……しかし老とは弱ったということではない。人間は老年になるに従って、いっそう急進的になり、積極的になり、不動明王のごとき火を背負うようになる。その意味での老生であるんである」と、例によって例のごとき飛躍した説を、元気よく述べた。

八十三歳のとき、侍者に腕をまくって見せてその皮膚の若さを誇り、かつ頭をなでて、「ここにも少し毛があると見かけがよくなるんだがな」と笑い、すぐにまた「これにも周期があって、そのうちまた生えてくるさ」といった。しかし侍者には、それは自信というよりも、彼が無理に強がっているような感じしか与えなかった。

大正十年八月下旬から、彼にはまた病徴が現われた。医者は膀胱炎という診断を下したが、それは実は前立腺ガンの症状であった。

九月には血尿が出、夜間の催尿がはげしく、睡眠困難になった。しかしこの間も、少し病状が軽くなると客に会い、医者が注意すると「我輩は少し話をせぬといかんのである」といった。

十一月にはやや小康を得たが、以前には塩辛いものを好んだのに、急にカステラに蜂蜜を塗ったような甘いものを食べたがるようになった。

十二月二十三日、また烈しい血尿を出し、大晦日には医者が危篤を告げたが、それを何とか切りぬけて十一年の新年を迎えると、蒲団から両腕を出して踊るまねをし、夫人に「ばあさん、おれは苦しいけれど、まだ元気はこんなにあるんである」といったり、夫人が着物を着かえているのを横目で見て、「ばあさん、きれいになった」といったりした。

しかし病状は刻々悪化し、一月十日午前四時二十八分、前日からのみぞれがふりつづく夜明け前、さして苦しむことなく絶命した。

大隈はかねてから人間百二十五歳寿命説を唱えていたが、やはりその三分の二しか生きられなかった。

当時野にいた大隈に「国葬」は適用されないことがわかったので、一月十七日、日比谷公園で「国民葬」が行われ、参集する者三十万人といわれた。

山県有朋（一八三八——一九二二）

大正六年ごろのある日、宮内省の仕人小川金男は、宮中

で見た晩年の山県の姿をこう書いている。

「元帥はいつも通常軍服を着ていた。外套を着ている時は、必ずその特別に広い外套の襟を立て、まるで顔をかくすように帽子を眼深にかぶり、両手はぶざまに外套のポケットにつっこんだまま長い軍刀をひきずるようにして歩く人であった。これは宮中でもおなじで、うつむきながらほのぐらい宮中の廊下を独り歩いてゆくその様子には、どこか孤独な感じがあった。

ある時、私は表御座所の廊下で検番に立っていると、山県元帥が拝謁をおわって出てきた。すると丁度そこへ北白川宮殿下が、たしか大尉か少佐かの軍服であったと思うが、やはり陛下に拝謁されるためにおいでになった。そして、元帥を見かけると、すぐ廊下の隅によけられて直立して敬礼された。元帥はしかしうつむいたままで、殿下の方に顔をむけると、ジロリと鋭い一瞥をあたえただけで、そのまま通り過ぎて行った」

大正まで生き残った明治最大の権力者のカリスマ的妖気を見よ。

その山県は、大正八年、皇太子妃として久邇宮良子女王が冊立されることが内定したとき、良子女王に色盲の遺伝性の疑いがあるとして、これに反対した。しかるにこれを不敬であるとする玄洋社の頭山満らによる山県弾劾はたちまち国民的共感を呼び、権勢一世を圧したさしもの山県も、大正十年にはいるとついに自説を撤回するのやむなきに至った。

二月、彼は爵位勲等官職すべてを辞する旨を申し出て詠んだ。

「飛ぶほたるうちおとされて水の面に光りながらに流れてゆく」

何かといえば「一介の武弁」というのが口癖であった山県は、しかしその歌において決して凡手ではなかった。

辞表は優諚によって許されたが、これで彼の晩年には一挙に雲がかかった。

一方でしかし山県は、その九年九月、外遊から帰国する皇太子（のちの昭和天皇）の御召艦を迎える皇礼砲の轟きを、遠く小田原の別荘古稀庵で、耳に手をあて微動だもせず聞きいり、涙をながしている人物であった。

さて大正十年十一月三日、山県は東京から古稀庵に帰った夜から発熱した。気管支カタルであった。

その翌日、原敬首相が東京駅で刺殺された。山県の病気は快方に向わず、年を越えた。一月のある夜、眠っていた彼は、突然大声で「なんだ、馬鹿、殺してしまえ、馬鹿な、

馬鹿な」とさけんで眼をさまし、いま原の殺されたときの夢を見た、といった。

一月三十一日、小田原に雪がふった。その翌二月一日、彼は危篤におちいり、午後一時死去した。

二月九日、葬儀は国葬をもって日比谷公園で行われたが、その状況について「東京日日新聞」は、「民抜きの国葬で、幄舎の中はガランドウの寂しさ」と報じた。前月、同じ日比谷公園で行われた大隈重信の国民葬には三十万人が集まったのだが。——

石橋湛山は山県の死を、「死もまた社会奉仕」と辛辣な言葉で評した。

が、山県は死んでも彼が作りあげた「軍閥」は、二十三年後日本を滅亡させたのである。

しかしながら、その大敗戦直後の昭和二十年九月九日、天皇は日光に学童疎開中の十一歳の皇太子宛の手紙の中で、

「敗因について一言いわしてくれ。（中略）明治天皇の時には、山県、大山、山本等の如き陸海軍の名将があったが、今度の時は、あたかも第一次世界大戦の独国の如く、軍人がバッコして大局を考えず、進むを知って退くことを知らなかったからです」

と、書く。山県有朋もって瞑すべし。

エジソン（一八四七——一九三一）

蓄音機、白熱電燈、映写機、電車その他おびただしい発明をし、一生に千三百種以上の特許をとったトーマス・エジソンは、一九二九年十月、白熱電燈発明五十周年の国家的祝典で、彼をたたえるフーバー大統領以下来賓の祝辞も聞くことが出来なかった。彼は聾者になっていたのである。彼は短い感謝の言葉を述べると、崩れ落ちるように椅子に坐った。

エジソンは、胃ガンと糖尿病と高血圧と腎炎にかかっていた。

一九三一年六月、フロリダの静養地からニュージャージー州ウエスト・オレンジの自邸に帰って以来いよいよ衰弱し、十月にはいってからは水ものどに通らなくなった。

十月十五日以後昏睡状態におちいったが、十八日未明いちど眼をさまし、まだ暗いのに、妻のミーナに、

「外はいいお天気だね」

と、いい、ミーナが「苦しいですか」と訊くと、しゃがれ声で、

「いや待っているだけだ」

といって、午前三時二十四分に死んだ。

ハウプトマン（一八六二——一九四六）

『さびしき人々』『沈鐘』などを書き、一九一二年ノーベル文学賞を受賞したドイツの文豪ハウプトマンは、八十三で祖国ドイツの敗戦を迎えた。

ソヴィエト軍は、故郷シュレジェンの山荘に住むこの老文豪を鄭重に扱ったが、シュレジェンをふくむオーデル、ナイセ東方の地域はポーランドの管理下におかれることになった。

シュレジェン一帯にはポーランド人が続々入りこみ、老衰したハウプトマンを追い出そうとしたが、ハウプトマンは「私はドイツ人だ。ここはドイツだ」といって、動こうとしなかった。一九四六年四月に、ポーランド政府はついに立退命令を出したが、その命令書を持って来たポーランドの役人に彼は、「お前さんたちは、決して私をこの家から連れ出すことは出来ないよ」と、いった。

五月に彼は肺炎になったが、苦労して手にいれたペニシリンのおかげで回復し、「私の最後の仕事は、ドイツ人に、自信を持て、団結せよ、という演説にしたい」などいっていたが、六月にはいるとまた肺炎がぶり返し、昏睡状態におちいった。

六月三日。ハウプトマンはふと眼をあけ、「わしはまだこの家におるのかな」とつぶやいたが、それが最後の言葉になった。六月八日午後三時十分に息をひきとった。

一時間もたつと、家のまわりにたくさんポーランド人が集まって来て、おもちゃのラッパや笛を吹き、バケツをたたいて、強情に居坐りつづけたこのドイツの文豪の死を祝福した。ポーランド政府は、ハウプトマンの遺骸をその地に葬ることを許さず、北ドイツのヒッデンゼーの海辺の僧院に運んで、そこに埋葬した。

フォード・一世（一八六三——一九四七）

自動車王のヘンリー・フォードである。デトロイトの夜間実業学校を出ただけで、ろくに字も書けないのに、機械作りには天才的だったフォードは、やがて「一人で出来る仕事に十人の人間を雇うのは、社会に対する犯罪だ」といって、いわゆるヴェルト・コンベアー方式の大量生産によって、世界の自動車王と呼ばれ、アメリカ有数の富豪となるに至った。

しかし、一九三八年、七十五歳のとき脳溢血を起して倒れてから人格が一変してしまった。きわめて疑い深くなり、自分の「権力」を奪われはしないかと異常に怖れるようになった。彼は最後まで自分の会社に労働組合をつくることを許さなかった。

一九四〇年。ルーズヴェルト大統領の命令で、B24爆撃機を製造する命令が下されたときも、そのエンジンが英国のロールスロイス製であることに反撥して、拒否した。

強迫観念、被害妄想、嫌人症がひどくなり、「大統領はGMなどと組んで、わがフォード社を乗っ取ろうとしている」といい、国策に協力しようとする後継者の長男エドセルを責め、不和となり、有能なスタッフ連中を片っぱしから追放した。このフォードの晩年の非常識は、それまでの彼の一代の功績を無に帰せしめたといわれる。

この不和のため、一九四三年、エドセルが悶死に近い死をとげたあと、老フォードはふたたび社長に返り咲こうとしたが、エドセルの子、つまり彼の孫のフォード二世ら一族こぞっての猛反対によって拒けられ、事実上彼は追放状態になった。

一九四七年、脳卒中が再発し、四月七日、ローグ河畔ディアボーンの邸で死んだ。その夜は数日来の雨のためローグ河が氾濫し、停電し、この自動車王は石油ランプと蠟燭の下で生涯をとじた。

本多光太郎（一八七〇——一九五四）

昭和二十五年、八十歳で糟糠の妻加禰子を脳溢血で失った本多は、墓を立てることを考えた。一つの墓石の正面に「本多光太郎之墓」と彫らせ、横面に「本多加禰子」と書き、裏面には「鉄鋼の世界的権威者」と彫らせた。その通りにはちがいないが、このころから彼自身の脳にも異変が起っていたことを思わせる。

果せるかな、その翌年、妻の一周忌の翌日、彼もまた脳溢血の発作を起し、入院し、やがて退院したが、それ以来脳軟化症状がひどくなって、だんだん何もかもわからなくなっていった。

「晩年の父を思う時には私の胸は痛さで一ぱいです」と娘の静子は書いている。「強い烈しい立派な父というものが、なんだか、うすうすボヤけて行く姿を見るということは、私の心には全くたまらないことでした」

そういう状態でなお三年経過し、昭和二十九年一月二十七日気管支肺炎を起し、二月十二日午前七時死去した。

小林一三（一八七三——一九五七）

「阪急デパート」「宝塚歌劇」「東宝映画」などを創始してそのことごとくに成功し、「今太閤」などと呼ばれた小林一三は、先輩の松永安左衛門から「不関心の人」という評を与えられた。

二人とも慶応の出身だが、福沢諭吉のはじめた「時事新報」がのちに危機に陥ったとき、門下の財界人が救援運動にのり出し、松永もその一役をおしつけられ、かつ小林にも援助を求めた。それに対して、「福沢先生の仕事でも、つぶれるときはつぶれる。僕はごめんこうむる」と一蹴したような小林の一面を皮肉った人物評である。

小林一三が、自分が生まれた年に死んだ母を恋いながら、一生、大阪池田の宏壮な「雅俗山荘」に仏壇を作らず、妻のコウがやむを得ず薬師寺管長橋本凝胤に請うて厨子入りの観音像を求めると、一三はそれを食堂のテーブルにのせて短期間鑑賞し、あとは廊下の袋戸棚の中へ放りこんでしまったのも、彼が宗教に対しても「我不関焉」の人であったことを示す挿話である。

しかしその小林一三も、昭和三十一年八十三歳のとき、長男の東宝社長小林冨佐男が悪性腫瘍で倒れると、みながとめるのを押して上京し、見舞った。そのときから一三は変ったと橋本凝胤はいう。

「あの物に動じない翁が、つくづく死を客観的に見られ、死とはどんなことか、実際死んだらどうなるか、死に至る過程としての病気に対する色々なことを私に聞かれた」

このころ建設中の梅田コマ・スタジアムの支配人伊藤邦輔が小林邸を訪れて、庭のブランコに一三が乗ってゆられながら、ひとり泣いているのを見ている。

彼自身心臓の具合が悪く、小林家を訪れた客たちは、コウ夫人から一三を笑わせないように注意された。笑うと心臓に異常を起すから、というのであった。

結局しかし一三は、宗教に深入りすることはなかったらしい。

梅田コマは十一月、新宿コマは十二月に開場した。しかし彼の創案になるこの円形劇場は、三分の一を切って完全円を避けたにもかかわらず、役者もやりづらく、一般の評判もかんばしくなかった。大阪と東京の間を往復する一三の顔色は、心臓を病んでいるせいもあって白蠟のようであった。

しかし、ある日の終演後、照明の調子を見るために無人

のステージにのぼり、全照明を浴びているこの白蠟の老人を眺めて、伊藤支配人は心中に、「ここに演劇の神様がいる」とさけんだ。

翌昭和三十二年一月二十五日夜、一三はいつものように階下の食堂でコウ夫人と食事をとった。夫人は風邪気味で一三より早く午後七時ごろ床についた。彼は食堂でテレビの大相撲のニュースを見ていたが、午後九時ごろ寝室にはいる前、コウ夫人に、「気分はどうだ、大丈夫かい」と声をかけ、「若乃花は強いな。……お休み」といって、用便後寝室にはいり、それからまもなく胸をおさえて苦しみはじめた。

そして十一時四十五分、遺言もなく息をひきとった。心臓喘息の発作を起したのであった。

一月三十一日、宝塚大劇場で行われた「音楽葬」のため、大阪じゅうのタクシーはことごとく宝塚に集まってしまったといわれる。

遺言はなかったが、評論家三鬼陽之助によると、「小林が死んで驚いたことは、いわゆる遺産と言ったものが完全に合理的に配分されていたことで、いわゆる相続税と言ったものを一文も支払わなかったと言われる」とある。

石原　忍（一八七九——一九六三）

いわゆる「石原式色盲検査表」を作製した世界的眼科医石原忍は、東大退官後、昭和二十一年から伊豆の河津に住んだ。彼はここで温泉につかりながら研究生活で余生を過すつもりだったが、眼科医のいない土地の状態を見かねてまた患者を診るようにしたところ、その名声に患者が北海道や九州からまで殺到し、ついに「院長老体につき、先着十人までに制限いたします」という貼紙を出す始末になった。

彼は生涯に一冊の小説も読まず、新聞もとらず、ラジオも聞かなかった。ただ晩年、家族の切願によってテレビを買ったが、彼自身はニュースと相撲と野球中継しか見ようとはしなかった。女優原節子が眼の診察を受けに来たことがあったが、名をきいても彼はそれが何者か知らなかった。

昭和三十七年夏、彼は突然肺炎にかかり、「私はもう長くない。だからこれからは自分の好きなようにする」と宣言し、看護婦のいうことを聞かず、看護婦が抗議すると、「看護婦は医者のいうことをきくものだ。私は医者だ」と怒鳴りつけた。それどころか、眼科医であるのに、主治医

のいうこともきかず、薬も注射も受けつけなかった。
　身体が不自由になってから、娘の美禰子が風呂場に子供用のプールを持ちこんで洗ってやり、「苦しいでしょう」ときくと、「なに、ボートを漕いだくらいだ」といった。それは相当の苦痛を意味した。軍医出身であることを誇りとする彼は、強情我慢の老人であった。
　その年の暮になると、幻覚症状が現われた。
「若い青年を目の前にして、道徳教育のお説教をしている積りらしく、半ば興奮状態で、善とか悪とか口走ることが多かった。『どなたもいらっしゃいませんよ』と口を出すと、『おまえは黙っとれ』そういって、また一しきり、始まるのだった。それが、徹頭徹尾、道徳教育の話だった」
　と、美禰子はいう。
　彼は元気で昭和三十八年の元旦を迎え、おとそも飲み、ビールも飲み、「蓮根が食べたい、きんとんが食べたい」と、食欲も旺盛だった。二日は静かに寝ていた。
「三日の朝方、私は、ちょっと寝ようと、父の様子を見にゆくと、その時は、膝をまげたり、もぞもぞ動いていた。私は看護婦さんに『また来ますから』そういって、ちょっと休んだが、間もなく起された。時計は六時をちょっと廻っていた。寝室にかけつけたが、八十三歳の父は眠るように、私にも知らせず、静かに逝ってしまったのだった」
（「文藝春秋」昭和三十九年三月号、石原美禰子「父・石原忍の厳しい生涯」）

マッカーサー（一八八〇――一九六四）

　一九四五年八月三十日、勝利者として厚木飛行場にコーン・パイプをくわえて下り立って以来、朝鮮戦争をめぐるトルーマン大統領との対立から一九五一年四月十六日、日本占領軍最高司令官を解任されて、日本を去るまで約五年八カ月、約二千日にわたってマッカーサーは日本に君臨した。
「マッカーサーは日本国民にとって怖るべき征服者としてその土を踏んだが、帰国に当っては敗戦国民の愛情の嵐を巻き起すという、史上まれな光景を展開させ、敬愛される友人、無冠の帝王として日本を去った」
　と、「ニューヨーク・タイムズ」は書く。
「沿道には、日本の老若男女が立ち並び、自分の国を征服した男に、国旗を振り、グッド・バイ、バンザイをさけんだ」
　四月十九日、彼はアメリカ議会で「老兵は死なず、ただ

消えゆくのみ。この昔はやった兵営の歌のように、私はいま軍歴を閉じてただ消えてゆく。神の示すところに従って自分の任務を果そうと努めて来た一人の老兵として。……さようなら」という気取った演説をして、満場の拍手を浴びた。
　そのときは拍手を浴びたが、彼はその後大統領選挙にちょっと色気を示したものの、アメリカ国民はかえりみるところがなかった。彼が日本占領軍最高司令官時代、いちどもナマの姿を日本人に見せず神秘の雲上に立っていたのは、ただ日本人に対する政策の効果を考えてのポーズであっただけではなく、彼の地でもあったのである。トルーマンは痛烈な警句を吐いた。「彼は何らリアルな感じのしない男だ」
　以後、マッカーサーはレミントン・ランドという会社の名誉会長として、ニューヨークの豪華ホテル、ウォルドーフ・アストリア・ホテルの広いフロアに住み、生きながらの銅像のような余生を送った。
　マッカーサーの帰国後、日本ではいっとき昂奮した人々によって「マッカーサー記念館」の建設が計画され、募金まで着手されたが、その後彼が日本人は十二歳だ、と評したことが伝えられ、また解任後一九六一年いちどだけフィリピン独立十五周年記念式典に招待されて出席したものの、日本には立ち寄ることなく――中継基地として日本の米軍飛行場を使ったが――そのまま帰国した彼のよそよそしさに、日本人の熱はさめて記念館の計画は沙汰止みとなった。
　一九六四年一月二十六日、八十四歳の彼の誕生日に集まった人々は、彼が老衰して小さくなり黄色い顔をしているのに驚いた。まもなく彼は吐き気と頭痛を訴えるようになり、黄疸の診断を受け、三月一日、ワシントンのウォルター・リード陸軍病院に運ばれた。
　三月六日、手術によって胆嚢と数個の胆石が除去された。が、四月三日から昏睡状態におちいり、五日午後二時三十九分、腎および肝機能不全により死亡した。
　それは昭和三十九年、東海道新幹線が開通し、東京オリンピックが開かれ、日本人が十二歳でないことを世界に見せつけた年であった。
　アメリカでは、彼の故郷ノーフォークに記念館が建てられたが、めったに訪れる人もないという。
　日本でも、いまや最も「忘れたい人物」の一人に過ぎないが、しかし公平に見ればこの「何らリアルな感じのしない」人物によって新生の基を定められた戦後日本人は、それまでの歴史にない幸福を得たのである。おそらくそれま

での日本が、別様の形態ながらそれ以上に、何らリアルなところのなかった連中によって支配されていたからであろう。

正力松太郎（一八八五――一九六九）

大正十二年、難波大助のいわゆる「虎の門事件」により警視庁警務部長を引責辞職したのち読売新聞社に入り、これを瀕死の状態から、大衆をつかむ斬新なアイデアと強引な販売政策でみごとに建て直し、以後もプロ野球、民放テレビのフロンティアとして成功した正力は、平生酒も煙草ものまず、趣味は何もなく、ひたすら生涯事業の鬼であった。

頑強きわまる体力を誇っていた正力も、しかし八十近くになって変形性脊椎症のために歩行に多少障害が起るようになったが、なお健康であった。

昭和四十四年四月八日、夜間に胸痛発作を起したが意にかけず、プロ野球開幕の始球式のボール投げの練習さえやったが、十一日ふたたび胸痛を訴え、聖路加病院に入院し、心筋梗塞と診断された。

六月六日に退院したが、静養先の熱海でまた国立熱海病院に入院した。そして十月九日午前一時ごろ突然意識を失い、必死の治療も効果なく、わずかに意識を回復した正力は、「家に帰るんだ」といい、まもなく注射しようとする医者の手をおさえて、「もういい」といったのち、絶命した。死因はやはり心筋梗塞であった。

尾崎一雄（一八九九――一九八三）

作家が原稿のできない弁明にはいくたの口実があるが、尾崎一雄の「梅ボシをつけるのもやめてがんばってみたんだが……」といったのがいちばんリアルである。代々、小田原の農家に生まれた尾崎にとって、梅ボシをつけることは最も重大な行事であったからである。

尾崎は若いころ結核で死にかかったことがあり、四十三歳のときには胃潰瘍で医者から、あと三年生きられたらめっけものだといわれて、生存五カ年計画をたてた。あと五年以内に死ぬとして、すべての計画をたてるのである。そして、次から次へと五カ年計画を更新した。七十歳になったとき「欠礼長命説」を唱えて、お義理の冠婚葬祭はすべてごめんこうむることにした。八十歳になったとき「二カ年計画」に切り換えた。

昭和五十六年、小田原の家を二階建てに建て換えたが、それは富士山を望遠鏡で眺めるためで、「八十を過ぎておれもバカだ」といいながら、客にも見せてよろこんだ。

尾崎は死の前年に語った。

「僕は来世は信じない。だから、死ぬためには何もしない、すべては生きるためだ。自殺するやつだって、あれは自分の生のためなんだ」

彼は、いまのいま生きているいのちを、何よりありがたいものとした。

翌年の三月、その一日に死んだ小林秀雄のために「文学界」に追悼文の原稿をかいたが、一ト月後の三月三十一日、それまで何の異常もなく、昼間孫といっしょにつくし採りに出かけたくらいであったのに、午後九時半ごろ夕食をとっていて、ふいに気分が悪いと訴えて床につき、妻に肩や背をもませ、妻が医者を呼ぼうとしたが「おそいから、あしたでいい」と、とめた。

その後いよいよようすがおかしくなったので、近くの医者の往診を求め、さらに救急車で病院に運ばれる途中、午後十時四十分、死亡した。急性心不全。

八十五歳で死んだ人々

> 「人生は生きるに値しない」と幸福な若者は無頓着に歌った。が、八十五のときロバに蹴られると、この男は叫んだのだ。「早く医者を呼んでくれ」
>
> ――ハン・ソーパー――

ニュートン（一六四二――一七二七）

アイザック・ニュートンは生まれたとき標準児以下で、一クォート（約一・一四リットル）の木桶に入れられるくらいで、以後もなかなか首が坐らなかったので、長い間首に支え木をつけていた。とても長生き出来るような子供とは思えなかった。

父はニュートンの生まれる三カ月前に死に、母はニュー

トンが三歳のとき、彼を祖母に託して再婚した。このことは彼に、怒りっぽさと、ある種の冷酷な性格を植えつけたといわれる。

十四歳のとき、その母はまた夫を失い、その間に生まれた三人の弟妹を連れてニュートンのところへ帰って来た。以後反動的な母との密着が、ニュートンを性的な不能症にしたとは後世の精神分析的な解釈である。彼は終生独身であった。

少年時代のニュートンは、無口で、陰気で、外で友達と遊ぶなどいうことのほとんどない少年であった。

やがて彼は、万有引力の原理をはじめ、数学、力学の不朽の論文を発表し、いわゆるニュートン力学の創造者となる。その過程で、それら学説の先取権を主張する学者や、あるいは批判的な学者に対する彼の反論、反論というより報復は、隠微執拗でかつ徹底的であった。

五十歳になったころから彼に一種の精神異常が見られたが、それはそのころ彼が没頭していた「錬金術」の実験に水銀を使ったために、水銀中毒にかかったせいではないかともいわれる。

かくて、彼に刃向った者はことごとく一掃され、ニュートンはイギリスのみならずヨーロッパ物理学界の大御所となった。彼はみずからを神格化した。

一方でニュートンは造幣局監事にもなった。これは大官天下り用の冗職であったが、この職につくと彼はきわめて精励で、当時はびこっていた贋造犯罪者たちを徹底的に取締った。彼は決して懐中時計を卵ととりちがえて鍋で煮るような、うかつな男ではなかった。そして五十七歳のとき、ついに造幣局長官になった。

六十一歳のとき、最高科学アカデミー「王立協会」の会長となり、名実ともに英国学界の総帥となってからは、協会の行事を儀式化し、宮廷化し、まるでキングのごとく独裁権をふるった。

さて、生まれたとき、とても長生きできないだろうといわれたニュートンは、老いてからは甚だ強壮で、肥満はしていたが血色よく、頭髪も銀白色ながら禿げることもなく、眼鏡も用いず、歯は一本欠けているだけという健康ぶりであったが、八十になったとき、ようやく尿の失禁現象を起すようになった。

八十二歳のとき、エンドウ豆くらいの尿結石を排出した。

八十三歳のとき肺炎をやり、八十四歳のとき痛風を起した。

八十五歳の春、死ぬ半月前、王立協会の会合に出席し、七十一歳の王室天文学者ハリー（いわゆるハレー彗星の軌道

の確認者）を叱りつけた。この日から彼は烈しい腹部の痛みに襲われるようになった。主治医は膀胱結石と診断した。

三月十八日の夕方から意識不明となり、翌日の十九日午前一時過ぎに死んだ。あとには莫大な貯金が残されていた。

三宅雪嶺（一八六〇――一九四五）

雪嶺は、昭和二十年八月十五日、終戦の天皇放送を起立して聞いていたが、次第に悲しげな表情になり、やがて一言、「軍人がつまらぬことをしたものだ」と、つぶやいた。

その心情を彼は後に記して、「大将が約百人も居って、ああでもない、斯うでもないで時を費し、中には元帥で頭のぼやけたのがあるとは、呆れ返って物が言えぬではないか」といい、かつ軍閥の罪を、ただの大罪ではなく、超大罪、ときめつけた。明治以来三代にわたって偉大なる哲人的ナショナリストといわれた雪嶺にとって、昭和軍閥の幼児的な軍国主義は痛恨の極みであったろう。

このとし彼は八十五歳になっていたが、頭はさしてぼやけず、大正十五年一月から書きはじめた『同時代史』をいまだに書きつづけていた。

五月の空襲で初台の自宅が焼かれたので、しばらく次女小枝子の南沢の家にひきとられて、右の放送はそこで聞いたのだが、十一月二十日、狛江の孫中野達彦（中野正剛の子）の家に移った。彼は来年になればカーライルの長命をしのぐことになるといい、出来れば九十一歳まで史家として現役活動をしたランケと争いたいものだといっていた。

二十五日も床の上で達彦に口述を筆記させ、正常のごとく眠ったが、二十六日朝六時半、その唇から涎が垂れているのに小枝子が気づき、手拭いでふいてやって、その手拭いをすすいでひき返したときには、雪嶺の呼吸はとまっていた。文字通り眠ったままの大往生であった。

白瀬　矗（一八六一――一九四六）

明治四十五年一月、元陸軍中尉白瀬矗は、「白瀬探険隊」をひきいて、日本人としてはじめて南極大陸に上陸し、装備不充分のため極点到達は成らなかったものの南緯八〇度五分附近に達して「大和雪原」と命名した。時に彼は五十一歳であった。約二カ月後、イギリスのスコット隊は吹雪の中に全滅した。

帰国後の白瀬の後半生は、探険のため巨額な借金との

苦闘についやされた。彼は、南極探険時の数分間のフィルムをたずさえ、全国を講演してまわった。住むに家なく、横浜生麦の井上馨邸の別荘番などやったこともあった。

彼が八十歳のとき太平洋戦争が起り、その結果日本の海外領土はすべてとりあげられた。昭和二十一年六月、八十五になり、娘の武子によれば「日本の探険王と騒がれた昔の面かげもなく、全く忘れられた人として」淋しく暮していた白瀬は、マッカーサー司令官宛に、「私は戦犯なのでしょうか。南極の領土権はどういうことになるのでしょうか」と質問の手紙を出した。これに対して、マッカーサーの名をもってした返事は「あなたは戦犯ではない。日本の南極領土権の問題は講和条約の結ばれるさい、然るべく考慮されるでしょう」とあり、最後に「プア・ミスター・シラセ」（気の毒な白瀬さん）と、しるされていた。

どういうわけか白瀬は、このマッカーサーの返事を熱烈な希望の焦点とした。

その年の九月、彼は愛知県西加茂郡挙母町のうなぎ屋の二階の四帖半に間借りして、栄養失調の老身を横たえていたが、三日、めずらしく白米の配給があり、同じく配給の福神漬けを菜にこれを食べたあと、俄に劇しい腹痛を訴えた。往診してきた医者は腸閉塞と診断した。久しぶりに御飯を与えられて、老いた腸が驚いたのかもしれない。

翌日九月四日、彼は妻や娘たちに、「死ぬことは怖れないが、講和の日まで生きていられないのが残念だ。南極のことについてはマッカーサー元帥の御慈悲におすがりしろ。……」と、しぼり出すようにいって息絶えた。

――昭和五十八年処女航海した三代目の南極観測船は、一・五メートルの氷を割りつつ時速六ノットで走る新鋭の砕氷船であったが、船名は「しらせ」と名づけられた。

長岡半太郎（一八六五――一九五〇）

明治三十六年、世界にさきがけて原子模型を発表し、昭和十二年第一回文化勲章を受章した世界的物理学者長岡半太郎は、昭和二十四年湯川秀樹が日本で最初のノーベル物理学賞を受賞したときは大いによろこび、翌年アメリカから帰国した湯川が記念講演会をひらいたとき、八十五歳の長岡は最前列の席に坐って、笑顔をつややかにひからせて聴いていた。

その四カ月後の十二月十一日、彼は大往生をとげた。その日も彼は自宅の書斎で、地球物理学の大きな本をひらいて読んでいたが、「少し気分が悪くなった」というので、

本はひらいたままで、隣室に床をとらせた。彼は少し吐き、あと眠ったようであった。しばらくして女中がいってみると、彼は眼鏡をかけたまま死んでいた。脳溢血を起したのであった。

マチス（一八六九――一九五四）

若いころ法律家を志し、弁護士の修業をしているうち、二十歳のとき盲腸炎をわずらって療養中、ふとグーピーの『絵画論』を読んで俄然発心して画家になったマチスは、はじめひどい貧乏に苦しんだが、やがてフォービズム（野獣派）の旗手としてその絵が高く売れ出した。彼は「僕はもう傑作だけを描かざるを得ない立場になってしまったのか、と思った」という。

第二次大戦中、レジスタンス運動にたずさわった妻と娘が投獄され、彼も腸をわずらって病床に臥し「人生はつらい」と悲鳴をあげた。

が、奇蹟的な回復を見せた彼は、戦後は切り絵の制作にはげみ、八十歳のとき制作した南フランスのヴァンヌ礼拝堂の壁画「白と黒の世界」は、彼の画業の総決算といわれる。彼はニースの丘の上の白い邸宅で、晩年までベッドの上で切り絵に専念した。

一九五四年彼に会ったサマセット・モームは若い友人ガーソン・ケーニンにいった。

「マチスには、ごく最近に会った。たいそうな老人でね、もう一切が死んだも同然だ。だが、才能だけは以前にもまして冴えている。全く寝たきりでね。でも絶えずスケッチしたり、色紙を切ったりしている。大方の老人の例にもれず、ボケているところもある。私もあんなものかも知れないね」（ガーソン・ケーニン『モームの想い出』）モームは八十歳であった。

マチスはその年の十一月三日に死んだ。（死因は心臓麻痺と発表されたが、老衰死であろう）遺言は、「私が死んだら粉々にして、花にふりまいておくれ。でなければ、名もない木の下に埋めておくれ」という言葉だった。

葬儀の日、ニースの空はドンヨリ曇っていたが、葬列が墓地に到着したとき、突然「色彩の魔術師」マチスの死を飾るかのように陽光がふりそそいで、そこから見下ろせる地中海を照らした。

高浜虚子（一八七四――一九五九）

独り句の推敲をして遅き日を

虚子の最後の句である。辞世ではない。八十五歳にして虚子は甚だ健康で、来客と会い、句会に出、選句するのにいささかの疲れも見せなかった。

昭和三十四年四月一日、虚子は朝から一日じゅう自邸の「俳句小屋」で数人の客を相手に日を過し、午後八時過ぎ就寝した。

就寝後二時間ほどして、突然うなり声をあげ、家人が駈けつけたときは、すでに意識不明、言語不明瞭、左半身の不全麻痺の状態になっていた。脳溢血であった。

それから、危篤状態におちてはやや回復し、また危篤状態におちるという症状を一週間繰返し、四月八日午後四時、多くの家族や門弟たちに囲まれて、八十五年の長い生涯をとじた。

「三時三十五分に父の静かな呼吸が止った。はっと思ってその顔を見つめたが、数秒の後又呼吸が戻った。舌が咽喉に引っかかったということであった。その舌を押し返す呼吸がなお力となっていた。四十二分に止った。すぐに呼吸を戻した。次々とそれは六回程くり返された。そして四時一寸前であったか、父の心臓は全く停止してしまった」（高浜年尾「父の病床八日間」）

泰然自若たる生涯を過した「俳句の神様」の泰然自若たる死であった。

日も四月八日。「数えて八十六歳の長寿の生涯を一族一門の慟哭に囲まれて、涅槃図のごとき臨終だった」と書いた門弟吉屋信子は、その死後も、たとえばある日、娘が父の書斎にはいって『広辞苑』をとり出すとき、「お父さんちょっと拝借します」と挨拶し、しばらくして茶の間の母に、「お父さんのところへこれをお返しにゆくけれど、母さん何かおことづけない？」と訊き、「たまにはお父さんもこちらへ出ていらっしゃいって言ってちょうだいな」と母が答えると、娘は書斎で「ありがとうございました」と本を書棚に返し、「母さんがお茶の間の方へもいらっして下さいって」といい、茶の間に戻ると、母と「お父さんあとでいらっしゃるって」「ああそうかい」という問答をする風景を描いている。（吉屋信子『私の見た人』）

かつての虚子の句にいう。

虚子一人銀河と共に西へ行く

ヘルマン・ヘッセ（一八七七――一九六二）

すでに『ペーター・カーメンチント』『車輪の下』『青春は美わし』などの作品で一流作家となっていたヘルマン・ヘッセは、一九一九年、四十二歳のときからスイスの美しいルガノ郊外にひとり隠栖し、第二次大戦中もナチスには一切協力せず、十年がかりのライフワーク『ガラス玉演戯』などの著作に没頭した。

しかし、ドイツ敗北後の一九四六年、敗戦国民であるにもかかわらずノーベル文学賞が六十九歳のヘッセに与えられたとき、彼は持病の座骨神経痛、リューマチの上に、眼病、頭痛などにひどく悩まされていて、ストックホルムの授賞式にも出席出来ない状態であった。

一九五二年、七十五歳になった彼の身体の余りな弱りようを見て、親友で二つ年上のトーマス・マンは、「私より先に死んではいけないよ。君が先に死ぬなんて生意気だ。僕のほうが先に死ぬ順番なのだから」と、いたわりとユーモアをこめた手紙を送ったほどであった。（その通り、ヘッセよりもっと健康に見えたマンは、ヘッセより七年早く、一九五五年に死んだ）

ヘッセはなお生きたが、一九六二年についに白血病に冒された。

しかし、彼の生への執着は強かった。八月一日、彼はルガノの家の庭のニセアカシアの枝が折れて、なおちぎれずにいつまでもぶら下がって風にぎしぎしと鳴りつづけているのを見て、「折れた枝」と題する詩を作ったが、その中で、「なお一夏、なお一冬」と生命のつづくことを期待する一節があり、また八日にもその詩を加筆推敲した。

しかしその夜、彼は、ラジオで、彼が限りなく愛したモーツァルトのピアノソナタを聴いたあと眠り、九日朝、脳出血を起して永遠の眠りについた。

平塚らいてう（一八八六――一九七一）

若いころ『煤煙』事件、「若い燕」事件などで世を騒がせたこともあったが、「青鞜」を創刊し、生涯を女性の権利のための戦いに捧げた平塚らいてうは、昭和四十五年秋ごろから身体不調を訴え、代々木病院に入院した。病名は胆嚢ガンであった。

彼女は入院後も、自伝『元始、女性は太陽であった』を口述筆記していたが、口述するときは必ずベッドの上に正

座した。
　医師の佐藤猛夫は語る。
「高齢なので手術には耐えられず、抗ガン剤と対症療法を併用して治療につとめました。平塚さんは顔に表情を出さない方でしたから、見た目にはとても重病人とは思われず、泰然自若としておられました。枕元には草花の植木鉢をならべてたのしんでおられました」
　翌四十六年春のころから、さすがに正座は無理になり、横たわったまま口述をつづけたが、四月にはそれも不可能になった。
　そして五月二十四日、息をひきとった。自伝は未完に終った。

安岡正篤（一八九八——一九八三）

　戦前から高名な陽明学者として政府顧問となり、終戦の詔勅にも筆を加えた——草案に「永遠の平和を確保せんとす」とあったのを「万世のために太平を開かんと欲す」と改めさせた——という安岡正篤は、昭和五十八年三月、九段の料亭で彼を囲む会に出席し、そこで彼を尊敬するという四十五歳の、レストラン、芸能プロダクションなどを経営する女性実業家兼占術家の細木数子と意気投合し、すでに妻を亡っていた彼は、その夏、彼女に捺印つきの婚約誓約書を渡すに至った。
　ところが九月はじめ安岡が胃痛で倒れてから、細木が安岡家を訪れても家族から面会をことわられるようになり、そのうち小康状態を得た正篤は十月四日、高野山にいる実兄、九十二歳の大僧正のもとへ旅行に出てしまった。実は家族から避難させられたのである。
　高野山で正篤は兄と食事中、吐血して、大阪の住友病院に運ばれた。
　細木は安岡のゆくえを教えられないまま、十月末、役所に正式の婚姻届けを出し、正篤の長男に押し返される騒ぎをひき起し、告訴した。安岡家のほうでは、正篤は昭和五十四年秋、前立腺肥大の手術を受けてから老人ボケの症状が甚だしくなり、右の婚約誓約書は無効であると申し立てた。——
　これが、かつて二十歳も年上の吉田茂から「老師」と呼ばれ、以後歴代の首相、財界の巨頭らから天海僧正のごとく師礼をとられ、日本の右翼思想の支柱といわれた高士の、死を迎えての珍スキャンダルであった。
　しかし、笹川良一は面白がっていう。「この恋愛問題（!）がなければ、安岡の一生はあまりにも無味乾燥の一代であったと思う」
　正篤は、胃の前ガン状態、胆嚢炎、不整脈、右肺ブロック、心不全、尿閉、それから老人性痴呆、すなわち全身ボロボロの診断を受けた。そして次第に心臓衰弱を起し、十二月十三日午後六時に死んだ。

八十六歳で死んだ人々

長命者は大空に残った薄雲に似ている。いつまでも消えないな、と眼を離すと、いつのまにか消えている。
——山田風太郎——

桜井忠温（一八七九——一九六五）

　明治三十七年、二十五歳の陸軍少尉桜井忠温は、八月二十四日、松山連隊の連隊旗手として旅順第一回総攻撃に参加し、全身に重傷を負い、火葬寸前のところを奇蹟的に回復し、三十九年、戦記『肉弾』を著わして一躍戦記文学の寵児となった。
　彼はこのときからなお五十九年を越える長い「余生」を持った。

昭和三十四年春、八十歳になった忠温は老妻を失った。妻名義にしてあった土地は娘や孫のものとなり、裁判沙汰の末、彼は東京の町の四帖半のアパートに暮すようになったが、やがて故郷の松山に帰った。

彼は書く。

「ひとりボッチになった。淋しいなんかといったって仕ようのないものは仕ようがない。どこのだれに助けを求めようもない。

帰り来りて旧盧を尋ぬれば
既に亡びて無し
生けるものは塵泥となる
老廃孤独
古城ひとり我を悲しむ」

「窓に凭れて東京の空を思う日が重なり涙することもあるが、もう帰る力もない。『どうして故郷に帰ったのですか』とたずねる人がずいぶんあるが、いちいち言いわけするのも苦しい。(中略)

わたしは妻が婚約当時くれた手紙の束を持って来た。それをくりかえしくりかえし読んでいると、彼女がもの言う如くである。だが、その彼女は亡くなり、わたしは遠い遠い国に流れて来ている。手紙を読んでもどこにいるのやらと思うと泣けてくる。死んでから夢に姿を見せたのはたった一度だけである。どこにいるのか、天国のどこかでわたしがこうしてひとりボッチになっていることを悲しんでいるだろう。

わたしがあと追う日も近くなった。どこにどうしていようと、旅で死のうと心配するなよ。――」(「文藝春秋」昭和三十四年十二月号「我はただ一人なり」)

この度はずれて感傷的な文章を見てもわかるように、彼の心情やここに至る顚末には多分に被害妄想的なものがあったようだ。「遠い遠い国」といい、「旅」といっても、松山は彼の故郷なのである。彼はひどい動脈硬化症にかかっていた。

ともあれ、これが旅順戦の勇士のなれの果ての姿であった。

それからさらに五年余。子の桜井武男は記す。

「父がいよいよ衰弱し、言葉も充分に言えなくなったのは、昭和四十年の八月の末であった。七、八月の暑いさ中、病院でも暑いということは言わなかった。どんな暑い日でも、元気な時、外へ出る折はワイシャツにネクタイ、おまけにチョッキと上衣をきちんとつけて、暑いとも言わなかった。(中略)まだ古武士の風貌が生き残っているような気にさえなることがあった」

内部に、泣きじゃくる幼児のような心情をいだきつつ、『肉弾』の著者の外見は依然として明治の軍人であったらしい。

「生前、右の手が不自由であった。満身創痍の体は、年とともに一層不自由になった。晩年には目も片方は失明同様であった。腎臓も一方はなかった。よくこんなことを言っていた。『自分は死んだら墓は縦にしないで横にしてくれ。死んでまでこんな体で立っているのは辛いから』と」

八月十六日、脳軟化症を発病。九月十七日午後四時五分死去。

武男はつづいて記す。

「だから今、墓石は横になっている」

井上成美（一八八九――一九七五）

太平洋戦争前、海軍次官山本五十六とともに、三国同盟を結ぶことに強硬に反対し、また海軍の伝統たる大艦巨砲主義を嘲罵した井上成美は、こと志に反して戦争がはじまると、提督として珊瑚海海戦をたたかい、そのあと江田島の海軍兵学校の校長となった。このとき彼が、兵学校に飾ってあった歴代の海軍大将の写真をみな撤去させた話は有名だ。彼は軍人の出世主義を唾棄したのである。

彼は異常なまでに清冽で、また苛烈な性格の武人であった。

敗戦時彼は五十六歳であったが、そのとき以来、横須賀の山上にあるあばら家に隠栖して、ふたたび世に出ようとしなかった。

彼の妻は昭和七年、彼が四十三歳のとき結核で死に、以後彼は独身で、終戦後はただ一人の娘と暮したが、その娘も海軍軍医たる夫を戦争で失い、彼女自身も昭和二十三年やはり結核で死んでからは、井上は完全に孤独となり、以後近所の子供たちに英語を教えて暮した。

江田島の教え子たちは、井上を世に出そうとし、また経済援助を申し出たが、海軍軍人として亡国の運命を救えなかったという痛恨でみずからを罰した彼は、一切受けつけなかった。このころ彼の持っていた下着といえば、古いゆかたを裂いて作った数本のふんどしと、つぎのあたったパンツ二枚だけであったといわれる。毎年八月十五日は、一日絶食して、端座して遠い海を眺めるのをならいとした。英語塾の教え子たちは、のちにこの「最後の海軍大将」から、英語ばかりでなく人間の生き方を学んだ、といった。

その井上も、昭和二十八年六十四歳のとき、彼を思慕する五十三歳の女性と再婚した。しかし、清貧というより極貧の生活はつづき、そのうち妻は鬱病にかかり、彼の孤高蕭殺たる生活は変らなかった。

昭和五十年十二月九日、井上は満八十六歳の誕生日を迎えた。

十二月十五日、もはや自分一人では立つこともできないほど老衰した井上は、この日の夕方、いかにしてかひとりで庭に出て、寒風の中に立ちつくして海を見ていた。そのあと寝床にもどったが、電燈をつけようとした妻が、井上の異常に気がついた。

「海へ……江田島へ」

というのが、彼の最後の言葉であった。午後五時五十五分。

アガサ・クリスティ（一八九〇——一九七六）

アガサ・クリスティは、テレビやパーティに出たり、インタビューに応じたりすることが大きらいで、晩年の三十年バークシャー州のウォリングフォードという町で暮したが、町の人々で直接彼女に逢った人は数えるほどしかなかった。

一九七一年七月、クリスティは八十一冊目の小説『復讐の女神』刊行の最終的な打合せのためウォリングフォードからロンドンへ出ていたときに転んだ。彼女は気丈に激痛をこらえつつ一週間ほどびっこをひきながら歩きまわっていたが、やがて腰の骨を折っていることが明らかとなり、病院へ送りこまれた。

骨折は治癒したが、この事故は彼女の健康に決定的な衰えを速めた。

以後、ときには昔と変らぬ明晰さ、鋭さを示しもしたし、従来通り「タイムズ」のクロスワード・パズルを解いたり、自作を読み返したりする穏やかな日々を過したが、アガサが生涯の最後の日を迎えつつあることは、だれの眼にも明らかであった。老齢に加えるに、心臓病、関節炎のために頭も身体もすっかり機能が低下しはじめていた。

死ぬ三年前クリスティに逢い、すでに杖にすがらなければ歩けない姿を見たただ一人の日本人数藤康雄は、「（死後）病名は発表されなかったが、ぼくの推定では、老衰ないしはポアロと同様にリューマチに起因する心臓衰弱と思われる」という。

このときにあたって、一九七五年、クリスティは最後の

作品と銘打った『カーテン』を発表した。

この作品は実はすでに第二次大戦中に書かれたもので、彼女はこれを遺作用すなわち死後出版にしたいとしまっておいたものであったが、出版社のコリンズ社から、エルキュール・ポアロを生前に始末しておかないと、彼女亡きあと二流作家によってポアロが使われるおそれがあると警告されて、とうとう生きているうちに出版するのに踏み切ったものであった。

この作品でクリスティは、彼女が一九二〇年三十歳のときに発表した処女作『スタイルズ家の怪事件』で登場させ、以後ホームズとならんで世界の推理小説ファンのアイドルとなった名探偵エルキュール・ポアロを、同じスタイルズ家に再登場させ、心臓麻痺で死なせてしまっている。——しかし、この『カーテン』は発表前からすでに伝説的作品として期待されており、彼女自身も自信を持っていたようだが、いかんながら、本格ミステリーの女王アガサ・クリスティの最後を飾るものとしては、上乗のものと思えない。まだ彼女の頭が衰えを見せていない時代の作品なのに、ふしぎなことである。

——「推理」するに、おそらくクリスティは、書いた当時はこの作品の「動機」を珍しいものと考えたのではないか。それが戦後の推理小説ブームでこんな動機などちっとも新しくなくなったのだが、クリスティは老いて他人の作品などを読まず、または読んでも自作に変更を試みる気力を失っていたのではあるまいか。

その翌年一九七六年一月十二日、昼食のあと、アガサは十四歳年下の夫マックス・マローワンに伴われて食堂から客間に帰る途中、車椅子に乗ったまま、静かに息をひきとった。

彼女は一見つつましやかで、「私が死んで十年もすれば、誰も私の名前など耳にすることさえなくなるでしょう」といっていた。しかし彼女が書いた長篇八十三冊、短篇集九冊で生前売られた部数は二億部といわれ、戯曲は十七本、そのうち「マウストラップ」のごときは、彼女が死んだ週も九六一一回目の公演をやっていた。

巨額の収入のあったことは当然だが、長い生涯の間一貫して、クリスティは私生活の面についてと同様、資産面に関しても公表をきらい、秘密主義を守り通した。彼女は、税金を払うために一年に一冊は書かなければならないけれど、それ以上書けば国税庁を肥らせるだけの愚行となるといい、一九五五年以来は、アガサ・クリスティ・リミテッドという有限会社から月給をもらうという仕組みで税務署

と対抗していた。従って、死後新聞に、「ルクレツィア・ボルジア亡きあと女性が殺人で得たものとしては最大の財を積んだ女性」と報道され、その財産は千二百万ポンドないし千四百万ポンドと推定されたにもかかわらず、わずか百分の一の十万六千六百八十三ポンドと発表された。ああ、いよよ偉大なるかな、アガサ・クリスティ！

衣笠貞之助（一八九六――一九八二）

日本映画草創期、「狂った一頁」「十字路」などの前衛的作品を発表し、のちに林長二郎（長谷川一夫）を育てて、昭和初期「雪之丞変化」「大坂夏の陣」などで日本映画全盛期を作り出した「巨匠」衣笠貞之助は、山田五十鈴をはじめとする女性遍歴の人生でも「巨匠」であった。

昭和四十一年、ソ連との合作映画「小さい逃亡者」をとったあと、映画監督の仕事はなく、舞台の演出や脚本で晩年を過したが、五十四年九月、京都の自宅で転倒し、それ以後次第に脳軟化症状を呈し、五十六年夏ごろから寝たきりになり、人の判別もできなくなった。そして五十七年二月二十六日、脳血栓で死んだ。

衣笠が死んだとき、かつて彼と浮名をながした山田五十鈴は六十五歳で、なお舞台に不死鳥のような艶姿をほしいままにしていた。

しかしながら、日本映画草創期の名画といわれた諸作品がすべて散佚した中に、「十字路」のプリントはロンドンの国立フィルム・ライブラリーに、「狂った一頁」のネガは衣笠の自宅の蔵の米櫃の中に残っていたという奇蹟は、衣笠に映画監督として何よりの幸福をもたらした。

川口松太郎（一八九九――一九八五）

「そのころの私は、四人の恋人がいて、四軒の家を持っていた。四軒の家を順々にまわって歩く生活を数年つづけ、働いた収入は四人の恋人につぎ込んだ。私自身の苦労も一通りではなかったが、四人の恋人も満足してはいなかった。惰性でだらだらとくっついていたにすぎず、こんなことをしていれば、しまいにはどうなってしまうか、己の愚かさが目に見えてきた」

と、川口自身が、五十代の自分をふりかえって、のちに書く。ただしこの四人の中には、愛人から本妻に昇格した三益愛子をふくんでいる。

そして五十九歳の十二月三十一日から一大決心をもって

三人の愛人を切って捨て、自宅の一軒に立てこもる生活改革をやってのけた。

小説のほうでは『愛染かつら』、芝居のほうでは「鶴八鶴次郎」をはじめおびただしい作品を生み出した川口松太郎は、昭和五十七年、十一歳年下の最愛の妻三益愛子を膵臓ガンで失ってからも、毫もその才気と勤勉さを失わず、昭和五十九年、八十五歳で「読売新聞」に『一休さんの門』を連載した。この高齢で新聞小説を連載するのも前代未聞なのに、彼はさらに体調の悪いのを押して、六十年三月、続篇の『一休さんの道』をコツコツ書きあげた。

そのあと急速に衰えて東京女子医大病院に入院し、次第に意識不明の状態となり、全身衰弱から肺炎をひき起し、六月九日午前二時四十五分に死去した。

最後の作『一休さんの道』は、死後の八月から読売に連載されたが、これまたいよいよ前代未聞のことであった。

彼は色事でも仕事でも、かくもマメな人物であったが、死に対してはいかにも江戸ッ子らしく淡白な観念を持っていた。三益の死後、川口は高峰秀子に語っている。

「僕、この間ねえ。〝俺が死んでも葬式出すな〟って言ったら、（息子の）浩が、そういうわけにもいかないよ。周りが承知しないって言うんだ。それじゃ俺、死ぬ前になったら葬式に来て欲しい人の連名書いとくから、これだけ来てくれって。その他の奴は絶対来ちゃいけねえって書いとく、っていったら、浩の奴、弱ってやがってさ。〝まあ、まかしといてよ、いいじゃないか。そのときはパパは死んじゃってるんだから〟なんて……なあ、その通りだよ。もう、もう、やなこった。気に入らねえ奴が拝みに来たら、さぞ腹が立つだろうな。

俺は、三益が死んだときだって何もしなかった。坊主もいない。俺がお経をあげたんだ。だから俺は、俺のお経をテープにとっといて、俺が死んだときにそいつを……いいじゃあねえか、これ、ねーえ。俺、九十になったら、〝お別れ会〟するんだ。それでハイ、サヨーナラでお別れだ。やっぱり葬式はやりたくないや」（高峰秀子『人情話松太郎』）

石坂洋次郎（一九〇〇――一九八六）

「若い人」も老いてゆく。

昭和四十六年、七十一歳の石坂洋次郎は、原稿を書く以外生活のすべてをまかせていた妻を失ってから、まったく創作意欲を失った。

昭和五十四年、七十九歳のとき彼は語る。

「夕方は田園調布の駅まで散歩に出て、ベンチに坐って人ごみを遠くから眺めています。みんなせわしく動いていますね。……私は友だち付き合いをするような方もありませんし、酒は若い時から全く飲めません。さびしくはないかとよく聞かれますけれども、人間は何でも慣れるものでね、もう何ともありません」

しかし八十前になって急に十五キロも体重がふえ、心臓圧迫、血圧昂進の症状が現われて、医者からもう半年ももたないと宣告されて、昭和五十六年、娘たちは老父に静かな余生を過させるため、住み馴れた東京の田園調布から相模湾を一望に見下ろす伊東の、温泉もある閑静な家に引っ越しさせた。

五十八年五月、長女の広子は語る。

「とにかく絵にかいたような老後を過しています。ひるは新聞を読んだりテレビを見たり、ひる寝をしたり、それ以外はテラスで静かに庭を眺めている毎日。身体は至って丈夫で食欲は旺盛です。ただ老人性健忘症というんでしょうか、ひどいときにはほんの二時間前にお風呂にはいったばかりなのに、きょうは風呂はまだかな、なんていい出す始末です」

これ以前から彼は、イエス・ノーの表現もあいまいになっていたが、やがてその長女にも「あなたはだれ？」と訊く状態になった。

昭和六十一年九月下旬、身体に震えを起して臥床して以来ベッドから動けなくなった。蜘蛛膜下出血を起したのである。十月五日から意識がなくなり、七日午後一時十分静かに息をひきとった。

主治医の内藤史郎医師によれば、「どこが悪いというより、老衰死ですね」

八十七歳で死んだ人々

人間には早過ぎる死か、遅すぎる死しかない。

——山田風太郎——

鳥羽僧正（一〇五三——一一四〇）

身、高僧の地位にありながら、日本の風刺漫画の祖ともいうべき「鳥獣戯画」を描いた鳥羽僧正は、ほかにも女体の不動明王や、便所で尻をふいている不動明王を描くなどいう奇行があったが、死するにあたって弟子たちが、師僧の遺産をいかに分配すべきか遺言したまえ、と再三要求したのに対し、硯と紙を持って来い、といい遺言状を書いた。それには、

「処分は腕力に依るべし」

と、あった。（『古事談』）

一休（一三九四——一四八一）

「世の中は食うてかせいで寝て起きて
　さてその後は死ぬるばかりぞ」

「世の中はへちまの皮のだんぶくろ
　底がぬければ穴へどんぶり」

「極楽は十万億土はるかなり
　とてもゆかれぬわらじ一足」

一休は堕落した官寺五山を罵り、みずからは酒肆淫房に出入して女犯肉食、風狂のままに生きた。

八十でやっと大徳寺に落着いて、応仁の乱で焼失した法堂の再興にあたったが、一方ではその晩年の十年、盲目の美女森を愛し、「極楽はそなたのほかにはない。そなたの恩を忘れたら、わしは死後畜生の身に落ちるだろう」と感謝した。

文明十三年ごろから病を発し、この年の冬、瘧を発し、十一月二十一日卯の刻（午前六時ごろ）寂した。瘧とはおこり、一般にはマラリアのことだが、この場合は高熱を発

する病気たとえば肺炎のごときではなかったろうか。

死するにあたって一休は「死にとうない」といって、坐ったまま眠るように死んだという。

北条早雲（一四三二——一五一九）

一介の牢人伊勢新九郎から関東の覇者となった早雲は、八十六で一子氏綱に家督をゆずって隠居した。氏綱は三十二歳、早雲五十四歳のときの子である。なお弟二人あり、末子長綱は早雲六十一歳のときの子である。

翌永正十六年七月、三浦三崎で舟遊びをした早雲は、それまで「なお眼に翳りなく、耳もさだかに歯牙も損せず、ただ白髪ばかりにして」といわれていたのが、このときから具合が悪くなり、八月十五日、伊豆韮山の城で大往生をとげた。

モース（一八三八——一九二五）

明治十年、日本における腕足類調査のために来朝した三十九歳のアメリカの動物学者、エドワード・シルヴェスター・モースは、横浜から東京への車窓で、たちまち大森貝塚を発見して、日本の考古学・人類学の曙を呼んだ。

彼は一度帰国ののち、東京大学に招かれて動物学教授になり、約二年その職にあった。その後帰米したが、彼は一生日本を愛する心を失わなかった。

彼は生きたダイナモといわれるほど一生多忙な生活をつづけ、その肉体は頑健、性質は快活で、八十代になってもまだテニスをやるほどであった。

晩年はマサチューセッツ州のセーレムという町に下女と二人で住んでいたが、一九二五年十二月十六日、その当日まで至極元気であったのに、夜十時ごろ突然脳溢血を起して昏睡状態におちいり、二十日の午後四時、何の苦痛も見せずに死去した。

東郷平八郎（一八四七——一九三四）

昭和九年五月二十七日。号外。

「海軍省発表。

東郷元帥には昨年夏頃より発病、秋季に至り時々咽喉部に異物感及び軽痛あり、その後一進一退の情況にて、喉頭癌の診断の下に放射線療法その他の治療を施しつつあるも、老体に加うるにその間、時々宿痾たる膀胱結石、坐骨神

経痛を起し、又気管支炎等を併発せるを以て衰弱加わり、昨今心痛すべき容体にあり」

それは日本海海戦から二十九回目の海軍記念日にあたる日であった。

この放射線療法に使用したラジウムは東京内外の諸病院から動員したもので、全量千三百ミリグラム、その価格は当時にして三十五万円に及ぶものであった。

妻の鉄子もまた六年前からリューマチのために臥床し、このころ手足も動かせない状態にあった。

長男の彪は語る。

「——医師が、定めた日に来て、父の診察を終えますと、父は『ありがとう』と丁寧に礼を言ってから、『ついでに、お鉄も診てやって下さい』と必ず言いました。（中略）畏れ多いことですが、毎日、午後二時頃になりますと、必ず陛下より、御下賜のスープがまいりました。父は御下賜のスープを頂きます時は、必ず、床の上で、合掌して、御礼を言上いたしました。そして、このありがたきスープを、隣室に臥している母に、いつも頒けてやりました。思えば、胸も迫るようです。……」

二十九日、午後十一時すぎ、東郷の容態が絶望的になったので、鉄子は寝台ごと、東郷の病室の敷居のところまで運ばれた。

彪はいう。

「全く絶望の重態で、意識不明瞭の筈の父が、この時、右手をしきりにうちふり、『わかったよ、わかったよ』と云うように、二三度うなずきました。母は、父がすでに絶望であることを知っているので、父の面を、じっと見守って、両の眼に熱い涙を浮かべておりました」

前年に死んだ東郷の盟友山本権兵衛は、やはり椅子のまま運ばれて死床の妻に最後の挨拶にいったのだが、こちらは逆の訣別の光景となった。

二、三分後、連れ去られながら、寝台の上で鉄子は、「乃木さんの奥さまが羨ましい」と、涙を流しながらいった。

三十日午前七時、東郷は息をひきとった。

最後の病床に侍した主治医の加藤直次郎は語る。

「元帥の御最後は、あれこそ、ほんとうの大往生と申しあげられるのでしょうね。大抵の人は、最後に痰が出て苦しむものですが、それすらなく、眠るが如き安らかな、お寂かな御最後でありました」

看護婦の福岡松恵はいう。

「障子に朝日がほのぼのと明るくさして、ちょうど元帥の

御魂が栄光に包まれて、天上にお昇りになるような神々しい気に打たれました」

八年後の昭和十七年五月二十九日、連合艦隊主力は、日本海軍滅亡の序曲を奏でるべく、ミッドウェーめざして出撃する。

作家阿川弘之は『米内光政』でいう。

「東郷平八郎は、晩年部内で神様扱いをされるようになった。重大案件は何事も、八十を過ぎた老元帥の意向を聞いてからという奇妙な風潮が出来上り、ロンドン軍縮条約の批准にあたって、加藤寛治や末次信正、小笠原長生らの取巻きにかつがれた東郷は、少壮強硬派の勇ましい連中と同じことしか言わなくなり、最高人事に口を出して海軍の進路を誤まらせるもとを作った」

――昭和六年ごろ、「東郷神社」建立の話が持ちこまれたとき、あまり怒った顔を見せたことのない東郷が顔色を変え、なんという馬鹿なことを考える、と声ふるわせて怒ったというが、事実上、生きながら彼は神様にされていた。

――東郷平八郎は、長生きしすぎたのである。

葦原将軍（一八五〇――一九三七）

明治・大正・昭和三代にわたって、日本じゅうに笑いをふりまいたヒーロー。巣鴨癲狂院にある彼の誇大妄想の言行録は、東郷元帥なみに絶えることなく新聞によって報じられた。

彼は「正三位葦原将軍藤原のモロミ」と号し、日章旗と自製の木製大砲をうしろに、メリヤスの股引にフロックコートを着、訪問者が身分ある人間の場合は軍服にボール紙で作った大礼帽をかぶって会見した。

医者がはいって来て「将軍、お薬を持って参りました」というと、悠然と長髯をしごいて「そこに置いとけ」とあごをしゃくって威容を示した。

しばしば「勅語」を発した。曰く「今般世界内閣改造ニ付、大蔵大臣ニ軍用金トシテ百億万円献納ヲ命ズ」曰く「今般世界輸出ノ目的ヲ以テ、博士五千人程至急必要ニコレ有リ本年中ニ濫造然ルベク候事」曰く「印度自治国総長ヲ置キ、ガンディーヲ以テ之ニ任ズ」等。

明治四十三年乃木将軍が廃兵院経営の参考のため巣鴨病院を訪れたとき、「尊公も旅順では随分と苦労したのう。

二人の子を亡くしたのは辛かったろう。御苦労であった」と、まともな顔をしてねぎらった。

大正八年から世田谷の松沢病院に移ったが、前後を通じて在院実に五十六年。

昭和十二年二月三日「朝日新聞」。

「松沢病院の主といわれた葦原将軍事葦原金次郎が二日午後零時半老衰病で死んだ。

もう八十八歳、躁状態精神病者として明治十五年に入院（当時巣鴨病院）。半世紀の間にその狂人ぶりはいろいろの話題を投げた。元櫛屋の職人だっただけに手先も器用で、肩章などを造って自ら将軍と称し、病院でも特別に一室を与えられていた」

身は精神病院にありながら、最も広く最も長く、人々に笑いを与え人々から愛されたことで、最も幸福な長命者の一人だろう。

将軍が薨去して五カ月後の七月七日蘆溝橋事件が勃発し、日本は総発狂時代にはいる。

ヘディン（一八六五――一九五二）

「ヘディンは近代における個人の探険家としては最大の人物である。こういう巨人は今後現われることはないだろう」（梅棹忠夫）

一九〇〇年、中国新疆省ロブ沙漠のロブノール湖が「さまよえる湖」であることを発見し、また埋もれた古代の町「楼蘭」の遺跡を発見したスウェーデンの中央アジア探険家スエン・ヘディンは、一九四六年、八十一歳のとき知人に「私はまだ、十二冊分書くだけのテーマを持っています」と書いたが、その翌年ごろから白内障にかかった。

しかし、ストックホルムのメラール湖を見下ろすアパートの七階のヘディンの部屋は、毎夜明け方まで灯がつけられ、棚から床から本のあふれる書斎で、彼は拡大鏡を使って著述をつづけた。

彼は生涯独身であった。

一九五二年九月二十日、彼は最後の著作『アジアにおける私の犬たち』の序文を書いた。十一月下旬、出来上ったその本を見て、二十六日午前九時四十五分、老衰したヘディンは眠るように息をひきとった。

柳田国男（一八七五――一九六二）

柳田国男は、子供のころ二十歳まで育たないだろうとい

われたほど虚弱な体質であった。その自覚が、三十九歳で貴族院書記官長にまでなりながら、後半生は余生として自分の好きな道を歩こうという決心を抱かせた。そして日本民俗学を切りひらく学者の生活にはいってから、かえって身体が丈夫になった。

そして晩年まで身体を大事にし、自分専用の薬箱を一つ持っているくらいであった。また清潔好きで、一日に何度も顔を洗うほどであった。

昭和三十七年、八十七歳で、その五月、彼は成城大学で講演をやるほど元気だったが、六月に、仙台に住む娘の三千が上京したときは、「お前、何日に仙台に帰るのかい」という質問を何度も何度も繰返し、また道を歩くと、糸の切れた凧のように、どこへ傾いてゆくのかわからないような足どりで、三千を不安がらせた。

そして七月のある夜、トイレにいったとき転んでから身体の具合が悪くなった。しかし寝込んだのは、八月八日に死ぬ前の最後の数日だけであった。

長男の柳田為政はいう。

「父の最後は、ごく自然に消えて無くなるようなものだった。最後の病名もあったが、ああいう年齢だったので老衰といえるだろう。きげんのよい病人だったし、死ぬつもりでなかったせいか、幸せに死んでいったように思う。大往生だった」

坂本繁二郎（一八八二――一九六九）

「馬の坂本」で知られる洋画家坂本繁二郎は、大正十三年パリから帰って以来、一度も東京へ出ようとはしなかった。昭和四年からは、福岡県八女のアトリエから動かなかった。

彼は八十を越えても六十代に見えるほど丈夫で、頭もしっかりし、画業への意欲も旺盛であったが、昭和四十二年十月二十一日の朝、突然小便が出なくなった。前立腺肥大によるものであった。

医者が来て導尿をしたあと、元気になった彼は客の谷口治達にいった。「いや、とんだ目に合いました。本当に死ぬるのではないかと思いました。死ぬるとなると、やりそこねている事が多くて残念だし、またこれっぽちの事で死ぬるのも馬鹿らしい気持だし。……」

しかし、これ以来症状は一進一退し、急速に老衰の度を深め、四十四年七月十四日午後六時三十七分に死去した。これも眠るように、いつ臨終かわからないような静かな死であった。

彼は生涯ほとんど「馬」「能面」「月」ばかり描いたが、しかし松本清張は、坂本と同郷の久留米に同年で生まれ、同じく画家となったライヴァル青木繁が若き日描いた能面のスケッチ集を、坂本がひそかに所持しながら死ぬまで外部に出さなかった秘密について、辛辣無比の推理を展開している。

山本有三（一八八七――一九七四）

『真実一路』『路傍の石』などで知られる山本有三は、昭和四十九年一月四日、湯河原の自宅で急に高熱を発し、五日救急車で国立熱海病院に入院した。

彼は前年「毎日新聞」に、彼のよく知っている故近衛文麿を描くべく「濁流――雑談近衛文麿」を連載しはじめたが、途中息切れがして四十一回で中断した。しかしなお続稿の意志を失わず、この入院にあたっても、

「今ここで死んでたまるか七日くる」

と詠み、救急車を待たせて、病院へ持ってゆく資料を探している始末であった。

七日は一月七日の季語だが、それにしてもこんな句を詠むとは山本有三らしくもない。

入院後は熱も下がり小康を得たが、十日の午後、烈しい咳が出はじめて一時間余もとまらず、その苦しみを見てハナ夫人のほうが持病の心臓病の発作を起して隣室のソファに横たわるという騒動であった。

やがて咳はおさまったが、夕刻から気管支炎を起し、また高熱が出、翌十一日午前五時、心不全のために死去した。

遺書により、山本有三は戒名をつけられなかった。

石橋正二郎（一八八九――一九七六）

一介の足袋屋から、大正十二年三十四歳のとき「地下足袋」を創案して成功し、ついにはブリヂストンタイヤ、ブリヂストン美術館で知られる大富豪となった石橋正二郎は、小学校入学のころは病身で欠席ばかりしている虚弱児童であったが、老年になるに従って、同年齢の人より十歳は若い健康の持主になっていった。それは食事と運動に細心の注意を払う持続的な摂生によってもたらされたものであった。

しかし彼は、七十七歳のころから運動機能に障害を起す難病パーキンソン氏病の症状を現わしはじめた。

闘病十年、その間、頭脳と気力はなお健在であったが、

昭和五十一年二月、腹部から背部にかけて激しい痛みを伴う帯状疱疹にかかった。そして九月十一日午前一時二十五分に死去した。

なおブリヂストン美術館は、彼の小学校時代の図画教師坂本繁二郎が、青木繁の絵を収集することを勧めたのが始まりである。

加藤唐九郎（一八九八――一九八五）

昭和三十四年瀬戸市から発掘された壺が、附近にそれらしい陶片も発見されたので鎌倉期の古窯跡と認められ、壺は重要文化財として指定された。しかるに翌年になって瀬戸の陶芸家加藤唐九郎が、あれは自分の焼いたものだと声明して大騒ぎになった。いわゆる「永仁の壺」事件である。

附近に陶片を埋めるなど、怪しげな細工もほどこしてあったので、ふつうなら彼はペテン師の汚名をきるべきところ、逆に唐九郎は「重要文化財に匹敵する作品を作れる男」という盛名を得ることになった。そして晩年は、みずから「茶碗一個で一年暮せる」と冗談にいうほどの大陶芸家の地位を得た。

彼が諸人に敬愛されたのは、陶芸においてはピカソと較べられるほどの実力もさることながら、天衣無縫の野人的人間味にもあった。昭和五十八年テレビ番組で、土もみをやりながら、自分を育てた祖母が「一流の名人となれ」と訓戒した想い出を話しているうち、八十六歳の唐九郎は突然号泣のひと声をあげ、すぐに涙をぬぐいながら「ヘンになっちゃった」とテレたが、白髪白髯にふちどられながら少年のようなういういしい魂を失わない天真爛漫さは見る者を感動させた。

翌年、「本当に仕事がやれるなと思ったのは七十一歳のときでした。人にもよるでしょうが、僕は結局発育不良で時間がかかるんですね」といった。また長寿の秘訣をきかれ、「こんなに長生きするつもりはなかった。気がついたら生きとるんじゃ」と、いった。

昭和六十年十月二十九日、心臓の異常を自覚し、名古屋大学病院に入院したが、病院からゴッホ展を見にいったり、十二月十六日には帰宅して、自作の茶碗を窯に入れるほど元気であった。

二十一日に正式に退院し、二十三日には、「久しぶりに書くか」といって、「壺」という字を何枚か揮毫した。これが絶筆となった。

二十四日朝、次女のマリエが持っていった新聞をベッドの上で読みはじめたが、三十分ほどして食事を運んでゆくと、新聞を顔にかぶせたまま危篤の状態であった。

そして午前十時五分に息をひきとった。心筋梗塞であった。

十六日に窯に入れた三個の茶碗は、翌朝にとり出された。

八十八歳で死んだ人々

左様ならが言葉の最後耳に留めて
心しずかに吾を見給え
――松村英一――

ヴェルディ（一八一三――一九〇一）

「アイーダ」などで知られるイタリア歌劇の大作曲家ヴェルディは、功成り名とげて七十歳のころから隠遁生活にはいり、農園生活と慈善事業に余生を過した。

それでも、七十四で「オテロ」、八十で「ファルスタッフ」の作曲を完成した。

ヴェルディが八十七歳のとき、かつて「アイーダ」初演のときアイーダ役で歌ったテレーザ・シュトルツが知人に

送った手紙がある。
「八十七歳にもかかわらず、先生はお元気です。食事も進まれますし、よくおやすみにもなれます。時々馬車で外出されたり、軽い散歩もされています。散歩はもっと長くなさりたいのですが、足が弱くなっていられるので、先生はいつも足に文句をいっておられます。……」
彼は落日の光のごとく徐々に老いていった。
そして一九〇一年一月二十一日、ミラノのホテルで脳溢血を起して倒れ、一週間昏睡がつづいたあと、二十七日早朝に死んだ。
一九〇一年は明治三十四年にあたるが、彼の遺産は七百万リラ（当時の日本円で約四百万円）あったといわれる。

富岡鉄斎（一八三六――一九二四）

大正十三年秋、洋画家正宗得三郎（白鳥の弟）が京都にいって鉄斎を訪問したとき、鉄斎は、
「画家も長生きしなければいいものは書けない。おれもこのごろになって、どうやら思うように絵が書けるようになった」
と、いった。
事実彼は八十を越してもその筆はいよいよ豪宕無縫をきわめた。特に仙人や童子を描いて、その神采稚心、彼に超えるものはない。
その年の十二月二十七日、彼は「栄啓期の図」を描いたが、これが最後の作品となった。栄啓期とは孔子と同時代の隠者の名である。
大晦日の朝、いつものように起床し、いつものように庭の祭神に祈り、いつものように粥を食べ、画室にはいった。午後三時ごろ、突然持病の胆石の発作を起して、一時間ばかりで死んだ。
彼は、自分はあくまで学者であって絵は余技だといっていたが、世界に通用する日本画家は鉄斎だけだといわれる。

宮武外骨（一八六七――一九五五）

明治以来、政府を揶揄し、官憲を嘲罵する新聞雑誌を出しつづけて、入獄四回、罰金十五回、発売禁止十四回という履歴を持ち、中野好夫から「言語を絶した大叛骨」と評された宮武外骨は、しかし還暦の年の昭和二年から東京帝大の「明治新聞雑誌文庫」の事務主任となった。もはや自分の余生は、明治の新聞雑誌の蒐集と保存に捧げるため

のみにある、と考えたからである。大地震で壊滅した東京より地方から探し求めて、彼は老いた肩にリュックをかついで尨大な量を運びこんだ。権威主義の東大教授たちが紙屑と冷笑したこれらの新聞、雑誌が、のちには明治研究の貴重な資料となる。
しかし彼は、なお三十年近く生きた。
学歴らしい学歴のない彼は、二十四年間勤めた東大からは一文の恩給も出なかったので、晩年は、若いときからの親友が経営する広告取次店「博報堂」の援助で、駒込追分町の四帖半と二帖二間きりの小さな家にひっそりと暮していたが、八十四歳のころから足腰が不自由となり、臥床する日が多くなった。
晩年共に住んだ、妻の甥吉野孝雄は語る。
「昭和三十年に入ってから、外骨の容態は目に見えて悪化した。それは十歳になった少年の私の眼から見ても明らかだった。大便はおろか、小便にも立てなくなっていた。背中や足には床擦れがひどい。化膿を防ぐためにペニシリン軟膏を塗布したガーゼを交換するのだが、包帯を換えるたびに外骨は悲痛な叫びをあげた。（中略）
容態の悪化にともなって、外骨は眠ることが多くなった。眠りの中で、外骨はよく魚釣りの動作をした。竿を振っては、また夢の中の川へ釣糸を垂れることをくり返すのである。穏やかな一介の老人の風貌である。一代の反骨者〝外骨〟の面影など微塵も感じられなかった。（中略）
例年にない酷暑である。（七月）二十六日になって外骨の容態が急変した。それまでは流動物だけは受けつけていたのだが、すでに吸い飲みに入った飲みものすら摂取できなくなっている。その日、広瀬医師から伯母に、外骨の死期が迫っていることが告げられた。その日から、伯母による徹夜の看護がつづけられ、昭和三十年七月二十九日のまだ夜が明けやらぬ朝、午前三時三十八分、外骨は帰らぬ人となったのである。（中略）
外骨の肉体は、床擦れなど、すでに生きながら腐れはじめていた。背筋や手足の床擦れは、肉を破り骨を露出させていた。（中略）外骨は死の床にあって、なお『骸骨』と化して生きつづけたといえる」（吉野孝雄『宮武外骨』）
しかし、死の一週間ほど前、若いころからの友人西田長寿が見舞いに訪れたとき、「こんな風になるとは思わなかった」と外骨はいった。「わしは死ぬときは腹上死するつもりでいたんだが。……」（木本至『評伝宮武外骨』）

宇垣一成（一八六八——一九五六）

総理大臣になることが政治家のマンガンだとすれば、馬鹿にらくにマンガンが作れる場合があるかと思うと、何度もマンガンにイーシャンテンになりながら、どうしてもアガれない場合もある。陸軍大将・宇垣一成が後者の見本であった。

満州事変にも日中事変にも太平洋戦争にも、つねに全面的に賛成しながら、自分が出身した陸軍から反対され、それゆえに一般からは非軍国主義者のごとく錯覚され、自分では日本を救う者は乃公一人なりと思いこんで終生首相候補者のつもりでいた宇垣は、戦前ついにいちども首相の座につくことが出来ず、敗戦後は公職追放され、それがやっと解除された昭和二十八年、はじめて参議院に立候補して最高点で当選した。

しかし、この選挙運動中、支持者と打ち合わせの部屋で火鉢の炭を焚き過ぎて一酸化炭素中毒にかかって倒れ、以後日常生活も不自由な身体になり、議員としての何の活動もなく、三年後の昭和三十一年四月三十日、東京国立の自邸で逝去した。

志賀直哉（一八八三——一九七一）

元気なころ志賀直哉は、「不老長寿という。不老で長寿ならいいが、老醜をさらしての長生きはいやだね」といい、よく安楽死のことを口にした。若いころには自殺を否定していたが、晩年には、自殺もやむを得ない場合もある、といっていた。

しかし彼は生きに生きた。死ぬ四年前、八十四のとき彼はもつれる舌でいった。

「ここがわるい、ここが痛むというのでなしに、衰えて——このごろしみじみ老苦というものを味あわされているんだ。たとえばこんなものを」とテレビを指して、「見ていても筋なんかサッパリわからない。テレビドラマにしても、この先どうなっていくのか、大体考えればわかることだろう。中学生だってわかる。それがさっぱりわからない。筋を追って考えることができないんだ。老いぼれて、気力が全くなくって——そればかりでなく、アタマがおかしい。ヘンなんだよ」（斎藤一『志賀直哉との対話』）

そして彼は昭和四十六年、八十八歳を迎えることになった。

阿川弘之『終焉の記』にいう。

「昨年夏、前立腺肥大の手術を受けて以来、元気が無くなり、自宅で寝たり起きたりの暮しをしておられた志賀直哉先生が、軽い肺炎の症状をおこし、嫌っていた入院を承知して世田谷の関東中央病院に入ったのが、去る八月十六日であった。容態は思わしくなく、食物が全く咽を通らず、十八日十九日あたりは終日ほとんどうとうとと眠ったままで、もはや昏睡に近い状態かと見え、私は覚悟を定める思いになった」

しかし、一週間ほどすると不思議に持ち直し、朝夕半熟卵一つ程度だが物も食べられるようになった。

「そうなるとしかし、先生の方は段々持ち前の我儘が出て来て、床の上へ起せとか、ステッキを突いてベッドから足を下ろすとか言い出す。すぐ疲れて横になってしまわれるけれども、五分もしないうちにまた起せと言う。康子夫人がさとすような口調で、寝ていらっしゃらなくちゃ駄目よと、やさしくなだめるのに、大きな強い声で、『うるさいッ』と怒鳴ったりした」

弟子の阿川や尾崎一雄らは、それを回復の徴候と考えてよろこんだ。

「だが其の後、病状は一進一退というより、やはり徐々に下り坂に向って行った。

食物も再び咽を通らなくなり、一度『京味』の刺身と里芋の煮つけが食ってみたいと言い出されたことがあったが、取り寄せた時には『もういやだ』と一と口も手をつけなかった。

鼻の穴から深くさしこんで、何という栄養剤か、流しこむ試みも一度だけ成功したが、『いやだ』と言われてそれも取ってしまった。

水分と栄養との補給は、連日長時間の点滴だけに頼っていた」

志賀直哉は、これ以上努力して生きようという意志を放擲したように見えた、と内科部長の杉下和夫はいう。

十月十九日朝、阿川が病院から呼ばれて駈けつけると、

「昨夜から呼吸が少しおかしくなり、けさ医師の話ではまあ今夜が山だろうという。（中略）先生は酸素吸入のマスクをかぶせられ『ハ、ハ、ハ、ハ』と、口をひらいて早い苦しげな息づかいをしていた。両眼はひらいているが、視点はもはやうつろであった」

二十日には、八十三になる旧友里見弴も見舞いに訪れた。

「里見さんは部屋に入るなり、つかつかと枕元に近づいて、『伊吾だよ』と言った」

た。

「伊吾」は白樺時代の里見の呼び名であった。

「志賀先生は『伊吾』の来ていることが分ったようであった。

酸素マスクの下で、荒い息をしながらしきりに何か口を動かしはじめた。何を言っておられるか、全然聞き取れないのだが、里見さんはかがみこみ、先生の額に片手をあて、もう一方の手で先生の手を握って、

『うん、うん、うん、そうかそうか。うん、うん、うん』

と、幾度も幾度も繰返した」

しかしそのうち里見はたまりかねたように小走りに窓のそばへゆくと、背をむけたまま肩をふるわせ、両手で顔を覆って号泣した。

夫人をはじめ家族たちはベッドのまわりに集まって見守った。夫人は泣きながら、

「お父さま、みんなおりますよ。もう何もお思い残しになることは無いわね？」といった。

二十一日朝は、もう時間の問題ということになった。十一時ごろまた里見がやって来たので、阿川と直哉の子息直吉が案内して病室に入ろうとすると、いれちがいに看護婦が駈け出して来た。阿川は書く。

「見ると、白い髭にかこまれた先生の口は、軽くひらいたまま動かなくなっていた。一つ息をして、またとまった」

医者が駈けつけて、馬乗りになって、あばらが折れそうなほど強く人工呼吸をやりはじめた。直哉は死ぬ四、五日前、直吉に「もう何もしないでくれ。俺は駄目だ。死ぬよ」と舌をもつらせながらいったというのだが。――

完全に心臓が停止したのは、午前十一時五十八分であった。

「死んで築地の本願寺で盛大な葬式なんて、考えてもいやだね」と生前いっていたので、青山葬儀所で簡素な無宗教の葬式が営まれた。それでも会葬者は千二百人あった。

「私は灰になった後でも、焼場のきたない骨壺に入れられる事は厭わしく、ある時、陶工の浜田庄司君に骨壺を焼いて置いて貰いたいと頼んだところ……」（昭和二十三年「実母の手紙」）それが出来て来たので、「食堂に置き、砂糖壺に使っている」「私は骨壺の用意はしたが、あと十年八十歳まで生きていたいと思う。（中略）あわよくば八十八まで」（昭和二十七年「年頭所感」）

その通り志賀直哉は八十八まで生きた。

「私が死んでも墓は作らず、灰にして、自家に置き、邪魔になった時、海に沈めて貰いたいと家人に云っている」（「実母の手紙」）

とも志賀は書いたが、死後、灰色に、赤、青のまじった色の、真鶴（まなづる）産の本小松石を三段積みにし、高さ一メートル八十という大きな墓が青山に作られた。

右の庄司の作った益子焼（ましこやき）の骨壺はその墓に納められたが、昭和五十五年三月十六日、その年の一月に亡くなった康子（さだこ）夫人の骨壺を納めるために墓石をあけたところ、弟子の網野菊が「お骨がきれいでしたね。あんなにきれいな立派なお骨、初めて」といった直哉の遺骨は骨壺ごと盗み去られて消失していることが判明した。

二十日に至り、墓地から三百メートルばかり離れた場所に骨だけが捨てられて散乱しているのが発見されたが、それが志賀直哉のものであったかどうか不明である。

いずれにせよ、志賀直哉の最後の芸術的な望みは、最も無惨なかたちで裏目に出たのである。

蔣（しょう）介石（かいせき）（一八八七――一九七五）

蔣介石は一九七五年四月五日、心臓発作のため台北で死亡した、と発表された。この日は旧暦で三月三日にあたり、中国ではお墓詣りとお墓掃除をするしきたりで、日本では彼岸の中日にあたる。

もともと彼は「まず内を安んじ、のち外を攘（はら）う」という戦略で、抗日より中共撃滅を先決として、その目的達成にあと一歩という一九三六年、日本軍にその父を爆殺された張学良と、その黒幕周恩来の策謀による、いわゆる「西安事件」で、全面的に日本との戦争に転換したのである。

八年を越える日中戦争ののち、太平洋戦争における日本の敗北により、蔣介石は戦勝者たることを得たのだが、最初に心配していた通り、彼は中共に追い出され、一九四九年台湾に落ち、アメリカの保護により命脈は保ち得たものの、大陸反攻の呼号むなしく、一九七五年その翌年の毛沢東の死を見ることも叶（かな）わず、ついにこの地で命果てる羽目になった。彼はまさしく庇（ひさし）を貸して母屋（おもや）をとられたのである。死にあたり、おのれの人生を計算して、彼の心境果して如何（いかん）。

ところで彼は、実際は二年前の一九七三年十一月十四日に死亡していたという説がある（楊逸丹『蔣介石評伝』）。その時点では、彼の子蔣経国（けいこく）が総統独裁権をふるうのになお不安定であったからだというのだが、事実とすれば台湾の武田信玄である。

チャプリン（一八八九――一九七七）

チャプリンは五十四歳のとき、十七歳のウーナと四回目の結婚をし、それ以後だけでも八人の子供を生んだ。

晩年住んだのは、スイスのローザンヌに近いブベー郊外のコルシエ村の、レマン湖畔の葡萄畑にかこまれた十四ヘクタールの敷地に十八室を持つ大邸宅で、彼はよくブベーの町を散歩したが、やがてウーナ夫人の介添えで、車椅子に乗せられてゆく姿が見られるようになり、さらに自宅の庭に出るだけになった。

彼には人づき合いのよさと人間ぎらいの両面があったが、晩年は後者の面をおし通した。しかし七一年にはフランスのレジオン・ドヌール勲章、七二年にはアメリカの特別アカデミー賞、七五年にはイギリスのエリザベス女王からナイトの称号を与えられる栄光の中に余生を過した。

一九七七年十月十五日、ブベーの町でサーカスを見物したのが最後で、以後眼も耳も不自由となり、クリスマスの朝の午前四時、老衰で静かに死んだ。

その死の報道が日本にはいった二十五日夕刻、東京有楽町の「ニュー東宝シネマ1」は、たまたま彼の伝記映画「放浪紳士チャーリー」を上映中であったが、ラストシーンの途中その死が場内マイクで伝えられると、客席は一瞬静まりかえり、次に彼を讃える万雷の拍手が起った。

――しかるに、その翌年の三月一日夜、彼の遺体は柩ごと、これまた墓地から盗まれて消失していることが発見されたのである。

なお彼は、「独裁者」で愚弄したヒトラーと同じ一八八九年の生まれである。

市川房枝（一八九三――一九八一）

貧しい農家の娘に生まれ、父に薪でなぐられる母を見て育った市川房枝は、長じて婦人運動のリーダーとなった。晩年「こんど生まれてもまた婦人運動をやりますか」と訊かれたとき、ニコリともせず真顔で「こんどは男に生まれます」と答えた。

若いころからまったく色気とは縁がなく、自分でも「若いときもし美人だといわれたら、私の人生は変っていたかも知れないね」といっていた市川房枝だが、ふしぎに老いて銀髪となってから美しいといわれ、昭和五十四年八十六歳のとき、女性雑誌「クロワッサン」が行った読者の「好きな女の顔ベスト30」に、二位の山口百恵を倍以上ひき離してトップになった。まったく俗念のない一徹さと気品が人々を魅したのである。

政界浄化に挑む女ドン・キホーテとして、昭和五十五年の参院選挙でもトップの二百七十八万票を獲得したが、翌年一月十六日午前胸痛を訴え、本人は騒がないでと遠慮したが救急車で日赤医療センターに運ばれ、心筋梗塞の診断を受けた。

いちじ回復のきざしも見え、二十七日には病院の窓から白雪をかぶった富士を遠く眺めて「富士山ってこんなにきれいだったかしら」と、つぶやいて七分がゆを食べた。

が、その翌日未明からまた病状悪化して危篤状態におちいり、特別編成の八人の医師団が「必死で操縦桿をあげようと」（医師の一人の言葉）努力したが、二月十日、食べたプリンを吐いたあとは絶望的となり、十一日午前七時十三分死去した。

病理解剖の結果、心臓の下部を中心に心筋梗塞が見られ、ほかに強い肺水腫、腸内出血が認められた。

「化粧したのは昭和三年にいちどだけ」とみずから語った市川房枝の唇に、看護婦たちの手で口紅が塗られた。とにかくこれだけ愛されたばあさんは、ほかにいない。

八十九歳で死んだ人々

> 「ドンドン、いつまでしゃがんでるんだ。長い行列が出来てるんだ。お願いだ、早くすませてそこをあけてくれ、ドンドン」
> 「すまん、それはわかってるんだが……年がよって、思うようにはゆかんのだ。……」
> ――山田風太郎――

親鸞（一一七三――一二六二）

明治以来昭和四十一年まで約百年間にわたって出版された図書と論文による日本人の伝記に関する文献を収録した『日本人物文献目録』（法政大学文学部史学研究室）という本がある。これによると、日本の歴史上の人物で、その研究書の多いことで第一位は親鸞なのである。

これほど研究の対象になりながら、親鸞の生涯には不明なことが多い。誕生地、妻の数、生涯のある時期の動静、死歿地、死亡時刻など両説ないし数説あり、墓までが二つある。

　信ずるに足る伝記がなく、当時の公卿その他の日記、記録類にも親鸞のことを記したものがまったくないというところから、一時は親鸞抹殺説まで唱えられたことがあったが、大正八年辻善之助の『親鸞聖人筆跡之研究』によって、親鸞の実在したことが確定した。(当時の日記、記録にないのは、在世中の親鸞は一個の巷の念仏者に過ぎず、知識人階級に知る人も少なかったせいで、本願寺が盛大をきわめたのは彼の歿後のことである)

　彼は、八十三歳のときに実子の善鸞の大がかりな背信による大悲劇を乗り越えたあと、京にあって孤絶の中に著作に専念していたが、弘長二年十一月病に臥した。

『親鸞絵伝』によれば、「それより以来、口に世事を交えず、ただ仏恩のふかきことを述ぶ。声に余言をあらわさず、もはや称名たゆることなし」とある。

　そして、その二十八日正午から午後二時までの間に入寂した。

　その臨終を看守った末娘の覚信尼が、母――つまり親鸞の妻で、当時越後にいた恵信尼に、その模様を報告したが、その手紙は残っていない。ただ、それに対する恵信尼の返書が残っているが、それによると覚信尼は、父の臨終に何も奇蹟らしいことは起らなかった、これでほんとうに父は浄土へ往生したのだろうか、と不安を述べたらしく、恵信尼が、奇蹟など起ろうと起るまいと、殿(親鸞)の浄土への往生は少しも疑ってはならない、と念をおしてさとしている。

　親鸞は、その師法然と同様、何のへんてつもなく死んだのである。

　――親鸞の曾孫覚如の『改邪鈔』によれば、かねて親鸞は「某閉眼せば(死んだなら)加茂川に入れて魚に与うべし」と遺言していたとある。

ミケランジェロ(一四七五――一五六四)

　穏やかなレオナルド・ダ・ヴィンチとさえ諍いを起したほど気むずかしく、カンシャクもちで、他人にもきびしかったミケランジェロは、自分に対してはそれ以上にきびしかった。

　彼は生涯、少量のパンと葡萄酒だけの食事、数時間の睡

眠で、営々として描き、彫刻した。

　徹底的完全主義者の彼は、何から何まで、大理石を切り出すことまで自分の手でやらなければ気がすまず、しかも出来上った作品は、もし彼に自由にさせたらことごとく打ち砕いたろうといわれるほど厳格であった。

　そういう性格もあって、彼は四十歳を過ぎたころから、すでに自分の老いを告白しているほどである。しかし彼は長命した。

　そんな生来の頑健な体質も、さすがに晩年には、胆石や痛風、その他さまざまな病気で苦しむようになった。老いて彼はいった。「人間の誕生日は、よろこびの日ではなく、かなしみの日とすべきだ」

　八十歳のときに彼は書いている。

「私は樹皮につつまれた髄のように閉されて、ただひとりみじめな生活を送っている。私の肩は骨と皮ばかりの袋の中の蜂のようだ。私の歯は楽器の鍵盤さながらに揺れ動く。私の顔は案山子のようだ。私の耳は一方には蜘蛛の巣が張り、一方には夜通しこおろぎが鳴きつづけている。私の呼吸器のカタルはあえぎ通して、私を眠らせてくれない。私に光栄を与えてくれながら、芸術はなんというなれの果てまで私を連れこんで来たのだろう」

　一五六一年、八十六歳のとき、彼は裸足のまま三時間もつづけて素描していたとき、ふいに痙攣を起して倒れた。しかし、数日後には回復し、馬に乗って仕事に出かけた。

　一五六四年、八十九歳のときも彼は、ローマの自宅で「ピエタ」(歎きの聖母像)制作のために立ちつづけていたが、二月十四日に高熱を出した。しかし彼は、雨の中を馬でカンパニアの野に散歩に出かけた。

　しかし彼も自分の身体の異常に気がついていて、友人を通じてフィレンツェのリオナルドにいそいで来るように口述の手紙を送った。リオナルドは彼に残ったただ一人の甥で――もう一人姪があったがこれは修道院にはいっていた――しかも、疑いぶかいミケランジェロは、自分の財産に目をつけていると思って、平生近づくことを許さなかった甥であった。

　友人は甥への手紙につけ加えた。

「きょうの午後も三時から四時までのあいだに、習慣通り馬で外出しようとされました。しかし、寒い上に足も思うようにきかないので、引き返して、壁暖炉のそばの、ベッドよりお気に入りの安楽椅子に腰を下ろされました。……」

　超人ミケランジェロが、ベッドにつくことをやっと承知

したのは、死の前日であった。彼は数少ない友人や従者たちにかこまれて、はっきりと遺言を口述して、二月十八日、酷烈な生涯を閉じた。

あらゆる悲と神への訴に痩せ細つて
彼は青い炎のやうなロンダニィニのピエタを彫つた
二月の雨に濡れながらひねもす落葉を踏んで立つてゐた
九十歳の肉体は病み何処にも楽な居場所が無かつた
一日床にねて彼は死んだ
　　――高村光太郎『つゆの夜ふけに』――

――ただし、光太郎は自分を日本のミケランジェロだと思っていた。

葛飾北斎（一七六〇――一八四九）

天保五年、七十四歳で「富嶽百景」を発表したとき、彼は述べている。

「己六歳より物の形状を写すの癖ありて（中略）七十三歳にしてやや禽獣虫魚の骨格、草木の出生を悟り得たり。ゆえに八十歳にしてはますます進み、九十歳にしてなお奥意を極め、一百歳にしてまさに神妙ならんか。百有十歳にしては一点一格にして生くるがごとくならん。願わくは長寿の君子余が言の妄ならざるを見給うべし」

八十歳になったとき、百まで生きることを目標として、「百」という印章を用いはじめた。

八十五歳のとき、自分の長寿薬として「竜眼肉（むくろじ科の木の実）皮を去り、目方六匁、太白砂糖八匁、極上焼酎一升壺に入れ、よくよく封をし、日数六十日おきて朝夕猪口にて二つずつ」用いていることを述べている。

生涯に九十三回引っ越しをし、その間常に彼は、夜具を頭からかぶって飯櫃の上で絵をかくといった赤貧の生活をつづけた。

それでも彼は、ただひたすら描きつづけた。甘いものは好んだが、酒も煙草ものまず、老いては朝起きてからすぐ仕事をはじめ、夜蕎麦二杯を食べるだけであった。

嘉永二年四月の中ごろ、しかし彼も風邪をひいて、浅草聖天町遍照院境内の裏店で床についた。枕頭に集まった、老いたる娘お栄をはじめとする数人の弟子たちが、臨終の迫っていることを彼に告げた。

　ひと魂でゆく気散じや夏の原

と、彼は辞世を詠み、

「あと十年生きたいが……せめてあと五年の命があったら、

ほんとうの絵師になれるのだが」

と、つぶやき、大息を一つついて息をひきとった。四月十八日朝七ツ時（午前四時ごろ）であった。

レセップス（一八〇五――一八九四）

フェルジナンド・レセップスは、初老期にはいって不本意に外交官をやめてから、一念発起してスエズ運河を切りひらく偉業にのり出し、前人未到の難工事と、フランスの勢力がエジプトに及ぶことを怖れる英国の執拗な妨害を克服して、十年の歳月を経て、一八六九年ついにこれに成功した。

「五十歳までのレセップスは公生活に敗北した。常人ならば、そのまま隠居して静かな田園の生活に平穏に老衰して行く筈だったものを、五十過ぎて夢を持って出て来てスエズの奇蹟を成就して再び別の人生の扉を開いた。世の中には稀れな履歴である」（大仏次郎『パナマ事件』）

十一月十七日のイスマイリアにおける新運河の開通式は、かけねなくまさに世紀の祝典であった。ときにレセップスは六十四歳であった。

その数日後に、彼はイスマイリアの小さな教会で、二十一歳の花嫁ルイズ・ブラガールと結婚式をあげた。レセップスのほうは再婚であったが。

「世間はこの結婚の知らせを聞いて唸った。更にこの夫婦の間に、後年、男の子と女の子が半ダースずつ生れたと聞いては、人はもう驚くことも止めてしまった。十二人の子供が生れたのである。ラブレエの物語の中か三銃士やダルタニアンの血縁の体格でないと、在りそうもないことである。まだ、その時代は豪傑の椅子が残されていた」（『パナマ事件』）

この豪傑は、ついでパナマ運河の開鑿にとりかかった。スエズの成功で超人の座についた彼に、世界がそのことを翹望したし、彼も神がかりの自信を持った。

一八七九年、彼は「パナマ運河株式会社」を作って第二の壮挙にのり出したが、しかしこんどはうまくゆかなかった。パナマの地質と雨と悪疫は事前の調査を超えたもので、数万の労働力と数百万の金貨を空しくのみこむばかりであった。レセップスの不撓不屈の気力、怖れを知らぬ突進力はすべて裏目に出た。資金尽きて、パナマ運河株式会社は富籤まで発行して募金したが、一八八九年、ついに破産宣告を受けるに至った。

八十四歳のレセップスは、一敗地にまみれて田舎に隠栖

した。「老年と失意の悲しみにうちのめされて、あれだけ派手で社交的だった偉丈夫も、今はまったく別のひとを見るように、やつれていた」（『パナマ事件』）

しかしこの失敗は、彼をただ引退させただけでは終らなかった。会社の発行した株や富籤をただの紙きれとされた民衆はごうごうたる非難をあげ、特に富籤発行の許可にあたりパナマ運河株式会社にワイロを強制した大臣や議員のあることが発覚するに及んで、フランス政府を震撼させる一大疑獄に発展した。

パナマ運河会社の社長をしていたレセップスの長男——前妻の子——シャルルは逮捕された。やがて父子ともに禁錮五年の判決が下された。

八十八になっていた老レセップス自身は収監をまぬがれたが、みるみる老衰の極に達した。

「稀れに客があっても、大レセップスは耳が遠くなったし、目もかすんでいた。人が彼の前に立っても、見る気力さえ欠いていたのである。幾たりかの親しい常連には、力のない笑顔を向けることはある。しかし、口もきかなかった。肱かけ椅子に体を埋め、脚には毛布を、肩にはショールを掛けて、なかば睡っているように、うつらうつらとしている。彼が愛していた猿が側に顔をしかめている。レセップスが膝かけの上で、こまかく慄えている手を見詰めている瞬間がある。まだ事業の復活を夢見ることでもあるのか？　また瞼を閉じた下から涙が流れていることがある。老残の孤独を感じる時でもあろうか？」（『パナマ事件』）

翌年の十二月七日、彼は灯の消えるように死んだ。

——パナマ運河開鑿がアメリカによって成功したのは、レセップスの死後二十年、一九一四年に至ってからのことである。

頭山　満（一八五五——一九四四）

みずから称して国家主義者という徳富蘇峰ですら「地方に於ては有力なる——暴力団とは云わざるも——その名を聞いてだに、人を慴伏せしむるに足る壮士団体」（『蘇峰自伝』）と評した「玄洋社」の頭領。

玄洋社のモットーたる沈黙と相まって、テロの恐怖とともにカリスマ化されて、明治から昭和にかけて「国士」の巨頭とも目された頭山満は、昭和十九年二月六日の「朝日新聞」でこんなことをしゃべった。

「米英の狐狸どもをやっつけるのを商売のようにして来たわしじゃ。大事な時に風邪などひいてしまったが、けどもの文明のやつばらがのめのめとやって来よったとなると、これだけはどうでもみなに伝えて欲しいものじゃ。よいか、日本は神国じゃ。何千年、何万年前から神国としてちゃんと備わったものがあったから、どんな国泥棒の野望も潰れおった。われわれがこうして生きておるのもすべて大御心によるのじゃ。この国に生を享けただけでも譬えようもないありがたいことじゃ。わしらは霊妙な日本人じゃ。

物から言えば日本は、金でも機械でもアメリカには寄りつけないかも知れん。しかし物は少くともその足らぬを補って余りある力を日本は持っとる。魂の力じゃ。物よりも大切なのはこれじゃ。むこうは余りある機械力というやつで泥棒根性丸出しで刃向って来る。飛行機も軍艦も沢山これ見よがしに持って来たのじゃろうが、わしら日本人はこの機械力に人雷を以てぶつかればよいのじゃ。

人雷のほかに神雷もある。こういうものはけだものどもの料見にはない。算盤にもない。日本だけにある尊いものじゃ。これをもって来て『忠に死し、孝に死するは臣子の大慶なり』じゃ。のめのめと出て来よった。ここでじゃ、絞上げるのじゃ。生殺しじゃいかん。人雷、神雷で微塵に引導をわたすのじゃ。小気味よく大慈悲心の発動を見せるときじゃ。これだけでよい。あとのことはもう言わんでもよい。そうじゃろう」

紙面の極度に少ない当時、「朝日新聞」がこんな御託宣を掲載したのは、神格化された彼に対する苦しまぎれの神頼みというやつだったのであろうが、頭山のほうもこんなおしゃべりの公表を許すこと自体、彼のボケの現われだったにちがいない。

頭山はその年の八月五日から富士山麓御殿場町車山の山荘に来ていたが、十月三日、宿痾の胃潰瘍の出血で脳貧血を起して倒れ、五日午前零時三十五分、妻子に見護られつつ大往生をとげた。

その翌日、自由主義者の評論家清沢洌は日記に書いた。

「頭山満が死んだそうだ。愛国心の名の下に、もっとも多くの罪悪を行なった男だ。同時にまたもっともよく日本人の弱点を代表していた男でもあった」（『暗黒日記』）

日本人の弱点とは、右のごとき神がかりの大言壮語もその一つであったろう。

頭山の死後一週にしていわゆる台湾沖航空戦が行われ、このときの大がかりなホラ戦果にみずからあざむかれた日本海軍は、人雷神雷もあらばこそ十月二十四日、レイテ沖海戦で引導をわたされた。

吉田　茂（一八七八――一九六七）

昭和二十一年五月十六日、吉田茂が第一次吉田内閣の大命を受けた日に、マーク・ゲインはその『ニッポン日記』に書いている。

「今から五十年後の、いやおそらくもっと近い将来の国家主義日本は、吉田を、（中略）異国の征服者の意志をたばかり、旧日本の体制を根本的に変革するその命令をサボタージュし、封建的体系の保持に巧妙かつ有効にたたかった人として、感謝の念をもって追懐するであろう」

まさしくその通り、この日本人には稀有なほどの剛腹で陽性の政治家は、「敗けたなら、敗けっぷりをよくしよう」といいながら、老妓のごとくマッカーサーをあやなして、その「虎の威」を利用して逆に日本再興の基を作った。

しかし五次にわたる吉田内閣において、彼ほど新聞から極端な毀誉褒貶を受けた総理大臣はいない。「ワンマン」「白足袋首相」はては「吉田清盛入道」とまで呼ばれたが、この傲慢な、わがままな、戦後ただ一人の「貴族」は、あわせ持つ楽天性とユーモアを失わぬ個性で、ふしぎに大衆から敬愛を失わなかった。

昭和二十九年ついに足かけ九年にわたる吉田政権の命脈はつき、三十八年には政界からも引退したが、政権は依然として愛弟子たる池田勇人、佐藤栄作によってつがれ、彼はみずから「海千山千楼」と称する宏壮な大磯の別邸で、鼻めがねに葉巻をくゆらし、悠々たる晩年を送った。そのころ天皇が、「吉田は顔色がよくて結構だね」といったのに対して、「吉田は人を喰って生きておりますので」としゃあしゃあと答えて、天皇を破顔させた。

実際に彼は、ビフテキや鰻をベーコンで巻いてバターで焼いたようなあぶらっこいものが好きで、「私は四千年生きるよ」といって、客をケムに巻いていた。

しかし、壮健な彼も、昭和四十二年八月末、ついに心筋梗塞の発作に襲われる日が来たが、甥にあたる日本医師会会長武見太郎が駈けつけると、「御臨終に間にあいましたね」とからかう諧謔を忘れなかった。

以来健康はやや衰え、九月二十二日、八十九回の誕生祝いで食べたバースデイ・ケーキを吐いてからとみに体調悪化して、太平洋と富士山が見える「海千山千楼」の二階でウツラウツラと過したが、十月十九日ふと「富士が見たい」といって障子をあけさせ、ベッドの上に抱き起されて、晴天にそびえ立つ美しい夕ぐれの富士山をあかず眺めいっ

た。

翌十月二十日は朝から平穏で、主治医の佐藤陽一郎医師が診察をおえ、辞去した直後午前十一時五十分、「ちょっと気分が悪い」といって、二つ三つ呼吸し、そのままうっと眠るがごとき大往生をとげた。枕頭には、彼の後半生献身の権化のごとく仕えた「小りん」と看護婦がいただけであった。

息子の吉田健一は記す。

「父の死は、周到な、そして最後の計画によるものだという気がしてならない。父が死んだ時にその場にい合わせたのは主治医の先生と、昔から付いていた看護婦さんだけで、先生の方は毎日の健康診断を終え、異常がないので下に降りて門の方へ向って歩いてお出でになる途中、父の具合が悪いというので呼び戻され、父を助けて横にならせて下さると、父はそのまま眠ってしまって息絶えたということである」

彼は小りんの存在を巧妙に抹殺している。

当時東南アジア歴訪中であった愛弟子の佐藤栄作首相は急遽飛びかえって、戦後はじめてにしてかつ絶後と思われる国葬をとり行った。

結局、大敗戦後の宰相としての吉田茂という個性の存在は――真珠湾で米太平洋艦隊が潰滅したあと、軍事史家のサミュエル・モリソンが、ハワイの工廠と石油タンクと空母が無傷であったことに「神はアメリカの誇りを辱しめるように定めたけれど、しかし運命はアメリカ海軍が完全に破壊されないように注意を払ってくれた」と感謝したのと同様の意味で――吉田茂を日本に残しておいてくれたと認めざるを得ない。

金田一京助（一八八二――一九七一）

息子の春彦の批評によると、言語学者、金田一京助のみるべき業績は五十代までの仕事であるという。

しかしその名声はそれ以後に高くなり、文化勲章以下数々の栄誉にかがやいた。しかし、長い間の貧乏と度はずれの人のよさと奇行のために、その妻からは生涯うとんじられ、その家庭生活は寂しかった。

昭和四十三年、妻の静江は本郷のマンションに移り、八十六歳の京助は杉並の自宅から動かず、一人残って『アイヌ叙事詩―ユーカラ集』の訳注に耽った。その杉並の家を冬暖かくするため、春彦は一部改造にとりかかり、それは四十六年春に完成した。その間本郷のマンションに移され

ていた京助は、改築された自宅に帰って来たが、すでにモーロクしていて「ここはどこのおうちだ？」と悲しそうにつぶやくばかりで、こんどはマンションにひき返して動こうとしなかった。
　その四十六年十一月六日、老衰した彼は昏睡状態におちいり、十四日、引潮のようにしずかに息をひきとった。

石橋湛山（一八八四――一九七三）

　戦時中は軍部に抵抗し、戦後はＧＨＱに抵抗した剛直の自由人石橋湛山は、昭和三十一年ついに総理大臣となったが、わずかに一カ月後の三十二年一月二十五日、朝ヒゲを剃っていて、突如めまいと右腕麻痺、言語障害を起し、左側脳血栓と診断され、在任二カ月、みずから辞表を出して引退した。ときに彼は七十三歳であった。
　しかし彼は、その後意外にも大長命し、戦後最初の日中国交の橋渡しの役割を果たしたが、昭和四十二年ごろから持病の慢性気管支炎（彼はヘビイスモーカーであった）が昂じてしばしば肺炎を起すようになり、昭和四十五年二月から長期にわたり、聖路加病院に入院した。
　そのうち下肢の筋肉が萎縮して、寝たきり老人となり、四十七年夏から落合の自邸に帰ったが、老衰は次第にすすみ、四十八年四月二十五日、しずかに息をひきとった。剖検の結果、右側の脳の梗塞と、肝臓内部に小さなガンが発見された。

堀口大学（一八九二――一九八一）

　詩人堀口大学は、昭和五十五年春、高血圧のために倒れ、一応回復した十月に、

「水に沈んだ月かげです
　つかの間うかぶ魚影です
　言葉の網でおいすがる
　万に一つのチャンスです」

という詩を作り、これを辞世だといい――「むこうへいっても春夫（佐藤）に胸が張れる詩だ」といった。
　しかし十二月にまた倒れ、ついで風邪をこじらせて寝たきりになった。
　昭和五十六年三月十五日、夜からの春一番の風が止んだ昼前、床から妻のマサノに抱き起され、水を一口飲んだとき呼吸がとまった。

「命の果てのその先の
　以遠の旅の行先は
　北か南か地の底か
　はたちの母のふところか」（昭和五十四年『以遠の旅』）

　はたちの母とは、彼が三歳のとき、はたち代で亡くなって、彼が一生星のごとく思慕しつづけた母のことである。

九十歳で死んだ人々

……意味があって、長生きするのではない。
――山田風太郎――

ナイチンゲール（一八二〇――一九一〇）

　クリミヤ戦争に看護婦長として従軍したのをはじめ、赤十字社運動の創造者としてのナイチンゲールは、病者や傷者には慈母のごとく、しかし医務関係者には――看護婦から陸軍大臣にいたるまで――恐怖の魔女であった。
　痩せてごつごつした身体、薄くそげた鼻、癇の強い、ひきしまった唇という、典雅で厳格な容貌に加えて、スウィフトのように凄烈な毒舌と嘲罵の化身であった。彼

女は「足るを知らず怒れる者」という綽名をつけられた。老齢が近づき、病身を口実にサウス街の小さな家にひき籠ってからも、彼女はヨーロッパの慈善事業界の隠然たる女王であった。

そのナイチンゲールが、晩年まるまるとふとり出し、少女たちの感傷的なお世辞に涙をながすようになった。八十七歳のとき、勅命により勲功章がさされたとき、彼女はすでに老耄していて、ベッドの枕に身をもたせかけているだけであったが、「ありがたい……ありがたいことだ」と、つぶやいた。

彼女はさらにそれから三年間生きていて、九十歳で死んだ。

横山大観（一八六八――一九五八）

大正元年の文展を見にいった夏目漱石は、大半の画家の絵を無個性として酷評した中に、大観の「瀟湘八景」を「大観君の八景を見ると、此八景はどうしても明治の画家横山大観に特有な八景であるという感じが出て来る。（中略）君の絵には気の利いた様な間の抜けた様な趣があって、大変に巧みな手際を見せると同時に、変に無粋な無頓着な所も具えている。君の絵に見る脱俗の気は高士禅僧のそれと違って、もっと平民的に呑気なものである」云々と賞揚した。

さすがに漱石で、大観の絵の価値と本質を炯眼にとらえているが、しかし明治から大正初期にかけて――五十歳になんなんとするまで――「無我」「屈原」「流燈」などの名作を描きながら、その画法が朦朧体として世にいれられず、かつまた彼自身、反官在野の叛骨の持主で、惨澹たる貧苦と不遇の中にあった。

が、大正後半にはいって、「游刃有余地」「生々流転」などの傑作を出して、次第になんぴとも無視出来ない巨匠たる地位をかためていった。が、同時に――画家にして作家たる近藤啓太郎はいう。大正十二年、五十五歳のときの「生々流転」を頂点として大観の絵は下降しはじめる、と。

昭和期にはいって、彼の多く描いた富士の絵の大半は愚作であると近藤はいうが、しかし日本画壇の第一人者という世評は確定したかの観があった。そして大観自身も、若き日の叛逆児の面だましいはけし飛んで、帝室技芸員や芸術院会員を嬉々として受け、金モールの大礼服を着て写真をとるありさまになった。

そして、次第に国粋的になってゆく風潮の日本美術界の総帥的存在となり、ために敗戦直後――敗戦の年、彼は七十七になっていた――戦犯に指定されるという風評におびえて、進駐軍の関係将校を料亭に招いて接待するという狼狽ぶりを示した。

晩年の大観は、孫娘たちから見ても、意地わる爺さんであったという。生活費をもらいにゆくと、聞くにたえない厭味をいい、大観夫人がひそかに金をやるのを警戒して、金のはいっている簞笥の前に坐って動かなかったという。

が、彼女たちはまたいう。「寝食を忘れるって言葉があるでしょう。おじいちゃん、その通りだったわ」――絵に対する大観の情熱のことである。

一方で彼は、性格破産者ではあるが彫刻にかけては大才があると彼が認めた佐藤朝山に、ほとんど無際限に金を与えるような行為をやっている。ただのケチンボになったわけではないのである。

昭和期の大観について点のからい近藤も、それでも他の画家とまるで「相撲がちがう」その絵の気韻生動とスケールの大きさには脱帽している。彼は俗と超俗の矛盾した大塊であった。

大観は、昭和三十年春八十七歳のとき、病臥して重態におちいったが、その病床で酒を求め、飲みほすこと一合、以後奇蹟のように快方に向って、その怪物ぶりに医者を驚かせた。彼は平生から「米のエキス」と称して一日一升の酒を欠かさなかったが、そのあとも朝一合、昼晩各二合の酒を主食とし、飯も粥も副食物もほとんどとらずに回復し、三十二年の春には「山川悠遠」、秋には「不二」を描くほどになった。

このころ彼は「わしに酒を飲むな飲むなとうるさくとめた医者たちのほうが、みんな先に死によった」と苦笑していった。

しかしそのあと急性気管支肺炎にかかってふたたび病床につき、翌昭和三十三年二月二十六日午前零時五十一分に永眠した。死後解剖したところ肝臓に何の異常もなく、他の内臓も六十代の若さであったという。（主として近藤啓太郎『大観伝』による）

シュヴァイツァー（一八七五――一九六五）

二十一歳のとき、「三十歳までは学問と芸術のために生きよう。それからは人類に奉仕する生活を送ろう」と決心したアルベルト・シュヴァイツァーは、その決意の通り、すでに哲学者、宗教者、音楽家として名をなした三十歳の

とき医学を学びはじめた。それはアフリカの黒人を救済する目的からであった。
三十六歳で医師の資格をとったシュヴァイツァーは、二年後の一九一三年、アフリカのガボンにある水と原始林につつまれたランバレネに向い、ここに病院をたてた。
以来五十年にわたって彼はここで黒人の治療をつづけ、密林の聖者と呼ばれ、一九五二年七十七歳のときノーベル平和賞を受けた。
一九六五年秋、彼は老衰による脳血行不全のため一週間ほど病床につき、九月四日夜付添いの看護婦がひくオルガンのバッハを聴きながら、午後十一時二十四分静かに息をひきとった。病院の外では、何百人という黒人が暗闇の中に立ちつくして彼のために祈っていた。

山川菊栄（一八九〇——一九八〇）

水戸藩の大儒青山延寿の孫娘に生まれた山川菊栄は、日本ではじめてマルクス主義による婦人解放論を唱えたが、最後まで「武家の娘」であった。
彼女は八十四歳で『覚書―幕末の水戸藩』という名著をあらわした。
晩年の二十三年間同居した親類の岡部雅子は語る。
「……五年前から足腰が動かなくなり、ベッドの上の寝たきり生活になりながら、意気軒昂として英字新聞や資料を夜中まで読みふけり、原稿を書く毎日でした。不自由な身体で、痛みや苦しみもあったはずなのに、およそ周囲にあたりちらして苦しみをまぎらすような人ではありませんでした。『お世話さま』とよく言い、がまん強く、耐えることを知っていた人でした」
二カ月ばかりの入院生活を経て、昭和五十五年十一月二日午前六時十八分、脳梗塞で死去した。あと十八時間で満九十歳になるところであった。

滝井孝作（一八九四——一九八四）

昭和五十九年秋、八十歳の丹羽文雄が、かつて芸術院新会員に、志賀直哉門下の滝井が、身びいきから同じ志賀門下の阿川弘之を選出すべく働きかけ、不愉快であったというエッセーを発表して物議をかもした。
滝井孝作は昭和五十六年、十二指腸潰瘍で入院、その後入退院を繰返し、五十七年からは自宅でも車椅子生活を送っていた。彼は丹羽の右の文章は見なかったろうが、その

直後の五十九年十一月二日、腸重積で入院し、十一月二十一日午前九時四十四分、腎不全のために死去した。
昭和二年に発表した『無限抱擁』で、彼は「ありのままに、一分一厘もウソやイツワリなしにさらけ出した」という文章で、若い妻の死を、
「松子は『アッ』と云うて、瞬間醜い顔になった。（中略）手に応えがなく病人の眼色は消え、口は固く閉じ、歯に衝当る舌の音、咽喉の音……。（中略）唇にわずかに泡が吹出した」
と、描写する。
彼の死を、娘の小町谷新子は記す。
「父は、その時、その時を一生懸命に生きた人だと思う。云ってみれば、御飯を食べるときは、熱心に食べ、お風呂に入るときは、それに集中するといった風に。（中略）鮎釣り、将棋、能見物、どれも趣味などいう、どうでもいいようなものではなかった。仕事だった。全身全霊をつぎ込んだ」
「今度も、亡くなる二日前十一月十九日の明け方危篤状態になった。しかし、父の生きようとする力は、これもはねのけて、再び蘇生した。人工呼吸器もすぐに取りはずされ、自力で呼吸をはじめた。それから二晩、三度目の危機にはとうとう力尽きた。
骨を拾うだんになって、
『のど仏様はとけてしまってありません』
と、火葬場の人はいった」
「父は燃焼しつくしたのだ。一生懸命生きて一生懸命に死んでいった」（小町谷新子『一生の春』）

九十一歳で死んだ人々

留守と言え
ここには誰も居らぬと言え
五億年たったら帰って来る

——高橋新吉——

渋沢栄一（一八四〇——一九三一）

明治から昭和にわたるあいだ、一代にして財閥を作りあげた人物は数々あるが、ただ巨富を築くのみでなく、日本の資本主義の指導者として、またその地位にふさわしく公益福祉の面で心をつくした志の高さにおいて、渋沢は第一等の人物であった。

大正五年、七十六歳のとき渋沢は一切の経済上の要職から去って、以後社会事業に余命を捧げた。

栄一は九十を過ぎてから、さすがに家にひきこもりがちになった。家人が、落語家か義太夫でも呼んだら、といっても、芸人などを呼ぶことは分に過ぎたぜいたくだと考える栄一は、子の秀雄に本を読んでもらった。中里介山の『大菩薩峠』を読んだときには、途中で、自分も知っている近藤勇や土方歳三の想い出話をした。

そういう生活の中でも、昭和五年十二月、風邪で臥床中の栄一のもとへ、社会事業家たち二十人が面会を求め、窮民救護のための尽力を要請すると、栄一は主治医の反対もきかず高熱をおして大蔵大臣のところへ出かけて、救護法の予算化を陳情した。

その翌年から身体不調となり、秋ついに直腸ガンの診断を受けて手術することになった。ただし病名は彼には伏せられた。

入院前夜、大勢の子供たちが集まった自邸で、秀雄が柳家小さんの落語速記「寝床」「船徳」「花色木綿」を読みあげるのを聞いて、快く笑った。

手術の前に、彼は執刀の塩田広重博士に、

「私は関羽みたいな豪傑ではありませんからお手柔かに願いますよ」

と頼んで笑わせた。

手術を受けたのち、彼は「術後肺炎」を起した。ひどい食欲不振におちいり、みなが熱心に食事をすすめると彼は、

「私も食べたいのだが、がまんにものどを通りません。意地を張ってるわけじゃないから、あしからず思って下さいよ」

と、いった。しかし彼は、自分の病名は知らなかったが、もう全快したいという意欲はなかったようで、病気のはじめから終りまで、医者にも家族にも、病名はおろか病状さえまったく尋ねなかった。

彼がこの世を去ったのは昭和六年十一月十一日午前一時五十分であった。「父の死は、息子の私にとって、晴れた地平線に、まんまるい大きな太陽が沈んだように見えた」と息子の秀雄は記す。渋沢秀雄は、「父を尊敬する息子」の稀有な一例である。

——とはいえ、きれいごとばかりで大富豪になれるわけがない。女道楽にかけても渋沢は大変な色豪で、そのためばかりではないが、岩波茂雄に勧められて『渋沢栄一伝』を書いた露伴は、以後渋沢の名が出るたびに不機嫌な顔をした。

西園寺公望（一八四九——一九四〇）

彼は最後の元老で、昭和前期、歴代首相の奏薦役であったが、荒れ狂う軍部に対しても、その軍部にひきずられる近衛文麿に対しても、「困ったもんだ。……どこに国を持ってゆくんだか、どうするんだか……」と言い言い、ただ手をつかねていた。傍観するよりほかはない時勢の流れともいえたが、しかし彼自身、みずから身体を張らず、愚痴をこぼしながら傍観している公卿特有の天性をまぬがれなかったのではないか。

昭和十五年十一月十日、皇居前広場では、天皇、文武百官、五万の群衆を集めて紀元二千六百年記念祝典が行われた。その夜、興津の坐漁荘で西園寺は悪寒戦慄、尿の混濁症状を起して病床につき、翌日腎盂炎と診断された。

十八日、秘書の原田熊雄が見舞いにやって来て、近衛が日中事変収拾のため非常な努力を試みていることをいうと、独りごとのように、「蔣介石が、いま何をしたって、日本の言うことなんて聞くもんか」と、つぶやいた。時局に対する西園寺の失望と憂鬱はあまりにも深く、すでに生に対する執着さえまったく失ってしまったように見えた。

二十四日午後九時五十四分、糠雨にけぶる坐漁荘で息をひきとった。彼は自分の後継者としようとした近衛のとりかえしのつかない失敗も、その結果たる太平洋戦争の破滅も知らず、その直前に眼をとじたのである。

「もし日本を滅ぼした政治家の責任を、どこまでも追及してゆくなれば、窮極において西園寺に及ばざるを得ないだろう」

と、政治評論家阿部真之助はいう。

「彼には意志を強行する情熱がなく、決断がなかった。こと行われなければ、シナの被圧迫民衆のようにメーホーズで、溜息一つついて、それでお仕舞いになってしまうのである。彼の口癖にする枯淡の趣味も、事柄によりけりだ。国の生死を一身に担うものが、神仙の如く、ひょうひょう落々としていては、国が滅びる。果して国が滅びたのだ」

ついで阿部は、西園寺が暗殺されるほどの何事もしなかった、といい、

「政治家が最も危険にさらされた時代に、彼が天寿を終って安穏に息を引きとったことの意義は非常に大きい」

と、嘆息する。——実は西園寺も、二・二六事件に見るように革新将校の暗殺の標的になったこともあるのだが、大筋から見ればその通りである。

チャーチル（一八七四——一九六五）

剛毅不屈、ヒトラーとの戦いで一身もって大英帝国を救ったウインストン・チャーチルは、第二次大戦後の世界処理について英、米、ソが議した一九四五年七月から八月にかけてのポツダム会談の第一回会談には意気揚々と出席したが、第二回からはアトリーに代えられている。

冷徹なイギリス国民は、七月上旬の総選挙で、「乱世の雄」チャーチルにひきいられる保守党をしりぞけて、福祉国家をかざす労働党のアトリーを選んだのである。チャーチルはあっけにとられ、「これはわが党の長い歴史の中で蒙った最悪の災厄だ」といった。

その後彼は『第二次大戦回顧録』の執筆に専念したが、首相への復活の執念は捨てず、一九五一年ついに返り咲きを果したが、一九五四年四月、彼が下院で登壇したときのようすを「ニューヨーク・タイムズ」は次のごとく伝えている。

「ウインストン卿はくたびれはてたような、自信なげなようすで姿を現わした。それはもう、一九四〇年の偉大な人物の残骸でしかなかった。答弁にあたってもウインストン

卿はつじつまの合わないことをいっていた」この年チャーチルは八十歳である。

チャーチルは固着妄想のごとく大英帝国をなお夢みたが、テヘラン会談のとき彼自身が歎いたように、「アメリカの大野牛とロシアの大熊のあいだにはさまれた哀れなロバ」イギリスの命運——イギリスがヨーロッパの一国家に過ぎない存在に落されてゆく時代の流れはいかんともしがたかった。それはまた大戦に際し、イギリスを救うためにソヴィエトを援助し、アメリカに援助を求めたチャーチルが、みずから招いた運命でもあった。

そのころ彼は蔵相バトラーにいった。「私はもう飛行の終りに来た飛行機のようなものだ。薄暮の中にガソリンが尽きようとして着陸地を探しているようなものだ」

一九五五年、彼は首相を辞任し、ケント州チャートウェルに隠栖した。

その後も、その宏大な邸宅の上には、チャーチル家の紋章入りの旗を軍艦旗のごとくひるがえし、来客は彼のバラ色の顔を見て驚嘆した。

しかし彼はやがて心臓発作をくりかえすようになり、次第に恍惚状態となり、一日に頭がハッキリしているのは二、三時間というありさまになり、ただ食事時間になると眼に生き生きとした光がもどるようになった。

それでも彼は、一九六三年アメリカから、アメリカ名誉市民権を贈られたとき、彼自身は出席出来なかったが、謝辞の中で「私はイギリスが今や世界のおとなしい役割に追放されたという見解を拒否する」と豪語した。

しかし、かつて自由世界に希望の火をともしたこの燃える光は、こうして深い霧の中をただよいながら、次第に衰弱し、消滅していった。

最後の日も近い誕生日に、彼は娘に述懐した。「私はずいぶんたくさんのことをやって来たが、結局何も達成できなかった」

死去したのは一九六五年一月二十四日午前八時であった。「何もかもウンザリしちゃったよ」というのが最期の言葉であった。

サマセット・モーム（一八七四——一九六五）

『月と六ペンス』『人間の絆』その他の作品が全世界のベストセラーとなったサマセット・モームは、一九五四年、八十歳になっていた。そのころ彼はロンドンである富豪の晩餐会に招待されたが、食卓で偶然、新聞の死亡広告につ

いての会話になった。そのうち一人が、八十歳のモームがいることに気がついて、隣の男にささやき、やがてみながその話をやめたが、二、三分間、話のつぎほを失って当惑する時間が流れた。

「私は自分の死亡広告を読んだことがあるよ」

と、沈黙を破ってモームがいった。そして、ある新聞記者が自分の死亡広告の予定原稿を送って来て、まちがいがあったらチェックしてくれといって来たという話をした。

「だから私はチェックしてやった。翌日それをとりに来た彼にいった。まあ、正確は正確だが、思いやりに欠けるうらみがあるね、と」

しかし彼はそれからなお十年以上も生きた。

モームが生涯その作品で描き出そうとしたのは、精神的に物質的に、あらゆる人間の絆から独立し、独立しようとする人間であった。そして、そのような作品を書いたのは、モーム自身が精神的に物質的に、あらゆる人間の絆から独立しようと望んだ意欲からであった。彼はそれに成功した。

しかし。――

「実に冷酷無惨な皮肉のために、モームは人間感情のいちばん強いものの一つ――出来るだけ生命にしがみついて生きつづけようとする願望――によって裏切られ、それは実に痛ましく、どんなに彼の精神が超然とした自由を持っていなかったかを示すことになった」

と、ロバート・L・コールダーはいい、「生涯の最後の十二年間に、モームは一連の若返り療法を受け、こうした療法は彼の肉体的生命を通常以上のものにしたかも知れないが、彼の最後の五年間がほとんど生きるに値しないものであったことは、疑問の余地がない」と述べたあとで、さらにいう。

「彼が生命を天寿より少なくとも五年間のばしたことはまちがいないが、それは自責と、遠い過去に受けたと思いこんでいる想像上の被害に対して、他人に恨みのこもった復讐をする歳月だった。一九六二年、彼は蒐集した絵をサザビーの店で競売に付し、この売上げの一部を請求して娘が訴訟を起すことになった。その翌年彼はこの娘を廃嫡（はいちゃく）したが、シェイクスピアのリア王のように、彼は自分の富の将来を支配する力さえ失ったのだった」

名声と巨万の富を得、十一人の召使いにかしずかれて南仏リヴィエラの宏壮な邸宅ヴィラ・モーレスクに暮しながら、晩年のモームは絶望と、ほとんど狂気の人であった。

彼の甥のロビン・モームが、「あなたの人生でいちばん幸福な想い出は何ですか」と訊くと、モームはどもりながら答えた。

「そ、そ、そんな思い出はいっときもなかったな」

「私は一生を通じて失敗者だった。間違いにつづく間違いだらけの人生だった」

「一行も書かなければよかったのだ。私を知っただれもかれも、最後には私を憎むようになった。しかし今となっては何もかもあとの祭りだ」

そういうとモームはロビンの手にしがみつき、恐怖にみちた顔で全身ふるえながら、ドアのほうに眼をむけて、

「部屋にはいって来るやつはだれだ？　出てゆけ！　おれはまだ用意が出来ていないんだ。おれはまだ死んじゃいない。死んじゃいないんだぞ」

と、さけんだ。戸口にはだれの姿も見えないのに。

また彼は告白した。「私は四分の一、正常で、四分の三、同性愛者だった。ところが私は全然逆だと思いこもうとした。それが私の最大のまちがいだった」

そして死の直前に、モームはロビンにいった。

「人生というものは、はじめは素敵だが、やがて時間とともにメチャメチャになるパーティのようなものだ。いまはもう家に帰っても少しも残念ではない。でも家に帰ると信じられればいいのだが――帰って懐しい母やあの悪党のジエラルド（彼の同性愛の相手）にもういちど逢えると考えられればいいのだが。しかし、帰れやしない、断じて。――この人生で魂をすっかり失ってしまって、あとには何も残っていないということもあり得るんだ」

こういう状態で、老衰の極、モームは一九六五年――チャーチルの死んだのと同年――十二月十六日午前五時少し前に息をひきとった。

武者小路実篤（むしゃのこうじさねあつ）（一八八五――一九七六）

昭和四十九年、八十九歳の武者小路実篤はPR誌「うえの」七月号に、ゴッホの自画像について次のような文章を書いた。

「彼はその画をかいた時、もう半分気がへんになっていたろうと思う程神経質な顔になっていたように神経質な顔をして、この顔を見ればもう生きていられないような、神経質な顔をしていた。僕はこれでは生きていられないと思った。実に神経質な顔をしていて、もう生きていられない程神経質な顔をしていた」

翌五十年、九十歳の彼は、同じく「うえの」五月号に次のような文章を書いた。

「児島が、電車で死をとげた事を知った時も、僕は気にしながら、つい失礼してしまった。児島にあえば笑ってすませると思ったが、失礼して、今日まですごして来たわけだ。もちろん逢えば笑ってすませることだろうと思う。児島とあえば笑ってすませるのかも知らないが、児島の事を思うとつい笑ってすまない顔をしてしまうかも知れない。児島は逢えば笑ってすませる所と思うが」

また。

「僕は人間に生れ、いろいろの生き方をしたが、皆いろいろの生き方をし、皆てんでんにこの世を生きたものだ。自分がこの世に生きたことは、人によって実にいろいろだが、人間には実にいい人、面白い人、面白くない人がいる。人間にはいろいろの人がいる。その内には実にいい人がいる。立派に生きた人、立派に生きられない人もいた。しかし人間は立派に生きた人もいるが、中々生きられない人もいた。人間は皆、立派に生きられるだけ生きたいものと思う。この世には立派に生きた人、立派に生きられなかった人がいる。皆立派に生きてもらいたい。皆立派に生きて、この世に立派に生きられる人は、立派に生きられるだけ生きてもらいたく思う。皆、人間らしく立派に生きてもらいたい」

脳髄解体。——

正宗白鳥と武者小路実篤は、前者は厭世主義の、後者は楽天主義の、同じレコードを一生まわしつづけた人であった。それでいて双方とも、読む者を飽かしめなかったのは、それがホンモノであったからだ。

が、さしもの楽天主義の歌も、これでは一回転ごとに針がもとにもどるレコードと化した観がある。

昭和五十年暮、夫人がガンで入院した。彼は妻のいない朝食のテーブルで箸を持ったまま、母親を失った子供のように涙ぐんでいた。

翌五十一年一月二十五日、妻の見舞いに病院へ行ったが、そのあと倒れた。脳出血であった。妻は二月にはいって死んだ。

だれもそのことを知らせなかったのに、実篤は以来食事をとらなくなり、ものをいわなくなった。そして四月八日夜、娘二人、孫七人に囲まれてこの世を去った。お釈迦さまに甘茶をかける灌仏会の日。

白井喬二（一八八九——一九八〇）

大正末期「大衆小説」という名称を作り出し、三十五歳から三十八歳にかけて書いた『富士に立つ影』を代表作と

する白井喬二の創作活動は、実質上、彼の生涯のちょうど前半生にあたる昭和十年前後で終った。

戦後、『白井喬二全集』が三十六巻の予定で出版されたが、十六巻で中絶した。

昭和五十五年十一月九日午前十一時五十五分、茨城県竜ヶ崎市で老衰で亡くなった。

長女の横田寿子は語る。「亡くなる五日前まで好きな酒を飲んでいました。大往生でした」

『富士に立つ影』を超える作品はない、と小林信彦はいい、「それからなお、五十二年も生きたという事実は、複雑な感慨を抱かせる」という。

九十二歳で死んだ人々

> わざわいなるかな老いて痴呆と病苦に陥らざる者、彼は死への憧憬を持つ能わざればなり。
>
> ——山田風太郎——

ファーブル（一八二三——一九一五）

貧しい小学教師、中学教師として、彼の長い人生の前半を過したファーブルは、四十八歳のとき、思い切って教師をやめ、オランジューという田舎村のあばら家に籠った。

それは幼年時から一日のきれめもなく彼をとらえてはなさなかった昆虫の研究に専心するためであった。

そして、七八年にセリニアンに移り、一八七九年、五十六歳のとき、やっと『昆虫記』第一巻を生み出した。爾来

この不朽の名著は三十一年間にわたり、十巻まで送り出される。しかし、
「セリニアンでは、村びとたちはファーブルをよく知らなかったし、心の中ではあまり尊敬していなかった。実をいうと、ファーブルは少くとも、たいへんな変人だと思われていた。これは畑のまん中で腹ばいになったり、地面に身をかがめたりして、拡大鏡を振りながら、ハエとか、だれも興味を持たないような下等な生き物を観察しているファーブルの姿を、野原で何度も見たからである」（G・V・ルグロ『ファーブル伝』平岡昇・野沢協訳）

しかし、赤貧洗うがごとく、七十七歳で彼は、生活苦に苦しむ学者を援助する「科学者救済協会」に頼むことを知人に相談している。「救ってもらう権利が、私にも多少あるでしょうか。自分ではあると思っています。今の博物学者の中で、私ほど外国に名前の知られた人間はそうたくさんありません。私は本能の世界に、ほとんどだれも気がつかなかったような新しい鉱脈を開きました。（中略）それなのに、私は、まごまごすると絶望と貧困のうちにのたれ死もしかねないのです。その日その日のパンの心配で悩まされずに、力の残っているかぎり、こういう楽しい研究を続けられたら、どんなにうれしいことでしょう」

『昆虫記』十巻が完成したのは、一九一〇年、八十七歳のときであった。それ以前に死んでいたら、ファーブルはついに貧しいまま、そしてふつうの意味では無名のまま終ったところであった。

しかしこの年、はじめて「ファーブルを励ます会」が作られ、セリニアン村の喫茶店でパーティがひらかれ、出席者たちが、労苦にみちた彼の過去を慰めるスピーチをやるのを聞いて、ファーブルは泣きはじめ、それを見た人々もまたもらい泣きをした。

ロマン・ロランや、ベルクソンや、メーテルリンクや、『シラノ・ド・ヴェルジュラック』を書いたエドモン・ロスタンが『昆虫記』のファンであることが改めて知られ、多くの人々は、はじめてこの野の大学者とその偉業を知った。彼の貧乏が誇張して伝えられ、フランスの隅々から為替が洪水のように殺到するようになった。

無欲なファーブルは、それらの金を一々送り返し、差出人が書いてない金は、セリニアンの貧しい人々に分配した。

しかし、彼の家をのぞきにやって来る見物人には困惑した。あからさまに彼を讃える言葉を聞くと、彼は黙っているか、泣き出すか、そのどちらかだった。人々はそれを見て、ファーブルがぼけていると思った。しかし、黄昏を迎

えて、人生の何もかも知りつくしたファーブルにとっては、もうそんなことはどうでもよかったのだ。

次第に彼は、起きていることもつらくなった。一日の大半を眠ってすごすようになった。尿毒症のためだった。

一九一五年十月七日、四十八時間近く尿がとまってしまい、それから烈しい発作を繰返すようになった。そして、十一日に村の司祭が来て、それまで、無神論者と見えたファーブルに、終油の秘蹟を受ける気があるか、もし受けるなら同意の手を出して下さい、と伝えたとき、瀕死のファーブルは手をさし出して息絶えた。

シベリウス（一八六五——一九五七）

交響詩「フィンランディア」を生んだフィンランドの大作曲家シベリウスは、健康で、最後まで自分のヴァイタリティーを誇っていた。

「私は常に不健康に生きて来た」

と、老いてから彼はいった。彼は一日に何本ものふといハヴァナ葉巻や、最高級の酒を愉しんだ。

「私にタバコや強い酒を禁じた医者たちはみんな先に死んでしまった」と、日本の横山大観のようなことをいって笑い、「八十代になってもこんなに食欲があって、何でも食べたり飲んだりできる男が何人いるかね？」と、いった。

秘書のレヴァスはいう。

「客に向って広間を急ぎ足で通りぬけて来る、背筋がしゃんとして自在に動く上品な紳士が、ほんとに八十歳を越えているのだろうかと客が眼をまるくするのを、彼は明らかに愉しんでいた」

シベリウスはまたいった。

「自然がこんなにも美しいのに、人生に別れを告げるなんて難しいよ」

シベリウスは、生きているうちから、フィンランドの切手の肖像になるほどの名声を得ていた。しかも老いてもこれほど健康で、知力と思考力も生き生きして、決してその名声にただ安住していたわけでもないというが、しかし最後の三十年間は一曲も作品を残していない。

一九五七年九月二十日、遅い目ざめの後、いつもの通りベッドで新聞を読み、午後一時ごろ食卓についているとき、突然彼は倒れた。脳溢血であった。全身の麻痺と言語障害が起っており、四時ごろ意識不明におちいり、九時十五分に息が絶えた。

ライト（一八六七——一九五九）

大正十一年、帝国ホテルが竣工したとき、アメリカ人の設計者フランク・ロイド・ライトは五十五歳であった。彼はいう。

「日本の持つ美的な伝統というものは、世界の中で最も高貴なもののトップにランクされている。私が日本人の建物の設計を依頼されたとき、日本を侮辱しないということが私が本能的に感じたことだったし、また明確な意図であった」

「地震の存在、この第一の問題は、私がこの新しいホテルを計画し、そして完成させるために働いた四年ほどの間、私の頭から離れたことはなかった」

「ああ、あの日本の職人といったら！　何と彼らは頭のよい人たちだったろうか。そして、何という器用で勤勉な人たちだったことだろう。……私は彼らから学び、そして彼らとともに彼らのやり方で、よろこんで仕事をすすめたのであった」

その翌年、関東大震災が東京を襲った。ライトはロサンゼルスにいた。最初の数日は状況がわからなかった。そして、やがてホテルの所有者大倉男爵から電報が来た。

「帝国ホテルは、あなたの才能の記念碑として、無傷で東京に建っています！　オメデトウ！」

しかしこれは、彼の人生の半ばの作品に過ぎなかった。以後もライトは、数々の名建築をアメリカに建てつづけ、最後まで老衰の徴を見せず、彼の代表作であるばかりではなく二十世紀の美術館の代表作といわれるニューヨークのグッゲンハイム美術館が完成したのは、実に彼の死んだ年であった。

ライトはその年、一九五九年四月九日、アリゾナ州のフェニックスで死んだ。

大谷竹次郎（一八七七——一九六九）

以下は、昭和四十六年刊『百人が語る巨人像・大谷竹次郎』による。

「かつてある人が『あなたは、いつごろから興行師を志したのか』と聞いたところ『物心ついたころからです』と答えた」（全興連会長・佐々木進）

「日本の演劇史を顧ると、およそ興行師で終りを全うした人はひとりもいない。大興行師として成功したのは松竹兄弟、大谷さんただ一人」（松竹歌舞伎審議会専門委員・飯塚友一郎）

「大谷さんは、事業家として修羅場で血刀を揮った人にちがいないが、ぼくの知る晩年は円熟した好々爺で、何かいいながらニコリと口もとをほころばせる時に、ふしぎな愛嬌があった」（演劇評論家・戸板康二）

「外に向ってはきわめてよい人で通し、内づらのわるさはきわめてひどく、仏の面をかぶっている鬼のような性格で、好きな芝居道をひたむきに、飽くない利欲と名誉を追求して、恐ろしく長い生命のスタミナに物をいわせて、遂に念願かなって富はもちろん、文化勲章も勲一等の勲章も手中に収めたという、いわば怪物的人物であった、と私は思う」（元松竹参与・肥後博）

「父は九十二歳の天寿を全うして、その生涯の幕を閉じた。『会長はお丈夫でしたね。何か健康法でもあったのですか』と聞かれても、『特になかったようです』と答えるより仕方がない。（中略）

朝はトーストに卵にオートミール、そして抹茶。昼はうなぎか鮨のにぎり。夜はビールの小瓶にブリの照焼、これが晩年の一日のメニューの一例である。眼を細めて、実にうまそうに食べている父を見るのはたのもしい限りであった」（松竹副社長・大谷隆三）

竹次郎は特に鰻と果物を好み、この両者はほとんど毎日食べた。まだ肺ガンの原因などと騒がれない若いころから、煙草はのまなかった。

「全く無趣味、無芸であった父の唯一の趣味であり生きがいであったのは仕事である。そして仕事こそ最高の健康法であった。亡くなる年の夏まで、日に一度は本社に出て執務し時間が来ると歌舞伎座へ行き、監事室から『ダメ』を出していた」（大谷隆三）

昭和四十四年九月、松竹映画「男はつらいよ」シリーズ第一作がヒットして彼はよろこんだ。それから三カ月後、

「十二月二十七日、死の予告らしい変動を家族に見せず、死の前日まで舞台に注文を出して、老来元気な大谷さんが、うそのように死んでいった」（松竹顧問・香取伝）

「父の最後は安らかであった。近親の者に見守られながらの大往生であった。私は父が最後の息を引きとったとき、涙が出なかった。ただ、偉大な何かが終ったのだ、ということが心の中に在っただけであった」（大谷隆三）

息をひきとったのは、十二月二十七日午前三時二十分、病名は慢性腎臓炎であった。

歌舞伎座一階ロビーに置かれてある二メートル近い大時

計には、次の言葉が書かれてある。
「わが刻はすべて演劇　　大谷竹次郎」

ピカソ（一八八一――一九七三）

性の世界でも超人的であったパブロ・ピカソは、八十歳で最後の愛人ジャクリーヌと結婚した。それ以後は、さすがに巨人の彼も、あまり人に会わない半隠遁的な生活を送るようになった。しかし絵の創作力はなお旺盛であった。

一九七三年四月七日の午後、彼は、南仏のカンヌに近い、敷地十四ヘクタールに及ぶムージャンのノートル・ダム・ド・ヴィの古城の庭に出て、日光浴をしながら庭師と雑談をかわすほど元気であった。その夜もアトリエにはいってひとりで仕事をした。

彼はこの城をふくめて三つの古城の持主であった。

八日の午前十一時半、ジャクリーヌ夫人はベッドで苦しんでいるピカソを発見した。十分後にかかりつけの医者が呼ばれたが、ピカソはすでに死亡していた。死因は急性肺水腫による窒息であった。ベッドのまわりにはクレヨンが散乱していたという。

死後、三つの城には、彼自身の絵、彫刻、陶芸品など三万九千点の作品が遺された。

厖大な遺品と遺産を相続したジャクリーヌ未亡人は、十三年後の一九八六年十月、ムージャンの城で謎のピストル自殺をとげた。

リーチ（一八八七――一九七九）

明治末来朝、志賀直哉、柳宗悦ら白樺派の芸術家たちと親交を結び、日本のやきものを学び、大正九年イギリスに帰って以来、イングランド西端の、灰白色の岩肌を大西洋の荒波がかみ、鴎と海猫が舞うセントアイブスに登り窯をひらいて無数の傑作を生み出した陶芸家バーナード・リーチは、晩年失明し、棟割長屋ともいうべき質素な家にひっそりと暮していたが、一九七八年一月、親友の浜田庄司死去の報を聞いてからめっきり衰え、三月に毎日新聞記者土屋省三が訪れると、土産の海苔巻きの餅を手さぐりで食べて、「うまいなあ、日本の味だ」とよろこんだ。また、百六歳でまだ生きている日本の彫刻家平櫛田中の消息を聞いて、「私はデンチューサンより長生き出来るかなあ」といった。そして昔の日本を懐しがり、噂に聞くいまの日本を歎いた。

翌年五月六日、老衰で静かに息をひきとった。

大内兵衛（一八八八――一九八〇）

太平洋戦争後、社会党の理論的バックボーン、美濃部都政の生みの親といわれた大内兵衛は、昭和四十九年八十六歳のとき妻を失ってからめっきり弱り、身体はともかく意思の表現がうまく口に出せなくなって、人に会うのもいやがるようになった。

昭和五十四年初夏から、老衰のため鎌倉の病院に入院したが、肺炎をひき起し、五十五年五月一日午後十一時三十五分、眠るようにこの世を去った。

九十三歳で死んだ人々（欠）

老衰といふ死に方や冬の蠅
――富安風生――

九十四歳で死んだ人々

> 残り少ない余命の死が、残り多い余命の死と、苦痛において同量だとは。
> ——山田風太郎——

バーナード・ショウ（一八五六——一九五〇）

一九四三年に妻が死んで、まもなく彼が九十歳になろうというとき、アメリカ女優パトリック・ケンベルが結婚を申しこみ、「あなたの立派な脳髄と私の美しい肉体が結ばれれば、どんなに優秀な子供が生まれるでしょう」といったのに対し、ショウが「私の貧弱な肉体とあなたの鈍感な脳髄が結ばれたら、どんなことになると思うかね」と答えたというお話がある。

ショウは大変なカンシャク持ちで、彼の命を縮めたのはカンシャクのせいであるといわれる。すなわち晩年クロッケーで遊んでいるうち、ささいなミスに腹をたててボールを蹴飛ばしたとたんに転倒して腰を打ち、それが病気のはじまりであったという。

病床についたのは九十四歳で、ロンドン北郊のマヨット・セントローレンスの自宅で、看護婦に、「お前さんは私のいのちをまるで古いコットウ品のようにもたせようとしているが、私はもうだめだ。おしまいだよ、私は死ぬんだ」といい、それが最後の言葉だった。

十一月一日から昏睡におちいり、二日午前四時五十九分に死んだ。

イギリス政府は彼を国葬にしようとしたが、書斎から遺書が出て来て、それに「自分の骨は妻の骨といっしょに粉にして、かきまぜて、庭一面に吹き飛ばしてくれ」とあったので、国葬の件も吹き飛ばされてしまった。

徳富蘇峰（一八六三——一九五七）

明治十九年、熊本から上京し、二十三歳で平民主義を鼓吹する『将来之日本』をひっさげてジャーナリズムに登場

した蘇峰は、その後三国干渉による衝撃から、一転して大軍国主義者に変り、一部から変節者のレッテルを貼られた。

しかし蘇峰の歩みは、明治から昭和に至る日本の歩みと、完全に方向を共にした。よかれあしかれ、この三代を一人にして代表する日本人をあげるとすれば、彼こそ最適の第一人者に相違ない。

蘇峰は日本の言論界の帝王たる地位を占める一方、大正七年、五十五歳からライフワーク『近世日本国民史』を書きはじめた。その目的は「明治天皇御宇史」を書くことにあり、その前提として織田氏時代から起稿したのだが、二十七年の星霜を経て、第九十七巻「西南戦争・熊本城攻守篇」半ばにして、昭和二十年八月十五日を迎えるに至った。

彼はその中に書きいれた。「昭和二十年八月十五日は、実に我が皇国に取りて、永久に記念すべき悪日である」

このとき蘇峰は八十二歳であったが、前年、それまでの十八年間秘書として勤めた八重樫祈美子の死の前、病床の彼女に、八十一歳の彼が、五カ月の間に百三十通にのぼる少年のようなラヴレターを送ったほどの若い血を持っていた。

日本の降伏調印の日、彼は「百敗院泡沫頑蘇居士」とみずから戒名をつけた。翌年の新年、彼は歌を作った。「おれの恋人誰かと思う。神の作った日本国」

その大日本帝国は崩壊した。蘇峰は「戦犯」に指定され、やがてそれは解かれたが、追放令はまぬがれなかった。

昭和二十三年には、彼との間に四男六女を生んだ静子夫人を失った。彼はまた、生きているうちに、その四男のすべてと一女の死を見なければならなかった。

日本の敗戦は、明治以来の彼の全人生の崩壊ともいうべき事態で、さすがの彼も国民史をつづける気力を失い、おまけに——おそらく心理的苦悩から発したと思われる——激烈な三叉神経痛に苦しんだが、昭和二十六年十一月に至り、ふたたび以前と同じ時計の針のような正確な日課通り、国民史の続稿を開始した。

同じ昭和二十六年、小学校教師団の「国民史は何を目的として書かれたか」という質問に対し、彼は「日本人の立体的大肖像画を描くつもりであった」と答えた。これは彼らしい老獪な答えであったが、しかし必ずしも逃口上でもなかったと思われる。彼の国民史は、歴史の中のおびただしい原告、被告の言い分を意外に客観的に採用した堂々たる史書だからである。

しかし、昭和二十七年に蘇峰はまだ生きているのに正宗白鳥はいった。

「時勢の激しい変遷によって、当年の先覚者の色が褪せて、世に忘れられるのは有り勝ちの事であるが、忘れられながら、ふと思い出されて、『ああ、あの人はまだ生きているのか』と懐しがられる事もあるのだが、蘇峰にはそれがないようである。彼の逞しい活動の、長い一生も影が薄らぐばかりである」

かつては、書くはしから出版された国民史は、戦後、彼が生きているうちは、一冊も刊行されなかった。しかし彼は口述筆記によって筆をすすめた。

昭和二十七年、数えで九十歳になったとき、彼はようやく百巻目を書き終えた。四月二十日であった。しかし、九十九巻目でやっと西南戦争を書き終え、百巻目は、彼みずから「最早一生の幕を閉ずべき時日が、日に相迫りつつある際に於て、せめて曲りなりにも一応の結末をつけたり」と告白したような内容で、それまでの明治史の総まとめに過ぎなかった。「明治天皇御宇史」を書こうという彼の壮大なライフワークは、明治十年まで——すなわち、その四分の一にも足らずして挫折したのである。

しかし、彼は意外に平静であった。おそらく悲憤する気力も失われていたのであろう。

同じ年に、彼は、晩年の秘書の藤谷みさをにいった。

「九十年間生きて来て、たった一つ言えることは、いつ何時でも怖れないで死を迎えられそうな気がして来たことです」

彼はなお五年の余命を持ったが、昭和三十一年春ごろから発熱臥床を繰返すようになり、翌年の十月五日、ついに最後の病床についた。主たる病名は膀胱炎であった。

その二十八日、伊豆の晩晴草堂を見舞った藤谷みさをは記す。

「先生は半分におなりになった！　私は先ず何よりも先にそう感じました。私がお側にいた頃、二十二貫（八十二・五キロ）の偉軀をお持ち遊ばされた先生が、まるで半分にならされて、私ほどもない小さなお身体になっておしまいになりました」

越えて十一月二日、まったく昏睡状態におちいった蘇峰を、「明治節」たる三日まで生きのびさせようとする努力が払われた。病床のそばに、彼の「最後の言葉」を書きとどめようとした紙片が幾枚かあったが、それはどれも、「イタイイタイ」「ユックリサセテクレ」などの文字ばかりであった。

「偉人の最後、万人のものである先生の御生命が、こうして最後の瞬間まで、皆の為に引き延ばされておいでのこと

を、何ともおいたわしい限りに存じました」

と、藤谷みさをはいい、また記す。

「いよいよ御臨終である。手を握りしめている人、足を抱いている人、腰をさすっている人などが、それぞれに巨人の最後の脈搏を護り続けているうちに、一瞬早く先生の生命はとうとう燃え尽きてしまわれたらしい。

幼児の様に開かれた先生の口、医師はもはや瞳孔の開いてしまったことを宣告した。時に午後九時三十分、直接お身体に触れていた人々でさえが、生から死へいつ移行されたか判らない程誠に安らかな大往生であった」

けれど、彼女はまた痛嘆の語を吐く。

「あれ程にも老いの心身を傾け尽くされた先生の魂の結晶が、永久に先生の期待を裏切って、竟によき知己に遭遇し得ない場合を想像することは、余りに悲劇であり過ぎる」

しかし、彼の『近世日本国民史』は、戦後の史家に、それが皇室中心主義者徳富蘇峰の史書であるがゆえに、表面黙殺されつつ、実は大いに利用されているという。何よりもそこには、当時の大蘇峰にしてはじめて使用し得た史料が満載されているからである。

長谷川如是閑（一八七五——一九六九）

青年時代までは病弱でありながら、世人の多忙ぶりを見て、余は「是ノ如ク閑ナリ」ときめこんだ生活が、彼の長命の原因ではなかったか。——

彼は八十歳のとき友人知己からプレゼントされた、箱根の山と伊豆の海を見わたす小田原の八旬荘で、生涯独身の静かな晩年を送っていたが、昭和四十四年十一月四日、腹痛を訴えて小田原市立病院に入院した。

十一月七日、見舞いにいった岩波書店の小林勇は記す。

「……小田原の病院へいって病床の翁の様子をきくと、はじめ八度くらいあった熱が、現在六度五分ということであった。入歯をはずしているので、いささか老婆めいた口つきになっていた。私の行ったことを喜ぶように見えた。そして明日退院する、としっかりした声でいった。翁はすでに数年前から耳が遠くなっているので、普通の声では聞えない。私は翁の耳に口をつけて、そんなことをいってはいけない、といった。翁はそれでも病院はいやだから明日は退院する、と繰返した。そこで私は耳許で大声をあげて、退院するなら歩いて帰れ、と怒鳴った。すると翁は、そん

なことは出来ない、と弱々しくいったので私は、みんなが心配しているのだから無茶なことをいったり我儘なことはしないようにして下さい、早くよくなって帰りましょうね、といった。翁は、うんうん、とうなずいたので、握手をしよう、というと手を出した。その握力は非常に強いので、私は安心して、喜んだ」

「……翁は甚だ我儘な患者であった。たとえば、若い医師が冷たい手で脈をみると叱ったり、注射をすると痛いといっておこったりする。ひどい便秘であるから、浣腸してもうまくいかない。小用は一々ベッドから下りてやる。そのことでどんなに治療にさしつかえるか、と話しても、私は長年こうして来たのだからといって、改めようとしない。病院の関係者たちはこの点について非常に苦しんでいた。また食欲がまったくないので、点滴で栄養を補給する以外に方法がない。一五〇〇ccが適量であるのに、翁は五〇〇ccも入らないうちに癇癪をおこしてやめさせてしまうという我儘ぶりだった。白血球は最高三万を越えるという状態のときがあった。もちろん体内のどこかに炎症があるのであろう。その炎症は盲腸の近辺と医師団は考えていた」

「……その間にもいくたびか危機が来たと医師団から判断された。しかし九十三年を生きのびた翁の生命力は強靱であった。意識はもちろん明瞭であり我儘もいぜんとして改まらない」

十一月十一日が来た。

「……その日午前十時ごろから翁の生命は徐々に終焉に近づいていった。院長はじめ全医師団、そして私たちが見守っている中で、呼吸は次第に静かになっていった。そして、十一時十七分、如是閑長谷川万次郎翁は、九十三年十一カ月十一日の生涯を閉じた。

私は多くの長寿者の死を見た人間である。しかし、如是閑翁のような静かな死の姿を見たことはかつてなかった」

（小林勇『追憶・終焉記』）

荒畑寒村（一八八七――一九八一）

「孤高とはかくのごときか雲の峰」と弟子から寄せられた句に、晩年の寒村は答えた。「雲の峰雷雨とならで崩れけり」

明治、大正、昭和をつらぬいた熱血清冽の社会主義者荒畑寒村は、若いころ患った結核で右肺はつぶれ、胃も半分切除し、左眼も白内障で見えなくなり、さらに昭和四十三年以来、慢性肺気腫を病んでいたが、その身体で、昭和

五十三年九十一歳のとき、はじめてアイガー、ユングフラウ、モンブランを訪れて、

「名にしおうユングフラウの立姿わが初恋の女に似たりし」

と、歌った。彼の胸には、かつて二十三歳のときに恋した女性社会主義者管野すがの姿が浮かんだのであろうか。

明治四十一年のいわゆる「赤旗事件」で、その六月から四十三年二月まで獄につながれた若き寒村は、入獄中恋人の管野すがが師の幸徳秋水と通じていたことを知って狂憤し、四十三年五月、秋水とすがが滞在している湯河原の天野屋旅館へピストルをいだいて乗りこんだが、二人は偶然その数日前に東京へ去ったあとであった。

そして、その直後、秋水とすがは検挙された。右の「赤旗事件」に悲憤したすがらが企てたいわゆる「大逆事件」の発覚によるものであった。

寒村が入獄していなかったら、当然寒村も連坐して死刑の列に加わったところだが、彼は入獄のためあやうくまぬがれ、それから実に七十年を越える生命を享受することが出来たのである。

その寒村も、昭和五十五年十一月には入院のやむなきに至り、翌年の三月二日午後、痰がのどにつまり、気管支の切開手術を受けた。手術前に彼は、「枯れるように死にたいと思っていたのに、こんな目にあうとはなあ」といった。

三月三日夜、作家の瀬戸内寂聴は寒村を見舞った。

「入れ歯を外し、口をあけたまま、咽喉に穴をあけられ、そこから一時間か二時間ごとに痰をとられている翁の姿は正視にたえなかった。お元気な頃の翁は、非常におしゃれで、いつも身ぎれいにされていて、為子さん（姪）の面倒の見方がこまやかなせいもあって、一分のすきもないすてきな方であった。革命家とか、闘士とかのイメージには遠いシックな方であった。それだけに私は最後に翁のその悲しい姿を見るのは辛くてたまらなかった。（中略）

なぜ九十三歳まで生きた人が、こんな苦しみをして死ななければならないのかと、何に対してか憤りのようなものがつきあげるのをどうしようもなかった。ベッドのふちで私は心に心経をあげひそかに祈りつづけていた。京都を発つ時、私が着くまで生きていて下さいと、持仏堂で祈ったと同じ必死さで祈っていた。

『どうかもう安らかにしてあげて下さい』

私はそう祈らずにはいられなかった。それほどその夜の翁は苦しまれた。胸をなでた時、固い大きなものがごつごつ掌にふれるので愕いて何か胸に治療器でも入れている

のかと付添いさんに訊いたら、
『先生の肋骨です』
と、いわれた時は、恐ろしくなった。
　翁の意識がはっきりして、何もかもわかっていられたのはこの夜が最後ではなかっただろうか。（中略）その夜あけ方には、本当に怒りにみちた強い勢いではげしく手を動かし、人工呼吸の装置をはね飛ばそうとするような態度をくりかえし示され、私たちは腕を押えつけなければならなかった」
（瀬戸内寂聴「三月三日の夜の寒村翁」）

　ああ寒村は、七十年前の恋人管野すがが刑場でなめたのと同じ苦しみを病院で経験しなければならなかったのである。そして、通常死のすべての人間が同じことなのだ。

　以来彼は鼻管によって流動食をそそぎこまれていたが、三月六日午後八時半ごろ、急に呼吸が乱れ、チアノーゼを呈し、九時五分に息をひきとった。

九十五歳で死んだ人々

人間の死ぬ記録を
寝ころんで読む人間
——山田風太郎——

尾崎咢堂（一八五九——一九五四）

　明治以来自由民権運動の陣頭に立ち、太平洋戦争中、反東条演説を行った際、「売家と唐様で書く三代目」とやって不敬罪に問われ、一日だけだが巣鴨刑務所にいれられた咢堂は、敗戦後の昭和二十年十二月二十九日、宮中に召されて天皇に会い、「けふは御所きのふは獄屋あすはまた地獄極楽いづちゆくらん」と歌で皮肉ってみせたが、天皇はキョトンとして意味が通じないようであった。

　終戦後、打って変って咢堂は「憲政の神様」に祭りあげられたが、しかしすでに政治家の残骸になっていた。

　昭和二十九年十月六日午後九時二十二分、彼が逗子の披露山の自邸で死んだときは、眼は白内障で、脳水腫で、両肺は結核で、心臓は硬化肥大し、脾臓肝臓はきわめて萎縮し、胆石症で、直腸ガンで膀胱ガンというありさまであった。

　人間の肉体もここまで使いつくされれば遺憾はあるまい。

牧野富太郎（一八六二——一九五七）

　寺子屋で学んだだけの学歴で、東大教授らの忌避を受けつつ、日本最初の植物分類学者となり、自著『牧野日本植物図鑑』に「警告」と題し、
「著者ノ応諾ヲ経ズシテ本書ノ図ヲ縦マニ使用スルヲ許サヌ。従来無断デ我ガ図ヲ剽窃シ或ハ変造シテ自分ノ著書ニ濫用セシ不徳破廉恥ノ無学漢ガアッテ其書ガ世間ニ流布シテイル、今後我ガ此書ニ対シ此ノ如キ不正行為ヲ敢テ為ル者アラバ乃チ寛仮スル所ナク直チニ其姓名ヲ世間ニ公表シ、或ハ適宜ノ処置ヲ執ル事アルベキヲ茲ニ予告シ置ク」
と書いたほど気力旺盛な牧野富太郎は、昭和二十四年、八十七歳のとき大腸カタルでついに死水をとる段となったが、その死水で息を吹きかえしたほど生命力も旺盛であった。そして昭和三十一年七月、九十四歳のときも腸炎で重態におちいったが、またも持ち直した。

　元来彼は、精力絶倫で、ビール瓶のごとき大男根の持主でもあった。

　しかしその彼も、三十一年の十一月ごろから完全に食欲を失い、ブドウ糖の注射でわずかに生きながらえる状態になり、十二月にはいると肺気腫を起した。

　年を越えて昭和三十二年早々、天皇から見舞いのアイスクリームがとどけられた。かつて何度か植物学講義のため宮中に召されたことがあり、そのとき感激と昂奮のため、帰宅すると発熱状態におちいったこともある牧野は、からだを起せと手ぶりで示し、両手を合わせてアイスクリームをふしおがみ、小さじに一、二杯だけ食べた。

　一月十七日の朝から呼吸が乱れはじめ、手頸の脈搏がなくなり、五人の医師団の必死の手当もついにむなしく、十八日の早朝絶命した。臨終が告げられた直後、その頬に涙がポロポロ三粒こぼれた。呼吸が停止してからなお十分間、心臓が動いていた。

アギナルド（一八六九――一九六四）

一八九八年（明治三十一年）アメリカはスペインを破ってフィリピンを占領した。それ以前スペインに対して独立戦争を起していたエミリオ・アギナルドは、アメリカ軍に協力して起ったが、そのアメリカがフィリピンにとって第二の征服者に過ぎないことを知ると、こんどはアメリカに対して抵抗を開始した。しかし、二年間の勇戦ののち、アメリカ軍司令官アーサー・マッカーサーに降伏することを余儀なくされた。

が、アギナルド将軍の勇名は、明治三十九年に刊行された押川春浪の少年武侠小説『新日本島』にも登場する。

四十一年後の一九四二年（昭和十七年）一月、太平洋戦争で日本軍がマニラを占領すると、七十三歳のアギナルドは、こんどは日本軍に協力して、コレヒドール島に逃げこんだダグラス・マッカーサーに対して降伏勧告のラジオ放送をしたりした。ダグラス・マッカーサーはアーサー・マッカーサーの子であった。

やがて日本敗戦後、アギナルドは対日協力者として投獄されたが、その伝説的な名声のために釈放され、一九六四年、故郷のキャピテで死んだ。

ルビンシュタイン（一八八七――一九八二）

ほとんど一世紀を通じて世界的なピアニストとして名高いアルトゥール・ルビンシュタインの生年は、実は一八八五年から一八八九年まで諸説があるが、ここでは通説に従って一八八七年としておく。

彼は幼年時から天才とうたわれ、パリを中心に、有名歌手や女優との恋愛沙汰も、カザノヴァそこのけのはなやかな生涯をすごした。

しかし彼の真の才能は五十歳を越えてから開花したといわれる。

一九六六年、七十九歳のとき来日したが、その前、来日の交渉メモの中に、「ルビンシュタインは高齢なので早く訪日を実現させたい」云々の文句があるのを知り、甚だふきげんになったので、高齢は東洋では尊敬の対象だと陳弁してごきげんをなおした。

一九七七年、九十歳で、イスラエルのテルアビブで演奏したのが人前での最後の演奏となった。

一九八〇年に前立腺の手術を受けてから、スイスのジュネーブの自邸で病床につくことが多くなり、一九八二年十二月十八日から微熱を出し、二十日夕刻、しずかに息をひきとった。

彼は自分を火葬した後、遺灰をエルサレムにあるルビンシュタイン公園にまいてくれと遺言したが、イスラエル政府は、火葬はユダヤの律法にそむくとしてこの申し出をことわった。

女性関係では無軌道ともいえるルビンシュタインを老年に至るまでよく面倒をみて、偉大なピアニストたらしめたのはマニエラ夫人の内助の功によるといわれたが、しかしその死後、「先生は軽い熱を出してから意識が混濁し、翌日眠るように息をひきとられました」と発表したのは、愛人といわれる二十代のイギリス女性であった。

里見弴（一八八八――一九八三）

里見弴は昭和四十九年秋、八十六歳のとき軽い脳血栓を起してから左半身にやや不自由さを残したものの、それでも元気で毎晩八勺の晩酌を欠かしたことはなかった。

九十一歳の誕生日を迎えるに当って、彼は書いた。

「一期の大事と云う、死に対する恐怖の処理……むろん、『処理』なんぞと、鼻元思案で片づきっこはないが、私は至極簡単に、死後のことは、いくら考えたって、ほんとのことはわかりっこない、と諦めているし、このさき、どのくらいか、生きていられるこの世には、いいあんばいに、あっさり見切りがついていて、あんまり苦しみさえしなければ、いつなんどきたりとも、安らかに瞑目できそうだ。……そうだ、で、実際にどうなるか、そこまで責任をとる必要もあるまい」（昭和五十四年七月十四日「毎日新聞」夕刊）

一点の衰えも見せぬみごとな文章である。

また五十五年一月号の「かまくら春秋」には、

「……世のためにも人のためにも、いっこうお役に立っていない。にも係らず、早く死にたい、などとは夢にも思わない。昔風の評価によれば『ごうつくばり』ということになる」

「若くして惜しまれながら逝くのも偶然、私のように『へえ、まだ生きていますか』と呆れられるくらい、はたから無視されようとどうしようと、いつまでも生き延びるのも偶然、と思っている」

と、書いた。

昭和五十七年十月中旬、軽い心臓発作を起して入院したが、十月末には退院して、

「〝ひょっとしたら、里見先生の心臓は二つあるんですかね、こんなに早く良くなるとは誠に不思議〟……と、若いお医者がこう言いやがるんだ。だからね、ボクの心臓は、とうの昔から『善心悪心』って、二つあるのは御存知あるまいな」
と、軽妙な里見節を口にした。『善心悪心』とは彼の短篇の題名である。
しかし翌五十八年正月にはいって風邪をひき鎌倉の病院に入院する羽目になった。
二十日に漫画家の那須良輔が見舞いにゆくと、「もう飽きちゃったよ」といった。
彼の実家有島家には古くから人間の肝を乾かした人丹と称する秘薬があった。翌二十一日夕方、肺炎をひき起して容態が悪化してから、急ぎこれをとりよせてのませたが、効験はなかった。午後七時五十八分、眠るようにしずかに息をひきとった。
葬儀は、遺志により、一切の宗教的儀式はおろか、香華すら廃された。

九十六歳で死んだ人々

> 別れの日。
> 行く人「やれやれ」
> 送る人「やれやれ」
> ——山田風太郎——

ヘボン（一八一五——一九一一）

ペンシルヴァニア大学医学部で学び、ニューヨークで開業し、眼科医として盛名を得たドクトル・ヘボン、正しくはジェームス・カーチス＝ヘップバーンは、一八五九年（安政六年）四十四歳のとき、クララ夫人とともに日本にやって来て、横浜で施療所をひらいた。当時日本はまだ異人には生命の保証もおぼつかない物騒な時代であった。
ヘボンの目的は日本にキリストの福音を伝えるためで、それは彼の若いときからの願望であり、施療はその目的のための手段ですべて無料であった。彼はニューヨーク時代に蓄積した財産をそれにあてた。
専門は眼科であったが、名医の噂におしかけるあらゆる病気の患者の中には、脱疽に苦しむ名女形三世沢村田之助や、癩を病む高橋お伝の夫などもいた。
ヘボンはまた、聖書を和訳するために岸田吟香の協力を得て和英辞書を作ったが、そのためにいわゆるヘボン式ローマ字を生み出し、また一方彼の塾から発展した明治学院からは、のちに島崎藤村や馬場孤蝶や和田英作を出した。
日本に骨を埋めるつもりであったヘボン博士も、やがて——みずから「今は老年となって覚えが悪くなって、耳が遠くなって目がかすみて、役に立たぬところの者となりました」（送別会における日本語の挨拶）と告げなければならない日が来た。明治二十五年十月のことである。彼は七十七歳になっていた。
アメリカに帰ったヘボンは、ニュージャージー州イースト・オレンジに隠栖したが、九十二歳で妻クララを失って孤独な晩年をすごし、一九一一年九月二十一日午前五時、九十六歳で老衰のため、清冽高潔な生涯をとじた。
時差はあるけれど、明治学院にあったヘボン記念館が、同じ明治四十四年九月二十一日午前五時ごろ、原因不明の出火により炎上して消失した。

御木本幸吉（一八五八——一九五四）

真珠王御木本幸吉の九十二歳を過ぎたころの日常は次のごときものであった。
午前六時ごろ起床、ベッドの中でラジオのニュースその他を聴き（ニュースだけは終日、どの時刻のニュースも熱心に聴いた）七時過ぎに入浴、風呂のふたを持ってボートを漕ぐように湯をかきまわすこと五十回、次に風呂のふちに腰かけて両足で湯をかきまわすこと五十回。
朝食は飯一杯に味噌汁または味噌煮、焼魚もしくは干物、海苔少量、果物。
ついで、新聞を見るか、あるいは読んでもらう。
午前中、部局の主任に指示したり、来客に会ったりする。
昼食はパン、魚または肉のフライ、紅茶かコーヒー、果物。食後、椅子に腰かけたまま十五分間休息。
午後は読書か散歩。
午後五時、夕食。飯、魚、スマシ汁、果物。朝食よりはるかに量少なく。

食後入浴、浴中の運動は朝と同じ。

六時床につき、ラジオの英語講座を聴いたり、考えごとをしたりして、九時半のニュースを聴いてから眠る。

この当時彼は、体重四十二―四十五キロ。血圧は一四〇―一八〇くらいであった。

このころ――昭和二十六年十一月、彼は自分の真珠養殖場に天皇の行幸を迎えた。彼は羽織袴に白緒のわら草履、黒マントに山高帽子という姿で、貞明皇后から拝領した杖をついて桟橋に十五分間も立ってお待ちし、天皇が船から上られると、前もって「本日は巡幸を拝しまして……」にはじまる言葉を用意し、練習していたのだが、それをみんな忘れてしまい、

「よく来て下さいました。ありがとう、ありがとう」

と、いった。また明治天皇のことを話すのに、「あなたのおじいさんは」と、いった。

その真珠王も、死の二年前から、看護婦や女中の眼を盗んで、椅子の上に立って座敷の額の裏に小金をかくすといったようなふるまいを見せはじめた。

昭和二十九年ごろから、めっきり老衰の色を濃くした。彼は志摩の多徳養殖場を見下ろす山上に、右の天皇行幸の際御座所として建てた「真珠閣」という建物を移して住んでいたが、九月にはいると、数年前一度わずらった胆石の発作がまた起るようになり、顔面も黄色くなった。

それでも二十一日の午前は日課通り散歩したが、その足もとがいかにもおぼつかないので、孫の美隆と看護婦がそれを支えようとすると、その手をふりはらい、よけいなことはするな、というようににらみつけた。

その散歩から帰ると、彼は真珠閣のベッドに横たわった。午後になると、突然彼は、

「女が首につけるのは何や、あれはネックレスといったかな」

と、訊いた。

「ネックレスでございます」

と、看護婦が答えた。

「そのうしろの留金は何というんや」

「それはクラスプです」

美隆はめんくらって口を出した。

「お祖父さま、こんなときにどうして英語の勉強などお始めになるのですか」

「こんなとき、じいっと我慢してると、苦しゅうてかなわん。何かせにゃいかん。それで英語の勉強をしてるんや」

と、幸吉は答えた。

そして、その日の午後五時二十分、眠るように息をひきとった。

鈴木大拙（一八七〇――一九六六）

ドイツの哲学者シュプランゲルに、「いま世界に聖者が二人いる。アルベルト・シュヴァイツァーとダイセツ・スズキだ」といわせた鈴木大拙は、昭和四十一年七月十日、鎌倉の松ヶ岡文庫で、弟子の秋月竜珉に、明後日から例年のように軽井沢へゆくと話し、そこでの仕事の予定を元気よくしゃべり、「しばらく君ともお別れだな」といった。

彼は九十歳のときはじめて人間ドックに入り、動脈硬化性高血圧、白内障、難聴などが発見されたが、この日まで、一日四時間の執筆――ときには仰向けのまま――を欠かさなかった。

が、その翌朝からはげしい腹痛を訴え、嘔吐が反覆し、「痛い、痛い、この痛いのがかなわん！」とさけびながら、救急車で東京の聖路加病院に運ばれたが、交通渋滞のため三時間もかかった。病名は絞扼性腸閉塞であった。

十二日午前五時過ぎに息をひきとった。最後の言葉は、秘書の岡村美穂子が “Would you like something Sensei?” といったのに対し “No, nothing. Thank you.” であった。

松永安左衛門（一八七五――一九七一）

若き日、人生は大学卒の免状で勝負するものではない、として、福沢諭吉がまだ在世中の慶応義塾を飛び出し、波瀾万丈、幾変転の実業生活ののち、次第に電力業界の大立者となる一方、「耳庵」と称する大茶人ともなった松永安左衛門は、戦後、老軀をひっさげて、日本の電力再興のために、九電力分割体制、電気料金値上げの政策を、天下を敵として強引におし通し、「電力の鬼」と呼ばれた。

昭和四十年、なお電源開発のために奔走する九十歳の松永の風貌を、大宅壮一は次のように描写する。

「まず眼につくのは、そのりっぱな耳である。長く、そして広い。それが真横に張り出しているから、いっそう大きく見える。瞼にかぶさる白く長い眉毛、笑うと深いシワの中に細く隠れてしまう眼、髪ももちろんまっ白、が、短く刈りあげたそのラインは意外に若い。イヤホーンのコードを指先にまきつけてはほぐす。年を経た大木を思わせるような手である」

彼はこの年の正月、一句を作った。「初夢や若き娘に抱

きつけり」

そして大宅に、女性との最後は七十七、八であったと告白し、こんなことをいった。

「このごろ、よく若いときの夢を見ますね。夢の中じゃ、完全なことができます。若いときだと、そういうときは夢精が起るでしょう。もう、それはありませんがね。しかし、実弾を撃った感じはする。……こんなことをいうと怒られるけれど、私は女は性器だという観念が非常に強いですね。女性を見ているうちに、この人のはどんなだろうな、という考えがずっと発展してゆく。……」

そして、「ふり返って見て、九十年というと長いですか、短いですか」という大宅の問いに、

「長いですねえ。もうこれ以上生きたって馬鹿らしいという気がせんでもない」

と、答える。

しかし彼はなお電力業界の大ボスとして東奔西走の活動をやめなかった。また、ただの実業人でない証拠に、自分が傾倒するトインビーの『歴史の研究』の邦訳二十四巻を世に送り出した。

四十三年二月一日、九十三歳の安左衛門は、小田原の邸内を散歩中、立小便をしているところを愛犬に飛びかかられ、ころんだはずみに左大腿骨を骨折して入院したが、病院で鋼線吊引(ちょういん)の治療中、いちど大声で「痛い!」とさけんだだけで、あとは弱音をあげず、その後は汗をながしながし松葉杖による歩行訓練で回復した。「このことがなければ、まだ三年は寿命がのびたはず」と側近者はいう。

昭和四十六年四月十五日、夕食は元気にとったが、夜半急に苦痛を訴え、未明に慶応病院に入院した。

入院後も、自分の関係する仕事の報告をきいたり決裁をしたりしていたが、六月十五日未明から呼吸に異常を呈し、十六日午前四時二十六分、灯の消えるようにこの世を去った。病名はアスペルギルス病といい、コウジカビの一種の菌が、皮膚、耳、眼、鼻、肺などに炎症性、肉芽腫性の病巣を作るという奇病であった。

人間も身体にカビがはえるほど生きればいいということはない。

彼は、昭和三十三年愛妻が死去したときも葬式を出さなかったが、自分の死に際しても、無葬式、無戒名、無叙勲の遺言を残し、その通りにはからわれた。

九十七歳で死んだ人

> 老いて世から亡霊的存在と見られるようになったとき、その人間からは現世もまた亡霊的世界に見える。
> ——山田風太郎——

熊谷守一(くまがいもりかず)(一八八〇——一九七七)

洋画家熊谷守一は、昭和四十一年文化勲章授与の内示があったとき「わたしゃお国から勲章をもらうようなことは何もしていない」と答えてことわった。

昭和四十九年、九十四歳のとき、「アサヒグラフ」で語る。

「足が悪いから一日座っているけれども、石ころひとつでも遊べる。長生きすることはいいことだと思うけれど、結局、なんにもしないできた見本みたいなもんじゃないですか」

九十五歳を迎える昭和五十年の「文藝春秋」一月号で彼はこんなことを語っている。

「このごろは、朝早くから目が覚めて、床の中で雨戸の隙間がだんだん明るくなってくるのを待っています。目が覚めただけでも息が切れる感じです。枕元の懐中時計の捻子(ねじ)はわたしが巻くんですが、これも巻こうと思うと息が切れる。(中略)このごろは大分目方が減って、手なんか見ると、これまでは縦(たて)だけだった皺(しわ)が横にもついてね、年とった体になったなと思いました。風呂にはいると、骨は大きいのに皺がよってるから、丁度(ちょうど)テレビで見たインドの栄養失調の子供みたいです。あれはひどいですね。

こうして正月を迎えてみると、生きていたいと思いますね。わたしってしみったれですから幾つになっても命は惜しいです。命が惜しくなかったら見事だけれど、残念だが惜しい。長く生きていたいです。どういうわけなんですかね。生きていたってたいしたこと無いでしょう。ここに坐ってこうしているだけなんだから」

昭和五十二年六月ごろから老衰のため寝たきりになり、床の中で述懐した。「毎日毎日、病気のことしか考えられ

ないなんて、こんな馬鹿なことがあるか」

そのとき四十七歳の娘榧は、父と「モリ」「カヤ」と呼び合う友人同士のような仲であったが、最後の十日間、酸素吸入器と点滴を受けて昏睡している父を看病しながら、その最後の姿を刻々スケッチブックに描きつづけた。

「八月一日、一瞬モリは顔をゆがめた。意識がないのに苦しかったのかしら。腕時計を見ると四時三十五分だった。酸素をとめ、点滴を閉じる。一回息が止って死のリハーサルをしたせいか、涙も涸れた。スケッチブックをひろげてモリの顔をスケッチする。

人間は誰でもいずれ間違いなく死ぬ。モリはいつかいっていた。『おれが死んでもめそめそするな』」（熊谷榧『熊谷守一最後の十日間』より）

最後には肺炎をひき起していたが、自然死にちかい往生であった。

九十八歳で死んだ人

> 生者は死者の為に煩わさるべからず。
> ——梅原竜三郎——

梅原竜三郎（一八八八——一九八六）

梅原竜三郎は昭和三十八年、七十五歳のころ「もうせいぜい三、四年のいのちだし、人の知らないところでそっと消えてゆきたいんだ。お葬式に悲しそうな顔をして人が来てくれても、別にどういうこともないしね」と、いった。

翌年には、朱を入れた自分の墓を作り、「死んでからずっとあとになって、ああ、あれは去年亡くなりました、という風にしたいもんだね」といった。

自分の死についての彼の消極的な哲学は、最後まで一貫している。ところが一方で、彼は生きている現在の人生には極めて積極的であった。彼は三カ条の健康法を守った。

一、寝酒を少量飲んでなるべく熟睡を計る事。

二、日がながくなれば午睡する事。

三、腹のへるのを待って九分目に食う事。

八分目ではないところがグルマン梅原らしい。昭和五十二年、八十九歳のとき彼は「朝日新聞」のインタビューで答えている。

「食事は、朝はまあトーストにキャビアだ。昼は牛乳を主としたスープにバターを入れ、塩と胡椒をふりかけたもの。夕飯はウナギの蒲焼に中華料理を三日に一度。……」

朝からストレートのスコッチ・ウイスキーを飲み、ビフテキと鰻を好み、怖ろしいヘビイスモーカーである美食生活は晩年まで変らなかった。

同じ昭和五十二年に艶子夫人が亡くなったとき、梅原はだれにも知らせず、それでもやって来た弔問客のだれにも会わず、ひとり画室にこもって、妻の「葬壇」の絵を描いていた。

本『図巻』に見るように、一般に画家に長命者が多いように思われる。それはいろいろ理由があるだろうが、中でも職業上、絵を描くという行為が、外部からのストレスを遮断するのに最も容易有効な方法となることが多いせいではあるまいか。——妻の死んだ夜の梅原のこの行為のごとき、その例である。

「いまから三年ほど前、梅原先生が九十四歳の時だったろうか」

と、梅原に愛された女優高峰秀子は書く。

「加賀町のお宅を訪ねてみると、パジャマにガウン姿の梅原先生が、『背中が痛くて、痛くて』と、ソファにひっくり返って唸っている。聞けば、画室で裸のモデルととっ組み合いをしたせいで、ということで、私はビックリした。

『とっ組み合いって、モデルさんと喧嘩でもしたんですか?』

『いやいや、大いに違う。喧嘩どころか仲良くしようと思ったんだ。……でもさ、努力したけどダメだった』

『!?』」

また。

「たぶん、二、三年前の出来事であろう」

と、昭和五十八年に白洲正子は次のような話を書く。

吉井画廊の主人吉井長三がある日、梅原邸へゆくと、梅原が、「今朝起きたら、バラの花がとても美しかった。そ

れで十五号のキャンバスにさらっと描いてみたが、一寸いいのが出来た。絵具がまだぬれているので、そこに裏返しにして立て懸けてあるから、よかったら見給え」と、いった。そこで吉井はあちこち探してみたが、そんな絵はどこにもなかった。

　あとで吉井がこの話を小林秀雄に話すと、小林はいった。

「絵は、実際に描いてなかったって？　だから、何なのだ。勘違いがおかしいか。……お前はな、それは大変なことを聞いてるんだぞ。判るか。梅原さんは行住座臥、描いてるんだ。筆を持たなくたって、描いてるんだ」

　梅原は昭和五十五年ごろ白内障を患い、絵筆を持つことが不可能となっていたのである。同時に、肉体的にも精神的にも、いわゆる恍惚の世界にはいりつつあった。

　この昭和五十八年に、梅原の娘紅良は父の近況を次のように述べる。

　機嫌のいいときはしゃべるけれど、そうでないときは夢うつつの境にいるような表情で、ろくに返事もしない。食事をしている最中にも時たまそんなことがある。それもふつうの老人のいわゆる恍惚状態とはちがって、何かに集中しているように見える。心ここにあらず、といった風に、一点に息を凝らしている感じで、声をかけることも憚られる、と。

　そのころ、梅原は白洲正子に語った。

「わたしはこの頃、寝ていても起きていてもよく夢を見るんだが、夢の中に今まで見たことのないような美しい景色が現われる。美しい色が見える。だからわたしは、もう絵を描くことは要らないんだ」

　また。

「年をとってから、よく死ぬことを考え、どうやってうまく死のうか、と、そればかり考えていたが、近頃は死ぬことも忘れてしまったようだ」

と、いって笑った。その顔は美しい血色をしていた。

　晩年は、転倒と風邪が致命のひきがねになることを怖れてそれだけを特に警戒していたが、やはりひきがねになったのは風邪であった。

　昭和六十年十二月二十五日、風邪による痰をつまらせて呼吸困難に陥り、信濃町の慶応病院に入院した。入院前に、朦朧とした状態で医者に「アトリエに描きかけの絵がある。見て来たまえ」と、いった。むろん、そんなものはなかった。

　以後一進一退、翌昭和六十一年一月十四日から嗜眠状態に陥り、それでもベッドから腕を出して絵を描くしぐさを

した。そのうち狭心症の発作を何度か起すようになり、ついに肺炎となり、一月十五日、「胸が痛みますか」という医者の問いに、「心配ない、心配ない」と答えたのが言葉としては最後のもので、翌十六日午後七時三十二分、看護者によれば「軟着陸」のような感じの大往生をとげた。

　かねてから書いてあった遺書には、

「葬式無用
　弔問供物固辞する事
　生者は死者の為に煩わさるべからず。
　　　　　　　　梅原龍三郎」

と、あった。

九十九歳で死んだ人

> 死者への記憶は、潮がひいて砂に残った小さな水たまりに似ている。やがて、それも干あがる。
>
> ——山田風太郎——

諸橋轍次（一八八三——一九八二）

　たとえば「天」の部だけでもゆうに文庫本一冊分はあるという尨大精緻な『大漢和辞典』を作りあげ、また浩宮をはじめ皇孫たちの名付親の一人となった漢学者諸橋轍次は、若いころから病弱で、四十五歳までに死ぬと思っていた。

　大正十三年四十三歳のとき右の『大漢和辞典』編纂にかかったが、その仕事にはいってからも肺炎、肋膜炎、百日咳などで何度も数カ月病床についていたことがあった。

そのため、少し体調が悪いとすぐに寝る習慣がつき、無理をしないことを金科玉条とするようになった。それが彼の長寿の一因ともなったにちがいない。

しかし眼のほうはどうにもならなかった。二十歳以前から近眼であったが、それに乱視が加わり、月が二十個くらいの花瓶のように見えた。五十歳を過ぎるころから白内障にかかり、特に昭和十五年ごろから辞典の校正に眼を酷使したため、やがて失明同様になってしまった。

さらに、昭和二十年の戦災で組版が焼失したり、四人の助手が過労のために次々と胸を病んでこの世を去るという打撃が相ついで来た。

が、『大漢和辞典』は昭和三十五年ついに最終巻の第十三巻まで刊行し終えた。

昭和五十七年数え年で百歳になったとき、知人に「ぼくはもう毒気が全部無くなって、仙人の境に入ろうとしているんだよ」といった。

その六月、満で九十九歳の誕生日を迎えて、「医者は、内臓はまだ三十代といった。おれはオバケだぞ」と豪語したが、十一月から老衰のため寝たきりになり、十一月末からは昏睡状態に陥り、十二月八日午前九時五分死去した。

（主として紀田順一郎『生涯を賭けた一冊の本』より）

百代で死んだ人々

> 人は、忘れられて死んだほうが幸福である。なぜなら、彼はもう音もなく死んでいるのだから。
>
> ――山田風太郎――

野上弥生子（一八八五――一九八五）百歳

昭和五十九年、数え年で百歳を迎えた野上弥生子の日常を、その子京大教授野上素一はこう書く。

「朝十時ごろ、庭つづきの母の住居へ行くと、必ず朝飯代わりの菓子をつまみ、抹茶を大ぶくの茶碗で飲んでいる。

午前十一時半ごろ母の所へ行くと、一日のノルマである二枚の原稿を書き終えて読み返している最中であった。

正午になると二階から降りてきて、トーストとミルクの

昼飯をすませてから二時間ほど昼寝をする。

午後五時半になると、母は台所へ入って自分で夕飯を作る。

母の執筆のノルマは、一日に原稿用紙二枚というわずかなものであるが、それを死ぬまで続ける決心をしている。だから健康に気を付けて、全精力をそれに集中しようとしている。母のモットーは、一に努力、二に努力、三に努力であると思われる」（要約）

野上弥生子のノルマとしていたのは、昭和四十七年八十七歳のときから書きつづけている長篇小説『森』であった。

彼女は九十六歳のとき白内障にかかったが、手術で片眼だけ視力をとりもどし、それ以外は右のごとく極めて健康であった。

その昭和五十九年五月十日、彼女の数え年百歳を祝うパーティが開かれ、作家たちがユーモアを混えて彼女の長寿と文業を讃えている間、彼女は小さくちぢまった干物のごとく無表情で、ただ不随意筋と化した口辺をパクパク動かして、心の感動を伝えるばかりであった。

しかし彼女はやがて、「ひとのすることを自分もやって見ようかと足を踏み出し、トボトボ歩いているうちにこんなおばあさんになってしまい、途方にくれておりましたのに、世の中を見る眼も時代とともに変り、あれもこれも書きたいと頭に浮かんでくるものがあります。そういう余裕はもうないと思いますのに、こんなお祝いをしていただくと、もう一つ何か書いておかなきゃいけないと思います」と挨拶した。その声は細く澄んで明晰であった。

野上弥生子と同年の明治十八年に生まれた武者小路実篤は、晩年ついに呆けて九十一歳で死んだが、弥生子の脳髄は最後までしゃんとしていた。彼女は翌昭和六十年三月二十九日朝まで、十三年にわたる長篇『森』を執筆し、ようやく最終回について思いをめぐらす段階に至っていた。

その三月二十九日午前九時トイレに立って寝室に戻ったところで突然ころんと倒れた。いちじ意識が混濁しうわごとをもらす状態であったが、午後になってとぎれとぎれに話せるようになった。

が、翌三十日未明、ふたたび意識を失い、血圧が五、六〇に落ち、長男夫妻ら家人に見護られて静かに息をひきとった。病名は一応心不全ということになったが、完全に天寿が尽きたものと見るべきであろう。

満でいえば五月六日の誕生日まで、百歳にあと三十七日であった。

最後の長篇『森』は、おそらくあと数十枚を残して、未

完の作品となったが、一毫の老いも感じさせぬみずみずしさで、その年の文学ベストワンにあげる批評家が少なくなかった。

物集高量（一八七九——一九八五）百六歳

明治十九年から三十年の歳月を費して、日本史及び古典の研究に必要な文献を集大成した『群書索引』『広文庫』という浩瀚な本を著わした物集高見という国文学者がある。その間生活は貧窮をきわめ、債鬼から万巻の書はおろか病臥している蒲団まで差押えを受け、ついには失明してみずから「妖雲惨澹」と表現したような生涯を送った。

彼は「もはやわが家から子々孫々に至るまで学者は出さない」と叫んだが、助手とした一子高量はやはり学者となり、同時にその貧窮をも受けついだ。

彼は昭和二十六年、七十二歳のときから生活保護を受けるようになり、七十八歳のとき妻を失って以来独り暮しとなったが、ただ書物にうずもれる日常は変らなかった。のみならず。——

百歳を越えてから、ようやくその長寿ぶりが人々の口に上るようになり、長寿の秘訣を問われることが多くなったが、それに対して彼は、「正直に生きないこと」とか、「長生きするには恋ってのが一番いいんです。恋をすると身内から熱くコミあげてくるものがあるでしょ、あれがいいんですよ」とか、「夏の夕方、街を若い女性が薄着でぶるんぶるんとお尻をふって歩く。それを唐もろこしを齧りながら眺めているのが長生きのもとです」など、人を喰った答えをした。

昭和六十年三月、板橋の借家で転んで軽い怪我をしてから、都養育院板橋ナーシングホームに入所したが、若い看護婦が通るとベッドから眼で追い、「生物がハッスルするのは恋人が出来たときで、わしももう五十人くらいは……」などといって、人を笑わせた。

しかし九月ごろから衰弱し、十月二十五日午前十一時三十六分、心不全を起して死去した。

天海僧正（一五三六——一六四三）百七歳

天正十七年はじめて家康に謁してから深くその帰依を受け、「黒衣の宰相」など呼ばれる存在となり、また明智光秀の後身ではないかなどいう伝説も生んだ南光坊天海僧正は、寛永二十年五月、日光に上って彼が造営した日光輪王寺の相輪樘落慶法要をとどこおりなく行ったが、七月十四日から、これも彼が作った上野東叡山寛永寺で病に臥すようになった。

将軍家光は深く憂えて三度見舞ったが、天海の病はいよいよ進んだ。天海とならぶもう一人の徳川草創の大功労者、春日の局も同じころ病み、九月十四日、六十四歳で死んだ。

天海は十月二日、時午刻に近づくや、浄水を求めて口を漱ぎ手を洗い、身に新潔の衣裳を着し、上に伝法衣をこうむって端然として威儀をととのえ、念珠を繰って持念看経すること少時。このとき彼は文殊師利菩薩の来迎を感得し、三たび数珠を鳴らして礼拝した。

朗々たる声をはなって高く諸弟子の名を呼び、了って合掌していった。「遷化の後わが恩を報ぜんと欲せば、学道に怠ることなかれ。現在知遇の縁はここに限る。さらに来際を期せん」と、一喝を下して静かに眼を閉じた。

そのあとも半跏趺坐の姿勢は崩れず、莞爾たる顔色は物言うに似たり、とか、この日、江戸の本郷、下谷あたりの住民は東叡山の空に五色の空華の雨ふるのを見たとか、彼の伝記は、宗教者特有の例によっての法螺を述べる。

平櫛田中（一八七二——一九七九）百七歳

彫刻家の平櫛田中は、八十二歳で文化功労者にえらばれたとき、不満そうに「あれはくれんのか」といった。あれとは文化勲章のことである。

九十歳のときその文化勲章をもらったが、「いまごろになって何だ。鏡獅子を作ったときにくれたほうがよかった」といった。鏡獅子とは、制作に二十年を費し、昭和三十三年、彼が八十六歳のときに完成した六代目尾上菊五郎の鏡獅子の像のことである。——この木彫りの鏡獅子はいまも歌舞伎座のロビーに飾られている。

その九十歳のとき、還暦を迎えた弟子に、「君が死んだら、あと困るなあ」と真顔でいった。

彼の日常は、日が暮れるとともに寝、日の昇るとともに起きるという生活で、食べ物は蕎麦と餅を好み、九十歳くらいまではいくらすすめられても自動車に乗らず、どうしても他人の好意を無にすることが出来ないで車に乗らなければならないときでも、その人の姿が見えなくなるとすぐに車から下り、愛用の日和下駄をはいて、少し前かがみの姿勢で足早に歩いた。

百歳になったとき、「九十代の坂を越すのは骨が折れたが、百になれば楽なものだ」といい、「六十、七十は鼻たれ小僧、男盛りは百から百から」という歌を作り、あと三十年作品を作るだけのクスやケヤキの木材を用意してある、と豪語し、また「百になったら税金をまけてくれるかな」と、いった。

しかし昭和五十三年九月に気管支炎を起して入院し、五十四年一月に退院したものの、以後体調を崩して寝たきりになったが、八月ごろまで三度の食事は欠かさなかった。

十二月にはいりみるみる衰弱し、十二月三十日午前一時五十二分、肺炎を起して眠るがごとく死んだ。

最後の作品として地唄舞いの武原はんの像にとりかかっていたが、これは未完成のままで終った。弔問に来て、死顔を見たはんは、「なんと美しいお顔で」と、いった。

大西良慶(おおにしりょうけい)（一八七五―一九八三）百八歳

大正三年から約七十年にわたって京都清水寺(きよみずでら)の住職を務め、わが国最初の五つ子山下兄妹(きょうだい)の名付け親ともなった大西良慶貫主は、百歳を越えても、

「ほっといたって人間いつか死によるんやから、死ぬことなんか考えてないの」

と、いっていた。

昭和五十八年二月十四日までは何の変りもなく、夕食もふつうにとったが、十五日午前四時ごろ、ふとんの中から突然「おうい」と隣室の僧を呼び「電気つけてェ」といった。

その通りにして、身体を起してやると、「アイタ」と一言いったきり息絶えた。脳溢血であった。

泉重千代(いずみしげちよ)（一八六五―一九八六）百二十一歳

慶応元年（一八六五年）六月二十九日生まれと称し、昭和五十四年（一九七九年）百十四歳をもって『ギネス・ブック』に長寿世界一として掲載されるや、泉重千代は一躍大有名人となった。

彼は故郷の鹿児島県、徳之島の伊仙町の名誉町民となり、庭に銅像まで立てられた。

百歳を越えたとき身長一メートル四十三、体重四十三キロ、最低血圧六〇、最高血圧一六〇―一七〇、左眼は角膜(かくまく)混濁(こんだく)のため失明していたが、耳はよく聞えた。

彼は毎日自分を見学に来る客に会うのを唯一の愉しみとし、朝必ず「きょうくるお客さんの電話はないか」とききき、電話があれば必ず「今のは何の電話だ」とききき、客が来ればは黒糖酒（焼酎）をふるまい、客の来ない日はふきげんになった。また庭を散歩しては自分の銅像を仰いで、「いつ見ても、よう似とるのう」と、満悦の態(てい)であった。

「翁が風邪をひいて寝込んだのは十二月四日。その朝も、顔を洗いに外に出た。しかし『頭が痛い』というのでみると熱っぽい。『きょうは顔を洗わず寝なさい』と身の回りの世話をしている順江(よりえ)さんにいわれて、頑固な翁がめずらしく素直に従ったそうだ。以来、寝たきりの生活になってしまったわけだが、ふとんの中で指を折り、『一、二、三……』と数えては、『オレは馬鹿(フリム)じゃない』とみずから納得し、亡くなる直前にも『焼酎おくれ』といつもの重千代翁ぶりを発揮していた。最後は、痰(たん)を詰まらせ、『アッ』と軽く声をあげたきり、眠るような大往生であった」（「週刊文春」昭和六十一年三月六日号）

昭和六十一年二月二十一日午後九時十五分。直接死因は心臓衰弱。

正しくいえば百二十歳八カ月余。

ところで彼の年齢について「週刊読売」は疑義を呈した。

一つは人間の寿命の生物学的限界の見地から発したものであり、一つは彼の戸籍についての疑問から発したものであった。

明治五年戸籍法が実施される以前の自己申告による生年月日はずさんなものが多く、泉家の戸籍にも種々疑問が見られるといい、要するに泉家には先に早く死んだ重千代という実子があり、後に養子に来てその名もついだ重千代がこれと混同されたのではないかというのである。

この論によれば泉重千代は明治十三年（一八八〇年）生まれであり、実際の死亡年齢は十五歳を引いた百六歳ということになる。十五歳サバを読んでいたとすると、マラソンのコースを途中近道して二時間〇分という大記録を樹立したようなもので、あといかなる長寿者が現われても新記録は不可能ということになる。――

人間にも樹木同様、骨にでも年輪が出来れば事態は明白なのだが、遺憾ながら人間の肉体には生存年齢を示すしるしがない。――また何といちゃもんをつけても、銅像まで立てた徳之島の人々は受けつけまい。

まあ、百六歳としても大変なことだ。それにかりにサバを読んでいたとしても、神武天皇数え年百二十七歳の法螺(ほら)には及ばない。

人間臨終図巻 下巻

一九八七年三月三一日 第一刷
一九八八年四月三〇日 第六刷

著　者　山田風太郎
発行者　荒井　修
発行所　徳間書店
東京都港区新橋四—一〇—一
郵便番号一〇五
電話　東京四三三—六二三一（代表）
振替　東京四—四四三九二
印刷所　本文・株式会社清水印刷所
扉　箱貼・真生印刷株式会社
製　函　協栄紙器製本株式会社
製本所　大口製本印刷株式会社
定　価　二四〇〇円

〈編集担当　松岡妙子〉

© Fûtaro Yamada, Printed in Japan. 1987
乱丁・落丁本は本社またはお買求めの
書店にてお取替えいたします。

ISBN4-19-123423-4

人名索引

人名索引

あ

会津八一 197
アインシュタイン 205
アガサ・クリスティ 360
アギナルド 418
葦原将軍 368
アダム・スミス 38
アナトール・フランス 275
阿倍仲麻呂 126
新井白石 56
嵐寛寿郎 229
荒畑寒村 414
アルキメデス 188
アンデルセン 88

い

イーストマン 237
池田勇人 31
池田弥三郎 71
石川達三 288
石坂洋次郎 363
石橋正二郎 371
石橋湛山 390
石原忍 345
泉鏡花 25
泉重千代 434
板垣退助 309
市川団十郎・九代目 7
市川房枝 380
市村羽左衛門・十五世 112
一休 365
伊藤大輔 333
伊藤博文 58
稲垣足穂 226
犬養毅 217
井上馨 274
井上成美 359
伊能忠敬 150
イプセン 234
今村均 315
入江相政 290
岩田専太郎 163
岩波茂雄 11
イングリッド・バーグマン 53
インディラ・ガンジー 54

う

ウールリッチ 15
上田秋成 189
上原専禄 210
ヴェルディ 373
ヴォルテール 335
宇垣一成 376
内田吐夢 139
内田百閒 316
内村鑑三 78
宇野浩二 93

梅原竜三郎 426

え

H・G・ウエルズ 276
エジソン 341
江戸川乱歩 117
エノケン 32
榎本武揚 130
エラリー・クイーン その1 34
エラリー・クイーン その2 231
エンゲルス 192
円地文子 304

お

大内兵衛 409
大岡越前守 169
大川周明 115
大久保彦左衛門 251
大隈重信 338
オーソン・ウエルズ 102
大谷竹次郎 406
大槻文彦 294
大伴家持 55
大西良慶 434
大平正芳 101
大前田の栄五郎 294
大宅壮一 98
大山巌 176
尾形乾山 270
岡本綺堂 44
尾崎咢堂 416
尾崎一雄 348
尾崎士郎 29
大仏次郎 208
小沢治三郎 282
オナシス 83
折口信夫 27

か

カーネギー 338
貝原益軒 335
ガウディ 177
笠置シヅ子 124
カザノヴァ 149
片岡千恵蔵 286
勝海舟 202
葛飾北斎 384
桂太郎 23
桂文楽・八代目 260
加藤唐九郎 372
嘉納治五郎 237
ガリレオ 232
川上貞奴 178
河上肇 46
河口慧海 253
川口松太郎 362
川路聖謨 39
河竹黙阿弥 216
川端康成 161
ガンジー 254
鑑真 188
カント 271

き

菊田一夫 15
北大路魯山人 205
北里柴三郎 252
衣笠貞之助 362
木村荘八 12
木村荘平 22
木村義雄 305
キュリー夫人 43
桐生悠々 62
金田一京助 389

く

久保田万太郎 182
熊谷守一 425
熊沢天皇 241
グリム・兄 234
グリム・弟 151

け

ゲーテ 322
兼好法師 86

こ

小泉信三 239
孔子 126
ゴーリキー 59
幸田露伴 277
河野一郎 50
河本大作 156
古賀政男 185
古今亭志ん生・五代目 331
護持院隆光 189
児島惟謙 108
児玉誉士夫 165
五島慶太 220
後藤新平 132
コナン・ドイル 109
小林一三 344
小林古径 181
小林秀雄 302
コペルニクス 87
ゴヤ 306
小山勝清 80
今東光 262
近藤日出造 124

さ

西園寺公望 397
西行 127
西条八十 242
斎藤茂吉 113
斎藤弥九郎 152
坂田三吉 204
坂本繁二郎 370
桜井忠温 357
佐佐木茂索 138
薩摩次郎八 199
佐藤栄作 184
佐藤紅緑 196
佐藤千夜子 119
サトウハチロー 100
佐藤春夫 136
サド侯爵 171
里見弴 419
佐分利信 164
サマセット・モーム 399
サルトル 200
沢田美喜 264

し

ジイド 312
シーボルト 88
シェーンベルク 219
志賀直哉 376
璽光尊 303
獅子文六 207
十返舎一九 21
幣原喜重郎 254
司馬江漢 105
渋沢栄一 396
シベリウス 405
島崎藤村 111
清水次郎長 154
志村喬 231
子母沢寛 206
釈迦 268
ジャン・ギャバン 144
シュヴァイツァー 393
周恩来 244
シュリーマン 57
蔣介石 379
東海林太郎 183
正力松太郎 348
ショーペンハウエル 129
蜀山人 172
ジョン・ウエイン 145
ジョン・フォード 243
白井喬二 402
白瀬矗 351
新門辰五郎 191
親鸞 381

す

スウィフト 233
スカルノ 82
杉田玄白 337
杉山元 10
鈴木貫太郎 296
鈴木大拙 423
スターリン 179
スプルーアンス 330

せ

世阿弥 269
セザンヌ 43
銭屋五兵衛 251
セルヴァンテス 73
千利休 72
千姫 74

そ

添田唖蟬坊 134

則天武后 292
ソクラテス 85

た

ダーウィン 153
田岡一雄 70
高橋是清 310
高浜虚子 354
高村光太郎 157
高群逸枝 97
滝井孝作 394
滝沢馬琴 293
沢庵 128
武林無想庵 313
武見太郎 266
伊達政宗 74
田中義一 9
田中絹代 66
田中正造 131
谷崎潤一郎 256
谷干城 175
田沼意次 75
田村秋子 248
田村泰次郎 147

ち

近松門左衛門 103
チャーチル 398
チャプリン 380
チャンドラー 115

つ

津田梅子 8
堤康次郎 198
円谷英二 81
壺井栄 51
坪内逍遙 204
ツルゲーネフ 5
鶴屋南北 172

て

ディズニー 13
出口王仁三郎 218
デフォー 104
デュマ 40
寺内寿一 47
天海僧正 432

と

土井晩翠 297
東郷茂徳 64
東郷青児 299
東郷平八郎 366
頭山満 386
トーマス・マン 278
ドーミエ 107
ドガ 324
徳川家康 168
徳川夢声 222
徳川慶喜 203
徳川吉宗 37

徳田秋声 133
徳富蘇峰 410
ド・ゴール 283
鳥羽僧正 365
富岡鉄斎 374
戸村一作 100
朝永振一郎 163
ドラクロワ 3
鳥居耀蔵 215
トルストイ 308

な

ナイチンゲール 391
永井荷風 281
長岡半太郎 352
永野修身 48
中野重治 227
中野好夫 320
中村翫右衛門 301
中村吉右衛門・初代 65
中村草田男 319
中山義秀 81

に

西田幾多郎 195
新田次郎 69
新渡戸稲造 110
二宮尊徳 77
ニミッツ 298
ニュートン 349

の

野上弥生子 430
野口遵 111
野村胡堂 298

は

バーナード・ショウ 410
ハイドン 214
ハウプトマン 342
白楽天 167
橋本雅邦 155
橋本欣五郎 49
パストゥール 155
長谷川一夫 212
長谷川伸 255
長谷川如是閑 413
バッハ 2
花田清輝 16
花森安治 53
花柳章太郎 116
塙保己一 190
羽仁五郎 318
浜田広介 284
林武 261
原敬 8
ハリス 173
ハワード・ヒューズ 121

ひ

ピカソ 408
ビスマルク 324
ピタゴラス 84
ヒッチコック 300
平櫛田中 433
平塚らいてう 355
平野謙 122
平林たい子 52
平山行蔵 75
広沢虎造 13
広田弘毅 92
広津和郎 222

ふ

ファーブル 403
フォード・一世 342
フォン・ブラウン 17
福沢諭吉 41
藤田嗣治 314
藤原定家 250
藤原義江 245
蕪村 37
プッチーニ 24
舟橋聖一 143
プラトン 269
フランクリン 337
古河市兵衛 107
フルシチョフ 224
ブレジネフ 211
フロイト 326

へ

ペスタロッチ 293
ヘディン 369
ヘボン 420
ベル 193
ベルクソン 311
ヘルマン・ヘッセ 355
ベルリオーズ 21
ヘンデル 170

ほ

北条早雲 366
北条政子 56
豊太閤夫人 201
法然 249
堀口大学 390
本阿弥光悦 250
本多光太郎 343

ま

マーク・トゥエイン 193
マウントバッテン 263
牧野富太郎 417
真崎甚三郎 279
正宗白鳥 327
マチス 353
松岡洋右 26
マッカーサー 346
松平定信 106
松平信綱 19

松永弾正 36
松永安左衛門 423
松本幸四郎・八世 146
間宮林蔵 76
真山青果 91
マルクス 4
マルコ・ポーロ 86

み

御木本幸吉 421
三木露風 199
ミケランジェロ 382
水谷八重子 186
水野広徳 90
水原茂 164
三田村鳶魚 312
三井高利 128
水戸光圀 128
南方熊楠 177
美濃部亮吉 287
三原脩 167
三宅雪嶺 351
宮武外骨 374

む

武者小路実篤 401
棟方志功 142
村岡伊平次 239
室生犀星 160
ムンク 296

も

孟子 322
毛沢東 332
毛利元就 168
モース 366
物集高量 432
本居宣長 104
モラエス 194
諸橋轍次 429

や

柳生宗矩 189
安井曾太郎 49
安岡正篤 356
安田善次郎 325
梁川星巌 78
柳田国男 369
柳宗悦 136
柳家金語楼 120
山岡荘八 123
山県有朋 339
山川菊栄 394
山田耕筰 259
山手樹一郎 263
山上憶良 148
山室軍平 61
山本嘉次郎 141
山本権兵衛 295
山本有三 371

ゆ

湯川秀樹 187
ユゴー 323
ユトリロ 134

よ

横溝正史 265
横山大観 392
吉川英治 94
吉田健一 17
吉田茂 388
吉屋信子 225
米内光政 63
ヨハン・シュトラウス・子 174

ら

ライト 406
ライプニッツ 87

り

リーチ 408
リスト 191
劉少奇 119
良寛 150
リンドバーグ 140

る

ルイス・フロイス 1
ルソー 20
ルノワール 235
ルビンシュタイン 418

れ

レオナルド・ダ・ヴィンチ 35
レセップス 385

ろ

ロダン 216
ロマン・ロラン 238

わ

ワーグナー 89
ワイズミュラー 287
和気清麻呂 19
ワシントン 39

書物の性質上、とりあげた人物の臨終に実際に立ち合われた方々の文章を多く引用ないし参考にせざるを得ませんでした。それらの諸著書諸文章に対して厚く謝意を表するものです。

著者

この人々は、あなたの年齢で
こんな風に死んだ！

山田風太郎 著

定価／二四〇〇円

人間臨終図巻《上巻》

十五歳から六十四歳で死んだ人々

死を怖れ、死に苦しむものは、あなただけではない。この地上に生きた英雄、武将、政治家、作家、芸能人、さらに犯罪者たちが示す人間ラストの真の様相！

■十代で死んだ人々
大石主税　アンネ　天草四郎　藤村
操　山口二矢　ジャンヌ・ダルク他

■二十代で死んだ人々
沖田総司　ジェームス・ディーン
沢村栄治　石川啄木　高杉晋作　夏
目雅子　吉田松陰　他

■三十代で死んだ人々
源義経　キリスト　モーツァルト
芥川龍之介　マリリン・モンロー
太宰治　他

■四十代で死んだ人々
国定忠治　プレスリー　植村直己
三島由紀夫　ケネディ　聖徳太子
夏目漱石　他

■五十代で死んだ人々
西郷隆盛　シェクスピア　向田邦子
魯迅　ヒトラー　大松博文　溝口健
二　山本五十六　他

■六十代で死んだ人々
ジンギスカン　日蓮　森鷗外　空海
川上宗薫　豊臣秀吉　平清盛　尾上
菊五郎・六代目　他

〈十五歳から六十四歳まで〉
取り上げた人々・四七三名

徳間書店